

# DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

## 公開プロジェクトの摘要書

この資料は報道機関, 米国政府, 米国科学界の人々に向けて準備された。執筆および編集はスティーブン・M・グリア医師(責任者)とセオドア・C・ローダー三世博士による。

2001年4月

# DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

## 公開プロジェクトの摘要書

この資料には, UFO/ET の話題を取り巻く論点の概要, 行動提言, 背景情報, 論説, UFO/ET 目撃の証拠, UFO/ETI 事象に対する軍と政府の目撃証人による証言の要約, 最近の主要な 2 報告の要約, および重要な政府文書が含まれる。

執筆者の住所:

スティーブン・M・グリア 博士, 責任者  
公開プロジェクト  
バージニア州クロゼット  
Dr. Steven M. Greer, Director  
The Disclosure Project  
PO Box 265  
Crozet, VA 22932  
Phone: 540-456-8302  
Fax: 540-456-8303  
e-mail: [Disclosure2001@cs.com](mailto:Disclosure2001@cs.com)  
website: [www.DisclosureProject.org](http://www.DisclosureProject.org)

セオドア・C・ローダー三世 博士  
ニューハンプシャー大学地球海洋宇宙空間研究所  
ニューハンプシャー州ダラム  
Dr. Theodore C. Loder III  
Institute for the Study of Earth, Oceans, and Space  
University of New Hampshire  
Durham, NH 03824

著作権所有: 2001 年 4 月 - 公開プロジェクト

情報と情報検索システムを含む本資料のどの部分も, 公開プロジェクトの書面による事前の許可無くしては, いかなる形においても, また電子媒体と印刷物とを問わず, 複製を禁ずる。

本資料の複製物は, 上記住所の公開プロジェクトから入手することができる。

“独自の空軍, 独自の海軍, 独自の資金調達機構, そして独自の国益を追求する能力を持ち, あらゆる抑制と均衡の束縛を受けず, 法そのものからも自由な, 陰の政府が存在する”

上院議員 ダニエル・K・イノウエ

“政府の様々な評議会において我々は, それが意図されたものであるか否かにかかわらず, 軍産複合体による不当な影響力の支配を警戒しなければなりません。根拠のない権力が台頭し, 破滅的な力をふるうという危険性が存在し, これからも存続するでしょう。この複合体の重圧が, 我々の自由と民主的なプロセスを危機に陥れることを許してはなりません。何事も当然のことと考えるべきではないのです。用心深く見識のある市民のみが, 平和的な方法と目的とによって, この国防という巨大な産業と軍事の機構に適切な網をかぶせ, 安全と自由を共に繁栄させることができます”

大統領 アイゼンハワー, 1961年1月

## 目次

1.0	要旨 - 公開プロジェクト摘要書の目的	8
2.0	読者へ - 本資料の利用方法	8
3.0	公開の概要	10
3.1	公開：環境, 世界平和, 世界の貧困と人類の未来に対する意味	10
	概要	10
	環境に対する意味	11
	社会と世界の貧困に対する意味	12
	世界平和と安全保障に対する意味	14
3.2	重要人物と証人による未確認飛行物体と地球外知性体についての発言の引用	18
3.2.1	1 節： 科学者たち	18
	カール・セーガン博士	18
	マーガレット・ミード博士	18
	J・アレン・ハイネック博士	18
	フランク・B・ソールズベリー博士	18
	ジェームズ・E・マクドナルド博士	19
	米国航空・宇宙航行協会 UFO 小委員会(1967)	19
	ピーター・A・スターロック博士	19
	ヘルムート・ラマー博士	19
	ヘルマン・オーベルト教授	20
	カール・グスタフ・ユング博士	20
	宇宙飛行士 エドガー・ミッチェル博士	20
3.2.2	2 節： 政府は語る - 政治家, 軍人, 情報当局者	21
	大統領 ハリー・S・トルーマン	21
	大統領 ドワイト・D・アイゼンハワー	21
	大統領 ジェラルド・フォード	21
	大統領 ジミー・カーター	21
	大統領 ロナルド・レーガン	21
	J・エドガー・フーバー	22
	ネイサン・F・トワイニング将軍	22
	ウォルター・ベデル・スミス将軍	22
	H・マーシャル・チャドウェル	22
	エドワード・J・ルッペルト大尉	23
	ロスコー・ヒレンケッター提督	23
	E・B・ルバイイ少将	23
	ウィリアム・スタントン議員(ペンシルバニア)	23
	ウィルバート・スミス	23
	ヒル・ノートン卿, 英国海軍提督, 五つ星	24
	ウィルフレッド・デ・ブラウワー少将, ベルギー空軍, 参謀副長	24
3.3	なぜ UFO は秘密にされるのか	26

序文	26
ことの始まり	26
推測される現状	28
我らが織りなす蜘蛛の糸	31
3.4 認められざるもの	35
3.5 UFO／地球外知性体問題に関するプロジェクトと施設	47
エドワーズ空軍基地と関連施設	47
ネリス複合施設	47
ニューメキシコ施設	48
アリゾナ	48
その他	48
現在または過去に関与した米国政府機関	48
関与していると信じられている民間企業組織	49
3.6 秘密の存在を語る証言	51
スティーブン・ラブキン：弁護士	51
メルル・シェーン・マクダウ：米国海軍大西洋軍	51
チャールズ・ブラウン中佐：米国空軍	52
“B 博士”	52
ジョナサン・ウェイガント上等兵：米国海兵隊	52
ジョージ・A・ファイラー三世少佐：米国空軍	53
ニック・ポープ：英国国防省職員	53
ラリー・ウォーレン：米国空軍, 保安兵	53
クリフォード・ストーン軍曹：米国陸軍	54
ダン・モリス曹長：米国空軍, 国家偵察局諜報員	56
A・H：ボーイング・エアロスペース社員	56
アラン・ゴッドフリー警察官：英国警察	57
カール・ウォルフ軍曹：米国空軍	57
ドナ・ヘア：NASA 契約業者従業員	58
ジョン・メイナード：国防情報局職員	58
ロバート・ウッド博士：マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者	58
グレン・デニス：ニューメキシコ UFO 墜落日撃者	59
レオナード・プレツコ軍曹：米国空軍	59
ロベルト・ピノッティ：イタリアの UFO 研究者	60
ポール・シス博士：マクドネル・ダグラス専門技術者	60
エドガー・ミッチェル：宇宙飛行士	60
ジョン・キャラハン：米国連邦航空局事故調査部長	60
マイケル・スミス：米国空軍レーダー管制官	61
フランクリン・カーター：米国海軍レーダー技術者	62
ニール・ダニエルズ：ユナイテッド航空パイロット	63
フレデリック・マーシャル・フォックス大尉：米国海軍パイロット	63
ロバート・サラス大尉：米国空軍, 戦略空軍打ち上げ管制官	64
ロバート・ジェイコブズ教授：米国空軍	64

ハリー・アレン・ジョーダン：米国海軍	65
ジェームズ・コップ：米国海軍暗号通信部	65
3.7 編集者からの重要な声明	66
3.8 ビデオ録画された証人による証言と政府文書の要約	68
3.8.1 概要	68
宇宙飛行士 エドガー・ミッチェルの証言	68
モンシニョール・コラード・バルドウツツイの証言	72
3.8.2 レーダー／パイロットの事例	74
序文	74
元米国連邦航空局事故調査部長 ジョン・キャラハンの証言	75
米国空軍軍曹 チャック・ソレルスの証言	81
エドワーズ空軍基地の音声テープからの抜粋 - 1965年	85
米国空軍レーダー管制官 マイケル・W・スミス氏の証言	92
米国海軍中佐 グラハム・ベスーンの証言	96
メキシコ市国際空港上級航空管制官 エンリケ・コルベック氏の証言	103
リチャード・ヘインズ博士の証言	106
米国海軍レーダー技術者 フランクリン・カーター氏の証言	108
ユナイテッド航空パイロット ニール・ダニエルズ氏の証言	111
米国空軍軍曹 ロバート・ブラツィナの証言	112
米国海軍大尉 フレデリック・マーシャル・フォックスの証言	113
アリタリア航空 マッシモ・ポッジ機長の証言	115
米国陸軍少尉 ボブ・ウォーカーの証言	116
米国陸軍 ドン・ボッケルマン氏の証言	118
3.8.3 SAC(戦略空軍)／NUKE(核兵器)	120
序文	120
米国空軍大尉 ロバート・サラスの証言	122
米国空軍中佐 ドウイン・アーネソンの証言	127
米国空軍中尉 ロバート・ジェイコブズ教授の証言	130
米国空軍大佐／原子力委員会 ロス・デッドリクソンの証言	136
米国海軍 ハリー・アレン・ジョーダンの証言	138
米国海軍／国家安全保障局 ジェームズ・コップ氏の証言	141
米国空軍中佐 ジョー・ウオイテッキの証言	143
米国空軍軍曹 ストーニー・キャンベルの証言	145
3.8.4 政府部内者／NASA／深部の事情通	146
序文	146
宇宙飛行士 ゴードン・クーパーの証言	147
ホワイトハウス陸軍通信局／弁護士 スティーブン・ラブキンの証言	152
米国海軍大西洋軍 メレル・シェーン・マクダウの証言	159
米国空軍中佐 チャールズ・ブラウンの証言	167
キャロル・ロジン博士の証言	174
“B博士”の証言	180
米国海兵隊上等兵 ジョナサン・ウェイガントの証言	182

米国空軍少佐 ジョージ・A・ファイラー三世の証言	189
英国国防省 ニック・ポープ氏の証言	194
元英国国防参謀長／五つ星提督 ヒル・ノートン卿の証言	202
米国空軍保安兵 ラリー・ウォーレンの証言	204
米国陸軍大尉 ローリ・レーフェルトの証言	218
米国陸軍軍曹 クリフォード・ストーンの証言	219
ロシア空軍 ワシリー・アレクセイエフ少将の証言	231
米国空軍曹長／国家偵察局諜報員 ダン・モリスの証言	234
ロッキード・スカンクワークス／米国空軍／CIA 契約業者 ドン・フィリップス氏の証言	240
米国海兵隊大尉 ビル・ユーハウスの証言	243
米国空軍中佐 ジョン・ウィリアムズの証言	247
ドン・ジョンソン氏の証言	249
ボーイング・エアロスペース社 A・H の証言	250
英国警察官 アラン・ゴッドフリーの証言	256
元英国外務省 ゴードン・クレイトン氏の証言	258
米国空軍軍曹 カール・ウォルフの証言	259
元 NASA 契約業者従業員 ドナ・ヘアの証言	261
国防情報局 ジョン・メイナード氏の証言	263
ハーランド・ベントレー氏の証言	270
マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者 ロバート・ウッド博士の証言	272
スタンフォード研究所上級政策分析官 アルフレッド・ウェーバー博士の証言	273
元 SAIC 従業員 デニス・マッケンジーの証言	275
米国陸軍大佐 フィリップ・J・コースの証言	277
ニューメキシコ UFO 墜落日撃者 グレン・デニス氏の証言	283
米国陸軍中尉 ウォルター・ハウトの証言	286
米国空軍軍曹 レオナード・プレツコの証言	287
米国海軍 ダン・ウィリス氏の証言	288
ロベルト・ピノッティ博士の証言	289
<b>3.8.5 技術／科学</b>	<b>291</b>
米国空軍 マーク・マキャンドリッシュ氏の証言	291
ポール・シス教授の証言	303
ハル・パソフ博士の証言	311
米国エネルギー省 デービッド・ハミルトンの証言	312
米国陸軍中佐 トーマス・E・ビールデンの証言	313
ユージン・マローブ博士の証言	315
ポール・ラビオレット博士の証言	317
カナダ空軍 フレッド・スレルフォール氏の証言	319
テッド・ローダー博士の証言	320
<b>4.0 国民、民間および政府の利害関係者に対する行動提言の要約</b>	<b>321</b>
4.1 報道機関に対する行動提言	321
4.2 国民に対する行動提言	321
4.3 議会に対する行動提言	322

4.4	軍に対する行動提言	324
4.5	科学界に対する行動提言	325
4.6	米国大統領に対する行動提言	327
4.7	恩赦の保証と安全の確保	328
4.7.1	なぜ恩赦か	328
4.7.2	UFO／地球外知性体の主題に関係した国家機密保全誓約の合法性の評価(1996)	329
<b>5.0</b>	<b>論点 - 論説</b>	<b>332</b>
5.1	公開の必要性和秘密主義の危険性	332
5.1.1	作戦即応性と未確認飛行物体／地球外知性体(UFO/ETI)問題：なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか	332
5.2	UFO/ETI問題の国家安全保障に対する意味：要約	339
5.3	新エネルギー革命の国家安全保障と環境に対する意味：米国上院環境・公共事業委員会に向けた概要説明	342
<b>6.0</b>	<b>背景情報資料</b>	<b>347</b>
6.1	入手し得る最高の証拠への手引き	347
6.2	1940年代より前のUFO目撃	348
6.3	1942 - 1945年：現代のUFO目撃はこうして始まった	348
6.4	ニューメキシコでの墜落回収と着陸事件	350
6.5	軍用機による遭遇 - 1951年	354
6.6	1952年夏：首都ワシントンを含む多くの場所上空のUFO	357
6.7	戦略空軍基地上空を通過	361
6.8	イラン上空の軍用機による追跡 - 1976年	367
6.9	英国空軍／米国空軍ベントウォーターズ-ウッドブリッジ - 1980年12月	369
6.10	日本航空機による遭遇(1986年)	372
6.11	英国における1990年代の目撃多発現象 - 三角形飛行物体その他	373
6.12	メキシコでの目撃多発現象 - 1991年以後	375
6.13	バルジニャでの出来事 - ブラジルで地球外生物を捕獲？	376
6.14	アリゾナでの目撃 - 1997年3月	379
6.15	イリノイ州セントクレアでの2000年1月の目撃	381
<b>7.0</b>	<b>エネルギーと反重力研究の概要</b>	<b>385</b>
	テスラの自己出力自動車	386
	モレーの放射エネルギー装置	388
	ガブリエル・クロンと負抵抗体	389
	モスクワ大学の科学者たちがオーバーユニティ装置を1930年代に試験	390
	最初の点接触トランジスター	391
	ミニットマンミサイルに搭載されたオーバーユニティ装置 - ウェスチングハウス社の特許	391
	宇宙飛行士の磁気ブーツ	392
	日立の技術者たちがオーバーユニティ・プロセスを確認	393
	磁気ワンケルエンジン	393
	ジョンソン・モーター	393
	フロイド・スウィートの真空三極管増幅器	394
	デボラ・チャング博士の負抵抗体	395



ランデル・ミルズ博士とブラックライト・パワー	395
常温核融合	396
反重力と電気重力	398
タウンゼント・ブラウンの電気重力技術	402
シド・ハーウィッチ	403
<b>8.0 最近の民間による研究の概要</b>	<b>407</b>
8.1 UFO 報告に関係した物理的証拠のスターロック/ロックフェラー報告	407
8.2 COMETA 報告: UFO と国防に関するフランスの報告	410
<b>9.0 付録 AI. UFO に関係した米国政府の文書</b>	<b>416</b>
9.1 政府文書についての概要	416
9.2 付録 I.1: UFO に関係した政府文書の説明一覧	417
<b>10.0 推奨される文献一覧</b>	<b>421</b>
<b>11.0 謝辞</b>	<b>422</b>

## 1.0 要旨 - 公開プロジェクト摘要書の目的

この摘要書は、大変複雑な UFO/ET (未確認飛行物体／地球外知性体) の主題を一般に向けて公開するプロジェクトの概要と、個人がこの問題を研究するために役立つ背景情報資料および参考資料を提供するために書かれた。この主題は、この惑星に住む人類の未来にとり、精神と技術の観点から広範かつ深遠な意味を含むがゆえに、本質的にはかり知れない重要性を持つ。我々は様々な利害関係者(報道機関, 国民, 議会, 軍, 科学界, 米国大統領, および UFO/ET 統制組織のメンバーを含む) に対する行動提言を行なった。これらの提言は、この話題が政府と公的部門で公然かつ詳細に議論されるように仕向けることで、公開の進行を円滑にする役に立つだろう。背景情報資料には、以下の種類の情報が含まれる: 1) UFO/ET 事件に直接立ち会った軍, 政府, および個人の直接証人によるビデオ録画された証言の概要。2) 背景の歴史, 公開の必要性とその意味, そして秘密主義をとり続けることの危険性を述べた一連の論説。3) 二十数人を超える軍の証人がいる 14 の主要事件, 複数の証人がいる多くの事件とそれを裏付ける政府文書。4) この主題が事実であることを知る科学者と政府の証人による一連の発言からの 27 の引用。5) UFO 現象をさらに深く研究する必要性を述べた, 科学調査委員会による最近の主要な 2 報告の概説。6) ゼロポイント・エネルギー, オーバーユニティ装置, 反重力研究を含む技術についての高度な論評。この資料を読んで、洞察力のある進歩的な読者が UFO は現実であることを理解し、その意味をこの惑星の政府や人々に思慮深く訴えかけるようになることを願う。

## 2.0 読者へ - 本資料の利用方法

かつてカール・セーガンは、次のように述べた。“並外れた主張には並外れた証拠が必要だ” UFO 問題では、さらに二つの言葉を加えると状況が明確になるだろう: “並外れた証拠をつかむには並外れた関心が必要だ”, そして “並外れた関心は単に必要というだけではない, 増え続ける多くの並外れた目撃例がそれを実際に要求しているのだ”

このことを念頭に置いて、読者にはこの摘要書をただ読み通すだけでなく、一つの原典として利用することを勧める。まず“要旨”と“公開の意味(3.1 節)”を読み、全体的な論点をつかんでほしい。もし、多くがそうであるように、我々の政府は秘密を隠しておけない(実際はそうではない)との思い込みから、この内容が事実でないと考えるなら、“なぜ UFO は秘密にされるのか(3.3 節)”と“認められざるもの(3.4 節)”を読んでいただきたい。次に、もしあなたがまだそのような行動をとっていないなら、様々な利害関係者にあてた“行動提言(4.0 節)”を読み、または再吟味し、これらの問題を公開するために何が必要かを理解してほしい。公開の重要性とその意味をさらに深く理解しようとするなら、5.0 節に収録した残りの“論説”がその助けになるだろう。

我々の経験では、最初にこの情報を提示された人々は、到底信じられない、という気持ちを起こす。だが、ひとたび彼ら自身でこの問題を研究するや、その現実性と複雑さを真に理解し始める。読者が研究を始める手助けとなるように、我々は幾つかの種類 of 証拠を用意した。“証人による証言の要約(3.8 節)”は、迫真の直接証拠である。その内容は、多数の人間が UFO 問題とその隠蔽に関わっており、彼らの一部はこの問題についての自らの経験を証言するために名乗り出る意志を持っている、という見方を裏付ける。また、有名で詳細な記録が残されている幾つかの UFO 事件

(6.0 節)についても論評した。それらの多くは付録の政府文書によって裏付けられている。“入手し得る最高の証拠への手引き(6.1 節)”は、さらに多くの情報を得るための情報源を提供している。“発言の引用(3.2 節)”では、‘内情に通じた’多くの著名な軍人や政府要人による 1940 年代以後になされた発言を引用した。また、“ゼロポイント・エネルギー、オーバークニティ装置、反重力研究についての高度な論評(7.0 節)”もこれに加えた。最後に、“米国とフランスで科学者、政府指導者、軍関係者によりなされた最近の UFO 研究(8.0 節)”の要約を加えた。さらに裏付けとなる情報は、証人の証言を述べたグリア博士の著書<sup>1)</sup>の中で見出されるだろう。

---

1) Greer, Steven M. *Disclosure: Military and Government Witnesses Reveal the Greatest Secrets in Modern History*. 2001.

---

### 3.0 公開の概要

#### 3.1 公開：環境, 世界平和, 世界の貧困と人類の未来に対する意味

##### 概要

著作権 スティーブン・M・グリア, 医師 - 2001 年 3 月

大部分の人々にとり, 我々がこの宇宙で孤独なのかそうでないのかは, 哲学的な物思いにすぎない - 学問的にはともかく, 日常生活においての重要性は何もない。人類以外の知的生命体が現に我々を訪問しつつあるということを示す証拠さえ, 地球温暖化, 過酷な貧困, 戦争の脅威といった世界に住む多くの人々にとっては無関係に思える。人類の長期的未来に対する現実的な課題に直面するとき, UFO 問題, 地球外知性体, 政府の秘密プロジェクトなどは取るに足らぬ添え物にすぎない。そうではないか? いや間違っている! 破滅的なまでに間違っている。

この後の頁で提示される証拠と証言は, 以下のことを確実に示している:

- ◆ 我々は進歩した地球外文明の訪問を実際に受けつつあり, これまでも受けてきた。
- ◆ これは米国など多くの国において最も秘密にされ, 区画化されてきた計画である。
- ◆ これらのプロジェクトは, アイゼンハワー大統領が 1961 年に警告したように, 米国や英国, その他の国々で法の監視と統制を逃れてきた。
- ◆ 情報機関などにより地球外輸送機 (ETV) と呼ばれている地球外起源の進歩した宇宙機が, 少なくとも 1940 年代以来, おそらくは 1930 年代頃から, 撃墜され, 回収され, 研究されている。
- ◆ これらの物体の研究により (そしてニコラ・テスラの時代に遡る, 人類によるそれに関連した技術革新から), エネルギーの発生と推進力の分野で重要な技術上の大発見が行なわれた。それらの技術は新しい物理学を応用し, 化石燃料や電離放射を必要とせずに無限のエネルギーを発生させる。
- ◆ 最高度の極秘プロジェクトが, 完全に機能する反重力推進装置と新しいエネルギー発生システムを所有している。それらは, もし公開され平和的に用いられるなら, 欠乏も貧困も環境破壊もない, 新しい文明を人類にもたらすだろう。

これらの主張を信じない人は, 軍と政府関係の多数の証人による証言を注意深く読むべきである。それらの内容は, 明確に上記の事実を立証している。これらの申し立てが暗示しているその広大かつ深遠な意味を考えると, その主張を受け入れる人もそうでない人も, すべての人々がこの問題の真実を確かめるために議会公聴会の開催を要求すべきである。まさしく人類の未来が, それにかかっているからだ。

## 環境に対する意味

人類は、現在は秘密にされているエネルギー発生と反重力推進の装置を実際に所有しており、それらは、現在用いられているエネルギーと輸送システムのあらゆる形態を完全かつ永久に無用のものとする事ができる。我々は、公開された議会公聴会で以上のことを立証できる組織内部の事情通と科学者たちを確認している。それらの装置は空間中の電磁気と、いわゆるゼロポイント・エネルギーと呼ばれる状態に作用し、いかなる汚染物質をも発生させずに巨大なエネルギーを生み出す。本質的にこのようなシステムは、遍在する量子真空エネルギー状態、つまり、あらゆるエネルギーと物質が生じる基底エネルギー状態を利用してエネルギーを発生する。すべての物質とエネルギーを支えるのはこの基底エネルギー状態であり、特別な電磁気回路と仕掛けを使えば、我々を取り巻く周囲の空間／時間から巨大なエネルギーを引き出すことが可能なのである。これらはいわゆる永久機関ではないし、熱力学の法則にも反しない。ただ我々の周囲に遍在するエネルギー場に作用して、エネルギーを発生するのである。

このことは、これらのシステムが燃焼させる燃料も、分裂または融合させる原子も必要としないことを意味する。これらのシステムは、発電所も送電線も、また膨大な建設費を要する関連設備も使わずに発電し、インドや中国、アフリカ、ラテンアメリカなどの奥地に電力を供給する。これらのシステムは、必要な場所にありさえすればよい。どこにでも据え付け可能で、必要なエネルギーを生み出す。本質的にこの技術は、我々が直面している大部分の環境問題に対する最終的な解決策となる。

このような発見が環境にもたらす恩恵は数え上げることすら難しいが、幾つかを列挙する：

- ◆ 石油、石炭、ガスはエネルギー源として不要になり、これらの燃料の輸送や使用による空気と水の汚染がなくなる。石油流出、地球温暖化、大気汚染による病気、酸性雨などは 10 年から 20 年以内に解消することができるし、またそうしなければならない。
- ◆ 資源枯渇と化石燃料資源の争奪がもたらす地政学的な緊張は終わるだろう。
- ◆ 空気、水の両方において、産業排出をゼロまたはゼロに近づける技術はすでにある。しかし大量のエネルギーを消費するため、完全に適用するには費用がかかり過ぎると考えられる。さらに、それらは大量のエネルギーを消費するものであり、今日のエネルギーシステムは世界の空気汚染の大部分を発生させていることから、環境への逆効果となるときがすぐにやってくる。この方程式は、もし産業が大量のフリーエネルギー(燃料不要、他のエネルギー発生装置よりも廉価なもののみ)を利用できるようになれば、劇的に変わる。また、それらのシステムは汚染を発生しない。
- ◆ エネルギーを大量に消費する再生利用(リサイクル)は、繰り返すが、固形廃棄物を処理するためのエネルギーが無料かつ豊富にあるために、完全実施されるだろう。
- ◆ エネルギーに依存し環境を汚染している今の農業は、きれいで汚染を発生しないエネルギーを利用するものへと変化するだろう。

- ◆ 砂漠化の進行は食い止められ、世界の農業は脱塩施設により活性化されるだろう。現在このような施設はエネルギーを大量に消費し、また高い建設費がかかる。しかし、一度これらの汚染を発生しない新エネルギーシステムが使えるようになれば、費用効率のよいものになるだろう。
- ◆ 航空輸送、トラック輸送、都市間輸送システムは、新しいエネルギーと推進技術によるものによって代わられるだろう(反重力システムは、地表面上を無音で移動することを可能にする)。汚染は発生せず、エネルギーにかかる費用が無視できることから、経費は大幅に下がるだろう。さらに、都市部での大量輸送には、無音かつ効率的な都市間移動を提供するこれらのシステムが利用できるだろう。
- ◆ ジェット機、トラック、その他の輸送形態による騒音公害は、これらの無音装置の利用により解消されるだろう。
- ◆ それぞれの家庭、職場、工場が自らに必要なエネルギー発生装置を持つことにより、公共施設は不要になるだろう。つまり、暴風雨による被害で停電を起こしがちな見苦しい送電線は、過去のものとなるだろう。しばしば破裂や漏洩により土壌や水を汚染する地下のガス管も、すべて不要になるだろう。
- ◆ 原子力発電所は閉鎖され、その跡地を浄化する技術が利用可能になるだろう。核廃棄物を無害化する秘密の技術は、すでに存在する。

理想郷だろうか？ そうではない。なぜなら、人間社会は常に不完全だからだ。だが、多分今日のそれよりはましだろう。これらの技術は事実である - 私はそれらを見たことがある。反重力は現実であり、フリーエネルギーもまたそうである。これは空想やでっち上げではない。これを不可能だと言う人々を信じてはならない：彼らは、ライト兄弟が空を飛ぶことは決してないと言った人々の知的未裔なのだ。

今日の人類文明は、全世界を滅ぼす能力を持つに至った。我々はいまもうまくやれるし、またそうしなければならぬ。これらの技術は実在するので、環境と人類の未来について懸念を持つ人なら誰でも、これらの技術が公開され、秘密を解かれ、安全に応用されるように、緊急公聴会の開催を求めるべきだ。

### 社会と世界の貧困に対する意味

上記のことから、現在秘密にされているこれらの技術によれば、人類文明が真に持続可能なものへと到達できることは明らかだ。言うまでもなく、我々は近未来に起きる社会、環境、技術の、まさしく人類史上最大の変革について語っているのである。私はこのような情報公開に伴って否応なしに生じるであろう、全世界に及ぶあらゆる変化を軽視するものではない。半生をかけてこの問題に取り組んできた私は、その変化がどれほどのものか、よく理解している。

人類はこの宇宙で唯一の存在でも最も進化した存在でもない、という事実の判明はさておき、こ

の公開により人類は有史以来最大の危機と好機に直面することになる。もし何もしなければ、我々の文明は環境的、経済的、地政学的、および社会的に崩壊する。10年から20年の間に、化石燃料と石油の需要は供給を遙かに追い越すだろう。そうすると、そこに繰り広げられるのは石油の最後の一滴を求めて相争うマッド・マックスの荒廃した世界である。地政学的および社会的な崩壊が、環境の激変よりも早く起きる可能性が高い。

これら新技術の公開は、我々に新しい持続可能な文明を与えるだろう。世界の貧困は、我々の生きているうちに解消するだろう。新しいエネルギーと推進システムの出現により、地球上で欠乏に苦しむ場所はなくなるだろう。砂漠にさえも花が咲くだろう...

貧困地域で農業、輸送、建設、製造、電化のために豊富で無料に近いエネルギーを利用できるようになれば、人間が達成できる物事に限界はなくなる。信じがたいような貧困と飢餓が存在する一方で、この状態を完全に覆し得る秘密の技術を上から押し隠している状況は、馬鹿げており、腹立たしくさえある。では、なぜこれらの技術を解放しないのか？ 社会的、経済的、および地政学的秩序が大きく改変されるというのがその理由である。私がこれまでに会ったどの深部の事情通も、これは人類が経験したことのない大きな変化であることを強調する。問題は、極度の秘密保持の理由が馬鹿げたことではなく、その意味するものがあまりにも深遠で遠大なことにある。もともと、このようなプロジェクトの統制者たちは変化を好まない。そして我々はここで、人類史上最大の経済的、技術的、社会的、および地政学的変化について語っている。それゆえに、我々の文明が忘却に向かって突き進んでいても、現状維持が守られているのだ。

だが、この理屈では我々は産業革命を起こすことはなかったし、ラダイト(\*19世紀初頭のイギリスで機械化に反対した熟練労働者たちの組織)は今日までこの世界を支配しただろう。

経済的混乱を最小限にとどめ、新しい社会と経済の現実へと容易に移行するために、国際的努力が必要である。我々にはこれができるし、またしなければならない。一部の石油、エネルギー、および経済部門の特別利益団体は影響を受けなければならないが、同時に温情をもって扱われる必要がある。彼らの権力と帝国が崩壊するのを見たい者はいない。石油とガスの販売に大きく依存している国々は、経済の多角化、安定化、および新しい経済秩序へ移行するための支援を必要とするだろう。

米国、ヨーロッパ、そして日本もまた、新しい地政学的現実に適応する必要があるだろう。現在貧困と人口過剰にあえいでいる国々が技術的にも経済的にも劇的に発展するにつれ、彼らは世界の中で相応の地位を要求するだろうし、また獲得するだろう。そうやって然るべきだ。しかし国際社会は、先進諸国と第三世界の地政学的和解が、発展よりも新興勢力による好戦的で破壊的な振る舞いを引き起こす可能性に対して、防護策をとる必要があるだろう。

特に米国は、その力でもって先導する必要がある。ただし、支配に向かう今の傾向は避けなければならない。指導力の発揮と支配は同じではない。その違いを我々が早く学べば学ぶほど、世界は一層よくなるだろう。支配と覇権を伴わない国際的な指導力というものとは可能である。米国は、この問題でまさに求められる指導力を示すつもりなら、両者の違いを認識する必要がある。

これらの技術は、字義どおりにも比喩的にも力を分散するがゆえに、苦難と貧困の中で生活している数十億の人々を、新しい豊かな世界へと導くだろう。そして、経済と技術の発展により教育が盛んになり、出生率は下がるだろう。社会の教育水準が向上して繁栄が進み、技術が進歩し、また女性が社会で男性と対等の役割を担うにつれて出生率が下がり、人口が安定することはよく知られている。これは世界の文明と人類の未来にとりよいことである。

どの村も汚染なしに電化が進み、農業はきれいで無料のエネルギーにより活性化し、輸送費用が下がると、貧困は劇的に世界から消滅するだろう。もし今行動を起こせば、2030年までには今日の我々を知る世界の貧困は事実上消滅できるだろう。我々に必要なのは、これらの変化を受け入れる勇気と、人類を安全に平和裏に新時代へと導く知恵だけである。

### 世界平和と安全保障に対する意味

数年前、私はこの問題について元上院外交委員会議長のクレイボーン・ペル上院議員と議論していた。彼は、1950年代からずっと連邦議会にいたが、この問題については一度も説明されたことがなかったと明かした。私は、これらの闇のプロジェクトの性質上、我々の指導者の大部分はこの問題についてのいかなる決定からも外されてきた、実に恥ずべきことですよと言った。私はこうも言った。“ペル上院議員、あなたが外交委員会の議長だった全期間を通して、あなたは究極の外交問題を扱う機会を奪われていたのですよ...”そして頭上の星々を指さした。彼は言った。“グリア博士、残念だがあなたの言うことが正しいようだ...”

ペル上院議員、ジミー・カーター大統領、その他の国際的指導者など、我々の卓越した外交官と長老たちが、特に、また意図的に、この問題から遠ざけられてきたことは事実である。これは世界平和にとり直接的な脅威である。秘密の真空地帯の中で、人民にも、人民の代表にも、国連にも、他の合法的などの組織にも監督されずに、世界平和に直接的脅威を与える作戦が実行されてきたのだ。

互いに見知らぬ、共謀の機会を持たない、軍の複数の証人たちによって補強されている証言は、米国と他の国々がこれらの ETV(地球外輸送機)に攻撃をしかけ、そのうちの幾つかは撃墜に至らしめたことを明らかにするだろう。私が国連事務総長ブトロス・ガリの夫人に述べたように、もしこれに 10 パーセントの真実でもあるとするなら、これは人類史において世界平和に対する最終的な脅威となる。

そのような作戦行動について直接の知識を持っている、信頼すべき多くの軍と航空宇宙当局者に個人的に面接取材をした結果、私はこのことが実際に行なわれたのだと確信している。なぜか？これらの未知の輸送機が無許可で我々の領空にいたからであり、我々が彼らの技術を獲得したかったからである。これらの物体から人類が実際に脅威を受けたとは、これまで誰も主張していない。明らかなことは、恒星間航行を当たり前に行なう能力を獲得したいかなる文明も、もしそれが彼らの意図であったなら、我々の文明を瞬時に終焉させることができたということである。いまだに我々が地球の大気を自由に呼吸しているという事実が、これらの ET 文明が敵意を持っていないことを示す十分な証拠である。



我々はまた、いわゆるスターウォーズ(または米国本土ミサイル防衛システム)計画が、実際には ETV が地球に接近、または大気圏に侵入したときにそれらを追跡し、標的にし、破壊する兵器システムの配置展開という、闇のプロジェクトのための口実であったという情報を得ている。他ならぬウェルナー・フォン・ブラウンが死の床で、そのような構想が事実であり、また狂気じみていることを警告した。それに何の効力もないことは明らかである(ウェルナー・フォン・ブラウンの元代弁者であったキャロル・ロジンの証言を見よ)。

まさに、方向を変えなければ、向かっている所で終わりになる、である。

秘密の兵器庫に隠されている兵器 - 熱核兵器よりも遙かに恐ろしい種類の兵器 - をもってしても、生存のための戦争に勝つ可能性はない。それにもかかわらず、密かに人類の名で、我々の未来を危険に陥れる行動がとられてきたのである。全面的な、ありのままの公開のみが、この状況を修正することができる。そのことの緊急性を言葉で伝えることは、私には不可能だ。

10 年間、私は一人の救急医として働き、どんな物でも武器になり得ることを見てきた。英知と平和なよき未来 - 可能なただ一つの未来 - への願望によって導かれなければ、どんな技術も闘争の道具となる。国連にも、米国政府にも、英国政府にも、合法的などの組織にも答えない極秘プロジェクトは、人類の名でこのような行動を続けることは許されない。

極度の秘密がもたらす大きな危険性とは、それが自由で開かれた意見の交換に扉を閉ざした、密閉されたシステムをつくるということである。そのような環境では、どれほど重大な過ちも起きる可能性があることは容易に理解できる。たとえば、ここに掲載した証言が示すように、これらの ETV は我々が最初の核兵器を開発し、宇宙に進出し始めてからその出現が頻繁になった。この中の信頼できる軍関係者による多数の証言によれば、これらの物体が ICBM(大陸間弾道ミサイル)の上を舞い、さらにはそれらを無力化した複数の事例があった。

閉鎖的な軍事的視野の中では、これに憤慨し、反撃体制をとり、物体の撃墜を試みることになるかもしれない。実際、これが通常の反応だったのだろう。しかし、これらの地球外文明が次のように言っていたとしたらどうだろうか。“どうか、あなたたちの美しい世界を破壊しないでください - そして次のことを知ってください: 私たちは、あなたたちがこのような狂気と共に宇宙に進出し、他の世界の人々を脅かすことを許しません...” 気遣いとより大きな宇宙的英知さえ示す出来事が、幾たびも侵略行為と解釈されてきたかもしれない。このような誤解と近視眼こそが、戦争を招く元なのである。

これらの訪問者たちに対する我々の認識がどうであれ、暴力的な戦闘によって誤解が解消されることはない。そのような狂気の企ては、人類文明の終焉を企てることに他ならない。

今やペル上院議員のような、我々の賢明な長老と分別のある外交官たちに、これらの重大問題を任せるときである。これを、選ばれてもいない小集団の、勝手に説明のつかない秘密作戦の手に委ねるのは、米国と世界の安全保障にとり史上最悪の脅威である。アイゼンハワーは正しかった。しかし誰も耳を貸さなかった。

これらの訪問者たちに対して、暴力的な戦闘を伴う秘密の行動がとられてきたとする証言に照らし、国際社会一般、とりわけ米国議会と米国大統領は、以下のことを緊急に行なう必要がある：

- ◆ この問題が秘密裏に扱われていることが国家と国際社会の安全保障に及ぼしている危険性を検討評価するための公聴会を開く。
- ◆ 宇宙の軍事化を即時禁止する。特に、いかなる地球外物体に対しても、それを標的にする行為を禁止する。このような行動は是認されるものではなく、人類全体を危険に陥れる。
- ◆ これらの地球外文明との仲立ちをし、意思疎通と平和的關係を促進するための、特別外交団を創設する。
- ◆ 人類と地球外文明の關係を管理し、平和な互惠關係を確保するために、適切な権限を持つ開かれた国際監視団を創設する。
- ◆ 進歩したエネルギーと推進システムに關係する新技術の平和的利用を確実に促進することができる、国際的な諸機関を支援する(下記を見よ)。

上記に加えて、あまり目立たない - しかしおそらく同じくらい差し迫った - 世界平和に対する脅威は、この問題が秘密裏に統制されることにより、すでに議論された新しいエネルギーと推進の技術が世界から奪われていることから発生する。

世界の貧困、そして富める国と貧しい国との間の格差の拡大は、世界平和にとり深刻な脅威である。この格差は、これらの技術の公開と平和的応用によって是正されるだろう(上記を見よ)。今後 10 年から 20 年以内に想定される、化石燃料の供給減少を巡る戦争の現実的脅威は、この公開の必要性をさらに高める。貧困の中に生きている 40 億の人々が、車、電気、その他の現代の利器を望んだら、何が起きるだろうか - すべては化石燃料に依存しているのではないか？ 我々が直ちに、今秘密にされているこれらの技術の利用へと移行すべきであることは、思慮深い人々にとって明らかだ - それらは、すでに棚に置かれたままになっている強力な解決法である。

もちろん、多くの部内者が指摘するように、これらの技術は祖父の時代のオールズモビルではない。それらは他と同様に、テロリスト、好戦的な国家、常軌を逸した人間により暴力的に利用され得る技術的進歩である。ここで我々は板挟み状態に陥る。もしこれらの技術がすぐに出現しないとすれば、我々は人類文明と環境の確実な崩壊に直面するだろう。もしそれらが公開されれば、破壊にも使える非常に強力な新技術が、そこに転がっているということになる。

短期的に見れば、人間はどんな新技術でも暴力的に利用するだろう、と考えるのが賢明である。この意味するところは、このような装置を平和のためにのみ利用することを確実にするための - つまり強制力を持った - 国際機関が創設されなければならないということである。今日では、このようなすべての装置を GPS (全地球測位システム) 監視に接続する技術が存在する。それにより、故意に手を加えられたり、平和的なエネルギー発生と推進以外の目的に使われたりするいかなる装置も、無能にしたり役に立たなくしたりすることができるだろう。これらの技術は、規制され監視され

るべきである。国際社会は、それらの平和利用のみを保証できるほどに成熟しなければならない。

他の目的への利用は、地球上のすべての国々により、絶対に阻止されるべきである。

このような協定は次の段階として必要なものである。おそらくいつの日か、人類はそのような統制を必要とせずに平和に生存するようになるだろう。しかし当面のところは、鎖につながれた犬と同様、何らかの強い束縛が当然必要であり、不可欠である。

しかし、このような懸念はこれらの技術の公開をさらに遅らせる論拠にはなり得ない。我々は、それらの安全で平和的な利用を確実にする知識と手段を持っている - だから、もし我々がこれ以上の環境の悪化、世界の貧困、および紛争の深刻化を回避するつもりなら、これらの技術は直ちに応用されなければならない。

つまるところ、我々はどんな技術的または科学的な難題をも凌ぐ、社会的および精神的な重大局面に直面させられることになる。技術的な解決策はある - しかし、我々は共通の利益のためにそれらを実行に移す意志、英知、勇気を持っているだろうか？ この問題を考えれば考えるほど、我々にはただ一つの可能な未来しかないことが明らかだ：平和である。地球の平和と宇宙空間の平和 - 英知を持って実現する普遍的な平和。それ以外はすべて滅亡への道である。

これこそが現代の最大の課題である。我々の精神的、社会的資源は、この課題に立ち向かえるだろうか？ 他ならぬ人類の運命がかかっているのだ。

## 3.2 重要人物と証人による未確認飛行物体と地球外知性体についての発言の引用

### 3.2.1 1節： 科学者たち

カール・セーガン博士

**Carl Sagan, Ph.D.**

最近(\*1996年)亡くなったコーネル大学天文・宇宙科学教授

“今や地球が唯一の生命の惑星でないことは、まったく明白であるように思われる。天空の多くの恒星が惑星系を持っているという証拠がある。地球生命の起源に関する最近の研究は、生命の発生に至る物理的、化学的過程が、我々銀河系の大部分の惑星でその初期の段階で急速に生じることを示唆している。おそらく、我々よりも先行する技術文明が存在する惑星は百万を数えるだろう。恒星間飛行は現在の我々の技術的能力を遙かに超える。しかし、見晴らしのきく我々の立場から考えると、他の文明がその技術を開発したという可能性を排除する、基本的な物理的障害は何もないようだ”<sup>2)</sup>

マーガレット・ミード博士

**Margaret Mead, Ph.D.**

人類学者、作家

“未確認飛行物体は実在する。つまり、幾つかの研究によればおそらく 20 パーセントから 30 パーセントだが、説明がつかない事例がある。幾度となく地球に接近し、静かで無害に航行する物体の活動の背後にどんな目的があるのか、我々はただ想像するしかない。私にとって最もありそうに思われる説明は、彼らはただ我々の為そうとすることを観察しているということである...”<sup>3)</sup>

J・アレン・ハイネック博士

**J. Allen Hynek, Ph.D.**

元ノースウェスタン大学天文学部長；空軍ブルーブック計画科学顧問(1947 - 1969)

“目撃多発現象が起きるたびに、現在の方法による分析を拒む報告がさらに累積する... 混乱の 20 年を経て、もし我々が何らかの答えを見つけたいなら、ここで徹底的な調査が必要だ”

“長い間待っていた UFO 問題への解答が現れたとき、それは単なる科学の小さな次の一歩などではなく、ある巨大で考えも及ばないような大飛躍になると私は思う”<sup>4)</sup>

フランク・B・ソールズベリー博士

**Frank B. Salisbury, Ph.D.**

ユタ大学植物生理学教授

“誰かある科学者が空飛ぶ円盤について何か好意的な発言をすると、激しい反論が浴びせられ、科学界からの除名を言い立てる人物が出てくる。このことを私は認めざるを得ない。それでも私はここ数年間、未確認飛行物体(UFO)に関する情報を研究した。その結果、もはや私はその考えを

軽々しく退けることはできない”<sup>5)</sup>

**ジェームズ・E・マクドナルド博士**

**James E. McDonald, Ph.D.**

アリゾナ大学大気物理学研究所上級物理学者

“最も興味をそそる UFO 報告は、低空やときには地上でも見られた、これまでにない性質と性能を持つ機械のような物体の近接目撃である。一般社会は、信頼できる目撃者から寄せられる多数のこのような報告にまったく気付いていない。．．．このような事例を調査し始めると、その数はきわめて驚くべきものである”<sup>6)</sup>

**米国航空・宇宙航行協会 UFO 小委員会(1967)**

**American Institute of Aeronautics and Astronautics UFO Subcommittee, 1967**

“科学のおよび工学的な観点から、相当数の説明できない目撃を簡単に無視することは受け入れられない。．．．ただ一つの有望な取り組みは、改良されたデータ収集と客観的手段に重きを置いた、適度な努力の継続である……その中には‘利用できる遠隔探査能力’と、あるソフトウェアの変更が含まれる”[強調は編者による]

また、コンドン報告(ブルーブック計画)、1986年については:

“コンドン報告の内容からは、反対の結論が引き出されたかもしれない。つまり、説明のできない事例の比率(約 30 パーセント)がこれほど高い現象は、その研究を続けるのに十分な科学的好奇心を喚起して然るべきである”<sup>7)</sup>

**ピーター・A・スターロック博士**

**Peter A. Sturrock, Ph.D.**

スタンフォード大学宇宙科学・天文物理学教授、宇宙科学・天文物理学センター副所長

“UFO の謎の最終的な解決は、確立した科学の正規の手法に基づき、公然かつ詳細な科学的研究の対象になるまでは実現しないであろう。そのためには、まず科学者と大学の管理者の側が姿勢を変える必要がある”

“．．．これまで科学界は、UFO 現象の意義を軽視する傾向にあった。だが、少数の科学者たちはこの現象が現実であり重要であることを主張してきた。．．．科学者にとり、(彼自身の実験と観測以外に)確実な情報源は学術雑誌である。稀な例外を除いて、学術雑誌は UFO の目撃報告を發表しない。發表しないという決定は、校閲者たちの忠告にしたがった編集者が行なう。この過程は自己増幅される。明らかなデータ不足が、UFO 現象は無価値だという見解を強める。そしてこの見解が、関連データの發表をさらに妨害する。．．．”<sup>8)</sup>

**ヘルムート・ラマー博士**

**Helmut Lammer, Ph.D.**

オーストリア宇宙研究所地球外物理学部物理学者  
[火星のシドニア地区の地形について書いている]

“これまでの幾つかの結果は、それらが自然物でないことを示唆するが、バイキングのデータはこれらの物体の起源を説明するメカニズムを特定できるほど十分な解像度を持たない、というのが著者の考えである。明らかにこれらの不思議な物体は、次の火星探査でさらに精査される価値がある。そのいずれかの探査で、火星の顔、ピラミッド、その他の奇妙な構造物が実際に人工物だと分かったとき、‘ありそうもない’先行入植あるいは先行技術文明仮説が一つの考え得る答えになるだろう”<sup>9)</sup>

ヘルマン・オーベルト教授

**Professor Hermann Oberth, 1894 - 1989**

ドイツのロケット工学者、宇宙時代の創始者

“空飛ぶ円盤は実在し、それらは他の太陽系から来た宇宙船である、というのが私の主張である。それらには、おそらく知性を持った観察者が乗っており、彼らは数世紀の間地球を調査している種族の一員だと私は考えている。彼らはおそらく、組織的な長期間の調査を行なうために派遣されているのだろう。はじめは人間、動物、植物、そして最近では原子力施設、兵器、および兵器の製造施設だ”<sup>10)</sup>

カール・グスタフ・ユング博士

**Dr. Carl Gustav Jung**

“純粋に心理学的な説明は除外される... 円盤は人間に似た操縦者によって操られている様子を見せる... 重要な情報を持っている当局は、直ちにかつ全面的に、一般社会を啓発することをためらうべきではない”<sup>11)</sup>

宇宙飛行士 エドガー・ミッチェル博士

**Astronaut Edgar Mitchell, Ph.D.**

1971年にミッチェル博士は、米国アポロ宇宙計画の中で月面を歩いた六人目の人となった。

“私はアメリカの宇宙飛行士、訓練を積んだ科学者だ。私の立場ゆえに、高位高官の人々は私を信用する。結果として、私は異星人がこの惑星を訪れていることに何の疑いも持っていない。米国政府と世界中の政府は、説明のつかないUFO目撃の数千のファイルを持っているのだ。科学者としては、少なくともそれらの幾つかは異星人の宇宙機を目撃したものだと思えるのが道理に合っている。これらのファイルを利用できる立場にある軍関係者は、彼らが単なる変人と見なす人々に対してよりも、元宇宙飛行士である私に進んで話してくれるのだ。UFOについて話す上で私より遙かに高い能力を持つこれらの人々から聞いた話によって、私は異星人がすでに地球を訪れていることに何の疑いも持たなくなった...”

“... 異星人の実在を知ったとき、私はそんなに驚かなかった。だが、10年前に地球外知性体についての報告を調査し始めた私を動揺させたのは、その証拠が闇に葬られてきた実態のひどさ

だった。異星人の訪問について沈黙を守ってきたのは米国政府だけではない。地球外知性体がこの国だけを訪問先に選ぶと考えるのは、私のようなアメリカ人の傲慢というべきだろう。実際に私は、異星人の訪問を知っている世界中の政府についての信ずるに足る話を聞いている - その中には英国政府も含まれる”<sup>12)</sup>

### 3.2.2 2 節： 政府は語る - 政治家, 軍人, 情報当局者

大統領 ハリー・S・トルーマン

**President Harry S. Truman**

“もし空飛ぶ円盤が実在するとしても、それは地球上のいかなる勢力が建造したものでもない  
私は断言できる”<sup>13)</sup>

大統領 ドワイト・D・アイゼンハワー

**President Dwight D. Eisenhower**

“軍産複合体を警戒せよ”<sup>14)</sup>

大統領 ジェラルド・フォード

**President Gerald Ford**

“... 私はこれらの[UFO]記事に特別の関心を持ってきた。なぜなら、最近報告された目撃の多くは私の故郷ミシガン州でのものだからだ... 私はこれらの幾つかには実体があると考えており、またアメリカ国民には、今まで空軍によって提供されてきたよりもさらに詳細な説明を受ける権利があると思っている。この理由により、科学・宇宙航行委員会か下院軍事委員会が UFO 問題についての公聴会を開き、政府の行政部門と UFO を目撃したという人々の両方から証言を得るよう、私は提案している... アメリカ社会は、これまで空軍により提供されてきたものよりもさらにより説明を受ける資格がある、という強い信念のもとで、私は UFO 現象を調査する委員会の設立を強く提言する。我々は国民に対して UFO についての真実性を確立し、この問題について可能な最大限の啓発を行なう義務があると考え”<sup>15)</sup>

大統領 ジミー・カーター

**President Jimmy Carter**

“私が大統領になったら、UFO 目撃についてこの国が持っているあらゆる情報を国民と科学者に明らかにするつもりだ。私は UFO が実在することを確信している。なぜなら、私はそれを一度見たことがあるからだ...”<sup>16)</sup>

大統領 ロナルド・レーガン

**President Ronald Reagan**

“... 世界のどこに住もうとも我々は皆等しく神の子なのだから、私は[ゴルバチョフに]こう言わ

ずにはいられなかったのだ。もし突然、宇宙の他惑星から来た種族によるこの世界への脅威が出現していたなら、我々が持ったこれらの会合において、彼と私の仕事がいかに容易であったかと...”

“この相互の連帯を我々が認識するためには、おそらく何か外部の宇宙的な脅威が必要だ。我々がこの世界の外部から異星人の脅威を受けていたなら、世界中の不和がいかに早く消失することかと、私はときどき考える”<sup>17)</sup>

**J・エドガー・フーバー**

**J. Edgar Hoover**

“私はそれ[UFOの研究]をしたいと思う。だがそれを承諾する前に、回収された円盤への自由な接近を強く要求しなければならない。たとえばロサンゼルス事件では、陸軍がそれを接收し、我々が簡単な調査をするためにそれを入手することを許さなかった”<sup>18)</sup>

**ネイサン・F・トワイニング将軍**

**General Nathan F. Twining**

空軍資材軍司令官在任中に、以下のことを書いた:

“見解は次のとおりである:

- a. 報告された現象は現実の何かであり、幻想やつくり話ではない。
- b. 多くは円盤に近い形をし、我々の航空機と同程度に見える大きさを持つ物体が存在する。
- c. 事件の幾つかは、流星などの自然現象によって引き起こされた可能性がある。
- d. 異常な上昇速度、運動性(特に横揺れ)、友軍の航空機やレーダーにより目撃または捕捉されたときの回避行動に違いない振る舞いなど、報告された動作特性は、物体の幾つかが手動、自動、または遠隔操縦されている可能性を信じられるものにする”<sup>19)</sup>

**ウォルター・ベデル・スミス将軍**

**General Walter Bedell Smith**

CIA(中央情報局)長官, 1950 - 1953

“中央情報局は、報道機関が様々に憶測し政府諸機関の関心事となってきた、未確認飛行物体についての現状を再調査した... 1947年以來、およそ 2,000 の公式な目撃報告が受理され、これらの約 20 パーセントが今のところ正体不明である。この状況は、一機関の管轄範囲を遙かに超え、我々の国家安全保障にかかわる可能性があるものと私は考える。これらの報告の中で見られる幾つかの現象について確固たる科学的理解を得るために、広範な組織的取り組みを開始する必要がある...”<sup>20)</sup>

**H・マーシャル・チャドウェル**

**H. Marshall Chadwell**

CIA科学情報部副部長



“1947 年以来, ATIC(航空技術情報センター)はおよそ 1,500 の‘公式’な目撃報告に加え, おびただしい量の手紙, 電話, および新聞報道を受理してきた。1952 年 7 月だけでも‘公式’報告は 250 に上る。空軍は 1,500 の報告のうち 20 パーセントを, また 1952 年 1 月から 7 月までの報告の 28 パーセントを‘正体不明’としている”<sup>21)</sup> [強調は原文]

**エドワード・J・ルッペルト大尉**

**Captain Edward J. Ruppelt**

元米空軍ブルーブック計画責任者[1951 - 1953]

“公式には存在しないものを扱うために, この報告は書くのが難しかった。1947 年 6 月に最初の空飛ぶ円盤が報告されて以来, 惑星間宇宙船のようなものが存在する証拠はない, というのが空軍の公式見解であることはよく知られている。しかし, よく知られていないことは, ‘証拠’という一つの言葉のゆえに, この結論が軍とその科学顧問たち全員の一致によるものとはほど遠いということだ;だから UFO 研究は続いている”<sup>22)</sup> [強調は原文]

**ロスコー・ヒレンケッター提督**

**Admiral Roscoe Hillenkoetter**

初代 CIA 長官, 1947 - 1950

“今こそ, 真実が明かされるときだ. . . 舞台裏では空軍の高官たちが本気で UFO に関心を持っている。しかし, 職務上の秘密とあざけりにより, 多くの市民が未知の飛行物体は馬鹿げていると信じ込まされている. . . 未確認飛行物体についての秘密によりもたらされる危険を減らすために, 議会は直ちに行動を起こすよう, 私は強く求める. . . ”<sup>23)</sup>

**E・B・ルバイイ少将**

**Major General E. B. LeBailly**

空軍官房情報局長

“. . . 説明できない多くの報告は, 誠実さについては疑い得ない, 知的で技術的資質のある人々から寄せられてきた。さらに, 空軍により公式に受理された報告には, 多くの民間 UFO 雑誌で公表される華々しい事例はごく少数しか含まれていない”<sup>24)</sup>

**ウィリアム・スタントン下院議員(ペンシルバニア)**

**Congressman William Stanton, Pennsylvania**

“空軍は, この事件[ペンシルバニアでの 1966 年 4 月 17 日の目撃]を徹底調査する責任を果たさなかった. . . 公共の福祉を使命とする人々が, 国民は真実に対処できないと考えるなら, 今度は国民がもはや政府を信用しなくなるだろう”<sup>25)</sup>

**ウィルバート・スミス**

**Wilbert Smith**

カナダ運輸省, 上級無線技師, マグネット計画責任者

“この問題は、合衆国政府において水爆をも凌駕する最高度の秘密事項だ。空飛ぶ円盤は実在する。その操作方法は未知であるが、バンネバー・ブッシュ博士に率いられた少数のグループにより集中的な研究が行なわれている。この問題の全体は、合衆国当局によりとてつもなく重要なものと考えられている”<sup>26)</sup>

ヒル-ノートン卿, 英国海軍提督, 五つ星

**Lord Hill-Norton, Admiral of the Fleet, Great Britain, Five Star**

“私がなぜこんなにも UFO に関心を持つのかとよく訊かれる。長年にわたり国防に密接に関係してきた人間が、これほど単純なのは奇妙だと人々は考えるようだ。私には幾つかの理由がある。第一に、私は物事が明快に説明されることを好む一種の探求心を持っている。私にとりまったく明らかなこの問題全体の一つの側面は、UFO は‘私’が満足するほどに説明されてこなかったということである。まったくのところ、私に関する限り U は un ‘identified’ 以上に un ‘explained’ を表している。第二に、実に様々な正体不明の別の現象が存在する。それらは UFO に関係しているかもしれない、そうでないかもしれないが、私は UFO との関連で注目してきた。第三に、諸政府が行なっている UFO 製造のための研究が、公的に隠蔽されていると私は確信している。米国では確実にそうだ。．．人間がつくった物体とも、科学者に知られている何か物理的な力または効果とも説明できない物体が存在し、我々の大気中、さらには地上でさえ目撃されてきたという証拠は、私を圧倒する”<sup>27)</sup> [強調は原文]

ウィルフレッド・デ・ブラウワー少将, 王立ベルギー空軍, 参謀副長

**Major-General Wilfred de Brouwer, Deputy Chief, Royal Belgian Air Force**

“ともかく空軍は、幾つかの特異な現象がベルギー上空で発生し続けてきたとの結論に至った。．． 現在まで、攻撃性の兆候が示されたことはない。軍用機でも民間機でも、航空交通が干渉や威嚇を受けたことはなかった。それゆえに、我々は考えを進めて、これまで当然とされてきた対処行動は、明確な危険行為であるということが出来る。．． これらの現象が探知と収集の技術的手法を用いて観測され、その起源がすべて分かる日が必ずくるだろう。．． ”<sup>28)</sup>

- 
- 2) Sagan, Carl: “Unidentified Flying Objects”, The Encyclopedia Americana, 1963.
  - 3) Mead, Margaret: “UFOs - Visitors from Outer Space?”, Redbook, Vol. 143, September 1974.
  - 4) Hynek, J. Allen: From interview in The Chicago Sun Times, August 28, 1966; The UFO Experience: A Scientific Inquiry, Regnery Co., 1972.
  - 5) Salisbury, Frank B.: Fuller, John G., Incident at Exeter, Putnam, 1966 (quoting a paper presented at the U.S. Air Force Academy in Colorado in May 1964).
  - 6) McDonald, James E.: “Symposium on Unidentified Flying Objects”, Hearings before the Committee on Science and Astronautics, U.S. House of Representatives, July 1968.
  - 7) American Institute of Aeronautics and Astronautics, UFO Subcommittee (1967), The Encyclopedia of UFOs, 1980.
  - 8) Sturrock, Peter A.: “An Analysis of the Condon Report on the Colorado UFO Project”, Journal of

*Scientific Exploration*, Vol. 1, No. 1, 1987.

- 9) Lammer, Helmut: “Atmospheric Mass Loss on Mars and the Consequences for the Cydonian Hypothesis and Early Martian Life Forms”, *Journal of Scientific Explorations*, Vol. 10, No. 3, 1996.
  - 10) Oberth, Hermann: “Flying Saucers Come From a Distant World”, *The American Weekly*, October 24, 1954.
  - 11) Jung, Carl: *Flying Saucers: A Modern Myth of Things Seen in the Sky* (R.F.C. Hull translation), 1959.
  - 12) Anonymous: “Yes, Aliens Really Are Out There, Says the Man on the Moon”. *The People* [a London Newspaper], October 25, 1998.
  - 13) Truman, Harry: White House press conference, April 4, 1950.
  - 14) Eisenhower, Dwight: Last speech as President, January, 1961.
  - 15) Ford, Gerald: Letter to L. Mendel Rivers, Chairman of the Armed Service Committee, March 28, 1966.
  - 16) Carter, Jimmy: *The National Enquirer*, June 8, 1976; confirmed by White House media liaison Jim Purks, in a letter dated April 20, 1979.
  - 17) Reagan, Ronald: 1) White House transcript of speech at Fallston High School, December 4, 1985; 2) Speech to the United Nations General Assembly, September 21, 1987.
  - 18) Hoover, J. Edgar: Letter to Clyde Tolson, July 15, 1947.
  - 19) Twining, Nathan: Letter to Commanding General of the Army, September 23, 1947.
  - 20) Smith, Walter: Memorandum to National Security Council, 1952.
  - 21) Chadwell, H. Marshall: Memorandum to Director of Central Intelligence, 1952.
  - 22) Ruppelt, Edward: The Report on Unidentified Flying Objects, Ruppelt, Doubleday, New York, 1956.
  - 23) Hillenkoeter, Roscoe: Aliens from Space, Major Donald E. Keyhoe, 1975.
  - 24) LeBailly, E.B.: “Unidentified Flying Objects” (No. 55); hearing by Committee on Armed Services, House of Representatives, April 5, 1966.
  - 25) Stanton, William: Quoted in *Ravenna Record-Courier*, Pennsylvania, April 1966, cited in Mysteries of the Skies, Lore and Deneault, Prentice Hall, 1968.
  - 26) Smith, Wilbert: Memorandum on Geo-magnetics, November 21, 1950.
  - 27) Hill-Norton, 1988, Foreword to Above Top Secret, Timothy Good, William-Morrow, New York, 1988.
  - 28) DeBrouwer, Wilfred: UFO Wave Over Belgium—An Extraordinary Dossier (original title in French), SOBEPS, 1991.
-

### 3.3 なぜ UFO は秘密にされるのか

#### 序文

過去数年間、私の仕事は米国と海外の両方で、政府および科学界の指導者たちに UFO/地球外知性体についての背景説明を行なうことであった。

この問題についての証拠は明白で確実なものだ。UFO の実在そのものを示す、否定し得ない事例を挙げるのは困難ではなかった。それよりも難しいのは、UFO に関係した秘密の構造を解明することである(本著者による“Unacknowledged[認められざるもの]”と題された論説にある、この問題の解説をみよ)。しかし最大の困難は、‘なぜ’を説明することである。なぜ、すべてが秘密なのか？なぜ、政府の内部に‘闇の’、または認められていない政府があるのか？ UFO/ET 問題が国民の目から隠蔽されるのはなぜなのか？

‘何が’、つまり証拠は、複雑ではあるが何とか対処することができる。‘いかにして’、つまり秘密計画の性格は、さらに難しく複雑で入り組んでいる。しかし、‘なぜ’ - 秘密の背後にある理由 - これは、最も困難な問題である。この問いにただ一つの答えはない。それどころか、このような桁外れの秘密には相互に関連した数多くの理由があるのである。我々の調査と、このような計画の内部にいた数十人に上る極秘の証人への面接取材により、秘密の背後にある理由を理解できるようになった。それらは、かなり明白で単純なものから、実に異様なものまで多岐にわたる。ここで私は、この秘密についての幾つかの要点を共有したいと思う。なぜ秘密が保たれてこなければならなかったのか、秘密計画の内部にいる統制組織にとり、その方針を変えて公開を許すことが困難なのはなぜか？

#### ことの始まり

ET/UFO 現象の初期には軍、情報機関、および産業界が、この現象の性質について関心を持った。それは我々の敵対者による人類起源のものなのか、またそれが地球外起源と断定されたら、国民はどう反応するか。

1930 年代と 1940 年代、これは小さな問題ではなかった。もし、これらの UFO が地球起源だとしたなら、それらは米国の航空機よりも遙かに進歩した機械装置を持つ敵であることの証拠となるだろう。そして、それが地球外のものだと断定されるや(幾つかの部局は、第二次大戦終了前にこれを知っていた)、答えよりもさらに多くの疑問が生じた。すなわち、なぜ ET はここにいたのか？ 彼らの意図は何か？ これらの装置はいかにしてこのような驚異的な速度で飛行し、広大な宇宙空間を航行することができるのか？ これらの技術をどうしたら人間に応用できるか—戦時と平和時の両方に？ 国民がこれを知ったならどう反応するか？ これらの事実の公開が人間の信仰に与える影響はどうか？ 政治的および社会的なシステムについてはどうか？

1940 年代終わりから 1950 年代初めにかけて、これらの宇宙機の背後にある基本的な科学と技術を解明するために、まずニューメキシコ州などから回収された地球外物体の直接調査と逆行分析(reverse engineering)による、組織的な取り組みが行なわれた。直ちに、これらの物体が内燃機

関、真空管などといったものより遙かに進歩した物理法則と応用技術を使っていることが明らかになった。冷戦のただ中にあり、わずかな技術的優位性が核軍備競争における軍事バランスを危うくする世界にあつて、この問題は小さくなかった。

実際、この地政学的秩序の不安定化という問題は、UFO に関係する秘密の一つの特徴として繰り返し現れる—それは今日この時点まで続いている。これについては後でさらに述べる。

ウィルバート・スミスによる 1950 年のカナダ政府最高機密文書から、この問題が水爆の開発よりも大きな秘密として保持されてきたことを我々は知る。1940 年代終わりには、地球外物体についての研究、それがどのように機能するかの解明、またそのような発見が人間のためにどう応用されるかの予測に、多大な努力が払われていた。そのときでさえ、この問題を扱うプロジェクトはとてつもない秘密であった。

1950 年代初めに、ET 宇宙機のエネルギーと推進システムの背後にある幾つかの基本的な物理学について実質的な進展がみられ、秘密の傾向はさらに強まった。我々に推定できる限り、このプロジェクト全体が次第に闇の中に消え、認められざるものになっていったのはこのときである。

これらの秘密プロジェクトが実際に手に入れたものが何であるかが理解された 1950 年代初めまでに、UFO を扱うプロジェクトの区画化が急速に進行した：もし公開されたなら地球上の生活を永久に変えてしまうであろう、物理学とエネルギーシステムを示す装置類。

アイゼンハワーの時代、UFO/ET プロジェクトは、合法的な監督と統制の指揮系統を離れ、益々区画化された。このことは - 証人の証言から、我々はアイゼンハワーが ET 宇宙機について知っていたことを知っているが - 大統領（および英国などの同様の指導者たち）が次第に蚊帳の外に置かれていったことを意味する。このような、選挙で選ばれ任命された高い地位にある指導者たちは、彼らの統制と監督がいよいよ届かない、迷路のように区画化されたプロジェクトを持つ、（アイゼンハワーがそう呼んだ）複雑な軍産複合体に直面することになった。証人による直接の証言から、我々はアイゼンハワー、ケネディ、カーター、そしてクリントンが、このようなプロジェクトの内部に立ち入ろうとして挫折したことを知っている。

このことは、議会や捜査当局の高官たち、外国や国連の指導者たちについても同様である。実にこれは、機会均等な排斥プロジェクトである—官職や位がどんなに高くとも無関係である。もしあなたがプロジェクトに不要と見なされれば、あなたはそれについて知ることはない。以上。

一般に流布している俗説と異なり、我々が宇宙で孤独ではないという事実に直面したときに社会に起きる、ある種のパニックへの懸念は、1960 年代以来秘密の主たる理由ではなかった。内情に通じる人々は - UFO 団体や X ファイルの中では奇怪な話がつくられているが - 敵意ある ET という恐怖もまた、重要な要因ではなかったと理解している。ET 現象の背後にある究極の目的について、幾つかの秘密の集団内では依然混乱があるものの、ET を敵対的な脅威と見なす部内者は一人もいないことを、我々は知っている。

1960 年代までには - そして 1990 年代までには確実に - 世界は宇宙旅行の概念を熟知する

ようになり、人気の空想科学産業は、遙か遠くから ET がやってくるかもしれないという考えを、大衆に徹底的に吹き込んだ。だとすると、なぜ秘密が続いているのか？

冷戦は終わった。我々が宇宙で孤独ではないと知って、人々が動揺することはほとんどないだろう(多数の人々はすでにこれを信じている - 実際には大部分の人々が、UFO が現実であることを信じている)。さらに言えば、20世紀後半を全世界の主要都市に向けられた数千の水爆と共に生き抜く以上に衝撃的なことが、あり得るだろうか。もしこれに対処できるなら、間違いなく我々は、ET が現実であるという考えに対処できる。

恐怖、パニック、動揺などといった安易な説明では、大統領や CIA 長官でさえその情報に接近することを拒否されるほどの深い秘密性を正当化するには、不十分だ。

### 推測される現状

そうすると、UFO 問題が今でも秘密にされているのは、基本的な世界の権力力学、そしてこのような秘密の公開がそれらに与える影響の大きさに対する、現在も続いている懸念に関係しているに違いない。

すなわち、UFO/ET 現象に関係した知識は、どんな犠牲を払ってでもそれを抑圧し続けることが絶対に必要だと考えられるほど、現体制を変える大きな潜在力を持っているに違いない。

遡って 1950 年代初め、これらの ET 宇宙機の背後にある基本的な技術と物理学が、きわめて集中的な逆行分析(reverse engineering)プロジェクトにより発見されたことを、我々は知った。秘密性がかつてないレベル - 我々が知るように、本質的に政府の通常の指揮系統による統制から外す - まで引き上げる決定がなされたのは、まさにこのときである。なぜか？

冷戦時代にこのような知識が米国／英国の敵対者によって使われる可能性があったことはさておき、これらの装置類が‘お父さんのオールズモビル’ではないことは直ちに理解された。エネルギー発生と推進システムの背後にある基本的な物理学は、地球上にあるすべての既存のエネルギー発生と推進システムに容易に取って代わり得るほどのものであった。それにより、すべての地政学のおよび経済的秩序もまた、同じ運命を辿る。

1950 年代、地球温暖化、生態系破壊、オゾン層破壊、熱帯雨林消失、生物多様性の荒廃などには、大きな関心が払われなかった。第二次大戦後、必要なことは世界経済、技術、および地政学的秩序の新たな動乱ではなく、安定であった。覚えておいてほしい：支配者は支配者のままでいたがる。彼らは危険回避者であり、重大な変化を嫌い、支配や権力を容易に放棄しない。

ET の存在を公開すると、不可避免的にこれらの新技術に関連する公開がすぐその後につき、世界を永久に変えてしまうだろう - それを彼らは知っていた。こんなことはあらゆる犠牲を払ってでも回避しなければならない。さらに当時は、“GM(\*ゼネラルモーターズ)にとってよいことは米国にとってよいことだ”の時代であった。同じことは、大手石油資本、大手石炭資本などについても言えただろう。

否定できない事実はこうである：ET 存在の公開は、それと共にこれらの技術の確実な解放をもたらすだろう - その解放は、この惑星上のあらゆる技術基盤を洗い流す。変化は途方もないものになるだろう - そしてそれは突然だ。

50 年後の今、このことは当時よりもさらに真実である。なぜか？ 1950 年代の問題回避により - 当時は都合がよかったが - 今やさらに危険な綱渡りの状況を招来している。例を挙げれば、世界が石油と内燃機関技術に依存する度合いは、1955 年よりも今の方が大きい。また、世界経済は今の方が桁違いに大きい。だから、どんな変化も飛躍的に大きなものとなり - さらに大きな混乱を起こす可能性を秘めている。

こうして、これは難題になった：その時々時代の時代と世代がこの問題を次の世代に先送りすることにより、継続される秘密は一時代ごとにその不安定さを増す以外になくなった。狂気じみた秘密のグループ、公開の遅れ、増大する世界の複雑さと我々の時代遅れのエネルギーシステムへの依存の中で、それぞれの世代は前の世代よりもさらに大きな圧迫を受けてきた。1950 年代に公開することは困難であっただろうが、今公開することはさらに困難である。その結末は世界を揺るがすことになるだろう。

地球外宇宙機の逆行分析によりもたらされた 1950 年代の技術的発見は、我々が世界の経済、社会、技術、環境等の現状を完全に変革することを可能にしたはずであった。このような進歩が一般に公開されないできたことは、その時点の統制階級が変化を嫌う本性を持っていたことに関係している - それは今も続いている。

だから、間違いなく変化は途方もないものになるだろう。

考えてみよ：いわゆるゼロポイント場からエネルギーを取り出すことを可能にし、すべての家庭、事業所、工場、乗り物がそれ自体の動力源を持つことを可能にする技術 - 外部からの燃料源を使わずに。永久に。石油、ガス、石炭、原子力発電所、内燃機関のどれも不要。しかも環境汚染は皆無。以上。

考えてみよ：地表面上を浮遊しながらの輸送を可能にする、電気重力装置を利用した技術 - 輸送は地表面上を浮遊して行なわれるため、肥沃な農地を覆う道路はもはや不要。

素晴らしいことだ。だが、1950 年代は石油が豊富で、誰も汚染を心配せず、地球温暖化には関心のかけらもなく、世界の大国には安定こそが求められていた。現体制の維持である。その上、なぜこのような公開による構造変革の危険性を冒すのか？ 後の世代に任せようではないか。

しかし今、我々がその後の世代である。そして、2001 年は 1949 年ではない。地球はそのすべてが車、電気、テレビといったものを求める増大する人口 - 現在は 60 億人 - の重荷に歪んでいる。石油がさらに 50 年もたないことは誰でも知っている - 仮にもったとしても、地球の生態系はこのような酷使にさらに 50 年は耐えられないだろう。公開による危険は、今や秘密による危険よりもよほど小さい。もし秘密がさらに続いたら、地球の生態系は崩壊する。まさに、大きな変化と地球規模の

不安定とはこのことだ...

多くの人は、このような公開の技術的および経済的影響が、継続する秘密を正当化する主要部分だと考えるだろう。つまるところ、我々は毎年数兆ドルの経済的变化について語っているのだ。経済のエネルギーと輸送の全領域は、大変革させられるだろう。エネルギー部門 - 再生不能な燃料が購入され、燃やされ、再び補給される部分 - は完全に消滅するだろう。だから、他の産業部門が繁栄していくことになる一方で、このような数兆ドルの経済部門が消えていく影響の大きさを無視することは、愚か者でもない限りできないだろう。

石油、ガス、石炭、内燃機関、および公益事業に関係した産業基盤につながる既得権益が、この世界において小さな勢力でないことは確かである。

しかし、UFOの秘密を理解するためには、その金(マネー)というものが本当は何を意味するのか、考えなければならない。権力である。巨大な地政学的権力である。

インド(アフリカ、南米、中国でもよい)のすべての村が、汚染を伴わず、燃料のための莫大なエネルギーも費やさずに、大量の電力を発生する装置を持ったなら何が起きるか、考えなければならない。全世界はかつてない勢いで発展することができるだろう - 汚染もなく、発電所、送電線、燃料に巨額の資金を使うこともなく。持たざる者が持てる者になるだろう。

多くの人は、これをよいことだと考えるだろう: 結局、世界の不安定要因の多く、戦争などといったものは、大きな富を持つ世界の中での、気の遠くなるような貧困と経済的悪行に関係がある。社会的不正と極端な経済格差が、世界に混沌と苦悩を生んでいる。これらの分散的な、汚染を生じない技術は、それを永久に変えるだろう。砂漠にさえも花が咲くだろう...

しかし、地政学的権力は、技術的および経済的能力から生じることを覚えておかなければならない。インドは 10 億を超える人口を擁し、米国はその約 4 分の 1 であるが、どちらがより大きな地政学的権力を持っているだろうか?

これらの新エネルギーシステムが拡散するにつれて、いわゆる第三世界は急速にヨーロッパ、米国、日本などの工業先進世界と肩を並べることになる。これは、大規模な地政学的権力の移行を引き起こす。そのとき、工業先進世界は、今虐げられている第三世界と実際に権力を共有しなければならないことに気付くだろう。

現在(1950 年においても)権力の座にある者たちは、こんなことをすることに何の興味もない。我々が国連の中で権力を支持したり共有したりすることは、ほとんど不可能である。

UFO/ET 問題の情報公開により、新エネルギーシステムは全世界に拡散し、世界の権力は急速に均等化されるだろう。米国とヨーロッパには 6 億の人々がいる。これは世界人口のたった 10 パーセントにすぎない。残る 90 パーセントの技術的および経済的地位が上がるや、地政学的権力がその方に向かって移行 - または均等化 - することは明白である。権力は共有されるべきものになるだろう。本当の地球規模での集団安全保障が必然となるだろう。それは我々が知っている世界



の終わりである。

経済的および技術的影響と地政学的影響を合わせたとき、終焉する秘密によってもたらされる変化が真に構造的であることは明らかである - 大規模で、世界を包囲する、革新的なもの。それは容易なことではない。

だが、世界がこれらの新技術を獲得したはずのときから 50 年 - それは生態系の荒廃、社会的および経済的な混乱と格差の長い 50 年でもあった - 経って、我々は UFO の秘密として知られる宇宙的難問を先送りしてきた、長い行列の最後の世代であると気付いている。

こうして、我々はこの難問を抱えてここに立っている。しかし何を為すべきか？

秘密の終焉は、人類生存の事実上あらゆる側面における、甚大で深遠な変化を意味する - 経済、社会、技術、哲学、地政学、等々。しかし、秘密の継続とこれらの新エネルギーおよび推進技術の抑圧は、遙かに不安定な何物かを意味する：我々が依存する地球生態系の崩壊と化石燃料の確実な枯渇。満たされた尊厳ある生活を必要以上に奪われている持たざる者の怒りの増大。この宇宙的難問を引き渡せる次の世代は、我々にはもういない：我々はこの対処し、1950 年に行なわれているべきだったことをしなければならない。

### 我らが織りなす蜘蛛の糸

前述のことが秘密と言うには不十分だと思うなら、この秘密を維持するために驚くべきことが行なわれてきたことを思い起こしてほしい。秘密を維持し、大統領、CIA 長官、高い地位にある議会指導者、ヨーロッパの国々の国家元首といった人々を欺くことができるまでそのレベルを拡張するのに必要な構造基盤は、相当なものである - そして違法である。明確にしておきたいが、UFO 問題とそれに関係した技術を統制する組織は、世界のどの一国の政府または知られている世界の指導者の誰よりも、強力な力を持っている。

このような事態になるかもしれないことは、アイゼンハワー大統領が 1961 年 1 月に、増大する“軍産複合体”に関して我々に警戒を喚起したときに、予め警告されていた。これは、彼が大統領として世界に発した最後の演説だった—彼は、彼自身が知っていた驚愕すべき状況について、直接我々に警告を発していたのである。というのも、アイゼンハワーは ET 宇宙機と ET の遺体を見ていたからである。アイゼンハワーは、この事態に対処した秘密計画について知っていた。しかしまた、彼がこれらのプロジェクトに対する統制を失ってしまったことも、そして彼らとその研究開発の範囲と全容について彼に嘘をついていることも知っていた。

実に、秘密維持の現在の最新技法は、複合型、準政府、準民間の国際的な活動である - これはいかなる単独の機関または一国の政府の権限も及ばないところで行なわれる。‘政府’ - あなたや私やトーマス・ジェファソンが考えるような - は本当にまったく蚊帳の外である。そうではなく、選り抜きの、厳重に管理され区画化された、‘闇の’または認められざるプロジェクトが、これらの問題を統制している。近づくためには組織の一員になるしかない。そうでなかったなら、CIA 長官、大統領、上院外交委員会議長、または国連事務総長の誰であろうと、あなたはこれらのプロジェクトに

ついて知ることも近づくこともできない、というだけのことだ。

私が背景説明を行なったことのある国防総省統合参謀本部の高官たちが、このようなプロジェクトに一般市民より以上に接近できない状況は、実に尋常ではない - 何かの理由で彼らが‘内部’にいない限り。だがこれは稀だ。

このような権力を獲得し維持するために、あらゆる種類のことが行なわれてきた。これは我々に‘我らが織りなす蜘蛛の糸．．’(\*スコットランドの詩人ウォルター・スコットが 1808 年に発表した叙事詩 *Marmion* の中の一節)と述べているあの詩を想起させろ。しかし、このような組織がどうやってこの秘密、欺き、虚言、反抗の蜘蛛の糸から抜け出すというのか？

はっきり言えば、このグループは法的に認められない権力と権利を不正使用しているのである。それは米国、英国、および世界中の他の国々で憲法を超えたところにある。

私は、次の可能性を認めよう。少なくとも最初この秘密活動は、秘密を維持し不安定を回避するためであった。だが、不注意による秘密漏洩の危険 - または国や世界の指導者が合法的に秘密を公開すべきときであると決意する危険 - から、益々大きな秘密と非合法活動の蜘蛛の糸を織ることが最重要になった。そして今、その蜘蛛の糸は活動そのものを包囲してしまった。

つまり、区画化されたプロジェクトの複雑さ、違憲で不当な活動の度合い、連携する企業(軍産複合体の‘産’の部分)による先端技術の‘民営化’(または盗用)、合法的に選出され任命された指導者と社会に対するこれまでの虚言 - これらのすべてとそれ以上のことが、隠し続ける心理を助長してきた - なぜなら、公開により歴史上最大のスキャンダルが暴露されるからだ。

たとえば、汚染による地球全体の生態系荒廃と、今や絶滅した数千もの回復できない動植物種の損失が、まったく不要であった - そして 1950 年代にこの情報の公開が正直に行なわれていたなら、回避されていたはずだ - という事実には、国民はどう反応するだろうか？

認められざる違憲プロジェクトに、長年にわたり数兆ドルもの資金が使われてきたと知ったなら、社会はどう反応するだろうか？ そして、これら納税者の税金が、この秘密の中で軍産複合体の企業により ET 物体研究に基づく副次的技術開発のために使われ、さらにその技術は、後に特許として大きな利益を生む技術の中で使われているとしたら？ 納税者は詐欺行為を受けているだけではない。彼らの税金で賄われた研究開発の成果である画期的技術に割増料金まで支払っているのだ！ ET から獲得したこのような技術の知的所有権の不正使用ということに、何らの考慮も払われていない。基本的なエネルギー発生と推進の技術が公表されないで来た一方で、これらの企業は、電子技術、小型化技術、および関連領域での他の画期的な技術と便益により、大きな収益を上げてきた。このような秘密の技術移転は、実は社会の共有財産となるべき技術の、数兆ドルもの盗用に相当する。なぜなら、納税者がそれを賄ってきたからである。

また、内燃ロケットなどを使った数十億ドルの宇宙計画が、原始的で不必要な実験だったと知ったなら、国民はどう反応するだろうか？ なぜなら、これより遙かに進んだ技術と推進システムが、我々がかつて月に行った以前に存在していたからだ。NASAと関連機関の大部分は、このことを知

らなかった政府の人々および国民と同様に、この秘密の犠牲者である。NASA 職員のうちごく少数の、嚴重に区画化された部分のみが、これらのプロジェクトの中で隠し通されてきた実際の ET 技術を知っている。私のおじは、ニール・アームストロングを月に運んだ月着陸船の設計に携わっていたが、これらの画期的技術に接近することを拒まれていたという点で、確かに他の犠牲者と変わるところがなかった。彼は他の皆と同じように、古い物理学と古い内燃ジェット推進技術に頼らざるを得なかった。何という恥辱か。

否定できない事実はこうである。この秘密プロジェクトは、最初の意図がいかに善意であったにせよ、それ自体の秘密権力により押し流されてしまった。秘密プロジェクトはその権力を誤用した。それは、我々の未来を 50 年間奪い続けている。

実際、1940 年代終わりと 1950 年代初めに行なわれた静かなクーデターがひとたび暴露されれば、今日の世界に本当の不安定さをもたらすことだろう。

しかし、状況は実のところこれよりさらに悪い。これまで述べたすべては、さらに大きな問題の前では小さく見える。UFO に関係したこれらの闇のプロジェクトを運営している秘密グループは、初期段階にある地球外文明と人類の交渉を独占的に支配してきた。そして、悲劇的に間違った対応がとられてきた - 真の地球破滅になりかねないほどの。

というのは、選ばれてもいない、任命されてもいない、自らを選んだ、軍事指向のグループが単独で、人類と ET の間の異種族間交渉をしなければならぬとしたら、何が起きるか？ 何でもそうだが、バラ色の眼鏡をかけたなら全世界は赤く見えるものだ。だから、もしあなたが軍事眼鏡をかけたなら、すべての新しい制御できない現象は潜在的または現実の軍事的脅威に見えるだろう。

このようなグループ - 異常な統制下にあり、かつ排他的な - の本性は、均質な世界観と発想である。権力と統制はきわめて顕著なその特徴である。このような極度の秘密性は、抑制と均衡、妥協を完全に欠いた、きわめて危険な環境を生む。そして、そのような環境の中では意見の反映、議論、必要な展望の洞察などが適切に行なわれないまま否応なしに排除され、きわめて危険な決定が行なわれる可能性がある。

このような極度の秘密性、軍事主義、および被害妄想の環境の中で、とてつもなく危険な行動が ET に対してとられてきたことを我々は知った。実際に我々には複数の内部事情通があり、彼らが語るところでは、地球外物体を追跡し、標的にし、破壊する、益々進歩した技術が使われてきた。もしこれが真実だという 10 パーセントの可能性でもあれば(私は 100 パーセント正確だと確信しているが)、完全に我々の統制外にあり、しかも惑星全体を危険にする、地球規模の外交的および社会的危機に直面していることになる。

覚えておいてほしい。秘密の逆行分析(reverse engineering)プロジェクトは、技術の飛躍的進歩をもたらした。それはひとたび軍事システムに応用されれば、平和的にここにいるであろう ET に対する、真の脅威になり得る。宇宙空間を急速に軍事化する企ては、おそらく地球外知性体のプロジェクトと意図に対する、近視眼的、軍事主義的、被害妄想的な見方によるものだ。それが抑制されないままだと、結果は破滅でしかない。

実際、このグループは、その意図がいかに善意から出たものであろうと、直ちに白日のもとに曝され、新しい視野を持った全世界の政治家たちが、この状況の仲裁に乗り出せるようにする必要がある。ET 文明が敵対的である証拠を我々はまったく持っていないが、彼らの活動への野放図で増大する干渉を、彼らが許すことはないこともまた明らかだ。自己防衛は普遍的なものだろう。ET はこれまで驚異的な自制を示してきたが、もし人類の秘密の技術が彼らのそれに肩を並べ始め、そのような先端技術を人類が敵対的な方法で用いようとしたら、宇宙の仕掛け線を踏むことになるのではないか？ その考えは我々を肅然とさせる。

我々はジミー・カーター、ダライ・ラマ、その他の国際的な政治家たちを、この巨大な問題に関与させる必要がある。しかし、接近が拒否され - またこの問題が公開されず、全世界のレーダー画面の外にあるなら - 選ばれてもいない少数者に我々の運命を預け、我々の代表として行動することを許すことになる。これは変えなければならない、それも直ちに。

結果的に、UFOと ET に関係したこのような公開に伴う変化は大規模で、地球生命のあらゆる側面に深遠な実質的影響を与えるだろうが、それでもそれを行なうことは正しい。秘密は一人歩きしてきた - それは増殖する癌であり、それが地球の命とその上に棲むすべてのものを破壊する前に治療されなければならない。

秘密の理由は明白である。地球規模の権力、経済的および技術的な支配、地政学的な現体制維持、このようなプロジェクトと彼らの行動の露頭が巻き起こすスキャンダルへの恐怖、などである。

しかし、公開よりも危険なことは、秘密を隠し続けることである。地球は死にかけている。我々が殺しているのだ。世界の上位 250 人とその一族が持つ資産は、最貧 25 億人のそれに等しい。人類と他の惑星の人々との前途有望な関係は、完全な秘密の中で行なわれている間違っただけの思考と間違っただけの計画により、軍事化され、歪んでいる

公開による短期的な不安定と変化のすべてを考えると気も遠くなるが、秘密を続けることは、我々の愚行と貪欲により地球を破壊することを意味する。人類の未来、それは過去 50 年間遅らされ奪われ続けているが、さらに 50 年間奪われ続けることはできない。なぜなら、我々はさらに 50 年間の時間は持っていないからだ - 地球の生態系は、その前に崩壊するだろう。

安易な選択はない。だが正しい選択が一つある。その実現に力を貸していただけるだろうか？

### 3.4 認められざるもの

政府は秘密を隠しておけるか？

ある本当に大きな秘密 - あらゆる時代の中で最大の秘密を？ 政治家と政府指導者のどんなつまらない過ちもゴールデンアワーのニュースになるときに、政府は世界の歴史の中で最も驚愕すべき発見 - 地球外知性体の存在 - を我々から隠せるものだろうか？

そう、イエスでもあり—そして、ノーでもある。

はじめに、政府という概念を定義し直さなければならない。というのは、まず‘我ら人民’の政府があるからである。選ばれ任命された公務員、国民の代表、行政官、立法府、および司法府、等々、中学の社会科にあるような。

しかし、認められざる‘政府’もまた存在する：深く隠蔽された‘政府’、深い闇のプロジェクト、雇われた作業員と企業、‘我ら人民’の政府が認められざる‘政府’について知ることを阻む任務を負った、謎の中間役人たち。

左手がしていることを右手は知らない - しばしば知ろうとするが...

我々は少々先走りし過ぎているようだ。はじめに幾つか背景を述べたい。

この 20 世紀の後半にあつて、実在する秘密がいかに維持されているか、私はほぼ 11 年の間ひそかに研究してきた。私が知ったのは驚くべき事柄であつた。そして正直に言うと、信じがたいものだった。今あなたが読もうとしている内容は真実である - だが、10 年前に誰かがこれを私に話していたとしても、私はそれを信じなかつただろうと認める。あなたはこの論説の残りの部分をつくり話として読むかもしれない。その内容のすべてを距離を置いて遠くから眺めたなら、あなたはより楽な気分になるかもしれない。しかし、これは本当のことだという気持ちも幾らかは持ってほしい。

この論説で扱う内容は UFO/ET が現実のものなのか、あるいは地球を訪問しているのか、ということについてではない。まずそのことから片付けよう。というのも、それはそうし易い部分だからである：UFO は現実である；それらは地球外起源である；彼らは数十年間(数世紀でないとしても)にわたって、我々の周囲にいる；彼らが敵対的であるという証拠はない；我々を訪問しているのはおそらく複数の種族である；‘政府’のある部分はこれを少なくとも 50 年前から知っていた。

この問題のさらに難しい部分は、この異常な物事は現実でありながら、それでもなお何かしら非現実的で、隠され、秘密にされ、得体の知れないものであるということを理解することだ。公式の政府 - およびメディアと科学界における公式な真実の管理人たち - がこれほどまでに長く欺かれてきたのは、歴史上に例を見ないこの秘密計画の精巧さ、深さ、広さ、遍在性のたまものだ。

実に、いかにして - そしてなぜ - この偽装行為が存在してきたかの物語は、その奇怪さ、不思議さ、信じ難さにおいて、地球外現象そのものを超えている。実際のところ、秘密の効力はその秘

密の性質の驚くべき信じ難さそのものに関係しているようだ。別の言い方をすれば、これらの秘密プロジェクトの理由、方法、事の起こりのいきさつは、あまりにも奇怪で信じがたいために、そのこと自体がそれらの最良の覆いになっている。それに行き当たっても誰もそれを信じないだろう。それは完全に限度を超えている。

正直に言うと、あなたがこれから読もうとしていることへの私自身の最初の反応は、こうであった。“本当だろうか．．．”しかし、その後の確証に次ぐ確証、独立した証拠に次ぐ独立した証拠により、私はそれを確信するに至った。そのとき、私はこう言っていた。“何てことだ．．．”

ここでの紙数の制限から、私は 11 年間の緊迫した舞台裏での研究の主要部分だけをあなたにお伝えする。いつの日か、話の全貌、名前も何もかもが語られるときがくることを願う。だが今のところは、大まかな実態と詳細の幾つかを述べることにしか許されない。この情報は、非常に高い地位にあり、かつこの問題と関係のある軍、情報機関、政府、および民間企業の情報源との個人的な、内密の、慎重をきわめた会合と長時間にわたる議論によりもたらされたものである。これらの秘密プロジェクトに関する真実を研究する中で、私は国家首脳、王族、CIA(中央情報局)高官、NSA(国家安全保障局)諜報員、米国および外国の軍指導者、政治指導者、先端技術企業の契約業者といった人々と会うことになった。その過程は消耗的で、過酷で、衝撃的だった。安全と慎重を期するために、ここでは彼らの名前を当分伏せておかなければならない；あなたがこれを読み終わったとき、その理由が明らかになるだろう。

この始まりは、少なくとも第二次大戦にまで遡る。米国政府の一部の当局者は、人類が孤独ではないこと、一部の戦場の周囲を敵のものでも味方のものでない進歩した機械が飛び回っていることを知っていた、ということを知った。親類が第二次大戦の高名なパイロットだったという、医療の同僚でもある友人が私に語ったところでは、このパイロットは、これらのいわゆる‘フー’・ファイターズが何であるかを突き止めるために、大統領命令によりヨーロッパに送られた。彼は大統領への報告で、それらは地球外宇宙機だと述べた。

これ以後、事態は益々奇妙になっていく。後にある CIA 長官の右腕になった一人の退役将軍は、私にこう語った：1946 年に軍将校だった彼の任務は、アイダホ上空で起きた一連の白昼 UFO 目撃事件に関して‘でたらめな’文書を作成することであった。彼が言うには、人々は UFO が現実であることを知っていた。しかし間もなく冷戦が始まり、その後には幾つかの戦争が続いた。人々は誰もが地球規模の熱核戦争に懸念を持った - だから、これらの正体の知れない、しかし無害な ET について心配する暇など、誰にもなかった。

確かに、そんな暇はなかった。

それぞれ独立して確証する複数の新たな証人たちが、1947 年のニューメキシコ、1948 年のアリゾナ州キングマンでの ET 宇宙機の墜落と回収について我々に語った。この‘回収された宇宙機’こそが今や確実に誰かの注意を引くことになり、以後、標的の名前は‘進歩した地球外技術’になった。それはどのように機能するのか；何に使えるのか；彼らはどう使うのか；我々より先にソビエトがそれを解明しないか；それが漏れて誰か新しいヒトラーが世界支配のために使うことになりはしないか；人々がそれを知ったらパニックにならないか；もし．．．

次々とわき起こる、当時答えが見つからなかった疑問の数々。

こうして、古今未曾有の秘密プロジェクトが生まれた。

要するに、当時我々は水爆の開発を行っていた - そして我々の宿敵ソビエトは、躍起になって我々の後を追いかけていた。すでに危うくなっていた世界秩序をさらに不安定にするために、真空管や内燃機関の世界に恒星間推進技術を持ち込む以上のものがあつたらうか？ 我々が技術的能力の飛躍に直面していたというのは控えめな表現だ。我々は我々自身のために、それが安全に行なわれることを望んだ。

こうして、‘国家安全保障’の見地から、どんな犠牲を払ってでもこの問題全体を隠蔽しておくことが強く求められた。そしてそのために、あらゆる手段がとられた。

しかし、この計画を台無しにする、とても大きな一つの障害がせつせと活動していた：ETはアメリカやそれ以外の世界の空を、ときには編隊を組んで数千人の人々に目撃されながら飛んでいたのである。さあ、これをどうやって隠すか？

心がそれを隠すのである。それはジョージ・オーウェル式のひねりの効いた仕掛けで、第二次大戦中の過去の心理戦研究により、実際、以下のことが知られていた。もし頻繁に嘘が言い立てられ、特に‘ひとかどの’人物によってそれがなされれば、人々はそれを信じるようになる。第二次大戦中に心理戦の達人であった中の一人が、1940年代終わり頃にこの任務を任されたようだ。ウォルター・ベデル・スミス将軍が、この問題の心理戦部分を調整することに関与し、また大きな嘘を立ち上げることに一役買った：UFOは、たとえ百万人がそれを目撃しようとも存在しない。

一般の人々に知られるようになったすべての目撃に対して、当局による否定が行なわれ、さらに悪いことに、事件とその当事者が嘲笑の対象になった。ハーバード大学の天文学者ドナルド・メンツェルが引っ張り出され、世界に向けて次の声明を出した。それはすべてヒステリーであり、UFOなど実在せず、すべては馬鹿げた話であると。

こうして、1950年代になっても真実を知っているのは比較的少数のグループだけで、真実は彼らのうちにとどまっていた。メディアの注目を引くような出来事が起きると、当局者がそれを否定し、馬鹿げた話であるとした。人間というものは概して臆病な社会的動物であり、我々自身認めるように、むしろレミング(\*和名タビネズミ、北極近辺に生息)に近い。だから、困惑や嘲笑や社会的疎外を避けたいと思えば、UFOを自分の目で間近に見たとしても、それについては沈黙を守ることが明らかになった。これに加えて、自然発生レベルの気違いや変人などのような、一般的な社会現象と連動させる形で、市民のUFO関連団体の中で、馬鹿げた奇妙なほら話が積極的に奨励された。もうお分かりだろう。こうしてまともな人間 - 特に‘まともな’メディア、科学者、政治的指導者 - なら誰でも、これを避けるべき‘好ましくない話題’と見なすことになった。

(これまで11年間の私の経験を振り返れば、彼らを非難することなど私にはできない...)

しかし、これらすべてはいかにもありがちな話だ。事態の異様な展開は、秘密プロジェクトのためのある新しいモデルが徐々に展開しだした 1950 年代に始まった；フランケンシュタインがつくられたのだ。そして、今やそれは自らの意志を獲得し、手術台を離れ、すべての拘束を断ち切り、我々の間を歩き回っている。

1993 年の終わりから 1994 年、1995 年、1996 年と、会合を重ねるたびに衝撃的な真実が浮かび上がってきた。ともかく、1990 年代に至るまでに大変な何かが起きていた：この問題に関わる事柄の全体は、その大部分が民間に移され、十層の深さの闇に沈み、米国または他の政府の憲法による指揮系統を離れて活動するようになった。私には今、あなたが何を考えているかが分かる - 私も最初は同じことを考えた - だが、私の話に最後まで耳を傾けていただきたい。

1993 年 7 月の最初の会合から数箇月のうちに、私や我々のチームのメンバーたちは、CIA、議会、クリントン政権、国連、統合参謀本部、英国その他の軍関係の、きわめて高い地位にある高官たちと会うことになった。我々の最初の立場はまず、冷戦が終わった今、これらの問題について重要な情報公開ができる機会が到来したのだということ、これらの人々に対し明らかにすることだった。この問題を国際社会に返すときがきたのだ。本当か？ とんでもない！ ほとんど一つの例外もなく、軍、情報分野、政界、国家安全保障方面の指導者たちは、真実を語るときがきたことに同意した。問題は、彼らが真実にも、データにも、個々の事件にも、あるいは技術にも、また保存されている ET の遺体(それらが現在どこにあるか、我々は知っている。それらはもはやライトーパターソン空軍基地にはない)のいずれにも、接近できる手段を持っていなかったことである。

私が蚊帳の内にいると考えた人々は、蚊帳の外にいた。そしてショーを演出している者たちは、秘密の従業員と民間企業の利害関係者の奇妙な連合体だった。このときから、我々の進む道は鏡の向こう側の世界となった。

私の先祖は、ノースカロライナでアメリカ革命のために戦った。彼らは憲法と代議員による政府を創設するために戦った。その憲法に何が起きてしまったのか、私は驚いた。ひどい悪夢を見たように、私は夢から覚めてそれが本当でないと分かることを祈り続けた。どうしたらこれを人々に伝えられるか？ 誰がそれを信じるか？ ノースカロライナの一医師にとっては、進歩した地球外知性体が我々を訪問していると主張し続けることだけでも、とんでもなく大変なことだ。しかし、これは？

私はレーガン大統領の国家安全保障会議のスタッフだった友人に、どうしてこんなことが可能なのか、訊いてみた。政府、軍、上級情報機関、および国家安全保障部門にいる世界で最も力のある人々が、これについて知らないばかりか、この情報に‘接近する手段さえ持たない’などということがどうして起こり得るのか？ 私は次のように訊いた。もし大統領に誰がそれを本当に知っているかを知らせ、大統領が彼らを大統領執務室に呼び出し、“私は合衆国大統領だ、これについて知っていることを全部話せ”と言ったら、彼らはどうするかと。

彼は笑い、次のように言った。“スティーブ、もし彼らが大統領に知られたくないと思ったら、彼らはただ嘘をつき、そんなものは存在しないと言うだけだ。ずっとそうしてきたのだ...” 私はこの皮肉な言葉に驚いた。また、明らかに憲法が逆転していることにも。



政府の高官たちを‘守る’ための‘もっともらしい否認(plausibledeniability)’(\*まずいことが発覚した場合に備えて、もっともらしい否認を可能にして、逃げ場をつくっておくこと)の策略として、これはどうやらある種の機密事項を扱う分野で行なわれているようだ。そして UFO 問題は、すべての中で最大の機密事項なのである。

重要な秘密情報なら何でも知る立場にあると国民の誰もが考えるような、高い地位にいるある情報関係機関の指導者との会合で、私は次のことを知った。この高官は、UFO が実在することを知っているにもかかわらず、過去の情報にも現在の情報にも、ET の問題を扱うプロジェクトにも、接近する手段を持っていなかった。またもや、私は呆然とした。

召喚権限と最高機密取扱許可(top secret clearance)を持つ、きわめて高い地位の上院調査官たちも、同じだった。統合参謀本部の人たちも、同じだった。国連の高官たちも、同じだった。英国国防省の高官たちも、同じだった。国家首脳たちもまた、同じだった。

物事はこのように進み、さらに続いた。これは嘘偽りではない；これらの会合は、親しい内密の接触者と友人たちにより準備された。皮肉なことに、これらの指導者たちは、この秘密の混乱を本来の状態に戻すために、我々に情報提供、分析、そしておかしなことだが、行動を依頼してきたのである。私は妻と四人の子供、1 台のミニバン、1 匹のゴールデンレトリバーと暮らすノースカロライナの田舎医師にすぎない。そう指摘しても、この事態は変えられなかった。だから私は、‘空き時間’を使って、私のできることをしてきたのである。

認められざる特殊接近プロジェクト(UNACKNOWLEDGED SPECIAL ACCESS PROJECTS)。USAPS。この言葉 - 実際には概念 - は、把握するまでしばらく時間がかかった。単純と言われるかもしれないが、私は民主主義、憲法、大統領職、議会の重要性といったものを心から信じている。しかし、このような異様な観念もある時点で私の心に同化し、この新しい現実の一部にならなければならなかった。大統領、議会、法廷、国連が存在し、その他の世界の指導者たちがいる。彼らは税、通貨、その他あれやこれやの計画を心配する。しかし、本当に大きなもの - それは彼らを除外している。結局のところ、これらの人々は 2 年か 4 年ごとに来ては去っていく。彼らが知らないことは、彼らに何の害も与えない。そのうえ、我々は彼らがこれらの秘密プロジェクトについて何も知らないように便宜を図る。とにかく、これらのプロジェクトは‘認められざるもの(UNACKNOWLEDGED)’であり、ゆえにそれらは事実上どこにも存在しない...

USAPS とは何か？ それは極秘の区画化されたプロジェクトで、最高機密取扱許可を持つ人間でさえ特殊な接近手段を要し、かつそれは認められていない。つまり、あなたの上司、司令官、長官、大統領など、誰か - 誰でもよいが - がそれについてあなたに訊ねたとする。あなたは、そのようなプロジェクトは存在しないと答える。あなたは嘘をついているのだ。

これら USAPS にいる者たちは、彼らのプロジェクトを秘密にしておくことについては本気であり、内部事情を隠し、他部局の者たちと国民に偽情報を与え続けるためには、ほとんど何でもする。

そして、すべての USAPS の元祖は UFO/ET 問題である。

憶えておいてほしいのだが、ウィルバート・スミスによる 1950 年のカナダ政府最高機密文書には、ある秘密の米国グループが、その背後の技術も含めた UFO 問題に取り組んでいることが分かったとあり、また、これは水爆の開発関連の機密をも超える、米国政府最高の機密であるとも述べられているのだ。

さて、このプロジェクトが 50 年経ったらどうなるか、想像してみしてほしい。橋の下を水はどれほど流れたことか。50 年もの歳月の間、プロジェクトの様々な側面に膨大な資金が使われた：逆行分析 (reverse engineering) による地球外技術の解明；非線形の推進および通信システムの実験；国民に対する大規模な偽情報工作と、憲法により選出され指名された当局者および組織への虚言；等々。

この積極的な偽情報工作に加え - 国民を欺き畏にかけ、国民の目を本当の活動から逸らすための偽 ET 事件の捏造や偽装。誘拐。動物切断 (mutilation)。宇宙や地下の基地にいる雑種混血の赤ん坊。世界政府勢力と邪悪な宇宙人との間の秘密協定。その他、うんざりするほどの数々。悲惨なことに、大衆メディア、出版社、UFO 関連団体／業界、および一般社会が、これらの話を節度もなく鵜呑みにする。

この馬鹿げたことは、資金も専門知識もない民間 UFO 関連団体に対する効果的な畏であるばかりか、‘まともな’ 科学者、主要メディア、公職にある人々を沈黙させるのに必要な、狂気と悪趣味の印象をつくり出す。それは問題全体を、安全に、彼らのレーダー画面から外れたままにしておくのだ。

1940 年代半ばから 1950 年代の半ば、さらにその終わりにかけて、これらの事柄が進行するかたわら、この秘密グループはやや型にはまった慣例的なものだった。トルーマン政権とアイゼンハワー政権の多くの当局者たちはそれについて知っており、関わってもいた。それは当面秘密にされるべき、本当の国家安全保障上の重要事項と考えられたのである。だから、彼らは忠誠心を持って行動し、我々の立憲民主主義の妥当な限度内にあったと私は信じる。

しかし、アイゼンハワー時代の半ばから終わりにかけて、合法的に蚊帳の内にいるべき人々が押しつけられる傾向が徐々に現れてきたようだ。これがアイゼンハワー時代の終わり頃とケネディ政権時代に起きたことだと確証する、複数の情報源を我々は持っている。

直接証人たちが我々に語ったところでは、アイゼンハワーは UFO/ET 問題の多くの重要な側面について、自分が闇の中に置かれていることに憤慨していた。彼は ET 宇宙機と遺体を見ていたが、その一方で異常なプロジェクトが進行しており、自分が蚊帳の外に置かれていることを知った。だから、五つ星将軍であり保守的な共和党员であったにもかかわらず、彼が大統領として国民に向けた最後の演説で‘軍産複合体’について警告したことに何の不思議があるだろうか？ 軍産複合体という言葉を考え出し、その行き過ぎの危険性を初めて我々に警告したのは - アビー・ホフマン (\* 反体制活動家) ではなく - この五つ星将軍だったことを、人々は忘れていた。なぜか？ 彼がそれらの行き過ぎを、間近に自分の目で見ていたからである。

1963 年 6 月まで話を進めよう。ケネディは、“私はベルリン市民だ” という有名な演説をするた

めにベルリンに飛んでいる。エアフォースワンの機上には、次のように語る一人の軍人がいた：長いフライトの途上でケネディは、ある時点からこの将校と UFO 問題を議論し始めた。自分は UFO が現実であることを知っており、証拠を見たことがある、と彼は認めたが、次にこう述べて、その将校を驚かせた。“この問題全体が私の管理外にある。なぜなのか私には分からない...” ケネディは、真実が明かされることを望んでいるが、自分にはそれができない、と言った。そして、この問題が自分の管理外にあり、なぜなのかその理由が分からないと述べているのは、軍最高司令官である米国大統領なのだ。私は、彼が同年その後に暗殺される前に、真実を解明したのではないかと考えている。

アイゼンハワー、ケネディ、クリントン政権の重要人物たち、軍の指導者たち、情報機関の指導者たち、外国の指導者たち。誰もが蚊帳の外である。しかし、誰もがそれが事実であることを知っている。何が起きているのか？

USAPS は物語の一部にすぎない。より小さな部分である。軍産複合体への警戒を呼びかけたアイゼンハワーの言葉を覚えているだろうか？ 重要な意味を持つ言葉：産業の (industrial)、民間の (private)、民営化された (privatized)。1995 年 7 月に元英国国防参謀長とこの問題を議論する中で、私は彼も同様に蚊帳の外に置かれていることを知った。本当の秘密は、MI5 (英国軍情報部第 5 課) と MoD (国防省) の頂点にいた人間をさえも寄せつけないことを、我々はあらためて知ったのである。答えの一部は USAPS にある。だが、もっと大きな部分は民間の契約業者の組織にある。

米国政府はほとんど何もしていない(ありがたいことだが...)。あの B-2 ステルス爆撃機は米国政府がつくっているのではない。米国政府のために民間企業がつくっているのだ。そして、民間企業は USAPS よりもさらにうまく秘密を守る。確かにそうだ：コカコーラの製造法はこれまでずっと誰も知らないできた。米国大統領でさえそれを知ることはできない。その製造法は秘密であり、民間所有である。

さて、もしあなたが望むなら、民間所有の秘密の独占権を USAPS に結合し一体化することで、事実上誰も侵入できない秘密の要塞をつくれるだろう。なぜなら、もしあなたが民間部門からその秘密に近づこうとすると、それは所有権により保護されており、公的部門や政府から近づこうとすると、それは USAPS の中に隠されているからである。そして、あなたや私が通常考える‘政府’には何の手がかりもない。

だから、個人的な経験から私はあなたに次のように言える。もしあなたが指導者たちにこのことを知らせたなら、彼らは両手で頭を抱え、かつて私がそうであったようにこう言うだろう。“何てことだ...”

では、この秘密活動の本質的な特徴は何か？

説明：このグループは準政府的な、USAPS に関係する準民間組織であり、国際的／国家横断的に活動する。活動の主要部分は、進歩した地球外技術の解明と応用に関係する、民間企業の‘他から頼まれた仕事’の契約プロジェクトに集中している。関連する区画化された単位(ユニット)

は、これもまた USAPS であるが、偽情報工作、国民を欺く活動、積極的な偽情報工作、いわゆる誘拐と動物切断、偵察と UFO 追跡、宇宙空間兵器システム、および特殊連絡グループ(たとえば対メディア、対政治指導者、対科学界、対実業界、等々)に関与する。この組織は、政府、USAPS、および民間企業の複合体と考えてよい。

このグループの主な構成要素は、まず USAPS に関係した軍と情報機関の中間職員、ある種の先端技術企業内の USAPS または闇の単位(ユニット)、国際政策分析業界、ある種の宗教団体、科学界とメディアの内部にいる選ばれた連絡係、他にもあるが、とりわけこういったものである。これらの組織と人物の一部を我々は知っているが、残りの大部分は特定されていない。

その政策決定組織を構成するおよそ 3 分の 1 から 2 分の 1 のメンバーは、今この問題についてある種の情報公開を行なうことを支持している。彼らは過去の行き過ぎにあまり関わっていない、概して若い構成員である。残りの構成員は、近い将来の公開については反対か葛藤の状態にある。

実際の方針と政策決定は、USAPS 関連の軍や情報部門関係者ではなく、現在は圧倒的に民間民生部門の手中にあるようだ。ただし、活動のある分野では顕著な相対的自律性が見られるとの情報も幾つかある。我々の現在の評価では、ある種の秘密活動と公開の可否について、内部で論争が激しくなっている。

‘闇の’または USAPS プロジェクト内の多くの区画化された活動は、その任務のために働いている人々が、それが UFO/ET に関係したものとは気付かない仕組みになっている。たとえば、いわゆる‘スターウォーズ’の取り組み、すなわち SDI(戦略防衛構想)の幾つかの側面は、地球の近傍に侵入する地球外宇宙機を標的にする意図を持っている。しかし、SDI 計画内部の科学者や作業員の圧倒的多数はこれを知らない。

我々が三つの別々の確かな情報源から知ったところでは、1990 年代初め以来、実験的な宇宙空間兵器システムにより、少なくとも 2 機の地球外宇宙機が標的にされ破壊された。

ホワイトハウス当局者を含む政治指導者たち、軍指導者たち、議会指導者たち、国連指導者たち、および世界の他の指導者たちの圧倒的多数は、この問題について定期的な背景説明を受けていない。査問が行なわれたとしても、彼らはその活動について何も教えられないし、いかなる活動の存在も確認されない。概してこの秘密組織の性質により、指導者たちは誰に対してそのような査問を行なったらよいかさえ分からない。

国際的な協調体制が広範囲に存在する。ただし、何人かの証人が述べるところでは、ある国々、特に中国は、幾分独立した行動計画を積極的に進めている。

活動の主要拠点は、広範囲に分散している民間施設を別にして、カリフォルニア州エドワーズ空軍基地、ネバダ州ネリス空軍基地、特に S4 とそれに隣接する施設、ニューメキシコ州ロスアラモス、アリゾナ州ファチュカ基地(陸軍情報司令部)、アラバマ州レッドストーン兵器庫、飛行機でしか行けないユタ州の僻地にある比較的新しい拡張中の地下施設など、とりわけこういった場所である。

その他の施設と活動拠点は、英国、オーストラリア、およびロシアなどを含む多くの国々に存在する。多くの機関が、これらの活動に関与する隠蔽された、闇の、USAPS に関係する部署を持っており、その中には国家偵察局(NRO)、国家安全保障局(NSA)、中央情報局(CIA)、国防情報局(DIA)、空軍特別捜査局(AFOSI)、海軍情報局、陸軍情報局、空軍情報局、連邦捜査局(FBI)、および MAJI 統制(MAJIcontrol)と呼ばれるグループが含まれる。さらに多くの個人、民間、および企業の組織が、重要な関与をしている。科学、技術、および先端技術に関する活動の大部分は、民間の製造業と研究機関に集中している。重要な - そして殺人をも厭わない - 警備は、民間の契約業者が担っている。

これらの機関と民間グループにいる職員および指導部は、そのすべてではないにしても大部分は、これらの区画化された認められざる活動について、関わってもいないし知ってもいない。この理由により、特定の機関または企業組織を全面的に非難することは、いずれもまったく根拠がない。‘もっともらしい否認’は多くの段階で存在する。さらに、専門化と区画化により、そこにいる人々が UFO/ET の問題に関係した仕事をしていると気付かずに、多くの活動が存続できるのだ。

協力に対する見返りと秘密保持義務に違反した場合の罰は、共に尋常ではない。軍上層部にいる情報源が我々に語ったところでは、過去数十年間にわたり、協力を確実にするために少なくとも 1 万人の人間がそれぞれ 100 万ドル以上を受け取ってきた。罰に関しては、沈黙の掟を破るなど、その家族が脅迫を受けてきた、信頼すべき複数の事例を我々は知っている。また、我々は、最近‘自殺’とされた民間契約企業の二つの事例を知っている。それらは、被害者たちが ET 技術に関係する逆行分析(reverse engineering)の秘密保持義務に違反し始めてから起きたことだった。

資金：議会のある上級調査官が個人的に我々に語ったところでは、‘闇の予算’がこの活動と、やはり USAPS である同様の活動に使われているようだ。この‘闇の予算’は控えめに見て年間 100 億ドル、おそらくは年間 800 億ドルを超えている。UFO/ET 活動だけにどれだけ使われているかは、現時点では不明である。加えて、相当の資金が海外、民間、および様々な機関の財源から引き出されている。これらの活動により調達される額がどれほどになるのかも、我々には明らかでない。

これは現時点で我々が知ったことの一部である。明らかに、ここには答えよりもさらに多くの疑問があり、知られていないことは知られていることを上回る。それでも我々は、この組織の活動形態の理解において、重要で歴史的な前進をしたと思う。この一般的な評価を、私は幾人かの重要な軍関係者、政治家、政策研究機関の人々に見せたが、これがきわめて正確で、彼らが個別に到達した独自の評価と一致すると見なせることに私は驚いた。

しかし、さらに大きな疑問は、なぜ？ である。世の中では一般に、何が、誰が、いかに、は常に、なぜ、よりも簡単である。なぜ、秘密が維持され、偽装が続いているのか？

私はこの危険な方向へあまりにも深入りすることを躊躇する。というのは、我々はここで究極の動機と目的に関係した疑問にのめり込んでいるからだ。それは常に幾分かみどころがない領域であり、最良の場合でも曖昧である。そして、私が思うに、これはありふれた問題などではなく、このような異常な一か八かの行動の背後にある感情、動機、および目的は、おそらく複雑で調和がとれて

いない。実際、そのような動機は、おそらく当初の崇高で善意あるものから邪悪なものまでとても入り組んでいるのだ。

1994年に、バリー・ゴールドウォーター<sup>29</sup>上院議員は私にこう語った：ET問題を取り巻く秘密は“当時の最悪の失敗であり、そして今の最悪の失敗だ...” 私はここで上院議員に同意したいと思うが、秘密に駆り立てるものは、過去においても現在にあっても、そのすべてが愚かさだけであるわけではない。むしろ、それは恐怖と信頼の喪失に根ざしていると私は見る。

大体において私は心理学を軽率に持ち出すのは嫌いだが、この問題におけるすべての心理学的要素は重要だと思っている。私の考えでは、秘密、特にこれほど極端な秘密は、常に病気の症候だ。もしあなたが家族の中で秘密を持っているなら、それは恐怖、不安、および不信から生まれた病気である。これは地域社会、会社、社会全体にまで拡張され得るだろう。究極のところ、秘密に駆り立てるものは、基本的な信頼の喪失と、過剰な恐怖および不安によって生まれた、深い病理の症候である。

UFO/ET問題の場合、1940年代と1950年代の初期の頃は、パニックと隣り合わせの恐怖の時代だったと私は感じている。人類は壊滅的な世界大戦から抜け出す一方で、核兵器の恐怖が放たれたばかりだった。ソ連はその帝国を拡張し、より大きくより破壊的な核兵器で寸分の隙もなく自らを武装していた。そして、彼らは宇宙への競争で我々を打ち負かしていた。

このとき、地球外宇宙機がふと現れる。それは遺体となった生命体(一人は生存していた)と共に回収される。恐怖。混乱。答えの分からない、数え切れないほどの恐怖の疑問がわき起こる。

彼らはなぜここにいるのか？ 国民はどう反応するか？ どうしたら彼らの技術を安全に保管し - また我々の不倶戴天の敵からそれを守るか？ 世界最強の空軍がその領空を統制できないことを人々にどう説明するか？ 宗教的信念に何が起きるか？ 経済秩序には？ 政治的安定には？ 現在の技術の所有者には？ そして...

私の見解だが、秘密の初期の段階は予見可能で理解もでき、おそらく正当化もできる。

だが、数十年が過ぎ去り、特に冷戦が終わると、恐怖だけではこの秘密を説明することができない。結局のところ、2001年は1946年ではない - 我々は宇宙に進出し、月に着陸し、他の恒星系に惑星を発見し、遙か遠くの宇宙に生命を構成する物質を見出し、人口の約50パーセントがUFOが現実であることを信じている。そして、ソ連帝国は崩壊した。

私の考えでは、二つの別の重要な要因が進行中である：貪欲と支配、それと数十年間にわたる秘密の慣性。

貪欲と支配は容易に理解することができる：進歩した地球外技術を解明し、応用するプロジェクトに関与しているありさまを想像してみよ。このような技術の能力と経済的影響力 - したがってその価値 - は、内燃機関、電気、コンピューターチップ、遠隔通信のあらゆる形態を合わせたものよりも大きい。我々は次の千年の技術について語っているのだ。あなたはコンピューター／情報時代

革命を大したものとするか？ シートベルトをしっかりと締めた方がよい。やがて - 遅かれ早かれ - 進歩した ET 技術に基づく非線形、ゼロポイント技術革命が始まる。

疑いもなく、企業、軍産複合体の利害と秘密は、USAPS に関係している政府のそれをさえも凌ぐ。コココーラの製造法など、これに比べたら何物でもない。

大きな秘密活動の官僚的慣性は、さらにもう一つの問題である。活動、虚言、国民への偽装とさらに悪いことの数十年を経て、このようなグループはどうやって自ら織りなしたすべての蜘蛛の糸を解くというのか？ ある種の人間にとり、秘密の権力には確かな中毒性の魅力がある；彼らは秘密を持ち、知ることによって力を得る。そして、この責任者、あの責任者と人々が大声を上げて言い立てる、一種の宇宙版ウォーターゲートになりかねないという不安な見通しがある。よってすべての官僚が熟達しているもの、すなわち現体制の維持がより容易な道となる。

そして、今でさえ恐怖はある。このゲート、あのゲートといったウォーターゲート時代の暴露されることへの恐怖ではなく、よそ者嫌いと未知のものに対する恐怖である。これらの宇宙人は何者か、なぜ彼らはここにいるのか；許可も受けずに、どうして我々の領空に敢えて侵入したのか！ 人類は異なる者、知らない者、よそから来た者に対する恐怖 - および憎悪 - の長い歴史を持っている。人類の世界を荒廃させる、今なお暴れ回っている人種、民族、宗教、国家主義的な偏見と憎悪を見よ。未知の者や異なる者に対する、ほとんど習慣となったよそ者嫌いの反応が存在する。そして、確かに ET は、たとえばアイルランドのプロテスタントとカトリックが異なる以上に、我々とは異なる。

私は一度、UFO に関係した軍事と情報作戦に関わる一人の物理学者に訊ねたことがある。なぜ我々は、宇宙空間に設置した先端兵器でこれらの宇宙機の破壊を試みるのかと。彼はすぐに興奮して、こう言った。“この作戦を実行している連中はとても傲慢で自制心がないので、彼らは我々の領空へ UFO が侵入すると、どれも敵対行動をとるに値する攻撃的なものとみなす。だから、注意を怠ると彼らは我々を惑星間戦争に巻き込むだろう...”

だから、次のように言える。恐怖。未知のものに対する恐怖。貪欲と支配。組織の慣性。これらは、秘密を継続する現在の原動力として私が考えていることの一部である。

しかし、ここからどこに向かうのか？ 極度の秘密主義から公開へと、この事態をどうやって変えるのか？

極度の秘密、特にこれほど遠大で重要なものの秘密は、民主主義を土台から崩し、憲法を覆し、途方もない技術的能力を選ばれてもいない少数者の手に集中させ、惑星全体を危険な状態に陥らせる。これは終わらせなければならない。

政府が議会と協力して公聴会を開催し、そこで現在 400 人を超えるこれらの証人が、UFO/ET 問題について知っていることを公然と証言できるようにすることを、私は提案する。これは必ず決定的な公開になるだろう。その際、あなたが貢献できる方法は二つある：

- 1) 大統領に手紙を書き、これらの証人が安全に名乗り出てこられるように大統領令を発すること

を要請する。それと同時に、あなたたちの上院議員と下院議員に手紙を書き、これらの証人が語る  
ことができるように公聴会を開催することを要求する。

2) もしあなたか、あなたの知っている誰かが、現在または以前の政府、軍、企業の証人であるなら、すぐに私に連絡してほしい。我々は保護手段を整えている。証人が多ければ多いほど主張は強化され、すべての関係者の安全性は高まる。できるなら、どうか我々に力を貸してほしい。

国際社会と国連は同様に、この問題についての公聴会を開催すべきである。我々には世界中からの証人がいる。だから、理想的には国際的な公開と証拠を収集する努力が直ちに開始されるべきである。

国際社会は傍観しているべきではない。それは秘密の活動に対する責任放棄である。CSETIは10年間にわたり市民外交の取り組みに関わってきた。そして、これらの地球外からの訪問者たちとコンタクトする手順の開発において、著しい飛躍を成し遂げた。我々はこれを受け身的に何か遠くの‘現象’として見ているのではなく、これらの生命体との交信を確立することを試みるべきである。そして、公然と惑星間関係の初期段階を開始すべきである。もしあなたが、このような研究と外交の取り組みに関与できるより詳細な方法に興味をお持ちなら、我々に連絡してほしい。

最後に、我々は許す覚悟を持たなければならない。現在または過去のいずれであれ、秘密に関与した人々を厳しく処罰する要求から得られるものは何もない。多くの人々はその当時、正しいことをしていると感じていたのかもしれない。あるいは、現在でさえも。我々に宇宙版ウォーターゲートは不要だ。我々は全員でそれを放棄しなければならない。我々は喜んで今と未来に目を向け、過去を許すべきである。これには先例がある。クリントン政権の初期に、エネルギー省と前の原子力エネルギー委員会内で行なわれた過去の行き過ぎた行為と狂気の実験について、全面的な公開があった。我々は、孤児院の子供たちのオートミールにプルトニウムが混入されたこと、‘何が起きるか’を見るために人口集中地域に故意に放射能がまき散らされたこと、等々を知った。この真実は明らかになったが、世界は終わりにならなかった。誰も投獄される必要はなかった。政府は崩壊しなかったし、天は落ちてこなかった。前進しようではないか、幾らかの本当の同情と寛容とを持って。そして、この世紀を新たに始めようではないか。

つまるところ、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造し、全世界と惑星間の平和の基礎を打ち立てるためには、勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならない。我々の未来が奪われているときに、それを無視することはあまりにも危険な賭けである。地球の生命の未来と宇宙における我々の立場は危険に曝されている。共に、それを守るために働こうではないか。我々の子供たちと、その子供たちのために。

-----  
29) See a letter by Senator Goldwater in 1975 indicating his interest and frustration with this subject in Appendix I (Document AI.2).  
-----



### 3.5 UFO/ET 問題に関するプロジェクトと施設

著作権 1998 スティーブン・M・グリア医師, 議会のために準備, 1996年8月30日

#### エドワーズ空軍基地と関連施設

#### **EDWARDS AIR FORCE BASE AND RELATED FACILITIES**

政府施設:

Government Facilities:

エドワーズ空軍基地

Edwards AFB

ヘイスタック・ビュート

Haystack Butte

チャイナ・レイクス

China Lakes

ジョージ空軍基地

George AFB

ノートン空軍基地

Norton AFB

テーブル・トップ・マウンテン観測所 (NASA)

Table Top Mountain Observatory (NASA)

ブラックジャック・コントロール

Blackjack Control

航空宇宙諸施設

Aerospace Facilities

ノースロップ“アントヒル”(テホン・ランチ)

Northrop "Anthill" (Tejon Ranch)

マクドネル・ダグラス・リャノ工場

McDonnell Douglas Llano Plant

ロッキード・マーチン・ヘレンデール工場

Lockheed-Martin Helendale Plant

フィリップス研究所(ノース・エドワーズ施設)

Phillips Labs (North Edwards facility)

#### ネリス複合施設

#### **THE NELLIS COMPLEX**

エリア 51/S4

Area 51/S4

パヒュート・メサとエリア 19

Pahute Mesa and Area 19

グルーム・レイク

Groom Lake

## ニューメキシコ施設

### NEW MEXICO FACILITIES

ロスアラモス国立研究所

Los Alamos National Laboratories

カートランド空軍基地

Kirtland Air Force Base

サンディア国立研究所 (SNL), 防衛原子力局

Sandia National Laboratories (SNL), Defense Nuclear Agency

フィリップス研究所

Phillips Labs

マンザノ・マウンテン兵器貯蔵施設, および地下複合施設

Manzano Mountain Weapons Storage Facility, and underground complex

コヨーテ・キャニオン実験場 (マンザノの北端)

Coyote Canyon Test Site (N. end of Manzano)

ホワイトサンズ複合施設

White Sands Complex

## アリゾナ

### ARIZONA

フアチュカ基地, 地下貯蔵施設

Fort Huachuca, underground storage facility

フアチュカ基地近くの国家安全保障局と陸軍情報局の複合施設, 地球外宇宙機と以前に検視解剖された地球外生命体が貯蔵されている地下施設

NSA and Army Intelligence complex near Ft. Huachuca, underground storage of extraterrestrial spacecraft and previously autopsied extraterrestrial life forms

## その他

ユタ地下複合施設, ソルトレーク市の南西, 空路でのみ接近可能

Utah underground complex southwest of Salt Lake City, accessible only by air

レッドストーン兵器庫地下複合施設, アラバマ

Redstone Arsenal underground complex Alabama

ローレンスリバモア研究所

Lawrence Livermore Labs

シャイアン山コロラド深宇宙ネットワーク, UFO追跡の制御を目的とする。

Cheyenne Mountain Colorado Deep Space Network, dedicated console for tracking UFOs

## 現在または過去に関与した米国政府機関

### US Government Agencies with Current or Past Involvement

(活動は超機密 USAPS - 認められざる特殊接近プロジェクト - に区画化されている。つまり, 指揮系統上の高官を含む誰にも認められていない)

国家偵察局

NRO (National Reconnaissance Office)

国家安全保障局

NSA (National Security Agency)

中央情報局

CIA (Central Intelligence Agency)

軍情報部門(陸軍, 空軍, 海軍)

Military Intelligence divisions (Army, Air Force, Navy)

空軍特別捜査局

Air Force Office of Special Investigations (AFOSI)

国防総省国防高等研究事業局

DARPA (Defense Advanced Research Projects Agency)

連邦捜査局

FBI (Federal Bureau of Investigation)

宇宙軍

Space Commands

その他

#### 関与していると信じられている民間企業組織

#### **Private Corporate Entities Believed To Be Involved**

ノースロップ・エアロスペース

Northrup Aerospace

ボーイング・エアロスペース

Boeing Aerospace

ロッキード・マーチン(デンバー研究センターを含む様々な施設)

Lockheed Martin (various facilities including Denver research center)

ビー・ディー・エム

BDM

イー・システムズ

E Systems

イー・ジー・アンド・ジー

EG&G

ワッケンハット社

Wackenhut Corp.

ビレッジ・スーパーコンピューティング, アリゾナ州フェニックス

Village Supercomputing, Phoenix AZ

フィリップス研究所

Phillips Labs

マクドネル・ダグラス社

McDonnell Douglas Corp.

ティー・アール・ダブリュー

TRW

ロックウェル・インターナショナル

Rockwell International

ブーツ・アレン・アンド・ハミルトン社

Booz-Allen and Hamilton, Inc.

マイタ社

MITRE Corp.

サイク社

SAIC (Science Applications International, Inc.)

ベクテル社

Bechtel Corp.

その他

### 3.6 秘密の存在を語る証言

スティーブン・ラブキン： 弁護士

Attorney Stephen Lovekin

“だが、起きたのはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。彼は国民に向けた最後の演説で、用心しないと軍産複合体に後ろから刺されると語っていたのだと思う。彼は油断していたと感じたのではないか。彼はあまりにも多くの人間を信用しすぎたと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。彼は善良だった。そして、あるとき突然、この問題が企業の管理下に入って行きつつあることに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった”

“私の記憶では、この失意は何箇月も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。この現象というか、とにかく我々が直面していたものに関して、最適な管理がなされそうにないことを彼は悟った。私が思い出せる限りでは、‘最適な管理がなされそうにない’という言い方だった。本当に心配していた。そして、結果はそのようになった”

“もし私がこれについて話したなら、軍の人間である私に何が起きるか、このことを私は多くの機会に議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。彼らは実によい仕事をしたと思う”

“ある古参将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されるということについて話していたので、私は‘その、消されるとはどういう意味ですか？’と訊いた。そうしたら、彼はこう言った。‘だから、君は消される、姿を消すことになるんだ’ 私はさらに訊いた。‘あなたは どうしてそんなことを知っているのですか？’ 彼の答えは次のようなものだった。‘私は知っている。こうした脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するように任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた’”

“あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くても勇気があろうと関係ない。その状況はまさしく恐怖と言える。マット[この古参将校]がこう言ったからだ。‘彼らが追うのは君一人だけではない。彼らは君の家族につきまとうだろう’ 彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることはこうだ。彼らは恐怖に陥れることで、それをこんなにも長い間秘密にしてきたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ”

メルル・シェーン・マクダウ： 米国海軍大西洋軍

Merle Shane McDow: US Navy Atlantic Command

“その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げて、こう言った。‘あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください’ 彼らはまったく乱暴だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のように言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことは

この建物から消える。‘君たちはこれについて同僚に一言も言ってはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れる。何も起きなかったんだ’”

**チャールズ・ブラウン中佐：米国空軍**

Lt. Col. Charles Brown: US Air Force

“おかしなことだが、我々は犯罪の目撃証言により人々を投獄し、死に追いやる。我々の法制度はかなりの程度このことを基礎にしている。しかし、私が過去 50 年間に異常空中現象を追いかけてきた中では、とても信頼のできる証人たちが何か未確認のものを見たと言ったとき、彼らの信用を失わせしめる何かの理由があるようだ”

“我々の政府の中にデータ操作を行なうことのできる機関があることは確かだ。そこでは[何でも好きなように]拵えたりつくり直したりすることができる。飛行物体、知的に操作されている飛行物体は、この地球上の我々の物理学法則に基本的に違反してきた。しかも長い間そうしてきた。政府が現時点で - 我々はそれを 1947 年から調査してきた - 答えを持っていないことは、何か深刻な裏事情があることを示しているように私には思われる。我々はそれほど科学において無能だろうか？ そうは思わない。我々の知能はそれほど劣っているか？ それほど劣っていないことは確かだ。さて、コンドン博士のグループにより中止されたブルーブック計画だが、これはまったくの取り繕いだった。私にはそう信ずべき十分な根拠がある”

“UFO は長期にわたり調査されてきたが、一般社会はそれについて完全には知らされていない - ほんの断片、予め決められた対応、そんなものだけが与えられている”

**“B 博士”**

“Dr. B.”

“一緒に働いていた何人かの人がある計画の途中で消えてしまい、消息を絶ったことを私は知っている。彼らは文字どおり消えた。私の仕事の全期間を通じてその証拠がある。その人たちはプロジェクトのために出ていった[そして消えた]。しかし、[これから身を守るために]私はプロジェクトのためにどこにも行こうとしなかった。何か奇妙なことが起きていると分かったからだ。そうして、多くの人々が本当に消えてきたのだ。彼らは上の人たちだ”

**ジョナサン・ウェイガント上等兵：米国海兵隊**

Lance Corporal Jonathan Weygandt: USMC

“‘お前はそこにいてはならなかった’ ‘お前はこれを見てはならなかった’ ‘お前を行かせたら危険だ’ 彼らは実際に私を殺そうとしていたのだと思う”

“そこには空軍から来た一人の中佐がいた。彼は名前を名乗らず、私にこう言った。‘もし我々がお前をジャングルに連れ出したら、誰もお前を見つけれないだろう’ 私は彼が本当にそうするかどうか確かめたくなかったので、ただこう言った。‘はい’ すると彼は、‘お前はこれらの書類にサインしなければならぬ。お前は決してこれを見なかった’ と言った。お前はそこに‘いなかった’し‘こ

れは決して起きなかった’。もしお前が誰かに喋ったら、ただの失踪ということになるだろう”

“私に向かって怒鳴り、大声を上げ、悪態をついた。‘お前は何も見なかった。我々はお前と忌々しいお前の家族に何でもするぞ”

“この状態がおよそ 8, 9 時間続いた. . . ‘お前を連れ出してヘリに乗せ、尻を蹴飛ばしてジャングルに突き落とし、お前を殺す”

“これらの様々な機関は独立している。彼らは法に従わないならず者だ。これが政府によるプロジェクトで、皆が認めるものかって？ 違う。この連中は勝手に行動しているだけで、誰もそれを知らない。今の世の中で、それはこんなにも簡単なことなんだ。何の監視も何の統制もない。彼らはまったく好き放題にやっているんだ”

“殺人を請け負う、恐ろしい部隊が動員されてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出て行ってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍空挺部隊の狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース(\*陸軍特殊部隊)を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせるのだ”

**ジョージ・A・ファイラー三世少佐：米国防空軍**

Maj. George A. Filer, III: US Air Force

“私は時々核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことには気持ちが慣れていたが、UFO を見ることに関してはそうではなかった。この批判、この嘲笑こそが、真実が明るみにならないようにするためのほぼ最良の方法だった”

**ニック・ポープ：英国国防省職員**

Nick Pope: British Ministry of Defense Official

“政府と軍、さらに民間の研究者、政治家も - 誰であろうと - この問題については、あらゆることを社会共有のものとするべきだ。私はそう思っている。政府は矛盾することをしてはならない。公式見解がしばしばそうであるように、一方で UFO は防衛上何の重要性もないと言いながら、他方ではデータの一部分を隠しておくなどということをしてはならない”

“それは絶対にしてはいけない。どちらか一方だ。政治家がこの問題に探りを入れたりメディアが問い合わせたりしたとき政府が決まって言うように、もし心配することが本当に何もないなら、そのすべてのデータを見てみようではないか”

**ラリー・ウォーレン：米国防空軍、保安兵**

Larry Warren: US Air Force, Security Officer

“我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはな

い！ 彼は排除されたのだ。これは多くの人に起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も 1 件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ”

“我々が連れてこられたとき、机の上には書類があった。我々は全部で十人くらいだった。そこには一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つの山積み書類があり、それらはすでにタイプされていた。その一つは我々が見たもの - 我々が見たものではなかった - についての予めタイプされた陳述書で、すべてが一般的な内容だった。それには、我々は非番であり、木々の間を飛び跳ねていた未知の光を見ただけだと書いてあった。私はそれをはっきりと覚えている。私は、もしこれにサインしなかったらどうなりますか、ツイックラー少佐？ と訊いた。すると彼は、君に他の選択肢はないと言った。そして彼は、私には君たちにそうしてくれと言う以外にないのだと言った”

“我々のそれぞれに二人の男が背後から近寄ってきた。誰かが彼に向かって歩いていったのを確かに覚えている。そしてエアゾールスプレーのような音が聞こえ、目の前が真っ暗になった。私はやたらと涙(はな)が出て胸が苦しかった。私はどう見ても車の中でおとなしくなかったのもので、暴行を受けた。まさにあばらを殴打され、ど突かれ... とにかく、私はその 20 分間だけは覚えているが、まる一日気を失っていた。話は他の隊員の間でも知られていた。皆は、私が緊急休暇か、休暇か、あるいは基地を離れていたのだと話していた。しかし私は他でもない基地の地下にいたのだ。そこには他の隊員たちも降ろされていた... ところで、そこから出てきたとき、私には静脈注射か何かの跡が付いていた。私には青あざがあり、包帯が巻かれていた。私はそれを認める。本当のことだ。私には跡があった。私は自分に起きたかもしれないことを考えたり知ったりするのが恐ろしい”

“私が自分の履歴書を持っているただ一つの理由は - ある空軍大佐から - 履歴書の一部をこっそり抜いておけと忠告されたからだ。彼が言うには、彼らは私を蒸発させるかもしれないということだった。‘彼らは君を無害なものにしようとしている’と彼は言った。私はまるでフランク・セルピコ(\*ニューヨーク市警の刑事)か何かのように見られていた。私は組織型人間ではなかった。なぜなら、私は誰にでも話したからだ”

“不幸なことに、私の友人アラバマは無許可離隊(AWOL)をし、家に帰ろうとした。しかしオヘア空港で FBI に捕まり、直ちに任務に引き戻された。彼の望みは家に帰ることだけだったが、再び飛行任務に戻された。私は何もかも嫌になって完全に意気消沈し、上級曹長と一緒に車でパトロールしていた。そのときアラバマ - これは実在の人物だ - から無線が入り、彼は家に帰れなければ自殺すると言った。彼は小型トラックの向きをいきなり変え、柱に向かって突っ込んでいった。彼は‘無線をそのままにしておいてくれ...’と言った。私には駐機場にいた全部隊がこれに応答したのが分かった。とにかく、アラバマは M16 ショート(\*自動小銃の一種)を持っていた。彼はそれを口にくわえ、自分の頭頂を吹き飛ばした。私が死を目撃したのはこれが最初だった。19 歳の非業の死。私と彼は夜と昼ほど違った。つまり - 彼は南で私は北だ。彼はとても信心深かった。私はそれに敬意を払っていたが、我々に共通なものは何もなかった。彼はいいヤツだった。そして、彼らは我々の助けになることは何もしなかった...”

**クリフォード・ストーン軍曹：米国陸軍**

Sgt. Clifford Stone: US Army



“UFO について論じるとき、最後はこの疑問に行き着く。米国はもちろん、どの政府でも、秘密は隠しておけるものか？ その答えは、はっきりとイエスだ。だが、情報関係機関が使えるきわめて強力な武器の一つは、米国民、米国の政治家、暴き屋(デバンカー) - UFO 情報の嘘を何とかして暴こうとする人々 - が持つ傾向だ。彼らはすぐに出てきて、こう言う。我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない。では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ”

“国家偵察局(NRO)は何年もの間秘密のままだった。NSA(国家安全保障局)があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった”

“そして我々は、自らの理論的枠組みにより、高度に進歩した知的文明が我々を訪問するためにやってきているという可能性または確率を、受け入れないように条件付けされている。きわめて信頼できる物体の目撃報告、それらの物体内部にいた生命体の目撃報告という形で、証拠は存在する。それでも我々は平凡な説明を探し求め、自らの理論的枠組みに合わない証拠の数々を投げ捨てる。だから、それは自らを守ることでできる秘密なのだ。それはありふれた風景の中に隠される。情報機関に出かけていき、この情報を出せとせがむのは、政治的自殺行為だ。私はその方針で彼らの多くと協力してきたから分かるが、議会の大部分の議員は尻込みし、それをさせないようにするだろう。ロズウェルで起きたことについて、議会の調査を単刀直入に要求した三人の議員の名前を挙げることができる”

“政府のファイルにそれはあるのだから、我々はその資料を入手する必要がある。そしてそれが最終的に破棄されてしまう前に、それを公開させなければならない。一つの好例がブルーフライとムーンダストのファイルだ。私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私がさらに多くのファイルを公開させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明することができる”

“そのどこかの段階で、彼らはその資料を見るかもしれない。そして、もしそれが漏洩の危険に曝されたら米国の国家安全保障に深刻な影響を与える、何かきわめて機密性の高い情報があることを知るかもしれない。少数の人々だけがそれに接近できるようにするために、その情報はまだ保護される必要がある。彼らはあまりにも人数が少ないため、1枚の紙に名前を書けるほどだ。こうして、特殊接近プログラムが存在することになる。特殊接近プログラムにあるはずの管理はそこにはない。文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった。信じてほしい、そのすべてを管理統制することなど、本質的に不可能なのだ”

“さて UFO の場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の 100 人以下の小さな核、いや私はそれが 50 人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。だから、議会はその核心に迫った質問を掲げ、公聴会を開催することに踏み切る必要があるのだ”

**ダン・モリス曹長： 米国空軍, 国家偵察局諜報員**

Master Sgt. Dan Morris: US Air Force, NRO Operative

“私はその情報を調査し、収集するグループの一員になった。当初、それはまだブルーブック、スノーボード、その他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たとき主張したとき、私は彼らを訊問し、彼らが何も見なかったか、見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それがうまくいかなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける。彼らとその家族を脅したりする。彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。それでも効果がなかった場合には、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ”

**A・H: ボーイング・エアロスペース社員**

A.H.: Boeing Aerospace Employee

“ワシントン D.C.のある CNN 記者が、ゴルバチョフが 2 度目にアメリカに来たときに、ゴルバチョフとその夫人にインタビューをすることができた。彼らは通りに出てきてその警護特務隊をイライラさせた。CNN 記者がゴルバチョフに‘核兵器を全廃すべきだと思いますか?’と質問した。そうしたら夫人が進み出て、‘いいえ、異星人の宇宙船がいるから、私たちの核兵器をすべて廃棄すべきだとは思わないわ’ こう言ったのだ”

“さあ、この話を CNN はヘッドラインニュースで半時間にわたり放送した。私はこれを聞いて飛び上がり、次の半時間を記録するために空のテープを入れた。ところが何と、この話は消えてしまったのだ。誰が妨害したか、あなたはご存じだ。それに関与したのは CIA だった。なぜなら、彼らは CNN と全世界のヘッドラインをそのとき監視していたからだ。彼らはそれを踏みつぶした。しかし私はそれを聞いていた。これで私は、NSA の情報源から入手したロナルド・レーガンに関する情報が正しかったことを知った。私に言わせれば、この秘密保持のやり方はまったくの行き過ぎだ。議会はこの情報について知る必要がある”

“彼が言うには、目撃を最小限に減らし、メディアと目撃情報をメディアに報告してくる目撃者を抑えるために、彼らはこれに蓋をしようとしている。空軍はこのことを絨毯の下に押し込み、研究を続けてそれをまさに掌握したいと考えている。彼は次のことを認めた。空軍は、これらの目撃が大学生のいたずら、気球、気象現象などによるものだという馬鹿げた考えにメディアを誘導しようとしている”

“機密の保全に関して彼はこう言った。もし軍関係者がこれについて喋ったら、その者は軍法会議にかけられるか、少なくともそのようになると脅される。別の脅迫は、給料小切手を取り消すか、アラスカのような大抵の人間が行きたがらない基地に転勤させるといったものになるだろう”

“基本的に、これらのプロジェクトは MJ-12 (マジェスティック 12) グループにより統制されていた。もうこれは MJ-12 とは呼ばれていない。私はこの組織の新しい名前を見つけようとしている。エア 51 で働いていた私の接触者はこの組織の名前を知っているが、それを私に言うのを拒んでいる。要するに、これはワシントン D.C.の国家安全保障会議および国家安全保障企画グループと交わり合った一つの統制組織だ。あらゆること管理統制を行なう国家安全保障企画グループと呼ばれ

るグループがある。MJ-12 はこれらの人々、国家安全保障企画グループと交じり合っている”

“彼らは完全な統制力を持っている。彼らは今起きていることを大統領に知らせる。すると大統領はそれを認可するか、単に‘やってくれ’と言うだけだ。彼らは完全な統制力を持っている。彼らに議会の監視はまったく及ばない。彼らは誰に対しても答えない、米国大統領以外には。しかし、私が理解したところでは、その大統領をさえも締め出そうとしている”

“大統領は、もはやこれらのグループに対してそれほどの統制力を持たない。それはまるで別の組織だ”

**アラン・ゴッドフリー警察官：英国警察**

Officer Alan Godfrey: British Police

“事件の後で起きたことに、私は本当に驚いた。私の人生はあっという間にひっくり返ってしまった。のんきな男が 6 箇月の間に地獄を経験させられ、想像もできないような惨めな人間になってしまった。その原因は他でもない、嫌がらせ、圧力、虐待、ありとあらゆるものだ。私は実際にそれを経験したのだ”

**カール・ウォルフ軍曹：米国空軍**

Sgt. Karl Wolfe: US Air Force

“私はそれ以上それを見たくなかった。命が危険に曝されていると感じたからだ。言っていることがお分かりか？ 本当はそれをもっと見たかったし、それをコピーしたかった。それについてもっと話し、議論をしたかったが、それはできないと分かっていた。これを私に話していた若い同僚は、完全にその時点での限度を踏み越えていた”

“彼は誰かに話さずにはいられなかったただけだと思う。彼はそれについて議論しなかったし、できなかった。彼がそうしたのは、このことの重圧を受けて苦しんでいたからで、それ以外に何の意図もなかったと思う”

“私は軍を辞めてから少なくとも 5 年間は、行き先がどこであれ、その居場所を国務省に知らせずに出かけることはできなかった。旅行するときには、いつも届け出て許可を得なければならなかった。米国内でさえそうだった。私がどこにいるか、常時彼らは知っている必要があった。たとえば、もし我々がベトナムに行くとすれば、いつも銃を持った何者かが我々と一緒にいる。もし我々が敵の手に落ちるようなことになれば、彼らは基本的に我々を消す。彼らは敵が我々を捕まえることを望まない；その代わりに我々を殺すのだ”

“我々はこのような条件下で作戦に従事していた。もし悪いヤツらの手に落ちたらと、我々の命は常に危険に曝されていた。そのことを我々は認識していた。私は軍を辞めるとき、こう言われた。私が政府のためにならない何かおかしな活動に関わっていないかを確認するために、定期的な調査が行なわれると”

**ドナ・ヘア: NASA 契約業者従業員**

Mrs. Donna Hare: NASA Employee

“何人かの男が私の前に姿を現し、これについて話しては駄目だと告げたときがあった。彼らは殺すとは言わなかったけれど、これについて話してはいけないというメッセージだと私は理解した。しかし私はそのときにはもうあちこちで話していたので、もはや何の意味もなかった。私が[1997年の CSETI]議会説明会で話したように、この話題はまるでセックスと同じだと感じ始めていた。誰もが知っているけれど、男女同席では誰も口にしない。私は安全な議会公聴会が開催されればもっと話す用意ができています。私はグリア博士を信用している。これまで博士は、身の安全や私が話した秘密に関する限り、すると言ったことは全部してきた。必要で適当な時期にそれが明るみに出て、何かの役に立つことを私は望んでいる。うろつき回ってこれらの人々を排除したり、傷つけたり、身柄を拘束したり、脅して引っ越しさせるようなことをしないでほしい。私が知っているこの人物は、この地球上から姿を消した。その人は消えた。私はそういうことにだけはなりたくない”

**ジョン・メイナード: 国防情報局職員**

Mr. John Maynard: DIA Official

“この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これについてはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党 (beltway bandit) (\*ワシントン D.C.の環状道路沿いに事務所を構え、主に米国政府との事業契約を助けるコンサルタント)だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW, ジョンソン・コントロール, ハネウエル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事、活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは‘環状道路沿いの悪党’になるためにペンタゴン(国防総省)の人々によってつくられた組織で、ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために、プロジェクト、助成金、資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために、何が行なわれているかを知る人間は四人ほどにすぎなかっただろう。それほど、それは嚴重に統制されていた”

**ロバート・ウッド博士: マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者**

Dr. Robert Wood: McDonnell Douglas Aerospace Engineer

“ご存じかもしれないが、これらの機密計画の一つに接近を許されると、特別なバッジをつけ、その部屋にいる誰とでも大変率直に話ができるようになる。そして心のつながりを持ったグループの一員のように感じる - そこには大きな仲間意識が形成されている。こうして、その特別な資料庫を利用することが可能になった。そこで我々にできることの一つは、空軍が運営する資料庫に行って、いわば遠慮なく極秘資料を渉猟することだ。私は UFO に関心があったので、やるべき通常の仕事があったときにはついでに彼らの資料庫を覗き、彼らが UFO についてどんな資料を持っているのかを知ろうとした。約 1 年の間に、私は様々な報告書の中にこの問題に関する相当数の資料を見つけ出していた。そうしたら、まったく突然にその問題の全資料が消えてしまった。その問題の分類全体がまさに消えたのだ。一緒に働いていた我々のグループの資料庫係は、この資料庫に 20 年間いるが何事も正常だったと言った。そしてこう言った。‘これは異例のことだ！ こんなことは初め

てだ。君は一つのテーマをまるまる失った。それは君を逃れて消えたのだ。君は何かを探り当てた”

“そうこうしている間に、もう一つ別のことが起きた。それはジム・マクドナルドとの付き合いから生じた。私はヤツが好きだった。彼は実に精力的な物理学者で、何事にも躊躇しなかった。彼はある事実をつかむと、何としても専門家の学会で圧倒的に説得力のある話をしようとした。彼は、米国航空宇宙航行学会と米国物理学会でよく話したものだ。私はたまたま両方の会員だったので、彼が町に滞在しているときにはいつも車で迎えにいったり付き添い、彼が歓迎されていると感じられるようにしてやった”

“あるとき私は、旅行で彼の住んでいたツーソンを通りかかった折にそこに立ち寄った。私には 2 時間の飛行機の待ち時間があった。彼は空港に出てきて私とビールを飲んだ。私は‘何か新しいことはないかい、ジム?’と言った。彼は‘どうやらつかんだらしい’と言った。私が‘何をつかんだんだい?’と訊いたら、彼は‘答えをつかんだようだ’と言うじゃないか。だから私は‘それは何だい?’と訊いた。彼は‘まだ君には話せない、確かにつかんだんだ’と言ったのだ。彼が拳銃自殺を図ったのはそれから 6 週間後だった。数箇月後、彼はとうとう亡くなった”

“我々の防諜活動員が用いる技法について、私には今思い当たることがある。ジムに自殺を決心させる能力を、彼らは持っていたのだ。それが事の真相だったに違いない...”

“この問題を効果的に制御しようとしたら、あらゆる段階でそれを行なう必要があるのは明らかだ。最もはっきりしている段階はメディア(情報媒体)だ。だから、あらゆる種類のメディアに目を配る必要がある。映画、雑誌などだ。言うまでもなく、初期の頃は新聞、映画、雑誌がすべてだった。今や我々はインターネットやビデオなど、他のあらゆる種類の媒体を持っている。しかし、これらの分野の技術が進歩するのに伴い、この制御を心配する者たちが、媒体と共にまさにこの分野に入り込んできている。こうして、新しい媒体が出現するたびに、彼らはそれに対応する新しい制御手段を持つのだ”

#### **グレン・デニス: ニューメキシコ UFO 墜落目撃者**

Glen Dennis: NM UFO Crash Witness

“軍警察の一人が私を脇に連れていき、はっきりとこう言った。いいかお前さん、ここを出て行って噂を広めるんじゃないぞ。ここでは何も起きなかった。もし何かしたら、分かっているだろうが、深刻なことになるぞ。そのとき私はやや憤慨していたので、こう言った。私は民間人だ(\*手出しはできないはずだ)、地獄に落ちろ。すると彼はこう言い放ったのだ。地獄に落ちるのはお前だ。もし話したら、誰かが砂の中からお前さんの骨を拾うことになるぞ”

#### **レオナード・プレツコ軍曹: 米国空軍**

Sgt. Leonard Pretko: US Air Force

“軍隊では人を馬鹿にすることがよくあり、私はこれらの UFO 事件で何度か馬鹿にされた。私が言われたのは、もしこのくだらないことをまた言い出すなら、決して曹長にはなれないということだ”

た。私の上司はこう言った。‘もし君がこの馬鹿げたことにいつまでも拘るなら、君は曹長に昇進できない。君は技能軍曹にはなるだろうが、曹長にはなれない。君は軍隊から追い出されるだろう’”

**ロベルト・ピノッティ：イタリアの UFO 研究者**

Dr. Roberto Pinotti: Italian UFO expert

“おそらく世界中の至る所に、この秘密を隠している見えざる組織と繋がる、見えざる鎖の輪がある。彼らはこの問題に研究の観点から取り組んでいる。その目的は、利益を上げ、様々な分野に応用する技術を獲得することだ。UFO 問題は科学の問題であるだけではない、諜報の問題でもあるのだ”

“これは UFO を取り巻く現実の重要なもう一つの側面だ。これを理解し始めると、多くのことが理解できるようになるだろう。なぜなら、このすべては権力に関係しているからだ。あらゆる権力、あらゆる国の、あらゆる政府の、あらゆる状況の権力だ”

**ポール・シズ博士：マクドネル・ダグラス専門技術者**

Dr. Paul Cysz: McDonnell Douglas Career Engineer

“闇の予算の世界はあの親しげな幽霊キャスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいのか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても - たとえインターネット上で論じられていたとしても - 彼らは‘知らない、あなたは何を言っているのか’と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、依然としてあなたが言っていることを知っているときえ決して認めないだろう。あなたには見当もつかないことだが、たぶんそれはあなたが考えるよりも巨大だ”

**エドガー・ミッチェル：宇宙飛行士**

Astronaut Edgar Mitchell

“だが、それはこれまで真実が露見しないように注意を逸らし、混乱をつくり出すための偽情報工作の対象だった。偽情報工作は、事実を隠すためのまさしくもう一つの方法なのだ。それはこの 50 年ほど一貫して行なわれてきた：何らかの墜落機を隠蔽するためのロズウェル上空の気象観測用気球。これが偽情報工作だ。我々はそれを 50 年以上見てきた。これは何かを隠すための最良の方法だ”

“どんな活動が行なわれていようとも、それが秘密の、準政府的な、準民間のグループである限り、私が知る範囲では政府によるどのような種類の監視も伴わない。これこそが大きな懸念なのだ”

**ジョン・キャラハン：米国連邦航空局事故調査部長**

John Callahan: FAA Head of Accidents and Investigations

“質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。‘この事件は

決して起きなかった。我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった’”

“それは CIA から来た一人だった。彼らはそこにいなかったし、この会合もなかったと。そのとき、私は言った。‘しかしあなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこには何かがあった。それがステルス爆撃機でないなら、ご存じのとおり、それは UFO だ。そしてもしそれが UFO なら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか?’”すると彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にする事さえ考えてはならない。1機の UFO が 30 分間レーダーに捉えられたデータは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何もので何が実際に起きていたのか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対して UFO にそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいけない。そして彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした”

“さて、届いた報告書を彼らが読んだとき、FAA は自らを守ることを決めた - 彼がそう言ったのだとしても、目標を見たと言ってはならない。彼らは彼にその報告書を修正させ、それが目標 (target) ではないように聞こえる‘位置記号 (position symbol)’”という言葉を使わせた。こうして、もしそれが目標でないなら、我々が[レーダー上で]識別している他の多くの位置記号は、どれも目標ではないことになる。それを読んで私は驚き、何やら胡散臭いものがあると考えた。誰かが何か、あるいは誰かを恐れている、彼らは隠蔽しようとしている”

“CIA が我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあつたあれがあつたという類のニュースを流すものだ”

“こうして、私は FAA で多くの隠蔽に関与してきた。我々がレーガン政権のスタッフに報告したとき、私はそこにいたあのグループの後方にいた。彼らがその部屋にいた人々に話していたとき、彼らはその人々に、これは起きなかったと誓わせた。だが、彼らは‘私’にはそれを誓わせなかった。私をいつも悩ませたのは次のことだった。我々はこれらのことを行なわれるままにしている。人々がラジオやテレビで何かを見たり聞いたりしても、ニュースはそれを取り上げない。なぜなら、それは存在しないからだ。何も言わないことが私には苦しかった”

**マイケル・スミス: 米国空軍レーダー管制官**

**Michael Smith: US Air Force Radar Controller**

“NORAD [North American Air Defense Command (北米防空軍)] はこれを知っている。彼らは NORAD を呼んでいた。上級下士官が私を脇に引っ張り、NORAD はこれを知っていると - 我々が知らせる相手は彼らだけだ。我々はこれについて語らない。我々はこれについて誰にも話さない。知っている人は知っている。我々はただ監視し、何が起きるかを見る、それだけだ。それが我々の仕事だ。私は、報告書か何かに記録すべきではないのかと主張した。すると彼は、君が提出する報告書ならあると言った - それは約 1 インチの厚さがあり、最初の 2 頁は目撃に関することだ。残りは基本的に君の心理分析結果、君の家族、君の血縁関係、その他あらゆることが書かれていると”

“空軍がそれに目を通せば、君は麻薬をやっていたとか、母親は共産主義者だったとか、その他信用を落とせるものは何でも使って、君の信用を完全に落とすことができる。君は決して昇進できない。君は向こう 3 年半北極でテント暮らしをし、気象観測気球のおもりをすることになる。昇進の望みはないのだ。だから、そのメッセージはきわめてはっきりした明瞭なものだ：ただ口を閉ざし、誰にも何も言うな”

“私のもう一つの経験は第 3 当番で起きた。私がレーダーに向かっていて、NORAD から連絡があった。NORAD は、カリフォルニアに近づいている UFO が 1 個あり、それは間もなく私の受け持ち範囲に入るだろうと言った”

“‘どうすればよいか’と私は訊いた。彼らはこう言った。‘何もない、ただ注視せよ、それを記録するな’ 我々には 1 冊の日誌があり、それには異常なことなら何でもその経過を記録することになっている。しかし彼らは‘それを記録するな、何も書くな。だまって注視せよ。我々は今君にただ知らせしているだけだ - 注意せよ’と言った。NORAD は、これらの UFO が動き回っていることに明らかに気付いていた。私がレーダーで初めて UFO を見たとき、人々の行動はまるでそれがいつも起きているかのようなものだった”

“政府、彼らは隠蔽する。彼らは誰かがそのことについて話すのを望まない。しかし、それは本当に驚くべき技術なのだ。これらの人々は、どこにも知れない場所からやってくる。思うに、彼らは皆に知ってもらいたいのではないか...”

“個人的な話をすれば、オレゴン州で起きた最初の事件の後、私は休暇をとって帰省し、そのことを父親に話した。彼はその間ずっと赤くなったり、蒼白になったり、青ざめたりしていた - かつての第二次大戦の英雄であり、大変な愛国者だ。私は、これらの UFO が日常的に目撃されると説明していた。父はこう言った。‘いや、政府は UFO なんていないと言っている’ 私は父に、これらをレーダー上で自分の目で見たんだと言った。そうしたら父は、いいかげんにしろ、政府は私に絶対嘘をつかないと言った。だが、ここにいるのはその息子だ；私は父に決して嘘は言わない”

“そうしたら、父はどうしてよいか分からなくなった。彼が私にこう言ったのは、数年後ウォータージェット事件が終わった後だった。‘お前、ここに座って私にそれを話してくれるか？ 政府はウォータージェットのような小さなことについて私に嘘をついていた。だから、彼らは何か大きなことについても嘘をついているに違いない’”

“それはもはや必要のない、政府の隠蔽活動だ。冷戦はすでに終わった。私はグリア博士と同じことを考える。つまり、彼らが持っている技術は化石燃料の燃焼、オゾン層の破壊などをやめさせることができるだろう。これらの人々は技術を持っている - 何か持っているに違いない。政府はそのことを知っている。彼らはこれらの異星人、これらの宇宙機、この技術、そのすべてを所有している。多くの逆行分析技術 (back-engineered technology) があることは、きわめて明白だ。他の政府が前向きに取り組み、それを認め、彼らのファイルを開示しているときに、これを隠蔽している者たちは誰か - 我々の政府はなぜそれをしないのか？”

**フランクリン・カーター：米国海軍レーダー技術者**

Franklin Carter: US Navy Radar Technician



“彼らは、我々が見ていたものを誰にも知られなくなかった。これが隠蔽の始まりだと私は考えている。こうして、それは手に負えなくなった”

“だが、今日の社会からそれを隠し続けている人々は、米国人だけだということを私は知っている。他の誰もがそれを知っており、受け入れている。そもそも英国と米国以外のすべての政府は、それを受け入れている”

“これが続いているのを見るのは、私個人としてもとても苛立たしい”

**ニール・ダニエルズ： ユナイテッド航空パイロット**

Neil Daniels: United Airlines Pilot

“これまで物体を目撃し、それを話したパイロットたちは解雇された。何人かは飛行から外され、変人扱いされたりした。だから、そのことについて私は何年もの間口をつぐんでいた”

**フレデリック・マーシャル・フォックス大尉： 米国海軍パイロット**

Lt. Frederick Marshall Fox: US Navy Pilot

“JANAP 146 E と呼ばれる印刷物があり、その中に、UFO 現象についても誰かに何かを口外した場合、1 万ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている一節がある。つまり、あなたが何を体験しようとも、許可なくしてはそれを持ったまま一般の人々の中に入って行ってはならないことを厳格に定めている”

“航空管制からは、そのことについて何の話もなかった。どの出来事についても、私は口を開くことはなかった。ピート・キリアンという、何冊かの UFO 関連書に出てくる機長がいた。彼は 1950 年代にアメリカン航空の機長だったが、どうやら目撃をし、上院委員会で証言した。また、翼の外側にいた UFO の写真を実際に撮った機長もいた。もちろん、彼らは嘲笑の対象になった。私はそのようにはなりたくなかったので、FAA (米国連邦航空局) にも軍にも何も報告しなかった。多くのパイロットたちは、周囲からの圧力と嘲笑があるために、このことに巻き込まれるのを望まなかった。こうして秘密が保たれてきた”

“私には、第二次大戦中 B-24 のパイロットで戦略諜報局 (OSS) に入った、とても親しい友人がいる。彼は原爆が広島と長崎に投下された後、最初に日本に行った人々の一人だった。彼はブルーブック・プロジェクトの報告書 No.13 に関わったが、それは計画の中でも最高機密に属する部分だったと私は思っている。当時彼は空軍大尉だった。現在は 70 歳台後半だが、今なお大尉として現役を続けている。彼が給料を貰っているかどうかは知らないが、現役だとしたら任期の長さで階級から三つ星将軍で、給料も貰っていて然るべきだ。彼に現役を続けさせているただ一つの理由は、彼が知っていることのために国家機密保全誓約を有効にしておく必要があるということだ。私は海軍の最高機密取扱許可を持っており、また我々は二人とも同じものに強い関心を持っているが、機密保全誓約のために彼が私に話そうとしない何かがある”

“何らかの理由で、政府や政府の諸機関は彼らの基本方針を守る必要があると考えている。しかし、今やそれは明らかに我々の基本方針ではない。この見え透いた欺瞞を終わらせるために、我々が行動すべきときがきたと思う。人類が適切に進化し、その進化の実りを確実に享受するのに必要な対策を講じる時が”

**ロバート・サラス大尉：米国空軍，戦略空軍打ち上げ管制官**  
Captain Robert Salas: US Air Force, SAC Launch Controller

“私はこの事件について報告書を書き上げた。日誌に書いていた内容も報告書に含めた。我々は基地に着くとすぐに、中隊長に報告しなければならなかった。その部屋には、中隊長と共に空軍特別捜査局(我々の基地には空軍特別捜査局があった)の人間が一人いた。彼は中隊長と一緒にその事務所にいた。彼は私の日誌を要求し、簡単な説明をしてほしいと言ったが、何が起きたか彼はすでによく知っているようだった。それでも我々は簡単な説明をした。彼は我々二人に、これは機密情報だからと言い、機密保全誓約書に署名するよう求めた - 我々は誰にもこれを漏らしてはいけない、そういうことだった。我々は話せなかった；彼はこう言った。我々はこれについて誰にも話せない、他の隊員にも、配偶者にも、家族にも、お互いの間でさえも”

“ボブ・コムスキーが、これら(\*UFO に関係した ICBM)の運転停止のあらゆる側面を調べるために組織を率いた。ある時点で彼は上司から、空軍が‘調査を中止せよ；これについてこれ以上何もするな、最終報告書も書くな’と言っているとされた。コムスキーは私に書面でそう述べた。繰り返すが、何よりも CINC-SAC(戦略空軍最高司令官)が、ここで起きたことを正確に説明することはきわめて重要だと述べていたのだから、これはきわめて異常だ。それにもかかわらず、調査団の団長が調査中にそれを中止し、最終報告書も書くなと言われたのだ”

**ロバート・ジェイコブズ教授：米国空軍**  
Prof. Robert Jacobs: US Air Force

“その事件についてある記事を公表した後で、事態は大変なことになった。私は仕事で嫌がらせを受け始めた。日中に奇妙な電話がかかり始めた。私は夜に自宅で電話を受けるようになった - 一晩中、ときには午前 3時、午前 4時、夜中の 10時に、相手は電話をよこし、私に喚き始める。くそったれ！ くそったれ！ 彼らが言うのはこれだけだ。彼らは私がどう受話器を置くまで喚き続ける”

“ある夜、何者かが大量のロケット花火を放り込んで、私の郵便受けを爆破した。郵便受けは炎を上げて燃えてしまった。その夜の午前 1時に電話が鳴った。受話器を取ると、何者かがこう言った。‘郵便受けの夜のロケット花火、きれいだったぞ、このくそったれ野郎！’”

“こんなことが 1982 年以來、繰り返し起きている...”

“UFO 問題の周辺を縁取るこの気違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部だと私は考えている。この問題を真面目に研究しようとする、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的 주요な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を

持っていると言ったら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない - 未確認飛行物体はまさに我々が共存すべき物の一つなのだが”

“マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってからしばらくして、私服の男たち - 私は彼らを CIA(中央情報局)と考えたが、彼は違うと言った。それは CIA ではなく他の何者かだった - がそのフィルムを取り上げ、UFO が写っている部分をリールから外し、はさみで切り取った。そしてそれを別のリールに巻き、書類カバンに入れた。男たちは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。‘機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですよ、少佐。この事件は片づいたことにしましょう’ 彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少佐がそのフィルムを再び見ることはなかった”

**ハリー・アレン・ジョーダン： 米国海軍**

Harry Allen Jordan: US Navy

“私のよく知らない一人の少佐がやってきて訊ねた。どうしたんだ、ジョーダン？ 日誌に何が書いてあるんだ？ 彼は、君はそれをそこに書く必要はないと言った。私にとり、航海日誌にあのようなことを書くのは、きわめて、きわめて、変則的なことだった。私はそれにレーダーによる捕捉のことを書いた。私は UFO について書き始めていた”

**ジェームズ・コップ： 米国海軍暗号通信部**

James Kopf: US Navy Crypto Communications

“数日後、艦長と副艦長が艦内テレビに出演した。それが 5,000 人の乗組員に向かって話しかける唯一の方法だった。彼[艦長]はカメラを見て - 私は決してこれを忘れないだろう - こう言った。‘乗組員諸君に告ぐ。海軍の主要な戦闘艦で起きた出来事は機密事項と見なされる。したがって、知る必要性 (need-to-know) を持たない誰とも議論してはならない’ これが彼が言ったことのすべてだった”

### 3.7 編集者からの重要な声明

1993 年、私はプロジェクト・スターライトとして知られる CSETI(地球外知性体研究センター)後援の活動を始めた。この取り組みは、UFO に関連した事件およびプロジェクトに関する軍と政府関係の直接証人たちに加え、一般への公開に使用する証拠類を確認することを意図していた。1993 年以降、我々は CIA(中央情報局)長官ジェームズ・ウルジー、国防総省上級将校、そして主要議員の面々といった人々を含む、クリントン政権のメンバーに対して背景説明をすることに相当な時間と資源を費やした。1997 年 4 月、そのような政府と軍関係の証人十数人がワシントン D.C.に集められ、国会議員、国防総省当局者などに背景説明を行なった。我々はそこで、この問題についての公開公聴会を開くことを強く要請したが、積極的な反応はなかった。

1998 年に我々は、ビデオを撮影して編集し、UFO に関連した事件やプロジェクトに関する 100 人を超す数の軍と政府関係の証人たちを組織するために、資金を集めてこの公開手続きを‘民営化’することに着手した。我々の試算では、これを世界規模で行なうためには 200 万ドルから 400 万ドルが必要になりそうだった。2000 年 8 月までに集まったのはそのたった 5 パーセントだけだったが、我々は先に進むことにした。というのも、これ以上遅らせることはこの問題の深刻さを考えれば、分別を欠いていると思われたからである。そして、我々はその 8 月から証言記録保存プロジェクトを開始し、これらの証人への面接取材内容を放送に耐える品質のデジタルビデオにするために、世界中を駆けめぐり始めた。資金難のため、2000 年 8 月から同年 12 月までの間、この活動の大部分は私自身と他の数人のボランティアにより行なわれた。

この証言に基づく多部構成暴露ドキュメンタリーの制作は、十分な資金が得られないため、現在まで延期されたままになっている。

2000 年 12 月後半から、私は自宅で 90 ギガバイトの容量を持つ 1 台のデュアル G4 マッキントッシュと 1 台のデジタルビデオデッキを使い、120 時間を超す証言生ビデオの編集を始めた。私は医者であって、編集者ではないことを言うておかなければならない。それでも、2000 年 12 月の後半から 2001 年 3 月下旬までに、120 時間の証言は、まず選ばれた 33 時間の証言に縮減され、さらに 18 時間の厳選された証言になった。その選ばれた 33 時間の証言は録音テープにダビングされ、文字に起こされて約 1,200 頁の証言文書になった。2001 年の 3 月から 4 月初めにかけて、私はこれらの証言文書を編集し、読み易い形にした。それが本書に収録されている。

これは大変厳しい時間と資金の制約の中で行なわれたことを強調しておかなければならない。週に 7 日、毎日ほとんど 18 時間の作業をした。私は‘救急科’は何てタフかと思ったものだ！

こうしたことを言うのは、ただ読者に、これらの証言文書や他の資料の中に多分に誤りが含まれているであろうことを理解してもらいたいがためである。それらの中には氏名の間違いなどもあるだろうが、それは証言の音声テープから音だけを頼りに綴りを書いたからである。これらについては前もってお詫びしておきたい。後日、本書が改訂されるときには、これらの間違いも修正されるだろう。

証言文書は、文の長さ、文法上の問題、読み易さについてのみ変更が加えられた。私は証言の

意味を変えることだけはしないように、常に気を配った。括弧[]の中で述べていることは、意味を明確にするためである。括弧[]の中の斜体文字は私による注釈であり、その後に私のイニシャル、SGが付されている。

本書では、我々が入手した公文書のほんの一部だけを使用した。各部の末尾に添付されている文書は、全体としてその部で述べられた情報に関連するものである。

これらの資料は、もうお分かりのように、我々がデジタルビデオテープに記録した内容の氷山の一角にすぎない。つまり、100人を超える証人による120時間を超える証言から、我々は33時間分だけを文字に起こし、さらにその半分に満たない部分を資料として編集した。加うるに、その全記録には、今日までに確認された400人以上の証人の中の100人による証言だけが含まれているのである。

この証言を読む際に思い出してほしいことは、これはほんの始まりだということである。その後はあなたにかかっている。速やかに、この問題について議会、大統領、そして他の国々の指導者たちに公聴会の開催を呼びかけ、要請することである。これらの証人は、彼らが経験し、ここで述べられたことを宣誓の上で公式に証言するために、召喚されることを歓迎している。実際、最も衝撃的な証言は、公になるのを待っているのである。なぜなら、最も深部の情報源は、公式な議会公聴会により保護されるまで、名乗り出るのを拒んでいるからである。

さて、最後に次のことを述べておきたい。これまでに証言を提供した証人たちは、並外れて勇気ある人たちである - 私には英雄に思える。彼らが名乗り出るにあたっては大変な個人的危険が伴った。何人かの証人は、脅迫され、恫喝を受けてきた。すべての証人が、この問題につきまとう、昔から変わらぬ嘲笑の危険にさらされている。誰一人、その証言の見返りを受けた者はいない。証言は、人類の利益のために無償、無条件で提供された。私は個人として、ここで彼らに感謝すると共に、心から最高の尊敬と報恩の念を表したい。

どうか、この努力と彼らの犠牲を無駄にしないよう、願います。その真実のすべてが公開され、今は隠蔽されているそれらの地球を救う技術が解放され、それによって人類が宇宙の多くの人々の一員としてその進化の新しい段階に移行することができるように、この問題を国民、メディア、そして我々の選ばれた代表者たちの前に提示することに力を貸してほしい。

**注意：**本書は重要な直接証人の証言に焦点を当てている。我々は数千の政府文書、数百の写真、ごく一部の着陸事件資料、その他を入手している。しかし、それらをこの長さの一冊の本に含めることは不可能である。これらの資料は、科学界や議会からの真面目な要求があれば提供されるだろう。

2001年4月5日 スティーブン・M・グリア、医師

## 3.8 ビデオ録画された証人による証言と政府文書の要約

### 3.8.1 概要

#### 宇宙飛行士 エドガー・ミッチェルの証言 Testimony of Astronaut Edgar Mitchell

1998年5月

[このインタビューを我々に提供してくれたジェームズ・フォックスに深甚なる謝意を表す。SG]

宇宙飛行士エドガー・ミッチェルは、1971年2月にアポロ14号で宇宙に飛び立ち、月面を歩いた六人目の人となった。彼は証言の中で、ETの地球訪問は起きていること、宇宙機が墜落して物質や遺体の回収も行なわれていることを認めている。しかしまた、この問題を巡る隠蔽が50年以上行なわれ、それに対する監視と目に見えるような政府統制が欠けていたことも述べている。ミッチェル氏は、この地球に対する我々の管理状態を懸念しており、進行する環境危機は現実だと考えている。

EM: 宇宙飛行士エドガー・ミッチェル

JF: ジェームズ・フォックス

**EM:** 我々は調査資料の中に、飛行中に未確認物体に遭遇し、それを追跡するように指示された軍関係者からの報告を見出している。彼らは地球外からの訪問の可能性について調査し、それに何とか対処することを任務とする、公職にある人々だ。彼らは政府の人々だ。

多くのことが、これらの警備嚴重な機密区分について行なわれている - それらは軍規のもとにある。私が思うに、我々がこのレベルの活動について語る時、それは相当に複雑だ。[秘密保持がいかんにして実行されてきたかについて]実際のところ、幾つかの不気味な話がある。それらが正しいかどうか、私には立証できない。それらが必ずしも真実かどうか、私には分からない。しかし、多くの他の話と同様に、それらは人々の心に恐怖を与える。おそらく、それが多くの人が名乗り出ることを望まない理由だ。

私の関心の基本は、我々の住む宇宙がどんな性質を持つかということだ。より大きな実在に対する我々の関係はいかなるものか？もしUFOがより大きな実在の一部であり、それを我々が否定するとしたら、それは私にとり良心に照らして受け入れがたい。私はそんな生き方はしない。私は、我々の住む宇宙について学ぶため、新しい洞察力を得るため、我々が知っている存在物の境界を越えるために宇宙空間に行った。そして、これらの現象が仮にも実際に宇宙についての新しい知識、宇宙の知性体、また宇宙を移動する我々の能力を示唆するものなら、我々はその真相を探るべきだ。それが私を駆り立てる、私の好奇心だ。

少なくともこれまで50年以上にわたり、いわゆるUFO事件を取り巻く多くの秘密が存在してきたようだ。それは大変に複雑だ。我々はここで簡単なことを扱っているのではない。我々にはあらゆる種類の目撃例がある。これまでほぼ50年にわたり数千の目撃が報告されてきた。目撃の多くは、実際のところ自然現象をどうにかして見誤ったものだ。しかし、見誤りでない目撃も多数存在する。それらは明確に記録された事件であり、我々が地球の兵器庫に持っているいかなるものとも一致しない飛行物体のことを述べている。これは、我々がそれらをET宇宙機であると公に立証したも同

然だ。我々は、現場にいてコンタクトし、直接のデータを持つ人々を信用しなければならない。

私が知っている限り、そのような立場にいたと主張するのは情報機関、軍、および政府にいた人々であり、また以前このことを調査し明らかにすることを公務としていた一部の契約業者たちだけだ。これらの人々は、それを国民に話すことを防ぐために、当時は厳しい制約と高い機密取扱許可のもとにあった。その期間はとうに過ぎ去ったが、彼らは今なお機密保全制約のもとにあるか、少なくともまだあると信じているように思われる。

ET の訪問は行なわれてきたのだ。墜落した宇宙機も存在してきた。回収された物質と遺体も存在してきた。そして、現在政府と結びついているのかどうかは分からないが、かつては確かに政府と結びついていて、このことを知っている人々のグループがどこかにいる。彼らはこの知識を隠蔽するか、それが広く知られることを妨げようとしてきた。

これらの人々が誰であるか、私は知らない。しかし、私が秘密のグループと呼ぶ人々の存在を示す多くの証拠がある - 政府および幾つかの政府施設に半ば属しているが、ほとんどの場合、我々が知る範囲の高いレベルの政府統制下にはない、きわめて隠密に活動する人々。私が知っているすべてのことから判断して、確かに ET 訪問はあったし、これからもあるだろう。回収された宇宙機も存在してきた。これらの宇宙機の幾つか、または幾つかの部品を複製することを可能にする、何らかの逆行分析 (reverse engineering) も存在してきた。しかも、この装置をある方法で利用している地球人たちがいる。

さらにまた、UFO に帰すべきものと分類されている活動の多く - 誘拐やその類の活動 - は、まったく ET によるものではない可能性がある。万が一 ET によるものがあつたとしても、それはむしろ少数だ。その大部分は人間によるもの、この地球人が密かに行なっている活動だ。

これに付随する動機にまで立ち入るつもりは私にはない。私はその動機を知らない。しかし、もしそれが普通の人間が持つような動機だとしたら、それは権力、支配、食欲、金などに関係しているに違いない。

私は、これを国民に公にする時期はとうに過ぎたと考えている。邪悪な意図を示唆するものは本当に何も見当たらない... たえば誘拐のように、多くの人が敵対的であると言っている事柄はある。それが本当であるとしても、むしろその原因は[ET ではない]何か他にあると思う。

あると言えば、証拠は山とある。それはどうみても決定的な証拠となるほどの量であり、少なくとも政府の権力によっては今まで明るみに出されてこなかった。

それは秘密にされてきたか、またはいかにして秘密が保たれ得たか、という疑問に対してはこうだ。それは秘密にされてはこなかった。それは最初からずっとそこにあつたのだ。だが、それはこれまで真実が露見しないように注意を逸らし、混乱をつくり出すための偽情報工作の対象だった。偽情報工作は、事実を隠すためのまさしくもう一つの方法なのだ。それはこの 50 年ほど一貫して行なわれてきた：何らかの墜落機を隠蔽するためのロズウェル上空の気象観測用気球。これが偽情報工作だ。我々はそれを 50 年以上見てきた。これは何かを隠すための最良の方法だ。

ET がここに来ているという事実は、我々が月に行ったという事実以上のものではない。それはまさに、この世界の一面なのだ。だから、我々はそれを理解し、我々自身、我々の知識基盤、宇宙観、我々の存在の本質、我々は何者か、世界はどう機能しているのか、という文脈の中に組み込まなければならない。そして当然、その知識は世界が、宇宙一般が、どう機能しているかについての我々の理解力を必ず変える。30 年前まで、我々が宇宙で孤独であり、知られている宇宙の中で我々以外に生命はいないというのが、科学と技術の分野における一般の通念だった。だが、今それを信じる人はいない。それは我々は何者か、我々はいかに適合すべきかについての、我々自身の概念を変える。

そして、我々が惑星地球の生命を管理してきた仕方には欠陥があったということが、きわめて明白になってきた。我々はよき管理者ではなかった。我々はまさに今、地球規模の環境問題を抱えており、それは文明を危機へと追いやっている。人々はそのことを聞きたがらないが、それが現実であることはゆっくりと顕在化しつつある。だから、我々は何者か、惑星をどう管理するのか、より大きな物事の枠組みにどうやって適合していくのかという、この知識はとても重要な事柄だ。

さて、グリア博士は実際に率先して行動を開始し、ワシントンに行き、政府の高位高官の人々と話をし、我々がここで言及した証人の幾人かを紹介し、背景説明を行なった。彼はこれらの問題について議会公聴会の開催を要請した。私はこれに出席し、彼に協力した。この問題のすべてに対する議会の監視を実現させることは、きわめて重要な取り組みだと私は信じている。しかし、今のところそれは実現していない。我々は何人かの議員、彼らのスタッフ、ホワイトハウスの人々に背景説明を行なった。我々は国防総省の人々とも話をした。概してそれは好意的に受け取られ、何人かは聞いたことにとっても驚いていた。しかし、今までのところ、それは何の大きな行動にも結び付いてはいない。

**JF:** これは彼らの多くにとって耳新しいことでしたか？

**EM:** 幾人かの人々にとっては、そうだった。他の人々はといえば、そうでもなかった。しかし、政府の高い地位にいる人々は、これに関する情報については、もし知っているとしてもごくわずかしかならないということは言っておきたい。多くは普通の人々以上には知らない。彼らは、我々が語っていることについては蚊帳の外にいる。それは確かだ。

**JF:** このことは、あなたにとって懸念材料ですか？

**EM:** そのとおりだ。それは大きな懸念だ。私はこの懸念をことあるごとに表明してきた。まさに私が言いたいのはこのことだ：どんな活動が行なわれていようとも、それが秘密の、準政府的な、準民間のグループである限り、私が知る範囲では政府によるどのような種類の監視も伴わない。これこそが大きな懸念なのだ。

[宇宙飛行士ミッチェルがここで言及しているのは、1997 年に行なわれた背景説明である。これはグリア博士が議会、ホワイトハウスの人々、国防総省等のために準備したものだ。そこには十数人の政府と軍の証人が出席し、UFO と ET 問題について彼らが直接目撃したことを証言した。多く



の政府高官たちと国防総省の上級将校たちが、このような重要な事柄について闇の中に置かれているという事実を知ったのは、まったく当惑させられることだった。SG]

## モンシニョール・コラード・バルドゥツツイの証言

### Testimony of Msgr. Corrado Balducci

2000年9月

[翻訳者(\*イタリア語からの)による]

モンシニョール(\*高位聖職者の尊称)・バルドゥツツイはバチカンの神学者で、教皇に近い部内者の一人である。彼はイタリア国営テレビに数多く出演し、地球外知性体とのコンタクトは実際に起きている現象であり、‘精神的な機能障害によるものではない’ことを表明してきた。バルドゥツツイはこの証言の中で、一般大衆のみならず、とても信用があり、教養があり、教育を受けた高い地位にある人々が、これが現実の現象であることを益々認めるようになってきていると説明している。また、地球外の人々は神の創造の一部であり、天使でも悪魔でもない、しかしおそらく精神的に大いに進化しているとも述べている。

CB: モンシニョール・コラード・バルドゥツツイ

SG: スティーブン・グリア博士

CB: . . . 何かが起きていることを、もはや否定できない状況に我々は至った。その何かはこのUFO 研究の領域で起きている。単なる空飛ぶ円盤だけではない、現実の人々、生きた存在、地球外存在者がそこにいるかもしれない. . .

私はまさに今、神学者として語りたい。懐疑的であり過ぎることは、正常な常識に反する。それは理性に反する。人の証言は、意思疎通と対話の最も一般的な方法だ。なぜなら、我々が人々の話を聞くとき、我々は彼らが言っていることは真実だと確信する必要があるからだ。それは何かを言う人と、人が言おうとしていることを信じている人との対話だ。さもなくば、人が言おうとしていることを信じていない人との対話ということになる。

しかし、もし我々がこのような方向に向かったなら、そしてこれが一人の神学者としての私を実際に動かした本当の理由なのだが、もし我々がこれは真実ではないと言い続けるなら、そのとき何が起きるか？ そのときは何のためのどんな証言であれ、それは証言に値する重要性を与えられないだろう。そしてこの証人の証言は、もしそれが貶(おとし)められたなら、多くの否定的な波紋を生じる。個人の否定的状況、社会の否定的状況、信仰の状況。そして特にキリスト教への影響. . .

今一つの理由がある：神だ。神はその英知において、我々だけを人間として創造しないだろう。

SG: 米国ではこれまで一部に反動的な原理主義者がいて、これらは悪魔の仕業ではないかと言ってきました。これについてはどう思いますか？

CB: 悪魔はこれに何の関係もない！ 私はこれまでこのことについては公に口にしてこなかった。だが、天使や悪魔は[宇宙]船を必要としない。彼らは空飛ぶ円盤を必要としない。彼らはこれらの装置類を必要としないのだ。神は悪魔がこのような素晴らしい姿で人間の前に現れるのを、決して許さないだろう。神はそれを決して許さないだろう。それを悪魔などとは考えないことだ. . .

そして、聖書には宇宙にあるものすべては神聖な創造物だと書かれている。神聖な創造物でな

い地球外知性体などいない...

### 3.8.2 レーダー／パイロットの事例

#### 序文

(グリア博士による口頭説明から筆記, 編集された)

ここでは、特にパイロットによる遭遇、レーダー事例、およびそれらに関する事例の証言を扱う。次のことを指摘しておくべきである。つまり、数十年もの間、UFO の問題について懐疑的だった人々は、もしこれらの物体が現実ならレーダーで追跡できるはずだと強く主張してきた。我々には米国の空軍、海兵隊、海軍、陸軍、文官当局、および海外からの少なくとも 20 人の証人がいる。彼らは、これらの物体をレーダーで捕捉し追跡してきた正規の航空管制官とパイロットたちである。これらの人々は、きっぱりとこう述べていることに留意してほしい：これらの物体は気象観測気球ではなかった；それらは大気の逆転層ではなかった；それらは‘沼気(メタンガス)’ではなかった。それらは確かな物理的形を持つ飛行物体で、しばしば時速数千マイルで移動したかと思ふと不意に停止し、空中静止したり非線形の動きをしたりしてきた。これらの物体は、レーダーが 1 回走査する間に一つの地点から数百マイル、あるいはそれ以上遠くに離れた地点に移動する様子が追跡されてきた。これらは固体の物体である。それらは金属製であり、強烈で明瞭なレーダー反射を返す。

これは、我々がほんの一人か二人の証人を持っているような状況などではもはやない。証拠を評価するときには、このことを重視しなければならない：これらの物体がレーダーで追跡され、ときとして十数基のレーダーが同時に追跡していたことを証言する十数人の証人がビデオに撮られている。これが意味するものは、我々の扱っている対象が実際の、現実にある、物理的で科学技術的な飛行物体だということである - それは想像の産物でもなく、集団幻覚でもなく、何か異常なものや片づけてしまえるものでもない。空軍のチャールズ・ブラウン中佐が指摘したように、遠く 1950 年まで遡る空軍のグラッジ計画が、これらの物体のレーダーによる確認を行っていた。地上設置レーダー、地上目視、航空機搭載レーダー、および機上目視である - そして、“これに勝る方法はない”。これらの証人の多くは、数夜にわたり同じような地域に戻ってきたこれらの物体を目撃し、ソフトやハード面での誤作動はなかったことを確認するために、彼らの装置を厳密に調べている。

これは言うまでもなく強烈な説得力を持つ。証人たちの証言は、これらの物体は存在しないという反論を永久に封じる。なぜなら、我々には彼らの証言に加えて、レーダー追跡記録というものがあり、事件の記録資料があり、1940 年代から 1990 年代までの全期間に及ぶこのような事件の内部にいた人々がいるからである。

元米国連邦航空局事故調査部長 ジョン・キャラハンの証言  
Testimony of FAA Division Chief John Callahan

2000年10月

キャラハン氏は約6年間、ワシントン D.C.にある FAA(米国連邦航空局)で事故調査部長を務めた。彼は証言の中で、日本航空 747 機がアラスカ上空で 31 分間 1 機の UFO に追跡された 1986 年の事件を語る。その UFO は、1 機のユナイテッド航空便に対しても着陸するまでその後をつけた。航空機搭載レーダーと地上設置レーダーによる確認の他に、目視による確認もあった。この出来事は、当時の FAA 長官エンゲン提督にとりあまりにも重要だったので、翌日に説明会を開いた。そこには、他の人々に混じって FBI(連邦捜査局)、CIA(中央情報局)、レーガン政権の科学調査チームが出席した。ビデオに撮られたレーダー記録、航空管制の肉声による交信記録、および文書による報告がまとめられ、提出された。この会合の最後に、出席していた CIA の顔ぶれたちが、そこにいた全員に向かってこう指示した。“この会合は決して持たれなかった” “この事件は何も記録されなかった” 他にも証拠があったことに気付かず、彼らは提出された証拠だけを押収した。しかしキャラハン氏は、この事件のビデオテープと音声記録を確保することができた。

JC: FAA 部長ジョン・キャラハン

SG: スティーブン・グリア博士

JC: 私は約 6 年間、ワシントン D.C.にある FAA で事故調査部長を務め、退職した。

この事件は、アラスカの担当官からの一本の電話で始まった。彼はこう言った。“ここで問題が一つ持ち上がっている。メディアに何を言ったらよいか分からない。事務所はアラスカのメディアでいっぱいだ” 私 - “その問題とは何か?” 彼 - “あの UFO だ” 私 - “どの UFO か?” 彼 - “先週こちらの上空で、およそ 30 分間にわたり 747 機を追跡した 1 機の UFO があった。我々はそれについてあまり考えなかったが、そのことがどうやら漏れて、ここに大勢の報道陣を迎える羽目になった。彼らにどう説明したらよいか知りたい”

そこで私は、一人の経験を積んだ政府職員として常套句を彼に伝えた: それは調査中で、その後であらゆるデータを総合する。私は彼らが持っているディスクと入手できるテープのすべてを、一夜のうちにアトランティック市にある FAA 技術センターに集めたいと思った。

彼らは軍を呼び出し、軍のすべてのテープを要求すると言った。FAA は米国とその領土上空の空域をすべて管轄している。それは軍に属していない。それはロケットを発射する人々に属していない。それは米国政府に属し、FAA の管轄下にある。だから私は彼に、軍のテープとすべてのデータを入手し、それを送るように命じた。さて、彼らは 1 時間ほどして電話をよこし、軍がこう言ったと言ってきた: 軍はテープが不足しているので、それらを再使用しなければならないが、まだ 12 日しか経っていない。この時点でテープは 15 日間保存されることになった。

FAA 長官は、この事件に何か懸念されることがあるかを調べるために、FAA の副長官だった私の上司と私をアトランティック市に派遣した。すべてのデータに目を通すのに 2 日かかった。我々が入っていき、この部屋を[その遭遇が起きていたときの]アンカレッジとまったく同じに設定するように指示した。我々は全データをこのレーダー画面に映し出し、管制官が見たものをすべて見たいと

思った。我々は管制官が聞いたことをすべて聞きたいと思った。そして、レーダー、デジタルレーダー、音声のすべてを総合したいと思った。

囲いの向こうで作業をしこれを再現していた人々の一部は、すでにテープを吟味していた。彼らはそこに映っているものを我々に見せることを快く思わなかったが、我々はその全部を見た。

航空管制官が軍の管制官に、何かを見たか？ と訊いたとき、彼はこう言った。見た。私はこれこの位置に 1 個の目標を捕捉した。747 機の日本人パイロットから 1 時の方角 8 マイルだ。

事件が始まった経緯はこうだ。日本航空 747 機がアラスカ州を横切って北西から入ってきた。その高度は 3 万 1,000 フィート、3 万 3,000 フィート、または 3 万 5,000 フィートのいずれかだった。時刻は夜の 11 時頃だったが、その本当の時刻は確認することができる。747 機のパイロットは管制官を呼び、その高度に他機がいるかと訊いた。管制官は、いないと応答した。基本的にそれは深夜管制であり、交通量はあまり多くなかった。すると彼は、11 時ないし 1 時の方角約 8 マイルに目標が一つあると言った。

さて、この 747 機は機首に周囲の気象状態を探查するレーダーを持っており、このレーダーが目標を捕捉している。彼はこの目標を視認する。その目標は、彼の表現によれば 1 個の巨大球体で、その周囲に輝く部分があった。彼はそれを、747 機の 4 倍の大きさがあるようだと言ったと思う！

その軍の管制官は、このようなことを言った。“確かに私は彼(\*747 機)をアンカレッジの北 35 マイルで見ている。では彼の位置から 11 時ないし 1 時の方角にいるのは誰だ？” FAA の管制官 - “誰[どの定期便]もいないはずだが？” 軍の管制官 - “それは軍のものではない”

航空管制官は軍の管制官を呼び出し、そこに軍の航空機がいるかと訊いた。軍は、いない、彼らの航空機はすべてその西側にいると言った。それで彼は戻ってきて、こう言った。“そこに航空機はいない” その交信の間に、日本人パイロットは数回にわたり報告する。“それは今 11 時にいる。今は 1 時だ。今 3 時だ” その UFO は 747 機の周囲を跳ね回っていた。747 機のパイロットがそう言いかけたとき、その軍の管制官が割って入って言う。“それは今 2 時か 3 時だ” 軍の管制官はその位置を確認した。彼らは、彼らが言うところの高度探查レーダーを持っている。また、長距離レーダーと近距離レーダーも持っている。だから彼らは、もし彼らのシステムの一つで捕捉しなくても、他のレーダーで捕捉する。その軍人が言ったことを聞けば - 彼は一度そう言ったが - 高度探查レーダーか測距離レーダーで捕捉している。つまり、彼らは彼らのシステムで目標を捕捉していた。こうして、レーダーによる追跡は 31 分間という長いものになった。その UFO は、日本航空 747 機を追ってあちらこちらと位置を変えた。しばらくして、管制局は 747 機に高度を変えさせたが、UFO は依然としてついてきた。管制局は 747 機に 360 度旋回を指示した。747 機が 360 度旋回を行なう場合、旋回が終わるまでに数分かかる。また広い空域を飛行することになる。だが UFO は依然としてついてきた。それは正面だったり、側面だったり、後方だったりした。彼らは、それを 747 機の正面 1 時の方角 7, 8 マイル離れた所に見た。約 10 秒後の次の走査では、それは機の後方、やはり 7, 8 マイルにあった。機は常に目標から 7, 8 マイル離れた位置にあった。

[10 秒以下の時間で数マイルを移動する、よく知られたこの UFO の非線形の動きに注目された。これは他の多くの証人の証言中にある 10 数例に及ぶ UFO—レーダー事件によっても裏付けられている。SG]

調査がすべて終わり、翌日我々がワシントンに戻ると、[FAA]長官から電話があった。何か問題になることがあったか知りたいということだった。私の上司は、我々はそのビデオを撮ったが、そこに何かがあったかもしれないと答えた。FAA 長官は、上がってきて、何が起きたか 5 分間の簡単な概要報告をしてくれと言った。それで我々は[ワシントン D.C.にある FAA 本部の]10 階に上がり、長官のために 4, 5 分間の報告をした。そのときの長官はエンゲン提督だった。彼は、そのビデオを持っているか？ そのビデオを見せてくれないか？ と訊いた。私は、はい、セットすればすぐに見られますと答えた。

こうして我々は、彼のためにビデオをセットした。彼はそれを見始めた。約 5 分後、彼はスタッフに会合をすべて取り止めると告げた。そして半時間あまりをかけて、その全部を見た。

すべてが終わったとき、長官はこう言った。“君たちはどう考えるか？” 私の上司は、役人らしいうまい答え方をした。“それが何であるかはよく分かりません...” 彼の見解は、誰にも言うな、だった。私が許可するまで誰にも言うなということだった。翌日、私に[レーガン大統領の]科学調査グループか CIA の人間から電話があった。それが誰だったかは知らない。最初の電話だった。彼らはこの事件について何か訊きたがっていた。私はこう言った。“あなたが何を話しているのか私には分からない。あなたは多分、提督[FAA 長官エンゲン]に電話するのがよいでしょう”

それから数分後に提督から電話があり、明日午前 9 時にラウンドルームで説明会を開くと言った。“君たちが持っているすべての資料を持ってきてほしい。皆を集め、望みのものは何でも彼らに提供せよ、この事件から手を引きたい。彼らがしたいようにさせよ” それで私は、技術センターから来た人間を全部連れていった。我々はプリンター打ち出し資料を入れたあらゆる箱を持っていった。それらは部屋いっぱいになった。そこには FBI から三人、CIA から三人、レーガン政権の科学調査チームから三人来ていた - その他の人々が誰だったかは知らないが、彼らは皆興奮していた。

我々は彼らにビデオを見せた。その後で彼らは、そのときの周波数、アンテナの回転速度といったあらゆる質問を浴びせてきた。レーダーは何基あったか？ アンテナの数は？ データはどのように処理されたか？ 彼らは皆興奮していた - まるでそれが彼らの仕事であるかのようだった。質問が終わると、彼らはそこにいる他の人々全員に対して、実際にこう断言した。“この事件は決して起きなかった。我々はこの会合を持たなかった。これは決して記録されなかった”

**SG:** 誰がそれを言ったのですか？ それを言っていたのは誰でしたか？

**JC:** それは CIA から来た一人だった。彼らはそこにいなかったし、この会合もなかったと。そのとき、私は言った。“しかしあなたがなぜそう言うのか、私には分からない。つまり、そこには何かがあった。それがステルス爆撃機でないなら、ご存じのとおり、それは UFO だ。そしてもしそれが UFO なら、なぜあなたたちは人々にそれを知られたくないのか？” すると彼らは皆感情を高ぶらせた。あなたはそれを口にすることさえ考えてはならない。1 機の UFO が 30 分間レーダーに捉えられた

データは、彼らにとって初めてだと彼は言った。彼らは皆そのデータを入手し、それが何もので何が実際に起きていたのか、知りたくてうずうずしていた。彼はこう言った。もし彼らが公の前に出て、米国民に対して UFO にそこで遭遇したと言ったなら、国中にパニックを引き起こすだろう。だから、あなたたちはこれについて語ってはいけない。そして彼らはこのすべてのデータを持ち去ろうとした。だから、私は言った。“よろしい、お望みならすべてのデータを持って行ってください”

**SG:** 誰がデータを持ち去ったのですか？

**JC:** そのグループだ。それが誰の所に行ったか、私は知らないが、そのグループが持ち去った。しかし、彼らは我々がそこに置いてあった資料だけを持ち去った。彼らは、他に何か資料を持っていないかとは私に訊かなかった。彼らはこの全部のデータを持っていくと言った。だから私は、よろしいと言った。ところで、私は撮ったその元ビデオを持っていたし、回報されてきたパイロットの報告書も持っていた。最初の報告書だ。私は FAA の最初の報告書を持っており、それらはすべて階下の私の机上にあった。

彼らはそれを要求しなかったので、私はそれを彼らに渡さなかった。後日私が退職するとき、それはすべて私の事務室にあり、私のものになった。それ以来、我々はその上に座って隠してきた。

*[これらの資料の全部を我々は入手している。その中にはレーダーのビデオ、航空管制官の肉声筆記録、FAA 報告書、およびこの事件のコンピューター打ち出し記録がある。SG]*

ついに日本航空 747 機は空域を去り、今度は 1 機のユナイテッド航空便がアラスカに入ってくる。管制官はユナイテッド機にこう言う。“今までこの上空に日本航空 747 機がいて、1 機の UFO に追跡されていた。彼(\*日本航空 747 機)を確認してほしい。その高度を保ってもらえるか？” ユナイテッド機は“問題ない、了解した”と言う。管制局はユナイテッド機に約 20 度の左旋回を指示し、高度を保ったまま日本航空 747 機に向かわせるようにした。

2 機の航空機が通過した後、その目標[UFO]はこの空域にいる間中ユナイテッド機を追跡した。追跡は着陸進入するまで続いた。そして UFO はそのまま消えた。

さて、届いた報告書を彼らが読んだとき、FAA は自らを守ることを決めた - 彼がそう言ったのだとしても、目標を見たと言ってはならない。彼らは彼にその報告書を修正させ、それが目標(target)ではないように聞こえる‘位置記号(position symbol)’という言葉を使わせた。こうして、もしそれが目標でないなら、我々が[レーダー上で]識別している他の多くの位置記号は、どれも目標ではないことになる。それを読んで私は驚き、何やら胡散臭いものがあると考えた。誰かが何か、あるいは誰かを恐れている、彼らは隠蔽しようとしている。

CIA が我々に、これは起きなかったしこの会合もなかったと言ったとき、このことが進行中であることを彼らは国民に知られたくないのだと私は思った。普通なら我々は、これがあつたあれがあつたという類のニュースを流すものだ。

私が不思議だったのは、軍のテープが消えたことだった。そんなはずはなかった。我々は[レー



ダーテープが保存される残りの期間]30日間のうちの15日間を使った。軍はその訪問者たちが誰だったかを我々以上に知っていた。そしてそれを誰にも知られたくなかった。テープの件はそのことを示す最初の兆候だった。もちろん、これに関わった下部の人間は、彼らの上層部で何が進行しているのか実際には知らない。誰かが電話をしてきて、それらのテープを再使用せよと言うなら、彼らはただそれを再使用するだけだ。実際、彼らは気にかけない。

彼らが私の考えを訊いてきたので、私はその上空に UFO がいたようだと言った。FAA のテープにそれが[連続して]映っていない理由は、それが航空機としてはあまりにも大き過ぎたために、それを気象現象と解釈し、記録しようとしなかったためだ[システムはそのような事物を除去するようにプログラムされている]。その日本人パイロットは確かにそれを見た。その日本人パイロットはそれを絵に描いた。その日本人パイロットは、彼自身が言ったことのために苦しい立場に置かれた。彼は彼の国を当惑させた。

[この日本航空 747 機パイロットの悲劇は、この問題の秘密を保つ上で嘲笑の力がいかに強いかを痛烈に思い出させる。このパイロットは長い間事務職に追いやられ、屈辱を与えられた。元 NASA 研究専門科学者だったリチャード・ヘインズ博士の証言を見よ。彼はその中で、この事件について知っていることと、そのパイロットが再び飛べるように援助したことを述べている。SG]

我々の軍の管制官は、それを見たと言った。我々の FAA 管制官は、それを見たと言った。我々の FAA 管制官は、しばらくして戻ってきて、本当はその目標を見なかった、何か別のものだったと言った。彼らが報告書を作成するのに何者かが介在している。だから、それは疑わしかった。

だが、自分が UFO 事件に関わっていたなどと人に言ったなら、彼らは必ずあなたを少しおかしいと見なすだろう。これが我々の国の現状だと思う。テレビ番組に出て UFO を見たと言う人々は、夜中に外に出てアライグマやワニを捕まえに行っているような無学な田舎者だけだ。洗練された人や専門の職業を持つような人々で、昨夜自分が見たことを進んで話そうとする人はどこにもいない。彼らは米国内ではそのことを表に出さない。だから、もしあなたが UFO を見たと言ったら、自らを変わり者の仲間入りさせることになる。おそらくそのことが、あなたが UFO について詳しい話を聞かない理由の一つだ。だが私に関する限り、1機の UFO が大空を横切り、半時間以上も日本航空 747 機を追跡するのをレーダーで見た。私が知る限り、それは我々の政府の持つどんなものよりも速かった。

こうして、私は FAA で多くの隠蔽に関与してきた。我々がレーガン政権のスタッフに報告したとき、私はそこにいたあのグループの後方にいた。彼らがその部屋にいた人々に話していたとき、彼らはその人々に、これは起きなかったと誓わせた。だが、彼らは‘私’にはそれを誓わせなかった。私をいつも悩ませたのは次のことだった。我々はこれらのことを行なわれるままにしている。人々がラジオやテレビで何かを見たり聞いたりしても、ニュースはそれを取り上げない。なぜなら、それは存在しないからだ。何も言わないことが私には苦しかった。

これをすべて見てしまったことが、まだ私を苦しめている。私はそのすべてを知っている。その答えと一緒に私は歩き回っている。そして誰もその答えを私に訊ねようとしない。私はやや苛立ちを覚える。我々の政府がそんなふうでなければならぬとは思わない。我々がこれと同じような物事に出会ったとき、[それを隠さなければ]世界で何が進行しているか、おそらく人々はもっと知ることが

できるだろう。もし彼ら[UFO]があのような機械で、あのような距離を旅行することができるとすれば、この地球で人々の健康、食料供給、癌治療のために彼らができることは計り知れないのではないか。あの速度で旅行することができるということは、彼らには我々よりずっと知っていることがあるに違いない。

もしこれらの UFO が実在するとしたら、いつかレーダーに映るはずであり、それを見る専門家たちがいるはずだという人々に対して、私は 1986 年に遡ってそれを見た十分な数の専門家たちがいたと彼らに言える。それはワシントン D.C.にある FAA 本部にまで持ち込まれた。その長官がそのテープを見た。我々が報告を行なった人々は、全員それを見た。レーガン政権の科学調査チーム、その三人の教授たち、博士たち、彼らはそれを見た。私に関する限り、彼らはそれに対する私の考えを検証した人々だった。彼らはそのデータに、とてもとても興奮していた。これは 1 機の UFO が 30 分以上もレーダーに記録された唯一の事件だと彼らは言っていた。彼らはそれを見るための全データを持っている。

さて、30 分間のレーダー反射データが部屋中の箱に詰められた。箱は 2 段か 3 段の高さに積み上げられた。見るべき大量の書類があった。彼らは今やレーダーの周波数を知った。彼らはそれがいかに速く旋回したかも知った。彼らはそれがどこにいたかも知った。そこにはそれを確認する軍がいた。

それなのに、これと同じようなものを見たと言う人々をどう見るか。私が思うに、政府が世間の人々に望むのはこういう見方だ。彼らは変人であり、少し狂っている。だから彼らには用心しなければならない。それが彼らから受ける印象だ。私はそういう印象などまったく気にしないが...

**SG:** FAA 本部での会合にいた CIA や他の人々の名前を覚えていますか？

**JC:** 私が CIA の人間に名刺を渡したら、彼はこう言った。“我々は会社に属している(彼らは CIA だとは言わなかった)。会社では名刺を持たない。我々は会社の名刺を持っていない” 彼らは名刺を持っているかもしれないが、それは会社とは何の関係もない。そして彼は、渡せるものは何もないと言った。提督の日程表にはその部屋を予約したのは誰か、その説明会の当日誰がそこにいたかが書かれているはずだ。

私が言えることは、私自身のみで見たことだ。私にはビデオがある。私には録音テープがある。私には、私がこれまであなたに話してきたことを確認する綴じられた報告書がある。そして私は、あなたが FAA の政府高官と呼ぶかもしれない人々の一人だ。私は部長だった。私は提督より 3, 4 階級しか位が低くなかった。我々はすべての航空便の事件と事故を調査した。

*[実際、それらがレーダーで記録され、有能な専門家によって解析された証拠がないという理由でこれらの物体が現実ではなかったと主張する人々は、今や誤りを認めるべきだ。ここに登場したのは一人の経験を積んだ FAA 職員である。彼は記録に基づいてその事件が起きたこと、CIA 等の政府当局者たちがこの事件を秘密にするように命じ、その証拠を押収した(と彼らが考えた)ことを述べている。我々は名乗り出たキャラハン氏の勇気に、またこの事例の証拠を保存し伝えた氏の勇気に深く感謝する。SG]*

米国空軍軍曹 チャック・ソレルスの証言  
Testimony of Sgt. Chuck Sorrells, US Air Force

2000年12月

チャック・ソレルスは米国空軍の職業軍人だ。彼は 1965 年にエドワーズ空軍基地にいた。そのとき同基地の空域に、1 個ではなく少なくとも 7 個の UFO が現れ、とてつもない速度で異常な運動をした。右旋回等の動きを見せたが、それは当時知られていたどんな航空機もなし得ないことだった。それらの物体は数箇所のレーダー画面に現れ、それを視認した人たちも何人かいた。一人の UFO 特務将校が、これらの物体を迎撃するために慌てて 1 機のジェット機に発進許可を与えた。この出来事は 5 時間ないし 6 時間続いた。この事件の録音テープの筆記録が彼の証言の後に続く。

CS: チャック・ソレルス軍曹

SG: スティーブン・グリア博士

**SC:** 私の名前はチャック・ソレルスだ。私は 1954 年に空軍に入り、1974 年に退役した。空軍では技能軍曹だった。私は空軍にいた期間のほとんどを航空管制官として過ごし、カリフォルニア州のエドワーズ空軍基地、日本、タイ、アラスカ、それに米国内の数箇所で勤務した。

この出来事は 1965 年 10 月 7 日にエドワーズ空軍基地で起きた。それは深夜当番のときで、私は管制塔で勤務中の航空管制官だった。午前 1 時半かそんな頃、私は管制塔の東方にとても明るい光を認めた。それは 1 個の薄緑色の光体で、その底部に赤く光る部分があった。赤い光は明滅していた。また、その頂部には白く輝く部分があった。光体はとても明るく、かなり大きかった。私はそれをかなり長い間観察していた。というのは、その時刻その空域には航空機がいなかったからだ。私は階下のベースオペレーションでその夜の勤務に就いていた飛行管理員と気象予報員を呼び、皆で外に出て見るように言った。勤務に就いていた迎撃隊の一人にも見るように言い、下にいた大尉にも見るように言った。我々はそれについてしばらく語り合った。ラプコン (RAP-CON) (基地のレーダー要員) は、その時刻その空域に一機の航空機も捉えていなかった。

我々はロサンゼルス防衛区の防空部を呼び出した。そこの部長は、彼が管轄するサイトに電話をかけまくった。それが見えていたある時刻に、彼らは少なくとも 4 箇所のレーダーサイトでその物体のレーダー反射を捉えていた。それらの UFO はジョージタワーなど、他の数箇所の管制塔でも見られていたし、他の幾つかの場所でも見られていた。こうして、これらの UFO を地上で見ている者が何人かおり、[それらを見ていた]レーダーサイトも約 4 箇所あった。この光体は 2 時間ないし 3 時間行ったり来たりを繰り返した。ついに彼らは、それに接近して観察するために 1 機の航空機を緊急発進させることを決めた。これは別の上級司令部と調整されたもので、その中に NORAD (北米防空軍) が入っていたと私は考えている。

*[彼らの否定にもかかわらず、この紛れもない UFO 事例に NORAD が関与していたとする軍航空管制官マイケル・スミスの証言を見よ。SG]*

ジェット機はそれを見るために近づいた。彼らはパイロットにこれらの目標を迎撃させようとした。最初に私は、1 個の大きな光体を見た。しばらく時間が経過してもそれはそこに止まったままで、ほとんど動かなかった。しかし、星やそれに類するものにしてはあまりにも地平線に近かった。それは

山や丘などよりも低かったので、星ではなかった。だから、私にはそれが何であるのか見当もつかなかった。そのときまったく突然に、さらに 3 個の物体がそこに現れた。それらは皆同じような光り方をした。だが、これらの 3 個の物体は一緒のままだった。編隊を組み、一緒のままだった。やがてそれらは私の南側に移動し、そこでしばらく静止した。ややあってさらに 3 個現れた。しかしそれらは一緒ではなかった。それらは別々に飛び回り、北、南、東、西へと飛んだ - 多様な動きを見せていた。この時点で、私は同時に 7 個を見ていた。彼らが迎撃ジェット機を緊急発進させる決定を下したのは、このときだった。そのときはもう明け方になりかかっていた。

彼らはこれらの UFO を迎撃できずにいた。彼らは管制塔の私に情報を要求し続けた。“この物体は本機に対してどちらにいるか？”私にできることは、彼を滑走路と同じ方向に向けさせることだけだった。滑走路なら、私がいる場所から見た彼の機首方位を知ることができた。こうして、彼が滑走路の端に来るとすぐにその機首をある方向に向けさせ、そのまま進めと言った。その夜、彼は異なる時刻に 3 回ほど‘コンタクト’と言った。‘コンタクト’とは、彼が操縦席のレーダー上で何かを捕捉したことを意味する。それが何だったのか、我々は今でも分からない。だが、それらは現実の物体だった。

あるとき、その迎撃機は 4 万フィートまで上昇した。彼がその物体に近づくと、物体は大変な高速でまったく突然に真っ直ぐ上昇した。彼はちょうどその下を通過した。テープには部長がこう言っている箇所がある。“管制塔、彼(\*パイロット)はどんな様子か？”私 - “彼は低い”部長 - “おい、4 万フィートだぞ”私 - “知るもんか - 彼はまだ低い”

*[彼が言及しているテープは、この数時間に及ぶ遭遇の実際の会話録音テープである。我々はこのテープを持っている。この後に続くこのテープの筆記録を参照されたい。SG]*

その UFO は高度を上げたただけだった。彼らはレーダー、高度計など、使えるものは何でも使って探査した。その時点で、それ(\*UFO)が彼らのレーダー上空にいたことはほとんど確実だと私は思っている。

**SG:** それはどれくらいの高さだったのですか？

**CS:** おそらく 10 万フィートくらいだったと思う。当時は 8 万フィートから 10 万フィートがおそらく彼らの探知能力だっただろう。

その迎撃機は異なる時刻に 3 回捕捉した。それから彼はそれを見失った。これらの物体は私の当番が終わるまでそこで動き回った。明るくなり始めた頃、それらの UFO は大気中を高く、高く、さらに高く昇り始めた。星も見えなくなるほど明るくなった頃には、それらもまた行ってしまった - それらはまさに大気中に消えたのだ。

私はあらゆる種類の航空機を知っている。だから、これの正体でなかったものを多く挙げるができる。それはヘリコプターではなかった。それは飛行機ではなかった。それは気球ではなかった - 気象観測気球でも、他のどんな種類の気球でもなかった。それは知られているどんな航空機でもなかったし、我々が今日知っている、あるいは当時知っていたどんな飛行物体でもなかった。また、

それはレーザーショーでもなかった。そんなものではなかったが、ものすごい速さで移動することができた。それらは私の視界の東側にいたかと思うと、瞬く間に西側に移動する。あなたが指を 2 回鳴らす間に、おそらく 30 マイルから 40 マイルを移動する。そんな動きだった。本当に速かった！そして、それらは上昇することができた - まさに上方へ一直線に。しかも瞬時にそうすることができるように思われた。それらは時々静止し、そのまま長時間動かず - それからまた動いた。小さい方の 3 個の物体は、他の物体よりも多くの動きを見せた。最初のとても大きな UFO はそんなに動かなかった。それでも数時間後、それは東から少しだけ南に向かって動いた。その後再び東に向かって少し動いた - そんな具合だった。それは突然の速い動きはしなかったが、彼らがそれに迎撃を仕掛けようとしたとき、真っ直ぐに上昇した。

個別に動き回っていた 3 個の物体は、素早く北、南、東、西へと動いた。それらは本当に速く動いていた。それらは実際に基地に近づいたり地面に近づいたりした。私はその高度がときには 2,000 フィートかそれ以下だろうと判断した。それらが我々のレーダーの探知範囲外にあったことを私は知っている。それは高度 4,000 フィートから 1 万フィートまたは 1 万 1,000 フィートまでのどこかで起きる。だから、それは地面にかなり近かった。

これらの UFO は、レーダー信号を返す何らかの固体金属であるはずだった。レーダーとはとても単純なものだ：その電波ビームは、何かに当たり何かで跳ね返され、戻ってくる。つまり、レーダーを跳ね返す何かが必要ならなければならない。それはゴム気球とかそういうものでは跳ね返らない。それは電波を跳ね返し、レーダー画面に表示される金属の性質を持った何かでなければならないだろう。

**SG:** これらの物体の速度を推定できますか？

**CS:** 時速数千マイルでなければならないだろう - 速度ということなら、その程度に達するだろう。これらの物体はとてつもなく速いはずだ。レーダー操作員たちは、それらの速度を判定するのに難儀していた。というのは、それらはある場所に少しの間いたかと思うと、次にものすごい速さで移動したからだ。レーダー画面が回転走査してそれを見つけようとしたときには、その UFO はすでに別の場所にいた。それらに対して速度のような量を判定するのは大変難しかった。それが東に見えていたとしよう。もしちよつとの間辺りを見回して、ほんの少しの間だけ注意が他のどこかにそれたとすると、次にそれが見えたときには、それは西の向こうにあるのだ。それらは急な方向転換をすることができたし、当時我々が知らなかったあらゆる種類の運動性をも見せた。それはとても奇妙な夜だった。

これらの出来事は、少なくとも 4 時間の時間枠を超えて発生した。当時は、どの基地にも彼らが UFO 将校と呼ぶ要員がいた - 未確認飛行物体将校。我々の基地にも一人いた。彼の仕事は、この物体を見て調べる命令を実際に出すことだった。ロサンゼルス防衛区の防空部長とレーダー操作員たちはそれを調べたかったが、彼らは合法的にそれをする前に UFO 将校の許可を得る必要があった。

そのときエドワーズ空軍基地にはロケットサイトがあった。彼らは異なる燃料のあらゆる組み合わせを使って実験をしていた。彼らはそこで大量のロケット燃焼を行ない、どんな推力が得られるかを調べていた。私の考えでは、この巨大な UFO が静止していたのはちょうどその地域だった - まさ

にそのロケットサイトの上空だった。

その夜に彼らが緊急発進させた F-106 は、彼らが冷たい鳥 (cold bird) と呼んでいたものだった。それは何の武装もしていなかった。

**SG:** あなたが空軍にいたとき、UFO とこの種の遭遇をした人々のことを聞きましたか？

**CS:** 確かにいた。同じような物を見た人々が語るのを私は聞いたことがある。だが、彼らは必ずしも名乗り出て見たことを言おうとしなかった。彼らは頭がおかしくなったとか、幻を見たとか言われて、自分に不名誉な烙印を押されることを望まなかったからだ。そうでなければ、彼らは仲間に冷やかされたくなかった。

今持っているその夜の出来事のテープには、これに関わった様々なレーダーサイトからの無線や電話による音声が入っている。私がいた管制塔で記録されたテープもどこかにあるだろう。なぜなら、管制塔で進行していたことのすべては記録されたからだ。

私が一度に見たそれらの物体の最大数は 7 個だった。1 個の大きな物体があり、その他に同種の性質を持つより小さな 3 個の物体があった。これらの 3 個は一緒のままだった。この後のある時点で、さらに別々に飛び回る 3 個の物体があった。ある時点で、私は一度に 7 個を肉眼で見た。今そのテープを聴くと、その夜その地域には 11 個もの物体があったように聴き取れる。

[それらが]何であるのか、私には分からない。だが、それらの正体でなかったものは沢山挙げることができる。我々が今日知っているものであのような性質を持つものはどこにもない - 無音で、あの動きと速度を示すもの。何度か、それらは管制塔に近づいた。もしジェット機か何かだったら、その音を聞いていただろう。それらが何であったのか、知りたい...

[このきわめて重要な事例には、熟練した空軍航空管制官、公式の 'UFO 将校'、4 箇所のレーダー基地、迎撃機搭載レーダーによる自動追跡、長い時間、および数時間に及ぶ多くの出現物体が関わっている。これを捏造だという人々と UFO 問題を嘲笑う人々は、これらの要素のすべてを説明できなければならない - また実際に起きた事柄の肉声のテープについても。ただ一つの結論は疑い得ないものだ: これらの UFO は現実だった。沼気 (メタンガス) ではなかった。火の玉 (球電) でもなかった。幻覚でもなかった。また、これらの出来事に対して学界と官僚によって与えられた、他のいかなる馬鹿げた解釈でもなかった。SG]

エドワーズ空軍基地の音声テープからの抜粋 - 1965 年  
Excerpts from Edward Air Force Base Audio Tape - 1965

記号

P: パイロットたちの声  
A: 管制官たちの声  
O: 将校たちの声  
H: 高度監視官  
SP: サンペドロ駐屯地  
FS: 飛行管理官

A: ビクタービルとエドワーズの間で何か捕捉したか？

P: ここに 1 個いる。

A: それらは立ち去るように見えるか？

P: [不明瞭で聞き取れない]

A: それらは遠ざかっているか？

P: 自分はすでに... 将校... 見るのに間に合わなかったようだ。それらは上昇している。

A: すると、それらは立ち去っている様子か？

P: そのとおりだ。それらは遠ざかっている。南にいるそれらは真っ直ぐ上昇している。全部だ。

A: そうか。そこにいるおよその数は？

P: 少し前には数個だった。

A: なるほど。

P: 現在は 1, 2, 3, 4, 5 個だ。上昇している。

A: それら 5 個も上昇中か？

P: それら 5 個全部が上昇している。

...

P: ええ、それらは全部上昇中です。

O: (クラーク大尉) 本当か？

P: 本当です。今それらは全部上昇しています。

O: (クラーク大尉) よろしい、君は我々のちょうどほぼ南に 1 個の明るい星を見た。そこからどの方角だ？ あの明るい星だ - 高度約 45 度のはずだ。

...

P: 今ここから全部見える。赤い光は停止している。それら全部が向かっている先は...

O: 本当か？

A: あの明るい光の監視をまた始める。

O: 分かった。

[背景の声はパイロットが言うことを無線か電話で他の部署に説明している]

P: 3, 4 個が南にある。弱い光だ。

...

P: それらの 1 個から赤い光がまだ時々見える。

O: 大きな光のどちら側だ？

P: その下側でやや南だ。そのうち 3 個がほぼ一直線だ。

O: なるほど。

P: ほぼ水平だ。

O: 分かった。

P: それらから赤い光がまだ時々見える。大きい光からは見えない。

...

P: この宇宙 - この宇宙将校が私と一緒に一晩中これを見ている。もう一度彼を出して私と同じ印象を彼が持っているか訊きたい。こんな現象を見ているのが私一人だなんてことにしたくないからな。

A: 了解した[笑い]。

...

O: 管制官が一人呆然としているようです。誰かが彼の話を確認しました。今それらはすごい速さで上昇していると彼は言っています。

A: ではしばらく様子を見る。それらが何を求めているかだ。

O: 分かりました。

A: レーダーから消えた。

...

O: \_\_\_\_\_が別の電話中だ。彼が私と同じものを見ているか... それら全部が急速に上昇中だ。私にはそう見える。多分そのように見えるはずだ。その明るい方はどうだ? それは真っ直ぐ上に見えるか? 真っ直ぐ - 今は最初に言ったときより遙かに上だ。

...

O: こちら再び[名前不明]だ。私が見ているものを基地の観測が確認した。それらはすべて上昇中だ。予報官が私と一緒にずっとこれを観測している。彼は参照点を使ってその動きを判断している。

O: 分かった。

O: 最初の高度より遙かに高いと彼が言っている。間違いなく上昇している。

O: 今の高度を推定できるか?

O: 敢えて推定したくないが、多分 3 万から 4 万だ。だがこれはまったく肉眼による推定の限度を超えている。

O: 低くはないんだな?

O: いえ、低くはありません。元の位置から離れています。最初はせいぜい 5,000 フィートでした。

O: 我々は何回か高度を測定した。だが UFO 将校は我々にそれを見に行かせるつもりだった。我々は待機していたが、その後彼からは何もない。

O: 彼はまだそれを作戦行動にしていらないと思う。

O: 我々が出動する前にこの大尉が \_\_\_\_\_まで降りてきて見てほしかった。赤い光はもう見えない... [同時に二つの声]。一つはまだはっきりと明滅している。それらは全部まだ明滅しているが、もうかなり遠い。赤い光は見分けられない。小さい赤い光は底部の障害灯のように見えた。

...

A: このとおり、空が混み合っている。いや、交通量は多くないが、今その空域で幾つか動いているものがある。それらは不法に近づいてきたのだと思う。結構な状況じゃないか?

A: そうだ、それは[不明瞭で聞き取れない]。

...

O: こちらは再びクラーク大尉だ。



**O:** はい、クラーク大尉！　そこで何か見つけましたか？

**CC:** 今あの明るい星に面している。それがそうなら見てくれ。その下、やや右だ。そこに‘V’の字になっている3個が見えるだろう。

**O:** 君が見ているのはそれか？

**A:** はい、そうです。

**CC:** そのVの底辺上に1個見える。右上に向かっているVだ。

...

**A:** 南に3個...まるで...その一つが点滅し、次々に他が点滅する。

...

**A:** 私は1時間50分それを見ている。

**O:** ああ。

**A:** ほぼ2時間経った。その間に高度は2倍、西に5,6マイル動いたようだ。

**O:** なるほど。

**O:** [別の将校]そこに風があるか？

**A:** はい、管制塔では風があります。今は弱くなっています。2ノットより大きくはありません。東風です。これらの物体は西向きに動いています。

**O:** よし、そのまま追跡してくれ。今ランスから報告を受けた。そこで何か動きを捉えたらいい。彼は今私の双眼鏡で見ている。

...

**O:** 皆さん、現場の高度監視官がここにいます。では\_\_\_\_\_ストラブル少佐。少佐の話を聞いた人は回線をそのままに。

**A:** これから高度監視官が話します。

**H:** よろしい。目標は091に3マイル移動している。それは80マイルの030度から30、えー、50の060まで移動\_\_\_\_\_サイトからだ。

**O:** どのサイトか？

**H:** サンペドロからだ。

...

**O:** アルファ・ゼロは捕捉している。約15か20右と言っている。

**A:** 220か？

**O:** そのとおりで。

**O:** アルファ、我々の他機が今そこにいるか？

**A:** いいえ、いません。しばらくそれらの様子を見ます。

...

**SP:** 345。距離約80。

**H:** 了解。それは迎撃機だ。

**A:** 間もなくここでまた彼を090に旋回させる。管制塔の頭上だ。よろしい。それを右090に向かせろ。

**H:** ペドロか？

**SP:** そちらではこれらの物体から何かデータを得たか？

**H:** やあ、ペドロ。

**SP:** こちらはペドロだ。調子はどうだ？

**H:** 申し分ない。そちらの一番を手動にし、その迎撃機を追跡してくれ。先回りしてそれを追いか

けるタイミングを教える。

...

A: よろしい, 今アルファ・リマが見える。

A: そうだ, 捉えたと言っている。12 時 16 だ。

A: そのとおり。

H: ペドロ, 了解した。高度探査を彼の前方 7 度に回してくれ。高度探査をその前方 7 度に回してくれ - その迎撃機の前方だ。

O: 捉えたようだ。

H: 管制塔, 聞こえるか?

A: 何か?

H: 今彼の様子は? 何かに向かっているか?

A: 順調だ。うまくやっているようだ。

H: ブリップ(\*レーダー画面上の輝点)が合体しつつあるか... つまり...

A: そのとおり, 彼は接近している。

...

H: よし, そのまま進め... そのまま前に進め。目標の前方 25 から 15 度まで進め。

O: 聞こえるか, 管制塔\_\_\_\_\_

A: それらは接近しつつある。彼はそのやや南にいるようだ。左旋回, 左旋回。低い高度で左旋回。彼は低い高度で左旋回。物体は上昇している。

H: 管制塔, 今の状況は?

A: 彼は低い! 上を探せ - 上を探せ。ずっと上を探せ, 物体は上昇している。すごい速さで上昇している。

O: 管制塔からは今彼の真上に見えるように見える。

A: 彼のほぼ真上で上昇しているようだ。

H: 分かった。ペドロ, 戻せ。迎撃機に戻せ。

...

A: だが私からその物体が見える。元の位置からずっと高い。

H: よろしい。アルファ・リマは 4 万まで上昇する。

A: 分かった。

H: よし, ペドロ。高度探査を 030 度に向ける。

A: アルファ・リマに着陸灯をつけさせろ。

...

O: その位置に印をつけろ, シヤーム。またレーダーで捉え損なった。

A: 高度は?

H: 01, 今は 20 で 060 だろう。

...

H: レーダーでそれを捉えたようだ。そちらの駐屯地から 10 の 075 だ。

SP: 10 で 075 か?

H: そうだ。そこに何かいるか?

SP: 075 に 1 個いる。\_\_\_\_\_

H: 了解。

SP: そして高い。彼は今我々の探知範囲外にいる。

**H:** どの高度探査だ？

[同時に複数の声]

**O:** ランス, こちらは管制塔。

**H:** 了解。

**O:** こちらはクラーク大尉だ。ここからエドワーズの東にかけてこれらの物体の高度が分かるか？

**H:** 分からない。高度探査でそれらを捕捉できない。その下を通過するか接近する迎撃機を目標にそれらを追いかけている。

**CC:** 分かった。

**H:** つまりその近傍だ。現在, 高度探査では彼らを捕捉できない。彼がその下を実際に通過する時刻を教えてください。ここにいるサイトの監視員がその位置を記録し, 私はその空域に両方の高度探査をかける。

...

**H:** 輝く物体が 12 時の方向に？

**A:** 12 時のはずだ。

**?:** [叫び声]12 時に輝く物体がいる。

**A:** 彼をあと 10 度左に向けさせろ。左 060 だ。

**H:** 今 060 だ。

**A:** 彼はその右を通過する。

...

**H:** 何か見えるか？

**A:** いいえ, 捕捉を試みた 2 個だけです。管制塔からは彼がその下を通過したように見えました。

**H:** エドワーズか？

**A:** はい, そうです。

**H:** そちらのほぼ南東に 1 個いるか？ 今の時点で約 3 マイルだ。

**A:** 3 マイルですか？

**H:** そのとおりで。南東のずっと近くだ。そこで何か捕捉したかもしれない。

**A:** 待ってください, 何か見えます。双眼鏡で見ます。

**H:** 120 だ。

**A:** 今, 双眼鏡で見ます。

[背景の音]

**H:** ペドロ, そちらが捕捉した目標の対地速度は？

**SP:** 今話した目標か？

**H:** そうだ。

**SP:** 分からない。2 回走査したら消えた。

**H:** それを 2 回走査したら消えた。心配したとおりで。管制塔, 聞こえるか？管制塔, 聞こえるか？ ふうむ。楽観できませんが, あの戦闘機はどこかを飛んでいるようです。

...

**H:** そこで捕捉したようだ。

...

**A:** それは約 1 万 6,000 フィートか？

**H:** 1 万 6,000？

**A:** そうです。上官殿？ W.D.？ やあ！

H: 了解。そのとおりだ。そのエドワーズの目標は 1 万 6,000 だ。  
O: 目標を 1 万 6,000 で捕捉したのだな？  
H: そのとおり。  
O: それは 1, 6, 1,000 か？  
H: そうだ, 1 万 6,000 だ。ペドロ, 聞こえるか？ 高度探査をそれに固定して自動追跡してくれ。見失うな。  
SP: それは 106 のままか？  
H: そうじゃない。今まで経験したことがない範囲だ。それは, えー \_\_\_\_\_ エドワーズだ。  
SP: 了解した。分かった。我々がそれを開始する。  
H: それから目を離すな。前回それは分裂した。覚えているか？  
O: まだ双眼鏡で探しているのか？  
H: 管制塔, 回線に戻れ。はい。あの目標はレーダーから消えました。  
...  
H: 彼はその正面から接近している。  
O: 了解。それで追跡できているか？  
H: いや。エドワーズが追跡できている... 高度探査がまだそれを捉えているか？ 管制塔？  
A: はい。  
H: 01 が 10 の 120 で今接近中。  
A: 10 の 120。高度は？  
H: 彼は 15 まで降下している。  
A: こちらはそれを捉えていない。  
H: よろしい。01 は視認している - 点滅している目標だ。彼の現在位置の下だ。  
A: 彼は 1 個捉えているのか？  
H: そうだ, 彼は捉えている。  
A: よし。008。彼はいい位置にいる...  
...  
H: 見てくれ, 彼は今旋回している。彼は君の頭上で右旋回しているようだ。  
A: 彼は \_\_\_\_\_  
H: エドワーズ, 聞こえるか？  
A: どうした？  
H: 今 01 を捉えているか？  
A: そうだ, 今彼を追跡している。  
H: 彼はまだ目標の近くにいるか？  
A: それが目標かはっきりしない。我々はそれを見た。我々は彼が見ているものを見ているが, 管制塔からは点滅しているように見えない。彼が見ているものを見ていると思う。そこにある何かを見ているが, 何なのか分からない。  
[ひどい背景雑音が続く]  
A: それは目標ではないのだろうか？  
A: それは今まで見たもののようではない。それはずっと遠くにあるようだ。彼は原野の上空を飛んで戻ってきた。彼は今私から見て西に向かっている。いいか？  
H: もう一度言ってくれ。  
A: 彼は今西に向かっている。いいか？

**H:** 了解した。

**O:** 迎撃機はあの目標 010 を捕捉したか？

**H:** 彼はちょうどその上を通過した。彼がそれを視認したかどうかは知らない。

**A:** . . . それは静止している。

**H:** それは静止しているのか？

**A:** 了解。1 万 6,000 か？

. . .

**H:** レーダーでまだそのコウモリを捉えているか？

**SP:** それをまだ調べている. . .

**?:** 109 を調べて捉えたものが何かみてくれ。

**H:** 彼を 1 万 6,000 で捉えた, そうだな？

**SP:** そうだ。それは静止している。ほんの一度ばかり動いただけだ。まだ変化はない。

**H:** よろしい。その高度探査を自動にしろ。それに作動指令を送りたい。

**SP:** そうする。

. . .

**A:** 君が言う 12 の 130 の位置でレーダー捕捉した。

. . .

**O:** 今それに ETM を作動させているか？

**H:** そうだ。

**O:** こちらは今それを捕捉していない\_\_\_\_\_。よろしい, 01 はこれらの物体を視認しているか？

**A:** している。

**O:** ではリマ 01 を外す。

**A:** その他は見えない。

**H:** それらを全部見失ったのか？ 01 は地表で点滅しているような幾つかの反射を見たと言った。

**A:** 地上で点滅しているような反射なのか？

**H:** そうだ, 湖底からだ。

**A:** 何か分からない - こちらの航路標識か？

**H:** いや, 航路標識なら知っている。よろしい, 皆さん, キーを抜いて回線を切るのがよさそうだ。

. . .

**FS:** こいつは驚きだ。

**H:** 彼は見える物体に向かって 15, 20, さらに 4 万フィートまで上昇し, 地上からの目視観測によればその真下を通過したと思われる。だが私の記録ではその下を飛行したものは何もない。

**FS:** よろしい, どうもありがとう。とにかく興味深い。

**H:** そのとおりだ。我々も不思議に思っている。

**FS:** まったくだ。

**H:** その理由を知ることはなさそうだ。

**FS:** そのとおり。知ることはないだろう。よろしい, 電話をありがとう。

## 米国空軍レーダー管制官 マイケル・W・スミス氏の証言

### Testimony of Mr. Michael W. Smith, US Air Force

2000年11月

マイケル・スミス氏はオレゴン州、次いでミシガン州で空軍の航空管制官を務めた。このどちらの施設にいたときも、UFO がレーダーで追跡され、とてつもない速度で移動するのが人々により目撃された。スミス氏は証言の中で、基地要員たちがこれらの目撃について秘密を守るように求められたこと、NORAD (北米防空軍) がこれらの出来事を完全に知っていたことを確認する。実際に、ミシガン州でのある出来事では NORAD が全面的に関与し、これらの UFO を避けて B-52 爆撃機を基地に帰還させた。

私の名前はマイケル・スミスだ。私は 1969 年から 1973 年まで空軍に勤務し、航空管制と早期警戒要員を務めたが、基本的には航空管制官だった。我々の任務は軍用機に対してそれを追跡し、高度を指示すること、また我々の空域に侵入する航空機を発見し、識別することだった。

1970 年の春、私はオレゴン州クラマスフォールズに配属されていた。私は夜勤当番をするためにそのレーダーサイトに出勤した。いつもならレーダー室には二人か三人の要員がいるが、その日は厨房員から保守要員まで大勢いた - あらゆる職種の人々がいた。私は何が起きているのかと訊いた。すると彼らは、レーダーで UFO を見ているのだと言った。私はそれを聞いて驚き、ペンタゴン (国防総省) には知らせたか、大統領には電話したかと訊いた。彼らは、していないと答えた。彼らはそれをしていなかった。それで私はこう言った: では報道関係者か誰かに知らせるべきではないか - これは私にとって重大事件だった。すると彼らは“いや、落ち着いてくれ”と言った。

NORAD [North American Air Defense Command (北米防空軍)] はこれを知っている。彼らは NORAD を呼んでいた。上級下士官が私を脇に引っ張り、NORAD はこれを知っていると言った - 我々が知らせる相手は彼らだけだ。我々はこれについて語らない。我々はこれについて誰にも話さない。知っている人は知っている。我々はただ監視し、何が起きるかを見る、それだけだ。それが我々の仕事だ。私は、報告書か何かに記録すべきではないのかと主張した。すると彼は、君が提出する報告書ならあると言った - それは約 1 インチの厚さがあり、最初の 2 頁は目撃に関することだ。残りは基本的に君の心理分析結果、君の家族、君の血縁関係、その他あらゆることが書かれていると。

空軍がそれに目を通せば、君は麻薬をやっていたとか、母親は共産主義者だったとか、その他信用を落とせるものは何でも使って、君の信用を完全に落とすことができる。君は決して昇進できない。君は向こう 3 年半北極でテント暮らしをし、気象観測気球のおもりをすることになる。昇進の望みはないのだ。だから、そのメッセージはきわめてはっきりした明瞭なものだ: ただ口を閉ざし、誰にも何も言うな。

この UFO は静止したまま、まったく動いていなかった。次にそれはゆっくり高度を下げ、山の陰に入った。だから、レーダーからも消えた。約 15 分間はそのままだったが、次にそれはその場所の上空 8 万フィートないし 9 万フィートに現れた。次のレーダー走査では、それは 200 マイル遠方であり、静止していた - 完全な停止だった。それはそこに 5 分間ないし 10 分間空中静止し、それ

からゆっくり降下を始め、レーダーから消えた。次にそれは再び姿を現した。私はそれが 3 回繰り返されたのを見た。

これがもう一度起きたことを私は知っている。ここでは珍しくないことだと私は聞いた。彼らはこのような現象をしばしば見ているが、私自身は 2 回見た。

パイロットの顔が風防を貫通することなしに、あのような加速、減速を行なうことができる航空機はない。つまり、重力の中であのような動きは不可能だ... だから、それは我々が持っていない何かであることは明らかだった。我々は、それらに対して迎撃機を緊急発進させたことは一度もない。だから、それはロシアが絶対に持っていない何かであることは明らかだった。それは UFO だった。それが可能なただ一つの説明だった。NORAD はそれについて知っていた。彼らはそれをまさに UFO として処理した - それを監視し、何が起きるかを見る。他には何もするな、誰にも話すな、それを記録するな、それを公にするな。

NORAD は米国と北米の全空域を管轄している。彼らの仕事は、侵入するどんな航空機、どんな脅威に対してもそれを識別することだ - ロシア機であれ何であれだ。彼らがまずすることは、定期航空便、個人機、その他何でも、その飛行計画の一覧表と照合することだ。すべてが照合され、確認される。だから、この UFO のような何かはひょっとしてレーダー画面に現れ、飛行計画にもなく異常な飛行をしたら、それを識別するのが彼らの仕事だ。彼らは北米のすべてのレーダー基地と連携している。レーダー信号はすべてコロラド州のシャイアン山[NORAD 司令部]に行く。彼らは大きな画面を持っており、国土のあらゆる部分をいつでも見ることができる。

私のもう一つの経験は第 3 当番で起きた。私がレーダーに向かっていたとき、NORAD から連絡があった。NORAD は、カリフォルニアに近づいている UFO が 1 個あり、それは間もなく私の受け持ち範囲に入るだろうと言った。

“どうすればよいか”と私は訊いた。彼らはこう言った。“何もない、ただ注視せよ、それを記録するな”我々には 1 冊の日誌があり、それには異常なことなら何でもその経過を記録することになっている。しかし彼らは“それを記録するな、何も書くな。だまって注視せよ。我々は今君にただ知らせているだけだ - 注意せよ”と言った。NORAD は、これらの UFO が動き回っていることに明らかに気付いていた。私がレーダーで初めて UFO を見たとき、人々の行動はまるでそれがいつも起きているかのようなものだった。

あなたがレーダーで初めて UFO を見たとき、政府がこれを知っていることに気付く。ではなぜ彼らは報道機関に知らせないのか？

しかし、私が脇に引っぱられたときの説明は、このようなものだった。そのとおり、UFO は実在する。我々はそれを知っている。NORAD もそれを知っている。だがそれだけだ。これは秘密だ。君はこれについて話してはいけない。誰にも話すな。どんな報告書も書くな。それを記録するな。口をつぐめ。そうすれば君は次の階級章を得て昇進し、先に進むだろう。

もう一つの遭遇が、私がミンガン州に配属されていたときに起きた。それは 1972 年だった - 1972

年の秋だったと思う。その夜私は一人で勤務していた。そのときまでに、私は軍曹に昇進していた。私は交換手から電話の呼び出しを受けた。交換手が言うには、電話の相手は州警察で、私と話したいということだった。電話に出た警察官は本当に取り乱しており、マキナック橋の北塔の上に 3 機の UFO がいると言った。マキナック橋はミシガン州のアップパー半島とロウアー半島とをつないでいる。

私はすぐにレーダーのスイッチを入れたが、すぐにその警察官に、レーダーには何も映っていないと返答した。私は受話器を置いた。これは予め決められていた言い方だった - もし何かを見ても“レーダーには何も映っていない”と答える。しかし実際には、その北塔はやや大きく見えた。そのとき私は、それらが UFO であることに気付いたのだ。1 機が他の 2 機を残して発進し、マキノー島を周回して元に戻った。それから 3 機すべてが、セントイグナスから北に延びる州間高速 75 号線に沿って移動し始めた。

そうこうしている間に、私は保安官事務所から電話を受けた。彼らは取り乱しており、“我々は UFO を追って高速を走行中だ”と言った。私は、レーダーには何も映っていないと返答した。何人かが電話をしてきた - 何人かの市民だ。報道関係者も一人いたと思う。その間に私は NORAD に電話し、彼らに知らせた。彼らはそれを見上げ、“ああ、それらは州間高速 75 号線を北上している、そうだね?”と言った。私は、そうです、時速約 70 から 80 マイルですと言った。

ところで、セントイグナスと[不明瞭]の中間に、キンチェロ空軍基地がある。そこは SAC(戦略空軍)基地の一つだ[1977年に閉鎖]。そこには B-52 爆撃機がある。そのとき、2 機の爆撃機が最終進入していた。それは州間高速 75 号線と交差している。明らかに彼らは、それらの 2 機の爆撃機を迂回させた。なぜなら、彼らは - 爆撃機が核兵器を積んでいたにせよ積んでいなかったにせよ - 高速を横切り、ほぼ同じ高度で爆撃機を UFO と遭遇させる危険を冒したくなかったからだ。それで彼らは 2 機の B-52 を迂回させた。

UFO が近づいたとき、私は UFO がこちらに向かっていることに気付いた - 高速に沿って、まさに私のレーダーサイトのそばを通過する。レーダーサイトは丘の上にあった。

私は、1 個の明るい青味がかった輝きが無音でそばを通過するのを見た。その後を赤と青の点滅するライトをつけたパトカーが追っていた。

もし私が、確かにそれらがレーダーに映ったと話していたら、次には新聞社がその話を聞きにやってくる、私はおそらく軍法会議にかけられていた... それらが実際にレーダーに映ったとき、何も映っていないと言ったのは、まさに本能的反応だった。私はそれらが高速道路をやってくるのを見ていた。それらは互いにぴったりくっついていて、まるで帰還した航空機のように見えた。言い換えれば、それは超低空の 1 機の航空機のような感じだ。

相手がバッジを付けているかどうかは関係ない - これを話してはならない。私は日誌にこれを書いた。そして翌日、私の上級下士官にこれを話した - しかし、これができるとのすべてだ。他の誰にも話すな。それを記録するな。もっとも、私はそれを記録してしまっていた。だが、その日誌をいつか誰かが見つけるだろうとは思えない。



政府、彼らは隠蔽する。彼らは誰かがそのことについて話すのを望まない。しかし、それは本当に驚くべき技術なのだ。これらの人々は、どこにも知れない場所からやってくる。思うに、彼らは皆に知ってもらいたいのではないか...

個人的な話をすれば、オレゴン州で起きた最初の事件の後、私は休暇をとって帰省し、そのことを父親に話した。彼はその間ずっと赤くなったり、蒼白になったり、青ざめたりしていた - かつての第二次大戦の英雄であり、大変な愛国者だ。私は、これらの UFO が日常的に目撃されると説明していた。父はこう言った。“いや、政府は UFO なんていないと言っている” 私は父に、これらをレーダー上で自分の目で見たんだと言った。そうしたら父は、いいかげんにしろ、政府は私に絶対嘘をつかないと言った。だが、ここにいるのはその息子だ；私は父に決して嘘は言わない。

そうしたら、父はどうしてよいか分からなくなった。彼が私にこう言ったのは、数年後ウォーターゲート事件が終わった後だった。“お前、ここに座って私にそれを話してくれるか？ 政府はウォーターゲートのような小さなことについて私に嘘をついていた。だから、彼らは何か大きなことについても嘘をついているに違いない”

それはもはや必要のない、政府の隠蔽活動だ。冷戦はすでに終わった。私はグリア博士と同じことを考える。つまり、彼らが持っている技術は化石燃料の燃焼、オゾン層の破壊などをやめさせることができるだろう。これらの人々は技術を持っている - 何か持っているに違いない。政府はそのことを知っている。彼らはこれらの異星人、これらの宇宙機、この技術、そのすべてを所有している。多くの逆行分析技術 (back-engineered technology) があることは、きわめて明白だ。他の政府が前向きに取り組み、それを認め、彼らのファイルを開示しているときに、これを隠蔽している者たちは誰か - 我々の政府はなぜそれをしないのか？

私が空軍にいたとき、他にもレーダーで UFO を目撃した人々が何人もいた。私が話をした多くのパイロットは、それらを追跡したり、それらに接近したり、それらと編隊を組んで飛んだりしていた。例を挙げると、私の友人が管制塔にいたとき、3機の迎撃機による飛行編隊が入ってきた。そうしたら彼は“おや、4機いるぞ”と言った。すると隊長が“違う、我々は3機だ”と続けた。彼は“周りを見ろ”と言った。実際にそのとおりで、そこには彼らと一緒に編隊を組んで飛んでいる1機の UFO がいた。

グリア博士が議会説明を行なうために[1997年4月に]我々をワシントン D.C. に連れていったとき、私はとても緊張していた。何が起きるか分からなかった。しかし、そこには12人ほどの他の人々がいて、私は本当に驚いた。私の話は、彼らが経験し遭遇したことに比べたら、まったく大したものではなかった。秘密がいかに深く進行しているか、隠蔽がいかに深いものか、それは実に目を見張るようなものだった - 宇宙飛行士から上院議員まで、誰もが何かが進行していることを知っているのだ。

米国海軍中佐 グラハム・ベスーンの証言  
Testimony of Commander Graham Bethune, US Navy

2000年11月

グラハム・ベスーン中佐は、最高機密取扱許可を持つ退役海軍中佐パイロットだ。軍では要人輸送機長を務め、ワシントン D.C.からの高官や民間人のほとんどを輸送した。彼は証言の中で、一団の要人とパイロットたちを乗せてニューファンドランドのアルゼンチアに向かったときのことを語る。そのとき彼らの全員が、300フィートの大きさの1機のUFOが彼らの前方で瞬く間に1万フィート垂直に上昇したのを目撃した。それはレーダーにも映った。彼はこの出来事を詳細な文書にまとめており、その選り抜きの数頁がこの証言に添えられている。

GB: グラハム・ベスーン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

**GB:** 私の名前はグラハム・ベスーンだ。私は中佐、海軍の退役パイロットで、パイロットを訓練する正規の海軍プログラムを履修した。ペンサコーラの航空アカデミーを卒業したのは1943年だった。そしてもちろん、すべての海軍パイロットは航法士の訓練を受ける。これは、これから我々がここで議論しようとしていることを話すときにとても重要だ。というのは、我々はすべての星座や、その類の物事を知らなければならなかったからだ。私はかれこれ13年間、星々を頼りに地球の周りを航行した。1943年にペンサコーラを卒業すると、私は南大西洋に行き、対ドイツ潜水艦作戦に従事したが、これは徹夜飛行だった。我々の仕事は、すべて夜間の哨戒機の中で行なわれた。

私は1950年に第1輸送飛行隊勤務となり、他の二人の将校と共にアイスランドのケブラビークに派遣された。行く前にワシントン D.C.で会合があった。アイスランドのケブラビーク上空でUFO目撃が起きており、彼らを守るために部隊が必要だということだった。

その会合の中で、彼らはなぜ部隊を要請したか、彼らは何を目撃しているかについて、我々に説明があった。我々は、彼らが目撃しているその航空機の種類についてもっと詳しく説明できると訊ねた。彼らの説明は、それらがほとんど夜に目撃されているというものだった - 光を放つ丸い形の航空機。海軍飛行試験センターから来ていた我々は、そこであらゆる試験を行なったが、その中にそんなものはないと知っていた。

私は彼らに、我々の政府はそれらが何であるかと言っているかと訊いた。彼らはこう言った。“それらは実験機、おそらく実験的なロシアの爆撃機だろうとあなたたちの政府は言った(笑い)”

飛行は通常だと10時間かかる。だがこの夜に限って風は16ノットの向かい風だった。ニューファンドランドのアルゼンチアまでおよそ300マイルから400マイルだったと思うが、私は水平線下の水面に何かを見た。それは夜間に都市に近づいているような見え方だった。それはまるで間接照明のようで、まったく鮮明ではなかった。それは、もし夜間に大都市に近づいていったら見える景色と同じものだった。私はしばらくそれを見つめた。時刻は1時頃だった。

ついに私は右座席にいたキングドンに、あれを見ろと言った。彼は私のために航路を確認していた。彼はそれを見たが、何であるかは分からなかった。我々はそれを解明できなかった... そこ

には何もないはずだった。我々はすでに警備艦の上を通過してしまっていた。当時彼らは、アイスランドとニューファンドランドの間に 1 隻の警備艦を持っていた。警備艦は我々に最新の気象通報をしていた。天候は快晴だった。北極光の活動もなかった。それは気象通報の一部として伝えられる。また、我々は艦船の位置をプロットしたが、その海域には 1 隻もいなかった。それで管制に、もう一つ我々に定点を示し、我々が本当に航路を進んでいるかどうかを調べてくれと言った。我々は流されているかもしれない、見ているのはラブラドルかグリーンランドの一部かもしれないと考えた。そうしたら管制は、いや、我々は正しい航路をとっていると行った。

こうして我々はそれをしばらく見つめたが、我々はその右側に流されていた。機首は 222 度ないし 225 度を向いていた。高度は 1 万フィートで、初めはそれから 40 マイル離れていた。我々がそれから 25 マイルないし 30 マイル まで来たとき、鮮明な光が見え、水面上にある模様がかった。しかしその模様から、何が起きているかは分からなかった。おそらく海軍が何か海中から回収しているのか、そんな類の秘密性の高いことをしているのだらうと我々は考えた。その模様は丸い形をしており、とても大きかった。

私は機付長(\*特定の機体に付く整備責任者)に、もう一人の機長であるアル・ジョーンズを呼んでくるように言った。彼らはアルゼンチアに着陸したいと思っていたからだ。乗客は 31 人で、我々はパイロットを含む 2 組の要人輸送隊と哨戒機パイロットたちを乗せていた。彼らが機の前方にやってきたとき、それらの光は水面上から消えた。水面上には何もなかった。光が消えたとき、我々はそれから約 15 マイル離れていた。つまり、真っ暗闇だった。

今や私の後ろには航法士、無線士、それに機付長も立っていた - 操縦室はいっぱいだった。まったく突然に、我々は水面上にとっても小さな黄色い光輪を見た。約 15 マイル離れていた。それはすぐに 1 万フィートまで上昇してきた - 瞬く間だった。

*[このUFOの運動に関する他の説明との類似性に留意されたい: それは1秒かそこらで15マイルを移動した。SG]*

私は、それが我々を貫通しようとしているのではないかと考えた。私は自動操縦を解除し、機首を下げた。衝突を避けるため、飛行方位を保ったままでその物体の下を通過しようとしたのだ。

そうしたら何が起きたか。私はその操作をしたわずかな時間に、それは我々の高度で目の前に現れ、操縦室の外はこの飛行物体以外に何も見えなくなった。私はどの方向に進んだらよいか分からなくなった。そのとき突然、私は大騒ぎに気付いた。私は何の騒ぎか分からなかったので、フレッド(\*キングドン)、一体どうしたんだ? と訊いた。彼は見回して、“我々の後ろで皆ひっくり返ってぶつかり合って、床に転がっている、ひどい状態だ”と言った。私が視線を戻したら、そこには何もなかった。すると彼は“それはこちらの右方にある”と言った。今やそれは約 1 マイルの所にあった。それは前方約 5 マイルの位置に移動したように見え、そこでかなりの時間、我々と並んで飛行した。

その高度が我々より上でないことが初めて分かったのは、このときだ。それは我々より低い高度にあったが、水平線よりは上にあり、そこに物体の側面が見えていた。一つのドームが見え、物体

の縁を色光が取り巻いていた

我々はこれが友好的な遭遇であることを知った。彼らは我々がここにいることを知っていた。彼らは我々に逢いにやってきた。しかしそのとき我々は、アイスランド人が言っていたのと同じことを我々に見せるために彼らがそうしたのだとは考えなかった。

こうして我々は、それをしばらく見つめた。するとアルが操縦を代わってくれと言った。私はアルと交替し、アルは自動操縦を解除してそれを追跡しようとした。そのとき我々は約 60 ノットの向かい風を受けており、対地速度はおそらく 120 ノットか 130 ノットしかなかっただろう。だから、彼はこの物体をあまり遠くまで追跡するつもりはなかった。しかし、彼は旋回して追跡を開始した。

私は乗客たちがどんな反応を示しているかを見るため、また同乗している医師と話をするために、後方へ行くことにした。最初にその医師の所に行き、ドクター、我々が見たものをあなたは見ましたか？ と訊いた。彼は私の目を真っ直ぐ見ながら、ええ、あれは空飛ぶ円盤でした、と言った。そして、私はこんなものは信じていませんから、それは見ませんでしたと言った。彼が言っていることを理解するのに私は数秒を要した。彼は一人の精神科医として、あの種の物事を信じるができなかったのだ。私は再び機首に戻り、アル、何をしてもいいが、我々が見たものを誰にも何も話すな、彼らは我々が地上に降りるとすぐに拘留するだろうと言った。彼は、もう遅い、たった今ガンダー管制を呼んで、彼らがこれをレーダーで捉えていたか、訊いたところだと言った。この話が漏れたのはそういうわけだった。

我々がアルゼンチアに着陸すると空軍がそこにおり、我々を訊問した。訊問したその大尉は実によい仕事をした。だがこの種の遭遇に関する限り、彼が誰かを訊問したのはこれが最初ではなかった。彼は申し分のない出来の報告書を作成し、それはワシントン D.C.にある空軍司令部に送られた。

最初、その色は黄色だった。それが近づいてきたとき、なぜ私は異なった色を見たのか。その後私はくわしい人たちからその理由を教えてもらった。その色は縁に並んでいた。それは黄色からオレンジ、さらに燃えるような赤へ、次にほとんど紫色に変わった。彼らは、それは費やされたエネルギーの量に関係していると言った。それはいわばパワーに関係していた。それが速度を落とし、我々に近づいてくると、たちまち黄色がかかったオレンジ色に戻った。その周りは霧がかかっているようだった。それはプラズマミストのような、そんな性質の何かだった。

我々はその飛行物体の大きさを訊かれたとき、私には 300 フィートという数字が浮かんだ。私は 1991 年に公文書保管所からその報告書を入手するまで、他の誰かの報告書を見たことはなかったが、皆それを直径 250 フィートから 350 フィートと言っていた。他の人々の話でも、実際にそれくらいの大きさがあったということだった。それが我々を離れたときの速度に関して言えば、時速 1,000 マイルから 2,000 マイルと推定された。その報告書を見たとき、アル・ジョーンズは時速 1,800 マイルと推定していた。私の推定は 1,000 マイルだった。1,500 マイルというのもあったが、同じ範囲内の数字だった。私がそれまで見たことがなかったレーダー報告書では、時速 1,800 マイルだったことが分かった。

それほど速く移動する航空機を、我々は持っていなかった。そしてもちろん、私は海軍飛行試験センターにいたことがあった。テストパイロットの訓練所があったのはそこだった。そこで我々は、航空機の極秘実験を行っていた。私を知る限り、あれに近い速度や丸い形を持った航空機はどこにもなかった。

この飛行物体は、あの短時間(1秒かそこら)に15マイルを移動した。それがどれほどの速度で我々に向かってきたか、計算できるだろう。そして次には、我々の直前でブレーキを踏んだようなものだ。直径300フィートのものが目前にあれば、操縦席の窓からはほとんど何も見えないだろう。

私はある本を書いている磁気技術者と数年間連絡をとり続けてきた。彼はすでに(航空機に磁気的な影響を及ぼしたUFOについての)100件のパイロット報告書に通じていた。私は彼に、起きたことのすべてを詳細に伝えた。

私が自動操縦に戻したとき、パネル中央にあった磁気コンパスは行きつ戻りつ振れていた。私はフレッドに、これを見たかと言った。彼は、君はあの飛行物体が近くにいたときそれを見なかったのか、それは回転していたぞと言った。我々は他のコンパスも見た。この時点で、その飛行物体は我々からおそらく5マイルは離れていた。我々は自動方向探知器と呼ぶものを持っていた。それらは低周波の電波装置で、ある局に周波数を合わせるとその局を指し示す。これらの二つの自動方向探知器は、その飛行物体を指していた。あと二つのコンパスがあった。我々は翼の中に一つの遠隔コンパスを持っていた。それは反応していた。その飛行機には全部で五つの異なる定針儀(ディレクショナル・ジャイロ)があったが、そのうちの三つが正常に作動していなかった。

私はそれがレーダーで追跡されたと聞かされた。彼は、そのレーダー報告書はワシントン D.C.の空軍司令部に送られたはずだと言った。それは通常そこからライト-パターンソン空軍基地に行く。だが、私の上司はワトソン大佐(\*空軍航空技術情報センター所長)に話した後で、その報告書をライト-パターンソン空軍基地記録保管所のブルーブック計画の中で見つけ、その速度が1,800マイルだったことを確認した。それをどこで見つけたのかと私は訊いた。それはあるレーダー報告書の中にあったと彼は言った。だから、彼らとそのレーダー報告書をマイクロフィルムに撮る前に何か起きたのだ。なぜなら、私が持っているマイクロフィルムの記録は記録保管所から入手したものだからだ(そしてレーダー報告書は消えていた)。私は、ライト-パターンソン空軍基地にいる数年来の友人から次のように言われた。彼らはスティーブン・スピルバーグに、このマイクロフィルム撮影を許可していた。つまり、第三種接近遭遇に関するブルーブック記録、その他の資料だ。だから、彼(スピルバーグ)は相当高いレベルの機密取扱許可を持っていた。彼は、その...あなたがご存じの統制グループが関係する人々の一部と関わりを持っていたはずだ。

もう一人の機長、その居所を私は何年も前に見つけていたが、彼はこの集団に属しており、決して話そうとしなかった。彼の退役後、1996年に私は彼と再び連絡をとり、彼が住んでいた所に飛んだ。そこで私は、これから我々はそのことをテープに録音しながら議論しようと言った。この経緯はそういうことだった。私の報告書に、彼が述べたことが数頁にわたり書かれている。彼が見て描いた図もそこにある。それは驚くほどよく一致していた。

[我々はこの報告書の完全版を、他のパイロットによる事件の裏付け証拠と共に持っている。SG]

私が見つけた文書[政府文書を見よ]は空軍が集約した公式文書で、それはもともとグラッジ計画のもとで保管されていた。

[グラッジ計画に関係していた空軍中佐チャールズ・ブラウンの証言を見よ。SG]

しかし、その文書の扉にはトウインクル計画とあり、そこに何らかの理由で省かざるを得なかった多数の報告書が保管されていた。

[ブラウン中佐はその証言の中で、本当の機密事例はグラッジの外の別の計画で取り扱われ、彼はそれに接近できなかったと確証していることに留意されたい。SG]

記録保管所によれば 18 頁あった。しかし、マイクロフィルムには 17 頁しかなかった。だから、残りの 1 頁はレーダー報告書だったのかもしれない。

当時、アイゼンハワーの後任マコーミック提督が NATO(北大西洋条約機構)軍司令官、大西洋連合軍最高司令官だった。その彼の補佐官が私に接近してきた。誰もがこの出来事を知っているようだった。たとえばラドフォード提督、彼は初代統合参謀本部議長になったが、彼の補佐官がそれを知っていた。なぜなら、彼が私にそれを話したからだ。だから、これについて知っていた人々は相当いた。その事件が実際には公式のものとされず、実際にどの本にも出てこないことを知ったのは、これらを通してだ。

[コース大佐など一部の証人は、きわめて機密性の高い事柄は口伝で‘頭脳から頭脳へ’と伝えられると述べていることに留意されたい。SG]

その後 5 月になって、私の家に一人の情報当局者が来た。彼は数枚の写真を見せた。私が初めて見るものだった。それと同じように見える写真は、まったく一つもなかった。そこには直径 100 フィートの物体の写真が 1 枚あった。それはあまり損傷を受けていないようだった。

[ここで彼は損傷の程度について言及することで、回収または墜落物体の写真があったことを暗に述べている。SG]

私が多く質問をしたのは、この人物に対してだった。この報告書に何が起きたのかと私は訊いた。彼は起きたことを正確に語った。ある委員会が存在すると彼は言う。彼はこう言った：“合同情報委員会がある... 彼らが報告書の行き先を決める”

彼らは何度も私の所にやってきて、何枚もの写真を見せた。その中には、我々がフー・ファイターズと呼ぶものかもしれないそれが多数あった。また、丸くて輝く円盤状のものも多数あった。

キンブルという海軍長官がいた... 私は将官部の要人輸送機長と呼ばれる立場にあり、ワシントン D.C.からの高官や民間人のほとんどを輸送した。これらの当局者の何人かは、彼らが見たものを私に語った。たとえば、太平洋上で一緒に飛んだ 2 機の飛行物体があった。また、1 機の輝く円

盤が彼らのうちの 1 機の脇に近づき、しばらく一緒に飛行し、彼らの周囲を飛び回った。

我々の事務所はライト-パターンソン司令部の管轄下に入った。そこは中枢部だった。そこでは、パイロットたちの会合が持たれた。そこでは、こうした種類のあらゆる会合が持たれた。私は毎月 1, 2 回は会合に出かけた。さらに年に 2, 3 回のセミナーがあった。... それは 1 週間ほどだった。

あるとき、我々の駐機場にいたときのことだが、そこは格納庫のように見えるものから遠くはなかった。それは波形金属板でつくられた格納庫のように見え、ほとんどいつも開いていた。上司と私とその脇を通るたびに、上司は私がそこまで行ってその金属壁の背後にあるものを見たいと思わないことを不思議がった。彼が私に言ったことの大筋は、その背後には 1 機の宇宙機があり、ET の遺体もあるということだった。それを私に言ったのは彼が最初ではなかった。

彼はフォーニ提督との話し合いから、フォーニ提督(彼是我々のミサイル部門の最高責任者で、ホワイトサンズにいたことがあった)が、他の惑星からの宇宙機が我々を訪問していると確信していることを知った。彼はまた、ワトソン大佐との話を持ち出した。彼はワトソン大佐から、これらの多くのファイルを見る許可を得た。そこに何があるのかを彼に話したのは大佐だった。彼は彼らがそこに保管していたもの[ET 宇宙機と遺体]を見た。だから、今述べたように、私が関心を持たないことを彼は理解できなかったのだ。私はこう言った。“実際のところ、私はそれに何の関心もありません。私はそれについて話すことは決してできませんでしょうから” 私はこれまで見てきたことから、今ならそれらが存在することを知っている。ライト-パターンソン空軍基地には 1 機の宇宙機があった。それはどこかに墜落した宇宙機だった。

**SG:** 地球外のものでしたか？

**GB:** 地球外宇宙機、まさにそのとおりだ。また、彼が話していた遺体は地球外知性体だった。

私は自分が見たものに確信を持っている。私が知る限り、あれほど大きなものを我々は持っていなかった。それは他の惑星からのもので、この地球のものでないことは確かだ。当時の我々の技術では、あのような航空機を持つことはできなかった。私は確信している。

私は最高機密取扱許可を持っていた。だが、ここで我々はこの知る必要性 (need-to-know) に立ち戻る。私が知らなくてもよいある事柄について、他の人々が知る必要性を持っていた多くの事例を私は知っている。だから、もし我々が他の惑星から来た何かを持っているとしたら、磁気技術者であれ宇宙航空技術者であれ、他の何者であれ、これらのうちの何人かがそれに関与するだろうことは確かだ。

コースの本に関してだが、同種のものかもしれない事柄に私も巻き込まれていた。このような物体を逆行分析 (back engineering) するために、彼らは我々に、これと似た装置を製造する分野で誰か契約業者はいないかと訊いていた。それは地球の技術ではないと彼が言ったので、我々がそれについて考えることは決してなかった。

その後 1960 年代になって、私たち一家は新居に引っ越したばかりだった。息子は 8 歳くらいだ

った。私たちは裏庭で芝を敷いていた。私は汚れを落とすために家に入った。すると息子が入ってきて、お父さん、お母さんが外に出てきてと言っていると言うんだ。どうして？ と私は訊いた。息子は、空飛ぶ円盤が見えると言った。息子は空飛ぶ円盤について一体何を知っているんだ？ と私はひそかに思った。それで外に出たら、そこに妻が立っていて、上空の何かを指さしていた。それが何だったのか、あなたにはお分かりだろう。それは 1 機の宇宙船だった。それを取り囲んで数機の小さな宇宙機がいた。私は双眼鏡を取りに家に戻った。これをもっとよく見たかったからだ。私が戻ると、宇宙船そのものは去っていたが、運よく小さな宇宙機を 2, 3 機見ることができた。皆家に戻ったとき、私は妻にこう訊いた。“空飛ぶ円盤のことをどうして知ったのかね？” なぜなら、我々は我々の遭遇について妻にさえ話してはならなかったからだ。あれは 1951 年のことだった。



メキシコ市国際空港上級航空管制官 エンリケ・コルベック氏の証言  
Testimony of Mr. Enrique Kolbeck, Senior Air Traffic Controller

2000年10月

エンリケ・コルベック氏はメキシコ市国際空港の上級航空管制官だ。彼は証言の中で、肉眼とレーダーにより見られる、空港での頻繁なUFO目撃について語る。計測されたそれらの速度は途方もないもので、ほとんど瞬間的にU字形の方向転換をする。空港の140人の航空管制官のうち50人以上がこの現象を見ていると彼は推定している。ある目撃では、着陸しつつある通常の飛行機の周囲を動き回る赤と白の同じ光体群を、32人の管制官が肉眼で同時に見た。メキシコにある4箇所の航空管制センターのすべてが、これらのUFOについて報告している。

私の名前はエンリケ・コルベックだ。私はメキシコ市国際空港の航空管制官で、25年間管制官をしている。

我々はこれまで、メキシコ管制センターから多くのUFO現象を目撃してきた。それらは突然現れ、進入する飛行機の航空路を頻繁に横切る。我々はそれらをレーダーで見ると、パイロットたちは時々、彼らが見たものの情報を我々に提供する。我々がこの種の現象に対して何の規制も行わないのは当然だ。パイロットたちは、彼らの航空機の周りの空域が規制されることに対して、無条件で不安を感じる。

空飛ぶ円盤：過去においてはそれを聞くのはとても奇妙なことだった。今日、それは我々にとりとても深刻だ。特にエアロメキシコ109便の事件の後ではそうだ。4年ほど前、我々はUFOが関係したきわめて危険な出来事を経験した。そのUFOは、市内のとても重要なある建物の上空を飛行していた。その建物は、メキシコ市空港5番滑走路の最終航路上に位置している。

この便はグアダハラハラからメキシコ市に入ってきており、私はこの航空機の管制を別の管制官に引き継いだ。それは5番滑走路に正確に着陸進入を始めていた。我々は画面上に二つの物体を見た。二つの飛行物体は、そのときその航空機にとっても接近していた。だがそれは突然、しかも瞬時に消えた。我々はレーダーでかれこれ30秒は捕捉していた。しかしパイロットは何の連絡もしない。後で我々は、この航空機が最後の旋回で主着陸装置をこの物体に衝突させていたことを知った。

その建物上空を飛行していたときの現象を見ていた人々から、我々が2時間後に情報を受け取ったことは重要だ。そのとき我々は、その飛行機がこの物体と衝突したときの話を聞いた。それは我々にとり、きわめて、きわめて、危険なことだった - なぜなら、我々は我々の空域を飛んでいるあらゆる物体について知る責任を負っているからだ。

我々には、最終航路にきわめて接近して飛行するUFOについての多くの報告書がある。それは最終着陸進入路から4、5マイル以内だ。それはまさしく現実であり、レーダーにも映る。我々はこれらの遭遇についての詳細な情報を持っている。エアロメキシコ機の遭遇が起きた週に、我々はそれぞれ別々のときにパイロットたちから約7件の報告を受けた。これらのUFOが我々のレーダー画

面に現れ、とびとびの点のように映るのは重大なことなのだ。

それらはとてつもない高速で移動する。人間の航空機 - ボーイング 727, ボーイング 757 - は違った動きをする。もちろん、それらの速度は UFO とはまったく異なる。肉眼やレーダー画面で見ると、UFO は 1 秒間に 20 マイルから 30 マイル移動する。それはまさしく現実のことだ。当然、それは人間の他の航空機のようにではない。UFO は突然に、それも 1 秒かその半分のうちに、ほとんど直角に旋回する。

この種の現象が起きるのは、1 日に 12 回のときもあれば、1 箇月または 1 週間に 12 回のときもある - これらの UFO がいつ現れるかは分からない。

また、UFO はきわめて素早く垂直に上昇する。これはもちろん、軍用機とさえも完全に異なる。

しかし、これらの現象は飛行計画を持たずにやってくる。それらについては誰も何も知らない。それらは自分の好きなときに現れる。パイロットたちはときに恐怖を感じ、すぐに情報を要求してくる。多くのパイロットたちは目撃したときに報告するし、時々彼らの航空電子計器に発生する諸問題について報告する。これらの UFO は、彼らの航空機から 2 マイルないし 5 マイル以内に近づく。

私は 7 年間、これらの UFO をレーダーで見てきた。多くの目撃が、メキシコ市の外側にある火山の近くで報告された。

あるとき、その火山の近くで一人のメキシコ人パイロットが、3 個のこれらの物体が彼の機の周りを飛ぶという事件に遭遇した。そのうちの 2 個は航空機の翼の上であり、他の 1 個は彼の正面にあった。我々はこの情報をレーダーで正式に記録した。

メキシコセンターには約 140 人の管制官がいる。私が思うに、少なくともそのうち 50 人はこれまでレーダー画面でそれらの物体を目撃し、肉眼による UFO との遭遇も経験していた。ある事例では、2 機のメキシコの航空機が北から飛んできたとき、そのうちの 1 機から報告があった。1 個の小型の赤色物体が機体のそばをととも速く通過したということだった。その後ろを飛んでいた別の航空機からも、それを報告してきた。それから 1 分以内に、我々はそれを管制塔から見た - 多くの人々がこの現象を観察するために窓辺に駆け寄ってきた。1 個は赤く、他の 2 個は白かった。およそ 32 人の管制官が、この同じ UFO を目撃したのだ。

メキシコには 4 箇所の管制センターと 52 の空港がある。4 箇所の管制センターで、この種の現象のレーダー追跡に関する情報を得ている。4 箇所全部でだ。マサトランで我々が得た情報では、15 年ほど前に 2 機の商用便ともう 1 機の自家用機が、米国との国境にきわめて近いマサトラン空域を飛んでいた。その周辺で飛行している 4 個か 5 個の UFO があった。パイロットたちはひどく恐がり、ついにマサトランに着陸することを決めた。彼らはそのとき、この空域が安全だとは考えなかったのだ。

我がメキシコ当局は、パイロットや管制官たちによる国内の UFO についての多くの情報を公表してきた。

あなたたちの国[米国]は、これらの UFO に関する情報を持っているはずだ。あなたたちの国では、多くの管制官がパイロットの報告やパイロットによる目撃についての情報を持っているはずだ。私はそれを確信している。

もう一つの事例では、我々がレーダーで 40 マイル離れた所に 1 個検出しているその同じ時刻に、ある一人の婦人が自分のカメラで 1 個の UFO を撮影した。メテペクの近くで発生したこの目撃について、我々は様々な方面から情報を受けた。

その出来事の後で、とても頻繁な目撃が起きた - 1 週間にわたり毎日のように発生した。パイロットの何人かは、それらの物体すなわち空飛ぶ円盤が、火山の内側に降りていくのを見ている。

世界中の他のレーダーとまったく同様に、我々のレーダーは光を検出しない。それは飛んでいる固体の物体のみを検出する。それはとても重要だ。パイロットから情報があるときに、管制官や路上を歩いている人々が、同じ時刻に同じ物体を見ている。これは現実の何かであることは間違いない。それはまさしく現実だ。

実際、私や私のような専門家にとり重要なことは、それらが交通に関わっているということだ。あるとき我々は、12 個ないし 15 個の UFO を同時にレーダーで記録した！ 同時にだ！ 市にも空港にもとても近かった。

パイロットたちの報告では、これらの物体の大きさは約 100 メートルかそれ以上だ。サンタクルスからメキシコ市に向かっていた 1 機のメキシカーナ便の報告を私は覚えている。彼らは 1 個の巨大な UFO を目撃した。約 40 マイル離れてその機の後ろを飛んでいた別のパイロットにも、その同じ物体が見えている。彼らは、その物体がいかに巨大だったかを語っている。その 2 機が互いに 40 マイル離れていたことを考えると、その物体は巨大だった。

リチャード・ヘインズ博士の証言  
Testimony of Dr. Richard Haines

2000年11月

ヘインズ博士は1960年代半ばからNASA(米国航空宇宙局)の研究専門科学者だ。彼はジェミニ計画、アポロ計画、スカイラブ計画をはじめ、数々の計画に取り組んできた。ヘインズ博士は過去30年以上にわたり、説明のつかない空中現象についての肉眼とレーダーによる3,000を超える異常目撃事例を集めている。彼によれば、外国の数多くの事例も文献に見られ、それらは米国の報告と性格がとてもよく似ている。米国でのある事例は、一人のB-52機長が博士に語ったものだ。その機長と乗組員たちは、5個の球体が同機の各翼端のすぐ外側、後方、頭上、および下方に現れ、同機と同じ巡航高度と速度を保ちながら一緒に飛行するという体験をした。機長は回避行動によりそれらの球体を振り切ろうとしたが、各球体は正確な位置を保ち続けた。他の幾つかの事例では、パイロットたちがUFOの透明な丸屋根の中を覗き、その内部を詳細に見ることができた。

...多くの事例で、空軍の迎撃機がこの現象を確認または調査するために発進してきた。パイロットたちはレーダーによる情報を求める。レーダーに何か映っているか？ 私のエアキャット・ファイルには十分にそれを肯定する、実に多くの明瞭なレーダー報告事例がある。

エアキャット(AIRCAT)とはエア・カタログを意味している。これは私がこれまでほぼ30年間にわたり、商用機パイロット、軍用機パイロット、自家用機パイロット、テストパイロットたちから集めたかなり大規模な資料集だ。

私は3,000以上の事例を持っている。また、パイロットの何人かにインタビューを行なったときの録音テープやビデオテープも持っている。私はFAA(米国連邦航空局)のテープを持っているが、それは一人の市民として情報公開法請求により入手したものだ。だから、このデータベースはとても大きい。完全さを欠いた事例は、通常パイロットたちがすべてを話すのをためらった結果だ。もし彼らが、たとえば商用便のパイロットだった場合、雇用の保障や周囲からの嘲笑を懸念するだろう...

これは複数の航空機、コンパスの偏向、無線周波数干渉、レーダーが関わった興味深い事例だ。ここには豊富なデータがある。しかし、これには私も当惑するのだが、私の物理科学の同僚たちは、何らかの理由でこの問題に興味を持たない...

現象の背後に何らかの知的な手引きがあるのか？ これは一つの科学的問題、価値ある科学的問題だ。そして今まさにそのデータ分析を行なっている私にとり、それはあると考えられる。私は、この現象の背後に高度な知性と統制があることを示すデータを益々得つつある...

これは一人のB-52機長が以前私に語ったことだ。彼は製造されたばかりのB-52の前部左座席に搭乗し、カンザス州ウィチタから飛行していた。同機はそのボーイング社で製造されたのだ。彼の任務は米国南西部のある基地に、その航空機を軽武装乗組員と共に輸送することだった。その日はよく晴れわたった快晴で、空は美しく輝いていた。そのとき、1個の物体が同機の左翼端外側

に現れた - 丸い球体、直径 4フィートないし 5フィート、模様なし、鋳止めなし、継ぎ目なし、無印、米国空軍の記章なし。副パイロットが“機長、右翼端外側に 1 個の物体があります”と言った。彼はその様子を描写したが、それは形、大きさ、その他のすべてが左翼の物体と同一だった。こうして、その航空機と同じ巡航高度と速度を保った 2 個の物体がそこに出現する。

よろしい、話は長いが手短かに話そう。彼はこう語った。それぞれ 1 個の物体が同機の後、上、下、両翼端の外側に現れた。全部で 5 個だ。私は、それでどうしたかと訊いた。彼は、操縦ハンドルにある自動操縦ボタンを押し(\*解除し)、回避行動に移ったと言った。それはこれらの物体を振り切ろうとするときの、いわば標準的な操作手順だ。もしそれらが気球だったなら、長くは我々と一緒に飛べなかった。もしそれらが鳥だったなら、どうしてこんな高度で、しかも時速 300 マイルないし 400 マイルで飛んでいたか、等々。該当しないものを消去していく彼のやり方は、パイロットとしての模範的行動というものだ。それらの物体は、彼の航空機がどんなことをしても完全に配置を保ったまま同機と一緒に飛び続けた。それは位置保持(station keeping)と呼ばれる。そんなことをしているうちに同機の燃料は残り少なくなったが、機長にはやるべき任務が残っていた。彼はパワーを上げて巡航高度まで同機を上昇させ、自動操縦に戻した。それからさらに 15 分ほど経過したとき、それらの物体は現れたときは正確に逆の順序で同機から離れていった。知性を持った振る舞いだった。私にとり、それは無秩序には思えなかった。それは知性を持っていた。それは意図を持っていた...

ここで、懐疑論者は次のように言うだろう。これらはすべて幻視だったと。私はそれに賛成できない。幻視であるはずがない。これらすべての事実、操縦室の 3 組の目、レーダーによる確認、地上レーダーによる確認、そして近くにいた別の航空機...

パイロットたちは専門家としてその経歴を賭けている。だから、それらを報告しない方が容易であり、また通常は報告しない。私の推定では、名乗り出て非公開もしくは公開報告書を書く 1 人のパイロットがいるとすれば、そうしないパイロットは 20 人か 30 人いる。

私のエアキャット・ファイルを精査した結果、1960 年代まで遡る多くの事例で、空軍がこの問題になお濃密に関わっていたことを私は知った。そこでは空軍が民間機に介入し、訊問する。軍用機パイロットばかりでなく、民間機にさえも介入する。空軍は訊問をこう締めくくる：あなたたちが見たことを誰にも言うな...

かなり頻繁に、上部や底部またはその両方に少し盛り上がりが見られ、それを一部の人々は丸屋根あるいは操縦室だと表現する。多くの場合、それらは透明だ。そして窓を通して内部が見える。パイロットが聞き手の目を正視し、これを高所で 100 ヤードの距離から見たと語る様子には、非常に興味をそそられる。これは私の感情を強く揺さぶると言わなければならない...

## 米国海軍レーダー技術者 フランクリン・カーター氏の証言

### Testimony of Mr. Franklin Carter, US Navy

2000年12月

カーター氏は、1950年代と1960年代に電子レーダー技術者として訓練を受けた。彼は、明瞭で疑う余地のないレーダー捕捉により、時速 3,400 マイルという移動速度を目撃した事件について語る。1957年から1958年にかけて、異常な速度で移動するこれらの物体を目撃した他のレーダー操作員たちもいた。当時、人類の最速航空機は時速 1,100 マイルだった。ある事例では、一人の空軍レーダー操作員が、これらの UFO の 1 機を 300 マイルから 400 マイルの宇宙空間まで追跡した。これらの報告が繰り返しレーダー製造業者のゼネラルエレクトリック社に入り続けたため、同社の技術者たちがやってきてその回路を改造し、レーダーが 12 マイルないし 15 マイルの高度までしか追跡できないようにした。

...しかし、ある夜に我々はとても異常な経験をした。私はレーダー専門家で、その任務は艦船搭載レーダーの保守だった...

ある夜、私は午前零時に勤務を終え、床に就いた。すると電話があり、レーダーを修理するように言われた。何か不具合が発生していた。私は CIC(戦闘指揮所)に行き、どこがおかしいかと彼らに訊いた。彼らは、我々はこの時速 3,400 マイルで飛ぶ 1 機の航空機を追跡していると言った。それはどこかおかしかかった。私はそのレーダーを切り離し、予備レーダーをつないで稼働させた。次に、一連の試験に取りかかった。すべてが正常だった。私はレーダーをチェックするときに行なう準備試験を全部やり終えたが、すべてが何の問題もなかった...

彼らは私に、ずっと星形捕捉(stellar contact)だったと言った - これは大きさが半インチより大きいブリップ(\*レーダー画面上の輝点)で、目標がきわめて巨大か、すぐ近くにあることを示す。レーダーは毎回の走査でそれを追跡した。何か異常があったときに起きることは、走査しても何も映らないか、2 回に 1 回あるいは 10 回に 1 回、とにかく輝点が消える。だが、この輝点はすべての走査でははっきりと映った。これは物体が固体の目標であることを示している...

ある夜のことだったが、私はプロットボード(位置測定板)に向かっていた。3 箇月か 4 箇月後だったと思う。そのとき、またこの捕捉が発生した。2 回目の走査で、この物体が実際に移動していることが分かった。それは 360 マイル・スケールで 3 インチないし 4 インチ移動していた。それははっきりしていたので、私はそれをプロットした。時速 3,400 マイルだった。我々はそのときも報告しなかった。しかし、彼らはこう言った。何も不都合はない、これは戻ってきた我々の友人だ。我々はこのことで騒ぎ立てなかったが、それが何であるか知りたかったことは確かだ：時速 3,400 マイル、1957 年に！我々が持っていたものでそれに最も近い物体は、時速約 1,100 マイルだった。

この現象は 1957 年終わりから 1958 年 5 月まで発生し続けた。それは少なくともあと 3 回以上発生した。レーダー操作員をしていた私の友人は、昨夜あの速い物体の一つがまた現れたと言った。起きるのはいつも夜だった...

我々はそれらの物体を時速 3,400 マイルで追跡したと言い、こう続けた。興味深いことは、我々

がそれを 300 マイルから 400 マイルの宇宙空間まで追跡したことだ。我々はゼネラルエレクトリック社に、そのシステムは誰がつくったのかと苦情を言った。我々はこれらの出来事を報告し続け、ゼネラルエレクトリック社は我々に、そんな報告はあり得ないと言い続けた。それで我々はこう言った。我々は報告を続ける、これは事実だ。そうしたら彼らがやってきて、実際に画面の映像を撮り、それを持ち帰ってそこに映ったものを分析した。それから彼らは戻ってきて、探知距離が 12 マイルないし 15 マイルになるようにレーダーに手を加えた。彼らはこう言った。その距離があれば、どんな弾道ミサイルでも大丈夫だろう。あなたたちはこれ以上見る必要はない。こうして彼らは受信機に制限をかけ、12 マイルないし 15 マイルの宇宙空間までしか見えないようにしてしまった。彼の名前はデイク・ウォリスといった...

これらの UFO は私の想像の産物だと人々が主張するなら、私はこう言う。“私はすごく腕のいい E.T.(電子技術者)だった。私は自分のレーダーのことは知っていた。当時それは私の恋人だった。私はそのシステムを知っており、それらはどれも悪くなかった” 我々は現実の捕捉を追跡していたのだということを私は知っている。彼らが走り兎(running rabbits) (\*近くにある同一周波数レーダーの干渉により画面上に現れる現象)と呼ぶものと、彼らが我々に与えるすべてのテスト用国籍不明機の違いを、私は知っている。

1956 年と 57 年に米国が、たとえ実験機にせよ、時速 3,400 マイルで何度も飛ぶことのできる航空機を持っていたとはどうも信じられない...

彼らは、我々が見ていたものを誰にも知られなくなかった。これが隠蔽の始まりだと私は考えている。こうして、それは手に負えなくなった。

だが、今日の社会からそれを隠し続けている人々は、米国人だけだということを私は知っている。他の誰もがそれを知っており、受け入れている。そもそも英国と米国以外のすべての政府は、それを受け入れている。

これが続いているのを見るのは、私個人としてもとても苛立たしい...

対話する必要のある諸文明が存在する、これを認めることが重要だ。人間としての進化の中で、我々はそれを受け入れる段階に至ったのだ。だから、この秘密のすべてを保持し、あなた[グリア博士]が唱導し私が強く確信している外交儀礼のすべてを拒むようなことばかりしていたら、米国はこの分野で世界の三流国になるだろう。私を動揺させるのはそのことだ。なぜなら、彼らはそこにいるからだ。他国の人々は彼らを認めており、その人々[ET たち]と対話しようとしている。ET たちも、彼らと平和的に話し合いたいと考えているのだ。人々が正気に戻り、米国民からこの問題を隠すのを終わりにしてほしい...

私は友人が軍で目撃した事例も調査した。我々は仕事で 7, 8 年間互いに知った間柄だった。彼は、私が UFO について興味を持っていることなど、何も知らなかった。私も、彼がある日目撃報告書を作成するまで、彼が UFO について知っていたことを知らなかった。私は彼を電話で呼び出し、自分の経験を話した。彼も空軍中尉のときに経験した目撃について私に語った。彼は RB-36 (\*戦略偵察機)の航法士だった。同機には大きなカメラが装備してあり、1950 年代には秘密の写

真撮影をすべてこれで行なっていた。友人はその航法士で、乗組員は 22 人だった。彼らがノースダコタ上空にいたとき、尾部の銃座にいた誰かが、左翼の上を見ろと言ってきた。そこに - 彼らは左翼から 100 ヤードと推定した - この 100 フィートの円盤があった。とてもはっきりと見えた。彼らはレーダー管制塔に連絡したが、それはレーダーにも映っていた。皆立ち上がってそこに行き、撮影した。彼らにはカメラが与えられていた。さて、これは機密にされるべき事項の一つだ。彼らには 35 ミリカメラが与えられていたが、UFO を見たときに報告書をどう埋めるかが指示されていた。22 人の乗組員は立ち上がって窓の外を見、この物体を 5 分間ないし 6 分間見た。しばらくしてその物体は去っていった...

興味深いことは、彼が地上に降り立ったとき空軍のグループがそこにいたことだった。彼らは乗組員たちに事情聴取を行ない、12 年間はこれについて話すなと告げた。彼らは機密保全誓約をさせられた。それから 1 週間後にワシントンから一団がやってきて、乗組員たちに事情聴取を行ない、機密保全誓約を念押しした。彼らはカメラ、フィルムなど、すべてを押収した。彼が空軍を除隊して予備役大佐になったとき、彼らは再び機密保全誓約書に署名したことについて念押しした。彼の名前はジム・ロイドだ。



## ユナイテッド航空パイロット ニール・ダニエルズ氏の証言

### Testimony of Mr. Neil Daniels, Airline Pilot

2000年11月

ダニエルズ氏は、59年間にわたり3万時間以上の飛行経験を持つパイロットだ。彼は陸軍航空軍に入り、B-17パイロットとして29回の戦闘任務を生き抜いた。航空軍を去った後は、ユナイテッド航空に35年間勤務した。ダニエルズ氏は、1977年3月にサンフランシスコからボストンに向かう商用便に搭乗したときのことを語る。飛行機が自動操縦になっていたとき、機体が自然に左に傾き始めた。彼は窓の外を眺めてキラキラ輝く光体に気付いた。第1副パイロットと第2副パイロットもそれを見た。彼らは三つのコンパスすべてが異なる読みを示していることに当惑した。

... 私が経験したただ一度の目撃は、1977年3月に起きた。私はサンフランシスコからボストンに向かうDC-10機を操縦していた。ユナイテッド94便だった。我々は高度3万7,000フィートで、バッファローとアルバニーのほぼ中間地点にいた。下には霧が広がり、夜の暗闇だった。そのとき、自動操縦になっていた飛行機が突然15度左に向きを変え始めた。当然私は窓から外を見、この輝く光体を目撃した。

第1副パイロットがそれを見、第2副パイロットは座席から立ち上がってそれを見た。そのとき、何が起きたのかとボストン航空管制が訊いてきた。我々は、何が起きているか分かったら呼ぶと彼らに言った。その頃第1副パイロットは自動操縦解除ボタンを押し、手動操縦に戻した。私が窓から外を見ていると、この物体はとても速い動きで飛行機の左側から後方へと消えた。この出来事のすべてが起きた時間は、おそらく3分かそれ以下だったと思う...

さて、第1副パイロットの自動操縦装置は機長のコンパスに接続されているが、それは飛行機の左翼端にある。何かの原因で磁力が乱され、それが飛行機の針路を逸脱させたようだった。なぜなら、針路はコンパスと連動しているからだ。三つのコンパス全部が異なる読みを示していた。これはきわめて異常なことだ。その原因は、そこで我々が見た球体、あの白色の光体が持つ、とてつもない磁力だというのが我々の結論だった。

我々が自動操縦を解除し、第1副パイロットが飛行機を真っ直ぐに立て直したとき、コンパスを狂わせていた磁力の乱れは止み、すべてが正常に戻った。その物体も我々の前から姿を消した。こうして、あらゆることが通常の状態に戻った...

これまで物体を目撃し、それを話したパイロットたちは解雇された。何人かは飛行から外され、変人扱いされたりした。だから、そのことについて私は何年もの間口をつぐんでいた。

かなりの数のパイロットたちが、彼らが遭遇した事件や目撃や起きたことを私に語ってきた。その中の一つを挙げると、それは東海岸での目撃で、彼はそれを約18分間という長い時間見続けた。それはユナイテッド航空ではなく別の会社だったが、彼がそれを上司に報告すると、彼らはそれを調査した。そして政府はこう言った。あれは沼気(メタンガス)だった。高度1万8,000フィート、250ノットで沼気とは！ そこに何かがいた可能性を、誰もが実際には認めたくなかったのだ...

米国空軍軍曹 ロバート・ブラツィナの証言  
Testimony of Sgt. Robert Blazina, US Air Force

2000 年 8 月

ロバート・ブラツィナ氏は最高機密取扱許可を持つ退役軍人だ。彼は核兵器を世界中に輸送する任務に就いていた。ブラツィナ氏は、よく晴れた夜空を信じがたい速度で真っ直ぐ上昇する UFO を直に目撃した。別のときには、彼の機と 1 機の民間 747 機の両方が、彼らのレーダー画面で同じ 1 個の物体を見た。それは推定時速 1 万マイルで彼らに向かってきた。

... 私の最初の UFO 体験は、1952 年に起きた。私はシアトルを飛び立ち、サクラメントに戻る飛行をしていた。時刻は深夜の 10 時と 12 時の間だった。よく晴れた暗い夜だった。座席に座って前方を見ていた私は、正面にオレンジ色の輝きを見た...

我々は推力を上げ、それに接近し続けた。当然、それは次第に大きくなった。我々はカリフォルニア州レディングの辺りまで来た。それは降下を始め、我々はそれを追った。我々は緩降下によりかなりの速度を得たが、その物体はサクラメントに入り、同市を横切り、市庁舎の上空に移動した。我々は追いつこうと躍起になっていた。我々の航空機は上限速度に達していた。そのとき、その物体は上昇に転じ、ものの 2 秒で消えた。垂直上昇だった。

空軍予備役だった 1970 年代、我々はドイツからの帰国途上にあつた。我々は C-141 輸送機に搭乗しており、高度は 3 万 5,000 フィートと少しだった。我々はデラウェア州ドーバーから約 2 時間の地点にいた。このときも空はよく晴れており、暗かった。我々はこの物体をレーダー画面を見た。輸送機には二つの表示器が積まれていた。パイロットが一つ、航法士が一つだ。その物体はそれらの両方に映った。それは真っ直ぐに我々に向かってくるようだったが、視認はできなかった。次にそれは脇にそれた。そして何回か我々にちょっかいを出した。実際に、一度などは我々の機首に真っ直ぐに向かってきた。あまりにも近かったので、パイロットは回避行動をとった。

同じ時刻に 1 機の民間 747 機が我々の右方にあり、よく見えていた。我々はその民間機と連絡をとり、パイロットたちは会話をやりとりした。彼らは彼らのレーダーで、我々が見ていたものと同じ物体を見ていたが、それが何であるかは分からなかった...

航法士は何とか計算し、それ(UFO)が時速 1 万マイル以上で移動していたと言った...

米国海軍大尉 フレデリック・マーシャル・フォックスの証言  
Testimony of Lieutenant Frederick Marshall Fox, US Navy

2000 年 9 月

フォックス大尉は 1960 年代に海軍で攻撃機に乗っていた。彼は最高機密取扱許可を持ち、ベトナムで従軍した。除隊後はアメリカン航空に 33 年間勤め、退職した。フォックス氏は証言の中で、JANAP 146 E と呼ばれる印刷物があることを明らかにしている。その中の一節には、UFO 現象についてもし誰かに何かを口外した場合、1 万ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている。1964 年終わり頃のある事件では、彼が A4 スカイホークで飛行していたとき、まったく突然に、直径約 30 フィートの 1 個の黒い円盤型物体が彼の左側に現れた。彼の経歴の中では他にも多くの出来事があり、円盤型や葉巻型の UFO を軍事施設の上空で目撃した。またあるときには、二つの赤い光体が、夜空を地平線から地平線へと 3 秒間で横切るのを見た。彼はこの問題についてまわる嘲笑のために、これらの出来事を他人に話すのをためらっていた。

... 私の海軍での階級は大尉だった。私は核兵器輸送パイロットだったので、最高機密取扱許可を持っていた。

海軍にいたときの私は、Code 4 PUBS すなわち機密広報情報将校だった。JANAP 146 E と呼ばれる印刷物があり、その中に、UFO 現象についてもし誰かに何かを口外した場合、1 万ドルの罰金と 10 年間の投獄を科される旨が述べられている一節がある。つまり、あなたが何を経験しようとも、許可なくしてはそれを持ったまま一般の人々の中に入っていってはならないことを厳格に定めている...

ある夜、私は一人で航空母艦から約 180 マイル離れた地点にいた。高度は約 2 万フィートだった。そのとき、1 個の物体が私の左側に現れた。それは何の敵意も持っていなかった；それはただそこで私を観察していた。私もそれを少し観察し、とても安らいだ気持ちでそこを離れた。私は後に航空会社に勤務するまで、誰にも何も話さなかった。後で知ったのだが、乗組員仲間の一人も似たような出来事を経験していた。

その物体は、直径が 30 フィートはあった... おそらく情報収集円盤だった。それは円盤の形をしていた...

航空管制からは、そのことについて何の話もなかった。どの出来事についても、私は口を開くことはなかった。ピート・キリアンという、何冊かの UFO 関連書に出てくる機長がいた。彼は 1950 年代にアメリカン航空の機長だったが、どうやら目撃をし、上院委員会で証言した。また、翼の外側にいた UFO の写真を実際に撮った機長もいた。もちろん、彼らは嘲笑の対象になった。私はそのようにはなりたくなかったので、FAA (米国連邦航空局) にも軍にも何も報告しなかった。多くのパイロットたちは、周囲からの圧力と嘲笑があるために、このことに巻き込まれるのを望まなかった。こうして秘密が保たれてきた...

私には、第二次大戦中 B-24 のパイロットで戦略諜報局(OSS)に入った、とても親しい友人がい

る。彼は原爆が広島と長崎に投下された後、最初に日本に行った人々の一人だった。彼はブルーブック・プロジェクトの報告書 No.13 に関わったが、それは計画の中でも最高機密に属する部分だったと私は思っている。当時彼は空軍大尉だった。現在は 70 歳台後半だが、今なお大尉として現役を続けている。彼が給料を貰っているかどうかは知らないが、現役だとしたら任期の長さで階級から三つ星将軍で、給料も貰っていて然るべきだ。彼に現役を続けさせているただ一つの理由は、彼が知っていることのために国家機密保全誓約を有効にしておく必要があるということだ。私は海軍の最高機密取扱許可を持っており、また我々は二人とも同じものに強い関心を持っているが、機密保全誓約のために彼が私に話そうとしない何かがある。

何らかの理由で、政府や政府の諸機関は彼らの基本方針を守る必要があると考えている。しかし、今やそれは明らかに我々の基本方針ではない。この見え透いた欺瞞を終わらせるために、我々が行動すべきときがきたと思う。人類が適切に進化し、その進化の実りを確実に享受するのに必要な対策を講じる時が。

## アリタリア航空 マッシモ・ポッジ機長の証言

### Testimony of Captain Massimo Poggi

2000 年 9 月

ポッジ機長はアリタリア航空 747 機の上級機長だ。彼は 1999 年 7 月にローマからサンパウロに向かって飛行していたときのことを語る。緑色に輝く光輪が一つ急上昇し、彼の 747 機の下 500 フィートをかすめ去った。その航空機は、この UFO が下を通り過ぎたときに突然ジャンプした。この体験中に、非常にやかましい雑音が彼のヘッドホンに入ってきた。また、1992 年にイタリアのトリノ上空を飛行していたときには、雲との距離をほぼ一定に保って静止しているかに見える、楕円型の球体を遠くに見た。彼はこの UFO をスポッティングスコープ(\*小型望遠鏡)で見た。副パイロットと少し話をするために目を離し、もう一度見たときには消えていた。

私の名前はマッシモ・ポッジだ。私はイタリアのアリタリア航空でボーイング 747 機の上級機長をしている。

1999 年 7 月 1 日、私はローマからブラジルのサンパウロに向かっていて。大西洋のほぼ真ん中まで来たとき、ヘッドホンに雑音が入った。それはどんどん大きくなり、ひどくやかましくなった。それから 2, 3 秒のうちに、我々は明るい光輪の一つを見た。それは周囲に拡散して緑色に輝いていた。光輪は高速で我々の機首の下、航空機の下を通り過ぎた。それと同時に、747 機は突然ジャンプした。ただの一度だけジャンプした。半秒後には、その雑音と光体は消えていた。それは、我々の 11 時間の飛行中に経験した唯一のジャンプだった。

この物体はきわめて近かった。我々は時速 930 キロメートル、約 500 ノットで飛んでいた。我々の下方で交差した物体は、それよりもずっと速かった - 1,000 ノットか、それ以上あった。

その物体は我々の下だったが、それほど下というわけでもなかった - おそらく 500 フィート。本当に近かった。飛んでいる航空機にとっては、ほとんど衝突だった...

米国陸軍少尉 ボブ・ウォーカーの証言  
Testimony of Lieutenant Bob Walker, US Army

2000年10月

ウォーカー氏は陸軍少尉だった。彼は第二次大戦後の NASA(当時は NACA)の一般公開で、30フィートの大きさを持つ 1 機の円盤型機体を見た。それは、研究のためにドイツから運ばれてきたものだった。彼がテレビ局の仕事で航空機を操縦していたとき、1 個の円盤型物体が西からやってきた。彼はカメラを持っていたので、1 万 2,000 フィートまで上昇し、その物体の写真を何枚か撮った。写真は着陸後すぐに現像され、拡大された。その物体は両側に突端を持つ、フットボール型の銀色物体であることが判明した。彼のフィルムは、その後異常な状況の中で持ち去られた。ウォーカー氏は証言の中で、ケンタッキー州フォートキャンベルの近くで聞いた事件についても語る。夜遅く、たまたまある夕食会に行ったときのことであった。彼はそこで軍警察たちの会話を耳にしたが、それは近くの農家のそばに 1 機の空飛ぶ円盤が着陸したため、その地域を立ち入り禁止にしたというものだった。何体かの生き物がいたが、恐怖を覚えた農家の持ち主により撃たれたということだった。

... 偶然に管制塔からの奇妙な交信が聞こえた。管制塔は、1 個の円盤型物体が西から来たと言っていた。私はこう考えた。“これはめったにない機会だ、もし見られるなら一目それを見てやろう”推定するなら、物体は 5 万(\*フィート)よりも低くはなく、もっと上にあった。

私は、管制塔がその上空に飛来したものへの警戒を呼びかけた後で、彼ら呼んだ。管制塔は“当機は何をするつもりか?”と言った。私は“もし支障がなければ高度 2,000(\*フィート)から離脱し、酸素なしで行ける最大高度 1 万 2,000(\*フィート)まで上昇させてほしい”と言った。彼らは“よろしい”と言った。2 から 12(\*1,000 フィート単位)まで上昇するのに数分かかった。その高度に達した頃に、1 個の銀色球体が上空を通過していた。それが通過している間、私は 35 ミリフィルムで何枚かの写真を撮った...

その物体は飛び去った。私は地上に戻り、何が起きたかと訊いた。彼らはこう言った。“ラングレー(\*バージニア州、空軍基地)では、その正体を見るために戦闘機に警戒態勢をとらせた。彼らが緊急発進し、その高度に達したときには、物体はすでに飛び去っていた”...

このことは誰にも話さなかった。しかし、私とその写真を撮ったことをなぜか知る人がいて、おそらく 6 週間から 8 週間後のことだったと思うが、私に電話があった。こういう内容だった。“私たちは UFO の可能性があるものの情報を集めています。あなたが何枚か写真を撮ったと聞いているが、それを見たいので拝借できませんか” 私は信用証明書の類は求めなかった。そして“構いませんよ、写真の他にも過去 5 年間に AP が発表した興味深いニュース記事のコレクションを持っています”と言った。彼らは“では、それも持ってきてください。興味があります。それも見せてください”と言った...

その建物は人が住んでいるようには思えず、ごく簡単な家具があるだけだった。古い家だったが、中に価値のあるものは何もなかったと記憶している。骨董品も、東洋の敷物も、何もなかった。実際、それはみすぼらしいと言ってよいものだった。彼が何をしているのか、他に誰かその家にいるのか、

気にはなつた。しかし、彼に資料を渡しながら私はこう考えた。“もし見終わったら、電話をくれればよい。そうでなければ、私がここに取りにこよう” 彼は 2, 3 週間電話をよこさなかった。私は“もう十分だろう”と考えた。

彼から何の音沙汰もなく、相手の電話番号も知らなかったので、私はその家に行って資料を取り返してこようと考えた。その家に着くと、家は空っぽだった。彼は一体何者だったのか。私はよくよく世間知らずだった - ネガも焼き増しも保存していなかったのだから、なおさらだった。これらの資料は、私が持っていた現物そのものだった。その新聞のコピーもとっていなかった。というのは、我々はそれを単なる興味で収集していたからだ。それは印刷のためでも、出版のためでもなかった。こうして、それらの資料は私の人生から永久に消えた...

別のときに、私はラングレー空軍基地で NASA 長官と対談していた。我々は空飛ぶ円盤の話 시작했다。私は長官から、いかにも漠然とした、しかし正面から受け止めた返事を引き出した。このときの話題の一つは、別の種類の航空機と UFO についてで、我々はそれらをうまい具合に融合させた。私はこう訊いた。“では将来の航空機についてはどうですか？ それらはどんな形になりますか？” それに答えて彼はこう言った。“私たちは今、航空機を持っています。私たちは今、実際に飛ばすことのできる乗り物すなわち航空機を持っています。しかし、それらはとても変わっていて斬新なものなので、国民には受け入れられないでしょう”

彼は、それらの航空機は従来のもののようにではないと説明した。彼は事実に言及していたのだと思う。方向舵も、尾翼も、翼も、その類のものが一切ない航空機...

米国陸軍 ドン・ボッケルマン氏の証言  
Testimony of Mr. Don Bockelman, US Army

2000 年 9 月

ボッケルマン氏は米国陸軍の発射場電気技師だった。彼はシステム分析者としての訓練も受け、ナイキ・ハーキュリーズ・ミサイルの開発に取り組んだ。また、ハネウェル社では 2 年間核弾頭装備魚雷の製造に携わった。ボッケルマン氏は、時速 3,500 マイルで移動するきわめて速い目標を見ていた様々なレーダー操作員たちから直に多くの話を聞いた。それらの幾つかは、あり得ないほどの小さな回転半径で方向転換をしていた。あるとき彼は、ワシントン州マウントバーノンの近くで、防空ミサイルによる UFO の撃墜未遂を目撃した。

... 本当に大きな速度と高い機動性を持つ目標、すなわちレーダー上の UFO を相手にしている技術者や操作員たちがいる。私は操作員たちから、そのような多くの話を聞いた。彼らは世界中の様々な場所に駐在している。統合発射管制はミサイル関連のレーダーが配置されている場所で、多くのレーダーの集合体だ。彼らが詳しく語る内容は、次のとおりだ。飛行物体が飛び込んでくると、彼らはそれを追跡し、そのままやり過ごす。それらは時速 700 マイルで飛び、大気中で加速し、きわめて短時間に時速 3,500 マイルまで加速する。それは、我々の仮想敵ロシアの目標が持つ技術という観点での基準を外れていた。それは異質な技術だった。これらの操作員たちは熟練した人々だと言いたい。彼らは本当のレーダー目標と、目標のように見える大気擾乱の違いを判断できるように訓練されている。彼らはそのことの専門家だ。

だから、彼らが目標を追跡していたとき、彼らは大気中にある実際の物理的物体を追跡していたのだ。彼らは、大気中であって様々な形態の運動を伴う物理的な目標が存在すると、100 パーセント確信していた。私がこれらの報告を耳にしていたのは、1960 年代の終わりだ。報告は 1950 年代にまで遡る。というのは、エイジャックス(\*地対空ミサイル)サイトに配属されていた多くの年配の操作員たちがおり、彼らがそれらを追跡していたからだ...

軍を退役した後のある晩、私は自宅の居間に座っていた。1978 年 10 月のことで、私は明かりをすべて消してただ座り、心を漂うがままにさせていた。そのときまったく突然に、部屋の中で 4 個の琥珀色の光体が光を放ち始め、琥珀色の散乱光で部屋を満たし始めた。当然私は、見ているものが何なのかを突き止めようと、素早く後ろを振り向いた。そこには、互いにほぼ等間隔で並んだ 3 個の光体があり、4 番目の光体はその等間隔の光体群からやや離れて同じ平面上にあった...

そのとき、このジェット機が真西から来た。私は家の裏口に立ってこの物体を見ていたが、それが目の前で 1 機の防空ミサイルにより攻撃されたのだ。後で分かったのだが、それは標的に向けて発射される、大きな爆発力を持つミサイルだった。爆発の破片が地面に落下していた。ミサイルが爆発したとき、その物体は加速しながら、信じられないような速度で攻撃地点を離れた。その飛行物体への実際の攻撃は、セドロワーレイ(\*ワシントン州北西部)の東約 10 マイルで起きた。ライマン・アンド・ハミルトンと呼ばれる地域から北に約 3 マイルの付近だった。

私が軍にいたときにレーダーで追跡した物体に関してだが、その速度を別にすれば、これらの



目標について最も印象的だったのは、その突然の方向転換能力だ。防空に携わる人々は、質量と旋回半径を見る。極小半径で旋回する能力を持つ物体。そうした物体に匹敵するものを、我々は何も持っていなかった。ここで述べているのは、高速のまま実質的な旋回なしで方向転換することについてだ。時速 2,000 マイルで直角の方向転換。さらに方向転換だけでなく、下降と上昇。それらは素早く下降する。それらの物体にとり、進行方向が問題になるとは思われなかった...

### 3.8.3 SAC(戦略空軍)／NUKE(核兵器)

#### 序文

(グリア博士による口頭説明から筆記，編集された)

ここでは，核施設に関係する戦略空軍(SAC)と UFO 事件を扱う。我々がここで取り上げる証人は多様であることを，繰り返し強調したい。彼らは原子力委員会(AEC)から，米国とカナダにある戦略空軍施設，ミサイル発射管制施設にいた人々にまで及ぶ。これらの証人は，地球外輸送機が我々の大量破壊兵器に強い懸念を持っているようだという，疑う余地のない明快な証言をする。実際に複数の証人が私に語ったところでは，彼らはこれらの地球外輸送機が，次のことを心配してそこにいたと考えている。つまり，我々が自らを吹き飛ばしてしまわないか - あるいは我々が宇宙に進出し，いつか他の諸文明の脅威にならないかと。

これはとても重要なことだと思う。なぜなら，これらの物体による何らかの敵対行動があったと述べた証人は一人もいないことに加え，我々が大量破壊兵器を使って行なうかもしれないことに彼らが懸念を抱いていることは，まったく明らかだからである。このことは，とても深遠な何かを伝えている：我々は平和こそが唯一の可能な未来である段階に至った。兵器はあまりにも強力であり，そのような兵器をこれ以上進歩させてその使用を意図することは，あまりにも危険な賭けである。我々は，兵器庫にあるこれらの大量の兵器をいかなる生命に対しても用いることなしに，宇宙に進出しなければならない。我々の活動を監視し，数十年にわたってそうしてきたように思われる地球外文明は，実際，このことを彼らの主要な関心事の一つとしているのかもしれない。そしてほぼ間違いなく，惑星間社会へ参入するための基本的要件は，平和的に宇宙に進出する能力なのである。我々はここで，マスケット銃(\*18世紀初頭の先込め撃針銃)や大砲や剣ではなく，熱核兵器，パルスレーザー兵器，時空の連続を引き裂くことのできる異種技術について語っているのだ。誰もがはっきりと知らなければならないことは，生存できる唯一の未来は，平和な未来だということである。この平和は，人類が成熟したことの証である。

また，国家の軍事機構の中にいる人々，米国および他国の国家安全保障組織内にいる人々は，これらの地球外輸送機による一部の活動を，我々の領空または主権の侵害と誤解してきたという可能性もある。我々はもっと広い見方をしなければならない。そして，こう考えなければならない。もし我々が，100年のうちに農業文明から初期段階の宇宙飛行ができる文明へと移行し，世界を破壊できる何千もの熱核装置を持つ惑星に遭遇したなら，おそらく我々も同じように懸念を抱くだろう。我々は一つの種族として鏡を覗き込み，こう自問すべきである。我々の惑星の平和を確実にするため，またこれらの兵器を宇宙空間から永久に排除することを保証するために，我々は何をしているべきかと。

戦略空軍施設と核事象に関するこの問題を論じる中で，我々は幾つかの事例において，発射管制施設やミサイル格納庫周辺に出没してきたこれらの物体が，発射装置を遮断することができたことを知るだろう：つまり，彼らは大陸間弾道ミサイルを無能なものにしてきた。これが彼らの側の何らかの敵意を示すものだと私は思わない。彼らはこう言っているのだ。“この美しい惑星を破壊しないでください。そしてこのことを知ってください。私たちは，あなたたちが私たちが破壊するのを許しません”このような行動は，しかしながら，秘密の真空地帯の中である種の当局者たちにより，

誤解されてきたかもしれない。それを理解することはとても重要である。一つの文明として、我々はこれを注意深く考察しなければならない。秘密の闇の中で何が起きているのか？ 秘密は自らを肥大させ、情報と展望の空白を生み出す。そこでは異なる見方、異なる生き方を持つ人々との間で、十分な意見交換がなされない。そのような環境の中では容易に妄想と誤解が芽生える。これは強迫観念にとりつかれた秘密主義 - アイゼンハワー大統領が 1961 年 1 月に我々に警告した秘密主義 - に特有の重大な危険性の一つである。

米国空軍大尉 ロバート・サラスの証言  
Testimony of Capt. Robert Salas, US Air Force

2000年12月

サラス大尉は空軍アカデミーを卒業後、1964年から1971年までの7年間現役勤務に就いた。その後、マーチン・マリエッタ社とロックウェル社で働き、FAA(米国連邦航空局)でも21年間勤務した。空軍では、航空管制官、ミサイル打ち上げ管制官、およびタイタン III ミサイル技術者を務めた。サラス氏は1967年3月16日朝のUFO事件について証言する。複数のUFOが頭上に空中静止しているのを保安兵たちが目撃した直後、二つの別々の発射場で16基の核ミサイルが同時に稼働不能に陥った。保安兵たちは、それらの物体からわずか30フィートしか離れていなかったにもかかわらず、その正体を確認することができなかった。空軍はこの事件を詳しく調査したが、原因らしいものを見つけることができなかった。事件についてのある報告会で、空軍特別捜査局から来た一人の将校が、彼に対して機密保全誓約書に署名することを要求した。さらに、事件については家族や他の軍関係者を含めて、誰にも話してはならないと告げた。あまり重要ではない技術的異常が関係者の間で公然とやりとりされた冷戦の最中に、この事件についてはそのようなことはなかった。これはとても異常なことだとサラス氏は今でも考えている。

RS: ロバート・サラス大尉

SG: スティーブン・グリア博士

RS: 私の名前はロバート・サラスだ。私は空軍アカデミーを卒業し、1964年から1971年までの約7年半、空軍の現役勤務に就いた。その後、最初はデンバーにあるマーチン・マリエッタ社で、次いでここ南カリフォルニア地区にあるロックウェル・インターナショナル社で働いた。その後1974年にFAAに入り、そこで約21年間勤務した後、1995年に連邦政府の職を退いた。

私は空軍にいたとき、航空管制官だった - 我々はそれを地上管制迎撃管制官と呼んでいた。次はミサイル発射将校だった。さらにその後は、ロサンゼルス空軍駐屯地の外にあるタイタンIII(\*大陸間弾道ミサイル)推進システムの技術者だった。

そのUFO事件だが、1967年3月16日の早朝に起きた。私は指揮官のフレッド・マイワルドと一緒に勤務していた。我々は二人とも第490戦略ミサイル中隊の一部として、オスカー小隊で任務に就いていた。この中隊には、割り当てられた5箇所の発射管制施設があった。我々はオスカー小隊にいた。

外はまだ暗く、我々は[ICBM(大陸間弾道ミサイル)発射管制施設の]60フィート地下にいた。私は早朝に、隊の保安要員である地上保安兵からの電話を受けた。彼は他の保安兵らと一緒に、この発射管制施設の周囲を飛ぶ幾つかの奇妙な光体を見ていた。それらはただ飛び回るといって、とても異常な動きをしていると彼が言ったので、私は“UFOだということか?”と訊いた。彼は、正体は分からないが、光体が飛び回っていると言った。それらは飛行機ではなかった; それらは無音だった。それらはヘリコプターではなかった; それらは幾つかのとても奇妙な動きをしていたが、彼はそれをうまく言えなかった。釈然としなかった私は、“もっと重大なことが起きたら呼んでくれ”と言った。

その場のやりとりは、基本的にこうして終わった。彼から再び電話があったのは、数分後といった時間ではなく、多分半時間もしてからだった。今度の彼はとても怯えていた；彼の声の調子はうまく伝えられないが、とても動揺していた。彼はこう言う。“上官殿、正面ゲートのすぐ外側に赤く輝く物体が 1 個空中静止しています - 今それを見えています。外では皆武器を構えています” もちろん彼はそう言いながら、とても取り乱していた；とても興奮していた。

私はそれをどう判断してよいか分からなかったが、彼は何をすべきか、私に指示か命令を求めていた。それで私は、次のようなことを言ったと思う。“外周フェンスに問題がないか確かめよ” するとすぐに彼は“確かめてきました。保安兵が一人負傷しています” と言い、電話を切った。

直ちに私は仮眠していた指揮官のもとに行き - 休憩のために我々はその小さな簡易ベッドを置いていた - 今受けた電話の内容を報告した。その報告の最中に、我々のミサイルが 1 基ずつ運転を停止し始めた。運転停止とは‘発射準備不能’の状態になったという意味だ。こうして、管制室のあちこちで警報が鳴り始めた - 発射準備不能の赤ランプ。

そのときの記憶ではミサイルのすべてが停止したように思われたが、後日私の指揮官マイルドと共にこの事件の記憶をたぐっているとき、失ったのはおそらくこれらの兵器の 7, 8 基だけだったように感じたと言った。

**SG:** これらの兵器が何だったか、記録のために説明してくれませんか？

**RS:** これらの兵器はミニットマン I・ミサイルだった。もちろん核弾頭ミサイルだった。

それらが運転を停止し始めると、彼はすぐに起き、我々は二人で状態表示盤を調べ始めた。我々は、それを調べて停止の原因を突き止める能力を身につけていた。その大部分は誘導と管制システムの障害だったと記憶している。それから彼は、指揮所に報告を始めた。その間に、私はこの物体がどんなことになっているかを知るために階上を呼んだ。保安兵がこう言った。物体は去った - 高速でただ飛び去った。

負傷した保安兵は、その鉄条網を登ろうとしたらしかった。UFO は何も攻撃しなかったし、この空軍兵を傷つけることもしなかった。私は物体の様子を訊いた。彼は次のように話すのがせいっぱいだった。それは卵形で、物体の周囲は赤味がかかったオレンジ色に輝いていた。

**SG:** その距離と高さはどれくらいでしたか？

**RS:** 彼の話では、それはフェンスの真上に空中静止し、彼から約 30 フィート以内にいた。フェンスの高さは 8 フィートはあっただろう。

それから 1 週間以内に、また別の事件があった。直後のことだった。そのときはレーダー報告に加え、さらに多くの証人がいた。

[ドゥイン・アーネソン中佐の裏付け証言を見よ]

空軍は事件の全体についてあらゆる角度から調査をしたが、運転停止の原因らしいものを見つけることはできなかった。私には、この事件を証言できる相当数の証人がいる - 我々の中には調査団に加わった者も二、三人いる - 私は調査を実際に組織した人からの手紙も持っている。これ [複数の ICBM の運転停止] の可能な説明は何も見つからなかった。どのミサイルも基本的には自立している。施設の大部分は商用電源から供給されているが、個々のミサイルはそれ自体の発電機を持っている。

カプセル(地下発射管制施設)とミサイルサイト間の唯一の接続は、SIN ラインつまり機密情報網ラインと呼ばれるものだ。それらは基本的に埋設ケーブルだが、カプセル自体の内部にあってミサイルに直接つながっている。ミサイルは互いに接続されていないため、一つのサイトの障害は他の場所のミサイルに影響しない。

我々のサイトのどこかで 6 基ないし 8 基が停止したが、それらは短時間に相次いで停止した。繰り返すが、これはきわめて起きにくい現象だ。原因を問わず、複数のミサイルが停止したことは稀だった。それはきわめて稀なことだった。気象条件は除外された。すでに述べたように、調査は広範囲に及んだが、電力サージは除外された。実験室で幾つか試験を行っていたボーイングの技術者が気付いた、唯一の可能性があった。彼は、何らかの電磁力または電磁場が信号を消してしまったと考えた。だがもしそうなら、その電磁力は個々のミサイルにつながっている埋設ケーブルを通っていく必要があった。

私が階上の保安兵と話した後、私の指揮官は指揮所に連絡した。指揮所との連絡を終えたとき、彼は私に向き直ってこう言った。“同じことがエコー小隊にも起きた” エコー小隊は別の中隊だ。そこは我々の位置から 50 マイルないし 60 マイルは離れている。しかし、彼らにも同様のことが起きた。そこでは発射管制施設ではなく、ミサイルが格納されている実際の発射施設で UFO が空中静止した。その時刻に彼らの隊には保守と警備の要員が数人いたが、彼らはそれぞれの場所で UFO を目撃した。彼らの場合、10 基のミサイルがすべて停止した - 10 基全部だ。

**SG:** それはほぼ同時刻でしたか？

**RS:** 同じその朝だった。だから、その朝に我々は、UFO がその場所に現れ空軍兵たちに目撃された同じ時刻に、場所は違うが 16 基ないし 18 基の ICBM を失ったのだ。それらのミサイルは終日停止していた。というのも、我々はエコー小隊を救援したドン・クロウフォード大佐の証言を得ているからだ。彼はミサイルが警戒状態に戻ったときそこにおり、それには終日かかったと言った。それで私は、我々のミサイルが元に戻るのに 1 日かかったと推測している。

我々が救援を受けたとき、階上に行って私が最初にしたことは、保安兵の目を見ることだった。私はこう言った。“君、この物体について私に本当のことを言ったのか？” 彼は本当のことを言ったと懸命に訴えた。私は二つの理由で、彼が本当のことを言ったと信じた。彼が階下の私に電話をよこしたとき、彼は確かに怯えていた。そして私が彼の目を見、彼がその状況を私に話したとき、私は間違いなく彼を信じたのだ。

私はこの事件について報告書を書き上げた。日誌に書いていた内容も報告書に含めた。我々は基地に着くとすぐに、中隊長に報告しなければならなかった。その部屋には、中隊長と共に空軍特別捜査局(我々の基地には空軍特別捜査局があった)の人間が一人いた。彼は中隊長と一緒にその事務所にいた。彼は私の日誌を要求し、簡単な説明をしてほしいと言ったが、何が起きたか彼はすでによく知っているようだった。それでも我々は簡単な説明をした。彼は我々二人に、これは機密情報だからと言い、機密保全誓約書に署名するよう求めた - 我々は誰にもこれを漏らしてはいけない、そういうことだった。我々は話せなかった; 彼はこう言った。我々はこれについて誰にも話せない、他の隊員にも、配偶者にも、家族にも、お互いの間でさえも。

これで事件はおしまいだった。私はそのマルムストローム(\*モンタナ州マルムストローム空軍基地)に、その後さらに 2 年間いた。その間、我々はその事件について何の概要報告も与えられなかった - エコー小隊の事件も我々の事件もだ。それはとても異常なことだった。なぜなら、装置に起きた異常については、どんなことでも毎朝説明を受けていたからだ。我々は説明を受け、兵器に関して生じたこれらの技術的諸問題を議論した。しかし、これらの事件については何も一度も聞くことはなかった。そしてこれらは重大事件だった。実に重大な事件だった。

私は、あるテレックスのコピーを入手したが、それは情報公開法請求により我々が受け取ったものだった。それは、あのことが起きた朝、直ちに戦略空軍司令部からマルムストロームや他の基地に送られたものだった。それには、この事件に戦略空軍司令部がきわめて重大な懸念を持っていると書かれていた。なぜなら、彼らはそれを説明することができなかったからだ。起きたことを誰も説明できなかった。それにもかかわらず、我々が説明を受けることは決してなかった。我々には、扱っているものが核兵器だという理由で、きわめて高い機密取扱許可が与えられていたにもかかわらずだ。

ミサイルが停止したとき、これらのサイトでは侵入防護警報が確かに鳴った。これは異常だ。というのは、通常ミサイルが誘導障害か何かで停止した場合、侵入防護警報は鳴らないからだ。これは境界線が破られるか、物体がフェンスを横切ったか、あるいは何かが発射施設の境界線にある侵入防護警報システムを壊したことを意味する。私はそれを調べるために、それらの施設の 2 箇所ほどに保安兵をやった。

この話がとても重要だと考える理由は、それより前の 1966 年 8 月、ノースダコタ州マイノットのマイノット空軍基地で、とてもよく似たことが発射管制施設の一つで起きていたからだ。彼らは我々と同じ種類の兵器システムを持っていた - 彼らは M-1(\*ミニットマン I)ミサイルを持っていた。これ[UFO]はレーダーで目撃された。幾つかの通信障害が起き、物体は発射管制施設の上で目撃された。

これは 1966 年 8 月に起きた事件で、十分な証拠書類がある。私の事件に先立つ約 1 週間前、1967 年 3 月に保安兵の一人がかけた電話記録を私は入手した。彼は発射施設を見ながら外で叫んでおり、今私が説明した発射施設の上の物体にとってもよく似た物体を見ていた。指揮官は指揮所に報告した。我々の事件後約 1 週間か 10 日して、文書で十分に立証されている事件がマルムストロームで起きた。この事例では、マルムストローム空軍基地近くで 1 機の UFO がレーダーで追跡され、比較的近距离からトラック運転手と高速パトロール警察官によって目撃された。空軍は調

査を行ない、この UFO 目撃に関する分厚い調査報告書を作成した。なぜなら、それは基地の周辺を飛び回り、しかも基地にとっても近かったからだ。

これは、ミニットマン・ミサイルという同種の兵器システムに関して発生した、一連の事件だ。

保安兵が私に提出した報告は、公式の報告だ。これらは悪ふざけではない - それらは公式の報告以外のことを意図したものではない。なぜなら、我々は冷戦とベトナム戦争の最中に戦略兵器を扱っていたからだ。これらの保安兵たちは職業集団であり、兵器の停止や彼らが見ていたものを冗談の種にはしなかった。だから、これらは噂ではなく、公式報告だった。もし彼らが何かの理由で撤回されていたなら、これらの人々はとても機密性の高い事件の中で虚偽の報告をしたとして、軍法会議にかけられていただろう。そんなことは起きなかった。

ボブ・コムスキーが、これら(\*UFO に関係した ICBM)の運転停止のあらゆる側面を調べるために組織を率いた。ある時点で彼は上司から、空軍が“調査を中止せよ；これについてこれ以上何もするな、最終報告書も書くな”と言っていると言われた。コムスキーは私に書面でそう述べた。繰り返すが、何よりも CINC-SAC(戦略空軍最高司令官)が、ここで起きたことを正確に解明することはきわめて重要だと述べていたのだから、これはきわめて異常だ。それにもかかわらず、調査団の団長が調査中にそれを中止し、最終報告書も書くなと言われたのだ。

実を言えば、この事件を報告した多くの保安兵たちがベトナムに送られたと聞いた。私はそれを事実として知っているし、証明することもできる。私が発射施設まで物体を見に行かせた保安兵の一人は、戻ってきて経験したことにとっても動揺していた。それ以後、彼は警備の任務を解かれた。彼はどこか別の所に送られた。なぜなら、その経験にあまりにも動揺していたからだ。

[核施設周辺で起きたこれらの事件や関係する UFO 事件について述べた、公式政府文書を見よ。SG]



米国空軍中佐 ドウイン・アーネソンの証言  
Testimony of Lt. Colonel Dwyne Arneson, US Air Force  
2000 年 9 月

アーネソン中佐は米国空軍で 26 年間を過ごした。軍では最高機密 SCI-TK(機密区画情報タンゴ・キロ)取扱許可を持っていた。彼はボーイング社のコンピューターシステム分析者として働き、ライト・パターソン空軍基地では兵站部長を務めた。一時期アーネソン氏は、ドイツのラムスタイン空軍基地全体の暗号将校だったが、そこである日 1 通の機密通報を受け取った。それには、1 機の UFO がノルウェーのスピッツベルゲン島に墜落したと書かれていた。モンタナ州マルムストローム空軍基地にいたとき、彼は再びある通報を見たが、それには金属製の円形 UFO が地下ミサイル格納庫付近に空中静止しているのが目撃され、ミサイルのすべてが遮断されて発射できなくなったと書かれていた。

DA: ドウイン・アーネソン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

DA: 私の名前はドウイン・アーネソンだ。私は 1937 年にミネソタ州ロチェスターで生まれ、ロチェスター高校に通った。卒業後はミネソタ州ノースフィールドのセントオラフ大学に進み、物理学と数学の学位を取った。そして大学卒業と同時に空軍の将校訓練校に応募し、合格した。そこも終え、将校に任命されたのは 1962 年だった。以来、通信電子将校として米国空軍で 26 年間を過ごし、1986 年に退役した。私はベトナム、ヨーロッパを含む世界中に赴任した - どこであれ名前を挙げたら、おそらくそこにはいたことがあるだろう。

私は最高機密 SCI-TK 取扱許可を持っていた。それは機密区画情報タンゴ・キロを意味し、超最高機密と言ってもよい。その種の取扱許可を得るためには特別な審査が必要だ。1986 年に空軍を辞めて中佐として退役すると、私はボーイング社に就職し、そこでコンピューターシステム分析者として働いた。その立場で、1987 年以來ボーイング社で働いている。1986 年に退役したとき、私はライト・パターソン空軍基地の兵站部長だった。

私は自分自身の詳細な調査を通して物事を見る、様々な機会を持った。一つの例は、ドイツのラムスタイン空軍基地で中尉だった 1962 年に遡る。私はラムスタイン空軍基地全体の暗号将校、最高機密管理将校だった。そしてその立場で、偶然私の通信センターを通った機密通報を見た。それには“1 機の UFO がノルウェーのスピッツベルゲン島に墜落し、科学者の一団が調査に向かっている”と書かれていた。

その通報がどこからどこへのものであったかについては、私は思い出さないことにする。というのは、私の立場としてしばしば次のことを言われたからだ。“ここで見たものは、ここに置いていけ”だがそれを見たことは思い出す。

次に思い出されるのは 1967 年に起きたことだ。私はモンタナ州マルムストローム空軍基地第 20 航空師団の通信センター担当になったが、そこでもまた最高機密管理将校だった。私は SAC(戦略空軍)ミサイル隊員たちにすべての核発射認証を発していた - だから、私には最高機密に接するよい条件があった。

ある日、私は偶然に、私の通信センターを通った通報を見た。これもまた、その日付、発信元、送信先を述べることはできない。しかしそれを読んだり見たりしたことは、しっかりと思い出す。それは基本的に次のようなことを言っていた。“1機のUFOがミサイル格納庫の近くに見える”... それは空中静止していた。それによれば、勤務中の隊員も非番の隊員も皆、空中静止しているUFOを見た。それは金属製の円形物体で、私の理解ではミサイルはすべて停止した。

その後、何年も経ってボーイング社で働いていたとき、私はボブ・コミンスキーという人物からその話を聞いた。彼はボーイング社を退職していたが、こう言った。“そうだ、私はミサイルを調査するためにボーイングから派遣された技術者だった。それは実際にそれらのシステムが自ら停止したのではないことを確かめるためだった”そしてこう続けた。“私はそれらに完全な健康証明書を与えたよ”私はボーイング社ではボブのもとで働き、彼のよき友人だった。

彼が亡くなる前でさえ、我々はこの問題について実に多くの会話を持った。彼はまったく信じられないほど素晴らしい人物だった。

*[マルムストローム空軍基地におけるこれらのICBM(大陸間弾道ミサイル)事件を述べた、ロバート・サラス大尉の証言を見よ。SG]*

‘ミサイル停止’とは、それらが死んだという意味だ。何かがそれらのミサイルを停止させ、ミサイルは発射モードに入れなくなった。

私がメイン州キャズウェル空軍駐屯地で、レーダー中隊長をしていたときのことだ。そこはローリング空軍基地と隣り合わせだった。そこではB-52、KC 空中給油機などを発進させていた。私にはローリング空軍基地に警備担当の友人が多くいた。彼らは、ローリング空軍基地の核兵器貯蔵区域の近くで空中静止していたUFOについて私に語ってくれた。

*[これはジョー・ウォイテッキ中佐の証言を裏付ける。ローリング空軍基地における重大な出来事についての彼の証言を見よ。SG]*

少し背景を述べる。話を長引かせるつもりはない - 私はライト-パターソン基地の兵站部長に任命されたとき、オクラホマ市に妻子を残してきた。それは娘の高校最後の年だったので、私は約1年間単身赴任をしたのだ。そこでアパートを探しているときに、この夫人に出会った。名前はクリス・ウィードンで、デイトン近郊に5エーカーの小さな英国風屋敷を持っていた。貸部屋つまりベッドルームが三つあった。私はその一つを借り、いわば彼女の息子となった。私は彼女のために、草刈りを手伝ったり芝生を刈ったりした。彼女は70歳台だった。

彼女の夫はスペンサー・ウィードン中佐だった。彼はそのときに先立つこと20年前に亡くなった。私が会った誰もが、彼は実に立派な人物だったと言った。ウィードン中佐は明晰な精神の持ち主であり、ライト-パターソンにおける主導的なUFO調査官の一人だった。実際に私は、1950年代に遡るスペンサー・ウィードンとあのドナルド・キーホー少佐による論争テープを自宅に持っている。論争はアームストロング・サークル・シアター(Armstrong Circle Theater; 1950年代のNBCテレビ番組)の中で行なわれた。そのウィードン中佐が彼女の夫だった。

私が偶然出会ってお互いすぐ好きになった人物は、アドルフ・ラウム博士だ。当時彼は 83 歳だった。もう亡くなったと思う。ある夜の夕食後、マティーニを少し飲んだ後で、私は冗談めかしてアドルフ博士に訊いた。“このライト・パターソン基地で氷の上に寝かされているという小さなグレイについて、何か知っていますか？” 私は彼の顔が蒼白になり、声がとても厳しくなったのをはっきりと覚えている。彼はこう言った。“アーン、私が君に言えるのは、それらが気象観測気球ではなかったということだけだ。これについて我々が話すことは今後ないだろう。いいかい？” これについて我々がこれ以上話すことはないとは私ははっきり理解した。ラウム博士はもともとスイス出身だった。彼は米国における最初の原爆実験に従事し、オッペンハイマー博士と親しかった。私は最高機密取扱許可を持っていたが、我々が接近できない区域があった。だから我々は、ライト・パターソン基地にあるこれらの区域の幾つかについては、何も知ることはできなかった。そこには何かの遺体があったかもしれない - 彼らが何を持っていたか、誰が知ろうか？ 私のもとで通信電子将校として働いていた多くの技術者たちは、異様な速度でレーダー画面を横切る物体について話したものだ。我々が持っている何物も、そのような速度で移動することはできなかった。

**SG:** これがあったのは何年のことですか？

**DA:** そう、これは私がメイン州キャズウェル空軍駐屯地でレーダー中隊長をしていた 1970 年代中頃の事だ。これらの技術者たちが、そのような出来事を私に話してくれたのだ。

レーダー中隊長は、レーダーを実際に保守する技術者と共に操作員を抱えている。実際に、我々はその陣容で戦闘訓練をする。我々は、米国にいてカナダ NORAD (北米防空軍) 師団の作戦統制のもとにあった唯一のレーダー中隊だった。さて、この部隊はカナダから南下してくる B-52 を見る。そして迎撃戦闘機がそれらに向かったりする。だから、彼らはそれらがどれくらい速く飛ぶかを知っていた。彼らは爆撃機を知っていた。彼らは我々の最新戦闘機部隊の速度を知っていた。私のレーダー技術者たち、保守要員たち - 彼らは次のように言える立場にあった。“視界は A-1 条件にある - または、レーダーは A-1 条件にある” だから、物体は調べて確認することができた。操作員たちの経験、保守要員たちの経験 - 彼らはシステムが完全に稼働していることを確認した。その彼らがこう言った。“あの物体は時速 2,000 マイルないし 3,000 マイルで移動している” 私はキャズウェル空軍駐屯地だけでなく、全米の異なるレーダー基地で起きた同様の出来事を語った様々な情報源からそれを聞いた。当時に遡ってもレーダー基地は全米にあり、似たような話はまったく珍しくなかった。

このことを考えるとき、我々のこの広大な宇宙を考えるとき、もし我々がそこにいる唯一の知的生命体だったとすれば、神は何と判断を誤ったことか...

米国空軍中尉 ロバート・ジェイコブズ教授の証言  
Testimony of Professor Robert Jacobs, Lt. US Air Force

2000年11月

ジェイコブズ教授は、米国のある主要大学の高名な教授だ。彼は1960年代に空軍にいた。空軍では光学装置を担当する将校で、任務はカリフォルニア州バンデンバーグ空軍基地から発射される弾道ミサイル実験を撮影することだった。1964年、彼らが撮影した最初のミサイル実験中に、ミサイルと並んで飛ぶ1機のUFOがフィルムに捉えられた。それは2枚の受け皿を向き合わせ、1個の丸いピンポンボールをその頂部に載せたような形をしていた。フィルムには、そのボールから1本の光線がミサイルに向けて放たれている様子が写っていた。これが違う方向から4回起きた。このときミサイルは約60マイルの上空にあり、時速1万1,000マイルから1万4,000マイルで飛んでいた。そのミサイルが宇宙から落下し、UFOは去った。翌日、彼は指揮官からこのフィルムを見せられ、それについて今後決して口にしないよう告げられた。指揮官はこう言った。もし君がそれを述べる状況になったら、UFOから発射されたレーザー攻撃だったと言うように。ジェイコブズ教授は、これはおかしいことだと考えた。なぜなら、1964年の時点でレーザーは実験室で生まれたばかりだったからだ。しかしそれでも彼は言われたことを守り、このことを18年間口にしなかった。年月が経ち、そのフィルムについての記事が出た後で、彼は早朝に嫌がらせ電話を受けるようになった。家の前の郵便受けが爆破されるということさえ起きた。

我々がバンデンバーグ空軍基地で撮影したものが、私のその後の人生に影響を及ぼし、宇宙について、また政府が我々の心を操作する様についての私の理解に、非常に大きな影響を与えた。

我々が核兵器を目標に向かって打ち込むための弾道ミサイル実験を行っていた、というのがこの出来事の背景だ。それが彼ら(\*UFO)がそこにいた理由だった。我々は本物の核兵器を打ち上げていたのではなく、模造弾頭を打ち上げていた。それらは核兵器と同じ大きさ、形状、寸法、重量を持っていた。私はバンデンバーグ空軍基地の第1369写真中隊で、光学装置を担当する将校だった。だから、この(\*西海岸にある)西部発射実験場で落下するすべてのミサイルの計装写真を管理するのが、私の任務だった。当時、我々はそれらをICBMと呼んでいた。つまり、郡間弾道ミサイル(inter-county ballistic missile)だ。なぜなら、それらは発射するとすぐ爆発していたからだ。我々の仕事は、なぜそれらが爆発したかを究明することで、技術者たちに技術連続写真を提供し、飛行中に外れた噴射口の何が悪かったのかを調べられるようにすることだった。これらの実験を追跡するための写真施設を設置した功績により、私は空軍誘導ミサイル記章を受けた。私はミサイル記章を得た空軍で最初の写真家だった。それは当時誰もが欲しがっていた。

その事件が起きたのは、間違いなく1964年だった。というのは、マンスマン少佐がそれを確認したからだ；彼はそれを書き物にしていて、その正確な日付を知っていた。

ミサイルの秒読みが始まり、エンジンの点火音が聞こえた。ミサイルが上昇し始めた合図だった。我々が南、南東を見ていると、ミサイルは霧の中からひょっこり現れた。それは実に美しいもので、私は、そら出てきたぞ、と大声で叫んだ。180インチのレンズを据え付けたM45追跡台にいる連中が、ミサイルを撮影した。大きなBU望遠鏡(\*ボストン大学が開発した特殊な望遠鏡)が旋回してそれを捉えた。こうして我々はそれを追い、推力を得た飛行ブースター3段のすべてを実際に見

ることができた。それらは燃焼し尽くし、落下した。当然、我々の目に見えるのは、太平洋上の島である標的に向かって下部宇宙空間へと吸い込まれていく、煙の航跡だけだった。あれは我々の最初の打ち上げ撮影だった。我々はそれをやり遂げた。

我々はそのフィルムを基地に送った - それからどれくらいの時間が経ったのか、正確には覚えていないが、1日か2日だったと思う - 私は第1戦略航空宇宙師団司令部のマンスマン少佐の事務室に呼ばれた。事務室に足を踏み入れると、彼らはスクリーンと16ミリプロジェクターを用意していた。長椅子が一つあり、マンスマン少佐が座れと促した。そこには灰色のスーツを着た二人の男がいた。私服だったのはかなり異例だった。マンスマン少佐は、これを見ろと言い、フィルムプロジェクターのスイッチを入れた。私はスクリーンを見た。それは1日か2日前の打ち上げだった。

それは胸を躍らせるものだった。望遠鏡が長いので、アトラス・ミサイルが画面に入ったときには、その3段目までの全部を見ることができた。あれは実に素晴らしい光学装置だった。我々はその段が燃え尽きるのを見た。2段目が燃え尽きるのを見た。3段目が燃え尽きるのを見た。そして、その望遠鏡で我々は模造弾頭を見ることができた。それは飛び続けていたが、画面に何か別のものが入った。それは画面に入ってきて弾頭に光線を発射した。

思い出してほしいが、これらはすべて時速数千マイルで飛んでいるのだ。この物体[UFO]は弾頭に光線を発射して命中させ、次にそれ[UFO]は反対側に移動し、また光線を発射した。さらにまた移動して光線を発射し、次に下降してまた光線を発射した。そして入ってきたときと同じ方角に飛び去った。弾頭は宇宙から落下した。物体、見えた光の点々、弾頭などは、高度約60マイルの下部宇宙空間を上昇していた。このUFOがそれらに追いつき、飛び込んできてその周りを動き回り、飛び去ったとき、それらは時速1万1,000マイルから1万4,000マイルで飛んでいた。

私はそれを見てしまった！ 誰かがそれについて何を言おうとも、私はまったく気にしない。私は映像でそれを見たのだ！ 私はそこにいたのだ！

明かりがつけられたとき、マンスマン少佐は振り向いて私を見た。そして、君たちは何か悪ふざけをしていたかと訊いた。私は、していませんと答えた。すると彼は、あれは何だったかと訊いた。私は、UFOを捉えたのだと思いますと言った。我々が見たもの、飛び込んできたこの物体は円形で、2枚の皿を合わせてピンポンボールを頂部に載せたような形をしていた。光線はそのピンポンボールから発射された。それこそ私が映像で見たものだった。

それについて少し議論してから、マンスマン少佐は私に、これについては今後決して話すなど言った。これが決して口外されなかったことは、ご存じのとおりだ。彼は、機密保全誓約違反の悲惨な結末は分かっているね、と言った。分かっています、少佐、と私は言った。彼は、よろしいと言った。私は決して口外しなかった。私がドアに向かったとき、少し待てと彼は言った。そして、こう言ったのだ。今後もし誰かにそのことについて話すように強要されたら、それはレーザー照射だった、レーザー追跡照射だったと言うように。

だが、1964年にレーザー追跡照射などは行なわれていなかった。どのようなレーザー追跡もまったく行なわれていなかった。レーザーは1964年にはまだ生まれたばかりだった。それらは実験室



UFO 問題の周辺を縁取るこの気違いじみた物事は、その真面目な研究を抑えつける協調した作戦の一部だと私は考えている。この問題を真面目に研究しようとする、いつでも誰でも嘲笑の対象になる。私は比較的主要な大学の正教授だ。私が未確認飛行物体を研究することに興味を持っていると聞いたら、私の大学の同僚たちは私を笑い、私の後ろであれこれ大声で揶揄することは間違いない - 未確認飛行物体はまさに我々が共存すべき物の一つなのだが。

空軍はすべてを否定した。私は空軍にいたか？ 空軍はそれを否定した。私はかつてバンデンバーグ基地にいたか？ もちろん私がいた可能性はない。私は空軍にいなかったのだから、どうしてバンデンバーグ基地にいられようか？ 私はカリフォルニア海岸に沿って追跡サイトを設置したか？ 否、カリフォルニアに追跡サイトはなかった。馬鹿げているのはどっちだ！ その追跡サイトは今でも私が設置した所にある。彼らはスペースシャトルがカリフォルニアに着陸するたびにそのサイトを利用する - 皆さんがシャトルを最初に見るのはそこからなのだ。彼らは今でも、バンデンバーグ基地から発射されるミサイルをこの追跡サイトで撮影している。

ともかく私の話を裏付けるために、リー・グラハムはフロレンス・J・マンスマンを見つけ出した。そのことを口外しないように私に命令した、あの少佐だ。彼は今やスタンフォード大学の博士であり、カリフォルニア州フレズノで牧場を経営していた。彼はリーに返事を送ったが、それにはボブ(\*ジェイコブズ教授)が彼の話の中で語ったことはすべて絶対に真実だと述べられていた。

彼は私の話を裏付けてくれた。そしてその後何年間も、誰かがそれを持ち出したり、彼と接触しようとしたときには、いつでもこう言って私の話を裏付けてくれた。“そのとおりだ、それがまさに起きたことだった” これは相当に勇気が要ることだ。私は小父さん[マンスマン]のファンになってしまった。その彼も今は亡い。しばらくの間、彼は私の英雄だった。

そのとき私は部屋にいなかったが、マンスマン少佐が私や他の人々に語ったように、そのフィルムに起きたことは、それ自体興味深い話だ。私が立ち去ってからしばらくして、私服の男たち - 私は彼らを CIA(中央情報局)と考えたが、彼は違うと言った。それは CIA ではなく他の何者かだった - がそのフィルムを取り上げ、UFO が写っている部分をリールから外し、はさみで切り取った。そしてそれを別のリールに巻き、書類カバンに入れた。男たちは残りのフィルムをマンスマン少佐に返し、こう言った。“機密保全誓約違反に対する罰則の厳しさは、説明する必要がないですよ、少佐。この事件は片づいたことにしましょう” 彼らはフィルムを持って立ち去った。マンスマン少佐がそのフィルムを再び見ることはなかった。

私の考えでは、バンデンバーグ基地でそれを再び見た者は誰もいない。それはバンデンバーグ基地からどこか他の所に行っただけだと私は確信している。フィルムを見ることにとても慣れたマンスマン少佐が、それは地球外のものに違いないと言った。彼らは模造弾頭を照射した光線を、ある種のプラズマビームと考えた。それはプラズマビームのように見えたからだ。

マンスマン少佐は、組織の中では大変な栄誉と科学者としての名声を得た人物だった。その彼がそれを裏付けたことで、私は十分満足している。私は自分自身を信じなくても、マンスマン少佐は信じるだろう。

そのとき空軍将校だった我々二人がそこにおり、何かを見た。また、それを見たことを我々二人が互いに裏付けた。懐疑論者や私が話していることを信じない人々に訊ねたいのは、なぜ私がこの話をつくり上げる必要があるかということだ。なぜマンスマン少佐(博士でもある)がそれをつくり上げる必要があるのか？ 我々は何を得る必要があるか？ 私はそれから、それを話したことから苦痛と苦難以外を得ていない。私は自宅で嫌がらせを受けてきた。これは私を不利にするために使われてきた。一度は教職を失う一因にもなった。この話をした後で、私は大変な目に遭ってきた。だが、私はこの話をし続ける。政府の中でこの種の最低のことが行なわれていることを人々を知るのは、重要だと考えるからだ。我々はこの国の国民として、その情報を知る資格がある。それを政府が隠蔽しているのだ。私がこの話をする理由はそれだ。それが、私があなたにそれを語っている理由だ。

こうなった今、私は生きている限りそれを話し続けるつもりだ。私が話すことはいつも同じだ。なぜなら、それはただ一通りに起きたからだ。私は絶対に話を変えない。それができないからだ；それは本当のことだった。私は屈辱的な手紙や電話に曝され続けている。相手は NASA(航空宇宙局)のジェームズ・オバーク(\*宇宙ジャーナリスト兼歴史家)やフィリップ・J・クラスのような懐疑論者だ。彼らは私をけなすことに執心する、米国政府に雇われた密告者だ。私をけなすことはよろしい。だが、マンスマン小父さんをけなすことはやめたまえ！

空軍の今の立場は、そんな事件はなかったし、そのフィルムもなかったというものだ。

この活動全体について重要だと思うことは、実にこれに尽きる。人類史上最大の出来事は、我々は孤独ではない、この宇宙に他の生命体 - 知的な存在 - がいる、だから我々はここで孤独ではない、という発見だ。それはとてつもない、大変な発見だ。我々が宇宙で孤独でないことを知るの、人類究極の発見ではないか？ それが、これらについて話すことが重要だと私が考える理由だ。それはとても胸が躍るものだ。所詮我々は動物進化の最終形態ではないということを受け入れ、成長し、それを認識することが、人間である我々にとって重要だと考えるからだ。そこには我々よりも大きく、もっと素晴らしい何かがあるかもしれない。そして、もしかしたら彼らは我々に何かを語りかけているのかもしれない。

なぜなら、私があの日見たものは模造弾頭を撃ち落とした何かだったからだ。あのことから私はどんなメッセージを受け取ったか？ 核弾頭を弄ぶな。これがおそらくそのメッセージだったと私は解釈する。多分何者かが、我々がモスクワを滅ぼすことを望まないのだ；多分我々はそうすることをやめるべきなのだ。

[複数の地球外輸送機が核施設に現れた後で、これと同じ結論に達した多くの軍人に私はインタビューをしてきた： おそらく地球外の人々は恒星間旅行の段階に達し、これらの兵器がどれほど危険かを知っており、またその使用が我々の文明を終わらせることを理解している。そして間違いなく彼らは、我々がこのような兵器を持って宇宙に進出するのを望まない。SG]

ロナルド・レーガンはある夜テレビ出演し、とても驚くべきことをした。彼は全米国民の前で次のように言ったのだ。我々は一つの防衛の盾を構築するつもりであり、それは SDI, 戦略防衛構想と呼ばれることになる。その使命は我々を、我々のすべてを防御することである。ロナルド・レーガンはこ



れをすべての人々と共有すると言った。我々はそれをロシア人と共有する - 我々の敵、ほんの数年前までは双方互いに滅ぼす間柄のふりをしていた。今突然に、我々は一つの盾で彼らを防御しようとしている。誰から彼らを防御しようというのか？

おそらく、あれは最初の威嚇射撃だった。君たち、こんなことはやめなさい、大人になるときだ。こう言っている者からの最初の警告射撃だった。君たちはこの惑星を破壊したくない、そうだろう？このまま続けたら...

そこで起きたことについての私の解釈をあなたに話したが、これは私自身の推測だけに基づくものではない。私はこれまでの年月の間、他の資料も読み、他の人々とも語り合ってきた。多分我々の被害妄想は事実無根だ。もし我々が優れた技術を持つ存在に遭遇したなら、おそらく喜んで彼らを受け入れ、友好的になるだろう。なぜなら、彼らは生き延びる術を教えているのかもしれないからだ。

米国空軍大佐／原子力委員会 ロス・デッドリクソンの証言  
Testimony of Colonel Ross Dedrickson, US Air Force / AEC

2000年9月

デッドリクソン大佐は米国空軍の退役大佐だ。彼はスタンフォード大学経営大学院に入り、そこで経営学を学んだ。1950年代、彼の任務の一部は原子力委員会(AEC)のために核兵器貯蔵の在庫目録を整備し、安全調査団に同行して兵器の安全を点検することだった。方々の核貯蔵施設と一部の製造工場で UFO が目撃されたという報告が相次いでいた。彼自身、それらを何度も目撃したし、1952年7月に首都ワシントンで起きた有名な UFO 編隊上空乱舞のときには、その現場に居合わせた。デッドリクソン氏は証言の中で、照明をつけた9機の円盤型 UFO を目撃したことを回想する。また、宇宙に向かった核兵器を地球外知性体が破壊した、少なくとも二つの出来事についても語る。その一つは、月面爆発を試すために月に向かったときのことだった。それが破壊されたのは“宇宙での核兵器...は地球外知性体にとり容認できない...”からだった。

RD: ロス・デッドリクソン大佐

SG: スティーブン・グリア博士

RD: ... 私は原子力委員会にいた1952年に、最初の UFO 事件を経験した。この年の7月中旬に、UFO 編隊は首都ワシントン上空を飛行した。このとき初めて、私は9機の UFO を見た...

私は原子力委員会委員長と国防長官をつなぐ、軍事連絡委員会の参謀将校だったため、陸軍、海軍、空軍だけでなく、民間機関、CIA(中央情報局)、国家安全保障局、さらには私が関係を築いた人々とも顔見知りになった。その時期の私の任務の一つは、すべての核施設を視察し、その兵器の安全性を点検する安全調査団に同行することだった。我々は貯蔵施設の上空、さらには一部の製造施設の上空に UFO が飛来したという報告を受けていた。それはひっきりなしに続いていた...

1950年代を通じて続いた長くつらい期間の後、私は1960年代にフェルト提督のもとにある統合司令部に配属され、核兵器作戦計画に関わる指揮所の予備位置担当になった。そこでは NORAD(北米防空軍)や SAC(戦略空軍)作戦との連絡を維持し、核兵器使用のための作戦計画に関わった。この同じ期間に、私は UFO に関して起きた数々の事件を知った。さらに月日が経ってようやく私は空軍を退役し、ボーイング社に入った。そこではミニットマン計画の担当になり、ミニットマン I, II, IIIすべての核部隊の経理責任者になった。この期間に、私は核兵器に関係した事件についても知るようになった。これらの事件の中には、宇宙に送られた2個の核兵器が地球外知性体により破壊されたというものがあつた...

SG: 核施設上空への飛来は深刻に考えられていましたか？

RD: そうだ。まったくそのとおりだ。実際、それらはあまりにも深刻に考えられていたので、目撃者はしばしばそれを報告しようとしなかった。なぜなら、非常に多くの官僚主義、手続き、その他いろいろいることが関係するからだ。彼らは故意にそれらを報告しようとしなかった。UFO が少なくともレーダーか報告により確認された大部分の事例で、何と彼らはそれらを迎撃するために航空機を緊

急発進させようとした。それは我々自身の政府による非常に好戦的とも言える反応だった。太平洋上空で 1 個の核兵器を爆発させたときに起きた一つの事件があった。1961 年頃だったと思う。[ET たちにとり]核爆発が引き起こした驚愕すべき事件とは、太平洋海盆全体に及んで通信が数時間も遮断され、無線通信がその間全然使えなかったことだった。これは非常に深刻だった。そして、当然これは地球外知性体が本当に懸念していたことだった。それが地球の電離層に影響したからだ。実際に、ET 宇宙機は操作不能になった。なぜなら、彼らが依存している磁場が汚染されたからだ。私の理解では、1970 年代終わりか 1980 年代初めのいずれかに、我々は核兵器を月に送り、科学的データの取得や他の目的のためにそれを爆発させようとした。これは地球外知性体にとり、容認できないものだった。

**SG:** それで何が起きましたか？

**RD:** ET たちは、その核兵器が月に向かったときに破壊した。宇宙空間における核兵器爆発は、地球のどの政府によるどんな爆発であれ、地球外知性体にとり容認できないものだった。そのことは繰り返し繰り返し行動で示されてきた。

**SG:** どのような行動で示されてきたのですか？

**RD:** 宇宙に送られたあらゆる核兵器を破壊することにより示されてきた...

その後、我々がロスアラモスとリバモアを訪れたとき、人々が地球外技術に関心を持っていることを知った。それは並々ならぬものだった。

**SG:** 彼らの話から、地球外起源の物質がそこで研究されていたようでしたか？

**RD:** そのとおり、そのとおり。実際、それはエリア 51 が悪名高くなった時期だった...

米国海軍 ハリー・アレン・ジョーダンの証言  
Testimony of Harry Allen Jordan, US Navy  
2000年11月

ジョーダン氏は米国海軍で6年半を過ごし、1962年には米国艦ルーズベルトでレーダー操作員をしていた。作戦情報の訓練を受けていた彼は、機密取扱許可を持っており、電子妨害活動にも関わっていた。彼は次のように証言する。ルーズベルトのレーダー操作員だった彼は、6万5,000フィートの高度を時速約1,000ノットで移動する巨大物体をレーダーで捕捉した。艦長は2機のファントム2を調査のために発進させた。そのUFOは、ファントムが近づくと消えた。約半時間後にその物体は再び現れたが、今度は艦により近かった。ジョーダン氏はその出来事の後で受けた脅迫について語る。後に彼は、その前年にルーズベルトが巨大UFO事件に遭遇し、それが写真に撮られたこと、雲から降下してきた1機の円盤を人々が目撃したことを知った。このことは、ルーズベルトが核兵器を装備してからさらに頻繁になった。海軍を除隊後何年も経ってから、ジョーダン氏は自分のアマチュア無線でスペースシャトルSTS 48の交信を聞いていた。そのとき、彼らが異星人の宇宙機を見たと話しているのを聞いた。彼は、アマチュア無線で聞いたことを知られた後で受けた嫌がらせについても語る。

...それはさておき、私は2回目の地中海航海の深夜勤務に就いていた。それは私のレーダー一画面で捕捉された...

この目標の高度は約6万5,000フィートあり、信号の強さは洋上の航空母艦のそれと同じくらいだった。だから、この捕捉は巨大なものだった。これは私の注意を引き、勤務中の他の人々の注意も引いた。これが起きたとき、四人の下士官と二人の将校が勤務に就いていた。我々はそれが何なのかを厳密に調べ、そのコードを照合した。それは商用機ではなかった。そのとき物体は、最初かなりゆっくりと動き始め、次に速い動きになった。移動速度は1,000ノット以上だった。私が最初にレーダーで捕捉したとき、それは空中静止していた。それから約1,000ノットで動き始めた。次に我々がそれを捕捉しようとしたとき、それは500マイルの彼方にあつた...

この事例では、高度検出装置にもレーダー装置にもそれが現れた。指揮官が入ってきて、ここで何が起きているのかを知りたがった。彼らはそれを見、一体これは何だと訊いた。それはそのときの艦長の注意を引いた。クラーク艦長だ - 私の指揮官はギブソン中佐だった。電子妨害室(ECM)にいた当直要員は一人だけだった。15分もすると艦の向きが変えられ、2機のファントム2が発進体制に入った。

今や私はヘッドホンをつけ、SPA8再生装置に向かっている。私はパイロットと航空作戦指揮官との間の通信を聞いている。総員配置に就くとこれと同じことをするし、総員配置のときの私の任務は部の指揮官と並んで座り、航空機の通信を聞くことだったから、私はこれと同じことをしていた。私の仕事はすべてのタリホーなど、何でも記録することだった[タリホーとは戦闘機パイロットにより目標が捕捉されたときの暗号である]。また、様々な種類の海軍艦船、外国艦船、民間船、海運船、航空機を識別することも、認識専門家としての私の任務だった。識別は電子的のみならず、視覚的にも行なわれ、電子的な特徴には精通していた。

とにかく、それらのファントム 2 は推力を全開にした。彼らはこの捕捉地点から約 100 マイルの地点で、自動追跡にするために円錐走査レーダーのスイッチを入れた。するとこの物体は消えた。それは忽然と姿を消した。レーダー画面には 2 機のファントム 2 が見えていたが、この物体は消えたのだ。彼らは約 10 分間飛び回り、艦へと機首を向けた。

約 35 分後に彼らが帰還した後、この物体は再び現れる。それは艦から約 12 マイルないし 15 マイルの地点にあり、約 3 万フィートの高さで空中静止していた...

もちろん私は何も話せなかった。私は何も話さなかった。なぜなら、私は指揮官からこう言われていたからだ。ジョーダン、いいかい、君の日記に書いてあったあのことは、決して起きなかった。あの夜にそこで任務に就いていたのは私だけではなかった。だから、あの夜にそこにいた者は誰でも私が何を語っているかを知っているし、それが真実であることも知っている。しかしあの夜に起きたことを知っている人間は十人足らずだった。その航空母艦には 5,000 人が乗艦していた...

この事例では、レーダー捕捉に何の熱的痕跡も残らなかった。それは何の航跡も残さなかった。それは通常の数値では動いていなかった。この物体は 30 秒間に 10 マイル、15 マイルを移動した。20 マイル、30 マイル、次に 40 マイル、そして 100 マイルだ。3 分半の間に、この物体はほとんど 500 マイルを移動した。それはある高度から別の高度へと、通常のパイロットなら意識を失うような飛び方をしていた。これは現実の捕捉だった。あの距離と高度にあったこの捕捉からの反射信号は、ルーズベルト自身からの反射信号と同じくらい強かった。そしてルーズベルトは 1,000 フィート以上の長さがあった。

私のよく知らない一人の少佐がやってきて訊ねた。どうしたんだ、ジョーダン？ 日記に何が書いてあるんだ？ 彼は、君はそれをそこに書く必要はないと言った。私にとり、航海日記にあのようなことを書くのは、きわめて、きわめて、変則的なことだった。私はそれにレーダーによる捕捉のことを書いた。私は UFO について書き始めていた...

その後何年か経った[スペースシャトル]STS 48 飛行任務の最中のことだった。彼らは軌道上にあり、私はアマチュア無線を聞いていた。私はオムニアンテナ(無指向性アンテナ)を持っていた。宇宙飛行士たちは“我々は今 UFO を観察している”と言っていた。次に私が聞いたのは、彼らが異星人の宇宙機を観察していると話していることだった。私はそれを聞いたアマチュア無線家の一人だった。それで、カシャー博士にそのことを電話で話した。彼は私の友人で、私が教えている学校に息子を通わせていた。私は彼に、彼らが異星人の宇宙機について話していると教えた。彼らは通信チャンネル上で実際にその言葉を使うのだ。これには私も驚いた。私は本当に驚いた...

その後私は、政府共用車が何台か道路を挟んで向かい側におり、スーツを着た男たちが私の写真を撮っているのを見た。彼らはカンザス市でも、私と妻がワールズ・オブ・ファン(\*カンザス市にある遊園地)にいたときに我々の写真を撮った。私はこのことを他の人々に話した。というのは、ここで起きていることに私はとても憶病になっていたからだ。私はその車のナンバーを書き取ったが、それはある空軍基地に登録されているものだった。

一人の空軍情報将校が私の家を訪ねてきたこともあった

この惑星は知性の禁欲主義者になりつつあると思う。人々は呆然として歩き回っている。彼らは何が進行しているのか、考えもしない。多くの企業は[UFO に関係した研究と物質により]富を得てきた。なるほど彼らは、概して我々のすべてに利益をもたらす技術的变化を人類に与えてきた。だが、そのすべてが生じたところの肉とソースを分かち合っていない。詰まるところ、彼らは UFO についての真実を共有していない。

米国海軍／国家安全保障局 ジェームズ・コップ氏の証言  
Testimony of Mr. James Kopf, US Navy / National Security Agency  
2000年10月

コップ氏は1969年に海軍に入り、核兵器を装備した米国艦ジョン・エフ・ケネディ(JFK)で通信を担当した。その後、1980年にNSA(国家安全保障局)に入り、1997年に退職するまでそこで働いた。1971年夏に、オレンジ色、あるいは黄色に輝く1機の巨大UFOが米国艦ジョン・エフ・ケネディの上空に空中静止し、艦に搭載されたすべての電子機器と通信設備が機能停止になった。コップ氏は証言の中でそのときの様子を語る。彼は明滅するUFOを自分の目を見た。見た者は他にも大勢いた。8台のテレタイプ全部がでたらめを打ち続けており、艦は2時間にわたり戦闘配置体制をとった。友人のレーダー操作員は、レーダー画面が輝き、次に真っ暗になったと語った - 彼らは何も検出できなかった。この事件の数日後、艦長と副艦長が艦内テレビに出演し、艦で起きたある種の出来事は機密事項と見なされるので、誰とも議論してはならないと乗組員たちに告げた。艦がようやくバージニア州ノーフォークに帰港したとき、スーツ姿の男たちがやってきて、様々な乗組員たちに聞き取り調査を行なった。

JK: ジェームズ・コップ氏

SG: スティーブン・グリア博士

JK: . . . 8台のテレタイプ全部が、完全にでたらめを打ち続けていた。まったく支離滅裂だった。私はメッセージの中に一つ二つの間違いを見つけたことはあるが、これほどひどいものは見たことがなかった。私はすぐにインターホンで施設管理部を呼び、私の放送受信機が故障したと言った。彼らは、全艦にわたりすべての通信機能が停止しているので忙しいと連絡してきた。こんなことはこれまで起きたことがなかった。

我々はインターホンと気送管システムを一つずつ持っており、それらは通信室と艦橋の頂部にある旗甲板とをつないでいた。このとき、次のように叫ぶ、とても興奮した声が聞こえた。“神がここにいる、この世の終わりだ”我々は顔を見合わせ、何かがおかしいと考えた。そこで何が起きているのだ？ さらに数秒して、今度はもっと落ち着いた声が入ってきた。この人物は艦の上空に何かがいると言っていた。そこで私が乗組員仲間である友人の方を見ると、友人も私を見つめ、我々はそれを見にいくことにした. . .

我々は、通信センターを出て飛行甲板の縁にある左舷側の狭い通路に向かった。そこで我々が見たものは、艦の上空に浮かんで輝く1個の大きな球体だった。その大きさを決めるのは難しかった。なぜなら、我々の視野は狭かったからだ。晩も遅くなっていた。陽はとっくに沈み薄暮だったが、それは巨大に見えた. . .

その後で、同乗していた数人の乗組員仲間に話しかけた。そのうちの一人はレーダー部に所属し、その事件が起きている間勤務に就いていた。彼はこう言った。すべてのレーダー画面が輝き - 次に何も映らなくなった。彼らはレーダーで何も検出できなかった。我々はそのことについて語り合いながら、ほとんど夜を明かした。

聞いたところでは、艦橋のコンパスは機能せず、レーダー航法システムも遮断された. . .

数日後、艦長と副艦長が艦内テレビに出演した。それが 5,000 人の乗組員に向かって話しかける唯一の方法だった。彼[艦長]はカメラを見て - 私は決してこれを忘れないだろう - こう言った。“乗組員諸君に告ぐ。海軍の主要な戦闘艦で起きた出来事は機密事項と見なされる。したがって、知る必要性(need-to-know)を持たない誰とも議論してはならない”これが彼が言ったことのすべてだった...

その UFO は航空母艦の上空にせいぜい 5 分くらいしかいなかったが、機器の混乱は少なくとも 1 時間続いた。我々が 2 時間にわたり戦闘配置についたのは、そのためだった。彼らはそれが戻ってくるかどうかを確かめるために待っていたのだと思う。彼らは、なおもシステムを再稼働させ、全機能を回復させようとしていた。それには少なくとも 1 時間はかかったはずだ。

飛行中の航空機はなかった。その事件が始まったとき、航空機はすべて艦上にあっただ。艦には 2 機の F-4 ファントムがあり、それらにはレディー・キャップ(ready CAP)、つまり艦上での警戒待機が指示された。ファントムは作動しなかったようだ。彼らはそれらのジェット機を始動させようとしたが、始動しなかったと聞いている。それらは作動不能になっていた...

この航空母艦には IOIC と呼ばれる組織があった。統合作戦情報通信、何かそのような趣旨だ。彼らはこの事件の間中、そこにいてこの物体の写真を撮っていたようだ。

私は、政府の誰かが我々よりもこのことについて多くを知っていると確信している。これが隠蔽されている理由について、私なりの考えがある。この情報が国民に知らされていない多くの理由があると私は考えている。

**SG:** それは何だと思えますか？

**JK:** 彼らは、一般国民が地球外知性体訪問についての知識に対処できないと考えているのではないか。彼らはこの国の経済を著しく損ねる情報を持っているのではないか。私はそう考えている。エネルギーをとて安価に、汚染を伴わずに発生させることのできる装置があるが、企業の貪欲がそれを封じているのではないか。私はそのように考えている。

この隠蔽について私を最も悩ますのはそのことだ。私が思い巡らすのは、地球を蝕むあらゆる汚染、守ることができたはずのすべて...



米国空軍中佐 ジョー・ウオイテッキの証言  
Testimony of Lt. Colonel Joe Wojtecki, US Air Force  
2000年10月

ウオイテッキ中佐は空軍で 20 年間で過ごし、1988 年に退役した。彼はそのほとんどの期間を戦略空軍と戦術空軍で過ごした。ウオイテッキ氏は、メイン州のローリング空軍基地にいた 1969 年 4 月のある夜のことを語る。彼は飛行教官と一緒に、完全な等辺三角形をなして無音で空を横切る、とても明るい 3 個の光体を見た。推定では、この UFO の高度は 3,000 フィートよりも低かった。翌朝彼は出勤し、核兵器を搭載した B-52 群の上空に 1 機の UFO が飛来し、6 時間にわたり空中静止したことを知った。その光体群に飛行機が近づくと、それらは分離し、見たこともないような動き方をした。飛行機が去ると、その光体群は再び集まり、B-52 群の上空に戻った。何年も経ってから、ウオイテッキ氏はグリア博士のある講演会に参加し、1 枚の UFO 写真を見た。それは、何年も前に彼が見たものと寸分違わぬ形状をしていた。

JW: ジョー・ウオイテッキ中佐

SG: スティーブン・グリア博士

**JW:** . . . 我々が車から降りたとき、飛行教官が北東向きの滑走路を振り返り、あれは何だ？と言った。私も彼が見ていた滑走路の向こうの空を見上げた。我々が見たのは、とても明るい 3 個の、しかしそれぞれ独立した光体だった。3 個の分離した光体だった；我々には分離しているように思えた。それらは完全な等辺三角形をなし、1 個は南側に、他の 2 個は北側にあった。我々がしばらく注視した—我々は 10 分ないし 15 分間それを注視した—この光体群の奇妙さは、まずそれが無音であったことだ。次に、それはゆっくりと動いていたが、完璧に一定の高度、速度、北から南への移動方向を保っていた。後で我々は記憶をつなぎ合わせ、光体群が、それより前に飛行教官がキラッと輝く光を見たとき報告した方角からやってきたことを知った. . .

翌朝、私は出勤した。だから、これは 4 月 18 日の朝ということになる。私の日課の最初は航空団指揮所での起立報告だった。ここは戦略空軍基地であり、私が覚えている限り B-52 飛行中隊が 3 隊、135(\*KC-135 空中給油機) 飛行中隊が 2 隊、F-106 迎撃飛行中隊が 1 隊あった。私が翌朝 6 時 30 分頃に指揮所に着くと、そこはいつになく活動的で、多くの人員が配置されていた。実際、それはミツバチの巣をつついたような状況だった。彼らはその全体的な外見と、はっきり見て取れる消沈した様子から、明らかにほとんど夜を徹してそこにいたと思われた。私はすぐ、その夜の出来事が、飛行教官と私がこれらの光体を見た頃の時刻から始まったことを知った。これらの光体は、まさに B-52 非常待機部隊の上空、多数の B-52 緊急発進場の上空に留まったようだった。これらは戦時任務遂行を想定して構成されている。だから当然、ここはとても機密性の高い区域だった. . .

これは夜を徹して基地にいた隊員たちから聞いたことだが、彼らは基地に戻ると、これらの光体に接近しその正体を確認してほしいと言われたという。この中には、それぞれの訓練に出ていた数機の B-52、KC-135、それに一部の F-106 迎撃戦闘機が含まれていた。そして、同じことの繰り返しだった：1 機の航空機が接近しようとする、その光体群はあらゆる空気力学を否定するような動き方で離れていった。そこにいた誰もそれを説明できなかったし、誰もそれを説明する知識を持たなかった。それは急に加速し、急に進行方向を変えた。垂直方向であろうと関係がなかった。それ

らは、我々が理解する空気力学の法則に従って飛ぶものならなし得ないはずのことをしていた。そして必ず、彼らが関心を持つ地点に戻った。そこは航空機が置かれている非常区域だった。夜も更けたある時点、早朝に彼らは好奇心を満ちし、素早く一直線にそこを去っていった。

この事件が起きてから終わるまで、どれくらいの時間が経過したのか。推測だが、おそらく 6 時間かそれ以上は続いていた。

それで、私はこの事件のことを整理してしまっておいた。私はこれについてあれこれ考えを巡らし、これまで何人かの人と議論したが、それほど多くの人とはしなかった。これが 1990 年代のある日 - 正確な年と日付は忘れたが、1993 年か 1994 年頃だったと思う - バージニア州ハンプトンでのステイブン・グリア博士による講演会に参加する機会を持つまで続いた。そこで見た 1 枚の写真は、今でこそ私も理解しているが、実際に UFO を見るという特権を得た人々の間ではとてもよく知られている目撃写真だった。私はその写真を見て本当に席から飛び上がり、妻の手をつかんでこう言った。見たのはこれだと。それは私が 25 年近く前に見たものだった。その時点での話だ。しかし、その写真を見てよみがえったその光景があまりにも鮮明だったので、私の心には 1969 年 4 月に滑走路の向こうに見たものと同じだということに、何の疑念もなかった。そのときになって、やっとそれが三つの別々の機体ではなく、実際には一つの機体だったという考えを持ったのだ...

(レーダーに)映ったに違いないということ、私は幾つかの情報を基に推測するのだ。帰還する航空機により繰り返し試みられた接近は、それらを視認できない距離と高度から行なわれた。その夜は雲底が低かったからだ。そのことから私が推測するのは、それらは地上管制レーダーと基地に帰還する航空機搭載レーダーの両方で追跡されていたということだ。それらがレーダーで容易に追跡できていたと推測するのは、理に適っているだろう...

はっきりと覚えているが、その光体群に反応して空軍、その航空団の誰かが何らかの敵対行動をとったということはなかった。なぜなら、光体群は実際に敵対的、威嚇的な振る舞いを少しも示さなかったからだ。それらは空域、禁止空域にいただけで、防衛行動を発動させるようなことは一切しなかった...

**SG:** それは通常の飛行機よりも大きかったですか？

**JW:** 間違いない。その写真を見て大変驚いた理由はそのことだった。あのとても離れていた光体群は、多分一つの機体の一部だったのだ。今思えば、その配列はあまりにも完璧だったが、私は自然にそれを独立して作動する三つの別々の機体だと見なし、何年もの間そう信じていた。しかし、そう考えるべき理由はどこにもない。ただ、それらが一つの機体の一部だと考えると、その機体は何物と比べてもあまりにも巨大でなければならなかった。当時 B-52 はとても大きな飛行機と考えられていたが、もちろんこれは B-52 のどの一部よりも、遙かに巨大だった。

米国空軍軍曹 ストニー・キャンベルの証言  
Testimony of Staff Sergeant Stoney Campbell, US Air Force  
2000 年 10 月

キャンベル軍曹は 1966年に空軍に入隊した。1967年夏、彼はオクラホマ州にある SAC 空軍基地で 1 機の B-52 を警備していた。そのとき突然、B-52 の真上に巨大な青みがかった靄(もや)が現れた。それはブーメラン翼の形をして輝いていたが、固体ではなかった。それはレーダーに捕捉され、多数の人により目撃された。

...これは 30 年かそれ以上前のことだ。この出来事はオクラホマ州アルタスの SAC 空軍基地で起きた。私は B-52 を警備していた。SAC とは戦略空軍のことで、我々の任務は核兵器を警備することだった。私は警備の任務中で、爆撃機区域で 1 機の B-52 を警備していた。そこは、我々がハリーハウスと呼ぶ真ん中の建物で二つの区画に分けられている。その建物は将校や乗組員たちが待機し、警戒態勢に入ったときに素早く飛行機へと散らばるための場所だった。これは 1967 年夏のことだったと思う。季節は夏だった。それぞれの区域におよそ 4 機ずつの飛行機があった。多分夜遅くのことだ、真夜中から朝にかけて時間帯だったと思う。突然、核兵器を装備した B-52 のうちの 1 機の上空に、青味がかった靄が現れた。それはほぼブーメラン翼の形をしており、この靄の中に 1 個の輝く光体があった。我々にはこれが何なのか、まったく分からなかった。SAC 部隊に準備命令が出され、彼らが飛行機に向かったのは確かだ。しかしその前に、これ[物体]は飛行機の上に少しの間空中静止し、消えた。それがレーダーに捕捉されていたことを、我々は後で聞かされた。それは滑空してそこを去ったのが見えたというのではなかった。それはヒュッと瞬く間にいなくなった。

それは B-52 の翼幅のほとんどを覆っていた - それは大きかった...

### 3.8.4 政府部内者／NASA／深部の事情通

#### 序文

(グリア博士による口頭説明から筆記, 編集された)

ここでは、地球外起源の物体が着陸したり、墜落したり、強制着陸させられたりして回収された事件に関わった人々の証言を取り上げる。言うまでもなく、これは爆弾証言である。ここで述べられる内容は、この現象が現実であり、我々がこの現象を多年にわたり研究してきたことを立証する。多くの人は、これがいわゆる 1940 年代の“ロズウェル事件”だけのことだと思うかもしれない。それは事実とまったくかけ離れている。実際には多くの、少なくとも数十の事件が発生しており、その中で地球外起源の物体が撃墜され、取得され、研究されてきたのである。

これはきわめて重要なことだと我々は考えている。なぜなら、秘密の諸計画 - 数十年にわたり数千億ドルもの資金を地球外技術の研究開発、いわゆる‘逆行分析または分解工学 (reverse engineering or back engineering)’に費やした - が飛躍的発明をしていないなどとは考えられないからである。証言は、我々が実際にそれを成し遂げていることを示すだろう。我々は大発見をし、それが電子技術、物質、および科学という形で少しずつ社会に漏れ出ている。その一方で、量子真空物理学 - いわゆる‘ゼロポイント・エネルギー’現象や反重力、電気重力推進など - を扱う主要な大躍進は、我々の社会に公表されてこなかった。加えて、地球外技術と地球外知性体を研究する諸計画は、今なお進行中のプロジェクトなのである。

このことは、世界と科学界にとりきわめて重大である。しかし、それよりもっと重大なのは、我々の当局者たちがこの問題について適切な情報を与えられてこなかったということである。

宇宙飛行士 ゴードン・クーパーの証言  
Testimony of Astronaut Gordon Cooper

1999 年

[このインタビューを我々に提供してくれたフォックス氏に感謝する。SG]

ゴードン・クーパーはマーキュリー計画の七人の初代宇宙飛行士、オリジナル・セブンの一人であり、単独で宇宙に行った最後の米国人だった。彼は証言の中で、ドイツ上空を彼らの戦闘機隊と同じ編隊を組んで飛行する一群の UFO を目撃したときの様子を語る。これらの UFO は、通常の戦闘機ではなし得ないマニューバを見せた。その模倣的なマニューバの様子から、それらは知的な制御のもとで相互交信を行なっているに違いないと思われた。別のとき、通常の航空機の精密着陸を撮影していた彼らの頭上に 1 機の円盤が飛来し、前方の乾燥湖底に着陸した。その全貌が、詳細な近接映像と共にフィルムに収められた。そのフィルムはワシントンに送られたが、戻ってくることはなかった。

GC: ゴードン・クーパー

JF: ジェームズ・フォックス

GC: 我々がドイツ上空を飛行している間、これらの物体[UFO]は我々の戦闘機隊と同じような編隊を組んで頭上を飛行し続けた。我々は F-86(\*セイバー・ジェット機)で飛行していた。それらは頭上を飛行し、我々と同じマニューバをした。違ったのは、時々そのうちの 1 機がヒュッと動き、通常の戦闘機ではなし得ないマニューバをしたことだ。

気象観測気球を追跡していた気象台の職員が双眼鏡でこれらの物体を見た、というのがこの始まりだ。人々は外に飛び出し、それを見た。我々はその正体を調べるために、飛行機を何機か発進させることにした。しかし、それらに追いつくことはできなかった。我々よりも遙かに高く、遙かに速かったからだ。だから、それらが大きくて遠かったのか、小さくて近かったのかはよく分からなかった。その大きさを正確に測定することは難しかった。

[ゴードン・クーパー宇宙飛行士も他の人々も、気象観測気球を見分けることができた。これらの UFO は、馬鹿げた政府見解が 50 年以上にわたり主張してきたような、気象観測気球ではなかった。SG]

JF: それらは編隊を組んでいたのですか？

GC: 間違いなく編隊を組んでいた。

JF: いつのことでしたか？

GC: 1951 年のことだった。

JF: 当時ロシアがそのような[動きを可能にする]技術を持っていたと思いますか？

GC: 思わない。

**JF:** それらが知的に制御された物体だと、あなたは考えたのですね？

**GC:** そのとおり。その配置はでたらめではなかった。制御された編隊だったのは間違いない。

**JF:** それは何に似ていましたか？

**GC:** 典型的な皿型だった。2枚の皿を重ねた金属製のようだった。そして間違いなく操縦者のいる輸送機だった。それぞれに操縦者が乗っていて、間違いなく相互交信を行っていたと思う。なぜなら、それらの旋回の仕方が、協調行動のための交信を必要とするようなものだったからだ。

1機は横にヒュッと移動した。横方向への移動だった...

その後、エドワーズ空軍基地にいたとき、私は精密着陸を撮影するカメラマンたちを連れて、ある乾燥湖の縁にいた。1機の円盤が頭上に飛来し、3個の着陸ギヤを出し、乾燥湖底に着陸した。彼らはカメラを持ってそこに行った... その UFO に向かったのだ。それは浮揚し、ギヤを格納部に引っ込め、大変な高速で飛び立ち、消えた。

こうして私は、あらゆる規則書を細かく調べ、この事件をワシントンに報告するための電話番号を探す一方で、そのカメラマンにフィルムを現像しに行かせた。彼らが現像したフィルムを持って戻ってきた頃、私は次第に位の高くなる何人もの将校たちを相手にしていた。最後に、一人の大佐がこう命じた。“そのフィルムが君の机に届いたら、伝書ファイルに入れるように” 私の事務所から伝書便が出ることになった。基地では、彼のためにこれらのフィルムを持ってワシントンに飛ぶ手はずが整えられた。[その大佐は]焼き付けやその他のあれこれを禁じた。こうして我々は、それらを伝書便小包に押し込んだ。

**JF:** あなたはそのフィルムを見ましたか？

**GC:** それを詳しく見る時間はなかった。私はなんとかそれを窓辺で透かして見ることはできたが、確かに申し分のないフィルムだった。

**JF:** 近接映像はありましたか？

**GC:** 見事な近接映像があった。それまで見たことのないものだった。

**JF:** 近接撮影されたその輸送機は、あなたが以前に見たものと似ていましたか？

**GC:** ほぼ同じ形だった。2枚の皿を合わせた形だった。表面に翼などはなかった。それは [我々がドイツで見たものと]ほとんど同じ形だった。

この事件が起きたとき、私は研究開発に関わっており、その開発センターで大変機密性の高いプロジェクトを遂行していた。当時の我々に[あのような]輸送機はなかった。ロシアにもあのタイプの輸送機はなかったと 99.9 パーセント確信している。あのとき私は、それがこの地球以外のどこか

で製造されたものであることに何の疑いも持たなかった。

それ[証拠]は指示に従って送られ、物事も彼らが言ったとおりに行なわれた。当時の私は、誰も知らないある小さな計画に従事しており、それについて家族とも誰とも議論することを許されていなかった。それは U-2(\*高々度偵察機)計画だった。実際には、それ[この事件]は同じ[機密]分類だった。

[それがどうしてこれほどの機密なのか]私には分からない。私の考えだが、折しも第二次大戦の直後であり、この種の性能を持つ輸送機を何者かが持っていることを国民が知ったなら、パニックになることを彼らは恐れたのではないか。だから、彼らはそれについて嘘をつき始めた。その次には、最初の嘘を隠すために別の嘘をつかなければならず、今や彼らはそれから逃れられなくなっているのではないか。多くの虚偽を語ってきたことをこれらの全政権が認めるのは、あまりにもきまりが悪くなりつつある。それから抜け出すのは厄介なことだろう。

**JF:** 彼らはそれから抜け出したいと考えていますか？

**GC:** 基本的にはどの大統領も、おそらくそれから抜け出し、この事態について一切を白状し、虚偽を続ける必要がなくなることを望んでいるだろう。そうすると、彼らは全員が顔に卵をぶつけられ、自分たちがまったく誠実でなかったことを認めざるを得ない状況になるだろう。

**JF:** 誰がこの秘密を守っているのですか？

**GC:** 誰かがこれをかなり長い間、深い秘密のままに保ってきたのだ。

[1970年代に UFO について国連事務総長と会見したときのことを訊かれて、ゴードン・クーパーはこう言う:] クルト・ワルトハイム(\*国連事務総長, 1972-1981)は、この問題について明らかに関心を持っていた。彼は、委員会を組織し、[国連の]そのレベルで調査を行なうのはよい考えだと言った。しかし何もなされなかった。それは国連によくある反応だった。彼らはよい方策を語ったが、それについて何かをしようと動き回ることを決してしない。

NASA 独自のデータによれば、生存可能な惑星は他に約 40 万個ある。神がこの 1 個の惑星だけに人を住ませ、他のすべての惑星を空けておくなどということは信じられない。私の個人的見解だが、我々は銀河世界の僻地に存在しているのではないかと思う。我々は枝の先にいる。これらの他の銀河は、皆互いにもっと接近している。おそらく彼らは、互いに頻繁に往来しているのではないか。こうして時々我々は、遠く離れた他銀河から旅行してきたり、迷い込んだり、少しの間立ち寄りたりする少数の人々を迎えることになる。

私は、国連レベルで一つのグループを組織し、世界中から情報を集め、国連レベルでそれを処理し調整する提案の手紙を[国連に]書いた。多くの国が情報を持っていた。今のロシアのような国々も多い。現在ロシア政府は、複数の民間 UFO 団体と直接連携している。状況は国により異なるが、我々はこの情報を全部一つにまとめ、一つの組織で相互に関連づける必要がある。

我々が技術的に可能にしたことをまず考えてみよう： それらの幾つかは遠隔操縦されているかもしれない。それらは、いわば我々が無人輸送機と呼ぶものに似た無線操縦機かもしれない。また、それらの幾つかには間違いなく操縦者が乗っている。私の考えだが、彼らはおそらく我々にとてもよく似ている。

ロズウェルで墜落したのは、気象観測気球以外の何かだったと私は確信している。

**JF:** 真実は失われたと思いますか？

**GC:** 真実は、彼らが語ったすべての嘘の中に深く埋没していると考えている。

**JF:** 彼らはあなたが見た円盤の一つを隠蔽していると思いますか？

**GC:** とてもありそうなことだ。私は彼らとその逆行分析(reverse engineering)を行ない、それから何か役に立つことを得たと考えたい。そうするのが論理的というものだ。

**JF:** 滑走路に着陸した空飛ぶ円盤のフィルムがどこに行ったか、あなたはご存じですか？

**GC:** それはワシントンに行った。私が知っているのはそれだけだ。

**JF:** そのことで、あなたは誰かと連絡を取り合ったり議論したりしたことがありますか？

**GC:** どうしたら私が誰かと連絡を取り合うことができたでしょうか？ 軍や政府において機密扱いの何かを追跡する方法は、それに直接関わっていない限り、ない。そして私は関わっていなかった。何が起きたかを知る方法は、私にはなかった。

**JF:** それはブルーブック計画の調査の一部でしたか？

**GC:** いや、そうではなかった。私がブルーブック計画について持っていた不満の一部はそのことだった。私の考えでは、ブルーブック計画はまったくの取り繕いだった。

*[ブラウン中佐やウッド博士のような他の高位の証人たちも同じ結論に達している： ブルーブックは宣伝用の取り繕いであり、本当の調査はどこか別の所で行なわれた。SG]*

ブルーブックに含まれなかった事柄で、私が知る機会を得た数多くの出来事があった。

私の考えでは、彼らはどこか他の惑星からやってきている。私の中に疑念はない。彼らは実在しており、いずれ我々は、他の惑星から地球への定期便があることを知るだろう。

我々が見たこれらの輸送機を誰が操縦しているか？ 地球外知性体のパイロットたちがそれらを操縦している。そのことに疑いはない。



〔‘闇の’または見えないプロジェクトについて訊かれて、ゴードン・クーパーは言う:〕我々が U-2 計画をあのように行なった一つの理由がそれだった。我々はその計画を機密扱いにしなかった。なぜなら、もしある計画を機密扱いにしたら、下院議員でも上院議員でも、議会から飛び出してその詳細のすべてを語るができるからだ。彼らはそうする権限を持っている。彼らはあらゆる保護手段を踏みにじり、思いのままに誰にでもその詳細を語る。我々はゲーリー・パワーズが撃墜 (\*1960年 5月 1日に起きた U-2撃墜事件)されるまで、その計画を機密扱いにしなかった。世界は本当に U-2 計画については知らなかった。少なくとも米国においてはそうだった。

〔クーパーを含む何人かの証人は、機密扱いの向こう側にあるプロジェクトについて私に語った。またコース大佐は、‘脳から脳’へ伝えられる ET プロジェクトについて語った。UFO を扱うプロジェクトのように、きわめて厳重に保持された認められざるプロジェクトは、実際には最高機密を超えたところにあり、議会や国民に対して接近の道を閉ざしている。SG〕

彼ら[地球外知性体]から我々が学ぶべきことは多い。その仕事を始めるための日程を決められたらよいと思う。彼らはいつでも私の裏庭に着陸することができる。もし彼らが私の裏庭に着陸したいと言うなら、私は彼らを歓迎するだろう。

我々がもう少し進歩し、もう少し向上し、もう少し速くなれば、彼らと同じになる。

私には航空会社のパイロットをしている親しい友人がいる。彼は 1 機の UFO が翼の横まで接近し、彼と並んで飛行した出来事を、これまで 3 回経験した。彼は大手航空会社にいる。その航空会社は、乗員に対して UFO について語ることを許可していない。

## ホワイトハウス陸軍通信局／弁護士 スティーブン・ラブキンの証言

### Testimony of Attorney Stephen Lovekin

2000年10月

ラブキン弁護士は 1958 年に軍に入った。翌 1959 年にはホワイトハウス陸軍通信局に入り、超最高機密取扱許可を持ってアイゼンハワー政権下、次いでケネディ政権下で勤務した。彼はブルーブック計画をよく知っており、その中ではきわめて信頼のできる情報源からもたらされた、科学性の高い明瞭な UFO 事例が記録されたと語った。ブルーブックでは、空軍パイロット、海兵航空隊パイロット、何人かの外国人パイロットにより撮られた写真と、多数のレーダー自動追跡報告書が再調査された。ラブキン氏はロズウェル墜落事件から持ち帰られた金属片も見せられた。彼はアイゼンハワー政権下で勤務していたとき、大統領が UFO に強い関心を持っていたことを知った。しかしまた、大統領がこの問題について統制を失ったことに気付いたことも知った。

SL: スティーブン・ラブキン弁護士

SG: スティーブン・グリア博士

SL: 私は 1958 年にフィラデルフィアにある男女共学のプレパラトリー・スクール(\*大学進学を目的とした米国の名門私立高等学校)、ジョージ・スクールを卒業し、軍に入った。上級歩兵隊訓練を終えた私は、国防総省に配属され、そこで無線周波数工学局に入った。そこも終わると、1959 年 5 月にホワイトハウス陸軍通信局に入った。私はアイゼンハワー政権下で 1959 年 5 月から彼が政権を離れるまで、次いでケネディ政権下で 1961 年 8 月に私が辞職するまで勤務した。

私の任務は、暗号処理[と暗号解読]を学ぶことだった。その処理の過程で、私はブルーブック計画[これは UFO を扱う]について多くを知った。ブルーブックは、事務所でかなり公然と議論された。ブルーブックの多くの部分は、議論のために公開された。また、我々に持ち込まれる案件もあった: 我々が訓練を切り上げようとしていたある午後、ホロマン中佐が金属片と思われる 1 個の破片を取り出した。それはヤード尺のように見えた。その表面には文字が刻まれていた。ホロマン中佐は、その文字を我々のクラスの一人ひとりに見せた(そのとき六人か七人いたと思う)。この物体はブルーブック作戦に関係する事案からのものだと我々は教えられた。

彼らが言おうとしていたことは、こうだった。“見なさい、君たちがブルーブックで見してきたことを裏付ける物理的証拠がこれだ。今や我々はこの物質を入手し、君たちに見せることができる”そして彼はそうした。彼はさらに、その物質が 1947 年にニューメキシコで起きた地球外宇宙機の墜落に由来すると説明し、議論は長時間に及んだ。私の記憶に間違いがなければ、我々はさらに約 1 時間をこの議論に費やした。翌日、再びそれが議論された。彼らは遺体、地球外知性体の遺体があったことを確かに話題にしたが、彼は遺体の様子を描写しなかった。3 体ないし 5 体の遺体があった... 収容された数として私の頭に残っている数字だ。これが起きたとき、一人はまだ生きていた。その後彼がどうなったか、私は知らない。

空軍はその当時ブルーブックに大変深く関与しており、UFO について報告したり話したりすることに関して、あらゆることが盛り込まれた厳格な規則があった。もし自分の経歴を台無しにしたければ、その最も手っ取り早い方法は UFO について話すことだ。我々はそのように説明された。私はそのとき入隊したばかりで、階級組織の一番下にいた。我々は最高機密とその上の機密のための訓

練を受けていたところであり、もしこの情報が流出したら、我々にはどんな種類の機密資料にも接する許可が与えられなかっただろう。

我々は実に多くのものを見たし、数多くの UFO 写真も見た。私が見た幾つかは、多分あなたが今日見るものよりもよいものだった。写真は空軍パイロットたちにより撮影された。

**SG:** そうすると、あなたは軍が撮影した UFO の公式写真を見たのですね？

**SL:** そうだ、彼らが撮影した。そのとおりだ。これらの写真を撮影したのは空軍だけではない。幾つかは民間パイロットが撮影した - また幾つかは海兵航空隊パイロットや外国人パイロットによっても撮影された。明らかになったのは、ブルーブックに記録されていない他機関所蔵の多くの写真があることだった。そのことから推測して、おそらくそれらの写真は我々が見せられた写真よりもよいものだった。ホロマン中佐はクラスの全員にそのことを印象づけた。

*[グラッジ計画についてのチャールズ・ブラウン中佐の証言を見よ。彼も本当に重大な証拠はブルーブック、場合によってはグラッジからさえも外されて区画化されたと述べている。SG]*

この地球外宇宙機の破片は、灰色がかった薄片のような物質で、おそらく 8 インチから 10 インチの長さがあった。私にとってそれは巨大に見えた。なぜなら、私がこのような物を見るのは初めてだったからだ。見開かれた皆の目がその物体に集まっていた。そしてその破片が何であるかを彼が告げたとき、驚愕が走った。それは不気味だった。それが初めて述べられたときは、部屋で一本の針が落ちててもその音が聞こえただろう。

**SG:** それが何であると彼は言ったのですか？

**SL:** 彼は、それがニューメキシコで墜落した ET 宇宙機から取られたものだと言った。また、それは軍が調査している残骸箱の一つにあったものだとも言った。当時彼らは‘逆行分析 (reverse engineering)’という言葉は使わなかったが、彼らがそれを調査する必要がある、それには何年もかかると考えていたことから、それは逆行分析と同じようなものだった。よく覚えているが、フォートベルボアにあった陸軍工兵学校では、多くの実験が行なわれていた。私はそれに驚いた。そのことに私は本当に驚いた。

その刻まれた文字はヒエログリフ (象形文字) に似ていた。ヒエログリフを言い表すのは難しいが、もしあなたが何らかの古代エジプトの記録を見たことがあるなら、ヒエログリフが何かの形をなぞったものだと知るだろう。これらは何かの形を表しているように思われた。もし私がこの言語を解読するための記号体系を知っていたなら、それを理解できただろう。その文字はとても印象的だった。見ればあなたもそう思っただろう。

*[別の折に、ラブキンはこう説明した。国防総省の彼のグループは、この物体を解読困難な、高度な暗号の見本として見せられたと。SG]*

彼は錠のついたステンレスの箱を持っていた。まるで大工の工具箱だったが、それよりは大きか

ったかもしれない。彼はその物体をこの箱から出し、またこの箱にしまった。その箱にあったのはその物体だけではなかったに違いない。だが、見せられたのはその物体だけだった。このことがあったのは無線周波数工学局だ。

覚えておいてほしいが、国防総省では我々に中佐の教官がいた。彼の仕事は我々を教えるだけでなく、信じる者にすることだ。彼がステンレスの箱のように見える物からあの破片を取り出したときがそうだった。それは埃っぽい灰色がかった薄片で、炎で焼かれたような外観をしていた。それが、彼が持っている唯一の情報でも唯一の物体でもないことを、彼は示唆した。他にも幾つかあった。おそらくその箱にはいっぱい詰まっていただろう。私には分からないが、彼が取り出して見せた唯一の破片があれだった。彼がそうした理由は、我々の扱っているものがそれまで扱ってきたものとはまるで異なったものであること、しかし将来はそれを扱うようになることを理解させるためだった。彼は我々に、将来益々この問題に関わるようになることを知らせたかったに違いない。

彼は、その刻まれた文字群が指示記号だと確かに述べた。述べたのはそこまでだったが、彼の指示が、内容が何であれ、軍にとっては継続して取り組むに値する重要なものであることをほのめかした。我々は、これがとてつもなく重要なものであることをはっきりと理解した。我々は当時、国防総省の地下にいた。1959年のことだ。国防総省のその区域は、きわめて厳重に警備されていた。そこで働いていた誰もが、今私が言っていることを知っている。その地下では、進行していることを上階の人々に知られずに、一つの戦争のほぼすべてを遂行できただろう。それほど厳重な警備だった。

私は最高機密取扱許可を取得することに取り組んでいた。私は機密取扱許可を取得しており、その学校を修了した時点である種の最高機密取扱許可を与えられたが、一つ段階が上がっただけだった。というのは、当時この(UFO)問題だけのための機密取扱許可はなかったからだ。もしある問題を扱うとしたら、Q取扱許可を得ている必要があった。これは核情報取扱許可だった。おそらく後になって彼らはそれを変更することにしたが、次のことが大きな問題だったと記憶している。“この課程を修了した者たちに、どのような機密取扱許可を与えたらよいか？”

当時、ブルーブックに記録されるべき報告事例が1,500はあっただろう。それに記録された確認事例は科学性の高いものだった。この情報は、特定の軍関係者以外には流出しない種類の情報だった。つまり、その中にある情報はきわめて正確で具体的なものだった。これらの事例は、これ以上ないほどに真正なものだった。それらは軍や民間の様々な立場で確かな信頼を得ている人々について語っており、いかがわしい人物を取り上げてはいなかった。これは、きわめて正確だと彼らが考えていた情報だった。

レーダー自動追跡の情報もあった。その幾つかは、ライト-パターソン空軍基地があるオハイオ州からのものだった。しかし、私が覚えている限り、カリフォルニア州、テキサス州、ワシントン州から来たものもあった。私の推定では200から300の(UFO)レーダー自動追跡事例があっただろう。それらが記録された理由は、それが真実だったからだ。

我々が見せられたあの物質はニューメキシコの現場から来たと教えられたが、現場は他にもあり、ET宇宙機の墜落は他にもあった。彼らはそれがどこかは言わなかった。彼らはその場所を特定し

なかったが、情報と物質を収集し回収した場所がそこだけではなかったと明言した。

[A・H, クリフォード・ストーン, その他の証言を見よ。SG]

ライト-パターソン空軍基地の名前は何度も出てきた。明らかに、ライト-パターソンでは他の空軍基地よりも多くの自動追跡があった。エドワーズ空軍基地は実験基地だと説明された。私が言っている意味は、エドワーズは彼らが発見したあらゆる ET 物質の試験に関わっていたということだ。そんなことが行なわれていると言われていた。レーダー自動追跡記録はエドワーズ空軍基地から[も]来た。

[1965 年にエドワーズ空軍基地で起きた、複数レーダーの自動追跡に関するチャック・ソレルスの証言を見よ。SG]

私はフィリップ・コース大佐がそこにいた同じ時期に、国防総省にいたと言っておきたい。

私は[アイゼンハワー]大統領と接するようになるまで、UFO の問題とはそれ以上関わりを持たなかった。私は大統領が、特に退屈な会議のときなどは、紙やノートに実に多くの落書きをしたと聞いていた。彼はよく落書きに没頭した。彼がした落書きの一つが、様々な形の UFO を描くことだった。

私はケネディが落書きをしたのを見たことはないが、アイゼンハワー大統領はそれをした。彼は、私や私が配属されていたホワイトハウス陸軍通信局の他の人々がいる前でも、落書きをした。私は初めてホワイトハウス勤務になったが、大統領に会ったのは、飛行機に乗務するようになっておそらく 1 箇月半過ぎた頃だった。そのときの会議はとても形式的なものだった。そのすぐ後で、私には大統領と一緒に少しの間旅行する機会があった。我々はフロリダに向けてしばらく旅をした。こうして私は、大統領が文字どおり集中砲火を浴び、彼が好まないある種の人々に対処する様子を見る機会を得た。そのとき彼は落書きをしたのだ。おそらく彼は、世界最高の落書き名人の一人だっただろう。そして誰もがそのことで彼をからかった。私はそうしなかったし、そうする立場にもなかったが、高位の将校たちは時折些細なことを言ったりした。彼はただ微笑み、落書きを続けた。

さて、そんなあるとき、彼はまさに通報を受けた。つまり、目撃に関する情報、UFO に関する情報を与えられた。私はそれを確かに知っている。なぜなら、私は通信センターにいてその情報を見たからだ。彼はこれらの情報を受け取ると興奮した。彼は子供そのものだった。彼は大変に興奮して、Dデー(\*1944年 6月 6日、連合国軍ノルマンディー上陸作戦開始日)が再来したかのように命令を与えた。彼はその UFO の形と大きさ、それを動かす原動力にとっても大きな関心を持っていた。

ホワイトハウス自体が、地下に巨大な通信センターを持っている。それは空軍により運営されているが、陸軍がそこにいる。キャンプデービッドを含む、大統領が行くあらゆる場所には通信センターがあり、専ら大統領の移動に対処する。情報は通常准尉により伝達される。

我々の主任准尉は、おそらく 30 年以上陸軍に勤務していた。彼がその種の[UFO に関する]情報を受け取ったときは、周囲から離れてしばらく一人になり、その後で彼が電話すべき相手には誰であろうと電話をした。しかし、UFO の扱いに関して通信センターから大統領に直接情報が伝達さ

れたというのは 1 回か 2 回しか記憶にない。大部分の場合は間接的に大統領に伝達されたようだ。

その資料が通過するとき、大部分はマル秘だ。つまり、それに直接関係のある人間はそれを見、そうでない人間はそれを見ない。こうして UFO の目撃や新しい発見についての情報が知らされる。もしあなたが大統領の近くに長くいたなら、大統領の表情から、彼が何を読み、何が彼の興味を引いたかを判断できただろう。それは彼の近くにいたから知り得たことだった。

**SG:** 彼はこの問題に特別な関心を示しましたか？

**SL:** 非常に、非常に強い関心を示した。実際、この問題は当時の彼にとっておそらく最大の関心事だったと言える。まさにそうだった。

これらの UFO に関する報告は、めったにないというものではなかった。それはかなり頻繁に発生した。何回かということは敢えて言わないが、とにかく頻繁に発生した。

そしてそこで起きたことは、一つの特定機関がその技術的側面の処理から目撃情報、ブルーブックへの報告まで、この問題の全体を取り扱うことができないということだった。UFO 現象を取り扱うすべての作業を一つの機関が行なうことはもはやできなくなり、それを継続するために、情報は政府の様々な部分に振り分けられて研究されることになった。推測だが、彼らは諸機関に対してこちらで少し与え、またあちらで少し与えることにより、その情報の機密性を保つことができると考えたのではないか。この種の区画化は、しばしばこれと似た物事に対して行なわれる。

だが、起きたのはアイゼンハワーが裏切られたということだった。彼はそれを知らずにいたから、UFO 情勢全体について統制を失ったのだ。彼は国民に向けた最後の演説で、用心しないと軍産複合体に後ろから刺されると語っていたのだと思う。彼は油断していたと感じたのではないか。彼はあまりにも多くの人間を信用し過ぎたと感じたのではないか。アイゼンハワーは疑いを知らぬ人間だった。彼は善良だった。そして、あるとき突然、この問題が企業の管理下に入って行きつつあることに気付いたのだと思う。それはこの国を大きく損ねる可能性があった。

私の記憶では、この失意は何箇所も続いた。彼は UFO 問題への統制を失いつつあると気付いた。この現象というか、とにかく我々が直面していたものに関して、最適な管理がなされそうにないことを彼は悟った。私が思い出せる限りでは、“最適な管理がなされそうにない”という言い方だった。本当に心配していた。そして、結果はそのようになった。

もし私がこれについて話したなら、軍の人間である私に何が起きるか、このことを私は多くの機会に議論してきた。政府は、絶望的な恐怖を植え付けることで秘密を強化するという、現代の記憶に残る何よりもよい仕事をしたと言えるだろう。彼らは実によい仕事をしたと思う。

ある古参将校と私は、もし暴露したら何が起きるかと話したことがある。彼は消されるということについて話していたので、私は“その、消されるとはどういう意味ですか？”と訊いた。そうしたら、彼はこう言った。“だから、君は消される、姿を消すことになるんだ” 私はさらに訊いた。“あなたはどうし

てそんなことを知っているのですか？”彼の答えは次のようなものだった。“私は知っている。こうした脅迫はずっとこれまで行なわれ実行されてきたのだ。脅迫が始まったのは 1947 年だ。陸軍航空隊がこの件を絶対統制するように任された。これはこの国が今まで対処した最大の治安問題なので、消された人々もこれまで何人かいた”

彼は確信を持ってそう言ったし、それを知る立場にもあった。彼は私よりもずっと年長で、かつて CIA とも関わりがあった。彼は自分が話していることを知っていた。ふざけているのではなかった。だから私は、恐怖がそれを行なっているのだろうと思う。あなたがどんな人間であろうと関係ない。あなたがどれほど強くて勇気があるろうと関係ない。その状況はまさしく恐怖と言える。マット[この古参将校]がこう言ったからだ。“彼らが追うのは君一人だけではない。彼らは君の家族につきまとうだろう”彼はそう言ったのだ。だから、私に言えることはこうだ。彼らは恐怖に陥れることで、それをこんなにも長い間秘密にしてきたのだ。彼らは見せしめをつくることに非常に長けている。それがこれまで行なわれてきたことなのだ。

この国では、1950 年代初期に非常に多くの基地が建設されたが、それらは攻撃があったときに大統領、議会、要人たちを避難させるためのものだった。これは政府機能の維持などが目的だ。バージニア州のウェザー山はその一つだった。メリーランド州のフォートリッチー、キャンプデービッドもそうだった。当時ウェストバージニア州にもう一つ別の基地があったが、我々が知っていたのはコンクリートという名前だけだった。それは暗号名だった。たとえばウェザー山は‘地下’だった。そこは我々が知る限り、核兵器から防御できるような特殊な設計になっていた。私が初めてそこを訪れたとき、そこにあった特別な設備について説明があった。我々は大統領が行くこれらの場所をすべて回り、何をどうすべきかに習熟する必要があるがあった。そこに、UFO 問題に対処するための設備があったのだ。何をすべきかの標準的な指示書もあった。私の理解では、UFO はウェザー山周辺で 1 回や 2 回ではなく、数多く目撃されていた。UFO は、私がコンクリートという名前と言及したウェストバージニア州の基地でも目撃されていた。

我々は、この問題を取り巻く秘密をあまりにもうず高く積み重ねてきたので、結局は大きな破綻という結末になりそう。残念ながら、私はその物事の内情にあまり通じていないことを認める。しかし、人々がその真実について嘘と恐怖を広めるとき、彼らは自らの立場を弱めているのだ。

彼らはこの秘密を長い間保ってきた。つまり、明らかにそのための方法を知っている。しかしいつの日か、以前なら決して話そうとは思わなかったが、メディアが興味を示したために話し始めるという人々が出てくるだろう。特にネリス空軍基地(ネバダ州)と、そこで何が行なわれているかについてはそうだろう。恐怖によって建設的なことは何も生まれない。恐怖は人間の魂、精神、心を退化させるだけだと言えるだろう。

秘密は強化されてきたと思う。なぜなら、露呈されるものは、この国のある種の資本によって遙か昔に企てられた経済、彼らとその企業を永続させる経済を根底から破壊するからだ。石油は、これまでもこれからも発生し続ける、あらゆる汚染と破壊的な悪影響にもかかわらず、今の体制を保持するものとして特別な関心を持たれている。

我々が問題にしているのは、まだよく理解されていない源泉からエネルギーを引き出す、ある種

の電磁氣的装置だと思う - 確かに我々はそれらを公表していない。しかし、これらの装置はフリーエネルギーを発生するのだ。フリーエネルギーは企業が恐れているものだ。これは政府が恐れるものだと思う。政府の立場で考えてみよう。フリーエネルギーにいかにして課税するか？ 私はこれまでこの問題について何かを知っている人々と語り合ってきたが、彼らは皆、これらの輸送機を推進するエネルギー源は完全に無料だと確信している。それは環境に何の害も及ぼさない。それはどこにも何の足跡も残さない...

我々がアラブ石油の高い価格にどう対処すべきかという現実の問題を今抱えているので、ご存じのとおり、ブッシュ(大統領)は北極地域に進出し、より多くの石油を獲得することを主張しようとしている。私個人として、それは解決にならないと思う。地球温暖化の現状下では、それは我々の棺にさらに釘を打つようなものだ。しかし、我々はいつか、フリーエネルギーが使えるようになるこの情報を共有しなければならないだろう。政府はこれについて知っている。我々を見下し、これはあり得ないと言い張るなら、彼らは愚か者だ。それはあり得るのだ。

...

問題はこうだった。“我々が識別不能の信号を捕捉したことがあったと私は聞いたことがあるか、さもなければ、もしそれが識別可能だったら、それは我々を監視下に置いていると思われる奇妙な飛行物体からのものだったか？” そうだ、確かに私はそれを聞いた。私はそれを少なくとも 5 件ないし 6 件の報告から聞いた。それらは結局ブルーブックに記録された。実際、幾つかの報告(\*において信号)はパイロット無線を通じて入ってきた。だから、当時我々が相手にしていた知性体が何であろうと、彼らは我々を相手にする方法を知っていたのだ。彼らは我々と交信する方法を知っていた。また、彼らが地球外起源だということを我々は知っていた。

[ジョン・メイナード, その他の証言も見よ。SG]



米国海軍大西洋軍 メルル・シェーン・マクダウの証言  
Testimony of Merle Shane McDow, US Navy Atlantic Command

2000年10月

マクダウ氏は1978年に海軍に入り、特殊区画化情報(SCI)ゼブラストライプス最高機密取扱許可を取得した。彼は当時トレイン提督の指揮下にあった、大西洋軍大西洋作戦支援施設に配属された。そのとき、1機のUFOが大西洋岸を高速で行ったり来たりして動き回る事件が起きた。そのUFOはレーダーで追跡され、パイロットにより視認もされた。司令部はゼブラ警戒態勢に入り、トレイン提督はUFOを強制着陸させるように命じた。マクダウ氏は、その事件の後に起きた脅迫と日誌の押収について語る。

MM: メルル・シェーン・マクダウ

SG: スティーブン・グリア博士

MM: 私は1978年8月に米国海軍に入隊し、米国艦アメリカに配属された。しかし不運にも、任務中に飛行甲板で負傷した。そのため私は、バージニア州ノーフォークのハンプトン大通りに面した大西洋艦隊総司令部(CINC-ANTFleet)大西洋軍支援施設に異動となり、大西洋作戦支援施設(AOSF)第22課に配属された。そのとき、我々のグループには約11名がいた。我々は、大西洋軍司令長官だったトレイン提督に状況説明を行なう直接の責任を負っていた。我々は彼に、その日ソ連が何をしてたか、昨夜彼らは何をしたか、等々、世界で進行中の軍事作戦について説明した。

AOSFはAtlantic Operational Support Facilityの略語、CINC-ANT FleetはCommander in Chief-Atlantic Fleetの略語であり、そのときはトレイン提督がその地位にあった。東海岸にいる誰もがこの人物の支配下にあった。

6箇月後、私はゼブラストライプス身分証明バッジを持つ極秘の特殊区画化情報(SCI)取扱許可を取得し、基地のすべての施設にいつでも立ち入ることを許可された。その資格は、特に司令部への出入りを許可するものだったが、また同時にあらゆる施設にいつでも制限されずに出入りすることを許可するものでもあった。私の持ち場は司令部の上にある中二階、我々が3番デッキと呼ぶ所であった。私の仕事は、司令部に入ってくるあらゆる音声・画像の入発信情報を確実に記録し、後でそれが必要になったときのために、その履歴を残すことだった。

私は音声と画像のすべてを記録した - 発生しているあらゆるもの - 彼らがゼブラ警戒態勢を呼びかけたときもそうだった。これは大抵訓練で、予め“これは演習、これは演習、ゼブラ警戒態勢に入れ”とアナウンスが流れる。そして資格のない要員が知らずに司令部にいたら、外に出される。

ゼブラ態勢は一般に全世界核危機、特にソ連に対して海軍が持つ最高レベルの警戒だ - 当時はそうだった。ソ連のベアキャット(\*艦上戦闘機)は、我々が何をしているかを探るため、日常的に東海岸の至る所で哨戒を行っていた。我々は、たとえば彼らのベアキャットが我々の領空に近づき過ぎたためにそれを排除する飛行機を発進させる必要があったり、彼らとその領域に不審な行動をとる艦船を遊弋(ゆうよく)させたりした場合に、ゼブラ態勢をとった。そうでないときは、たとえば核戦争を遂行するために相互確証破壊(MAD)規則書を取り出すという想定で演習を行なった。統合作戦部の当直士官と次席当直士官がある金庫の鍵を持っており、MAD規則 - Mutual

Assured Destruction (MAD) - と呼ばれるこれらの規則書を取り出す。彼らは、もし必要なら核攻撃を開始するために潜水艦に伝達すべき暗号を取得する。これが行なわれているとき、司令部には少数の人間しか立ち入りが許可されない。なぜなら、彼らは実際にその暗号を使用したりするからだ。ソ連はもちろん、米国の敵であるなら誰でも、その情報を入手しようとするはずだ。

ゼブラ等級 - これなくしては、この演習中にこれらの施設に立ち入ることが許可されない。そしてゼブラ演習は、疑いもなく司令部と洋上の艦船および潜水艦との間で交わされる最高レベルの機密情報だった。

さて、この事件を語ろう。その日はまったく普段どおりに始まった。私を知る限り、[1981年]5月最初の週か次の週あたりだったと思う。彼らが照明を落としたとき、(司令部ではゼブラ警戒態勢に入ると最初にこれをした)すべては普段どおりに進行していた。この演習に入ると、彼らは大抵の場合“これは演習、これは演習、ゼブラ警戒態勢に入れ”と言うことになっていた。だが、このとき彼らは照明を落としたが、“これは演習”とは言わなかった。当直士官と次席当直士官は互いに顔を見合わせ、彼らの補佐の何人かに、これが演習かどうかを確かめるように命じた。早期警戒システムも、我々の領空に侵入した未確認飛行物体をレーダーで捕捉したと告げた - その情報は当時のグリーンランドかノバスコシア(\*カナダ)にあった、ある空軍基地から入ってきたと私は考えている。彼らがこれは演習ではないと言ったので、事態への対処は最高度の敏速さをもって行なわれ、それが演習でないと気付くや、誰もが狂ったように走り回り始めた。それはまったく別の雰囲気だった。

直ちに当直士官はトレイン提督を司令部に呼んだ。というのは、この事態に適切に対処することはやや彼の権限の範囲外にあったからだ。トレイン提督の監督が必要だった。数分後にトレイン提督が司令部に駆けつけ、その中二階真下にあった自分の展望室に入った。トレイン提督が最初に知ることがしたのは、捕捉したのは何機か、それらはどこにいてどの方向に移動しているか、またソ連はそれに反応しているかだった。なぜなら、彼らは領空に侵入したものがソ連のものではないと知っていたからだった。それは最初から確認されていた。

それがソ連のものではないことを知り、ソ連もこの脅威に反応しているかを知りたいと思ったトレイン提督は、その正体を確かめるために2機の飛行機を発進させることを承認した。こうして、東海岸のあちらこちらで追跡が始まった。我々は遙か北のグリーンランドから海軍飛行場オセアナ(\*バージニア州)まで飛行機を発進させた。この物体だが、我々はそれをレーダー画面で見ている - この出来事はほぼ1時間続いた。我々は司令部に伝送されていたパイロットたちの生の声を聞くことができた。彼らは物体を視認し、その様子を述べた。パイロットたちは2回か3回それに接近し、その物体が我々のよく知っている航空機ではないことを確認することができた - それは我々が持っているものでもソ連が持っているものでもなかった。それはすぐに断定された。彼らが追跡していたこの輸送機または何らかの物体は、海岸を南下したり北上したり、とても風変わりな、素早い飛行をした。

それはたとえば、実際にメイン州沖にいたかと思うと、あまりにも素早くその空域を去るので、我々はそれを捕捉するために直ちにドーバー空軍基地(\*デラウェア州)から飛行機を発進させていなければならなかった。ところで、F-14(\*艦上戦闘機)はそのような長距離を移動するのに30分はかかる。だが、それが何であれこの物体は、いつの間にか移動していた。それはある瞬間ここ

にいたかと思うと、次の瞬間に海岸線を数百マイル南下している。まさに鬼ごっこだった。

[この種の途方もない非線形の推力に関するポール・シス博士、ベスーン中佐、その他の多くの証人の説明を見よ。SG]

それは、実にはるばるメイポート(\*海軍補給基地)付近のフロリダ沖まで南下した。そこにはセシルフィールド海軍飛行場がある。次にそれは方向を変え、我々の側からアゾレス(\*大西洋ポルトガル領諸島)に向かって東向きに遠ざかった。こうして我々はその姿を見失った。

このすべてが起きている間中、我々は KH-11 と呼ばれる情報収集衛星を使っていた。この衛星は、大気圏外の見晴らしのよい場所から地上を撮影し、実に数フィート以内の物体の鮮明な写真を得ることのできる性能を備えていた。それで彼らは、KH-11 衛星を使ってこの物体を追跡し、その写真を何枚か撮ろうと試みていたのだ。後になって我々が司令部で入手した写真は、飛行機が北アメリカ北部沖で最初に遭遇したときに撮ったものだった。彼らは十分に接近し、何枚かの写真を撮った。それらの写真は後で司令部に引き渡された。

さて、その写真に写っていた形は、むしろ 1 個の円筒に近いものだったのを覚えている；それはとても平坦で長く、両端がすっぱりと切れていた。両端は、ほとんどの航空機がそうであるような先細りではなかった。その端は急に終わっていて、太陽光を反射しているように見えた。それは明らかに金属製に思えた。パイロットたちが通報していた情報によると、その後ろには飛行機雲もなく、表面には照明や模様が何もなかった。操縦席の窓もドアも、それに似たものは何もなかった。それが何であれその物体は、ただの固体に見えた。

トレイン提督を本当に苛立たせ悩ませたもの、それはこの物体が絶対的に完全に状況を支配し、どこでも望みの場所に数秒で移動できたことだった。ある瞬間に、我々はそれにメイン州沖で接近している。次の瞬間に、それはノーフォークをフロリダに向かって南下している。それに翻弄されている間、我々にできることは海岸全域の早期警戒レーダーでこの物体を見守ることだけだった。

トレイン提督とその参謀たちは、控えめに言ってもそれに強い懸念を持った。特に、それがロシアのものでも我々のものでもないと分かり、これほど容易に素早く移動が可能な飛行物体を建造する技術を持つ者が他に思い当たらないことに気付くと、とても憂慮した。はっきりと覚えているが、この物体を監視下に置くことができないために突然発生した完全な混沌を、私は中二階の手すり越しに注視していた。

この UFO はとても不規則に、また素早く、海岸を南下したり北上したりした... 彼らはこの物体を追跡したり、飛行機を発進させたりするために、沿岸一帯のあらゆる部隊に通報を繰り返していた。トレイン提督はこの物体の進行を阻止しようと、東海岸全域の飛行機に次々と緊急発進許可を与えた。さらに何機かの飛行機には物体を追跡させ、本当にそれを強制着陸させようとした。明らかに彼らは、手段を問わずそれを強制着陸させ、回収しようとしていた。

可能なら、どんな手段を使ってもよいから、この物体を強制着陸させよとの命令は、トレイン提督から発せられた。それが確かにロシアのものではないと分かってから、それが誰であろうとロシア人

でない限り、彼らは気にしなかった。それが誰であろうと、どこから来たものであろうと関係がなかった。彼らはそれが欲しかった。欲しくてたまらなかった。

司令部からの情報は、領空を監視するために東海岸のあちらこちらに設置されたレーダーサイトから我々に中継されていた。

将校たちは怖がっていたようだった。確かに、一言で言えば彼らは怖がっていた。トレイン提督は、いつもはとても冷静で穏やかな物腰の好人物だった。実際、彼が何かに対して自制を失ったり、大声を出したり、興奮したりする姿は見たことがなかった。だが、これは控えめに言っても彼を動揺させた。そこにいたほとんどの将校から受けた印象は、そういうものだった - 彼らは他の皆と同じように、何も分からず、怖がっていた。

実際には、彼らはそれを海岸に沿って追跡しなかった。それは、直前に目撃された場所から数百マイル離れた場所に忽然と現れた。パイロットたちは、それがあつた瞬間にはそこにいたが、次の瞬間にはもうそこにいないと報告してきた。トレイン提督を本当にいきり立たせたことの一つは、それだったと思う。なぜなら、彼はその事態を前になす術を知らなかったからだ。

この物体はそれ自身の意志を持って、東海岸中にこのような大混乱を起こしていた。トレイン提督はそのとき最終的な責任を負っており、この事態が彼に大変な緊張を強いていたことは間違いない。彼の声の調子からそれが分かったはずだ。その言葉を聞いたら、彼がこれ以上ないほど深刻に憂慮していたことが分かったはずだ。

しかしレーダーは、1分間それを追跡し、次にはそれを完全に見失い、再びそれを捕捉するという具合だった。それは軍事空域に、まさに未認証航空機のように現れた。

真面目な話だが、軍はあらゆる民間航空便がどこにいるかを常時把握している。我々のすべての飛行機がどこにいるかは、常時知られていた。我々の領空を飛行しているすべての民間航空便がどこにいるかは、常時知られていた。これに関して我々が知らないでいたことは何もなかった。緊急発進したすべての飛行機は、沿岸の施設から発進した - 海軍は沿岸施設、たとえばオセアナといった海軍飛行場を持っている。

ゼブラ態勢に入ると、それが演習であるか否かにかかわらず、ゼブラ接近許可バッジをつけていない人間はそこにいられない。そこは許可バッジをつけている者だけのゼブラストライプス区域だ。他の人間は司令部施設から出なければならない。そこには建物の内と外に海兵隊員が駐在している。彼らは、こうした出来事が起きている間に資格のない要員が司令部に残っていたら、射殺するように命令されていた。それは国家安全保障のためだった。

たとえば、ゼブラ態勢が発動されたあるとき、その海兵隊員が入ってきて、何が起きているかを知りたがった。これは演習か？ そんなことを訊いた。彼らはいつでも射殺できる命令を受けていた。私は次席当直士官から注意されて知っていたので“おいみんな、彼に何か言わなければならないぞ、彼はいつでも射殺できる”と言った。彼はまだ警戒態勢解除を伝えられていなかった。彼はその任務を実行していたのだ。私が覚えているのは、とにかくそこから抜け出したいと思ったことだっ

た。なぜなら、彼はそこに入ってきてこう言ったからだ。“もしある物を私が確認できなければ、君たちの持ち時間は 1 分か 2 分だ” - 彼は今にも人々を射殺し、証拠を破壊しようとしていた。

この出来事が終わったとき、我々が海岸を行ったり来たりして追いかけていたこの物体は、大西洋の上空、アゾレスの上空を去っていった。よく覚えているが、彼らはこう言っていた。それはアゾレスに近づいたとき、このように 66 度の角度で急上昇した。それは速度を緩めたりすることなく、ただ 66 度の角度で急上昇に転じ、大気圏を抜けて宇宙に去った。言ってみれば、それは宇宙に向けて飛び立ち、このようにして行ってしまったのだ(指をパチッと鳴らす)。つまり、それは完全に立ち去った。我々はここで、瞬く間に数千マイルを移動する何物かについて語っているが、それは忽然と去った。座って頭を掻きむしっているだけのみんなを残して、ただ去っていった。“あーあ驚いた、一体あれは何だったんだ？”

米国の巨大軍事力が、どこから来てどこへ行くのか何も分からない、正体不明の何物かによって膝を屈せられた様子を見るのは、ある意味で滑稽だった。彼らが確実に知っていたのは、それがソ連のものではないということだけだった。そして彼らは、それを知ることにとっても固執していた。

こうして我々は、ゼブラ態勢から解放された。再び照明がつけられた。誰もが司令部の床に座り込み、呆然とそのことについて話していた。私自身は上の 3 番デッキにいたが、トレイン提督は下のブリーフィングエリアにいた。彼らは数分間そこにいて立ち去った。私は誰もがするように、自分の日誌にそのことを記録した。その後、私はそのことについてあまり考えることはなかった。

後日、二人の男がスーツ姿でやってきた。彼らは軍服ではなく、スーツ姿で入ってきた。小さなバッジをつけていたが、ゼブラストライプスのバッジは持っていなかった。それは訪問者用バッジのようだった。彼らが正規の要員でないことは、誰にも分かっただろう。彼らは私が知っている一般人ではなく、今まで見たことのない男たちだった。我々は階段を降り、1 階に行った。そこには幾つかの小さな会議室があり、私はその一室に連れていかれた。部屋はすでに準備されていて、私は席に着かされた - 彼らは私の日誌を持っていた。彼らはそれを手に入れ、私と一緒に階下に来たのだ。

その二人の男は、この出来事について私に質問を始めた。正直に言うと、彼らはとても手荒だった。私は文字どおり両手を上げて、こう言った。“あなたたち、少し待ってください。私はあなたたちと同じ側にいる。ちょっと待ってください” 彼らはまったく乱暴だったからだ。とても脅迫的で、はっきりと次のように言った。何も見なかったし、聞かなかった。何も目撃しなかったし、知られたことはこの建物から消える。“君たちはこれについて同僚に一言も言ってはならない。また、基地を離れたら、これについて見たり聞いたりしたことは忘れろ。何も起きなかったんだ” 彼らはたちが悪かった。それがぴったりの言い方だろう。はっきり覚えているが、私は椅子に深く腰掛け、手を上に上げ、これらの男たちにこう言わなければならなかった。“少し待ってください。私たちは同じ側にいる同輩だ。私たちの間に問題は何かない”

口に出して脅迫こそしなかったが、そうしないと彼らは身体的な危害を加えかねない印象だった。彼らは声の調子でこう言っていた。“お前さん、こっちの言うことを聞くんた。さもないとひどいことになるぞ”

もしこの物体が敵意を持ち、我々に向かって兵器を投下したりミサイルを打ち込んだりするつもりだったなら、彼らにとってそうするのはとても容易だっただろう。そのことに疑問の余地はない。あのとき我々は、それが何であれこれに対抗し得る何物も持っていなかった。それは我々の領空を意のままに飛行し、移動に関する限り思いのままに振る舞った。それに脅威を与えることはまったくできなかった。それは認めざるを得ない。そのとおりだった。トレイン提督もまたそれを知り、大変懸念していたと私は確信している。一言で言えば、あの老練な軍人が誰の目にも分かるほど怯えていたのだ。

**SG:** その UFO 写真にどんなことが起きたのですか？

**MM:** 我々が持っていた 35 ミリスライドに何が起きたか、それをあなたが持ち出したのは実際に射ている。あなたがその質問をしたのは、実にいいところを突いている。トレイン提督が実際に写真を見るためには、それをテレサイン (Telesign) [綴り不明] に上げる必要があり、その準備も終わっていた。しかし我々にはそうする間がなかった。私は彼女 [スライドを取り扱う技術者] がこう言ったのを覚えている。スーツ姿の男が二人部屋に入ってきて、現像済、未現像のフィルム、そこにあった資料、スライドなど、すべてを取り上げた。私の日誌だが、再びそれを見たことはない。翌日、我々には新しい日誌が渡された - まっさらの新品だった。それ (\*日誌) に何が起きたのか、私には知る由もない。また、誰も本当にそれを知らなかった。

彼女はこうも言った。“二人の男は入ってくるなり騒擾取締令を読み上げ、これもよこせ、あれもよこせといって、彼らが望む物をかき集めた。彼らは本当にたちが悪かった”

この出来事は、まさに未確認飛行物体として記憶された。それが何だったのか、彼らにはついに分からなかった。私は当直士官、次席当直士官たちが、互いに顔を見合わせながら話していたことを覚えている。私は手すりから身を乗り出して話を聞いていたが、彼らは日誌にどう書くかについて相談し合っていた。彼らはこう言っていた。“これを未確認飛行物体の捕捉と記録する。まさにそれだ”

この UFO を実際にレーダーで捕捉した施設 - 私が知っているだけで 5 箇所あったが、それはグリーンランドから、はるばるフロリダにまで及ぶ。私が知らない施設も幾つかあるかもしれない。私がこれを知っているのは、トレイン提督がオセアナ海軍飛行場に“そこから何機か発進させよ、戦闘機を何機か緊急発進させよ”と命令していたからだ。彼はドーバー空軍基地 (\*デラウェア州)、メリーランド州パタクセントリバー海軍飛行場、さらにフロリダ州セシルフィールド海軍飛行場にまで、実際に電話をかけて警戒態勢をとらせた...

除隊するとき、私は海軍のレターヘッドがついた公式の米国海軍文書を渡された。その文書には、いかなる状況であろうとも 5 年間はこの国を出ることが許可されないと書かれていた。だから私は、バージニア州を出るために FBI (連邦捜査局) のロアノーク事務所に連絡し、州境を越えてノースカロライナ州に行きたいと彼らに通知しなければならなかった。それは私が除隊してから 5 年間続いた。

私の妻の身内だったこの人についても語りたい。ジャック・ブースというのが彼の名前だ。彼は今もう亡いが、陸軍にいたことがあり、ロズウェル事件が起きたときロズウェル(ニューメキシコ州)に駐在していた。彼は私の妻のおじだった - 妻の母親の兄弟で、ウェストバージニア州ブルーフィールド出身だった。ジャックが語った内容は次のとおりだ。それが何であれこの物体が墜落したとき、彼は陸軍の新兵としてロズウェルにいた。墜落現場で作業が行なわれている間、彼は警備任務に就いていた。彼らは 1 台のトラックいっぱい詰め込まれて行き、破片など様々な物を拾った。そして遺体が実際に回収されたとき、彼はそこに居合わせた。彼はこう言った。“いいかい、彼らは小さな乗員たちを遺体袋に入れたんだ。それは人間ではなかった。彼らは小さく奇妙な外見をしていて、まったく人間に似ていなかった” 彼らは乗員たちを遺体袋に入れたが、そのうちの一人か二人は墜落後もまだ意識があったというか、生きていたというか、そんな状態だった。彼によれば、その乗員たちはこの墜落を生き延びた実際の生存者たちだった。

彼らは機体のあらゆる小さな破片を拾っていた。彼らは四つん這いになりながら、協力してその乗員たちを機体から降ろし、破片が散乱した場所を横断しながら、どんな小さなかけらや小片でも拾って歩いた。それが数日間続いた。彼らは全員が脅迫され、はっきりとこう言われた。“よく聞け、もし君たちがこれについて何か喋ったら、明日は姿を消すことになるぞ”

[このような脅迫に関するグレン・デニス、ジョン・ウェイガント、ラブキン弁護士、その他の証言を見よ。SG]

ジャックは確かにそう言った。彼らがいかにこれを隠したがっているかを皆に知らしめる、そのことを彼らは躊躇することなくはっきりと通告した。彼はこう言った。“いいかい - 私はそこにいたんだ”

私が会ったジョン・マイケル・マーフィーも、この問題について知る一人だ。私が海軍にいたとき、彼は海兵隊伍長だった。彼は警護特務隊の一人として、大西洋艦隊総司令部の警護隊兵舎に駐在していた。彼はまだ海兵隊にいたとき、デラウェア州ドーバー空軍基地から遠くないある施設で、実際に 1 機の宇宙船、地球外宇宙機を警備した。彼は懸命にそれを訴えた。私はマーフィーをよく知っているので、彼の言ったことを信じたい。私はマーフィーを信じたい。これは 1979 年か 1980 年のことだった。

[この証言はとても重要である。なぜなら、証人はゼブラストライプス最高機密取扱許可を持ち、1 時間以上もの間地球外輸送機との遭遇を自ら体験したからだ。それは少なくとも 5 基のレーダーで捕捉され、パイロットたちにより視認もされた。強調されるべきは、この問題を一般に公開することの必要性である。なぜなら、我々の軍がこのような進歩した宇宙機を追跡し、撃墜を試みることで、世界の平和と安全を危機に陥れることは明白だからである。私が CIA と国防総省の高官たちに行なった背景説明において、しばしば我々は次のことを知った。つまり、これらの人々はこの問題について適切に知らされておらず、トレイン提督がこの物体を撃墜するように命令を下したのと同様のやり方で反応しかねないことを。秘密の真空地帯の中では、知識と視野の欠如ゆえに恐ろしい間違いが起り得る。だからこそ、我々はこの問題についての秘密を終わらせることを要請しているのである。それにより、我々の軍と国家安全保障の指導者たちは正しく情報を与えられ、外交官や社会の他の指導者たちは、我々の世界を以前から観察し続けている地球外文明に対して適切で、安全で、平和的な対応を策定することができる。この問題を、秘密のプロジェクトや準備ができてい

ない軍指導者たちだけの領域とするのは、あまりにも危険な賭けである。ここにある危険性は、地球外輸送機そのものではなく、彼らの存在に対して適切に対処する知識と準備が不足していることから来るのだ。SG]



米国空軍中佐 チャールズ・ブラウンの証言  
Testimony of Lt. Colonel Charles Brown, US Air Force

2000年10月

空軍の英雄ブラウン中佐は第二次大戦から帰還した後、空軍特別捜査局に入った。彼はグラッジ計画に配属され UFO 調査の責任者になったが、そこで従来の説明では対処できない幾つかの事例があることを知るようになった。後に彼は、ブルーブック計画は国民に対する周到なごまかしであると信じるようになった。ブラウン氏は、4基の独立したレーダーが時速 5,000 マイルの飛行物体を追跡していた事例の報告に参与した。

CB: チャールズ・ブラウン中佐

SG: スティーブン・グリア博士

**CB:** 私は米国空軍の退役中佐だ。軍に約 23 年、その後は上級外務職員(\*国務省)を 7 年務め、通算で約 15 年間の海外勤務を経験した。私は 1939 年秋にウェストバージニア州国家警備隊陸軍兵となり、1940 年 6 月に高校を卒業と同時に正規の米国陸軍通信軍団に入隊した。そこで 1942 年 7 月からパイロットとして訓練を始め、1943 年 4 月に少尉パイロットに任命された。次いで B-17(\*大型爆撃機)の機長パイロットとして訓練を受けた。

私はヨーロッパに赴き、1943 年 11 月初めに着任した。そして 1943 年 12 月 13 日から B-17 パイロットとして戦闘行動に加わった。1944 年 4 月 11 日には 29 回目で最後となった完遂任務に出撃したが、この期間の戦闘は相当に激しかった。私は自分の 31 回の出撃任務について調査を終えたばかりだが、出撃のたびに犠牲者が出て、その数は 235 人に達した。私は幸運にもそれをやり遂げた...

[私は]1950年初めに正規の空軍将校に任命され(\*米国空軍は 1947年創設)、1965年秋に現役を退いた。大佐に昇進することを諦め、上級外務職員になることを受け入れたのだ。以後 7 年間、私は国際開発庁(USAID)で働いた。この 7 年間のうち 6 年間は、国際開発庁の地区検査官として東南アジアで過ごした。

空軍特別捜査局(AFOSI)と呼ばれる組織で防諜訓練と取り締まり活動をしていたこと、またパイロットとして訓練された数少ない調査員の一人だったことから、結局私は、破壊活動の疑いがある多くの異常な航空機事故を調査する羽目になった。その結果、何人かの傑出した科学者たちと顔見知りになり、グラッジと呼ばれるプロジェクトのために航空技術情報センター(ATIC)で働くことになった。当時、特別捜査局は空軍の中であって世界的規模の調査をする部門だった。我々は未確認飛行物体として知られるようになった現象を調査する責任を負っていた。センター内での計画名はグラッジだった。

私の仕事場はライト-パターソン空軍基地の D-05 区域にあり、そこで世界中からの報告を受け取った。私の仕事は、これらの報告書を技術情報センターに手で持って運び、プロジェクト将校と共にそれらを整え、研究的立場からあらゆる質問に答えることだった。それが私にできることだった。この仕事には 1951 年秋まで約 2 年間従事した。

私がライト-パターソン基地を去るとき、ダン大佐が親切にもグラッジ計画での働きに感謝する 2 頁の文書をくれた。私が知る限り、それは確かにグラッジ計画で働いた空軍将校に対する初期の公式認証だった。しかし、その舞台裏では何かが同時進行していたかもしれない。幸い私にその特権は与えられなかったが、調査の多くに答えが出されなかったということに、[何かが行なわれているという]ある種の感じを持ったのは事実だった。通常、調査の分野では何かについて陳述がある。UFO の場合なら、たとえば目撃だ。それによって結論と結果を導く。随分年月が経ってしまったが、それらの多くの事例で、まともな科学的結果が何も[報告]されなかったことは確かだ。その結果、私は未確認飛行物体に対する関心を深めることになった。その時点で数百時間の飛行経験を有していた私は、その後の空軍勤務を通してそれへの関心を持ち続けた。私は戦略空軍では情報部次長と本土陸軍との間の調整将校だった。当時は本土陸軍が米国ミサイル防衛の責任を負っていた。

ある物体が時速数千マイルで移動している場合、12 分ないし 14 分というのはとてつもない時間の長さだ。私は時速 4,000 マイルから 5,000 マイルを超す速度を覚えているが、それは我々や敵が持っていたどんな航空機をも凌ぐものだった。情報将校だった私の任務の一つは、敵の能力と装備について、少なくともその概略を把握することだった。

我々は一度、ネリス空軍基地に向けて飛行したことがあった。私はもう一人のパイロットと一緒にグーニーバード(\*輸送機)を操縦していた。雲一つない快晴だった。そのとき、1 個の物体が南西から北東へ、天空の端から端まで移動した。それは多分 15 秒に満たない時間で、私の右方から現れ左方に消えた。計算する間もないほどの速度だった。それが衛星でなかったことは確かだ。それは制御された飛行物体だった。

報告された物体の幾つかはレーダーで追跡されていた。中には地上からの視認、地上レーダー、航空機からの視認、航空機搭載レーダーと、四通りの方法で確認されたものもあった。私に言わせれば、これ以上の確認手段はない！

*[ここに登場するのは、高級軍人であり、外務職員であり、わが国の英雄でもある一人の証人である。彼は空軍グラッジ計画の中で、レーダーによる証拠の信憑性とこれらの UFO の実在性を確認しているのだ。これは UFO の実在を裏付ける十分な証拠は存在せず、したがって研究すべきことは何もないとする、空軍や政府の公式声明とは明らかに矛盾する。SG]*

ここで述べているのは、誰かの空想ではない。この同じ時期に、私は空軍が取り込んだいわゆる専門家たちのことを耳にした。彼らは沼気(メタンガス)に始まる、似たような話を次々と捏造した。もしそれが翼を持つ航空機だったなら、空気力学の法則に従わなければならず、瞬く間に止まったり逆進したりすることはできない。だが、そのようなことが実際に起きたのだ。

おかしいことだが、我々は犯罪の目撃証言により人々を投獄し、死に追いやる。我々の法制度はかなりの程度このことを基礎にしている。しかし、私が過去 50 年間に異常空中現象を追いかけてきた中では、とても信頼のできる証人たちが何か未確認のものを見たと言ったとき、彼らの信用を失わせしめる何かの理由があるようだ。よろしい、天空のことなら何でも知っている人がいるというなら、私はキリストの再臨をお見せしよう。まったく簡単な話だ！ どれほど技術的な資格を持ってい

ようと関係ない - そこにいないで見解を表明し、彼らはあれこれの馬鹿げたものを見たのだと言う連中のことは気にしない。私の疑問は、彼らはどこで降りたのか、彼らを降ろし専門家に仕立て上げた停留所は何だったのかということだ。しかし、私は実際にそれを目撃もし、任務としてこの現実の問題に対処していたのだ。

これらの現象(\*UFO)がグラッジ計画よりもずっと以前からこの惑星を訪れていることを、私は心から信じている。その十分な証拠はあると思う。この惑星についてもっとよく知れば、我々が本当に知っているのはわずかだということを、もっと知るようになる。だから、科学は発展し続けなければならないし、我々は学び続けなければならない。

...

**CB:** それについてはあまり覚えていない。たとえばガンカメラ(\*機銃に取り付け攻撃の成果を測るために使用)映像はほとんど見なかった。むしろ写真を見るが多かった。

**SG:** UFO のガンカメラ映像が存在すると聞いたことがありますか？

**CB:** 間違いなく存在する。しかし、それはとても注意深く扱われるので、通常は目に触れなかったはずだ。

[ここでブラウン中佐は、グラハム・ベスーン中佐や他の証人たちが観察したことを繰り返していることに留意されたい: UFO を扱う計画の特徴である区画化は、グラッジ計画の内部で働いていたブラウン中佐のような人間でさえ、他の証拠、計画、情報に接近できない状況をつくり出す。SG]

**CB:** トルーマン大統領は、ホワイトハウス空域の[これらの物体について知っていた]むしろ一人の当事者だった。私は[ホワイトハウス上空]隊列を組んだ未確認物体、いわば光球群のレーダー写真を見たことがある。これらはレーダーに映り、地上からの視認、地上レーダー、航空機からの視認、および航空機搭載レーダーにより確認された。不思議なことに、航空機からの視認では 2、3 機の戦闘機がそこに近づくと、それらは思いのままに姿を消した。

[ここで彼は、1952 年 7 月にホワイトハウスおよびその周辺空域で起きた UFO 群との遭遇(\*ワシントン上空での UFO 乱舞事件)について述べている。SG]

こうして、トルーマン大統領は当事者になった。彼はすべての新聞見出しと物体群の写真を見た。彼は、これらの物体群を調査する責任者が必要だと言った。ジョン・サンフォード将軍が空軍情報部長だったと思う。誰かがサンフォード将軍が空軍情報部長だと言うと、トルーマン大統領は、彼がこれの責任者か？ と訊いた。彼らは、そのとおりです、全般の責任者ですが...と言った。トルーマンは、彼は調査を担当しているのか？ と訊いた。彼らは、いいえと言った。それならライト・パターソン空軍基地にいる一人の将校だった。トルーマンはこう言った。では彼を連れてきて、私に説明させよ。彼らは確かにワシントンに飛んできた。彼は大統領に状況を説明したはずだ。

その後英国にいたときのことだが、彼らは北海域で NATO(北大西洋条約機構)の演習を行な

った。そのとき、これらの小さくて友好的な光体が 2, 3 個、場周経路に入ってきた。それらが着陸せずに甲板の上を飛んだとき、何が起きたかは想像できるだろう。この事件は海軍を完全に動揺させた。さて、それを新聞が取り上げた。その当時、彼らはこれに関わった甲板員やパイロットたちと話をすることができた。誰もが調査を要求して叫んでいた。彼ら[英国人]は調査機関がないとか何とか言っていた。しかし、手短かに言えば数年後、私の上官だった空軍大尉、彼は空軍中將で退役したが... 我々はこの事件について話し合っていた。そのとき彼は、UFO を調査している英国の機関は私が 3 年半勤めた同じ建物の 1 階上にあると言ったのだ。それでも彼らはその存在を認めなかった！

[この証言は、英国外務省職員ゴードン・クレイトンにより裏付けられている。彼はブラウン中佐を知らなかったが、この問題を扱う英国の秘密機関についてほとんど同じことを語っている。SG]

さて、これは氷山の一角だ。なぜなら、英国ではとても異常な目撃が幾つか起きていたからだ。

[ニック・ポープ、ラリー・ウォーレン、その他の証言を見よ。SG]

彼らはドイツ上空の小さなフー・ファイターズについても話していた。ドイツ人たちはそれが我々のものだと考えていたし、我々はそれがドイツのものだと考えていた。しかし現実的に考えると、光る球体には操縦者を乗せる場所がない。我々を驚かしたり戯れを演じたりする、知性ある操縦者だ。それらはどこか別の場所から来ているものだという以外に説明のしようがない。私の判断、経歴、研究に基づく限り、これはまったく不可解だ。

我々の政府の中にデータ操作を行なうことのできる機関があることは確かだ。そこでは[何でも好きなように]拵えたりつくり直したりすることができる。飛行物体、知的に操作されている飛行物体は、この地球上の我々の物理学法則に基本的に違反してきた。しかも長い間そうしてきた。政府が現時点で - 我々はそれを 1947 年から調査してきた - 答えを持っていないことは、何か深刻な裏事情があることを示しているように私には思われる。我々はそれほど科学において無能だろうか？ そうは思わない。我々の知能はそれほど劣っているか？ それほど劣っていないことは確かだ。さて、コンドン博士のグループにより中止されたブルーブック計画だが、これはまったくの取り繕いだった。私にはそう信ずべき十分な根拠がある。

[このことは、政府文書とロバート・ウッド博士、その他の証言により確認されている。SG]

米国政府の諸部門が、何らかの理由により、これまで発生してきた事柄を国民に知らせ損なってきたのだと私は見ている。

UFO は長期にわたり調査されてきたが、一般社会はそれについて完全には知らされていない - ほんの断片、予め決められた対応、そんなものだけが与えられている。だから、あなたが国政選挙 [2000 年 10 月]を前にして私に面接取材をしているのは、奇妙なことだ。なぜなら、あなたはただテレビをつけるかラジオを聞かすればよいからだ。そうすればあなたは、その道の専門家が予め決めたことの結果を聞いたり見たりする。我々は盲人に物を見させたり、けが人を歩かせたり、そんなことをする。我々は人々に一定の流儀で語らせ、彼らに知性があるという。我々は多くのことをす

る。また、多くのことを隠す。

**SG:** 新エネルギー研究についてのあなたの仕事と、それがいかに抑圧されてきたかについて話してください。

**CB:** 技術マニュアルと MIT (マサチューセッツ工科大学) での研究から、もし完全な乾燥から完全な湿潤に環境が変わったとすると、エンジン効率が 2 パーセント改善されることを私は知っていた。さて、[我々が発見したこの方法で] 空気に湿気を与えることにより - 当時していたのはこれだけだったと思う - 私は内燃機関の効率を 20 パーセントから 30 パーセント改善することに成功していた。もちろん、工学分野の人々や科学者たちはそれを信じようとしなかった。それで私は、よく考えもせず、エンジン効率を著しく改善するこれらの装置を販売し始めた。そうしたら、奇妙なことが起き始めた。政府、特に連邦取引委員会が介入してきた。EPA (環境保護庁) はそれが機能することに満足した。しかし政府からの支援は何もなかった。ついに EPA 長官は、ノースカロライナ州にある同庁の研究所長に電話をし、私と一緒に試験をするように頼んだ。こうして私は、長官が研究所長にディーゼル車を用意させたことは何も知らずに出向いた。私が知る限り、その結果は目を見張る素晴らしいものだった。それは EPA 研究所でテストされた中で、あらゆる排出物を同時に低減させ、しかも燃費を 23 パーセントも向上させた最初のディーゼルだった。私が知る限り、いずれの項目についてもこれと同等の結果を出した人はいない。

連邦取引委員会は後日、明らかな違法行為をした。ワシントンのある大手販売業者の弁護士に宛てた明確な声明は、それが機能するかどうかはいつでもよい、人々にはこれらの大型米国車を買ってほしくない、というものだった。この報告を受けたとき - これは 1979 年か 80 年のことだ - 政府の役人がそんなことを言うとは信じられなかった。

それで私はワシントンに飛び、議会に行き、科学技術委員会のさる上院議員に会った。その法律顧問にも会った。彼は長々と質問をしたが、私は証拠書類を揃えていた。彼は対処すると言った。私が FTC (連邦取引委員会) の態度の不正さを指摘すると、彼らは連邦取引委員会委員長宛に厳しい非難の文書を書き、その写しを私に送ってきた。それから 3 週間のうちに、私は車を失った。およそ 10 万ドル相当の装置と試験車両が盗まれたのだ。

私は陸軍のレースチームに妖精のようなレーシングカーを提供していた。我々がレースに勝って間もなく、彼ら (\*妨害グループ) はその車から私の装置を取り外して盗んだ。その陸軍チームのキャプテンは曹長だった。我々はスーパーカーを生み出していた。それを彼らは、カリフォルニア州バンナイズの陸軍から盗んだのだ。それから 3 週間、私は精神的に参ってしまった。これはただのお話ではない。実際にあったことなのだ。人生の 9 年間で戦場で過ごした人間として、この話をしないわけにはいかない。... これはとても忘れられることではなかった。

[化石燃料に代わり得る、またはそれへの依存を大きく低減させる装置を持った多くの研究者が、この種の仕打ちと妨害行為を受けてきた。ブラウン中佐のような祖国の英雄がこのような扱いを受け、政府や法執行機関の態度が彼に協力的でないことは、私にとり受け入れがたい。その一方で、地球の環境は悪化し続けている。SG]

我々はまた、海事管理局ともプロジェクトを持っていたが、これはとてもうまくいった。結論を言えば、40パーセントの排出低減と同時に、馬力の20パーセント向上、つまり燃料の20パーセント削減が達成されていた。

[私はこれらの研究結果を持っている。実に見事なものだ。考えてもみよ：抑圧がなければ、我々は20年前に40パーセントの排出低減と20パーセントの燃費向上を実現できていたのだ。SG]

プロジェクトの終わり近く、その2箇月前になって、彼らは協定が打ち切られたと言った。このプロジェクトを止めるということだった。それはできないと私は言ったが、もうそのように決まると彼らは言った。プロジェクトは間もなく終了だ、残り2箇月分の資金はすでに払ったと私は言った。彼らは、その試験結果は公表しない、私のノートと記録のすべてが欲しいと言ってきた。その権利はあなたたちにはないと私は言った。すると彼らは、それに資金を出しているのだから権利はある、政府と争うと言った。こうして、私は持っていたものすべてのコピーを何部か取り、方々にばらまき、すべての原本を彼らに送った。このとき何があったのか、私はそのプロジェクトを立ち上げた主任技師に電話を入れたが、彼は一度も出なかった。その補佐役の技師にも電話を入れたが、彼も出なかった。それでとうとう私は経理担当者に電話をした。すると彼は、この二人はもうここにはいないと言った。あなたは何を言ってるんだ？ と私は問い詰めた。そうしたら彼は、海事管理局は研究部門を廃止したと言ったのだ！ 何者かがこの技術の成功を望まなかったのだ。

さて、後日のことだが、私は仕事で旅行中だった。午前0時を2分過ぎて私の誕生日になったとき、ホテルの部屋の電話が鳴った。もう寝ようとしていたときだった。電話の音が、今すぐ部屋から出てくださいと言った。あなたが何者で、理由は何かを教えてくれたらそうすると私は言った。それはフロント係で、可哀想に声変わりしていた。彼は、あなたの部屋に爆弾があるという電話を受けたところだと言った。それで私は、これ以上議論しようとは思わないと言い、電話を切って外に出た。このときまでには、モーターからの全員避難が始まっていた。そんな状況だったので、私はホリデー・インに移ると言い、そうした。駐車した場所は目の前の照明のある一角だったが、そのことが私のくたびれた旧式車を災難に遭わせることになった。私はその中に数千ドルの装置を組み込んでおり、気密試験を幾つか行なうために、それをバデュー大学に持っていくところだった。

とにかく、私は翌朝7時15分に外を見た。私の車が合った場所には何もなかった。彼らが盗んでいったのだ。警察が2、3週間後にそれを探し出したが、燃料タンクはドリルの穴だらけで、試験装置のすべては消えていた。私は気化器の試作品を仕上げている。それは私が製作した中では最後のものだった。私は実際に装置をつくり終えていたが、結局何もかも失った。私は再び精神的に打ちのめされた。

私の部屋に爆弾があるという電話だった。だから、誰かが私をつけていたのだ。電話も盗聴されていた。間違いない。これには何ら道理に合うような理由がなかった。私の装置は、この車販売のディーラーを通して購入される車、トラック、バンなど、すべての米国製新車に取り付けて無料で提供された。私は米国製に限定するという条件を付けた。

私の発明は、まったく新しい科学の領域に向かう扉を実際に開けたものだ。これは私だけの考え

ではなく、物理学、化学、および工学分野の少なくとも三、四人の博士の考えでもある。

燃焼を促進する分子とラジカルが、この現象の進行中に生成される。それは瓶の中に雷を発生させる[その結果、燃費を大幅に向上させ排出を減少させる分子を生成する]。

私の発明は、古い車を使い続けたい人のための後付け改良装置として役立つ。しかし特に有効なのは、汚染を大量に排出する輸送手段に対してだ。たとえば 18 輪車、ディーゼル車、都市部のディーゼルバス、曳き船、外洋船舶などがある。ヨーロッパ、英国、およびドイツのマックス・プランク研究所での調査に基づけば、発電所のための需要も見込まれるだろう。これは発電所でも利用可能だ。私にはそう信ずべき十分な根拠がある。そこから上がる白煙を見ることはなくなるだろう。最小限の投資でこれが実現可能であることを、私は 90 パーセント信じている。

だから、私の発明は空気中の酸素を増やす。増えるのはある種の酸化体だけだ。それは二酸化炭素を減らし、地球を救う。使用する燃料が少なくなれば、二酸化炭素は減少するからだ。私が知る限り、それはおそらく最も欠点のない発明だ。

本当を言えば、私は米国政府のある機関から数年前にこう助言されていた。もし、私ができると言っていることが実際にできたなら、それは新しい科学の領域だと。確かにそのとおりだ。なぜなら、それに対抗できる発明はどこにもないからだ。それは、あらゆる熱サイクルエンジンの燃焼用空気、つまり混合気の質を高める一つの方法なのだ。私はそれをプロパンで試し、ディーゼルとガソリンでは数百万マイルの作動試験を行なった。オクタン価 75 から 125 のガソリンでも試験をした。これを使えば、通常ならオクタン価 92 を必要とする乗り物を、ノッキングを起こすことなくオクタン価 75 で走らせることができる。私はそれを 3 箇月間行なった。[この技術の]可能性ということに関して、私はその表面を引っ掻いたにすぎない。

もし 25 年前に石油会社が完全に私を支持していたなら、この地球上の有限資源、石油の利用寿命を延ばしたかもしれない。

キャロル・ロジン博士の証言  
Testimony of Dr. Carol Rosin

2000年12月

キャロル・ロジン博士はフェアチャイルド社初の女性管理職で、ウェルナー・フォン・ブラウン晩年の代弁者だった。彼女はワシントン D.C.で宇宙空間安全協力協会 (ISCOS)を創設し、多くの機会に議会で宇宙兵器について証言した。フォン・ブラウンがロジン博士に明かしたところでは、地球外からの脅威を捏造して宇宙兵器を正当化しようとする計画があったという。ロジン博士はまた、1990年代の湾岸戦争に向けたシナリオが計画された1970年代の会合にも出席した。

CR: キャロル・ロジン博士

SG: スティーブン・グリア博士

CR: 私の名前はキャロル・ロジン。私はフェアチャイルド航空宇宙会社の最初の女性管理職になった一人の教師だ。また、宇宙ミサイル防衛顧問であり、幾つかの企業、組織、政府部門、情報機関の顧問をしてきた。私はMXミサイルに取り組んでいたTRW社の顧問だったので、その戦略に加担したが、それは宇宙兵器をいかにして世間に受け入れさせるかの手本だったことが判明した。MXミサイルは私たちにとって不要なもう一つの兵器システムだ。

私はワシントン D.C.に本拠地を置くシンクタンク、宇宙空間安全協力協会を創設し、(\*その条約の)起草者の一人として、これまで議会や大統領宇宙諮問委員会で証言してきた。

私は1974年から1977年までフェアチャイルド社の管理職だったが、この期間に今は亡きウェルナー・フォン・ブラウン博士に会った。私たちは1974年初めに会った(\*小学校教師だったロジン博士は、生徒向けの宇宙教育プロジェクトを生み出したことで名が知られていた。彼女はこの年に教職を退き、ブラウン博士のもとに行った)。当時フォン・ブラウンは癌で死期を迎えていたが、目下行なわれている策略を私に教えるためにあと数年は生きるつもりだとはっきり言った - その策略とは宇宙を軍事化し、宇宙から地球を支配する、また宇宙そのものを支配する試みだった。フォン・ブラウンは兵器システムに取り組んだ経歴を持っていた。彼はドイツを脱出してこの国に来た。私たちが会ったとき、彼はフェアチャイルド社の副社長だった。死期を迎えていたフォン・ブラウン晩年の目標は、宇宙兵器が愚かしく、危険で、世界を不安定にし、膨大な予算を要し、不必要で、役に立たず、好ましくないのはなぜか、またその有効な代替案は何かについて、国民と政策決定者を教育することだった。

彼は事実上の遺言として、それらの構想と重要な役割を担う人たちは誰かを私に教えた。彼は宇宙の軍事化を阻止するために、この取り組みを継続する責任を私に与えた。癌で死期が迫っていたウェルナー・フォン・ブラウンは私にこう頼んだ。“私の代弁者になってほしい。私の体調が悪くて話ができないときには、君が代理人として出席してほしい” 私はそうした。

私が最も関心を持ったのは、一緒に働く機会があった約4年間に彼が繰り返し繰り返し述べた言葉だった。国民と政策決定者を教育するために使われる戦略は、脅しの策略だ... それは何を我らの敵と見なすのかということについての方法だった。



ウェルナー・フォン・ブラウンが教えた戦略では、まずロシアが敵とされた。1974年には実際に彼らは敵、認定された敵だった。私たちは、彼らが‘キラー衛星(\*衛星攻撃用衛星)’を持っていると教えられた。私たちは、彼らが私たちを捕らえて支配すると教えられた - 彼らは‘共産黨員’だからだ。

次にテロリストが敵と見なされ、これはすぐに現実化した。私たちはテロについて多くを耳にした。次に第三世界の国が‘過激派’とされた。今私たちは彼らを懸念のある国々と呼んでいる。しかし彼が言うには、それは宇宙に兵器を建造する上での第三の敵ということだった。

次の敵は小惑星だった。ここまで話したとき、彼はクスクスと笑った。小惑星 - 小惑星を相手に私たちは宇宙に兵器を建造しようとしているのだ。

そして馬鹿げたことの最たるものは、彼が異星人と呼んだ地球外知性体だった。それが最終的な脅しになった。私が彼を知り、彼のために演説をしていた4年間に繰り返し繰り返し繰り返し、彼はこの最後のカードのことを話題にした。“覚えておきなさい、キャロル。最後のカードは異星人カードだ。我々は異星人に対抗するために宇宙に兵器を建造することになりそうだ。そしてそのすべては大嘘なのだ”

システムに仕掛けられる情報操作の深刻さを知るには、私は当時あまりにも純真だったと思う。そして今、それらの断片はそれぞれ然るべき所にはまり始めた。私たちは嘘と情報操作で囲まれた中に、宇宙兵器システムを建造しつつある。ウェルナー・フォン・ブラウンは、すでに1970年代初期にそのことを気付かせようとしていた。そして1977年に亡くなるまさにその瞬間までそうだった。

彼が語ったのは、その戦略は加速されているということだった。彼はそのスケジュールを述べなかつたが、誰もが想像できないほどの速度で進んでいると言った。宇宙に兵器を持ち込む戦略は、嘘の上に立っただけではない。人々がそれに気付く前に建造を終えることが意図されていた。

私が初めて彼に会ったその日、フォン・ブラウンは目の前で死期を迎えており、身体にチューブを付けられていた。彼はテーブルを軽く叩きながらこう言った。“フェアチャイルドに来なさい”私は一介の学校教師だった。“あなたはフェアチャイルドに来て、宇宙に兵器を持ち込ませないようにする役割を果たしなさい”彼は強い眼差しを向けてこう言い、私が彼に会った最初のこの日に、宇宙兵器が危険で、世界を不安定にし、膨大な予算を要し、不必要で、役立たずの構想であると付け加えたのだった。

最後の切り札は、地球外からの敵というカードだった。それを力を込めて言ったその様子から、彼は口に出すのも恐ろしい何かを知っているのだと私は理解した。彼は大変恐れてそれを語らなかつた。その詳細を私に話そうとしなかつた。もし彼がその詳細を話していたとしても、1974年当時に私がそれを受け入れたか、いやそれを信じたかどうかさえ分からない。しかし、彼はそれを知っていたし、知る必要性(need-to-know)を持っていたことは確かだった。後になって私はそのことを知った。

ウェルナー・フォン・ブラウンが地球外知性体問題について知っていたことについては疑いない。

兵器が宇宙に持ち込まれる理由、これらの兵器を建造して迎え撃つ敵、これらのすべてが嘘だということを彼は説明した。地球外知性体が最終的な敵と見なされ、それに対して宇宙兵器が建造される。このことがすでに 1974 年に画策されていたと彼は述べた。これを話したときの様子から、彼が何かあまりに恐ろしくて口にできないことを知っていたと私は確信している。

ウェルナー・フォン・ブラウンは、地球外知性体に関して詳しいことは何一つ語らなかった。しかし、いつか地球外知性体が敵と見なされ、それに向けて巨大な宇宙兵器システムが建造されるだろうと語った。ウェルナー・フォン・ブラウンは、その情報操作は嘘だと語った - 宇宙兵器の前提、それが建造される理由、敵と見なされるもの - すべてが嘘に基づいている。

私は約 26 年間にわたり、宇宙兵器問題を追求してきた。将軍や国会議員たちとも議論してきた。議会、上院において証言もした。また、100 箇国以上の人々とも会ってきた。しかし、この宇宙兵器システムを建造しているのが誰なのか、特定できていない。私はそのニュースを見る。その政策が決定されるのも見る。それらはすべて嘘と貪欲の上に立っているのだ。

しかし、その者たちが誰なのかをいまだに特定できないでいる。26 年間もこの問題を追及してきたのに。隠されている大きな秘密があり、その真実を今明らかにしようと思っている人々がいる。国民と政策決定者は、今こそ彼らに目を向けるべきだ。私たちは世の仕組みを変え、あらゆる人々、すべての動物、この惑星環境のためになる宇宙システムを建造する必要がある。技術はすでにある。地球の差し迫った、長期的な諸問題への解決策がそこにある。人々がこの地球外知性体問題について学び始めるなら、私が 26 年間抱き続けてきたすべての疑問が解決されるだろう。私はそう感じている。

しかし私の結論は、それが少数の人間の莫大な利益と権力の獲得に根ざしているということだ。それは利己主義に関係している。それは私たちの本来のあり方、この惑星に住み、互いに愛し合い、助け合って平和に暮らすこととは関係がない。それは技術を利用して問題を解決したり、この惑星に住む人々を癒したりすることとは関係がない。そうしたことはない。それは彼らの財布と勢力争いのために、時代遅れで、危険で、経費のかかる策略を現実に進めている少数の人間に関係している。それだけのことだ。

私はこの宇宙兵器の策略全体が、まさにこの米国で始まったと考えている。私が望むのは、今明らかにされつつあるこの情報により、新しい政権が正しいことを行なうようになることだ。戦争ゲームを宇宙ゲームに転換し、人々はその技術を軍事技術の副産物ではなく、まさに協同的な宇宙システムを建造するための直接的な技術応用として利用できるようにする。それは全世界に利益をもたらす、存在することが明らかな地球外諸文明との交信を可能にするだろう。

これらの宇宙兵器から誰が利益を受けるのか？ それに関連する領域の人々だ。軍事、産業、大学、研究機関、情報機関の人々。これは米国に限らない。世界中がそうだ。これは世界規模での協同体制だ。戦争とは協同的なものだ。それは平和が実現しても同じだろう。しかし、今の体制から利益を得ている多くの人々がいる。それがこの国の経済が基盤とし、世界中に拡散しているもの - 戦争だ。その結果、人々は苦しんでいる。これは正しいことではない。これまでも正しかったことはなかった。人々はこう叫んでいる。“剣を打って鋤の刃に変えよう。平和を実現し世界中と手を

握ろう”しかし、これがうまくいったことはない。あまりにも多くの人々が利益を得ているからだ。彼らは金銭的な利益を得ているだけではない。これは私の経験だが、アルマゲドン(\*世界最終戦争)の到来を実際に信じている人々がいるということだ。だから、これらの戦争が必要だと。

このように、それは財布から宗教右派にまで関係している：ある人は、こうした宗教上の理由で戦争が必要だと本当に信じている。戦争そのものが好きな人もいる。私はただ戦争に行きたいと思っている兵士に会ったことがある。また、命令を受けるだけの善良な人々、兵士たちがいる。彼らは子供たちを養い、大学にやるために職を失いたくない。研究機関の人々は私にこう言った。このような戦争のための技術を研究したくはないが、そうしないと給料を貰えない。彼らに給料を払っているのは誰か？しかし私の理解では、これらの技術には二重用途どころか、その同じ技術に対して多くの用途がある。

私たちは宇宙に病院、学校、ホテル、研究所、農場、工場を建造することができる。現実離れしていると思われるかもしれないが、そうしないと戦争基地と兵器を建造することになる。その兵器は私たちすべての喉元に向けられる。私たちはすでにその一部に着手していたようだ。今私たちには実現可能な選択肢がある。私たちのすべてが利益を受けるのだ - 軍産複合体、情報機関、大学、研究機関、米国、そして世界中の人々 - 私たちのすべてが利益を受けることができる。滅亡したくなければ他に選択肢はない。そして私たちは滅亡を望んでいないという事実の上に立ち、最高の意識と精神性をもって決意さえすれば、この産業の仕組みを容易に転換することができる。そうすれば、私たちのすべてが金銭的、精神的、社会的、心理的に利益を得ることができる；この策略を今すぐ転換することは、技術的にも政治的にも実行可能だ。そうすれば皆が利益を受ける。

私は 1977 年にフェアチャイルド社のある会議室で開かれた会合に出席していた。その部屋は戦略室 (War Room) と呼ばれていた。そこでは壁に敵、敵と認定された名前と共に、多くの図表が張ってあった。他にもまだ扱いはっきりしていない対象の名前、サダム・フセインとかカダフィなどの名前もあった。しかし私たちはそのとき、テロリスト、潜在的なテロリストについて話し合っていた。それまで誰もこれについて話したことはなかったが、これは宇宙兵器を建造するために必要な、ロシアの次の敵だった。この会合で私は立ち上がってこう言った。“ちょっと待ってください。建造する宇宙兵器の対象として、なぜ私たちはこれらの潜在的な敵について話し合っているのですか。彼らは今敵でないことをご存じでしょう？”

彼らは会議を続けたが、それはこれらの敵を怒らす方法、そしてある時点で湾岸に戦争、つまり湾岸戦争を起こすことに関するものだった。これは 1977 年、1977 年の話だ！彼らは湾岸地域に戦争を起こすことを話し合っていたが、このときまだそれとは確定されていなかった宇宙兵器計画には 250 億ドルの予算があった。少なくともそれは戦略防衛構想 (SDI) (\*1983 年にレーガン大統領により提唱された) とは呼ばれていなかった。1983 年まではそうだった。この兵器システムは、明らかにそれまでかなりの期間継続されていたが、これについて私は何も知らなかった。だから、私はこの会合で立ち上がって言った。“これらの敵に対する宇宙兵器について、なぜ私たちが話し合っているのか、その理由を知りたいと思います。このことについて私はもっと知りたい。どういうことなのか、誰か私に教えてくださいませんか？”誰も答えなかった。彼らはまるで私が何も言わなかったかのようにこの会合を続けた。

突然私はその部屋で立ち上がり、こう言った。“次世代の兵器システムを開発するのに必要な一定の予算があるときに、あなたたちは湾岸における戦争を計画している。その兵器システムは宇宙兵器が必要な理由を国民に受け入れさせる最初のものになるでしょう。戦争を計画している理由を誰も説明できないなら、私は辞任します。再びあなたたちに連絡することはないでしょう！”誰も何も言わなかった。なぜなら、彼らは湾岸の戦争を計画していたからだ。それは正確に計画どおりの時期に起きた。

**SG:** 誰がその会合に出席していたのですか？

**CR:** その部屋は転身ゲーム(revolving door game)に身を置く人たちでいっぱいだった。一度は軍服姿を見たが、別のときにはグレースーツや企業の服装という人たちがいた。これらの人たちは転身ゲームに興じている。彼らは顧問、企業人、また軍人や情報機関員として働く。彼らは企業で働き、これらのドアを通して政府の役職へ転身する。

この会合で私は立ち上がり、私の理解が間違っていないかと訊いた。宇宙兵器予算として 250 億ドルが使われており、次世代兵器を国民と政策決定者に受け入れさせるために、湾岸で戦争が故意に起こされようとしている。この戦争は古い兵器を放出し、まったく新しい兵器体系を構築するためのものだった。だから私はこの役職を辞めた。この企業のためにはそれ以上働くことができなかった。

1990 年頃だったが、私は居間に座って宇宙兵器の研究開発に使用された資金のデータを眺めていた。そして、それがあの数字、約 250 億ドルに達していたことを知った。私は夫に言った。“私は今何もしていない。私は今何もしないで座って CNN テレビを見ている。戦争が起きるのをただ待っているのよ” 夫はこう言った。“君はどうとう頭がおかしくなったな。どうかしてるよ” 友人たちはこう言った。“今度だけは君は度を越している。湾岸に戦争が起きる気配はないし、誰もそんなことは話していない”

私は言った。“湾岸に戦争が起きることになっているのよ。私はここに座って、ただそれが起きるのを待っているんだわ” そして、それはまさにスケジュールどおりに起きた。

湾岸での戦争ゲームの一部として、国民は米国がロシア製スカッドミサイルの撃墜に成功したと教えられた。私たちはその成功に基づき、新しい予算を正当化しようとしていた。しかし、次世代兵器のための予算が承認された後で、私たちはそれが嘘だったと知った。事実はそういうことだった。私たちが教えられたようにはその撃墜に成功していなかった。それはすべて嘘だった。もっと多くの金をその予算に盛り込み、もっと多くの兵器を製造するためだった。

私はロシアが‘キラー衛星’を持っていると言われた頃、単独で同国に行った者の一人だった。

[ポール・シス博士の証言を見よ。SG]

1970 年代の初期にロシアへ行ったとき、私は彼らがキラー衛星を持っていないこと、それが嘘だということを知った。実際、ロシアの指導者と人々は平和を望んでいた。彼らは米国および世界の

人々と協力したいと望んでいた。

サダム・フセインが油田に火をかけていたとき、私はサダム・フセインに電話したことがあった。私が電話しているとき、夫は台所にいた。サダム・フセインの近くにいた主席随員から折り返しの電話があり、こう訊かれた。“あなたは記者か？ 作業員か？ なぜ知りたいのだ？”

私は言った。“いいえ。私は宇宙の軍事化を阻止する運動の立ち上げを支援した一市民です。兵器システムと敵について私が教えられてきた多くの話は、事実でないことを知りました。これらの油田に火をかけるのを止め、人々と敵対することを止めるために、何をすればサダム・フセインは満足するのか、私は知りたいのです” 彼は言った。“そうか、今まで誰もそれを彼に訊いたことはなかった。彼が何を望んでいるかということ”

...

だから、私が地球外知性体による脅威の可能性を聞いたとき、それは嘘だと知った。なぜなら、私は数千年間続いてきたかもしれない ET 地球訪問の歴史を知り、軍、情報機関、企業の誠実な人々が、UFO について、その墜落と着陸について、地球外知性体の生存者と遺体について自らの体験を公表するのを聞いていたからだ。もし私が、これらが敵で宇宙兵器を向けるべき相手だと教えられたとしても、軍産複合体で兵器システムと戦略に取り組んだ個人的経験に照らし、それは嘘だと知るだろう。それは嘘なのだ。

私はそれを信じないし、出かけて行ってありったけの大声で、人々にそれを調べてみるように言うつもりだ。彼ら[ET たち]は私たちをさらってはいない。私たちは数千年間に及ぶ彼らの訪問を経てもちろんここにいる。もし実際に彼らが今も訪問し、私たちが被害を受けていないなら、私たちはこれを敵意のない出来事と見るべきだ。

私はこれらの地球外知性体と交信し協力するために働いている人たちと一緒に仕事をし、自分にできることは何でもしたいと思っている。彼ら(\*ET たち)が敵意を持たないのは明白だ。私たちはここにいる。これこそが十分な証拠ではないか。

この惑星上での生き方を選ぶことには何の制約もない。それを選択する機会が私たちには与えられている。しかし、その窓は急速に閉じられつつあると思う。私たちにその決心をするための時間が多くあるとは思えない。私たちはあまりにも多くの危険な道に接近し過ぎている。その道は何らかの恐ろしい災害に、進歩した技術か新種の兵器かはともかく、それによるある種の戦争の発生につながっている。

私たちにはリーダーシップが必要だ。まずは米国大統領から始めなければならない。私たちすべてがその心に影響を与えるべき人、それが米国大統領だ。あなたが国際人でも、他国にいる人でも、米国にいる人でも、どの政党どの宗派の人であろうと - 米国の最高司令官である米国大統領こそが、その心を動かされるべき人なのだ。すべての宇宙兵器の最終的で包括的かつ検証可能な禁止を望んでいると、私たちは言う必要がある。

**“B 博士”の証言**  
**Testimony of “Dr.B”**

2000 年 12 月

“B 博士”は、そのほぼ全生涯を極秘プロジェクトのために働いてきた科学者であり、技術者だ。彼は多年にわたり、反重力、化学兵器、防御された遠隔測定および通信、超高エネルギー宇宙レーザーシステム、電磁パルス技術といったプロジェクトで当事者として働いたり関わったりしてきた。“B 博士”は、あるグループがこれらの宇宙兵器を用いて、地球外宇宙機とその搭乗者たちを撃墜したことを直接に知っている。少なくとも一度の機会に、彼は地球外宇宙機を直に目撃した。

DR. B: “B 博士”                      SG: スティーブン・グリア博士

**DB:** . . . ロックウェル社の契約で NASA に来る前、まだオートネティックスにいた頃の話だ。私はアイグラス(EYEGLASS)と呼ばれるプロジェクトで働いた。プロジェクトは 10 億ワットのレーザーシステムに発展したが、それは宇宙から発射して異星人を撃墜するために使うものだった。私はそれを見たことがある。私はそのプロジェクトで働いた. . .

**SG:** 我々が実際に ET 宇宙機を標的にして攻撃したことがあると言っているのですか？

**DB:** そのとおりだ。間違いない。

私にはノーム・ヘイズという友人がいる。彼は今この通りに住んでいる。彼もロケット科学者だが、実際にレーザー分野に関わっている。

我々はこれらのシステムを 1962 年、1963 年に開発した。それは 1960 年代に実に強力になっていた。

**SG:** れがどのようなものか、説明してください。

**DB:** それはプラズマと呼ばれている。それは電子プラズマ光線と呼ばれている。

**SG:** それらは宇宙に設置されているのですね？

**DB:** そう、そのとおりだ。それらは宇宙に設置されている。しかし今は 747(\*ボーイング 747 機)にも積まれている。1 年ほど前、ポピュラーサイエンス(Popular Science)誌の表紙にもあった。それは彼らが開発した新しいレーザープラズマ装置だった. . .

私はロサンゼルスにあるヒューズ社の施設で働いたことがある - 一つはここフラートンにある。当時、私は両方の施設で多くの極秘プロジェクトに取り組んでいた。

**SG:** 何をしていたのですか？

**DB:** 反重力だ。実際、私はマリブ(\*ロサンゼルス近郊)にあるヒューズ社に出かけていったものだ。彼らはそこに大きなシンクタンクを持っていた。巨大反重力プロジェクト；私はそこで彼らに話をし、アイデアを与えた。なぜなら、彼らは私のすべての装置を買い取ったからだ。

しかし、米国民はそれについて決して、決して知ることはないだろう。

私には航空宇宙分野で働いている仲間たちがいる。我々は時々小さな会合を持つ。そのとき、私の友人の一人は円盤を飛ばした。あなたは多分その円盤を見たことがあるだろう。ご存じエリア 51 からだ。

この空飛ぶ円盤は小さなプルトニウム反応炉を内蔵している。それは電気を発生し、これらの反重力円盤を駆動する。我々には次世代の推進装置もある。それは仮想フィールドと呼ばれ、それらは流体力学波と呼ばれる...

私は、この反重力推進問題を人々に話していただけではない、フォン・ブラウンにもそれについて話していた。ご存じのように、私はよく喋る。そのときはもっとそうだった。

さて、我々がサターンロケットを格納庫から引き出していた最初の夜、私は揺り起こされた。私はコンピューター操作卓に座り、よく眠っていた。明け方の 4 時に、技術者の一人が近寄ってきて私を揺り起こした。“B 博士、外に来てください。何か大変なことが起きています” 今起こっているというのだ。“何だ？ 一体何が起きているんだ？”と私は言った。彼らはちょうど鳥[サターン]を引き出し、皆で写真を撮っていた。そのとき、1 機の大きな円盤がカリフォルニア州シールビーチに降下してきた。それが空中静止している写真を私は持っていないが、その降下した円盤を 400 人の従業員が見た。それは 1966 年の 4 月頃、早春の朝 4 時だった。

**SG:** どのようにしてこれが完全な秘密にされてきたのですか？

**DB:** 一緒に働いていた何人かの人がある計画の途中で消えてしまい、消息を絶ったことを私は知っている。彼らは文字どおり消えた。私の仕事の全期間を通じてその証拠がある。その人たちはプロジェクトのために出ていった[そして消えた]。しかし、[これから身を守るために]私はプロジェクトのためにどこにも行こうとしなかった。何か奇妙なことが起きていると分かったからだ。そうして、多くの人々が本当に消えてきたのだ。彼らは上の人たちだ...

誰が[ホワイトハウスの]中にいるかは関係ない。なぜなら、産業界が今これを支配しているからだ。特別利益団体 - それは現在この国のすべてを動かしている基盤だ。

**SG:** 特にどの業界ですか？

**DB:** どの業界かって？ 石油業界だ...

米国海兵隊上等兵 ジョナサン・ウェイガントの証言  
Testimony of Lance Corporal Jonathan Weygandt, USMC

2000 年 10 月

ジョナサン・ウェイガントは 1994 年に海兵隊に入隊した。麻薬取引探査レーダー装置の周辺警備のためとしてペルーに駐在していたある夜、彼は二人の軍曹と共に、森の中の墜落現場と思われる場所を確保するように命じられた。彼らが現場に到着すると、峡谷の斜面に 20 メートルの卵形 UFO が埋まっていた。彼はその墜落機から呼び戻され、逮捕され、手錠をかけられ、脅迫され、ひどい訊問を受けた。その中の一人が彼にこのようなことを言った。訊問者たちは基本的に彼らの好きなようにし、憲法には何ら縛られない。ウェイガントは、この UFO が HAWK ミサイルによって撃墜されたと信じている。

JW: ジョナサン・ウェイガント海兵隊上等兵

SG: スティーブン・グリア博士

**JW:** 私は高校在学中の 1994 年 7 月に、予備入隊制度により海兵隊に入隊した。もちろんそれは、約 1 年間の予備入隊だった。私は 6 月 18 日に新兵訓練キャンプに行き、卒業は 1995 年 9 月 8 日だった。そこを出てからの私の職能区分 (MOS) は 0311、つまり歩兵だった。

1996 年 1 月も終わりの頃、私は新しい命令を受け、新しい職能区分を与えられた。今度は 7212 スティンガー・アベンジャー (\*対空ミサイルシステム) の任務だった。こうして私は FIM92 アルファ・スティンガー・ミサイルシステムの防空射撃手になるための訓練を受けた。これは地対空ミサイルで報復兵器だった。訓練は 1996 年の 2 月から 5 月下旬まで行なわれた。

その学校を卒業した後、最初の任地として配属されたのは、第 2 海兵航空団、第 28 海兵航空管制群、ノースカロライナ第 2 防空大隊部隊だった。私は 1996 年 6 月に B 砲兵隊に任命され、幾つかの Ops、つまり作戦に参加した - 我々は作戦を Ops と略称する。基本的にその所属のまま、1997 年 2 月にはレーザー攻撃部に移った。そこから戻ったとき、私は“行きたいか”と訊かれた。私は“行きたい”と答えた。こうして私は志願してその部に送られ、我々はその年の 3 月にペルーに向けて出航した。

我々がそこに送られたのは、このレーダー装置の周辺警備のためだった。基本的にこのレーダー施設は、ペルーとボリビアの領空を出入りする麻薬輸送機を追跡しているということになっていた。ある夜のこと、アレン軍曹とアトキンソン軍曹が我々の所に来てこう言った。“よく聞け。航空機が 1 機墜落した事態になっている。おそらくそれは敵ではない。我々は墜落現場に出かけてそこを警備することを要請されている” これは深夜の 11 時か 12 時のことだ。

その夜私は警備勤務だったため、このときすでに起きていたし、私の勤務時間でもあった。こうして我々は朝の 3 時か 4 時頃に起き、5 台か 6 台のハマー (\*オフロード車) で出かけた。我々はまず行くべき所まで走行し、そこからは茂みをかき分けて進んだ。そこには 6 時か 7 時頃着いた。ちょうど夜が明け始めていた。

さて、そこはとても容易に見つかった。なぜなら、その何かが墜落した場所には巨大な裂け目があったからだ。そこでは何も破壊されていなかった - 普通なら墜落現場には真っ二つに折れた樹



木などが散らばっているものだ。すべてが焼け焦げており、ちょうど温かいバターをナイフで切り裂いたような光景だった。それは燃えていた何か、またはレーザーに似たエネルギーが切り裂いたような光景だった。とても異様だった。とにかく、私はアレン軍曹、アトキンソン軍曹と一緒に一番前にいた。我々は他の人々よりも 10メートルか 20メートル先にいた。全員が地図と無線とコンパスを持ち、迷わないようにしていた。

この物体を見たのは我々が最初だった。それは丘を駆け上がり、峡谷と尾根の側面で停止していた。尾根は少なくとも約 200 フィートあり、硬い岩だった。それは断崖の側面に埋まっていた。とにかく、そこには真っ直ぐ登って行けなかったので、我々は左側に回って尾根の頂上まで歩いた。我々が墜落した航空機を間近に見たのはそこからだった。

これは巨大な船体だった。それを初めて見たとき、私は恐怖を感じた。ひどく怯え、どうしてよいか分からなかった。私は本当に混乱していた。我々は全員で尾根を降りたが、それは尾根の所で断崖の側面に約 45 度の角度で埋まっていた。これは急峻な断崖で、切り立っていた。その船体からはシロップに似た液体が滴っており、そこら中に飛散していた。液体は緑がかかった紫色で、揺らんでいるようだった。それは見ているとまるで生き物のように変化し、そのたびに緑がかかった紫色がその色調を変えた。

船体の上には 1 個の照明があり、ゆっくりと回転していた。私はこの機械の音を聞くことができた。なぜなら、それはまだ作動しており、ブーンという唸り音を発していたからだ。まるでギターからアンプのコードを引き抜いたときのような太い低音で、振動していた。やがてそれも止み、すべてが停止したようだった。

その航空機は埋まっていたので、私はその上面部を見ていた。そこには大きな通気口のように見えるものがあった。背中に開いた魚のエラのようだった。反対側は見えなかったが、そこも同様だろうと私は推測した。船体から流れ出していたあの液体だが、私の迷彩服に付いてそれを変色させ、酸のようにそれを溶かした。それは私の腕の毛を何本か溶かした - それに気付いたのは後になってからだ。

私は船体まで降りていた。そこには三つの穴があった。私はそれらをハッチだと考えたが、どう言い表せばよいか。それらはその航空機の主要部と同一平面にはなく、分からないが、数インチだけ下がっていた。頂部にも一つあるのがわずかに見えていた。反対側は知らない。頂部のものと同じ幅と直径を持つハッチがもう一つあり、それは側面に向かってやや湾曲しており、半開きだった。そこに照明などは何も見えなかった。しかし、私はこれを感じた... 何者かの存在を。

それはまったく見たことがないものだった。その生き物たちは私を落ち着かせたようだ。おかしな感じだった。彼らはテレパシーで私と交信しようとしていたように思える。実に奇妙で、私ならこんな話は信じない。それはちょうど車に座って雑音ばかりの AM 放送をつけ、その音量を上げたような感じだ。私が最初にその中に入ったとき、聞いたものがそれだった。

その船体は幅がおよそ 10メートル、長さが 20メートルだった。私の記憶から推定した大きさだ。それは巨大で、卵と涙のしずく形との中間のような形をしていた。それは、少なくとも形において実

に空気力学的だった。私は近くでその表面を詳しく観察したが、滑らかではなかった。表面には隆起や溝などがあった。実に有機的で - ほとんど芸術のようだった。それは誰かがアトリエで何かの物質から手づくりしたものようだった。しかしその物質が何なのかは知らない。明らかにチタニウムのようにではなかった。

それは金属に見えたが、光を反射していなかった。陽光を浴びていたが、その明度は普通と異なっていて何も反射していなかった。たとえフラッシュライトを当てても反射しなかっただろうと思う。

私は内部に入りたかった。なぜなら、誰か - その生き物たちが私に助けを求めているように思えたからだ。何の問題もなかった。私は誘われるようにその中に入りかけた。すると突然、アレン軍曹とアトキンソン軍曹が私に向かって、そんな所からは出てこいと怒鳴った。

**SG:** なぜですか？

**JW:** 彼らは怯えており、私が危害を受けるのを望まなかったのだと思う、分からないが。私のことをとても怒っていた。起きたことを簡単に言うなら、我々がそこから登って戻ったとき、そこには DOE, エネルギー省の人々がいたということだ。彼らはこのことを知っていた。だから、なぜ我々がそこに行ったのか、今でも分からない。しかしとにかく、私は拘束され、黒い迷彩服の男たちによって装備をすべて外された。彼らは 30 代後半から 40 代の年配者たちで、名札を付けていなかった。私はその場所におそらく 15 分か 20 分はいた - そこに着いたのは我々が最初で、それから他の人々が現れた。彼らは防護服を着ていた。彼らはそこに着いたばかりだったに違いないが、確かではない。なぜなら、我々は峡谷に降りていたからだ。我々が登っていったら、そこに黒い迷彩服の男たちがいたのだ。彼らは私を連行し、キャンプベッドに押し込んだ。それから私に手錠をかけ、両手を降ろさせ、警察が使うプラスチック製の締め具で両足を縛った。それらも手錠の一種だ。そして私をこの巨大な 47 (\*巨大輸送用ヘリコプター CH-47 と推測される) に連れ込み、離陸した。

**SG:** なぜあなたをそのように扱ったのか、彼らは説明しましたか？

**JW:** いや、彼らは私を“間抜けな野郎”と罵った。“どうしてお前は命令に従わなかったのだ？” “お前はそこにはいってはならなかった” “お前はこれを見てはならなかった” “お前を行かせたら危険だ” 彼らは実際に私を殺そうとしていたのだと思う。

私が拘束されていた時間、つまり押し込められていた時間だが、よく覚えていない。2 日間くらいだったと思う。そこには空軍から来た一人の中佐がいた。彼は名前を名乗らず、私にこう言った。“もし我々がお前をジャングルに連れ出したら、誰もお前を見つけれないだろう”

[それより 50 年前にロズウェルでグレン・デニスを受けた脅迫との類似性に注目せよ。SG]

私は彼が本当にそうするかどうか確かめたくなかったのですが、ただこう言った。“はい”すると彼は、“お前はこれらの書類にサインしなければならない。お前は決してこれを見なかった”と言った。お前はそこに“いなかった”し“これは決して起きなかった”。もしお前が誰かに喋ったら、ただの失踪という

ことになるだろう。

彼は実に意地が悪く乱暴だった。まさに世を拗ねた最低の人間という言葉がふさわしい。私は空軍の隊員と一緒にほぼ 3 週間隔離され、その後に戻された。

この施設には米国人がいたが、他国人も大勢いた。中国人がいたし、ドイツ人もいたと思う。大勢の人間が、このもう一つの基地にいた。彼らがしたことは、私を訊問室に連れていくことだけだった。

よく覚えていないが、私はそこに照明をつけたまま 15 時間はいた。彼らはこの照明を私の顔に照射し、大声で怒鳴った。これらの男たちが何者か、容易に確認はできなかったが、その中の一人は墜落現場にいた者だった。というのは、その男には見覚えがあったし、彼は黒い軍服姿だったからだ。彼はこう怒鳴っていた。“お前は何を見た？”まるで唸り声だった。続けて“お前は愛国者か？ お前は憲法が好きか？”。私の答えは“はい”というようなものだった。彼は“我々は我々の原則で動いている。我々が従うことはない。思いのままにやる”と言った。彼らは怒鳴り立てながらそれを楽しんでいた。私に向かって怒鳴り、大声を上げ、悪態をついた。“お前は何も見なかった。我々はお前と忌々しいお前の家族に何でもするぞ”

この状態がおおよそ 8, 9 時間続いた... “お前を連れ出してへりに乗せ、尻を蹴飛ばしてジャングルに突き落とし、お前を殺す” 彼らは私の身体に手出しをしなかったが、私は椅子に縛り付けられて座っており、身動きできなかった。だから、要するにこれは脅迫だった。私はまる一日何も食べなかったし、水も飲まなかった。まったく何も口にせず、ただそこに座っていた。

そのグループ、つまり私が所属する班には八人から十人いたが、私とアレン軍曹とアトキンソン軍曹だけがこの船体を見た。我々だけがそれを見た。一方、他の仲間たちはジャングルを切り裂いている墜落現場を見た。彼らはそのすべてを見たが、尾根には行かなかった。すでに述べたように、我々は彼らより 10 メートルから 20 メートル先にいて、それを見つけたこと、すべてが順調であることを無線で通報した。この事件が起きたのは 1997 年の 3 月末か 4 月初めだった...

米国に戻ったとき、私はこのことを話すためにアレン軍曹に近づいた。彼は結婚し、二人か三人の子供がいた。私が基地にある彼の家に行くと、彼はとても取り乱し、私を家から追い出した。彼は、それについては話したくないと言った。これらの人々も脅されていたようだ。軍にいる限り私が話せないことを、あなたは理解するはずだ。海兵隊ではすべてが一枚岩だ：彼らは何かをやれと言われたら、それをやる。それに従いたくない者がいても、基本的には強制的にそれに従わせる。

私はそれについて黙っていたくはなかったので、パウエル前任曹長に話した。彼はもうそこにはいないと思う。我々が話し合ったのは 3 年前だ。

私には何の破片も見えなかったが、その航空機(\*UFO)の後部に大きな傷があった。それは地对空ミサイルで攻撃されたような傷だった。そこには数隊の HAWK (ホーク) 砲兵隊がいた。つまり Homing All the Way Killers - それは低高度から中高度までの対空ミサイルだ。

それは基本的に、標的を破壊するために標的に命中する必要はない。やることは、標的の近くに到達することだ。爆発力の強い破片弾頭が、標的とする点の近傍で大きな散弾銃のように爆発し、その飛散した破片が標的を破壊するか、もはや機能しないまでに損害を与える。だから、私はそれが撃墜されたのだと考えている。

起こったのはそういうことだと思う。我々がそれを撃墜した。[レーダー施設にいた]他の連中は、それが飛行していたことを知っていた。私もこれらの航空機が飛行していたことを知っていた。なぜなら、私はレーダー装置があるその司令部にいたことがあり、その空軍の女性隊員が何人かで話しているのを聞いたからだ。彼女たちは、マッハ 10 以上で大気圏に出入りする航空機について話していた。だから、これらの航空機はその周辺を飛んでいて、大気圏に再び入ってきたのだ。上層部はそれを知っていたと思う。

この航空機は地球のものではなかった。スティンガー学校ではあらゆる種類の航空機について教わる。だから私は多くの航空機を知っていた。それを見て私が言ったのは、基本的にこういうことだった。“これは私が知っているものではない”

一般的に、レーダーは丘の上にあって回転しており、その地下に司令壕が建設されている。その中はスターウォーズのようだ。完全に空調され、とても快適だ。そこにはコンピューターがあり、レーダーを制御する制御盤がある。推測だが、それらは他のサイトと連結されており、他からのデータが入ってくる。

ある夜、私はそこにいて入退出する人々をチェックしていた。彼らは ID (身分証明書) を持っているので、私はそれをチェックする。そのとき、女性隊員二人がこう話しながら出てきた。“また例の航空機を捕捉したわ” “そう、連中は大気圏を出たり入ったりしている” 彼らはこうした飛来をすべて記録する。後で男が一人やってきて日誌を集める。私の役目は、彼がそのすべてを持っていくのを了承することだった。

物体が大気圏に再び入ってきて、いきなり停止する。向きを変えて正確に反対方向に進む - 奇妙な飛び方だ。流星はそんなことをしない。

**SG:** これは稀なことですか。それともいつも起きていたことですか？

**JW:** いつも起きていた。私の勤務中に同じ空軍将校がやってきて日誌を集めていったことが 3, 4 回あった。だから、これらの航空機はまさにこのレーダーで追跡され、記録されていたのだ。彼らがそれを持ち去るのは、これらの航空機を追跡していることを他に知られたくなかったからだとも私は考えている。私はそう見ている。

だから、彼らはこの航空機が飛来したことを知っていたと思う。それは識別できない航空機で、この領空を侵略している。彼らはペルー軍に無線で通報し、排除するように言い、撃墜したものだろう。私はその航空機 (\*UFO) を初めて見たとき、こう確信した: それは何かによって攻撃されていた。何かそれが破壊した。

私がこうしているのは、金を儲けたり有名になったりするためではない。これは人々に語られる必要があると思うからしているのだ。人々はそれを聞く必要がある。私の言うことに同意するかどうかは少しも重要ではない。

それは地球のものではない。私はそれを見たときにそのことを知った。あれらの施設は UFO、つまり別の物体を追跡する意図を持って建設されたのではないか。そしてその口実が、麻薬輸送機の追跡ではないのか。私には知る由もない。しかし私の理解では、彼らは単なる麻薬輸送機の追跡よりも遙かに多くのことをしている。そこにはレーザー距離計や、私が今まで見たこともないあらゆる種類の先端機器があった。それを私が説明できるはずもない。それら[レーザー距離計]は大きな望遠鏡のようだった。地下壕に設置されているが、地上に上昇し、急速に展開する - 実に奇妙な装置の一群だ。

私が連行された基地は、間違いなく NATO(北大西洋条約機構)か何かの国際協同施設だった。私はそれを思い返し、まだ考え続けている。なぜこれらの人々がここにいるのか？ なぜ中国人が米国に密輸される麻薬に関係しているのか？ 我々の政府が麻薬密輸を行なっていることを、私は事実として知っている。この司令部は常設されていたのだと思う。この活動は長い間行なわれてきた...

墜落現場には、防護服を着た人々が少なくとも 30 人はいた。私が連れ去られるとき、彼らはそのすぐ脇を前進していた。彼らはその断崖を降りるために前進していた。おそらく、この物体を調査するためにそこにいたのだと思う。彼らはその中に入っていき、あらゆるものを持ち出し、持ち帰ったのではないか。

これらの人々の振る舞いは、まるでそれがいつもの仕事で、その準備ができていたかのようだった。彼らは自分たちがしていることを正確に知っていて、予めこの種の仕事をやる訓練を受けていた。雰囲気はそのようだった。職業意識の強い、冷静で控え目な感じだ。我々は一仕事するためにここにいる。道を空ける。それが基本的な態度だった。

[1970 年代と 1980 年代にこのような回収チームで働いたクリフォード・ストーンの証言を見よ。SG]

このことがあった後で、私は正気を失いかけた。

**SG:** どうしてそうなったのですか？

**JW:** 私はキリスト教徒として育てられた。神は存在し、宇宙のすべてを創造したと信じるようになった。そしてここにその神の創造物がある - 私がこれまで見たことがなく、今こうして目の前にいる生き物たち。この遭遇のために、私はもう少しで気が狂うところだった。自暴自棄にはならなかったが、私は自分の知っていることをすべて評価し直さなければならなかった。ちょうどあなたが子供の頃、サンタクロースはいると教えられてきたが、実はいないと知ること似ている。知ったからには後戻りはできない。

否定のしようがない。“私は実際にはこれを見なかった”とは言えない。私は何をすればよいか？ 誰かに話すか？ ひどいジャングルの中で一人の海兵隊上等兵がこのような航空機を見るなどということを誰が信じるか？

もしそうしなければならないなら、今すぐこれらの生き物たちと一緒にいきたい。私はこの妄想に取り憑かれたが、それは海兵隊での苦痛と経験のゆえだったかもしれない。しかし、私はただ脱出したかったし、これらの生き物たちと一緒にいて、彼らと共にここから逃げ出したいと考えていた...

*[空軍兵バローズに関するラリー・ウォーレンの証言を見よ。そして英国ベントウォーターズ空軍基地での遭遇の後で彼がいかに反応したかを。SG]*

これらの様々な機関は独立している。彼らは法に従わないならず者だ。これが政府によるプロジェクトで、皆が認めるものかって？ 違う。この連中は勝手に行動しているだけで、誰もそれを知らない。今の世の中で、それはこんなにも簡単なことなんだ。何の監視も何の統制もない。彼らはまったく好き放題にやっているんだ。彼らは邪悪だ。これらの人々は悪魔だ。これがビル・クリントンや議会と関係があると考えられるか？ それについて知っている連中がいる。しかし彼らは何も話そうとしない。もし彼らは何かを話すとするれば、それは関係を絶ったときだ。

殺人を請け負う、恐ろしい部隊が動員されてきた。知らない人もいるだろうが、私は海兵隊の狙撃手のことを知っている。他の誰かがそれについて話しているのを聞いたこともある。これらの連中は街に出ていってこっそり人の後をつけ、殺す。陸軍空挺部隊の狙撃手も同じことをしている。彼らはデルタフォース(\*陸軍特殊部隊)を使い、これらの人々を捕捉し、殺して黙らせるのだ。これが行なわれるとすると、彼らは必要な資金をどこから調達するか。とても簡単だ。彼らは武器を売るし、麻薬も売る。この商売の多くは特殊作戦を使ってこうした際限のない金を得るものだ。それは政府の金庫から来るのではない - それは麻薬や武器の密売によりもたらされる - 兵器でも何でも売るので。

私は名誉除隊に値する生き方をしてきたが、マリファナを吸ったことを告白して海兵隊を去ることができた。私は辞めたかったので、彼らにそれを告げたのだ。辞める方法は二つあった： そう言うか、あるいは同性愛者だと言うかだった。それはあまりよくは思われなかつただろう。それで私はパウエル先任曹長の所に出向き、辞めたいが一番手っ取り早い方法は何かと訊いた。そうしたら彼は“マリファナを吸ったと彼らに言え。一度マリファナを吸ったとだけ言え”と言った。私がそう言うと、彼らは犯罪捜査部(CID)の職員を私の所に來させた。私は訊かれてこう答えた。“はい。私はマリファナを吸いました。私はそれを一服し、肺に吸い込みました” 私は辞めたくてたまらなかつた...

米国空軍少佐 ジョージ・A・ファイラー三世の証言  
Testimony of Major George A. Filer III, US Air Force

2000年11月

ジョージ・ファイラー少佐は空軍の情報将校だった。彼は英国上空の巨大 UFO にレーダー上で遭遇するという異常な体験をしただけでなく、その後 1970年代にニュージャージー州マクガイア空軍基地にいたとき、地球外生命体がフォートディックスで撃たれたことを知った。その地球外生命体は隣接するマクガイア空軍基地まで逃れてきて、そこの滑走路上で死んだ。彼の証言によれば、この生命体は引き取られてライト・パターソン空軍基地に運ばれた。その後、この事件に関係した基地の主要職員の多くが、素早く異動させられた。ファイラー少佐は、嘲りという要素が ET や UFO を見た人々を黙らせ、秘密を守るためにとても有効だと指摘する。

GF: ジョージ・ファイラー少佐

SG: スティーブン・グリア博士

**GF:** 私の名前はジョージ・ファイラー三世だ。私は米国空軍に勤務し、最終階級は少佐だった。空軍では様々な航空機や空中給油機の航法士を務めた。また、その経歴の大部分を情報将校として過ごし、その間に我々の能力と軍に対する脅威について、しばしば将軍や国会議員たちに説明をした。

さて、私は説明将校だったので、朝の 4 時頃に職場に来るのが常だった。1978年 1月 18日の朝、私はマクガイア基地正面ゲートを通り、車を走らせていた。そのとき、滑走路の上に赤い光体群があるのに気が付き、多分そこで何かが行なわれているのだろうと思った。[私は]第 21 空軍指揮所に着くまでそのことをあまり考えなかった。そこが私の職場だった。私は第 21 空軍の情報副部長だったが、そこではミシシッピ川からインディアナ州にかけての地域で、大統領と様々な要人たちを運ぶ軍用機の半数を管理していた。我々は約 300 機の航空機を持っており、あらゆる種類の飛行任務を行っていた - 軍用空輸に関わるほとんどすべての任務を遂行していたのだ。

この朝私が指揮所に着くと、指揮所長がこう言った。昨夜は大変な騒動があった - マクガイア基地上空に夜通し複数の UFO が飛来し、そのうちの 1機がフォートディックスにどうやら着陸、おそらくは墜落した。一人の軍警察が異邦人(エイリアン)に出会い、銃を抜いて彼を撃ったと。それで私は、外国人という意味の異邦人ですか? と訊いた。彼が異邦人と言ったので、私は少し混乱していたのだ。すると彼は“そうじゃない。宇宙から来た異邦人だ”と言った。彼はフォートディックスで異星人が撃たれたこと、その異星人は傷を負って走り去り、マクガイア基地に向かったということを、とても具体的に語った。マクガイア基地とフォートディックスはフェンス一つで隣り合っており、この異星人は明らかにフェンスをよじ登ったか、その下をくぐったかしたのだった。そしてマクガイア基地に入り、滑走路の端で死んだ。保安警察がそこでこの遺体をいわば確保し、警護していた。彼によれば、ライト・パターソン基地から C-141(\*輸送機)が来て、その遺体を引き取ったということだった。それを聞いて私は立ち上がった。なぜなら、ライト・パターソン基地が C-141 を持っているとは知らなかったからだ - 私は C-141 を持っているのは空輸軍団だけだと思っていた - だから私は、一体ここで何が起きているんだ? と思ったのだ。彼は私に“今朝の起立全体説明会の場で報告を行ない、何が起きたかを皆に説明してくれないか”と言った。それで私は、トム・サドラー将軍と指揮所の皆に、異星人を捕まえたと言えよいかと訊いた。

彼らは“そうだ。今朝そのことを[彼らに]報告してほしい”と言った。私はあちらこちらを少し調べてみた。まず第 38 空輸飛行隊指揮所に電話をし、その話が私が聞いたものと同じかどうかを確かめた。彼らは、確かに同じ情報を聞いたと言った。これは実際に起きたことだと彼らは言った - 基地で一人の異星人が見つかったのだと。

その朝遅くになって、彼らは私に、起立報告会での説明はしないことに決めたと告げた。だから私は実際にはそれを説明しなかった。その朝遅く、私は暗語 (code word) を持ってサドラー将軍の事務所まで行った。そこでは何か動揺が起きていた。保安警察が何人かおり、髪や服装がかなり乱れていた。サドラー将軍は誰に対しても身なりにうるさかったので、これらの人々が明らかに無精髭を伸ばし、疲れた様子だったのは驚きだった。こうして私は、彼らがこの事件に対処していたことを知った。

報告会の後で、私は暗室に行った；私はほとんど毎日暗室に行っていた。というのは、これらの報告会では四つのスクリーンが用意され、それをきれいな写真などで埋め尽くさなければならなかったからだ。そこで彼らは、何か異常なものを撮影したと言っていた。ではそれを見せてほしいと私は言った。軍曹がそれらを私に渡そうとした。しかしそのとき、曹長が“彼にそれを見せてはならない”と言ったのだ。だから、私が知っているのは、私が見てはならない何枚かの写真を彼らが持っていたということだけだ - しかし通常なら、将軍への報告者である私は、彼らが持っていたどんな写真でも見るのを止められることはなかった。

それはとても重大な作戦だった。基地には核兵器貯蔵施設があった - ここからヨーロッパへ核兵器を運んだり持ち帰ったりしていた - 私は現場にいた[と言っている]保安警察の一人と話をした。彼が見たのは小さな遺体で、子供のように見えた。しかし頭部は普通より大きかった。

注意を引いたのは、当時この事件に関係した鍵を握る基地要員 - 指揮官からその部下たちまで - の多くが、素早く異動させられたことだ - 何かを知っている一団の人々がいたら、彼らはそれをいわばバラバラにし、それについて話せなくなるようにするということだった。これはものの数週間のうちに行なわれた。その保安警察官は、数日以内に異動させられたと私に語った - 実際のところ、彼は 1 日か 2 日のうちにライト-パターンソン基地に連れていかれ、何人も人間から事情聴取され、基本的にそのことについては今後一切話すなと命じられた。

彼らは、この成り行きを無線で聞いていた。追跡が行なわれ、その異星人がフォートディックスで撃たれたことを。彼らはそれをマクガイア基地に向かって追跡した - 何らかの理由でそれはマクガイア空軍基地に向かうことを選んだ - 州警察と軍警察の両方が、UFO とと思われる物体から出てきたこの異星人を追跡していた。私が理解したところでは、それは円盤型の航空機だった。

彼らは私にこのようなことを言った。その晩、その UFO 群はとても頻繁にその地区に出現した。彼らは[それらを]レーダーで捕捉し、管制塔員もそれを見た。その地区にいた航空機の何機かも、どうやらそれを見ていたようだ。

その遺体を警護して六人ないし八人がそこにいた；それから保安警察の指揮官と[この事件を



知った]指揮所の要員が何人か現れた。サドラー将軍はその説明を受けていただろう。

**SG:** あなたが軍にいた間に知った他の UFO 事件がありましたか？

**GF:** 私はホワイトサンズで技術者として働いていた一人の女性と偶然居合わせたことがあった。彼女はある日ハイキングをしていた。彼女が私に語った話はこうだ。彼女と友人二、三人がある丘の頂上に登った。彼女たちはこの谷を上から見下ろしていたが、下からはその頭だけが丘の頂上に見えているという状況だった。彼女たちが、まったく何気なしに登ってきた道を見下ろしていたそのとき、地上にある 1 機の UFO が目に入った。そばでは二、三人の小さな異星人が岩などを拾い上げていた。彼女たちはそれをかなりの時間見つめていた。それはほんの数百ヤードしか離れていなかったのもので、とてもよく見えた。ようやく異星人たちも彼女たちを見つけ、すぐに宇宙機に飛び乗り、飛び去った。

私自身は 1962 年頃まで何も見たことがなかった。このとき我々は、空中給油機で英国上空を飛行していた。ロンドン管制から 1 機の UFO を迎撃してほしいと要請が入った。我々はちょうど給油任務を終えていたので、その要請を受け入れた。そのときは北海上空だったが、彼らは英国中心部まで飛行するように要請してきた。我々は時速約 400 マイルで急降下し、この物体の迎撃に向かった。彼らは機首方位を教えたが、UFO はストーンヘンジ地区のあたりでほぼ空中静止していた - 我々はストーンヘンジ地区まで約 20 マイルから 30 マイルのオックスフォードにいた。私はそれをレーダーで捉えた。とても大きなレーダー反射だった。

我々はよくフォース湾(\*エジンバラ近くの湾)のフォース橋近くの上空を飛行する。それはサンフランシスコ橋のようなものだ - とても巨大な橋だが、その UFO からの反射は大きさや強度においてその橋と似ていた。つまり、それはとても大きなレーダー反射だった。明らかにロンドン管制はそれをレーダー捕捉しており、我々をこの物体に誘導していた。我々が UFO から約 1 マイルまで近づいたとき、それは発進して宇宙へ飛び去った - 時速数千マイル、ほとんど真っ直ぐに上昇した。正直に言うと、少なくとも私の知る限り、あれほどの性能を持つものを我々は持っていなかった。

私の最も妥当な推測では、それは平べったい円盤型だった - 少なくとも、何かこのような発光源が上部と底部にあった。その物体はただの扁平な皿型ではなかった; その上部に 1 個のドームを持っていた。

レーダー反射が正しかったとすると、それはおそらく端から端まで 500 ヤードはあっただろう - つまり、巨大物体だった。我々はそれを飛行日誌に書いた。

私は今住んでいるここでも 1 回目撃した。ここはニュージャージー州メドフォードにあるブライアークレイクだ。我々はここに越してきたばかりで、就寝中だった - 朝の 3 時頃だったと思う。妻と一緒に就寝していた - そのとき突然、部屋が深夜にもかかわらずとても明るくなった。私はベッドから飛び起き、日よけを開け、外を見やった。普通の人は潜水艦が水面を盛り上げて浮上するところを見たことがないだろうが - これは浮上している直径約 30 フィートの円盤のようで、それから水が流れ落ちているように見えた。

その宇宙機の周囲はイオン化されていた - 北極光にととてもよく似ていた。それはしばらく湖を横切り、それから猛スピードで飛び去った。そのことがあったので、私は多くの隣人たちと一緒に調べてみた。いかに多くの人々が実際にこれらの湖で宇宙機を見ていたか、それは驚くべきものだった。

また、私は時々、世界中で起きた UFO 目撃について将軍たちに説明を行っていた。印象に残っているのは 1976 年 - テヘラン(\*イランの首都)の近くで起きた有名な遭遇事件だ。

その頃この大佐が、F-106(\*迎撃戦闘機)が最高速度の世界記録を打ち立てたと言っていた。彼らはこの航空機の飛行速度を限界まで上げ、コロラド州のある谷間で空中静止していた UFO に向かって急降下しようとした。ちょうど私が英国で経験したように、彼らとその UFO に近づいたとき、それはあたかも彼らが静止しているかのように飛び去った。彼らの速度は時速 1,500 マイルとか、そんなものだった - とにかく、この種の航空機が急降下時に達成する当時の最高速度だ - しかし、誰が飛行していたにせよ、それら(\*UFO)はその後長い年月の間に我々が持った何物をも遙かに凌駕する性能を持っていた - 今でもそうだと思うが。

これらは何か異質のものだと思う：それは人間がつくった航空機ではない。異質の推進原理を持ち、ここに飛来し偵察している。

私はそれらを見たことがある多くの宇宙飛行士たちと話をしてきたし、軍のパイロットたちとも話をしてきた。思い出すのは、かつてギリシャのアテネで勤務していたラミッジ大尉のことだ - 彼は朝鮮戦争時に一度遭遇していた。それは翼の外側にピタリとつけて約 1 時間一緒に飛行した - 翼の外側につけただけでなく、彼の機の周りをアクロバット飛行した！ 人々のうちの何パーセントがそうかは正確に知らないが、訊かれたパイロットと航空機乗組員の約 10 パーセントは目撃していた。

数年前、私はこの部屋に座っていた。そのとき、情報機関にいた一人の大佐から、彼の B-52 乗組員の全員が UFO を見た話を聞いた。ご存じのように、これらの人々は自ら進んでカメラの前に座って語ることをしない。しかし、驚くべき数の人々がそれを見ている。それらが進んだ性能を持っていることを彼らは知っている。通常彼らが見るのは、何かの金属でできていると思われる固体の物体だ - 大抵は砲金色だ。特に夜間の目撃では、それらの周囲を取り巻く様々な照明が報告される。

**SG:** マクガイア基地の ET はどうなりましたか？

**GF:** それはある種の容器に入れられ、飛行機で運び去られたと聞いたように思う。

私は 1947 年かその頃に、西部で何か墜落したのではないかと考えている。そこで何か起きた。少なくとも、軍内部のいわゆる噂話によればそういうことになる。

何が起きているか分からないとき、物事は秘密にされる傾向がある - 機密、最高機密、何かそのようなものだ - それが大統領による決定なら、きわめて高い機密事項となる：おそらく超最高機密という暗語だ。つまり、知る必要性 (need-to-know) のようなもので、その種の差し止めか指定が一

度何かに付与されると、その機密性を格下げすることはきわめて難しい。記録保管所に行けば、彼等が何を言おうと、そこにはまだ人目に曝すことを許されない、第二次大戦にまで遡る資料が保管されている。一度これが最高機密になると、それはいわば進み続けて永久に最高機密にとどまる。たとえば、次のような理屈だ。この宇宙機は進歩した技術的性能を持っていた。人々は自分たちが何を知っているか、またこれらの物体がどう動くかを相手側に知られたくない - その秘密を守ることは、自らを優位にする。

しかし、これらの様々な計画は明るみに出されるべきときだと思う。これほどまでに秘密が守られてきたのは、嘲笑のためだ。もしそれが最高機密ということだけなら、世界のほとんどは今日それを知っていたら。だが彼等はそこに嘲笑という要素を入れた。誰かがこのような話をすると、人々はこう言うだろう。彼は頭がおかしい - 彼は UFO を信じていると。誰かが何かを見たとき、人々はこの嘲笑を持ち出す。しかし私の経験では、驚くべき数の警察官がこれら(\*UFO)を見ている。驚くべき数の FBI がこれらを見ている。驚くべき数の軍人がこれらを見ている。

私は時々核兵器を運んだものだ。つまり、私は核兵器を運ぶことには気持ちが慣れていたが、UFO を見ることに関してはそうではなかった。この批判、この嘲笑こそが、真実が明るみに出ないようにするためのほぼ最良の方法だった。

*[我々はこのことを軍やその他の証人たちから何度も繰り返し聞いてきた：メディアと当局の嘲笑は強烈で、沈黙と秘密のための強力な力として働く。大部分の人々は自分と家族をこのような嘲笑に曝すことを望まず、代わりに沈黙を守ることを選ぶ。SG]*

英国国防省 ニック・ポープ氏の証言  
Testimony of Mr. Nick Pope, British Ministry of Defense

2000年9月

ニック・ポープは英国国防省職員で、今なおそこに勤めている。彼は 1990 年代の数年間、国防省 UFO 現象研究調査部門を率いた。軍関係者により完璧な証明付きで証言され、レーダーでも追跡された、途方もない速度で移動する巨大物体 - この地球で建造されたものではない物体。我々は彼の証言から、このような物体を伴った幾つかの事件の決定的証拠を知ることになる。彼はまた、英国内で起きたベントウォーターズ事件や他の事件についても確証し、UFO 現象に関する膨大な政府資料があることを認めている。ポープ氏は UFO 問題についての完全な開放性と誠実さを支持しており、世界中の政府が持っている UFO 情報は全面公開されるべきだと考えている。

NP: ニック・ポープ氏

SG: スティーブン・グリア博士

NP: 私の名前はニック・ポープだ。私は英国国防省に勤務する職員で、入省は 1985 年だった。ここでは様々な勤務を経験したが、この問題と最も関連するのは空軍参謀事務局に配属されていた 1991 年から 1994 年の期間だ。そこでの私の任務は、英国政府のために UFO 現象を研究し、調査することだった。

私は毎年 200 件から 300 件の UFO 報告を受け取った。私の仕事はこれらを評価し、英国の防衛に対して何らかの脅威の証拠があるのかどうか、その結論を出すことだった。綿密な調査の結果、それらの目撃の 90 パーセントから 95 パーセントはありきたりの説明で片付くことが分かった。しかし、従来の説明がまったく当てはまらない目撃報告が最後まで残った。それらは軍関係者による目撃、UFO と航空機のニアミス(異常接近)、UFO がレーダーで追跡された例、および UFO がフィルムとビデオに撮られた事例を含む、幾つかの興味深い事例だった。

英国政府が UFO 現象を見てきた長い年月の間に、軍の管制官が無相関目標(UCT)(\*追跡するための飛行データが予め登録されていない航空機)を追跡した多くの出来事が起こり続けてきた。こうした幾つかの場合に、軍用ジェット機がその任務を変更するか緊急発進するかして、これらの物体を迎撃しようとしたことは確かだ - 敵対する意図はなく、ただそれらの正体を確かめるために近づこうとしたのだ。

さて、これらの出来事において、迎撃の試みは成功してこなかったと言わなければならない。UFO の速度と飛行技術は、常に我々が発明した最高の航空機のずっと先にあった。率直に言って、それらは我々を遙かに凌駕していた。

軍用ジェット機が実際に UFO を追跡し、ガンカメラで撮影するか、またはその未知の航空機を識別するために見える距離まで近づこうとしたとき、これらの物体は驚異的な加速のみならず、瞬時に方向転換や停止をする能力を見せつけた。このような飛行の仕方は、加速度(G-force)に関するあらゆる問題を提起している - 率直に言って、最高の耐加速度服を着用しても人間が生存できる限度を遙かに超える加速度。このことは、それ自体興味深い疑問を提起する。一体誰がこれらの物体を操縦しているのか。

特に印象的な幾つかの事例を取り上げるなら、まず 1956 年まで遡る必要があるだろう。このときベントウォーターズ地区の近くで、レーダーと肉眼による目撃事件が起きた。ちなみに、これはブルーブック計画で詳述された事例の一つで、特に具体的であると判断されたものだ。かいつまんで話せば、あるレーダー目標を捕捉した戦闘機管制官たちがいた。しかし、それを我々の航空機の一つだとは容易に確認することができなかった。我々はただそれを眺め、固体の物理的形を持つ飛行物体が実際にそこにあると判断しただけだった。それは我々自身の戦闘機のいわば限界と比較して、驚異的な速度で飛行していた。

何機かのジェット機が発進した。パイロットたちは何とかしてこの物体に近づき、実際に視認した。彼らはそれを、確かな物理的形を持つ、おそらくは円盤型をしたある種の航空機だと描写した。しかし、率直に言えば、それはあまりにも速く、変幻自在の飛行をしたので、その姿をはっきりと見ることはできなかった。繰り返すが、それは彼らを遙かに凌駕していた。だから、それは興味深い一つの例 - 我々が対抗することを望み得ないほどの速度と飛行技術を示す、こうした多くの飛行物体の一つだった。

[それよりもっと]現代の目撃、私が直接調査に関わったもう一つの例を挙げると、1993 年 3 月 30 日と 31 日に、英国上空で起きた一連の UFO 遭遇事件がある - この中で最も興味を引く出来事は、二つの空軍基地上空を、1 機の大きな三角形またはダイヤモンドの形をした UFO が実際に侵犯したということだ。その二つの基地とは、ミッドランドのコスフォード空軍基地とショーベリー空軍基地だ。

コスフォード空軍基地では、この目撃が 31 日の早朝、1 時 10 分頃に起きた。コスフォード基地の警備パトロールが、基地の真上を飛ぶこの UFO を見た。当然、彼らは電話で緊急報告をし、驚いたことにレーダーには何も映っていないことを知った - この物体が彼らの真上を通過していたにもかかわらずだ。彼らが電話をした人々の中には、ショーベリー空軍基地の同僚たちもいた。同基地は約 10 マイルから 12 マイル行った所にある。その気象官が電話を取った。これらの基地には最小限の人員しかいないことを理解する必要がある。だから、その‘気象’官が電話を取ったのだ。彼は、多分これは誰かのいたずらだろうと考えながら外に出た。

しかし実際は電話のとおりだった - 彼は遠くからこちらに向かってくる輝く光体を見た。この物体はどんどん近づいてきた。翌朝彼は高ぶる感情に声を震わせ、私にこう語った。それは巨大で扁平な三角形をした航空機で、ダイヤモンドのように片側にやや隆起しているように思えた。頭上をわずか 200 フィートの高度で通過し、そのとき低周波のブーンという音を発していた。彼によれば、その音は聞こえなかったが、感じることはできた。

奇妙なことに、この航空機は空軍基地の外周フェンスのすぐ向こう側を細い光線で照射していた。彼によれば、この物体はせいぜい時速 20 マイルから 30 マイルの速度で彼に向かってきた - とてもゆっくりだった。

突然、その光線は機体に引っ込んだ。次の瞬間、ものの数秒のうちにそれは水平線の彼方に飛び去った。思い返してほしいが、これを語っているのは 8 年間の勤務経験がある空軍将校だ。彼

は毎日の生活の中で航空機や高速ジェット機を見ている。彼の言うには、この物体の飛行速度は空軍のジェット機の 10 倍くらいだろうということだった。彼にこの謎の航空機の大きさを訊いたとき、彼は典型的な軍人の言い方で、おそらくそれは C-130 ハーキュリーズ輸送機とボーイング 747 ジャンボジェット機の間だったと言った。

私はこの出来事の全面的な調査に取りかかった。その結果、これはまさにこの夜に全土で起きた一連の目撃の一つだったことが判明した。この事件では、一般市民のみならず多数の警察官が巻き込まれ、その範囲は特にイングランド南西部とウェールズ、さらにミッドランドにまで及んだ。私は通常の調査はすべて行なった。我々はレーダーテープを押収し、それらを国防省本館に送らせ、可能な一連の調査をすべて行なった - 衛星の軌道から宇宙廃棄物、天文学的現象、流星、火球、軍用機の演習、気象観測気球の飛揚まで - しかし、そのどれでもなかった。これが調査の基本だった - この分野ではあらゆるものを調査する。

我々はその正体をつかむことがまったくできなかった。これについてかなり堅実な調査をほぼ一週間行なった後で、私は報告書を部長経由で指揮系統の空軍参謀次長 - 空軍少将、二つ星空軍将校 - に上げた。我々はこれを彼のところまで上げ、基本的にこう述べた。無相関目標、未確認飛行物体 - 単なる光や形だけではない - 物理的形を持つ起源不明の飛行物体が、英国防空域(ADR)に侵入したと。

その夜、それはレーダーで追跡されることも、航空機を発進させることもなく飛行した。まったく咎められることなしに、二つの軍事施設と国土の大部分の上空を飛行した - そして正体不明のまま消えた。空軍参謀次長はそれについて時間をかけ、真剣に考えた。それはキャッチ 22 的状況(\*八方ふさがりの状況)だったと想像する。彼はただ戻ってきてこう言った。“これは大変興味を引く事件だ。しかし、間違いなく君はできる限りの調査をすべて行なった。率直に言って、我々ができることはこれ以上ない。それにしてもこれは興味をそそる”

さて、その報告書が指揮系統を上がっていったとき、我々は UFO 現象の全体像について何人かの人々の心を変えたと思う。このことが、言うなれば彼らの目の前で起きたことが単なる馬鹿げたことなどではないことを、後に多くの上級官僚と軍将校たちに本当に理解させたと思う。UFO 現象は天空の単なる光や形ではない。それは現実のものであり、固体だ；それは何はともあれ軍を巻き込む。私が思うに、今でもあれはこれまで英国で起きたきわめて重大な事例の一つだ。率直に言って、この事例は - もし実際に何らかの疑念が依然としてあるとするならば - UFO 現象全体により提起される、重大な防衛と国家安全保障上の問題を示している。

何年もの間、ガンカメラを使って軍用機により撮影された多くのフィルムが存在してきた。しかし残念なことに、このフィルム映像はもはや存在しないように思われる。私の前任者の一人にラルフ・ノイズという人がいる。彼は私が DS8 という旧部署名のもとで働いていたとき、そこを率いていた。つまり、国防事務局第 8 課だ。彼は亡くなる前、やはり国防省に雇われの身分だったが、UFO 現象の真実性について公然と明言し、それを聞こうとしたすべての人々に対して、ここに重大な現象があり、それは真剣に研究する必要も価値もあると主張した。そうするからには、ラルフは確かにそれらが映っているフィルム映像[軍用機から撮影した UFO のガンカメラ映像]を見ていたに違いない。以下はラルフが私に語ったものだ - 実際、彼の証言は書き物にもなっていると思う - 彼は空軍上

級将校の報告会に呼ばれた。彼らは皆この映像の一部を見るために参集していた。その映像は、ある UFO を接近観察するために軍用ジェット機が発進し、追跡を行なった後で持ち込まれたものだった。彼とこれらの空軍参謀は、驚きで息をのみながらただ座っているばかりだった - 見て、指さして、驚いていた - しかし率直に言うと、それ以上理解することはできなかった。ただし、繰り返すが、我々よりも能力の優れた物体が我々の領空で活動しているという暗黙の承認だけはあった。

私がそれを言うときは、当然試作機の問題についても触れる。なぜなら、UFO 現象についてしばしば提起される問題の一つは、まったく筋の通った質問だからだ。つまり、高速でとてつもない運動性能を示す、物理的形を持つ飛行物体について語る時、人々が見ているものは空軍の次世代機ではないのか？ - 航空機であれ遠隔操縦機であれ、その試作機ではないかというわけだ。

よろしい。国防省に勤務する職員であり、3年間 UFO に関係する仕事をしてきた一人として話すと、その質問をする人には誰にでもこう言うことができる。もちろんそのとおりだ。いつだって航空機や装置の試作品はあり、それは試運転される。しかし、我々の組み立てキットを試運転する場所は我々が知っている。我々はその試運転を管理の行き届いた、決められた危険地域で行なう。我々は UFO と試作機を間違えない。もしそれが試作機だとしたら、我々が UFO を追跡することはない。我々はその違いを知っている。

だから、一般市民が何かを見たときには - 誰がそんなことを知っているだろうか？ それは人々がどこでそれを見たかによる。しかし、話が軍による目撃や、私が行なったような研究と調査ということになると、もし私が試作機のテストに偶然出くわしたとき、私が 'A' を知っており 'B' を知らなかったなら、私はそれを知らされる。そのときはもちろん、我々は素早くそれに対する干渉を止めているだろう。

英国で最も有名な UFO 事例はレンドルシャムの森事件だ。これはときにベントウォーターズ事例とも呼ばれる。この事例では、1980年12月の数夜にわたり一連の UFO 事件が起きた。表向きは英国空軍基地が関係しているが、実際にはそれらの基地は米国空軍によって運営されていた。それらはサフォーク州のベントウォーターズ空軍基地とウッドブリッジ空軍基地だった。

*[ラリー・ウォーレン、ローリ・レーフェルト、クリフォード・ストーン、ヒル - ノートン卿、その他の証言を見よ。SG]*

さて、この事例では一連の遭遇があり、一部の人々はそこで途方もない動き方をする天空の光体群を見た。しかもっと顕著だったのは、活動の最初の夜に物理的形を持つ金属製の飛行物体が実際に移動しているのを人々が見たことだ - 天空をではない - 下に降りて、ほとんど地面すれすれを。それは二つの基地に隣接するレンドルシャムの森の中を動いていた。ある時点で、このほぼ三角形をした小さな金属製の飛行物体は、本当に地面に降り、森の中の空き地に着陸したように見えた。

このときの証人たちはすべて軍の要員だった。彼らは訓練された観察者であり、間違わない。これまで懐疑論者の一部は、近くの灯台を見誤ったのかもしれないと言ってきた。それは二つの理由であり得ない。第一に、彼らは訓練された軍の観察者で、灯台は見慣れており、様々な勤務の中で

ほぼ毎夜それを見ていた。第二に、遭遇事件のあった時点で、確実にその灯台は UFO と同時にはっきりと見えていた。だから懐疑論者たちが時々主張するように、これが灯台だったはずはない。

この事例は、私自身の勤務期間より 10 年かもう少し前のことだ。私はこの事例を見直し、ファイルのすべてに目を通した。そして、この事件の調査を再開しようとした。注目すべき最も重要なことは、実際に何か起きたという物理的証拠だった。なぜなら、この飛行物体が着陸した後で、人々は白昼に着陸場所まで戻り、その物体の着陸場所である森の地面に三角形の窪みを発見したからだ。私が言っている意味は、その三つの窪みを線で結ぶと、ほとんど完璧な正三角形になったということだ。

行なわれたことの一つは、その場所の放射能検査だった。これが私の入った場所だ。私は測定値を入手した。[そして]これらの読み取り値が 2 箇所でも極大値を持っていたことは重要だ：極大値は窪みそのものと、その空き地にある木々の損傷を受けた側面にあった - あたかもこの物体は降下して何本かの枝を折り、樹皮を幾らかいだかのようなようだった； その物体は入ってきたときか出ていくときにそうしたのだ。

私は当時チャールズ・ハルト中佐によって記録されていたその数字を送った。彼は基地の副指揮官で、彼自身もこれらの事件の幾つかでは証人だった。私はハルト中佐とそのチームから受け取ったデータを、国防放射能防護局に送った。そこは国防省の一部だ。そのデータは戻ってきたが、彼らはこの出来事全体について率直に困惑していた。そして地面の窪みの放射能は、背景放射能の 10 倍だと言った - 通常あるべき量の 10 倍だ。

ここで当然ながら、そのレベルはそれでもなお比較的lowかったと言っておくことは重要だ。ハルト中佐と彼のチームは、これによって危険に曝されることはなかった。これはまだ低いレベルの放射能だった。しかし繰り返すが、それを科学的に見ると、そのことが重要なのではない。重要なのは、その場所のすぐ外側での対照測定と比較したときに、この飛行物体が森に降下したその場所で、通常の 10 倍という極大値が得られたことだ。

だから、これはきわめて重大なことだと私は考えている。なぜなら、ここには訓練された軍の観測者による目撃があり、またある時点でこの飛行物体は、近くのワッテン空軍基地からレーダーで追跡されているからだ。つまり、レーダーによる捕捉があり、訓練された軍の要員による目撃があり、その出来事の後では通常の実現の中で、否定し得ない、科学的な、放射能の測定された証拠があった。だから、誰の基準に照らしてもそれはきわめて重大な出来事であり、その夜その空き地に未知の飛行物体があったという、疑う余地のない証拠があると私は考えている。

私は軍の要員による証言内容を見、これに巻き込まれた人々による証言を聞いたが、それはこの夜に起きたことが、国防省に上げられたファイルに記録された以上のものだったことを示している。

UFO が民生用の原子力発電所、核兵器を持った軍事施設、等々にきわめて強い関心を持っていることを示す事件もある。



[当時、米国の管理下にあったベントウォーターズ空軍基地に核兵器があることは秘密だった。  
SG]

国防省空軍参謀事務局での勤務期間中、私は UFO 問題に関してはとても開放的な方針をとっていた。自分が行っていた公式の研究と調査に関しては、できるだけ開放的かつ誠実であろうとし、このことに関するデータを隠さないことを自分の役割と考えていた。政府と軍、さらに民間の研究者、政治家も - 誰であろうと - この問題については、あらゆることを社会共有のものとするべきだ。私はそう思っている。政府は矛盾することをしてはならない。公式見解がしばしばそうであるように、一方で UFO は防衛上何の重要性もないと言いながら、他方ではデータの一部を隠しておくなどということをしてはならない。

それは絶対にしてはいけない。どちらか一方だ。政治家がこの問題に探りを入れたりメディアが問い合わせたりしたとき政府が決まって言うように、もし心配することが本当に何もないなら、そのすべてのデータを見てみようではないか。その決定が適切な方法論に基づいてなされた、正当なものであることを確認しようではないか。

その方針を支持する者として、私は世界中の政府が持っている UFO 情報は全面公開されるべきだと考えている。それが始まりつつある有望な兆候があると思う。たとえば 2000 年初めにサンマリノで開かれたある会議は、同国の観光局も一部協賛した、ある意味で公的性格を持つものだったが、イタリア空軍が実際の任務として制服の代表を送り、何年もの間イタリア空軍と国防省に報告されてきた UFO 事例について語らせた。私はこれがチリでも起きたことを知っている。すでに述べたように、私自身これに努めて開放的であろうとし、またデータを社会共有のものにしようとしているが、その努力がこの問題を幾らかでも前進させていけばよいと思う。

そのとおり。私はこの問題の完全な開放性と誠実さを支持する立場だ。疑いもなく、それはきわめて重要な問題だ：それは防衛と国家安全保障上の重要問題を提起しており、排他的小集団や何かの特定集団によって対処されるべき問題ではない。これらは世界的に重要な問題であり、すべての人々により議論され、対処されなければならない。実際に、我々が持っている現象データは、あらゆる種類の人々 - 科学者、政治家、軍事専門家 - を引き入れ、この情報を得る現在の方法よりも遙かに広範な方法を用いることなしには、十分かつ適切に評価することができないものだ。

私はこれらの UFO の幾つかは確かに地球外起源であると信じており、そのことを隠したりはしてこなかった。国防省の現役職員として、それがとんでもない言明だということは承知している。もちろん、私はそれを公式な声明としては出さない - 私が個人の立場で話している - しかし私の話は 3 年間の公式な研究と調査に基づいているのだ；私は 3 年間、新しく入ってくる目撃情報に接し、また国防省や公文書館が持っている UFO 問題に関する 250 件から 300 件の奇妙な事例ファイルを見直した。その幾つかは、当時機密扱いだった。だから、私はこれらの言明を軽々しくは行っていないし、盲信に基づいてそうしているのでもない。私は政府が持っているデータに基づいてそれを行っているのだ。

同じくらい重要なことは、この考えを持つのは私一人ではないということだ。英国国防省の内部、空軍、また実に政治組織においてさえ、同じことを言う人々がいる。国防省は巨大な一枚岩の組織

ではない - 他の組織も同じだが、それは個人の集合体だ。だから、政府、軍、民間組織 - どんなグループであれ - について語る場合、それは実際には個人の集合体について語っているのだ。

官僚の世界には、疑う者と信じる者がいることを私は知った。そして地球外生命体の存在を信じる人の数は、多くの人と思うよりもずっと多い - 特に空軍ではそうだ。もしあなたが英国空軍に出かけて行って話をしたら、そこの誰かしらが目撃を経験したり、無相関目標をレーダーで追跡したり、我々に真似のできない飛び方をしている物体を見たりしているだろう。自分自身でこうした経験をした人もいるだろうし、同じ経験をした誰か - 友人、同僚 - を知っている人もいるだろう。

私は勤務に就いた初めの頃、特に反対の立場をとる米国人との対話を確立する努力をした。米国は 1969 年にブルーブック計画が打ち切られて以来 UFO 調査から手を引いている、という公式見解が示されたと思う。率直に言って、私にはそれを追求し深く掘り下げる時間的余裕がなかった。

**SG:** あなたの調査に対して、たとえばメンウィズヒル(\*英国空軍基地)の NSA(国家安全保障局)施設あるいは偵察活動を行なっている国家偵察局(NRO)衛星計画から、どれくらいの支援がありましたか？ これらの組織から何らかの確証を得たり、支援を受けたりしたことはありましたか？

**NP:** 申しわけないが、特定の機関と何らかの連絡があったかどうかについては話したくない。一般論として言えることはこうだ。もし私が興味のある特定事例に出会い、どこか他の機関からの支援、何らかの権限、設備などが必要だと感じたら、私はいろいろな経路でそれを依頼する。しかし実際のところ、これまで扱った UFO 事例の大部分は、私に与えられた資源で十分対応することができた。実際に私は、英国防空域レーダー基地、フィリングデール英国空軍基地の弾道ミサイル早期警戒センター、このような国の施設を利用して毎日の研究調査を行なった。これ以上は話したくない。

こう言えば十分だろう。多年にわたり、信頼のできる事例が絶え間なく報告されている。それらは偏見のない観察者が実際にそのデータを見たとき、そこに単なる天空の光以上の何かがあったことを確信させるのに十分なものだと思う。この現象の正体について時々言われることが何であろうと、その何かはきわめて重大な防衛上の何事かが起きていることを示唆している。それは英国の領空だけではない。実に全世界の領空で起きていると私は考えている。

現在英国では、公文書館に約 30 件の一般公開 UFO ファイルがある。全体では 250 件から 300 件あるはずだ。その一部はかつて機密にされていた；今ではもちろん機密が解除されている。英国では間もなく情報公開法が成立する。私は英国の政府と軍の UFO ファイルが、その全部ではないにしても大部分が近く公開されることを望んでおり、また信じている。

しかし、そこにあるのは証拠の集まりだ。それは軍や科学の分野で何らかの経験を持つ公平な観察者が、端と端とをつなぎ合わせて眺めたときに、この現象の実在性を立証することになる。

1993 年 3 月に起きた英国での目撃多発現象について重要な事実がある。それは、ベルギーの軍事組織を揺るがし、F-16(\*戦闘機)の緊急発進を引き起こした目撃多発現象から 3 年後の、まさ

に同じ日の夜にそれが起きたということだ。繰り返すと、それは 3 月 30 日の夜遅くと 31 日の早朝に起きた。おそらくヨーロッパで最大級の重要性を持つ二つの UFO 目撃多発現象が、3 年の歳月を経てまさに同じ日の夜に起きた。それは非常に興味深い事実の一つだ。

それは私が関わる前のことだったが、ヨーロッパで最大級の重要性を持つ目撃多発現象の一つが、1990 年 3 月にベルギー上空で起きた。このとき複数の UFO が地上の多数の人々によって目撃され、レーダーで追跡され、F-16 迎撃戦闘機 2 機の緊急発進を引き起こした。これらの航空機は、自身の航空機搭載レーダーでその UFO 群を捕捉した。そして、不思議な追いつ追われつのゲームがベルギーの空で約 1 時間にわたり演じられた。

それが起きたのは、私が空軍参謀事務局に配属される前だったが、私はブリュッセルの英国空軍武官と連絡をとった。私は自分自身の心の疑念を解消するためと、自分が行なってきた研究のために、その事件の信憑性を彼に訊ねた。彼は確かにその F-16 パイロットの一人または兩人、さらにこれに関わった上級将校デ・ブラウワー大佐と直接話をしていて、大使館を経由して私に公式に返ってきた言葉は、この事件はほぼ報告どおりに実際に起きたというものだった。

間違いなく、そこには固体の物理的形を持つ飛行物体があり、F-16 の前方で飛行の仕方を何回か変えた。非公式の余談として、ベルギー空軍参謀の間にある論評が広まった。その趣旨を言えば、“幸いなことに、彼らは友好的だった”ということだった。

*[ベルギー事件とその公式政府文書に関するクリフォード・ストーンの見聞を見よ。SG]*

## 元英国国防参謀長／五つ星提督 ヒル・ノートン卿の証言

### Testimony of Admiral Lord Hill-Norton

2000年7月

[このインタビューを我々に提供してくれたジェームズ・フォックスに感謝する。SG]

ヒル・ノートン卿は五つ星提督にして元英国国防参謀長だ。彼は在任中 UFO 問題については蚊帳の外に置かれていた。彼はこの短いインタビューの中で、この問題はきわめて重要なので、もはや否定されたり秘密にされたりするべきではないと述べている。そして、きっぱりとこう述べる。“...我々が宇宙からの人々、他文明からの人々の訪問を受けつつある - またこれまで長年受けてきた - というのは、まったくあり得る話だ。彼らが何者か、どこからやってくるのか、彼らの望みは何か、これを知るべきだ。これは厳密な科学的調査の対象であるべきで、大衆紙の嘲笑の対象にされるべきではない”

私はベントウォーターズ事件についてはよく知っている。それに関わった多くの人々にインタビューもした。そしてよく考えた末に出した結論は、サフォークであの夜に起きたことの説明は二つしかないということだ。最初の一つは、関係した多くの人々 - 当時その基地の副指揮官だったハルト中佐と彼の多くの兵士たちを含む - は、地球の大気外から何かやってくる、彼らの空軍基地に着陸したと主張していることだ。彼らは出かけていき、そのそばに立ち、それを調べて写真に撮った。

翌日彼らは、それが着陸した地面を検査し、微量の放射能を検出した。彼らはこれを報告している。ハルト中佐はメモを書き、そのメモは我々の国防省に送られた。私を知る限り、彼は少なくとも1回英国のテレビに出演し、彼がメモに書いたことを事実上繰り返した。彼が言ったことは、私が今述べたことだ。それが一つの説明だ - つまりハルト中佐が報告したように、それは実際に起きた。

もう一方の説明は、それが起きなかったというものだ。この場合、ハルト中佐と彼の部下全員が幻覚を見ていたと仮定しなければならない。私の立場は完全に明確だ - これらのいずれの説明も、国防上の最大級の関心事だ。私自身はそれをこの国の国防大臣たちに上げてきたが、それは報告されても、UFOに関して彼らが受け取ったどんな情報も、国防上の重要性は持たないと断言されてきた。間違いなく、すべての分別ある人々にとって、このどちらの説明も必ず国防上の関心事になる。サフォークにあった米国空軍基地のこの中佐と彼の部下たちが、核兵器を搭載した航空機が基地にあるときに、幻覚を見ていた - これは国防上の関心事に違いない。

そして、起きたと彼が言っていることが実際に起きたとすれば - 一体どうして彼がそれを捏造する必要があるか - 宇宙からの輸送機(明らかに地球人が建造したものではない)がこの国の防衛基地に進入したことは、確かに国防上の関心事でないはずがない。とにかく、サフォークであの12月の夜に何も起きなかったとか、あれは国防上の関心事ではないと言明することは、我々の大臣たちにとり少しもよいことではない - 特に国防省にとっては。それはまったく真実ではない。

私の名前がこの国と他の一つ二つの国でとても大々的に UFO と結びつけられるようになったので、私はよくこう訊かれる。私のような経歴 - 元国防参謀長であり元 NATO 軍事委員会議長 - を持った人間がなぜ、私がなぜ隠蔽があると考えたのかと。または UFO についての事実を政府が隠

蔽しようとする理由は何かと。多くの説明がしばしば提示されてきた。最もよく言われてきた、またおそらく最もまことしやかな説明は、もし真実が語られたら国民はどういう反応をするか、これに政府（まずは米国の、そして私自身の国の）が懸念を持っているというものだ - その真実とは、我々の大気中に我々が配備できる何物よりも技術的に遙かに進歩した物体がいる、彼らがやってくるのを阻止する手段を我々は持っていない、そして彼らが敵意を持っているとしても、我々にはそれに対抗する防衛手段がない、ということだ。

もしそれを公開すれば、人々はパニックを起こすことを政府は恐れているのだ。ニュージャージー州でのあの有名な事件のように、人々は猛り狂って電話に殺到するだろう。その日は火星人が着陸したという悪ふざけがあった - 人々は狂乱し、走り回るだろう。私はそう思わない - 紙上でそう述べた。私は、人々がこの 21 世紀にその種の情報に接してパニックを起こすだろうとは思わない。何しろ、彼らは 50 年前に核兵器の導入と二つの日本の都市の破壊に耐えたのだ。彼らは我々が火星に輸送機を着陸させられることを当然のことと受け取る - 何年も前に予想した正確な時刻に。だから、なぜ彼らがパニックを起こすのか？ 彼らはトカルチョや宝くじのほうにもっと興味がある。彼らは肩をすくめ、それを当然のことと受け取る。いずれにせよ、私の経験では彼らは政治家を信用しない。

私が言いたいのはこうだ。我々が宇宙からの、他文明からの人々の訪問を受けつつある - またこれまで長年受けてきた - というのは、まったくあり得る話だ。彼らは何者か、どこからやってくるのか、彼らの望みは何か、これを知るべきだ。これは厳密な科学的調査の対象であるべきで、大衆紙の嘲笑の対象にされるべきではない。

私にはベントウォーターズ事件が、我々の領空への明らかな侵入 - そして実に我が国への着陸 - が起きた典型的事例のように思われる。これは軍の真面目な人々 - 責任のある仕事をしている責任のある人々 - により目撃された。そして、ベントウォーターズ事件は、ある意味で将来これらの状況にどう対処したらいけないのかの模範例だ。

*[英国でのベントウォーターズ着陸事件に関するラリー・ウォーレン、国防省職員ニック・ポープ、クリフォード・ストーン、ローリ・レーフェルト、その他の証言を見よ。私は以下のことも述べておきたい。私はヒル・ノートン卿と個人的に数時間を共に過ごした。彼はこの問題を巡る秘密にとっても懸念を持っていた - また、それに関して彼が欺かれてきたことに対しても。彼の五つ星提督という地位、元国防参謀長という立場にもかかわらず、彼はその問題について公式に説明を受けたことはなかった。これはクリントン大統領の参謀と彼の初代 CIA (中央情報局) 長官ジェームズ・ウルジー、議会の主要議員たち、統合参謀本部情報局長 (J-2) を含む国防総省のきわめて高位の高官たち、および国防情報局 (DIA) 現職長官についての私の経験と一致する - これらのすべての人々に私は直接説明を行なったが、彼らはこの重要な問題に関して蚊帳の外に置かれていた - もしくは査問を行なったときに、情報への接近をあらかじめ拒否された。これは言うまでもなく危険な状況である。秘密そのものが、国家安全保障 - そして世界安全保障 - に対する重大な脅威であり、民主主義と我々の憲法に基づいた政府という仕組みを愚弄するものだ。これは公的措置により是正されなければならない。SG]*

米国空軍保安兵 ラリー・ウォーレンの証言  
Testimony of Security Officer Larry Warren, United States Air Force  
2000 年 9 月

ラリー・ウォーレンは英国ベントウォーターズ空軍基地の保安兵だった。彼がこの基地にいた 1980 年に、1機の地球外輸送機が着陸し、空中静止し、基地の隊員たちと交流するという事件が起きた。後に、その事件を目撃した多くの隊員が脅迫され、事情聴取され、嘘の内容を述べた文書に署名するよう強要された。ウォーレンの証言は、これまで確認されている軍の証人たちにより裏付けられている。この事件についての公式文書がある；この事件についての写真がある；そして着陸した痕跡の物理的証拠がある。この事件の全貌は、国防省職員ニック・ポープ、五つ星提督にして海軍卿の元国防参謀長ヒルノートン卿、およびクリフォード・ストーン軍曹によっても裏付けられている。

LW: ラリー・ウォーレン

SG: スティーブン・グリア博士

**LW:** 私の名前はラリー・ウォーレンだ。私は 1980 年 12 月にサフォーク第 81 戦術戦闘航空団に配属された。そこは東アングリア地方(\*グレートブリテン島東南地方)の NATO(北大西洋条約機構)ベントウォーターズ空軍基地で、ウッドブリッジ空軍基地に隣接していた。私は専任保安兵で、当時そこで秘密に保管されていた核兵器を警備するのが仕事だった。

1980 年 12 月 11 日に私の保安許可通知, PRP が届き、私は認可された。当時の私の資格は機密取扱許可だった。

その UFO 事件はウッドブリッジ基地の近くで起きた。そこは我々の姉妹基地で 6 マイル離れており、[ベントウォーターズ基地とは]レンドルシャムの森として知られる松の森で隔てられている。私は駐機場警備の第 2 週目、夜間勤務だった。

我々は休憩を終えたところだった。前の小隊, C 小隊はボクシングデー[クリスマスの後の最初の週日]の早朝に UFO に遭遇していた - 私の出来事の 2 夜前だ。保安警察官(\*他の部分では空軍兵となっている)のジョン・バローズと空軍兵パーカーがウッドブリッジ基地の東ゲートにいた。バローズは滑走路東端の森の樹間に、何か物体らしきものを見た。そこには様々な色光があったので、彼は航空機の墜落かと思った。彼はベントウォーターズ基地中央保安管理所に電話を入れ、見えているものを報告した。ジム・ペニストンという交替勤務監督官が電話に出た - 彼は軍曹だった - [そして]さらに数名が到着した。

私はこれに関わらなかったが、知っていることはこうだ: 彼らはその現象を追って森の中へ入った - 彼らは航空機の墜落があったに違いないと考え、そのための処置に取りかかった...

しかし彼らは、それが航空機の墜落ではないことを知った。それは底辺が約 6 フィートの 1 個の三角形物体で、頂点の高さは 9 フィートだった。その色は濃い着色ガラスのように黒かった。その物体が三脚あるいはその類の脚部の上に乗っていたかどうかは不明だったが、その周囲を色とりどりの照明が取り巻いていた。彼自身の証言に基づいて私が確かに知っていることは、次のようなものだった。ペニストン軍曹とこれらの将兵たちは、それぞれ携帯武器を持っていた - 警察官が持

っている 38 口径の銃だった。彼らがこの物体に遭遇し、それがこれまで見たことのないものだと分かると、ペニストン軍曹は回転式連発拳銃を抜いた。これらの人々は、航空機や異常な物体に関しては - 当時我々が皆そうだったように - 高度に訓練された観察者ばかりだ。ペニストン軍曹は拳銃を抜いてその物体に狙いを定めた。

ある時点で、彼は[この現象に]近づき、きわめて近くまで寄り、その側壁にあるパネルを観察した。そこには象形文字に似たある種の言語が描かれていた。どこかで見たことがあるようなものだったが、何の文字かは特定できなかった。それは浮き彫りになっていた。彼はそれに触り、表面の感触を調べた - やや温かかった。その組織はまるでガラスだった - その稠密さや堅さがそのようだった。彼らはこの不透明なガラスを通して、内部で何かが動いているのを感じとった。ペニストン軍曹はある声を聞いた。これらの将兵たちには、基地と無線連絡が取れなかった空白の 4 時間があった。幸いにも、他の一部の将兵たちがはっきりと応答し、これらの人々に起きていたことを知ることができた - そのうちの何人かはカメラを持っており、写真を何枚か撮った。

*[クリフォード・ストーン軍曹の証言を見よ。彼はこれらの出来事の映像と写真が撮影されたこと、それらがどう扱われたかを確証している。SG]*

これらの人々は、翌朝事情聴取された。彼らは放心状態で森から救出され、直ちに供述を行なった。彼らは空軍のある部隊によりソディウム・ペンタール(\*全身麻酔に使われる)だという注射を打たれた。

空軍兵バローズが私に直接語ったところでは、彼は 2 日以内にこの現象が再び起きることを知っていた - そしてそれは実際に起きた。彼らのその日の勤務は終わり、私の勤務になった。

この遭遇では残された証拠があった - 地面の着陸痕。英国サフォーク警察管区は、翌朝これに対処した。なぜなら、それは事件だったからだ。事件は基地保安警察作戦担当から報告された。チャールズ・ハルト中佐がこれについてきわめて正確に説明することができる。なぜなら、彼は調査の現場にいたからだ。これらの着陸痕は正確に 9 フィートの間隔で三角形を形成していた。それは 2トン半の重さの何かが地面にあったことを示していた。何かが明らかに通過したコルシカ松の林冠には、隙間が 1 箇所開いていた。背景放射能の測定が行なわれた。これについての詳細情報は、ニック・ポープが国防省経由で実際に提供することができる。

*[英国国防省職員ニック・ポープの重要な証言を見よ。彼の証言は、この出来事と測定された放射能について確証する。SG]*

測定値は、その地域で通常自然に見られる放射能の 25 倍(\*ニック・ポープの証言では 10 倍となっている)だった。この数字はどのようにして得られたか。当時基地の災害対策要員だったネベルス軍曹がガイガーカウンターを持っており、測定方法を知っていた。これらの測定値はこの中心地点から得られたものだ - 木々などに残留放射能があった。

私はベントウォーターズ空軍基地駐機場の端の周辺歩哨区域 18 と呼ばれる、とても離れた地区に配置された；そこは一つの警戒地点だった。私は持ち場に向かった。そこでは約 1 時間半何

事も起きなかった。私が最初に気付いたのは、当時基地を囲んでいたやや低いフェンスに向かって何頭かの鹿が走った動物騒音だった。この鹿の群れはフェンスを飛び越え、まさに滑走路の上を走り、私の持ち場を通り過ぎた。それらは怯えているように見えた。私はそのような感じを持った。

突然、私には開放周波数による交信が聞こえ始めた。当時我々はモトローラ社の無線機を持っており、保安用と作戦用に 4 チャンネルあった。ウッドブリッジ基地に向かう森の上空の光体群について、実況無線が聞こえ始めた。“あの光体群がまた戻ってきた” だから私は上を見ていた。このとき突然、保安警察のブルース・イングランド少尉から呼び出しがあった。彼はこのときの交替勤務指揮官だった。彼は“ウォーレン、君の持ち場を離れろ。政府車両 (GOV) が迎えに行く”と言った。1 台のトラックが止まった。私の直属上官であるバステインザ軍曹が運転していた。イングランド少尉が助手席におり、他の隊員たち - 私と同様に集められた - が後部座席にいた。私は乗るように言われた。我々は直ちにベントウォーターズ基地の駐車場に向かった。基地 CO [Commanding Officer] (指揮官) を探す人々の交信が飛び交っていた。彼らは“周波数を変えろ。無線機をすべて切れ”と言っていた。言っておかなければならないが、これらのすべては CSC (通信システム制御装置) でその夜に作成されたテープに記録された。それらは盗まれた。その期間の日誌も同様だった - チャールズ・ハルト中佐もこれを確証することができる。それは数日後に彼が見に行って明らかになった - 任務に就いていた隊員名簿、事件報告書など、すべてだ。それらは消えてしまった...

我々は武器に NATO 弾 (\*NATO rounds; 北大西洋条約機構軍が定めた、各国の銃の弾薬を共通化するための規格、もしくはそれに基づいて作られた弾薬) を装填していたが、これはとても異例だった。上層部の間に切迫した状況があった。我々は伐採道に沿って森に入った。森に入って約半マイルの所に 1 台の装甲車があった。これについてはこれまで話さなかったが、私はそれを書いたので必要がないと考えたのだ... 森の中での感じはとても奇妙で、動作は普通ではなかった。我々が森に入ると、すぐに知覚がおかしくなった。明らかに何かがおかしかった。我々は足を止めた。そこには別の車両が何台かあった。彼らは我々から武器を取り上げた。我々は四人一組の単位に分かれて、さらに森の中へ向かった。この夜、チャールズ・ハルト [中佐] が少人数の上層部と一緒にそこにいた。ある時点でイングランド少尉が彼らに加わった。無線での連絡が頻繁に行なわれていたが、階級の低い我々は無線の使用を禁じられた。しかし、他の開放チャンネルで誰かがこう言っているのが聞こえた。“ここにきている者はこれらのホットスポットを避ける。そこを歩いではならない” 彼らはこれらの物体が戻ってくることを予想していたと私は考えている。

ところで、バローズ軍曹は - 最初の夜から - それが戻ってくることを知っていた。彼はその現象の近くに戻るという考えに取り憑かれ、勤務外に私服でそこにやってきた。

あなたはあの夜にチャールズ・ハルト [中佐] が作成した実際のテープを聴くことができる。森に近づく道を警備していた周辺区域の一人が、無線でチャールズ・ハルト [中佐] を呼び、こう言っている。“空軍兵バローズと他の二人がそちらで合流したいと言っています” チャールズ・ハルト [中佐] がそれに応答する。“今は駄目だと言ってくれ; 来られるようになったらこちらから連絡する。今は誰にも来てほしくない” このテープをあなたは入手することができるし、興味ある人々には誰にでも聴かせるべきだ。



私が見たもの - それがおもって単純であればよかったと思う。我々がこの小グループで森の中を進んだとき、私はバステインザ軍曹と一緒にいた。交替勤務管理官ロバート・ボールもそこにいたし、他にも大勢いた。我々はコルシカ松林の端のカペルグリーンと呼ばれる空き地に着いたが、その地面ではある現象が起きていた：それは霧(もや)のようだった；それは地面を覆う霧のように見えた。そこには映画フィルム用カメラがあった - 映画撮影用カメラだ。とても大きなビデオカメラもあった - 当時は大変大きなものだった。これらはベントウォーターズ基地の広報部から来た。そこには[その現象が]戻ってくるという予想があった。フィルムに何かの痕跡が映っていることは立証されている；私が言っているだけではない。私がおなたに話している事柄のすべては、どこの裁判所に行ってもほぼ裏付けられる - 特に一連の証拠についてはそうだ。私は喜んでそれをしたいと思う。

私はこれを注視していた - まるで映画を見ているようだった。この霧は地表面にあり、皆がそれを注視していた。災害対策準備がなされていた。左方に家、農家が 1 軒あった。私はそれまでこの森に来たことがなかった。この家には明かりががついていたので、中には人がいたと思う。はっきりと覚えているのは、犬が吠えていたことだ。そして光体がやってくるのが見えた。ところで、我々はこの空き地からオーフォード灯台の光を見ることができた - とてもはっきりと。この事例はこの灯台の見誤りだと書かれてきた - 尾ひれのついた話か何かだと。実はこの灯台は 100 年以上もそこにあって、誰にとっても何の驚きでもなかった。この物体、赤いバスケットボール型の物体は、北海方面から木々を飛び越えてやってきた。私はそれを航空機の尾灯だと考えたが、動きはとても速かった。地面の霧は構造を持っているように見え、50 フィートにわたり広がっていた。このバスケットボール大の琥珀色の光体は、固体のように見えなかった - それをおなたに説明するのは難しい - しかしそれは物体、つまりこの霧の真上 20 フィートの所にあつた。私がこれに目を凝らし、他の人々もそうしたとき、直ちにカメラがそれに向けられた - これらの人々は反応していた。そのとき爆発が起きた - それを描写するのは難しい。この物体はきわめて明るく輝く、多数のかけらに分裂したのだ！

私も他の人々も眼にやけどを負った - これについての文書を私は持っている。ある将校がそうしると忠告したので、私はそれらをベントウォーターズ基地から密かに持ち出してきたのだ。彼はこう言った。“君の軍歴は君がいなくなるとすぐに消えるだろう” こうして、私の眼は損傷を受けた - 網膜などの閃光火傷だ。これは医学的に立証されている - それはアーク溶接の光を約 10 分間凝視したようなものだった。それは勧められるものではない。そのときはすべてがとても異様だった。

この光の爆発はとても静かだった。そして、光の爆発が起きた場所には明瞭な形を持った、やや大きな固体の物体が現れた - 底辺がおそらく 30 フィートはあり、ピラミッド型をしていた。それはとても粗い形に見えた - まともに見たら虹色に似た輝きのために歪んで見えるが、目の周辺視力を使えばはっきりとその形を見ることができる、そんな状況だった。ここで言いたいのは、この物体の実際の証拠は - それがお陸した所に - 今でもあるということだ。これには誰も失望しないだろう - この事例 - 私を信じてほしい！

その物体はそこの地面にあつた - それは映像にも写真にも撮られた。

チャールズ・ハルトのテープには、何人かの英国警察官が出てくる。サフォーク警察が英国警察車両で森の中を引き上げていく様子が録音されている。なぜなら、彼らのサイレンが少しの間入っているからだ。これらの警察官が誰かは分からない - 彼らは誰にも話そうとしない。彼らはカメラを

1 台持っていたが、それは取り上げられた。すでにここでは国際間の事件が起きようとしていた。

我々の航空団指揮官ゴードン・ウィリアムズが - 彼はその夜パーティーに出ていたと思うが - 他の上層部の人々と一緒に現場に到着した。そこには英国の軍部がいた。彼らはそのパーティーにいたのかもしれない。そして、何と彼らはこのような出来事に対処する方法を心得ている様子だった。

この物体から発せられていた音は、私の記憶にない。それはまるで幻覚のようだった。それでも、それが現実のものであることを私は知っていた。なぜなら、それは痕跡、証拠などを残したからだ。しかしその物体は、私がこれまで見たあらゆるものを遙かに超越していた。それはまさに我々の目の前にあった。ある時点で、私はそれから 30 フィートしか離れていなかった - あまりにも近かった。

その物体と共に、ある生命体がそこにいた - これでやっと本題に入れる。私はこう考えたのを覚えている。この子供たちはここで何をしているんだ？ 私は混乱し始めた。輝く光が一つあり、動きがあった。私ははっきりと見たが、これらのものには上半身があった。そして、1 本の腕が動いたのを見たとき - 何と言えよいか - それはこの世の現実ではなかった。これらの上層部の人々はその[現象の]間近にいた。

私が見たものは、この奇妙な機械の右側にいた。この輝く光は外に出てきた。それは青みがかった金色で、地面から約 1 フィート浮き上がっていた。それが分裂し - それは地面から約 4 フィートの高さしかなかったが、分裂して離れた - そして、これらの三つの生命体をそれぞれ中に包んだ三つの独立した光の繭(まゆ)がそこに現れた。

**SG:** でもそれは人間のように見えたのでしょうか？

**LW:** 彼らは人間の形をしていた。そのとおりだ。

**SG:** 彼らの身長を覚えていますか？

**LW:** そう、彼らの身長は 4 フィートほどだっただろう。つまり、子供を考えればよい。その光が弱くなり、中にあるものが見えた。彼らには髪の毛がなかったが、衣服を着ていた。ある装置がそれに付いていた - それを説明できないが - 暗い色の物体だ。光のために下肢は見えなかった - これらは地面を歩いていなかった - これらの生命体だ。私は二度と見たくないが、大きな目と思われる周囲には白い膜があった - その白い膜は動いて順応していた。我々の目が光に順応する様子に似ていた。

指揮官がそこにいた - 誓って言うが、このような出来事が起きた場合の対処手順ができていたということだ。彼は前に進み出た。そのとき我々の階級は、その区域から出るように命令された。実際、低い階級の人々が多数これに巻き込まれていた。我々は車両に戻された。我々が戻る途中、森では多くの現象が起きていた。これらの光の生命体とでも呼ぶべきもの、それらがそこにいた。周りには他の宇宙機がいた。木々の上に滞空し、まるでこの事態を警護し、支援しているかのようなようだった。

言うておおくが、空軍兵バローズは、全車両が集まっていた駐車場にいた。軍は彼を現場に行かせようとしなかった。

チャールズ・ハルトは別の光の現象を追跡していた。彼のすぐ前の地面に上空から光線が照射されていた - それは実際にはこれらの三日月型物体から照射された鉛筆ほどの太さの光線だった。ハルト中佐はこの一部始終をテープに録音していた - 4時間の録音だ；衝撃的な18分間の記録をあなたは入手したのだ！

私の出来事は約半マイル離れたところで起きた。実際、そのテープでは私の出来事の始まりを聞くことができる。はっきりさせておきたい：テープのすべてが公表されるずっと以前から、私は録音の中に入っていた。そしてテープのすべてを公表するようにした一人が私だ。私はそれをCNNに渡した - これに関してやったことで、私は一銭も受け取ったことはない。決してない。

我々が去るとき、空軍兵バローズはもう一つの物体が現れたと私に言った - すべてのトラックが止まっていた駐車区域に多くの保安兵がいたが、まさにその真ただ中に現れたのだ。空軍兵バローズはこの物体にしがみついた。するとこの物体は地面を移動した - 10メートルだ - しがついている彼と一緒に！これは間違いのない事実だ。彼は物理的にこの物体に触り、そのまま移動した。そしてそれは飛び去った。それはジョンを置いて去った... 別の光線が降りてきた。保安兵の一人が小型トラックにいた。この物体は彼を追いかけていた - これらの生命体の一つと光線が - 文字どおり彼を追いかけていた。彼は小型トラックに飛び込み、ドアをバタンと閉めた。するとそれは彼の正面のガラスを通過した。彼はひどく怯え、フロントガラスをトラックから蹴り出した！この物体は別の窓から外に出た。私はこの男を知っている - これは多数の人々の目の前で起きていたことでもある！その物体は別の窓から出ていったが、12月だったのでそれは閉められていた。彼がその車両から外に目を向けると、1本の青い光線が木々の上から降りてきた。この物体はそれに乗って真っ直ぐ上昇し、光の白いピンをつけた松ぼっくりに似た暗い物体に吸い上げられた。それは夜の闇を背景にした暗い物体で、この出来事をじっと見ていた。別の将校は、この物体が何かを探すためにそこにいたようだと。それらは前夜、辺りをくまなく探索していた。つまり3日間活動していた。

それらは理由があつてそこにいた。我々がある目的でここにいるようなものだ；つまり、君たちは我々の邪魔をする。だから、君たちが知らなければならないことを我々は見せよう - だが我々はやるべきことを完遂する、と。

このことも言うておきたい。チャールズ・ハルトは後で私にこう言った。“あの夜、この基地、森、ウッドブリッジ基地の三つの地区上空で、三角形物体の大規模飛来がずっと起きていたことを知っていたか？”そしてその期間中、多くの将兵に空白の時間が生じていた - 驚くべきことだった。

後になって、私は精神的動揺で髪が白くなり、抜け落ちたことに気付いた - 実際に右側の髪が白くなった。涙がやたらと出た。口の中は何か金属の味がし、はっきりなしに汗が出た。そして悪寒が走った。

私は決心した：母に電話しようとしたが、我々にあるのは明らかに基地の保安機能の付いた電

話だった。若くて世間知らずだった私は、COMSEC(通信秘密保全)規則に注意を払わなかった。私は外部との通話はいつでも盗聴されることを知っていた。それで私は公衆電話ボックスに行き(基地ではよくそうする)、通話料金を母に回した。私は“お母さん、こんなことは信じないだろう”と言った。“昨夜 1機の UFOが基地に着陸し、自分たちはすべてを見たんだ。信じないだろうけど!” 私は彼女が応答していないと思った。お母さん? お母さん? 母はそこにいなかった。私はグレッグ[私の友人の一人]の方を見てからまた続けたが、何ということか、電話は切れていた! 私は交換手呼んで言った。“もしもし、もう一度接続していただけますか?” 彼女 - “あなたは基地からかけているのですか?” 私 - “そうです” 彼女 - “すみません。あなたは基地によって遮断されました” そう言って彼女は電話を切った。私はグレッグを見て言った。“おい、俺は面倒なことに巻き込まれたらしい” こうして我々は走って寄宿舎に戻った。

[私が母に電話する前に]我々は事務所に呼ばれた。マルコム・ツイックラー少佐が保安警察所長だった。そして彼の手下がカール・ドゥルーリー少佐 - 皆これらの出来事にいろいろな側面から関わっていた。事務所の外にジャガーが 1 台あり、もう 1 台高級車があった - それが何だったか、今思い出せない。私は、ああ、ここで事情聴取されるのだなと思った。何よりも、ここにいたのはすべて階級の低い隊員だった。私のグループには軍曹より上の階級はいなかった。我々はそれぞれに切り離されて事情聴取された。そのことは今なら分かるが、そのときは分からなかった。それで私はこう言った。何てことだ、彼らは我々に口をつぐめと言うつもりらしい; 思ったとおりだ! 私は名前を挙げてよい。そこには私服の男たちがいて、保安警察の警務室を出たり入ったりしていた。とても異常だった。これは一体何事か! という雰囲気だった。

彼らはこう言った。“君たちのうちの誰かに、森にいたときそこから何かを回収したり持ち帰ったりした者はいないか? すべてだ。岩、小枝、何でもだ” 彼らは何度も何度も我々にそれを繰り返した。彼らはこう言った。“もし持っていて今それを話さないなら、その者は UCMJ(軍事司法統一法典)の適用を免れない” 条項 XV, さらに JL-11, これらのすべての規則だ。我々は若く、新兵だった - 何ということだ、我々はまだ任務に就いてもいないのにトラブルに巻き込まれている。我々はガイガーカウンターで入念に調べられた。一人から反応があり、彼のポケットから何かを取り出された。この同僚はすぐに排除された。命にかけて誓うが、その後再び彼を見たことはない! 彼は排除されたのだ。これは多くの人に起きたことだった。空軍が責任を負うべき自殺も 1 件あった。これは実際の名前を持った実在の人間だ。ところでこの基地ではその後、ついに NATO の中で最も高い自殺率になった - これは動かしがたい事実だ。関係した大尉の一人は自宅の裏庭の木で首を吊って発見された - 結婚して子供もいた。これらの人たちは皆銃で自殺し始めた。私はそれを生き抜いた - 私がそこから生還したのは驚きだ。

こうして、我々は事務所に連れ込まれた。そこには椅子が何列かあり、とても小さな事務机が一つあった。その日、保安警察は事務所から出された。この基地ではその日何もかも普段と違っていた。我々が連れてこられたとき、机の上には書類があった。我々は全部で十人くらいだった。そこには一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つの山積み書類があり、それらはすでにタイプされていた。その一つは我々が見たもの - 我々が見たものではなかった - についての予めタイプされた陳述書で、すべてが一般的な内容だった。それには、我々は非番であり、木々の間を飛び跳ねていた未知の光を見ただけだと書いてあった。私はそれをはっきりと覚えている。私は、もしこれにサインしなかったらどうなりますか、ツイックラー少佐? と訊いた。すると彼は、君に他の選択肢は

ないと言った。そして彼は、私には君たちにそうしてくれと言う以外にないのだと言った。私は彼の事務所にいたこれらの他の職員を見つめていた。というのは、我々は次にそこに回されるからだった。彼は我々に文書にサインするように命じた - 4種類あった。一つは UCMJ 機密事項 - よく覚えていないが JANAP-1 とかいうものだった - JANAP とははっきり書いてあった。しかし、我々が読めない別のももあった。彼はこう言った。“君たちは後でこれを読むことができる；署名したまえ；社会保障番号もだ” それから我々は列をなし、別の部屋に入った。そこには映像スクリーンが用意され、椅子が 2 列に並んでいた。金属製の折りたたみ椅子で、拵げてあった。ツイックラー少佐が出て行って、私服の男が二人残った - 大男でビジネスマン風の米国人だった。彼らは写真入りのプラスチック ID カードを着けていたが、それには米国軍公安部とあった。それが空軍かどうかは知らない - それは国家安全保障局の現場部門だと我々は聞かされている。彼らは人々を威圧していた。

*[脅迫的な事情聴取のやり方についてのメルル・シェーン・マクダウ、その他の証言を見よ。SG]*

彼らは笑ったりしなかった。我々は制服を着ていた - 彼らは、野外で着ていた制服を着るようにと具体的な要求をした。それはガイガーカウンターに関係することだったと思う。

こうして我々は席に着いた。そこにはロンドンの ONI [米国海軍情報局] から来たリチャードソン中佐と名乗る海軍中佐がいた。彼がこの場を支配していた。彼は制服を着て、我々にとても愛想がよかった。

事は大体こんな具合に進んだ：私はアラバマ州から来た友人の隣に座っている。我々は彼をアラバマと呼んだ。アラバマは信心深かった - この時点で彼はとても混乱していた... 彼は携帯用聖書を持っていて、それを読んでいた。彼は自分を失っていた。19 歳という若さでは、多くの人にとって人間の条件はよく理解できない - 人々の苦痛と精神的な傷 - しかし私は、知っているこの男が崩れていくのを見ていた - 私の隣で。彼はうまく切り抜けられなかった一人だ - 彼は有名人で家族を持ち、何でも持っていた。彼らはそんなことは気にかけなかった。

だが、リチャードソン中佐が言ったことはこうだった - 我々は皆茫然としていたが、これだけははっきりしている - 簡単に言えばこうだ。“君たち空軍兵はある状況下に置かれた。それはこの部屋にいる君たちの誰が気付いているよりも長い年月我々がずっと知っていたものだ” それはすべて事実を即したことだった。彼は言った。“ここに一つの現象がある。それは何年もの間ここにやってくるものだ。その一部は来て去っていく。また一部は恒久的に駐留している” 彼らはある現象を言ったのではなかった。彼らは様々な文明のことを言った - 進化した文明だ。そして、秘密の理由が多く述べられた - 国家安全保障。彼は言った。“生き続けるのが君たちにとって最良のことだ” 部屋にいた一人が言った。“我々が何かしゃべったらどうなりますか？” そうしたら彼は、“今このことを覚えてほしい - 君たちの郵便物と電話は軍にいる限り監視されるだろう” と言った。続けて“普通の生活をする最良の道は、このことについて誰とも話さないことだ。お互い同士でさえもだ。この瞬間からだ。普通の生活をせよ。このことはすべて忘れよ。今の生活を続けよ。これからも少数の人々が必ず見ることになる何かを君たちは見た、ということ覚えておくように” 他の言葉は全部が国家安全保障に対する忠誠、我々の誓約、国家への奉仕だった - それは洗脳だった。なぜなら、まったく突然にそれらの言葉は反復され、彼の声には単調な調子があったからだ。

次に彼らは映像を見せた。彼らはこう言った。“君たちに一つの映像を見せよう。君たちが目撃したことを正しく観るのに役立つはずだ。また君たち自身にとっても、少しは気持ちの区切りになるかもしれない”我々はまた、何か異常な夢を見たら翌月まで毎日電話相談を受け付けると、その電話番号を教えられた。もし誰かが我々から何か情報を聞き出そうとした場合、我々は[当局に]それを通報しなければならなかった。彼らが言うには、その地区にソ連が潜入する可能性があるということだった - 我々から情報を入手しようとして。当時は冷戦だった。彼らはどんなことにも注意するよと言った。我々はそれを直ちに報告しなければならなかった。

彼らは映像を流した - それはリールに巻いたフィルムだった - 音声の説明はなかった。彼も説明はしなかった。それはガンカメラによる一連の映像から始まった。推測できたのは 1940 年代の記録らしいということだけだった。それは数機のプロペラ航空機の白昼映像だった。フロリダ・キーズ(\*フロリダ半島南端の島々)のようであり、銀色円盤の編隊が航空機の下を飛んでいた。これは映像の初めの方の一コマだ。場面が変わった。この映像には宇宙計画に至るまでの場面が含まれていた。中でも最高の場面は、ベトナムでの第 5 特殊部隊ベレーだった。彼らは低い雑木林に覆われた赤土の丘におり、一人がカメラを回していた... いつ頃のことか分からないが、カラー映像だった。彼がカメラの向きを変えると、この巨大な緑色の三角形物体は、彼らがいる場所より低い雑木林からゆっくり悠々と上昇する。そして顔のレベル、つまりカメラのレベルまで上昇し、さらに上昇を続ける - だが低木や雑木がこの巨大物体から滑り落ち、大ペリカンか何かの群れが、その真下を移動している - 私は生涯これを忘れないだろう！ 私は屋外で起きたあの事件よりもこの映像をよく覚えている。

宇宙計画：神にかけて誓う。この映像は月面上の構造物を映していた - 箱状の物体 - 砂色に見えた。

[カール・ウォルフによるこれらの構造物についての重要な裏付け証言を見よ。SG]

そこには月面車が動き回っているのが映っていた。私はそれらをはっきりと覚えている。なぜなら、そのすべては私が子供のときに起きていたからだ。そのとき - 少し離れて - 宇宙飛行士たちがこれらの箱のように見える物体を指差していた。物理的形を持つ物体群は月面から浮揚して移動していた - アポロ計画飛行任務による映像だった。

**SG:** 月面上のその構造物はどんな様子でしたか？ どんな形でしたか？

**LW:** その構造物は月面の色と連続しているように見えたが、構造を持っていた。ちょうど巨大な箱のような物体だ - 四角張って角のある構造だった。窓はなかった。しかしそれらは明らかに人工物で、映像に撮られていた。それから丘の上に光体群や奇妙な物体群があった。

**SG:** それらの状態はよかったですか、それとも古びていましたか？

**LW:** いやいや - 新品同様だった。

**SG:** それらの UFO は移動していましたか？

**LW:** とても明瞭で、いろいろな場面にあった。その多くは月面車と一緒に映っていた - そのときの飛行任務のだ。幾つかは宇宙遊泳中の宇宙飛行士たちで、赤い照明をつけた何か暗い物体が彼らに近づくの映っていた。それはよく覚えている。すべての場面はとても素早く変わり、彼らが再びそれを見せることはなかった。アポロ計画飛行任務の時代がその映像の終わりだった。

こうして、私はこの会合に呼ばれ、母にかけた電話が遮断された後で、トラブルに巻き込まれたことを知った。私はベントウォーターズ基地通信部に呼び出された。どういうことになるかは分かっていた。一人の軍曹がそこにおり、その空軍大尉が私を事情聴取した。私はいろいろ質問された。そこにはオープンリールテープの録音機があった。彼らは質問を続けた。“君は陸線(\*固定電話)を使って機密情報を漏らしたことがあるかね？” 何度も何度もこう訊かれた。私は、いいえ、いいえ、と繰り返した。“君はその主張を続けるか？”と彼らは訊いた。私は、はい、と答えた。私は白々しい嘘をついていた。すると彼らはテープを回した - 私の声だった。‘もしもし、お母さん。信じてはくれないだろうけど...’ 彼らはこう言った。“ウォーレン、この基地のすべての電話は常時監視されている。このことを覚えておけ” それは追跡可能だという理由で、私には条項 XV が適用されないと告げられた。私には 300 ドルの罰金が科されることになり、たまたまこれ以上トラブルを起こしたときは、袖章を剥奪されることになった。その罰金の記録がある。説明はない。後になって私は、IRS(\*合衆国内国歳入庁)などいろいろなものを使って脅迫された。間違いだ。彼らは狂っている。この組織は狂っている。

その後、我々は食事をしていて。ペニストン軍曹もそこに座っていた。誰かが私に訊いた。“昨夜我々に起きたこと、一体あれは何だ？” 上官のペニストン軍曹がこう制止した。“口をつぐめ、ウォーレン、口をつぐめ” そんな具合だった。私は最悪じゃないかと思った。私はトレイを放り投げ、そのまま外に出た。その後状況はまったく悪化する一方だった。

その夜遅く、バスティンザ軍曹と私は電話を受け - 断言するが、同じことが他の人々にも起きた - 駐車場の車まで来るように言われた。バスティンザ軍曹と私は、その日の午後 5 時にこの車まで行くことになっていた。英国ではこの時刻は暗かった。我々はお互いに歩み寄った。私は、やあ、バスティ、調子はどう？ と言った。彼は“変わらない”と言った。それから我々二人はこの車に向かって歩いた。ドアが開いて、そこに男が一人座っていた。それから実際に起きたことは次のとおりだ。我々のそれぞれに二人の男が背後から近寄ってきた - 誰かが彼に向かって歩いていったのを確かに覚えている - そしてエアゾールスプレーのような音が聞こえ、目の前が真っ暗になった。その後何年もの間、私が思い出せる記憶は車の室内灯が明る過ぎたということだった。記憶はそこでとぎれた。実際に、我々は何かのエアゾールスプレーを浴びせられていた。私はやたらと涙(はな)が出て胸が苦しかった。私はどう見ても車の中でおとなしくなかったのも、暴行を受けた - まさにあばらを殴打され、ど突かれた。私は抵抗していた。バスティンザ軍曹も同じだったことを私は知っている。

私は自分が問題人物になったことを確信した。何年かして、彼もまた何回か電話していたことが判明している。我々はベントウォーターズ基地駐機場のどこかに連れていかれた。私は周囲の音によってそれを知った。我々がその車から降ろされたとき、私は顔面を切った。というのは、私は車が

ら転落し - 明らかに動けない状態だった - コンクリートと氷の地面で打ったからだ。そして運ばれた。文字どおり - 体ごとうつ伏せになって。涙が出てどうしようもなかったが、それを拭うことも何をすることもできなかった。我々が下に降りていったことは分かった。覚えておいてほしいが、その基地には地下施設があり、それは - 今でも - そこにある。

ひどい症状の中で、私はそれについてもっと覚えていることがある。このとき基地には外部の人々が多くいた。森にも幾つかのチームがいた。航空機がウッドブリッジに飛来し、基地の指揮官でさえそれに近づいたり、彼らがここにいる理由を訊ねたりすることができなかった。白いつなぎ服を着たチームが森の中をあちこちと動き回った。基地にはこれまで決して見なかった情報関係者もいた。こうしたことは、他の多くの人々によっても、すべて事実であることが立証されるだろう。

[この出来事を調査した外部チームの一員であったクリフォード・ストーン軍曹の証言を見よ。  
SG]

とにかく、私はその 20 分間だけは覚えているが、まる一日気を失っていた - 話は他の隊員の間でも知られていた。皆は、私が緊急休暇か、休暇か、あるいは基地を離れていたのだと話していた - しかし私は他でもない基地の地下にいたのだ - そこには他の隊員たちも降ろされていた。

そこには多くの先端技術の装置があった。巨大なアーチ形のガラスのような天井があり、ガラス板の壁 - 地下鉄の壁のような - 古い、しかし巨大なガラス板の壁があった。我々はある区画に連れていかれた。それが現実だったかどうかはともかく、私には思い出せる記憶がある。私はとても暗い空間を見ていた。そばに誰かがいて、この基地から北海に通じる多数のトンネルがあると説明していた。

次に覚えているのは、白昼の光だ - 基地の写真現像室から白昼の日光の中へ歩き出していた。私は多くの若者たちと一緒にこの中を通り抜けた。はっきり覚えているが、私はテーブルに寝かされ、空軍の上官たちが身元の分からない人々と一緒に私を見下ろし、何かを話していた。私は彼らを明るい光の中で見上げていた。ところで、そこから出てきたとき、私には静脈注射か何かの跡が付いていた。私には青あざがあり、包帯が巻かれていた。私はそれを認める。本当のことだ。私には跡があった。私は自分に起きたかもしれないことを考えたり知ったりするのが恐ろしい。だから、これらの記憶については少ししか考えたことがない。

私は母に手紙を書いた。手紙を書いたのは、チャールズ・ハルトが実際のハルト・メモを書く 1 週間半前だ。私はハルト・メモを情報公開法により取得した。それは空軍のレターヘッドがついた空想科学小説のような文書だ。その出来事の最小限の記録だが - そう意図したものだと思うが - その内容は空想科学小説のようだ。それは私が提供した情報に基づき、空軍自身がその存在を何度も否定した後で、1983 年に CAUS (Citizens Against UFO Secrecy; UFO 秘密政策に反対する市民の会) により公開された。

その物体が最初の夜に着陸した場所で、着陸痕の石膏型がとられた。チャールズ・ハルトが今でもその一つを持っている。彼はそれを人々に見せるし、議会の機関にはどこであろうと見せるだろうと思う。その大部分は結局失われてしまった。着陸場所の土壌分析が行なわれたが、それもす



べて流出してしまった。年月が経ち、1988年から1990年にかけて我々はコア試料を採取し、土壌分析を行なった。それはマサチューセッツ州スプリングボーン環境研究所で正式認可を受けた科学者たちにより行なわれた。レフト・アット・イースト・ゲート(Left at East Gate)という本の中にその研究成果がある。絶対間違いのない現象がその場所でだけ起きた - 地下3フィートまで。我々はその農場主と話をした。植物はこの部分にだけ生えない - 作物の種類を問わず - 20年間だ。しかしその土は周囲よりも黒っぽく、水を吸わない。それはほとんどが結晶質で、大変乾燥した泥と混じっている。凍結乾燥したコーヒーのようだ。

[ロベルト・ピノッティの証言、およびイタリアとフランスの着陸地点から得られた結果を見よ。それらは同様の变化を示している。SG]

言ってみれば、それは土壌を工業用電子レンジで超高温まで加熱し - それから瞬間的に氷点下まで冷却していた - ほぼ円錐状の指向性を与えて。

英国空軍基地の一つワッテン基地では、問題になったいずれの夜にも、これらの物体からのレーダー反射を観測していた。ワッテン基地では3日目と最初の夜、一つの物体が森の中に降下していくのをレーダーが捕捉していた。翌日米国空軍がワッテン基地に行き、航空管制官に対して、異星人の宇宙機が1機レンドルシャムの森に着陸したと言った。彼らは基地指揮官とも会い、そのレーダーテープを借りた。しかしそのテープは戻ってこなかった。これらはすべて実在の人々で、おそらく今も存命だと思う。もう一つ私が知っているのは、問題の夜のいずれかに、我々の基地から遠くないワッテン基地の周辺に、小さな物体が一つ出現したことだ。当然ながら、当時彼らはIRA(アイルランド共和国軍)の脅威に対して嚴重な警備をしていた。空軍警察犬部隊(K-9)が周辺パトロールをしており、犬は地面にピタリと身を伏せて嗅ぎ回っていた。これらの人々は今も存命だ。そのとき彼らは、フェンス際にいたこれらの二つの存在を見た - フェンスを突いていた - 三角形の機械がその隣にあった。彼らは照明器具のような物体でフェンスを突いていたが、空軍警察犬部隊を見てこの機械に逃げ込んだ。この機械は離陸し、我々の基地の方に向かって飛び去った。

人々がフィルムや写真について訊ねるなら、その確証はある - これは私が発表した話ではない。マイク・ベラーノ大尉が1985年のケーブル・ニュース・ネットワーク(CNN)番組の‘UFO: ベントウォーターズ事件’の中で、次のことを立証している。その翌日、彼は指揮官ゴードン・ウィリアムズを待機中のジェット機まで車で送った。パイロットが操縦席の円蓋を開けてこう言った。“そのカバンには何が入っていますか？”彼はこう言った。“本物のフィルムだ。我々はUFOの本物のフィルムと写真を持っているんだ”そう言って、ゴードン・ウィリアムズはカバンの中にあつたこの資料を直接パイロットに渡した。マイク・ベラーノはそう述べたのだ。ところで、このフィルムはどこに向かったのかと私が訊くと、ドイツということだった。そこには当時の空軍司令部があつた。そこから先だが、その輸送記録があつたことを我々は知っており、最終的にはワシントンに送られた。

私は保安部隊を名誉除隊になった。名誉除隊だ。私はこれまで自分について言われた不快な話を多く聞いてきた。だが私は自分の履歴書を持っている。私が自分の履歴書を持っているただ一つの理由は - ある空軍大佐から - 履歴書の一部をこっそり抜いておくと忠告されたからだ。彼が言うには、彼らは私を蒸発させるかもしれないということだった。“彼らは君を無害なものにしようとしている”と彼は言った。

[‘消される’ことについて述べているスティーブン・ラブキン弁護士の証言を見よ。SG]

私はまるでフランク・セルピコ(\*ニューヨーク市警の刑事)か何かのように見られていた。私は組織型人間ではなかった。なぜなら、私は誰にでも話したからだ。

不幸なことに、私の友人アラバマは無許可離隊(AWOL)をし、家に帰ろうとした。しかしオヘア空港で FBI に捕まり、直ちに任務に引き戻された。彼の望みは家に帰ることだけだったが、再び飛行任務に戻された。私は何もかも嫌になって完全に意気消沈し、上級曹長と一緒に車でパトロールしていた。そのときアラバマ - これは実在の人物だ - から無線が入り、彼は家に帰れなければ自殺すると言った。彼は小型トラックの向きをいきなり変え、柱に向かって突っ込んでいった。彼は“無線をそのままにしておいてくれ...”と言った。私には駐機場にいた全部隊がこれに応答したのが分かった。私はハルト氏がこれに関して何か言ったのを聞いたことがない。彼が私と同じ場所に立とうとしない理由は - 彼らが不愉快になることを私が持ち出すからだ。彼が言ったように、空軍はこれについてまったく傍観者だった。とにかく、アラバマは M16 ショート(\*自動小銃の一種)を持っていた。彼はそれを口にくわえ、自分の頭頂を吹き飛ばした。私が死を目撃したのはこれが最初だった - 19 歳の非業の死。私と彼は夜と昼ほど違った。つまり - 彼は南で私は北だ。彼はとても信心深かった。私はそれに敬意を払っていたが、我々に共通なものは何もなかった。彼はいいヤツだった。そして、彼らは我々の助けになることは何もしなかった...

私は何年もの間、信じがたい電話トラブルに見舞われてきた - 特有のトラブルだ - 私の郵便物は今でも盗み見されている。この国、英国では、何年もの間それが開封され、詫び状と共にプラスチックで封じ直されていた。我々の輸送物の多くは目的地に届かない。

[私はこれを立証することができる。我々が英国外にウォーレン氏の検証資料を持ち出すことはきわめて困難である。SG]

その後、パスポートの更新が近づいていたので、私はそれを送付した。それは私が旅行に出かけるまでに期限切れになるはずだった。しかし、それを送ってすぐに手紙が届いた。それにはこう書いてあった。“ウォーレン氏へ。あなたのパスポートは変造されているか破損しています。もう一度申請する必要があります” 一体どうなっているんだ？ しょうがない。私は必要事項を記入した。次の返答はこうだった。“ウォーレン氏へ。あなたは米国市民権を回復する必要があります” 何だっ？ 私はこれらの人々すべてに電話をした。最後は、ニューハンプシャー州ポーツマス国家パスポートセンターのこの女性だった。彼女はこう言った。“ここで何が起きているかは言えません” ややあって私は、聞いてください、私はレフト・アット・イースト・ゲートという本を書いていますと言った。すると彼女は“あのベントウォーターズの出来事...”と言った。彼女は“この番号に電話をください”と言った - それはニューハンプシャー州レバノンにある彼女の自宅の番号だった。私は彼女に電話をした。すると彼女はこう言った。“私はプリントアウトされた当局の書類を持っています: ‘当人のパスポートはある機密区分により無効。理由は当人の国外地域での公開討論の場で行なった機密防衛問題についての発言’, そして何かの記号, DOD(\*国防総省)の記号がその下にあります”こんなことが私に起きているが、まったく奇妙なことだ。

当時の我々の代理人、ニューヨーク市のペリー・ノールトンは、元米国司法長官ラムゼイ・クラークの友人だった。彼は我々のために会見を準備したので、私はクラーク氏に直接会った。彼は私にこう言った。“私は君のために何度か電話をするつもりだ”そして“君にこのことを言っておきたい - すべてを知った上での話だ - 彼らは君が核兵器について話したのがその理由だと言っている。それ以外にない”彼は続けた。“英国の人々は、そこに常時核兵器があるのではないかと疑っていた。でも、いいかい、パスポートが停止された理由は、君がしゃべった別のことにあったのだ”彼はそれ以上詳しくは語らなかった。彼は 2 度電話をし、国務省は謝罪と共にそれが誤りによるものだったと伝えてきた。

我々はこれまでできる限りのことをしてきた。私は議会の機関ならどこでもこの出来事を話し、誓約するつもりだ。私は自分の国に敬意を払っているし、人々には知る権利があると思う。

[我々はこれらの着陸事件に関して議会で証言すると思われる多数の目撃証人の名前を確認している。この事件は、それ単独で UFO と地球外知性体の問題が現実であることを立証しており、それを裏付ける文書、テープ、および着陸地点に残された痕跡や放射能測定などの証拠もある。SG]

米国陸軍大尉 ローリ・レーフェルトの証言  
Testimony of Captain Lori Rehfeldt  
2000年10月

ローリ・レーフェルトは1980年12月に起きたUFO事件のとき、英国のベントウォーターズ空軍基地第81保安警察部隊にいた。彼女はもう一人の同僚と一緒に、その夜遅く勤務に就いていた。そのとき、遠くに1個の物体が見えた。それは滑走路に着陸する飛行機のように思われた - 北海の方角から進入してきた。その物体は彼女たちの目の前で無音のまま爆発し、三つに分裂して滑走路を駆け抜けた；それから真っ直ぐに上昇し、見えなくなった。

... 私たちは、この航空機を見たときの様子をもう一度繰り返した。それが駆け抜けたときの速度は途方もないものだった。それは通常の航空機のように進入してきた。そして停止し、こういう動き(\*上下左右)をし、次の瞬間三つに分裂した。それが西向きに加速しながら滑走路を駆け抜けたとき、その速度は驚異的だった。他に私たちの注意を引いたのは、それがまったくの無音だったことだ。それは何の物音も出さなかった。それが何だったのか、私たちにはまったく分からなかった...

それが停止し、素早く上、下、左、右に動いたとき、その動きはとても幾何学的だった。つまり、それは普通の動きではなかった。おそらくそのことが、何よりも私たちを当惑させたのではないか。なぜなら、それは実に異常なことだったからだ。それはジェット機よりも遙かに速かった...

たまたま彼は空軍で働く電気技術者だった。彼はこう続けた。“彼らがそこで何か見つけたことを、あなたはよく知っているようですね。私たちはそのプラスチック、そのとき手に入れた物質を扱う仕事をしています。最初その物質はほとんど手つかずでしたが、今ではそれを利用することができ、さらに改良することもできます” 彼らはそれを利用することができ、それは強い耐熱性を有していて高温に耐えることができるということだった。彼によれば、それは灰色の物質で、もともとこの場所にあったものではないという - そこに何かがあったことを彼は立証していた。

米国陸軍軍曹 クリフォード・ストーンの証言  
Testimony of Sergeant Clifford Stone, US Army

2000年9月

ストーン軍曹は、1940年代初期かそれ以前にまで遡る UFO と地球外知性体の歴史について、驚くべき話を語る。ダグラス・マッカーサー将軍は、1943年に惑星間現象調査部隊と呼ばれるグループを組織し、この問題の研究にあたらせた。それが今日まで続いている。彼らの目的は起源不明物体、特に地球外起源物体の回収である。彼らは現場の情報資料を入手し、それを‘この情報の管理者’に引き渡す。ブルーブック計画にさえ、ある精鋭調査部隊があったとストーンは言う。それはブルーブックの外部にあった。この部隊はブルーブックと協力して動いていたと考えられていたが、実際はそうではなかった。ストーンは墜落した ET 宇宙機の回収を行なう陸軍チームの公務の中で、地球外知性体の生存者とその遺体を見たことがある。彼はこう考えている。地球外知性体は、我々が学んで精神的に成長するまでは、深部宇宙に進出することを許さないだろう。そして、我々がまず彼らの存在を受け入れなければ、彼らは間もなく自らの存在を知らしめるだろう。

1942年2月26日、ロサンゼルスでの戦い(Battle of Los Angeles)と一般に呼ばれているこの日に、ロサンゼルス上空を飛行する15機から20機の未確認航空機がいることを我々は知る。我々は直ちにこれらの物体を撃墜する作戦でこれに応えた。第37沿岸砲兵部隊は1,430発の砲弾を消費した。我々は直ちに、これらの航空機が飛来する枢軸国(\*日独伊)の秘密基地があるか、これらの航空機を格納していた民間飛行場があるか、探し始めた。しかし、それを証拠立てるものは何もなかった。我々が取り組んだ調査は、結局何の結果も残せなかった。

同じときに、太平洋でも人々は同じことを経験していた。つまり、フリーファイターズと呼ばれるものだ。マッカーサー将軍は部下の情報将校たちを指揮し、何が起きているかを調べさせた。私には、マッカーサーが1943年に次のことを知ったと信すべき根拠がある。つまり、地球のものではない物体と他惑星からの訪問者たちが実際に地球に来ており、第二次大戦と呼ばれる世界的な出来事を観察しているのだと。彼が直面した問題の一つは、もしそれが事実で、彼らに敵意があったとしても、我々は彼らについてほとんど何も知らず、防衛手段をほとんど持たないということだった。

マッカーサーは、惑星間現象調査部隊と呼ばれる部隊を組織した。

[マッカーサーが ET 問題に関与していたこと、また彼がニューメキシコ墜落事件で回収された宇宙機と地球外知性体について知っていたことを述べているレオナード・プレツコ軍曹の証言を見よ。SG]

その部隊は後にマーシャル将軍に引き継がれることになった。それが今日までずっと続いている。ただし名前は変わり、その履歴もいまだ明らかになっていない。それは UFO を調査する正式の組織ではなかったというのが陸軍の説明だ。しかし、それは将軍によって組織され、結果を残し、彼らがありふれた物体ではなく、惑星間宇宙機だと結論しているのだ。彼らは起源不明物体、特に地球外起源物体の回収のための総合情報作戦の一部として、まさしく今日行なっていることを続けてきた。彼らの目的は、その情報を評価し、現場の情報資料を収集し、それを処理してある種の有用

な情報に加工し、その分野 - それを知る必要性 (need-to-know) を持つ人々や、その情報の管理者とでも呼ぶべき人々に行きわたらせることだ。

マッカーサーの配下にあった将軍の一人、当時の陸軍航空隊の将軍がマッカーサーの所に戻り、こう言った。“我々が手に入れたものは、この地球のものではありません” ここで言うおきたいのは、この頃にはドイツでさえ我々が訪問を受けているという証拠を発見し、何らかの物理的証拠を持っていたということだ。マッカーサーは確実に物理的証拠を持っていた。私が[陸軍でこの問題に取り組んでいたときに]見た文書からは、その物理的証拠が何だったかは分からない。しかし証拠はそこにあった。

特に私の注意を引くのは、ドイツがこれらの物体の一つに対して逆行分析 (back engineering) を試みたかもしれないということだ。我々は確実に逆行分析を試みた。しかし、その逆行分析を行なうためには、我々の技術自体がその獲得する技術と同程度でなければならない。...

1950年代、米国空軍はブルーブック計画の外部にUFOを調査するための精鋭部隊を持っていた。ブルーブック側は彼らが協力しているものと考えていたが、そうではなかった。この部隊はもともと第4602空軍情報局部隊として組織された。その平和時の任務にブルーフライがあった。ブルーフライ作戦の目的は、地球に墜落した起源不明物体を回収することだった。回収の対象が明確に地球に墜落した物体だったことを覚えておくのは重要だ - なぜなら、当時の我々には宇宙機などなかったからだ。この結果、ライト-パターンソン基地に監視要員が置かれることになった。UFO報告が入ってくると、彼らはこの墜落物の回収チームを派遣する必要があるかどうかを知るために、それを綿密に調査した。

空軍は監視要員を使ったことを否定する。しかし、それは確かに行なわれたのだ。ブルーフライ作戦の平和時の目的は、現場に出かけて行って地球に衝突した起源不明物体を回収することだった。その後1957年に、その対象はすべての起源不明物体に拡張された。対象はやはり宇宙機だった。それは1957年10月時点で、ムーンダスト計画と呼ばれるものの一部になった。

ムーンダスト計画は、ただ2種類の物体を回収するための総合的な実地調査計画だった：一つ目は、米国以外に起源を持つ物体で、地球の大気圏に再突入し地物に激突するもの。当然我々は、技術的および科学的な情報の観点から、どのような潜在的な敵に対してもその技術的能力を決定、または解明することに関心があった。なぜなら、我々米国の知られた敵であるソ連は、当時宇宙船を打ち上げていたからだ。

二つ目の関心領域は起源不明物体だ。今日我々は、相当数の起源不明物体があったことを知っている。それは知られていた宇宙ロケットの打ち上げ、その落下時刻、あるいはその他のいかなる宇宙廃棄物の地球落下とも関連のないものだった。

要するに、ムーンダスト[計画]とブルーフライのもとで、この地球のものではない外来物の破片が回収されたのだ。

今日我々の前に立ちはだかる機密性の程度は、年月を経る間に変化してきた。第二次大戦以

後、たとえば 1969 年までの間、機密性の分類は 11 あった。現在は三つだ：部外秘、機密、最高機密。だが、もしあなたがこうした分類の規準を超える機密情報を持つとすれば、それはあなたが特殊接近プログラム(Special Access Program; SAP)を持つ場合だ。その種の情報は、公式の認可なしには人々の中に持ち出すことができない。

UFO について論じるとき、最後はこの疑問に行き着く。米国はもちろん、どの政府でも、秘密は隠しておけるものか？ その答えは、はっきりとイエスだ。だが、情報関係機関が使えるきわめて強力な武器の一つは、米国民、米国の政治家、暴き屋(デバンカー) - UFO 情報の嘘を何とかして暴こうとする人々 - が持つ傾向だ。彼らはすぐに出てきて、こう言う。我々は秘密を隠しておけない、秘密なんか隠しておけるものじゃない。では、本当はどうか。秘密は隠しておけるのだ。

国家偵察局(NRO)は何年もの間秘密のままだった。NSA(国家安全保障局)があるかどうかさえも秘密だった。原子兵器の開発は、それを一回爆発させ、何が進行しているかを一部の人々に言わなくてはならなくなるまで秘密だった。

そして我々は、自らの理論的枠組みにより、高度に進歩した知的文明が我々を訪問するためにやってきているという可能性または確率を、受け入れないように条件付けされている。きわめて信頼できる物体の目撃報告、それらの物体内部にいた生命体の目撃報告という形で、証拠は存在する。それでも我々は平凡な説明を探し求め、自らの理論的枠組みに合わない証拠の数々を投げ捨てる。だから、それは自らを守ることでできる秘密なのだ。それはありふれた風景の中に隠される。情報機関に出かけていき、この情報を出せとせがむのは、政治的自殺行為だ。私はその方針で彼らの多くと協力してきたから分かるが、議会の大部分の議員は尻込みし、それをさせないようにするだろう。ロズウェルで起きたことについて、議会の調査を単刀直入に要求した三人の議員の名前を挙げることができる。

私が聞いた実に馬鹿げた発言は、それを行なう人間は議長でなければならないというものだった。それで私はミシシッピ州選出のある上院議員に、ためらわずにそれをしてもらえるかどうかを訊いた。答えはノーだった。私はさらに、それを書面にしていただけるか？ と訊いた。私はそれを書面で貰ったが、公開するのをためらっている。あなたにはお見せするが、公開はためらう。なぜなら、私はそう約束したからだ。

政府のファイルにそれはあるのだから、我々はその資料を入手する必要がある。そしてそれが最終的に破棄されてしまう前に、それを公開させなければならない。一つの好例がブルーフライとムーンドアストのファイルだ。私は空軍が認めた秘密文書を入手した。私がさらに多くのファイルを公開させるために議会の議員たちの助けを借りたとき、それらの文書は直ちに破棄されてしまった。私はそれを証明することができる。

そのどこかの段階で、彼らはその資料を見るかもしれない。そして、もしそれが漏洩の危険に曝されたら米国の国家安全保障に深刻な影響を与える、何かきわめて機密性の高い情報があることを知るかもしれない。少数の人々だけがそれに接近できるようにするために、その情報はまだ保護される必要がある。彼らはあまりにも人数が少ないため、1 枚の紙に名前を書けるほどだ。こうして、特殊接近プログラムが存在することになる。特殊接近プログラムにあるはずの管理はそこにはない。

文書を保護する仕組みと秘密のプログラムを実行する仕組みを議会が精査したとき、彼らは特殊接近プログラムの内部に特殊接近プログラムがあることを知った。つまり、そのすべてを議会が管理統制することは本質的に不可能だった。信じてほしい、そのすべてを管理統制することなど、本質的に不可能なのだ。

さて UFO の場合、それと同じ原則が適用される。こうして、情報関係機関内の 100 人以下の小さな核、いや私はそれが 50 人以下であることを知っているが、それがすべての情報を支配している。それはまったく議会の調査や監視の対象ではない。だから、議会はその核心に迫った質問を掲げ、公聴会を開催することに踏み切る必要があるのだ。

任務の種類はかなり多いが、端的に言えば、私は間違いなく墜落した ET 物体の回収という種類の作戦に関わっていた。我々は残骸が生じる次の UFO 墜落や着陸を回収部隊にいて整然と待っている、多くの人はそう考える。そのようなことはない。我々は軍の中で通常の仕事をし、日常生活を送っているのだ。しかし、もしその区域で出来事が発生し、あなたが専門知識を持ってそれに前向きに関わりたいと思う人々の一人なら、招集される。

さて、私にこのことの準備をさせるために、入隊後のきわめて早い段階で彼らは私をアラバマ州フォートマクレランにある NBC 学校に送った。そこは NBC 要員のための 3 週間の学校だった。NBC とは核 (Nuclear)、生物 (Biological)、化学 (Chemical) を意味する。私が UFO 回収に関わったのは、常に NBC 部隊としてだった。部隊は、それが核事故だったかのように取りかかり、展開する。それが核であれ、生物であれ、化学であれ、それらの事故が起きた場合の対処手順はすでに確立されているのだ。だから、我々はそのように行動する。もし我々がそこに接近して回収を行なうことができるなら、もし我々が密かに人知れずその中に入って残骸を採取できるなら、我々はそれをする。もし公式に許可された偽装計画、たとえば嘘の新聞発表をする必要がある場合、我々はそれもする。

たとえば飛行機事故が起きた場合、それを処理する標準的な手順というものがある。墜落した ET 宇宙機やその残骸を回収したり採取したりするとき、それと同じ手順が利用される。残骸が重要だと私が言う理由は、それが高度に進歩した装置だからだ。言われているほど多くの墜落があったわけではない。それらには欠陥があったのだ。なぜなら、それはあなたや私と同じような肉体を持つ人間 (\*異星人) の知性がつくったものだからだ。人間である限り、失敗はする。

さて、我々は高度に知的な文明について語っている。高度に無能な文明についてではない。我々は必要な手順を踏むし、彼らもそうする。しかしそれに加えて、我々が出向くときには回収を行なう。その回収を行なうとき、我々は飛行機事故か危険物質を処理するときのようにそれを扱う。そうするのが安全だからだ。その手順はすべて決められている。唯一の問題は、これが地球のものではないことを直ちに認識できる人々がそこにいることだ。確かに、ブルーフライの [ET 宇宙機] 回収では、現場分析ということが行なわれた。

要するに我々の場合は、ミサイルがどういうものか、飛行機がどういうものかを知っている専門家がそこにいる。彼らはこの物質を調べ、それが何でないかをはっきりさせる。こうして、我々はただ一つの可能性に行き当たる。この惑星に起源を持たないもの。これがブルーフライの目的だった。迅



速な現場分析を行なうことはきわめて重要なことだった。さて、それが残骸なら、その物質を梱包するときには危険物質を梱包するときと同じ扱いをする。そして予防措置がとられる。もしそれが機体全体だった場合、きわめて厳重な予防措置がとられる。なぜなら、ET たちに敵意はないと私は主張しているわけだが、それでもなお死亡に至る重大な事故が発生することがあり得るからだ。これらの任務に向かわなければならなくなったとき家族がどんな状況だったか、私はそれを話すつもりはない。なぜなら、起きたかもしれないことを考えると少々心が乱れるからだ...

当然、我々はその物質を秘密にしようとする。特に機体が大きく、円盤型やくさび型をしている場合にはそうだ - 我々は時々それを回収したが、素晴らしい形だ。特にそれを搬入のためにトラックに載せる必要がある場合、予防措置がとられる。それをトラックに乗せて安全な収容場所まで運ぶときには、我々がそのトラックを追跡する。トラックは 800 ナンバーだ。それに故障が発生すると、我々は警護のために一緒にそこに留まる。一方、彼らは連絡すべきある電話番号を持っていて、その機体を安全に収容場所まで移動するための支援が直ちに得られる。手順はおよそこのようなものだ。実を言うと積荷書類があって、そこにはその電話番号が書かれている。そして、ある暗語が使われる - 我々がいつも使った暗語の一つを教える; タバスコ(Tabasco)だ。

ET 宇宙機の場合は特別チームがそこに行く。もしそこに生物学的要素がある場合、彼らはどうしたらよいかを知っている。我々の大きな懸念の一つは、まったく外来の起源を持つこの生命体による地球の汚染という、生物学的なことだった。

私は、以下のことを言明する覚悟ができています。私はこの地球上でつくられたものではない、起源不明の宇宙機があった場所を見てきた。その場所では、この地球で生まれたものではない生命体の生存者と遺体を見た。我々はそれらの生命体との間で、彼らが言うところの‘接続(interfacing)’を行なった。彼らは人々にある考えを吹き込むための学校を持っている。私自身はそこに行ったことはない。私は常に拒否した。私が軍を辞めたのは 1990 年だったが、そのとき彼らは私を 2 箇月間拘束し、辞めるのを考え直すように圧力をかけた。私の 1989 年 12 月 1 日付の除隊命令を彼らは取り消した。繰り返すが、彼らは規則を犯して私の退役の承認を未決定とし、2 箇月間拘束した。すでに承認されていたにもかかわらずだ。それは私を説得し、残留させるためだった。

我々は、どこかの外国ではなく、他の太陽系に起源を持つ異星人とコンタクトを持っている。私はずっとそれに加担してきたし、そのために働いてきた。またそれを目撃してきた。そして私は、我々が行なっていることの一部が実に、実に、実に、実に恐ろしいものであることを知っている。彼ら(異星人)は我々に敵意を持っていない。だが、我々はこの瞬間にも彼らの敵だ - 彼らの敵だと考える十分な理由がある。我々は他のある国が何かをしないかと心配している。私は自分が時間と闘っているのだと思い定めている。我々は宇宙の軍事化に向かってひた走っている。私にはこのことを人々に確信させる時間が残り少ない。宇宙の軍事化が達成されるや、我々の前にはまったく新しい技術の世界が明らかになるだろう。

NASA は、我々がいわゆる恒星間旅行を達成するのにあと 1,400 年かかると言う。敢えて言うが、今世紀末までに我々はそれを成し遂げるだろう。もし我々が精神を成長させるために何もしないなら - これを言うのはつらいことだ - だが、もし我々が精神を成長させるために何もしないなら、恒星間旅行を達成することはない。彼ら(異星人)がそれを阻止するだろう。さらに悪いことに、彼ら

(異星人)はこの地球の人々の前に前触れもなく姿を現すだろう。

我々はこの技術を獲得したい。この技術を我々の技術の一部としたい。これから 25 年以内に、我々は宇宙を軍事化するだろう。宇宙軍事化の結果として、我々は新しい技術を獲得し、恒星間旅行を可能にする新技術を発展させるだろう。我々が精神的に成長しない限り、その結果はそのまま彼ら(異星人)の脅威になる。

もし我々が精神的に成長しないなら、異星人たちがついに我々の前に姿を現す状況を招くだろう。私はそう思っている。彼らは姿を現す。地球人はそれを阻止する力を持っていない。ET たちは、我々が宇宙の脅威として進出するのを阻止するためにそうするだろう。もしこれが起きれば、それは世界中の人々にとり思いもよらないことになり、何らかの深刻な問題が持ち上がるかもしれない。

[宇宙の軍事化を懸念するウェルナー・フォン・ブラウンについて語ったキャロル・ロジン博士の証言を見よ。SG]

これは米国だけのことを言っているのではない。それは全世界が知らされなければならない真実だ。その真実とは、人類は孤独ではない、我々は他の惑星、他の太陽系の人々の訪問を受けているということだ。

情報分野の諸機関が UFO 情報を機密にしたとき、彼らの意図は善意だったと私は信じている。彼らは幾つかのきわめて深刻で困難な疑問に直面したはずだ：我々はもはや宇宙で孤独ではない、この惑星を知性体が訪問している、このことを世界中の人々が知ったらどんなことが起きるか？そこにあったのは善意だったと思う。国家の情報機関として、その技術を軍事応用のために獲得しようとするのは当然だ。こうして、その知識は可能な限り厳重な機密として守られるようになる - ほんの一握りの人だけが知る秘密の厳守、つまり特殊接近プログラムだ。しかし、この秘密を守るとはまったくの善意だったにせよ、それは[今]人々を苦しめていると思う。

UFO を見ただけの人々を気違い扱いにする権利は、どの政府にもない。特定の人々が最後は精神的に追いつめられ、その多くがついに自殺したり自滅したりするのを見ている権利など、どの政府にもない。このようなことが起きているのだから、我々には自らの考えと立場を考え直す義務がある。我々には秘密の壁を打ち破り、真実を明るみに出す責任があるということだ。その真実をいかにして明るみに出すか、我々はそのことに対して責任を持たなければならない。我々は真実を語らなければならない。

そしてこれは怖い話ではない。あなたは ET たちが神の概念を持っていることを知るだろう。あなたは彼らが家族を持っていること、彼らには文化があること、彼らには好悪があることを知る。あなたは我々の間にも、それらと異なるものではない、似たものを見つけるだろう。それはあなたにとって真実への道の始まりだ。我々の現在の問題は、我々が彼らを話題の対象として見ているということだ；驚嘆したり、びっくりしたりする対象として。

さて、私の話に戻ろう。我々は NBC(核・生物・化学)下士官になるための訓練を修了したばかりだった。友人がバージニア州フォートリーまで私を送ってくれた。彼はメリーランド州フォートミード

に行くところで、“一緒に来いよ、君の基地まで車で送るよ”と言ってくれたのだ。こうして我々はフォートリーまでの道中、UFOについて語り合った。

フォートリーに戻って数週間後、この友人から電話があり、私はフォートミードにいる彼を訪ねることになった。彼がいるはずのフォートミードに着くと、彼らはこう言った。“彼はこれから忙しくて手が離せなくなる。後で自由になったら、すぐにそれを君に知らせる”この人物は、“ところで、君はペンタゴン(国防総省)に行ったことがあるか?”と訊いた。当時私はペンタゴンに行ったことがなかった。すると彼は“そこは実に特異な場所だ。それじゃ君を 25 セント旅行に連れていこう”と言った。こうして我々はペンタゴンに出かけた。我々が入っていった。私は与えられた小さなバッジを着けていたが、それには何の図柄もなかった。しかし同行した人物のそれには図柄があった。彼は警備員に、私を連れてきたことは許可されていると言った。私を内部に導いていくのは常にこの人物だった。ついに我々はエレベーターのある場所までやってきた。我々はそれに乗り、降下した - どれくらい降下したのか、私には分からない。ペンタゴンの下に延びる階段が 1 つなのか、2 つなのか、あるいは 15 もあるのかは知らない。しかしとにかく我々は降下した。エレベーターから降りたとき、そこには 2 本のモノレールがあった。ペンタゴンの地下にはモノレールがあったのだ。それらは巨大な円筒のようで、中央部がやや太く、それぞれの側に 1 両ずつあった。つまり、これらの小さなモノレールには弾丸に似た車両があり、前に二人、後ろに二人乗れるようになっていた。我々はその一方のモノレールに乗り、出発した。20 分も乗ったかと思われたが、これは推測ではっきりは分からない。

モノレールから降りたとき、彼はこう言った。“この廊下を下った所にある面白い場所を幾つか見せよう”我々は廊下を下っていった。廊下の遠い突き当たりにはドアがあるように見えた。そのドアにどンドン近づいていったとき、この案内者は振り向いて“いいかい、物事は必ずしも思われているようなものじゃないよ”とはっきり言った。ペンタゴンの下にあるこれらの地下施設について、多くの人は知らないと言っている。ほんのわずかな人間だけが、ペンタゴンには地下モノレールがあり、別の場所と接続していることを知っている。彼はこう言った。“それはここにある壁のようなものだ - それは壁ではないかもしれない”それで私は“それが壁ではないって、どういう意味ですか? あなたは何を言っているのですか?”と訊いた。彼が冗談を言おうとしたのだと思ったのだ。そのとき彼は“いや、それは君の後ろの壁のようなものだ”と言った。私が見ると、それは壁のように見える。そこには継ぎ目のようなものは何も見当たらない。そのとき彼は私を押した。私は身体を支えようとしたが、実際にはそこに開いたドアがあった。

そのドアを通して進むと、野外テーブルのようなものがある。その野外テーブルの後ろに、この小さな生命体があった。その生命体は 3 フィートよりわずかに大きかった。何度も報道された 3 フィート半の身長をもつ生命体だった。しかし、この生命体のやや後の両脇には二人の男がいた。辺りを見回しているとき、私はこの小さな生命体と目が合った。そのときの感じはこういうものだった。私はそれを見ているが、私の心から何もかもが引き出されている - 彼は私の全生涯を読み取っている。私がそこで実際に感じたことを述べるのは難しい - そのときまでの人生がほんの数秒で通り過ぎていく。つまり、私はあらゆることを感じていた。

私はしゃがみ、自分の頭をこのように抱えて床に倒れたのを覚えている。次に覚えているのは、目覚めて[フォートミードの]友人の事務所にいたことだ。私がジャックの事務所に戻ったとき、彼ら

は私に、一日中そこにただけで何事もなかったと言った。だが、私の方がよく知っている。

生命体たちと幾つかの政府機関の間には、ある種の交流がある。このことをはっきりと述べるために、私はここまで立ち入るつもりだ。今のところ、彼ら(生命体)が我々に自滅のための技術を与えていると述べるつもりはない。彼らの方針はそうではない。地球での彼らの目的は科学的かつ人道的なものだ。

我々がこれまでどんなことをしてきたか、またどれほど自分自身を傷つけてきたかを見れば、我々がとても愚かだったのは明らかだ。今日我々は、これまで自分自身を傷つけてきたことに気づき、それを修正しようとしている。まさにその点で、ET たちが調査していることがある。ここに損なわれつつある生物圏がある。彼ら(ET)はそれを修復するために来ているのではない。彼らは、我々がそれにどう対処するかを見にきている。しかし、一政府がそのすべての責任を負い、すべての事態を把握することはできない。全体的な状況を言うなら、我々は一つの人民、協調する人民として、結束して取り組まなければならないということだ。我々は前進し、ついには他の太陽系にある惑星を訪問するという大いなる一步を踏み出すために、自ら準備を始めなければならない。繰り返しの言葉を使うが、我々はまとまった人民、惑星地球の人類を代表する人民として、精神的に成長しなければならない。我々を訪問しているすべての種族(訪問者は一種族ではない)と様々な政府 - 米国政府だけではなく世界の政府 - との間には、確かにある種の - その程度は分からないが - ある種の対話がある。これらは主に先進諸国の政府だ。なぜなら、現時点で宇宙旅行を行なっている国家が彼ら(異星人)の最大の脅威になっているからだ。

早い時期に私が経験したもう一つのことは、見てはいけないものを偶然見てしまったことだ。ある施設にいたとき、私は友人と一緒にグリーンフィンガームを見下ろすバルコニーに行った。そこにはプレキシガラスの窓があり、バルコニーと階下に続く部分とが仕切られていた - 何が話されているかは聞かえない。しかし彼らは何か映画を上映していた。その映画は様々な種類の、今日我々が UFO と呼ぶものを映していた。様々な種類の異星人が映し出されており、その中には我々とよく似たもの、我々と似ているが際立った違いを持つものがいた。男たちがこちらに上がってきたが、我々はそれに気付かなかった。“君たちはここで何をしている？”と彼らが訊いた。“このとおり、軽食堂に行きたくなかったので、ここに座ってスナックを食べていただけです”と我々は答えた。彼らは“今すぐ一緒に来い”と言った。こうして我々は、襟首やシャツをつかまれ、押されながら階段を降りた。

階段を降りきると、彼らは我々をドアから押し出し、バンに乗り込んだ。そこにはパネルバンが待っていて、彼らは我々をそれに押し込み、ドアを閉め、そこから走り去ったのだ。連れていかれた場所がどこかは知らない。最後に降りた所は、一体構造をした軍隊様式の建物だった。我々はその中に連れ込まれ、部屋に入れられた。そこには軍用簡易ベッドと照明付き机が一つあった。我々はその中に呆然と坐り、なぜ彼らはこんなことをしているのか？ と考えた。なぜこんなことが行なわれているのか？

5 日目の夜、私は外に出され兵舎まで送られた。そこで委細を報告し、ベッドにもぐり込んだ。疲れ切っていて、とにかく眠りたかったのだ。翌朝、土曜日の朝だったが、私は CQ つまり当直下士官に起こされる。“しばらく見なかったね”と彼は言う。何しろ私は二人の男の所に連れていかれていたのだ；一人は善玉のように振る舞った。もう一人は先に立ってこう言った。“ヤツを信用しちゃ

ダメだと言っただろ。ヤツを連れ出せ。始末しよう。撃ってしまえ” その善玉はこう言う。“まあまあ、もう少し話そう” そして悪玉役の男を外にやった - 保安警察ではよく使う手だ - 善玉警察官と悪玉警察官。悪玉役の男は食べ物を取りに出ていった。

その善玉役はこう言う。“まあ聞けよ、君はこの UFO に関係した仕事をしたいと思っているな” “いいえ、したくありません”と私は言う。すると彼は“だが君はそれを経験したじゃないか”と言う。“君はそれに少しは関係してしまったのだ。あそこで見たものはまやかしではなかった。この仕事をしないか？ 我々と一緒に仕事をしないか？” 私は“いいえ、したいとは全然思いません”と言う。最後に彼はこう言う。“いいかい、君はこの仕事をしたい、するようになる、それについてもっと知るようになる。今年中には、我々が知っていることをすべて公開することになっている。しかし繰り返すが、この世界は安全な場所ではない。技術的な観点、軍事的な立場から、我々はこの国の潜在的な敵が知るよりもさらに多くを知る必要がある。だから君に頼んでいる - 我々と一緒に働いてくれ” こう言われて私は考えてしまった。何しろ私は若かった。私が考えたのは次のことだった。これは私が実際に身を挺して関わってきたものだ。面白いことになりそうだ。そのことについてさらに詳しく知ることができるし、今までの疑問に答えが見つかる。これまでの人生で起きた事件についても、一層よく理解できるようになる。

私はこう確信している。一つ、彼らは私を軍の中にとどめておきたかった；二つ、彼らは私がこの計画に参加することを望んでいた；三つ、この先いつか、私がこのことについて何かしゃべり始めるかもしれないということについては、それほど心配してはいなかった。彼らが恐れていたのは、私が真相を掴むのではないかということだった。もし私が、何かほんの少しの証拠でも握っていたとしたら、私は一体どうなっていたことか。彼らは私が軍を飛び出すことを望まなかったのだ。彼らは私が留まることを望んだ。彼らは私が進んで‘学校(スクール)’と呼ばれる所に行くことを望んだ。しかし私は、‘学校(スクール)’と呼ばれる所に行くとは一度も確約しなかった。

もし私が学校に行けば、そこには新しい世界、新しい道が開ける、私はそう言われた。しかし、私はそれに同意する必要があった。また、そこに行くためには、進んでその書類に署名する必要があった。しかし、その覚悟はできていなかった。私は、この計画に関わりその学校に行った人々を見てきた。はっきり言うが、私は彼らの人格が好きでなかった。そこへ行けば、人は何か特別な人間になる。なろうと思えば人を見下す立場にもなる。その考えが好きでなかった。その道は、新しい世界が開けるはずの道ではなかった。自分がなれるのはせいぜい奴隷で、その逆ではない。私にはそう思えた。

これらの人々の一部は、私の好きな気質ではなかった。私は彼らの態度が好きでなかったし、彼らのようにはなりたくなかった。恐れたことの一つは、もしその学校に行ったら、私も彼らと同じように変わるだろうということだった。

さて、事件があり、[ET宇宙機の]回収もあった。しかし回収は少なく、ごく稀だった。1969年に起きた事件の一つは、くさび形宇宙機の回収で、インディアンタウンギャップ(\*ペンシルバニア州)で発生した。その日は寒かったことを覚えている。冬だったが、雪はなかったと思う。我々は第 96 民事作戦群で実働演習中だった。私は第 96 民事作戦中隊の一員で、NBC(核・生物・化学)担当下士官だった。知らされたのは、撃墜事件があり、その回収を支援する必要があるということだった。

現れた人物は、我々がどこに行くかを正確に知っていた。我々はその集結地に向かい、そこからさらにインディアンタウンギャップにある別の場所に行った。民間人やもの好きなど、その類のことが絡む問題は何も起きなかった。状況を言うなら、我々は回収を行なったのだ。目の前にあったのは人間がつくったものではなかった。

我々がそこに着くと、あるチームがすでに待機し、物体の周りを投光器が照らしていた。私は APD27 を持ってその物体にできるだけ近づき、線量を計測するように言われた。その作業をしながらはっきりと理解したのは、見ているものが地球起源のものではないということだった。取り乱したくないので、これ以上それについて述べるのは気が進まない...

ベントウォーターズはとても興味深いもう一つの事件だ。ベントウォーターズのとて、我々は情報を得るためにそこへ行った。物理的証拠という点では写真があったし、映像記録もあった。通常を上回る背景放射線量も計測されていた。それほど高いわけではなかったが、通常を上回っていた。インパクトポイントと呼んだ地区で、我々は幾つか異常なものを見つけた。そこでは木々の頂部もなぎ倒されていた。我々がそこに着いたのは 12 月も終わりの頃で、正確には 12 月 28 日だった。

[この事件についてのラリー・ウォーレン、ニック・ポープ、その他の証言を見よ。SG]

我々は資料を収集し、リンゼイ空軍基地(\*ドイツにあった米国空軍基地、現在は閉鎖)に持ち帰った。入手することのできたすべての具体的証拠、そこにあったすべての文書記録類だ。レーダーで捕捉された目撃もあった。英国政府も米国政府も、これらの目撃については知っていた。我々が入手した具体的証拠は、リンゼイ空軍基地に持ち込まれた。それはそこで整理要約され、SHAPE (ヨーロッパ連合軍最高司令本部)に説明するための幾種類かの資料が作成された。SHAPE の誰に説明されたかは知らない。しかし我々がそれをする必要があったことは確かだ。その情報は特別伝書便に託され、ワシントン D.C.地区に近いある空軍基地に運ばれた。さらにその後は、バージニア州フォートベルボアに移されたと思う。そこは当時、米国空軍地上活動センター特別地上活動群司令部だった。彼らはこの資料を受け取り、それを処理し、最終的な情報資料に仕上げた。

それがリンゼイ基地に行った理由は、そこに米国空軍地上活動センターの派遣隊があったからだ。ベントウォーターズに最も近い派遣隊はリンゼイ空軍基地にあった。その資料を入手し、米国に持ち帰るまで護送する任務を負ったのは彼らだ。彼らがあれこれ質問をしていた。容赦のない、重要な質問をしていた。彼らはこれに関わった技術要員たちに技術的な質問をしていた。私は何人かのレーダー操作員たちが聞き取りされたことを確かに知っている。その中には英国人も米国人もいた。また、その 2 夜に現場にいた一部の隊員たちが聞き取りを受けたことも確かだ。

私は 1989 年 6 月、7 月のベルギー UFO 事件にも関わった。我々は、ベルギー上空を飛行した UFO について情報を評価し、データを収集していた。それらの UFO は、ドイツ全土の上空をも飛び回った。ソ連領に近い国境でも事件が起きた。それが巨大な物体だったために、ソ連は非常に動揺した。物体は三角形をしており、いずれの一边もフットボール場約 3 個分の大きさがあった。物体はいわゆる緩衝地帯の上空を飛んだ。そのとき我々は皆不安におののいた。

事件は夏、8 月頃に起きた。我々は身の毛がよだつ思いをした。恐怖などによる身震いだけでな

く、ある種の生理学的作用がそこに生じていた。ひとたびこの事件がおさまると、我々は戦闘機に警戒態勢をとらせた。彼らには、ソ連機が緩衝地帯を越えて近づいているので、それを迎撃するのだと説明した。ソ連もまた同じ行動をとった。UFO がソ連領空に引き返したため、ソ連はそれを迎撃しようと戦闘機を緊急発進させた。物体の移動速度は少しも速くなかった。しかし、この事件があった夜にそれを攻撃した者は誰もいなかった。

写真が撮影された。ソ連との間で協議も行なわれた。これが進行している間、全員が閉じ込められ、説明を受けた。ロシアのミグ 27 戦闘機が 1 機、緩衝地帯を越えてこちら側に深く迷い込んだため問題が起き、警戒態勢がとられることになった、それ以上ではない、というものだった。しかしそれはミグ 27 などではなかった。我々が何を見ていたかは、我々が正確に知っていた。我々にはフラッシュカード(訓練用教材カード)があり、それにはソ連と我々自身の様々な航空機のシルエットが描かれている。

だから我々が何を見ていたかは、我々が知っていた。それは何にも該当しない航空機であり、空気力学的な物体ではなかった。空気力学的ではないという意味は、それがヘリコプターのような目に見える浮力装置を持たず、あの高さに浮揚する手段を何も持っていなかったということだ。その手段はなかった。完全に無音で、ほぼ 3 階建ての高さがあった。ここから抜け出したい、家族のもとに帰り、普通の生活を送りたい。これは、私にそうした不安な気持ちをわずかに抱かせた事件の一つだった。この事件は新たな局面を生じた。ソ連はベルギー政府を通して米国政府に公式の抗議をした。彼らの懸念は、ベルギー当局が他国と共に、偵察のためにソ連に侵入するステルス航空機の離着陸を認めているというものだった。我々はソ連に通報し、これについて議論した。そして、少なくともソ連軍事連絡使節団に対しては、こう説明した。これは彼らの領土にステルス航空機を送る我々の企てとは何の関係もないと。

ソ連は起きている出来事に危機感を持ち、それを我々の航空機と考えていた。彼らには、そうではないと言って安心させた。ベルギー当局に対しても、そうではないと言って安心させた。ベルギー当局自身がこの UFO を目撃していた。我々はそれをテレビで見た。それらの目撃について人々が知らないことは、そこにはとてつもない - 私はそれを隠蔽と呼びたくない - そこには目撃に関する特定の情報を秘密にしておこうとする、ある動きがあったということだ。レーダー画面の映像フィルムを修正し、地下に潜っていく UFO を見せる何らかの試みがあった。UFO はそんなことはしなかった。それは地下 600 フィートまで潜ることになっていたと思う。もちろん、そのような事実はなかった。それは目に見えた。人々がそれを見たし、パイロットたちも見た。パイロットの航空機はそれを自動追跡した。しかし、こうしたことは我々が答えを用意すべき質問をさらに増やすものだった。それで我々はこれを報道機関から隠すことに決めた。我々はそれをうまくやってのけた。

*[この事件とそれに続く事件を述べた政府文書を見よ。SG]*

我々が関わった別の事件は、1976 年 9 月 19 日に起きたイラン事件だ。2機の戦闘機が同時に故障した原因が本当は何だったのか、これを究明しようと、徹底的な調査が行なわれた。我々は目撃があった場所に幾つか異常を見つけていた - そこは空軍パイロットの一人が地表に降下した UFO を見た場所だった。我々はそれらの異常を音声装置で記録した。その場所を映像にも撮ったが、フィルムには何か奇妙なものが映っていた。私はその着陸場所で起きたことのすべてを知って

いるわけではないし、すべての情報を持っているわけでもない。それは私が関与すべきことではなかった。しかし、これだけは言える。何が起きたにせよ、そこには 2 週間から 3 週間調査団がいた。

1986 年だったと思うが、1 機の UFO が 2 度にわたり攻撃された。その UFO は何事もなかったかのように飛び去った。1986 年には、ブラジルの航空機の周りを 20 機かそれ以上の UFO、空飛ぶ輪 (flying rings) が飛び回る事件があった。こうした記録文書は重要だ。

私が最初に説明を受けた 1969 年までに、回収された UFO はせいぜい 20 数機だった。最大でも数十機にすぎない、そう我々は教えられた - 1940 年代と 1950 年代初期に数機あった。当時それらの事件が起きた理由を明らかにすると、まったくとんでもない話だが、我々のレーダーが ET の誘導システムに大打撃を与えたということだった。そのため、彼ら (ET) はその誘導システム対策を講じなければならなかった。

どれくらいの遺体が回収されていたか？ 知らない。我々が現場に行く前に ET たちが来て彼らの回収を行ない、我々は少しの破片しか入手できなかったという墜落事件はどれくらいあったか？ 知らないが、あったことは確かだ。そういうことは起きているのだ。彼らに問題が発生すると、我々が救難信号を発するように、彼らも救難信号を発する。多くの人はそれについて考えない；それはこれまで質問されたことのない問題だ。しかし繰り返すが、我々は彼らを、そこにあるぬいぐるみの動物のような、何か得体の知れないものとする。しかし彼らは生きており、あなたや私と同じように肉体を持ち、呼吸する生き物だ。彼らは考え、愛し、好き嫌いがあり、社会的文化を持っている。

それが真相だと人々に理解させるのは、とても重要なことだ。私は人間の要素を UFO の搭乗者に当てはめて考えたい。私が人間の要素と言ったのは、彼らは実在する人々だという意味だ。我々は彼らを存在 (entities) とも生き物 (creatures) とも呼ぶ。だが、時々我々はこう自問していることに気付く：どちらがより本当の人間か、彼らか我々か？ これらは本当に明らかにされる必要がある事柄なのだ - つまり、彼らはあなたや私のような存在だということ。我々は、相違ではなく類似性を探し求め、大いなる理解に到達する必要がある。なぜなら、いずれ遠くない将来、我々は新しい扉を押し開く決定的なコンタクトをすることになるだろうからだ。

...

多くの人はただぼんやりと座って、こう言う。でも彼らの基地はここにはないじゃないか。いや、彼らにはあるのだ。

我々は 1970 年に、カンボジア国境から約 7 マイルにあるベトナム基地の一つで、大規模な戦闘に巻き込まれた。それについてもっと知りたければ、私はそれを録音テープにとっている。あなたにそのコピーを渡そう。申しわけないが、私は実際の話のある部分に言及しないようにしている。なぜなら、私がそれを話し始めると、あなたはそれを追体験することになるからだ。あなたは理解できない。あなたにはまったく理解できない...



## ロシア空軍 ワシリー・アレクセイエフ少将の証言

### Testimony of Major General Vasily Alexeyev

1997年3月

[アレクセイエフ少将へのインタビューを行なったバレリー・ウバーロフ氏と、このインタビューを我々に提供してくれたマイケル・ヘスマン氏に深甚なる謝意を表す。SG]

ロシア宇宙通信センターのアレクセイエフ少将は、該博な知識を持つロシア人将軍の一人と見なされている。彼はこう明言する。もし地球外知性体が広大な距離を横断する能力を持つものなら、彼らはおそらくより高いレベルの文明から来ている。もしそれが本当なら、彼らは人々の間にある関係の正常な発展に関心を持つに違いない - 破壊的ではなく、建設的な進歩に。そしてこう続ける。もし我々が地球の歴史を眺めるなら、そこにあるのは全民族の自己破壊、殺人、死の物語だ。進歩した文明はこのような行為に寛容ではないだろう。なぜなら、彼らの生命は別の意味を持ち、より大きな背景の中で理解されていると思われるからだ。

アレクセイエフ少将は、ソ連の特定の論文に記録された異常な航空機に関する多くの目撃報告を知っている。国防省と科学アカデミーを含む政府内の様々な部門が、この現象の調査を始めた。彼らは各地の上空で見られた UFO についての多数の報告書を持っており、その中には核施設のような先端科学の高度集積場所での目撃が含まれる。彼らは幾つかの事例において、意図的に UFO の出現を誘発する方法を学んだ。たとえば、これらの‘コンタクト’においては、彼らが腕を様々な方向に向けると、UFO がそれに応じて球体を同じ方向に扁平化した。モスクワ郊外で起きた事例では、一人の准尉が、気付くと着陸した UFO のそばに立っていた。その地球外知性体はテレパシーで彼とコンタクトし、宇宙機の内に入りたくないかと訊いた。

VA: ワシリー・アレクセイエフ

VU: バレリー・ウバーロフ

VA: . . . あちこちの基地から入ってくる情報は、それが単なる話題や噂ではないというだけでも興味深かった；現象の目撃証人がいたし、特定の記録文書や公式報告書にも反映されたからだ。時としてこの情報はとても興味をそそるものだったので、信じないわけにはいかなかった。後になると、この問題はもはやそれほど異様なこととは思われなくなり、国防省のみならず、他の政府部門でも調査されるようになった。これに高い関心を持ったのは、調査のために派遣されたある種の専門家たちだった。特に UFO - それらをそう呼ぶことにしよう - が頻繁に出現する場所に派遣された専門家たちだ。そのような場所に分類されるすべての軍事基地を私は知っている。それらは概して、戦略的に重要な目標物、ロケット複合施設、科学実験施設だ。つまり、そこは先端科学の集積場所であり、ある程度危険な場所だ。どの核(弾頭)ロケット、どの新しい空軍施設も、科学と軍事の両面において最先端を体現している；それは何よりもまず一つの頂点、人類が到達し得た最高点だ。そこそが、UFO がかなり頻繁に出現する場所なのだ。そして、この現象を知っていながらそれに対処する方法を指示されていない現地の将校や指揮官が、彼ら自身の決断で行動し、UFO を調査したり記録したりする。

幾つかの場所では、彼らは意図的に UFO の出現を誘発する方法さえ学んだ。UFO は、たとえば‘特別な’搭載物の輸送に関わる軍事活動が活発な場所によく出現する。UFO を出現させるためには、このような動きを見せかけで活発化させるか、計画するだけで十分だった。つまり、ある種の条件関係が明らかになったのだ。我々は利口な国民だ；何事も見逃さない。ある実験射撃場では

- もはや秘密ではないが名前は出したくない - ある種のコンタクトを行なう方法さえ学んだことを私は知っている。それはどのようにして行なわれたか？ まず、UFO が出現した；ほとんどの場合は 1 個の球体だったが、他の種類もあった。コンタクトは身体的合図という動作を介して行なわれた - たとえば彼らが腕を様々な方向に向けると、その球体は同じ方向に扁平化した。彼らが腕を 3 回上げると、UFO も同じように上下方向に 3 回扁平化した。

1980 年代の初期、当時のソ連指導部の指示により技術的装置(経緯儀, レーダー基地, その他)を用いた実験が行なわれ、未確認飛行物体は確実に測定データとして記録された...

UFO 目撃報告は定期的に入ってきた。国防省, 科学アカデミーといった領域の指導部中枢に近いどこかに、この種の情報が大量に蓄積され始めたのは明らかだった。情報は、普通の人々のみならず、科学者や専門的職業に就いている人々からも入ってきた。概して軍人は空想する傾向を持たない。彼らは見たもの、起きたことをそのまま報告する。彼らは信じられる人々だ。忘れてならないのは、この当時はまだ軍備拡張競争のただ中にあり、軍備と他の優先事項の間の苦闘が進行中だったということだ。科学と技術の分野で新しい発見がひっきりなしに行なわれていた。UFO は新しい何かであり、理解されていないものだった。実際に、それらは何かの情報収集手段かもしれないという考えもあった... しかし興味深いことに、委員会から出された公式見解の一つは、最終論点の一部として UFO が地球外文明に属している可能性を主張していた！ それは関心を引くものだった！...

私は仕事柄、当時のソ連だったロシア中の様々な部隊から情報を受け取った。その資料は何の説明も注釈も付けられずに、より上層部の関係組織に回送された。私は UFO 調査に従事する幾つかのグループがあることに気付いていたし、多分それ以上のものもあったと思うが、当時この問題の機密レベルは、受け取った情報はそのまま上層部に送るといったものだった：人々は私の所に来たが、我々は軍人だったので、何の説明もなされなかった。彼らはただ何に関心があるかということだけを言った。次に彼らは、これまで記録されたあらゆる種類 - 約 50 種類 - の UFO を描いた図表を持ってきた。その中には楕円体, 球体, さらに宇宙船に似たものまであった。目撃者たちは見た物体がどれに似ていたかと訊かれ、続いてその場所や他の条件が特定された。その後、すべての資料は次に回された。だから、その仕事がどう継続されたのか、どこまで科学的に行なわれたのかはよく分からない。国防省, 科学アカデミー, 情報諸機関である種の仕事が継続されていたことを私は知っている。しかし、その状況はと言えば、調査に直接関係しない人間は何が行なわれているかを知る由もなかった。我々は情報を供給するだけだった。大変な量の情報があったことだけは認めざるを得ない。ここモスクワ周辺にある多数の防空サイト, 実験射撃場, その他の軍事施設の上空 - これらは UFO が最も頻繁に出現する場所だ...

それは地球規模の問題, 地政学的な問題だ。米国や他の国々は、この種の情報を大量に蓄積しているはずだ。今日では相当量の情報があると私は確信している。いずれにせよ、この問題は熱核兵器がそうであるように地球規模の問題だ。環境, エネルギー資源, 持ち上がっている生態系問題に対する我々の理解の貧しさを考えると、その問題には人類の生存がかかっている。我々は酸素を使い尽くしたり、その他の多くのことをする。その挙げ句、我々はどのような末路を迎えることになるのか、これらの過程がどこまで不可逆的なのか、それは分からない。問題の解決方法を見つける必要がある。何らかの突破口があるに違いない。そうした問題を念頭に置けば、UFO 研究は何か

新しいエネルギー形態を我々に明らかにするか、少なくともその解決策に我々を近づけるかもしれない。だから、UFO と深く関係している諸問題とそれに付随するすべての現象は、全体として全人類にとっての重要事だと私は考えている。それぞれの地位にいる我々の指導者たちは、状況を真剣に考え、受け入れ可能な解決策を見出すべきだ。多くの傑出した世界的科学者が、そのような取り組みの必要性を語ってきた。どうしてそれが実行されないのか... 今日多くの国は、科学とこの問題の研究において一定水準に達している。一定の結果は得られているので、現在の課題は何らかの単一機関をつくり、この問題についての全知識を結合することだ。そうすれば、事態はより容易になるだろう。米国人は興味深い何かを得ているし、我々もそうだ。結論は得られており、多年にわたり収集されたデータも通り過ぎていった。しかし今、それらはどこかに‘棚上げ’されている。おそらく、一つのを別のものと組み合わせるだけで、問題全体がまったく違った見え方をするようになるだろう...

これはモスクワ郊外で起きた一つの事例だ。二人の准尉が外に出るように内部からせき立てられるのを感じた。そのうちの一人は、気付くとある飛行装置の着陸地点にいた。彼は精神的なコンタクトをした - 言葉のレベルではなくテレパシー、つまり想念だ。彼は宇宙船に招待されたが、恐怖または何らかの個人的理由により、それを受け入れることができなかった。後に彼は、その宇宙船の興味深い絵を幾つか描いた。私は彼らが描いた絵とその説明書きを見た。彼らの説明はその報告書に付録として付けられ、さらに当直士官、その副官、警備に就いていた徴集兵全員による絵も追補された。どの説明もその場所と時刻に関して矛盾がなく、飛び去った宇宙船の絵には多くの共通点があった...

私は特定の人々、目撃証人、様々な地域から、数年間にわたり膨大な記録資料を収集してきた。それを目の前にしたら、人々の UFO に対する考え方は必ず変わるだろう。私自身、何枚かの写真を持っているのだ...

現在の科学では説明することができない、似たような多くの事実がある。まるである種の知性がそこに働いているかのようだ。

**VU:** あなたはどう思われますか - UFO は他の文明を代表していますか？

**VA:** もし彼らの文明レベルが、おそらく物質の別の形態をとりながら、広大な距離を横切って宇宙空間を移動することを可能にするものなら - 真相はまさにそうなのだが - 彼らの発達レベルにおいて問題を見たとき、彼らもまた人々の中の正常な関係、ある種の進歩、最終的には知的生命体の存続、もしそれが存在すればだが、これらを心配するだろう。もし我々はその観点から地球を眺めるなら、これまでの歴史は、創造ではなく自己破壊の物語だ。それは全民族の殺人と死の歴史だ。真の文明社会がそれを容認することはあり得ない。生命には別の意味がある。正常な人間なら溺れている子供を見て通り過ぎることはできない！ 子供は未来だという理由だけでも、我々は子供を救う。文明のレベルが高いほどその認識の度合いは大きい。もし個人レベルでそうだとすれば、文明のレベルにおいても同じことが言えるだろう。しかしそれでも彼らは干渉しない。なぜなら、ある法則によりそれぞれの文明は独立して発達しなければならないからだ。自然な進行に外部から干渉することは常に危険な行為だ。しかしある種の修正は、明らかに高次知性体 (Higher Intelligence) の計画に含まれる。それは、我々が文明の歴史を終焉させようとするとき、その崩壊過程をそのままにはしない。

米国空軍曹長／国家偵察局諜報員 ダン・モリスの証言  
Testimony of Master Sergeant Dan Morris, US Air Force / NRO Operative

2000年9月

ダン・モリスは退役空軍曹長で、多年にわたり地球外知性体プロジェクトに関わった。空軍を退役後は超機密の国家偵察局、NRO に採用され、地球外知性体関連専門の作戦に従事した。彼はコズミック最高機密取扱許可(最高機密よりも 38 レベル上位)を持っていた。彼が知る限り、このレベルの資格を持った米国大統領はこれまで一人もいなかった。彼は証言の中で以下のことを語っている；NSA(国家安全保障局)が実行した暗殺があった；我々の軍が 1947 年にロズウェルの近くで ET 宇宙機の墜落を引き起こし、ET の一人を捕らえた。捕らえられた ET は、死亡するまでの 3 年間ロスアラモスで拘束された；ET/UFO 事件の証人に対する脅迫、信用の失墜、さらに抹殺まで受け持つ情報機関チームがあった；第二次大戦よりも前に、ドイツは UFO の再設計(re-engineering)を行っていた。さらに彼は、今日のエネルギー危機についても語る - 我々はフリーエネルギーが開発された 1940 年代以来、化石燃料を必要としなかった - しかしそれは人類から隠され続けている。これこそが、彼らが ET/UFO 問題を秘密にする真の理由だ。“今権力を握っている人々が我々に知られたくないのは、このフリーエネルギーが誰にでも利用できるということなのだ” 最後に彼は、宇宙の軍事化と ET 宇宙機の墜落に対して警告する - これは彼らを報復へと向かわせるかもしれない。そうなれば我々の破滅だ。

... 私は最高機密よりも 38 レベル上位のコズミック機密取扱許可を持っていた - すべての機密取扱許可の最上位だ。これは UFO、異星人などを対象とする。かつてそのレベルの機密取扱許可を持った大統領はいなかったし、現在でもそうだ。アイゼンハワーは最もそれに近かった。まず幾つかの情報機関がある - 陸軍がそれを持っているし、空軍にも海軍にもある。それから幾つかの秘密情報機関がある。存在していなかった機関、それほど秘密だったが、その一つが NRO だった。人々は NRO について言及することができなかった。それは国家偵察局だ。そのレベルになると、次には ACIO と呼ばれる世界規模の機関がある。これは異星人コンタクト情報機関だ。その地位を何とか得て規則に従えば、あなたの政府はその機関の情報を利用することを許される。一部の人々はそれをハイフロンティアと呼ぶ。海軍情報局は時々彼ら自身をそう呼ぶ。彼らはすべて一体となって働く。空軍情報局、海軍情報局、NRO はすべて以前バージニア州ラングレー空軍基地のある部門にあった。衛星データ分析者の大部分はそこにいた；空軍、陸軍、海軍の情報分析者の大部分もそこにいた；そこは彼らが働き、分析していた場所だった。

さて、アイゼンハワーは誰かにそれを統轄させたかった。彼は CIA 長官にやらせようとした。しかしそれはうまくいかなかった。CIA は第一に自分自身のために働いた。大部分の情報機関は自らのために働いた。それで彼はこう言った。“独立した文民組織がよい。我々の一流科学者の中から選ぶ” こうしてそれが組織されたが、NRO という名前は何年もの間秘密にされた。

それが自立し始めたのは 1968 年頃だった。それ以前の戦時中には OSS、つまり戦略諜報局があった。その大部分はスパイ兵だった。つまり、軍のある部門から集められ、OSS のもとに組織された機関だった。私は OSS でスパイをしたことはない。私は空軍情報局にいた。もう一つ私に高い機密取扱許可を与えたものは、私が CONRAD(放射線委員会)特使だったということだ...

だから、私が空軍を辞めたとき、私がこの事柄の一部を知っていたことを彼らは知っていた。彼らは私に、やはりその事柄を知っている誰かのために働く機会を与えた理由はそれだった - つまり NRO だ。

国家安全保障局 - 殺し屋がその中で働いている。‘問題’を除去する必要が生じたら、彼らは... 彼らはそういう連中だ。もしあなたがジェームズ・ボンドを知っているなら、彼らはダブル・オー・エージェントだ。この意味が分かればだが。国防長官フォレストは、情報を公開しようとして消された、本当に実力のある最初の人物だった。そして誰もこの罪を償わなかった。あの犯罪で彼に何が起きたか、その徹底的な調査を軍が実際に行なったことはなかった。だがほとんどの人々は、彼が病院の窓から投げ落とされたことを知っている - 彼は窓から投げ落とされて殺されたのではなかった。ベッドの中ですでに死んでいたのだ...

知っていることのために消された人が他にもいる。その一人は私の友人フィル・スナイダーだ。彼はここニューメキシコでトンネル建設のために働いた - 彼が関わった最大のものはダルシー地下施設だ...

私が知っているのは、フィルはこの国を愛しており、これらの計画が政府を無視して行なわれていると考えたことだ。その建設と同じく、進行していた極秘プロジェクトがあまりにも多かった。そのどれもが議会の承認を受けていなかった。

*[クリフォード・ストーンの証言を見よ。SG]*

議会はこれらの極秘プロジェクトのどれについても可決したことはなかった。それで彼は、米国民には彼らの税金が何に使われているのか、また我々は何をすることができるのかを知る権利があると考えた - そして彼は語り始め、取り除かれた...

私自身のことだが - 私は 73 歳だ。私はよい人生を送ってきた。悔いはない。私はこの国を愛しており、11 歳頃からずっとクリスチャンだ。だから私は、神はこれが知られることを望むと信じている。宇宙はこれが知られることを望むと信じている。もし我々が秘密を止めさせなければ... 我々はそれを深い秘密のままにしておくことで、人々に多大な被害を与えている。私はそう考えている。もし我々がそれを止めさせなければ、他の誰かがそれをするだろう - この惑星外の誰かが。私は、この 50 年間我々と共にあった人々の誰かが、秘密を止めさせると信じている...

さて、下にいた二人に私は“カメラを持っているか？ - 空軍公式カメラだ。外に出て写真を撮れ。外に出て見たことを私に話してくれ”と言った。彼らは戻ってきてこう言った。“外に UFO が編隊を組んで静止しています！”私は“分かった。写真を撮れ。カメラを持って写真を撮れ”と言った。私は別の二人にレーダーカメラのスイッチを入れるように言った。我々にはレーダーカメラがあり、それでも写真が撮れたからだ。

だから、そこで起きたことは間違いのない出来事だった。我々がいた建物は一つの側壁全面がガラスのフレンチドア(\*観音開きの扉)になっており、もしレーダースコープをセットすれば外側を眺めることができ、そこに UFO がいるのを見ることができた。そこで私は本部を呼んだ。私 - “我々

はコンタクトしている”彼 - “SAC が君たちに対して何か行動を起こしているのか?”私 - “SAC ではない, SAC ではない”彼 - “では何だ?”私 - “コズモス(Cosmos)”彼 - “ちょっと待ってくれ。電話で説明してくれ”盗聴防止のためのスイッチがあった。私 - “よろしい, こちらの電話は盗聴防止をかけた。そちらは?”彼 - “こちらも盗聴防止をかけた。どういう意味だ, 異星人コンタクトをしたというのか?”私 - “外で 3 機の UFO が静止しているんだ”彼 - “写真を撮っているのか?”私 - “我々は写真を撮っている”彼 - “レーダー写真は撮っているのか?”私 - “我々はレーダー写真も撮っている。本物の写真だ”彼 - “よろしい, もう何も言わなくていい; そこに諜報員を一人送る; 6 時間後にはそこに着くはずだ - 彼にすべてを任せろ”私 - “分かった”約 6 時間後に彼がやってきた; 我々は彼のためにすべてを厳重封鎖した; 我々は彼にそれを引き継いだ; 彼は航空実験地上軍団に引き返す - 我々には, それらの写真を彼らが受け取ったと公式に通知されることはなかった。それは何も起きなかったかのように秘密にされ, 闇に消えた。しかし, 我々はその写真のコピーを持っていた。それで私はその五人にこう言った。“よし, 君たち。ここに全員分のコピーがある。君たちの孫のためにそれを持っていてくれ”...

我々がなぜ核兵器の爆発を停止したか, ご存じか? 我々は, オリオンから来たあの ET たちに命令されたのだ。オリオン - 彼らは降りてきて, こう命じた。“地球人よ, 君たちは自分自身を滅ぼしかねない。我々はそれに耐えられない。君たちはそれをするかもしれない - 君たちはこの惑星を爆発させるかもしれない - 君たちは今やその能力を持つに至った...”我々が本当に彼らの注意を引いたのはこのときだ。彼らは降りてきて, こう言った。“地球人よ, 君たちがこの惑星を破壊するのを黙って見てはいない。だから我々は, すべての核実験を停止することを望む”彼らはすでに我々に兵器の使用を止めさせた。それから彼らは我々にこう命じた。“これ以上核実験をやるな”さて, ロシアと米国だが - その時点で我々は, これらの人々はやると言ったことは必ずやり遂げることができる, そう信じて疑わなかった。人々は, 彼らが大量してワシントン D.C.上空に飛来したのを目撃した。我々はジェット機を発進させ, 彼らを追跡させた。そしてジェット機が上昇するたびに, その UFO 群は素早く消えた。または別の次元に移った。ジェット機が基地に戻ると, その UFO 群はワシントン上空に戻った。ワシントンの誰もが恐怖に怯えた - 彼らは何をするつもりか?

我々は高出力レーダーが彼らの安定性を妨害することを発見した。なぜなら, 彼らが高度を下げ低速になったときに, その増幅装置と安定化装置の機能が低下するのを見ることができたからだ。低空低速のときにはレーダーが UFO に影響を与えていた。我々はすでにそれを知っていた: 我々は 1947 年に彼らが墜落する前からそれを知っていた。我々のレーダーの大部分はどこにあったか? ホワイトサンズ, そしてロズウェルだ。ロズウェルに配備されていた人々は誰だったか? 世界で唯一の核爆弾部隊だった。だから - 彼ら(\*異星人)は関心を持ち, 我々はそのに多くのレーダーを設置した。何とかそこを防護するつもりだったからだ。そこで我々は何基かの巨大な高出力レーダーを彼らに向けて照射した。これは彼らのうちの 2 機が接触する事態を引き起こした。1 機は降下して農場に着陸した; 他の 1 機は土手に突っ込んだが, それには二人の異星人が乗っていた; 我々がそこに着いたときには, [二人の異星人は]外に横たわっていた。そのうちの一人の遺体は損傷がひどく, もう一人はそのとき生存していた。しかし, 我々が彼(\*生存していた一人)をどこかに移動しようとする前に, 彼はすでに死亡していた。しかし別の ET[もう一方の墜落の]は, 我々がこちらのロスアラモスで約 3 年間生存させた。彼は病気になった。我々は可能なすべての周波数帯を使い, あらゆるメッセージを発信した。彼が病気であること; 我々がそれを引き起こしたのではないこと; もし望むならこちらに来て彼を連れ帰ってもよいこと, などだ - しかし, 彼らが来

る前に彼は死亡した。それでも彼らはやってきて、彼の遺体を引き取った。彼らがワシントンに行き、ワシントン上空にあの編隊を現したのはこのときだ。こうして彼らは遺体を回収したのだ。

以前に我々は 1 機を撃墜し、非難を受けていた。しかし、我々とロシアの核兵器に取り囲まれていた状況下で、我々がしたことは何であったとあなたは思うか？ 我々は防衛線として核兵器を宇宙に配備したのだ - もし彼らが何かを始めたら、我々は彼らを吹き飛ばす構えだった...

私はその情報を調査し、収集するグループの一員になった - 当初、それはまだブルーブック、スノーボード、その他の秘密プログラムの傘下にあった。人々が何かを見たとき主張したとき、私は彼らを訊問し、彼らが何も見なかったか、見たものは幻覚だったことを納得させようとした。それがうまくいかなかった場合、別の一団がやってきてあらゆる脅しをかける - 彼らとその家族を脅したりする - 彼らの仕事はその人々の信用を落としたり、いかれた人間に仕立て上げたりすることだ。それでも効果がなかった場合には、また別の一団がいて、どうにかしてその問題に終止符を打つ...

だから、つくり話が意図的に流され、次にそれが暴かれた。情報と偽情報が 50 年間存在し続けている。

機密保全誓約に署名した人々の大多数が助けを必要としている - 彼らが秘密を守り続けなければならない理由は、この誓約だ。ご存じのとおりだ、グリア博士 - そこから我々を連れ出してほしい。これは明らかにされる必要がある。

ドイツは以前に 2 機の UFO を回収した - 1931 年、1932 年のことだ - 彼らはそれらをドイツに持ち帰り、我々がやるように、その再設計(re-engineering)を開始した。彼らはそれを進展させ、作動する UFO を戦争が始まる前に持った...

我々の記録保管所には、それを示す多数の写真、記録映像がある。戦後我々は、ドイツから多くのものを入手した。というのは、我々はフォン・ブラウンだけでなく、シャウバーガー、UFO に取り組んでいた電磁気学専門家たちの何人かもちこらに連れてきたからだ。シャウバーガーのおかげで、我々は誰よりも先んじることになった。

ロシアも何人か連れていった。しかし我々がその主要部を獲得した。シャウバーガーはここニューメキシコにおいて、ホワイトサンズやニューメキシコ周辺の他の場所で我々を手助けした。その後、我々から不当に扱われていると感じて帰国し、その 2 週間後に命を奪われた。

UFO には地球外のものと地球人がつくったものの両方がある。UFO に取り組んでいた連中のことだが - 彼らは眠っていなかった - タウンゼント・ブラウンは我々側の一人で、ドイツ人たちと一緒にほとんど起きていた。我々は一つの問題を抱えた - タウンゼント・ブラウンを手元に引き留めておく必要があった - 彼は反重力電磁気推進の秘密に取り組んでいたのだ。テスラの時代にまで遡って、我々は変換可能なフリーエネルギーを手にしていった。やるべきことはただアンテナを 1 本立て、1 本の杭を地面に刺すことだった。そうするとこの家に明かりを灯し、必要なすべてのエネルギーを得ることができた。しかし、我々は何に頼っているか？ 前世紀を通して、我々は石油を燃やしてきた。この世界で誰が石油を支配しているか？ 多くの人はイラク、イラン、等々がそれだと考

える。彼らではない。我々がそれを支配している - 我々と英国の勢力だ。一部の人々は、これを秘密の政府と呼ぶ：世界のある富裕層グループが石油を支配している。さて、我々に内燃機関を持つ車は不要だ。もし人々がこれらの装置の一つ、それはおよそ長さ 16 インチ、高さ 8 インチ、幅 10 インチだが、これを持てば電力会社にコードをつなぐ必要はない。これらの装置は何も燃やさない - 汚染もない；可動部分がないから決して摩耗しない - 動くのは重力場、電場の中の電子だ；それらは反対方向に回転する、よろしいか？ これを車に取り付ける - 車はそれが摩耗する前に錆びたり壊れたりする。だから、石油に依存している世界経済にそれはどんな影響を与えるだろうか？

何千年もの間、他の惑星に住んでいる人々がいる。そのことを、我々の政府と世界が我々に知られたくないのではない。今権力を握っている人々が我々に知られたくないのは、このフリーエネルギーが誰にでも利用できるということなのだ...

米国民は政府が思うよりも強し、これが私の信じるところだ；私はこう決意するに至った。米国民は真実を知るために立ち上がることができる。そして真実を知るべきだ。私が名乗り出た一つの理由はそれだ。実現可能な、もっとよい生活がある。そのことを私は人々に知ってもらいたい...

ご存じのとおり、南アフリカ政府は 1 機の ET 宇宙機を回収したことを認めている。彼らはそれを隠そうとしない。その回収を行なったという巡査部長の記録映像が流された - それには回収の様子なども映し出されている。さて、私が読んで知るどころでは、ある合意が我々の政府と彼らとの間で取り交わされたという - 彼らが最初の核兵器を開発し使用することについて、米国政府は何も言わない；もし国連において彼らを支持することができなくなったら、我々は沈黙を守る - その代わりに、彼らは我々にその ET 宇宙船を渡す。合意は成立し、実行に移された。我々は C-5A ギャラクシー(\*大型輸送機)をそこに飛ばし、その宇宙船と船内から運び出された二人の異星人を持ち帰った。それらはオハイオ州デイトンのライト・パターンソン空軍基地に行った。我々が回収したものの大部分は通常そこに送られた。そこには約 8 層の地下構造物があり、回収物を収容する。

そうすると、今誰が我々の敵なのか？ 異星人が今の我々の敵だと人々に信じ込ませ、その考えを広めようとする勢力がある。しかし、どの公式記録を読んでもその証拠はない。そこに述べられているのは、彼らは攻撃されない限り攻撃したことはないということだ。ここで、ロシアが関係した事例を話しておきたい：この事件には、息子が空軍のミグ戦闘機パイロットをしている提督が出てくる。我々は 1 機の F-18(\*戦闘攻撃機)をアラスカで飛ばしていた。ロシア人はバジャー(\*ツポレフ戦略爆撃機)とビーバーを送り込もうとしていた；彼らはミグを送り込もうとしていた。それでアラスカにいた第 21 戦闘機中隊だが - 上昇して彼らを迎撃しようとした。彼らは皆武装していたが、幸いに誰も発砲しなかった。我々の管制官は、これらのミグが入り乱れているとき、その中に別の船(\*飛行物体)が入ってくるのを見た。我々の管制官はロシア人がこう言うのを聞いていた。“あの船を迎撃せよ” 彼らはそれを船(ship)と言った - それは我々が知っているものでも、ロシア人が知っているものでもなかった。こうして 2 機のミグが迎撃を開始した。我々のパイロットは管制官からこう指示された。“その場を離れよ；見える距離を保て。だがその船を迎撃するな！”ロシアの戦闘機が UFO に照準を定めた兵器を作動させた途端に - そのミサイルは両方も破壊された - このようにして一機また一機と。我々のパイロットは攻撃を受けずに帰還した。この話をしたのはロシアの二つ星将軍だ。彼らはこの話を息子から聞いたその提督にもインタビューした...



異星人たちは、我々が彼らに向けて兵器を建造しようとしていることに気付いていると思う。そこで、私が言いたいことはこうだ。我々には確かにある種の防御手段があり、彼らの一部を撃墜する能力がある。我々はその能力を発展させた。アイゼンハワーは米国民に向かって警告を発した。“軍部と兵器製造業者に権力を渡すな”彼はそれをいつも恐れていた。彼の最後の演説を見れば分かるが、彼はそのことを国民に語った。彼らをあまり強くさせるな。だから、我々は目覚めるべきだ。我々はこれまで何機かの UFO を撃ち落とそうとしてきた - そしてそれに成功してきた - 我々はニューメキシコ州ホワイトサンズで 1 機を撃墜した。我々はあのときそれを追跡しており、それに損傷を与え、墜落に至らしめた。そして、そうだと、それには数人の異星人が乗っていたのだ；そして我々は彼らを拘束した。これが起きたのは 1968 年か 1969 年で、南アフリカがそれをやった頃だった...

もうロシアの脅威はない。もし我々があの異星人たちを攻撃し続ければ、彼らからの脅威を受けることになるだろう。それを止めるべきだ。我々は政府に、あの異星人たちを撃墜するのを止めるように要求すべきだ。我々は皆協力すべきだ。

ロッキード・スカンクワークス／米国空軍／CIA 契約業者  
ドン・フィリップス氏の証言

**Testimony of Mr. Don Phillips, Lockheed Skunkworks, US Air Force and CIA Contractor**

2000年12月

ドン・フィリップスは、UFOがラスベガスの北西、チャールストン山の近くを猛スピードで移動しているのが目撃されたとき、ラスベガス空軍基地に勤務していた。また、ケリー・ジョンソンと共にロッキード・スカンクワークスで働き、U-2 および SR-71 ブラックバードの設計と建造にあたった。彼は次のように証言する。我々はこれらの地球外起源の装置を持っているのみならず、それらの研究から途方もない技術上の進歩を成し遂げた。1950年代と1960年代にNATO(北大西洋条約機構)はET種族の起源に関する調査を行ない、様々な国の指導者たちにその報告書を送った。フィリップス氏はさらに、1954年にカリフォルニアで行なわれたETと米国指導者の会談に関する記録と映像資料があると述べる。彼はETのおかげで開発が可能になった技術の幾つかを挙げる：コンピューターチップ、レーザー、暗視技術、防弾チョッキ。そしてこう結論する。“これらのETに敵意はあるか？もし彼らに敵意があったなら、とうの昔に我々を破壊していたか、何らかの損害を与えていただろう”フィリップス氏は今、環境汚染を除去し、化石燃料への依存を減らすことのできる技術を開発している：地球から取り出せる自然エネルギーを使うエネルギー発生システムだ。

DP: ドン・フィリップス氏

SG: スティーブン・グリア博士

**DP:** . . . だから、エンジェルスピークは秘密のレーダー施設だった。我々が知っている多くのレーダー施設は辺鄙な場所にある。我々はラスベガスからエリア 51 に入っていく航空機など、そこを通過するあらゆるものを監視していた。1966年から1967年にかけてのことだが、その何かがあるところを通過し、それは最も興味深い一夜になった。私は午前1時頃に大きな騒ぎを聞いた。

我々は8,000フィートにいた；レーダードームはおよそ1万500フィートにあった。私は起きて主要道まで歩いて登ることにし、事務所の近くまで来た。そこには同僚たちが立っていた - 五人ほどのグループだった - 彼らは空を見上げていた。それで私も空を見上げたのだが、目に入ったのは光を放し、とてつもない速度で移動している物体だった。そこはチャールストン山から北または北西に少し寄った場所だった。まさにそのとき、これらの物体が鋭角に方向転換したのを私は見た。速度は時速3,000マイルから4,000マイルと推定された。それが瞬く間に急な方向転換をしたのだ。あれは我々のものではない. . .

するとまったく突然に、それらは数百マイルはあろうかと思われる天空を横切って西に集まったように見えた。それらは輪になり、旋回し、消えた。何と見事なショーだ、私はそう思った。

保安軍曹がたまたま勤務中だった。我々は皆互いに顔を見合わせ、これは確かに現実のことなんだと言いつつ合った。すると軍曹が、我々はこのことについて一言も話してはならないと言った。

ところで、私には主任レーダー操作員をしている友人がいた。アンソニー・カサールという名前だ. . .

その顔は蒼白だった。彼はバスのステップを一步降りると、私を見てこう言った。“あの物体を見たいか？” 私は“見たとも。我々はそれを見ていたんだ - 何人かはそれらが消えるまで 4, 5 分間は見ていたよ。自分が見ていた時間は 90 秒よりやや長かったな”と言った。すると彼はこう言った。“我々はそれをレーダー画面で見たし、記録もした。あれはお化けじゃないし、幻影でもない。あれは現実の固体物体だ。我々が使っているようなレーダーに映るからには、それは固体物体でなければならない。しかし、それを我々のレーダーは追跡しなかった - それはレーダーに映ったり消えたりした。記録もそのようになっている”彼は最終的に 6 個から 7 個を記録した。我々はその速度を推定したが、レーダー操作員たちもレーダースコープを使ってそれを推定していた。

**SG:** 彼らが推定した速度はどれくらいでしたか？

**DP:** 彼らが推定した対地速度は、時速に換算して 3,800 マイルから 4,200 マイルだった。これらの物体は大空を横切って矢のように飛んだ。最初それらは 1 個の星のように見えた。それがあらゆる方向に動き、あらゆる種類の直線運動をしたり、静止したりした...

これらの UFO は巨大だった。それらは停止し、その後で 60 度、45 度、10 度といった方向転換をした。そして瞬く間にこの動きを逆転させた...

**SG:** あなたがロッキード・スカンワークスにいたとき、反重力推進システムの研究が行なわれていると聞いたことがありましたか？

**DP:** あなたが訊ねている推進システムの研究だが、確かに存在していると聞いた。しかし、右手がしていることを左手が知ることは決してなかった。それには正当な理由があった...

我々が持っている 1954 年の記録によれば、ここカリフォルニアで、この国の指導者たちと ET との間で会談が持たれた。書かれた記録文書から私が理解するところでは、彼らはここに来て研究することを許可するように要請したという。それに対する我々の返事は、次のようであったとそれには書かれていた。これほどの進歩を遂げているあなたたちを、私たちがどうして止められるだろうか？ そして私はこのカメラ、この録音機を前にして述べる。この会談を持ったのはアイゼンハワー大統領だった。それは映像に撮られていた。ちょうど我々が今日行なっているようなものだ。それについての最新の NATO 報告書には、12 の種族がいたと述べられていた。これらの種族は何者なのか、何をしているのか、何をしようとしているのか。それを理解し、状況を最終的にまとめるために、彼らはこれらの種族とコンタクトする必要があった...

これらの ET に敵意はあるか？ もし彼らに敵意があったなら、彼らの兵器でとうの昔に我々を滅ぼしていたか、何らかの損害を与えていただろう...

彼らが墜落した原因は、我々のレーダーとある装置により、彼らの誘導装置が干渉を受けたことだ。

もう一つ確かなことがある。民間会社ライト・シティー・テクノロジーズ社のために働いていた我々の契約科学者の一人が、これらの技術に取り組んでいたということだ。彼は幾つかの技術に取り組

む一方で、米国政府の有名な情報機関にも属していた。

私が軍や政府のレベル以外で話をした相手はグリア博士だ。その理由は、彼がそれに専門的な手法で取り組んでいるということだ。それは我々が軍でとった方法と一致している。

ET レンズについて：宇宙にはわずかな光しかないことを我々は知っている。宇宙機の内部の搭乗者が暗い宇宙空間でものを見るための眼球被覆物が幾つかあった。これらのレンズは光を増幅しただけでなく、それを鮮明にした。私がこう言うのは、彼らにこれらのレンズを外させて研究するようにしたのは、地球の医師と専門家たちだったからだ。

こうしたことの多くは、コース大佐により十分に立証されてきたと思う。誰が彼と一緒にいたか？ 大勢の人が彼の周りにいた。しかし、コース大佐の本の中で言われている事柄の多くは、これまで私と一緒に仕事をし、今も一緒に仕事をしている人々により裏付けられている。私はそれを立証することができる。だから、それについて私が知っていることは間違えようのない事実なのだ。その情報が伝わってきた経路についてはまた別の話だ。我々は隠蔽されている技術について語っている。なぜ彼らはそれを人々に知らせないのか？ 彼らはそれを人々から隠しているが、その幾つかにはおそらく十分な理由がある。

政府自身がそれを理解しなかった。空軍にいながら、多分我々もそれが何なのかはよく分からなかった。ロズウェルからそれらの技術を引き出した後、それから何をつくり、どのようにして産業に組み込み、どのような利益を人々にもたらすことができるのか。それを知る前に、作動原理を解明する時間がしばらく必要だった...

私はある同僚科学者から一つのことを学んだ - 私が最大級の尊敬の念を抱いている人物だ - 彼は CIA にいたが、こんなことを言った。その計画が何であれ、我々が最初にはっきりさせたいことは、計画の推進者は誰かということだ - これが、私が CIA でやったことだ。

誰が推進者か？ 動機は何か？ なぜそれが行なわれているのか？ 我々が初めて話をしたすぐ後で、私は訊ねた。なぜスティーブン・グリア博士はこれをしているのか？ 私は自分の調査を行なってきた - かなりの量になるだろう。そして何が起きているかを注視してきた。あなたは自分がしていることに熱心に打ち込んできた。あなたは専門家だ。私が今夜ここにいる理由はそれだ。あなたと話している理由はそれだ...

さて、グリア博士。私が 1998 年にこの技術会社をつくった目的の一つは、有害物質を除去できるこれらの技術を開発することだった - 空気を浄化することができ、化石燃料を大量消費する必要性をなくすか、それをより効率化するのに役立つ技術だ。そうとも、時期が来たのだ。私があなたに言えるのは、それはすでに始まっているということだ。

我々が思い付いたことを、私は証明することができる。我々はそれを証明することができるのだ...

米国海兵隊大尉 ビル・ユーハウスの証言  
Testimony of Captain Bill Uhouse, USMC  
2000 年 10 月

ビル・ユーハウスは戦闘機パイロットとして海兵隊に 10 年間勤務した。また、新型実験航空機の飛行試験をする民間人として、ライト・パターソン空軍基地の空軍に 4 年間勤務した。その後の 30 年間は、国防関連契約業者のために反重力推進システムの技術者として働いた： 新型航空機の飛行シミュレーター - そして実際の空飛ぶ円盤。彼はこう証言する。彼らが試験した最初の円盤は、1953 年にアリゾナ州キングマンで墜落した ET 宇宙機を再設計したものだ。さらに彼は、ET たちは米国政府に 1 機の宇宙機を提供したと証言する； この宇宙機は当時建設中だったエリア 51 に運ばれ、その宇宙機に搭乗していた四人の ET たちはロスアラモスに連れていかれた。ユーハウスの専門は操縦室とその機器類だった - 彼は重力場というものと、反重力を経験するために必要な訓練は何かを理解した。彼は実際に、宇宙機を設計する物理学者と技術者を援助していた一人の ET に数回会った。

私は 10 年間で海兵隊で過ごし、その後の 4 年間で民間人として空軍に勤務した。空軍では海兵隊以来の仕事である航空機の飛行試験に関わった。私は現役のパイロットだった。それも戦闘機乗りだった； 私が戦ったのは... 第二次大戦の後半と朝鮮戦争での兵役後に、私は海兵隊大尉として除隊になった。

私が初めて飛行シミュレーターに取り組んだのは、1954 年 9 月頃だった。海兵隊を辞めた後、私はライト・パターソン空軍基地の空軍で仕事を見つけ、そこで航空機の様々な改良型に対する飛行試験を行なった。

私がライト・パターソン空軍基地にいたとき、ある人物が私に近づいてきた。彼は - 名前は言いたくない - 私が新しい独創的な装置に関係する分野で働きたいかどうかを知りたがっていた。よろしいか？ それはある種の空飛ぶ円盤シミュレーターだった。彼らがしたことは何か： 彼らは我々数人を選び、私をシミュレーター製造会社の A-リンク・アビエーション社に再配属した。その当時同社では C-11B と彼らが呼ぶ装置、F-102(\*迎撃戦闘機)シミュレーター、B-47(\*亜音速爆撃機)シミュレーター、その他を製造していた。彼らは我々が実際に空飛ぶ円盤シミュレーターに取り組む始める前に経験を積ませたかったのだ。私はこれ(\*空飛ぶ円盤シミュレーター)に取り組んで 30 数年間を過ごした。

どの空飛ぶ円盤シミュレーターも 1960 年代初期になるまでは作動し始めなかったと思う - 1962 年か 1963 年頃だ。私がそう言うのは、シミュレーターは 1958 年頃までは実際に機能しなかったからだ。彼らが使ったシミュレーターは、彼らが持っていた地球外宇宙機用のものだった。その宇宙機は 1953 年か 1952 年にアリゾナ州キングマンで墜落したもので、直径が 30 メートルあった。彼らが初めて試験飛行に持ち出したのはそれだった。

その ET 宇宙機は、異星人たちが我々の政府 - アメリカ合衆国 - に提供しようとした一つの限定条件付きの機体だった。それはかつて陸軍飛行場だった場所から約 15 マイルの地点に着陸した。その陸軍基地は現在閉鎖されている。その特別な宇宙機だが、幾つか問題があった： 最初の

問題はエリア 51 まで運ぶために運搬用平台に載せることだった。道路事情のため、彼らはそれをダムを渡って輸送することができなかった。当時はそれを荷船に載せてコロラド川を渡る必要があり、それから国道 93 号線を経由してエリア 51 に着いた。当時そこは建設の最中だった。この機体には四人の異星人が搭乗していた。彼らは試験のためにロスアラモスに行った。これらの異星人のために、彼らはロスアラモスに特別区を建設し、ある種の人々を異星人たちと共にそこに配置した - 天体物理学者と一般科学者たちだ - 異星人に質問するためだった。私が聞いた話の内容は次のとおりだ：その施設に配置された科学者と話す異星人は一人しかいなかった。他の異星人は誰も話さなかったし、会話を持つとさえしなかった。最初彼らは、会話はすべて ESP(超感覚的知覚)またはテレパシーだと考えた。しかし、私にとってはその多くは一種のジョークだ。なぜなら、異星人たちは実際に話すからだ - 我々のようではないだろうが - 彼らは実際に話し、会話をする。しかし、それをするのは[ロスアラモスでは]ただ一人だった。

この円盤と彼らがそれまでに見ていた他の円盤との相違は、これがとても簡単な構造を持っているということだった。

円盤シミュレーターには動力部がなかった。[しかし]我々はその内部に動力部に見える空間を設けた。そこにシミュレーターを作動させる装置はなかった。我々は、それぞれ 100 万ボルトで蓄電された 6 個の大きなコンデンサーでそれを作動させた。だから、それらのコンデンサーには 600 万ボルトが蓄電されていたことになる。これまでに製造された最大のコンデンサーだった。これらの特別なコンデンサーは 30 分間持続したので、我々はその中に入り、実際に制御装置を動かし、そのシミュレーター、その円盤を作動させるために必要なことを行なうことができた。

だから、それはそれほど簡単なことではなかった。我々には 30 分間しかなかったからだ。シミュレーターの中にはシートベルトがないことに気付くはずだ。それは実物の宇宙機と同じだった - シートベルトはどこにもない。シートベルトは不要なのだ。なぜなら、これらの 1 機を逆さまに飛ばしたとすると、普通の航空機の中のように逆さまにはならない - そのようには感じない。その説明は簡単だ：機体内部にはそれ自体の重力場があり、外部から見て逆さまになって飛んでいても、内部では搭乗者にとっての上が上になる。それを見れば実に簡単なことだ。私は始動のために、実際の異星人宇宙機の内部に入った...

窓は一つもなかった。何らかの視界を得る唯一の方法は、カメラまたはビデオ装置だった。

[マーク・マキヤントリッシュの証言を見よ。SG]

私の専門は操縦室とその機器類だった。私は重力場というものと、人々を訓練するために何が必要かを知った。

円盤はそれ自体の重力場を持つので、それに搭乗し、その出力が上がった後の約 2 分間は気分が悪くなり、方向感覚がおかしくなる。それに慣れるには相当の時間が必要だ。その内部は狭いので、手を挙げることさえ面倒になる。我々には訓練が必要だ - 頭を訓練し、実際に感じたり経験したりすることを受け入れなければならない。

動き回ること自体が難しい。しかし、しばらくするとそれに慣れてできるようになる - それは単純なことだ。物がどこにあるかを知らなければならないし、体に何が起きているかも理解しなければならない。航空機を操縦しているとき、または潜水から戻って G の力を受けるときと変わりはない。それはまったく新しい状況だ。

設計に携わった技術者たちの誰もが、始動乗組員の一人だった。我々は、自分たちが取り付けたすべての装置を検証しなければならなかった - それがちゃんと設計どおりに機能するか、等々を確かめるのだ。

我々の乗組員たちは、これらの宇宙機で宇宙まで行った。私はそれを確信している。私が言っているのは、そのために彼らは十分な時間をかけ、必要な訓練を行なったはずだということだ。円盤に関する全体的な問題は、その設計などがきわめて厳格だということにある。爆弾を落としたり、翼に機関銃を取り付けたりといった、今日我々が航空機を使うような使い方はできない。

その設計は厳格で、何も追加することができない - 過不足があってはならない。どこに何を付けるかという設計上の大きな問題がある。たとえば、航空機の機体の中心はどこにあるか、そのような類のことだ。さらに事実を言えば、背の高い人間が入れるように、我々はそれを 3 フィート高くした - 実際の機体は最初の形態に立ち戻って拡大された。ともかく、それを高くする必要があった。

我々は幾度も会合を持った。結局私は、ある会合で一人の異星人と同席することになった。私は彼をジェイ・ロッド(J-ROD)と呼んだ - もちろん、それは皆がそう呼んでいたからだ。それが彼の実際の名前かどうかは知らない。しかし、それは言語学者が彼に与えた名前だった。私は別れる前に、会合の中で彼をスケッチした。私はそれを何人かの人に提供したが、それは私が見た彼の印象だった。

その異星人は、よくテラー[エドワード博士>(\*水爆の父)と一緒に現れた。他の人と一緒のときもたまにあった。それは我々が直面するかもしれない諸問題に対処するためだった。よろしいか？しかし、そのどれもがそのグループに固有の事柄だったことをあなたは理解する必要がある。そのグループに固有でない事柄を話すことはできなかった。その原則は、知る必要性(need-to-know)というものだった。[その ET だが]彼は話した。彼は話したが、それは相手が話すように声を発するということだった - 彼は我々と同じように発声した。つまり、彼はオウムのようなようだったが、相手の質問に答えようと努力した。彼は理解するために何度も困難に直面した。なぜなら、相手がそれを紙に書いて自ら説明しなかった場合、2 回に 1 回は適切な答えを与えられなかったからだ。

この異星人に会う前に我々がした準備とは、基本的に世界中のすべての異なる民族をくまなく調べ上げることだった。次に動物やその類型に至るまで、他の形態の生命体に目を転じた。そして...このジェイ・ロッドだが - 彼の皮膚はピンク色で、やや粗かった - そんな感じだった；恐ろしくは見えなかっただろう - というか、私にとっては彼の外見は恐ろしくなかった。

私が属していたこのグループの何人かだが - 彼らはそれにうまく対処できなかった。心理学的な質問をされると、私は感じたままを答えた。それで何も問題がなかった。それが、彼らが知りたがっていたことだった - 取り乱すことはないか - しかし私はそれが気にならなかった。それが精神的

負担になることはなかった。

こうして、基本的にその異星人は技術的な助言と科学的な助言のみを提供していた。たとえば、私は計算を行なったが、さらに援助を必要とした。．． 私はある本について話した - いや、それは本ではない； それは重力制御を行なうための様々な部分を持つ、ある大きな組み立て部品だった。主要な要素はそこにあったが、すべての情報はそこにはなかった。我々の最高の数学者でさえ、この問題の一部を解明することができなかった。そのとき、この異星人が援助した。

時々我々は、どれほどあがいても抜け出せない問題に行き当たり、それが機能しないことがあった。彼[その異星人]が現れるのはこのときだ。我々は彼にこれを見せ、我々がしたことのが悪かったのかを調べてくれと言った。

この 40 年ほどの間、シミュレーターは数えないで - 私は実際の宇宙機について話している - 我々が建造したものはおそらく 20 機から 30 数機だろう。様々な大きさのものがあつた。

ここに持ち込まれた[ET]宇宙機について、私はあまりよく知らない。キングマンから運ばれたもの[宇宙機]のことは知っているが、まあその程度だ。それを現場から運んだ会社を私は知っている - それは今ここにある会社だ - しかし．．しかし、ある種の化学物質で作動するものがある。

人々が見ているこれらの三角形は、2 機または 3 機の 30 メートル宇宙機だと思う。それはその[三角形の]中心にある。その外周部 - そこには設計条件に適合するものなら何でも望みのものを置くことができる。そうするとそれらは作動する。

秘密には何かの理由があつた。私が理解できたのはこういうことだ； それは彼らが製造した最初の原子爆弾と異なるところはなかった。しかし彼らは航空機の設計に関して、今や長足の進歩を遂げつつある。そして、前にあなた方に言ったように - 2003 年までには、この秘密の大部分はあらゆる人の前に姿を現すだろう。人々が考えるような方法ではないかもしれないが、彼らが決める何らかの方法．．あらゆる人に見せるのにふさわしい方法で。それは人々を大いに驚かすだろう。

私がそう言う理由は、私が署名した書類は 2003 年に失効し、しかもそれらの書類に署名した人間は私だけではないからだ。

しかし、あの重力マニュアル - もし仮にあなたがこれらの大量の書類の一部でも入手したなら、あなたは世界の頂点に立つだろう。あなたはあらゆることを知ることになるだろう。

[人類が建造した反重力宇宙機と、窓の代わりにカメラを用いて映像を得る方法について立証するマーク・マキヤンドリッシュの証言を見よ。SG]



米国空軍中佐 ジョン・ウィリアムズの証言  
Testimony of Lt. Colonel John Williams, US Air Force

2000年9月

ウィリアムズ中佐は 1964 年に空軍に入り、ベトナムで救難ヘリコプターのパイロットになった。彼は電気工学の学位を持ち、軍事空輸軍団 (MAC) のためのあらゆる建設プロジェクトを担当した。彼は軍に在籍中、カリフォルニア州ノートン空軍基地内に誰にも知られることのない施設があるのを知った。聞いたところでは、そこには 1 機の UFO が格納されており、ボブ・ドールを含む一部の上院議員たちがその施設を訪れたという。ウィリアムズ中佐はまた、父から聞かされたもう一つの話をも明らかにする：彼の父はある夕食会に参加し、ランド研究所の高位職員と会話を持った。この高位職員は彼の父にこう語ったという。政府は、この国の歴史にあるどのプロジェクトよりも多額の予算を、反重力装置の開発に費やしている。

JW: ジョン・ウィリアムズ中佐

SG: スティーブン・グリア博士

**JW:** . . . ノートン空軍基地にはある施設があったが、そこはごく限られた関係者だけのための厳重機密区域だった - その航空団指揮官でさえ、何が行なわれているのかを知ることができなかった。その頃パイロットたちの間では、そこに 1 機の UFO が格納されていると常に噂されていた。なぜこの場所なのか。その理由は、人々が出かけてきてノートンに着陸し、ゴルフをしたりゴルフトーナメントに参加したりして、その途中でこの施設に立ち寄り、実際に UFO を見ることができたからだということだった。しかし、私がノートン空軍基地にいた間は、その区域に立ち入ることは許されなかった。

[このノートン空軍基地の施設には実際に 1 機の UFO が格納されていたと確認するマーク・マキヤンドリッシュの証言を見よ。SG]

. . .

**SG:** その施設が実在することをあなたは確認することができたのですね？

**JW:** そのとおり。なぜなら、1981 年から 1982 年の間、私はあの基地の施設を任されていたからだ。

**SG:** そこに入り、おそらく UFO を見て出てきた要人とは、どういった種類の人たちでしたか？

**JW:** 上院議員たちだったと思う。もっと言えば、ボブ・ドールがあつた施設に行つたと私は理解している。さらに 1950 年代初期に遡れば、あのアイゼンハワーが実際にあの施設を訪れた可能性がある . . .

さて、とても親しい友人同士の夕食会に、一人のランド (RAND) 研究所職員が招かれた。ここはベンチュラ地区 (\*カリフォルニア州) で、彼らのランド調査地域に近かつた。そのときの話は父をととても驚かせたため、父は私にそれを何度となく話して聞かせた。父が言うには、少し飲んだ後のそ

の夕食会で、このランド研究所職員はこう言ったという。政府は、この国の歴史にあるどのプロジェクトよりも多額の予算を、反重力に費やしている。これを聞いた父は、我々が使用可能な反重力システムを実際に開発してしまっていると信じた。その予算支出は、おそらく第二次大戦直後から始まったものだろうと思う。これは何年にもわたり継続された取り組みだったと思う。

この情報を伝えた人物は、ランド研究所の高い地位にいたと私は理解している...

ドン・ジョンソン氏の証言  
**Testimony of Mr. Don Johnson**

2000年12月

ジョンソン氏は1971年から1972年に、センチュリー・グラフィックス社で働きながら自力で大学に通っていた。その仕事の一部に、大型印刷機による設計図の印刷があった。センチュリー・グラフィックス社はロッキード、リットン、ヒューズ、RCAといった様々な軍事電子企業から仕事を受けていた。彼は低い機密取扱許可しか持っていなかったが、最高機密資料のために彼の手伝いが必要になったことが何度かあった。たとえば、彼は米国とロシアのすべての潜水艦ルートのリトグラフ陰画に取り組んだことがあった。彼は証言の中で、ヒューズ-スンマ社から受注した巨大な電子回路図に取り組んだこともあったと述べる。その回路図の中央には1個の大きな長方形があり、そこに「反重力室(antigravity chamber)」と書かれていた。彼は自分の仕事をやり終え、その言葉を指し示しながら指導係の方を向いた。すると、その指導係は彼にこう言った。君はそれを扱うことになっていない。それを元に戻して忘れるのが身のためだ。

## ボーイング・エアロスペース社 A・H の証言

### Testimony of A.H., Boeing Aerospace

2000 年 12 月

A・H は米国政府、軍、民間の UFO 地球外知性体グループの内部から重大な情報を得てきた人物だ。彼は NSA(国家安全保障局)、CIA(中央情報局)、NASA(航空宇宙局)、JPL(ジェット推進研究所)、ONI(海軍情報局)、NRO(国家偵察局)、エアリア 51、空軍、ノースロップ社、ボーイング社、等々に友人がいる。彼は地上技術者としてボーイング社で働いていた。彼は四つ星将軍カーチス・ルメイに紹介され、ある日カリフォルニア州ニューポートビーチにあるルメイの自宅を訪ねて、この問題について話し合った。ルメイはロズウェルでの ET 宇宙機墜落を認めた。NSA にいた A・H の接触者は、ヘンリー・キッシンジャー、ジョージ・ブッシュ、ロナルド・レーガン、ミハイル・ゴルバチョフのすべてが ET の問題については知っていたと語った。また、CIA にいた彼の接触者は、米国空軍はこれらの宇宙機の一部を撃墜したと語った。ボーイング社で働いていた A・H の友人は、墜落機の回収に関わり、運ばれた ET の遺体を自分の目で見たという。A・H はこう述べる。レーダー試験が ETV(地球外輸送機)の一部に干渉を引き起こしていたことを発見したのは FBI(連邦捜査局)のグループで、これが多くの墜落を引き起こした原因だった。さらに彼は、地球外技術を試験し、維持している地下基地があると言う。それらはユタ州(飛行機でしか行けない場所)、カリフォルニア州エンゾー(Enzo)、カリフォルニア州ランカスター／パームデール地区、カリフォルニア州エドワーズ空軍基地、カリフォルニア州マーチ空軍基地、フロリダ州エグリン空軍基地、英国ロンドン、その他の多くの場所にある。

AH: A・H

SG: スティーブン・グリア博士

AH: . . . 私はカーチス・ルメイにこう訊いた。カート、あなたが空軍にいたとき、空軍に報告された[UFO]目撃のうち、どれくらいの割合が確認できないままでしたか？ 彼は、確認できなかったのは 35 パーセントにすぎなかったと言った。それで私は、なぜ確認できなかったのかと訊いた。そうしたら彼は、ヤツらはあまりにも速過ぎるんだと言った。我々は彼らを捕まえられない。実際、彼は口汚い言葉を使ってそれを説明した。

次に私はロズウェル墜落事件について、本当にあったのかと訊いた。彼は私の方を見て、そうだと頷いた。それは確かに起きた。それで私は、内部で見つかった奇妙な文字に特に興味があると言い、それが解読されたかと訊いた。彼は、自分の在職期間中、知る限りではそれらは解読されなかったと言った. . .

ルメイはこの人物も知らなかったが、彼らが何を私に教えたかを話すと次第に打ち解け、ロズウェルで起きた墜落事件について話し始めた。彼はこう言った。それが我々の物体でないことは知っていた。軍のものではなかった。空軍のものでも、陸軍のものでも、海軍のものでもなかった。墜落した機体はまったく未知のものだった. . .

ところで、マジスティック 12 の話は本当だ。MJ-12 は確かに存在した。だが今日それは存在しない。名前が変わったのだ。その地位は今でも変わっていない。ヘンリー・キッシンジャーは進行していることについてとても精通していた。ヘンリー・キッシンジャーはそのグループに入っていた。私はそう告げられた。

**SG:** それをあなたに告げたのは誰ですか？

**AH:** NSA (国家安全保障局) で働いていた私の友人がそう言った。彼は文書の中でヘンリー・キッシンジャーの名前を見た。彼はその文書の幾つかにジョージ・ブッシュの名前も見た。彼は何が起きているのかについて気付かされた。1978年頃、レーガンは異星人の存在について完全な説明を受けた。レーガンはロシアのミハイル・ゴルバチョフに、起きていることの 75 パーセントを語った。それからゴルバチョフは、我々と大変親しくなった...

ワシントン D.C.のある CNN 記者が、ゴルバチョフが 2 度目にアメリカに来たときに、ゴルバチョフとその夫人にインタビューをすることができた。彼らは通りに出てきてその警護特務隊をイライラさせた。CNN 記者がゴルバチョフに“核兵器を全廃すべきだと思いますか？”と質問した。そうしたら夫人が進み出て、“いいえ、異星人の宇宙船がいるから、私たちの核兵器をすべて廃棄すべきだとは思わないわ” こう言ったのだ。

さあ、この話を CNN はヘッドラインニュースで半時間にわたり放送した。私はこれを聞いて飛び上がり、次の半時間を記録するために空のテープを入れた。ところが何と、この話は消えてしまったのだ。誰が妨害したか、あなたはご存じだ。それに関与したのは CIA だった。なぜなら、彼らは CNN と全世界のヘッドラインをそのとき監視していたからだ。彼らはそれを踏みつぶした。しかし私はそれを聞いていた。これで私は、NSA の情報源から入手したロナルド・レーガンに関する情報が正しかったことを知った。私に言わせれば、この秘密保持のやり方はまったくの行き過ぎだ。議会はこの情報について知る必要がある...

CIA 工作員のブレット・メルは、彼ら(異星人)が我々の領空に侵入した場合、これらを撃墜するためのミサイルの使用に関して合衆国空軍を相手にしたことがあったと語った。彼は、その状況と極度の機密性について知っていたが、何が行なわれているかは知っていたと言った。彼は国家情報工作員だった。我々はネバダ州のイーリー上空とニューメキシコ州のアルバカーキ近くで、それらの何機かを攻撃した。

**SG:** これらの事件が起きたのはいつ頃だと彼は言いましたか？

**AH:** これは 1960 年代終わりと 1970 年代だった...

私は一人の陸軍将校に会った。彼は CID (犯罪捜査部) にいたとき、何度か墜落機の回収に関わった。彼が 1947 年に米国陸軍で兵役に就いていたとき、彼の友人の何人かが CIC (陸軍防諜部隊) にいた。彼らは互いにとても親しくなった。彼はロングビーチのボーイング航空機会社で働いていた私の友人を慎重に選び、ニューメキシコ州北部で ET 墜落機の回収に当たさせた。

彼は何人かの異星人を見た。墜落した円盤も目の当たりにした。墜落機の警備に就いていた彼は M1 カービン・ライフルを渡され、許可なくそれに近づく者は誰でも撃てと命令された。彼は他の回収にも何度か呼び出された。そのときは、窓を隠した飛行機に乗せられて墜落現場に行った...

私の友人は自分の目で異星人の遺体を見ていた。彼らは黒いアーモンドの形をした目を持っていた。やや大きな頭部 - 人間の頭部よりも少し大きかった。身体はほぼ 9 歳くらいの子供の大きさだった。彼らには 4 本の指があった。親指はなかった。彼らはすべて一つの鋳型から出てきたようだった。なぜなら、彼らはすべて同じに見えたからだ。口はただの小さな細長い切れ目だった。

彼らにはちゃんとした小さな耳があったが、頭髪はなく、その姿はととも異様に見えた。彼の頭に浮かんだのは、彼らはおそらく遺伝子操作によってつくられたのではないかということだった。しかし、宇宙機の内部で見た技術は人間の手によるものではあり得なかった。なぜなら、内部にはファイバー光学が使われていたからだ。また、内部にあったスライドスイッチの幾つかは我々が持っていなかったものだった。地球にあの種の技術を持つ者はいないだろう...

1949 年の墜落はやや大きな宇宙機で、搭乗していた人々は少し背が高かった。彼らは約 5 フィート 8 インチの身長があった。そしてパレスチナ周辺の古代民族に似た外見をしていた。おそらく紀元前 3,000 年頃のだ。

彼はこれらの異星人の一人を持ち上げ、ジープの台に乗せた。その重さはせいぜい約 45 ポンド、多分 40 ポンドくらいだった。彼らは遺体袋に入れられ、当時はライト-パターソン空軍基地に運ばれた。後になって彼らの一部はコロラド州やニューメキシコ州北部に移送され、1960 年代終わりにはエリア 51 に運び込まれた。すべての墜落残骸や技術、異星人に結びついた現象に関わるすべてのものは、それ以後エリア 51 に行った...

ついに彼らは、ニューメキシコ州でのレーダー試験が、異星人の宇宙機を多く墜落させた原因だと気付いた。宇宙機が高出力発信装置に近づき過ぎたとき、その誘導制御装置がそれと干渉し、墜落した。他の墜落した宇宙機は、我々が軍の兵器で撃墜したものだ。

これは彼が私に言ったことの一つでよく覚えているのだが、我々にとてもよく似た別の異星人グループがいる。彼らはオレンジ(Orange)と呼ばれている...

しかし彼は、逆行分析をするためにその宇宙機に取り組んだとはっきり言った。彼は異星人がいることを知っているし、私が空軍参謀総長のルメイ将軍に会ったことも知っている。彼はエリア 51 で行なわれた試験について何度か私に話してくれた。そのうちの何機かは山の背後から姿を現し、突然消える。それから約 20 秒以内に 15 マイルから 20 マイル離れた場所に再び現れる。このようにして行ったり来たりを繰り返す...

**SG:** これらは人間がつくったものですか？

**AH:** いや、これらは本物の物体で、彼が取り組んでいた宇宙機だ。我々の軍がこれらの ET 宇宙機をエリア 51 で試験しているのだ...

彼はノースロップ社のために働いていた。直接にノースロップ社のためにだ。彼は軍のために働いていたのではない。彼は給料をノースロップ社から受け取っていた。

**SG:** そうすると、ノースロップ社はエリア 51 に関わっているのですか？

**AH:** そのとおりだ。ロッキード・マーチン社、ボーイング社も同様だ。ボーイング社は間違いなくエリア 51 のためにトラック輸送をしている。ヒューズ社も関わっている。国防関連契約企業の大部分は、エリア 51 と何らかの関係を持っている。私はボーイング社がエリア 51 のためにトラック輸送をしていることを確かに知っている。ボーイング社にいる友人がそれを教えてくれた。彼らは幾つかの軍事拠点への輸送のためにボーイング社をそこで使っていた。この友人自身がエリア 51 に行った。彼は主要高速道路から護衛されてエリア 51 に行った。

この証人は今も存命だ。実際、彼は異星人たちがどこから来たのかを知っている。彼が理解する限りでは、エリア 51 には地下区域があり、大量の地球外宇宙機の残骸が地下の、ある種の封じ込め区域に格納されている。彼はエリア 51 の中で歩き回って誰かと話している地球外知性体を見たことはない。しかし、宇宙機とその技術だけは確かに見た。彼らはその技術をこれらの輸送機から抽出しようと試みている。それを我々の戦闘機や宇宙計画の一部に組み込むためだ。

彼らはこれらの ET 宇宙機を調べることによって、レーザー技術と音波防衛手段を開発した。彼らは音波によって戦車や建物を吹き飛ばすことができる。レーザー技術の幾つかは、彼が私に話した宇宙機から獲得したものだ。また、私が知ったことだが、彼らは多数の従業員、幾つかの装置、地球外技術装置の一部、および宇宙機を、ユタ州の基地に移動している。

*[私が他の深部の事情通から聞いたところでは、これは本当のことで、今では最も重要な地球外技術研究施設はすべて地下にあり、飛行機でしか行けないユタ州にある。SG]*

...

レッドライト計画は、これらの宇宙機を試験しながら、できるだけ多くの情報を異星人関連プロジェクトから引き出し、これらの物体がどのようにして作動するのかを解明するためのものだ。彼らはできるだけ多くの情報を得て、それを我々の戦闘機や爆撃機、さらに宇宙関連計画に応用したいと思っている。私は陸軍や空軍にいた人々、エリア 51 で働いていた人々からいろいろ教えてもらったが、彼らの全員がレッドライト計画で行なわれていることを証言している。レッドライト計画は今日このときもまだ継続されている。

こうして、ノースロップ社は彼をエリア 51 に送り込んだ。これらの物体がどのようにして作動するのか、それを解明するのがエリア 51 での彼らの目的だったからだ。彼がエリア 51 に行ったのは 1980 年だったと思う。そして 1997 年頃に彼はそこを去った。

ところで、レッドライト計画とグラッジ計画だが、それらはすべて入り混じっている。ブルーブック計画の責任者ロバート・フレンドが私にそう語った。彼はレッドライト計画のことを完全に知っていた。グラッジ/ブルーブック報告書 No.13 は彼によって書かれたのだ。ロバート・フレンドは以前、レドンドビーチ(\*カリフォルニア州ロサンゼルス)のアビエーション大通りとローズクランズ大通りに面したフェアチャイルド社で働いていた。我々は電話で約 1 時間話した - 彼もまた、私がルメイ將軍、

そしてもちろん CIA と FBI の作業者に会ったと話すまでは、そのことについて話したがいなかった。

こうして彼は打ち解け、私に UFO のことを話し始めた。私は彼に、ロズウェル墜落事件の後でライト-パターソン空軍基地に運ばれた幾つかの墜落残骸について訊いた。彼は、そうだ、残骸の一部と遺体はオハイオ州デイトンのライト-パターソン空軍基地に運ばれ、その他の一部はフロリダ州のある基地に運ばれた、と私に語った。私はフロリダ州にある基地については何も聞いたことがなかったので、驚いた...

彼が言うには、目撃を最小限に減らし、メディアと目撃情報をメディアに報告してくる目撃者を抑えるために、彼らはこれに蓋をしようとしている。空軍はこのことを絨毯の下に押し込み、研究を続けてそれをまさに掌握したいと考えている。彼は次のことを認めた。空軍は、これらの目撃が大学生のいたずら、気球、気象現象などによるものだという馬鹿げた考えにメディアを誘導しようとしている...

機密の保全に関して彼はこう言った。もし軍関係者がこれについて喋ったら、その者は軍法会議にかけられるか、少なくともそのようになると脅される。別の脅迫は、給料小切手を取り消すか、アラスカのような大抵の人間が行きたがらない基地に転勤させるといったものになるだろう。

NSA にいる私の接触者は陸軍にいた。NSA は陸軍の一部で、彼は高度な機密情報収集に当たっていた。彼は最高機密取扱許可アンブラ(UMBRA)を持ち、NSA とメリーランド州フォートミードで訓練を受けた。それから衛星監視局に移り、そこで国防総省や、ETV[地球外輸送機]を追跡する他の NSA 衛星監視局から発信された幾つかの通信を受信した...

カーターはほとんど蚊帳の外に置かれた - 統制グループはある理由で彼を信用しなかった。彼は出てきて、報道機関に対して無分別な発言をするのではないか。彼らはそれを恐れて彼を信用しなかった。彼らはカーターを蚊帳の外に置いた...

この NSA の証人は 1974 年に軍に入り、1985 年頃に辞めた。つまり NSA を去った。彼によれば、ヘンリー・キッシンジャーは 1950 年代に遡ってこの研究グループに関わっていた。その目的は、この情報の波及効果を研究し、信頼できる筋からこの情報を流した場合に何が起きるかを明らかにすることだった。彼らはこれを行なうために、ランド研究所やその類のシンクタンク等、ある種の外部研究グループに機密情報を流し、肩代わりさせた。

基本的に、これらのプロジェクトは MJ-12(マジスティック 12)グループにより統制されていた。もうこれは MJ-12 とは呼ばれていない。私はこの組織の新しい名前を見つけようとしている。エリア 51 で働いていた私の接触者はこの組織の名前を知っているが、それを私に言うのを拒んでいる。要するに、これはワシントン D.C.の国家安全保障会議および国家安全保障企画グループと交じり合った一つの統制組織だ。あらゆること管理統制を行なう国家安全保障企画グループと呼ばれているグループがある。MJ-12 はこれらの人々、国家安全保障企画グループと交じり合っている。

彼らは完全な統制力を持っている。彼らは今起きていることを大統領に知らせる。すると大統領



はそれを認可するか、単に“やってくれ”と言うだけだ。彼らは完全な統制力を持っている。彼らに議会の監視はまったく及ばない。彼らは誰に対しても答えない、米国大統領以外には。しかし、私が理解したところでは、その大統領をさえも締め出そうとしている。

大統領は、もはやこれらのグループに対してそれほどの統制力を持たない。それはまるで別の組織だ...

大統領は統制力を失いつつある。彼は間違いなくこの問題に対して統制力を失い始めている。カーターが蚊帳の内に置かれなかった理由もそれだ...

NSA は、追跡と迎撃に関して NORAD(北米航空宇宙防衛司令部)、空軍、陸軍と共に、NRO(国家偵察局)とも行き来しながら協力している。彼らはこの行動に関してはすべて一体だ。そして、そのすべてが MAJI 統制と呼ばれる最高機密グループに結びついている。

**SG:** MAJI 統制と、それがどのように機能しているのかについて、彼は何を語りましたか？

**AH:** MAJI 統制は ONI(海軍情報局)により支配されている。それは CIA(中央情報局)や NSA(国家安全保障局)のような、最高機密収集グループだ。実際に、ONI は CIA と同じようなものだ。それは海軍内部の最高機密組織で、NSA や CID(犯罪捜査部)と似ている。情報はすべて暗号化されている。彼らはちょうど CIA のように、外で情報収集をする工作人員たちを抱えている。それはすべてきわめて厳重な最高機密だ...

宇宙機の大部分は、反重力と電気重力推進によって作動する。我々は、今まさに反重力に関して結論を得るところまで来ている。私はそれをおそらく約 15 年後と見ている。そのとき我々は、この種の技術を利用した浮揚する車を持つことになるだろう。我々は今それをエリア 51 で行なっている。それこそが、私の友人がノースロップ社の一員としてエリア 51 で取り組んでいたことの一部だ。彼は今ネバダ州パーランプに住んでいる。我々はまさに今、反重力輸送機をそこで、またユタ州で飛ばしている...

たとえば、火星の人面岩に関して我々が収集し得た情報、私はそれを確かな事実として知っているが、これは大きな衝撃を与えるだろう。これまで話に出さなかったが、私には NASA(航空宇宙局)の JPL(ジェット推進研究所)に別の接触者がいる。私はそれについてあまり話せない。というのは、彼はまだそこで働いているからだ。私が知るこの人物は、NASA でとても高い役職にある。彼は、それが紛れもない顔であることを彼らは知っていると言った。それが、我々ではない何者かによって彫刻されたものであることを、彼らは知っている。画像分析により、彼らは火星の人面岩が事実であり、嵐による浸食や光のいたずらによるものではないことを知っている。彼らは、火星の人面岩が、この地球に紀元前 4 万 5,000 年頃にやってきた地球外種族によりつくられたことを、事実として知っている...

英国警察官 アラン・ゴッドフリーの証言  
Testimony of British Police Officer Alan Godfry

2000 年 9 月

アラン・ゴッドフリーは退職警察官で、1975 年から 1984 年まで英国ウェストヨークシャー州都市警察に勤務した。1980 年 11 月 28 日、彼を含め六人の警察官が UFO を目撃した。彼が見たのは約 75 フィート離れた場所に浮かぶ、ダイヤモンドの形をした 1 個の物体だった。物体は地面から 5 フィートの高さに浮揚しており、幅約 20 フィート、高さ約 14 フィートと推定された。その下半分は回転しているように見えたが、上部は静止していた。物体は無音だった。この事件を報告して数箇月後、彼は嫌がらせを受け始めた。彼は 50 マイル離れた職場に転勤させられ、ついには彼がいた警察署に入ることも禁じられた。彼のロッカーには密輸麻薬が置かれた。

... 私はパトロールカーに乗って A646 号線をバーンリーに向かっていて。道路の前方を見ていた私は、正面のおよそ 150 ヤード先に 1 個の物体を認めた。最初に頭に浮かんだのは、2 階建てバスが停まっているということだった。そんな状況だったが、私はこの物体に向かっていった。私とその物体に近づいたとき - 物体から約 25 ヤード以内の距離 - 目に入ったものは私を困惑させた。

私はまず、熱気球の一つが降下したのだと考えた。次に、今は朝の 5 時だと考えた。そうこうしている間に、私はこの物体が地面から浮揚しているのに気付いた；パトロールカーに乗っていて、物体の下を通して向こうが見えたのだ。それは地面から約 5 フィートの高さに浮揚していた。物体は前方の道路の大部分を隠していたので、その横幅は約 20 フィートだった。というのは、道路はそこでかなり狭くなっていたからだ。また、道路照明がその頂部の上に見えていたことから、物体の高さは約 14 フィートと推定された。

私はそれを眺めながら、約 25 ヤード離れて車を停めた。次に、パトロールカーのブルーライト、ヘッドライト、ハザードライトなど、考えられる限りのライトを点灯した。これで道路が完全に封鎖された。物体はダイヤモンドの形をしており、二つの部分が結合しているように見えた。その下半分は回転しているように見え、上半分は静止しているようだった。また、その周囲を黒い窓かパネルが取り巻いているように見えた。

私は完全にショックを受けていた。道路を縁取っている茂みや樹木は、まるで強風が吹いているように激しく揺れていた。しかし私の車は、見たところ静止していた。車の中では何の振動も感じなかったし、何の物音も聞こえなかった。物体は私に聞こえるどんな音も発していなかった...

それはまったく航空機に似ていなかった。ご存じのとおり、航空機は飛ぶものだ。垂直離着陸ジェットでない限りは。この物体は浮揚し、動いていた。私はこれが典型的な UFO、未確認飛行物体の状況ではないかと思う。

その後私は、他の警察官たちの目撃について知るようになった。私にとっては大きな救いだった。それが私にとりどれほど大きな救いだったか、あなたには想像できないだろう。なぜなら、一人の警

察官が、あの小さな共同体の中で同僚たちから受けた扱いがどんなものだったのか、あなたには理解できるはずがないからだ...

信じようと信じまいと、我々の警察署には、国防省に UFO 目撃を報告するためのある書式があった...

事件の後で起きたことに、私は本当に驚いた。私の人生はあっという間にひっくり返ってしまった。のんきな男が 6 箇月の間に地獄を経験させられ、想像もできないような惨めな人間になってしまった。その原因は他でもない、嫌がらせ、圧力、虐待、ありとあらゆるものだ。私は実際にそれを経験したのだ...

## 元英国外務省 ゴードン・クレイトン氏の証言

### Testimony of Mr. Gordon Creighton, Former British Foreign Service Official

2000年9月

クレイトン氏は多年にわたり英国外務省に勤務した。彼は中国で10年間を過ごしたが、1941年に大使館にいるとき、1機のUFOを目撃した。白屋に見たそのUFOは円盤型の無音の物体だった。頂部に青白色の照明を付け、高速で飛行していた。彼は1953年にホワイトホールにある国防省にしばらく滞在し、UFOを扱う航空技術部の下のフロアで働いた。イングランド南部サウサンプトン近くのマウントバツテン卿の地所に、1機のUFOが着陸したと彼は言う。

... 今我々は、スターリンが米国人よりも早く行動に移したことを知っている。スターリンはニューメキシコにおけるUFO墜落の後、1947年というとても早い時期にこの問題を知るようになった。スターリンはあらゆる場所から報告を集めていた。ある日、スターリンは彼らの最高の天文学者を呼び、これらの報告書のすべてを見せた。スターリンはこう言った。そこに座ってそれを見たまえ。君はそれをどう思うか？ その天文学者はこう言ったという。家に持ち帰って見てもよろしいですか？ するとスターリンはこう言った。だめだ。君から返事が聞けるまで、君はこのクレムリンのここに座り続けることになる。その天文学者はこう答えたという。確かに、それはこの世界のものではありません。それはこの地球のものではなく、地球外のもです...

J・アレン・ハイネックは私のよき友人だった。私は彼にこう訊いたことがある。これらのUFO事件が始まった原因は一体何だと思うか？ 彼らはずっとそこにいたはずなのに、1947年以後の彼らのこの大きな関心は何が原因だと思うか？ 私の記憶によれば、彼は少し考えてこう言った。原子爆弾だということは明白だ。もしあなたが多次元理論というものを考え、それを受け入れるなら、我々がとんでもない大被害を引き起こしてしまったことは大いにあり得る。我々はある領域において、この世界で与えたよりもさらに大きな被害を与えたかもしれない。もしあなたがミツバチの巣を蹴ったなら、ミツバチが出てきてあなたを見ても驚くには当たらないだろう。もしあなたが彼らを傷つけたなら、彼らはあなたを刺すことさえするだろう。だから、これはとてつもなく複雑な問題だというのが私の答えだ。

人類が今のまま振る舞い続けるなら、自滅するだろう。人類は弓と矢で永遠に生き続けることもできた。今のこの技術では永遠に生存することはないだろう。どちらか一方だ。

あまりにも知り過ぎて、厄介になったり不都合になったりした人々を始末するために、諸機関は様々な手を打ってきたと私は確信している...

ケネディは、UFOの問題についてもっと多くの情報を得ようとし、CIAとの間でちょっとした闘争を行っていたかもしれない。彼はそれをロシアと一緒に取り上げて検討すべきだと考えていたらしい。もし彼がそれをロシアと一緒に取り上げるつもりだったとしたら、CIAはそれを時期尚早で非常に危険な行為と思ったかもしれない。そう考えると彼の抹殺の説明がつくだろう...

米国空軍軍曹 カール・ウォルフの証言  
Testimony of Sergeant Karl Wolfe, US Air Force  
2000年9月

カール・ウォルフは1964年1月から4年半空軍に勤務した。彼は最高機密取扱許可クリプトを持ち、バージニア州ラングレー空軍基地の戦術航空軍団(TAC)で働いた。彼はNSA(国家安全保障局)施設で働いていたとき、ルナー・オービターが撮った月面写真を見せられた。そこには細部まで分かる人工構造物が写っていた。これらの写真は1969年のアポロ月着陸以前に撮られたものだった。

... こうして私は、ラングレー空軍基地にあるこの施設まで行くように言われた。そこではNSAがルナー・オービターからの情報を収集していた... 私が入っていくと、そこには他国から来た人々、私服を着た大勢の外国人がいた。彼らは通訳を伴っており、首には立入許可証を下げている...

彼らはとても物静かで、控えめだった。その頭上を奇妙な幕が覆っていた。彼らはとても心配そうな表情をしていた...

彼はこの作業が行なわれていく様子を説明しながら、私を部屋の一方の壁際まで連れていった。そしてこう言った。“ところで、我々は月の裏側に基地を一つ発見したんだ” 私は、誰の？ と訊いた。どういうことだ、誰の基地？ すると彼はこう言った。“そうとも、我々は月の裏側に基地を一つ発見したんだ” それを聞いて私は驚き、少し恐怖を覚えた。もし今誰か部屋に入ってきたらどうしようかと、私は密かに考えた。我々は危険に曝されている、面倒なことになっている。なぜなら、彼は私にこの情報を話してはならなかったからだ。

私はそれに興味をかき立てられた。しかし、彼が越えてはならない限度を踏み越えていることも知っていた。次に彼は、これらの一連の連続写真から1枚を取り出し、月面上のこの基地を指し示した。それは幾何学的形状をしていた - 塔、球形の建物、とても高い塔、レーダーアンテナに似た物体などがあつたが、それらは巨大な建造物だった...

この同僚と私は同じ階級だった。彼はとても気が沈んでいる様子で、部屋の外の科学者たちと同じように青ざめた表情をしていた。科学者たちも彼と同様に心配そうな様子だった。彼はこれを誰かに話さずにはいられなかったのだ...

建造物の幾つかは半マイルの大きさがあつた。つまり、巨大建造物だ。その大きさは写っている写真ごとに様々だった。先に述べたように、形状の幾つか - 建造物の幾つかはとても高く、細かった。高さは分からないが、とても高かったはずだ。写真は斜めから撮ったもので、影があつた。球形やドーム形のとても大きな建物があり、ひときわ目立っていた；大きな物体だった。本当に興味深かった。なぜなら、私はそれらを心の中で地球上の建造物と対比させていたからだ。しかし、それらは大きさや構造において、地球上で我々が見る何物とも比較にならないものだった...

私はそれ以上それを見たくなかった。命が危険に曝されていると感じたからだ。言っていることが

お分かりか？ 本当はそれをもっと見たかったし、それをコピーしたかった。それについてもっと話し、議論をしたかったが、それはできないと分かっていた。これを私に話していた若い同僚は、完全にその時点での限度を踏み越えていた。

彼は誰かに話さずにはいられなかっただけだと思う。彼はそれについて議論しなかったし、できなかった。彼がそうしたのは、このことの重圧を受けて苦しんでいたからで、それ以外に何の意図もなかったと思う...

私は軍を辞めてから少なくとも 5 年間は、行き先がどこであれ、その居場所を国務省に知らせずに出かけることはできなかった。

*[これと同様の制限を受けていたメルル・シェーン・マクダウ, その他の証言を見よ。SG]*

旅行するときには、いつも届け出て許可を得なければならなかった。米国内でさえそうだった。私がどこにいるか、常時彼らは知っている必要があった。たとえば、もし我々がベトナムに行ったら、いつも銃を持った何者かが我々と一緒にいる。もし我々が敵の手に落ちるようなことになれば、彼らは基本的に我々を消す。彼らは敵が我々を捕まえることを望まない；その代わりに我々を殺すのだ。

我々はこのような条件下で作戦に従事していた。もし悪いヤツらの手に落ちたらと、我々の命は常に危険に曝されていた。そのことを我々は認識していた。私は軍を辞めるとき、こう言われた。私が政府のためにならない何かおかしな活動に関わっていないかを確認するために、定期的な調査が行なわれると...

元 NASA 契約業者従業員 ドナ・ヘアの証言  
Testimony of Donna Hare, Former NASA contractor employee

2000 年 11 月

ドナ・ヘアは NASA 契約業者のフィリコ・フォード社で働いていたとき、ある種の機密取扱許可を持っていた。彼女は紛れもない UFO の写真を見せられたと証言する。彼女の同僚は、写真が一般に公開される前にエアブラシで UFO の証拠を消すのが仕事だと説明した。彼女はまた、ジョンソン宇宙センターの別の従業員たちから次のようなことも聞いた。一部の宇宙飛行士は地球外宇宙機を見ていた。そのうちの何人かがこれについて話そうとしたとき、彼らは脅迫された。

私の名前はドナ・ヘア。私は 1970 年と 1971 年に、契約業者であるフィリコ・フォード社の従業員として NASA(\*ジョンソン宇宙センター) 第 8 号館で働いた。この会社は何度か社名を変えたが、私は長年にわたり同社の施設や社外の施設で、暗室作業その他に従事した。

正確な日付は覚えていないが、1970 年代のある日、私はその暗室、制限区域の一つに入ってしまった - 私にはある種の機密取扱許可が与えられていた。私は自分の会社のものではない、ある制限区域に入ってしまった - そこは NASA の暗室だった。そこでは月面写真や衛星写真が現像されていた。その作業のすべてが NASA の手で行なわれていた。

そこにいた一人の従業員 - かつての友人で、今でもたまに話をするが - 彼が私の注意をこのモザイクのある区域に向けた。それは何枚かの写真をつなげて 1 枚の大きな写真にしたものだった。私はそれを衛星写真だと思ったが、確信はない。それらは空中から下を見たものだった。私は、本当に興味深いわねと言った。

彼はすべてを説明してくれた。彼は笑みを浮かべ、そこを見なさいと言った。そう言われて私は見た。私が見た写真パネルの 1 枚に、1 個の丸い白点があった。そのときの画面はとても鮮明で、くっきりとした輪郭が見られた。私は、それは何なの？ と訊いた。それは感光膜のシミかしら？ すると彼はニヤリと笑い、感光膜のシミが地面に丸い影を落とすことはないと言ったのだ。なるほど、そこには丸い影があり、それは樹木の上で輝く太陽の入射光に対して正確な角度で写っていた。私は驚いて彼の顔を見た。なぜなら、私はそこで数年間働いてきて、これまでこのようなものを見たことも聞いたこともなかったからだ。私は、これは UFO なの？ と訊いた。すると彼は私に笑顔を向け、君にそれを教えることはできないと言った。君にそれを教えることはできない。私が理解した彼の言葉は、そうだ[UFO だ]、しかしそれを私に教えることはできないということだった。それで私はこう訊いた。あなたたちはこの情報をどうするつもりなの？ すると彼はこう言った。我々はこれらを一般に売り出す前に、必ずエアブラシを吹きつけて消去しなければならない。私はそれを聞き、これらの写真から UFO を除くために実施されている手順があることに驚いた...

彼は、[宇宙飛行士の]何人かが語ろうとして脅迫されたと言った。彼らは口外しないという誓約書に署名する。彼らに引退は許されない。その情報に私はショックを受け、聞き取りを始めた。私が知っていたある人たちは、組織の重要な地位にいた。私は彼らを外に連れ出すことにし、昼食を共にしながら話しかけた。彼らは一人になると、いろいろなことを語った。そして、きっぱりとこう言った。

もし私が彼らから聞いたと言った場合には、彼らは私が嘘をついていると言うつもりだと。私がよく知っているある従業員は、宇宙飛行士たちと一緒に隔離されていた。彼は、月に行った者のほぼ全員が物体を見ていると言った。実際にある宇宙飛行士は、着陸のときに宇宙機が月面にいたと言った。しかし、この人物は地球上から姿を消した。私は彼を見つけ出そうとしているが、名前以外に知っていることはない。私はその名前をグリア博士に伝えている。

私は大量の UFO 写真を焼却させられた保安兵にも会った。彼は私の部屋に来たとき、とても怯えていた。彼はこう言った。ドナ、君がこの問題に興味を持っていると聞いたんだ。そしてこう続けた。自分はある所で働いたことがある。ある日兵士が何人か軍服でやってきて、私に写真を焼却させた。自分はそれらを焼いたが、見てはならないと言われた。しかし誘惑に負け、そのうちの 1 枚を見た。そこには地上に降り立っている 1 機の UFO が写っていた。彼はその直後に銃の台尻で頭を殴られた。その傷は今も彼の額に残っている。この保安兵は怯え、恐怖で気が動転していた。彼はこうも言った。その写真には小さな隆起を持つ 1 機の UFO が写っていた。それは今着陸したばかりのように見えた...

何人かの男が私の前に姿を現し、これについて話しては駄目だと告げたときがあった。彼らは殺すとは言わなかったけれど、これについて話してはいけないというメッセージだと私は理解した。しかし私はそのときにはもうあちこちで話していたので、もはや何の意味もなかった。私が[1997 年の CSETI]議会説明会で話したように、この話題はまるでセックスと同じだと感じ始めていた。誰もが知っているけれど、男女同席では誰も口にしない。私は安全な議会公聴会が開催されればもっと話す用意ができています。私はグリア博士を信用している。これまで博士は、身の安全や私が話した秘密に関する限り、すると言ったことは全部してきた。必要で適当な時期にそれが明るみに出て、何かの役に立つことを私は望んでいる。うろつき回ってこれらの人々を排除したり、傷つけたり、身柄を拘束したり、脅して引っ越しさせるようなことをしないでほしい。私が知っているこの人物は、この地球上から姿を消した。その人は消えた。私はそういうことにだけはなりたくない。

私が憤慨していることの一つは、善良な人々が違法な行為を強いられていることだ。この情報はアメリカ[国民]に提供されなければならないと思う。



国防情報局 ジョン・メイナード氏の証言  
Testimony of Mr. John Maynard, Defense Intelligence Agency  
2000年10月

ジョン・メイナードは国防情報局(DIA)の軍事情報分析官だった。彼は21年間の経歴の中で、軍が様々な形でUFOに関心を持っていた証拠を見た：地球から発信されたものではない電子通信；軍によるUFO写真。彼は国防情報局にいる間に、秘密保持のための区画化についてよく知るようになった。彼は鮮明なUFOが写っている偵察写真を見た。

JM: ジョン・メイナード氏

SG: スティーブ・グリア博士

**JM:** 私の名前はジョン・メイナードだ。私は1980年に退職した軍事情報分析官だ。私は軍に21年間いたが、最初は陸軍情報保安庁の分析官だった。そこから幾つかの軍の組織を渡り歩き、最後はDIA(国防情報局)で勤務を終えた。そこでは要求と評価部(Requirements and Evaluation Division)のための大部分の文書に責任を持つ管理官を務めた。

情報の世界で地球外知性体とUFOについて何かに気付いていたのだが、これは私の経歴の早い段階、1960年代初めにやってきた。私は陸軍情報保安庁で無線通信を分析していたのだが、その一部が通常考えられるものとはやや異なっていた。私がこれに強い関心を持ち始めたとき、彼らは私をその部署から外すことを決めたのだと思う。

私はそこから、UFOに関して進行している物事の様々な側面を研究し始めた。私がヨーロッパに行ったとき、その防諜関係者が何人か接近してきた。彼らは分析に関する私の経歴を知っていた。私は軍内部で麻薬のやりとりをする現場を調査する仕事に関わることになった。またそれと同じ時期に、ヨーロッパの人々が経験していたUFO問題 - 特に目撃事件に偶然関わることになった。私はこれらの人々に対して予備調査を行ない、彼らが何を言っているのか、何が起きているのかについて、報告書を提出した。

私の最初のUFO経験に話を戻そう - それは沖縄での勤務と関係している。そこで我々は、あの時期の中国の通信パターン[電子通信]を分析していた。時々私は、我々の軍事通信網で知られている通信パターンには絶対でない異常に出会った。

私がこれについて疑問を発しても、彼らは常にそれを無視し、こう言った。“いいかい、君はそんなことを心配しなくてもいい”しかし私は放っておけなかった - 今でもそうだ。私は問題を起こさずに可能な限りそれを追求する。しかし、そのときは問題を起こしてしまった。私は通常の通信とは異なるものがあることを見つけた。それは基本的に地球から出ているものではなかった[地球から来ているものではなかった]。

その通信は調べれば調べるほど、送信されている通常の通信には属さないことがいよいよ明らかになった。私はその発信源を特定できなかったのも、それがどこから来るのかに強い関心を持った。私は通信部で働く何人かの友人に、それがどこから来ているのか、助言を求めた。それが私の失敗だったようだ。なぜなら、彼らは考えていたようなよき友人ではなかったからだ。

**SG:** あなたはそのことから何を知りましたか？

**JM:** 要するに、その通信は中国国内から来ているものではなかった - それらは他の場所から来ていたが、彼らはそれを実際に明かそうとはしなかった。友人の一人が脇の方で私に合図をし、親指を上に向けた。私は“それはグッドサインか、それとも？”と言った。そうしたら彼は“そうじゃない”と言った。内密な、とても内密な会話で、彼はそれらが地球の信号ではないと認めたのだ。

この問題の時期に、我々にはあの種の通信を交わす宇宙計画がなかったし、通信システムと衛星もなかったのは事実だ... 私は 1950 年代終わりから 1960 年代初めのことを言っている。だから、時期という点に関する限り、その発信源はまさに我々の近くにいた別の何かであったはずなのだ。スプートニクはあれほど長く飛んでいなかったし、アメリカの衛星ならなおさらだった。

あれが私の排除された原因だったと思う - 私はそれが地球外のものであることを知った - それで彼らは私を取り除くことにし、首尾よくそれを実行した。

ともあれ、私はヨーロッパにいる間にこれらの UFO 報告を調査し、かなり多くの目撃情報を入手した。我々は、宇宙機が着陸しているか否かにかかわらず、またその中に搭乗者 - 地球外知性体やその類のもの - が見えたか否かにかかわらず、見たものを描いた絵を入手しようとした。こうして私は心躍る 2 年間で彼の地で過ごした。

**SG:** この期間にあなたが報告書を提出した相手は誰でしたか？

**JM:** 基本的にそれらは CIA (中央情報局) に行ったが、DIA (国防情報局) や空軍の OSI - 特別捜査局に行ったものもあった。彼らがその情報を何に使ったかは知らない。

私がトルコにいる間に偶然出会った様々な計画がある。1970 年代中頃 - 1976 年, 1977 年, そして私がそこを去った 1978 年初めのことだ。私は NATO (北大西洋条約機構) 南欧司令本部の管理官だった。

私はトルコ軍の友人数名と一緒に調査をし、結局一人の将軍を見つけ出した。彼はトルコのこの地域で UFO 活動があることを認め、こう言った。“そのとおり、そこは重要な場所だ。UFO が見たければ、いつか君をそこに連れて行ってやる”

私はペンタゴン (国防総省) にいたとき、コース大佐からファイルを幾つか入手してくるように言い付かったことがあった。そのとき彼は、あの時代としては実に奇妙なことを言った。私は後年になるまでそれを何事とも結びつけて考えなかった。彼はこう言った。“我々がしようとしていることを君は想像できるかい？” 私は“いいえ、できません”と返答した。すると彼はこう言った。“よろしい。いつの日か完全に逆行分析 (back engineering) された技術が世の中に出てくるだろう” そのとき彼の言葉は私の頭上を素通りしていった。私はただ、はい、大佐、と答え、行儀のよい一兵卒のようにしてそこを去った。私は大佐が言ったことを誰にも言わず、それを自分の心にしまっておいた。私を使いに出した上司に対しては、コース大佐は自分をすぐに追い払い、自分はそのまま戻ったと復命し

た。

そのようなことはペンタゴンでは四六時中起きていた。資料はその所有者が厳重に保持している。後年、私は DIA (国防情報局) にいたとき、地球外知性体に関係する幾つかの文書を見たことがあった。それらは暗語で書かれていた。普通の人にはそれを読んでも気付かないかもしれない - まさに頭上を素通りするだろう。これらは最高機密文書だった。その大部分は今でも機密なのではないかと思う。その多くはソルト 1, ソルト 2 に関するものだった - ロシアとの間の戦略兵器制限条約 (SALT) だ。

私は UFO 写真も何枚か見たことがある。それらは国立情報写真センター [NIPC] - そう呼ばれていたと思う - から出たものだった。時々そこにあるはずのない異常なものが写真に写っていることがあった - 丸い物体、三角形の物体。それらは何かの場所を示すために写真に付けられた目印ではなかった。これらは地面から浮いていた。こうした異常は DIA の我々の事務所が受け取った一部の写真などに現れていた。それらは NIPC から送られたもので、我々はいつもそれを興味深く思っていた。NIPC はアーリントン (\*バージニア州) のヘイズ通りに面した国立情報写真センターだったと思う。

もちろん、それらは写真に付けられた何かの目印の一部ではなかったし、通常の物体でもなかった。特に長方形、円形、三角形 - 三角形物体はその末端部が丸くなって面白かった。これらはほとんどがタレントキーホール (TK) 衛星によって撮影されたものだ。それらの中にこうした物体 - UFO - が写っていた。TK11, TK12 による撮影だった。時々我々は、それが [空中を] 移動したときの写真を一枚一枚見ること、実際にそれを追跡することができた - つまり、それは動いていた。

私にはちょっと面白い経験がある。私が所属していた DIA の中ではなく、DIA での私の所管区域内にあったある事務所で起きたことだ。そこは私の保安区域内だったので、私はそこに入る暗号名を受け取り、その事務所を見てくるように言われた。それはオムニ計画と呼ばれていた... それはレーダー衛星を扱っていた。私は中の小さな展示室でその軍曹の一人と話していた。私は衛星の姿勢に注目し、こう言った。“さて、これは地球上のレーダー異常を追跡するためのシステムだ。そうだね？” 彼は“そうです。そのためのもです”と言った。それで私はこう訊いた。“では、どうしてその半分が月や何もない宇宙空間、つまり外側の宇宙を向いているんだい？ あなたの方がそこに打ち上げた衛星の少なくとも半分は地球を見ていない - 一体何を見ているんだい？” すると彼はこう答えた。“それを知るためには、それを知る必要性 (need-to-know) を持っている必要があります” それで私は言った。“分かった。では誰が地球に向かっているのかね？” 彼は“我々には分かりません”と言った。彼らは外側の宇宙から来る何かを追跡していた。それは随分奇妙なことだと私は思った。

私はキャンプデービッド合意と SR-71 ブラックバード (\*長距離偵察機) によるシナイ半島への偵察任務にも関わった。この時期に、何か地球のものではない物体がブラックバードに付き添って飛行したとの報告が幾つかあった。シナイ半島の写真には地形の一部でも、人間活動の一部でも、大気現象の一部でもない異常が写っていた。

情報の分野では、区画化 (compartmentalization) ということが多分すべてだ。一般社会は、機密

分類に関して実に大きな間違いをしている。基本的には三つの機密分類があるにすぎない：部外秘 (confidential), 機密 (secret), 最高機密 (top secret) だ。それがすべてだ。最高機密より上はない。彼らは近づいてきて、アンブラ (UMBRA) やこの計画、オムニについて訊いてくる。彼らは TK, つまりタレントキーホールやその類の他の計画について訊いてきた。ここで人々が知らなければならぬのは、次のことだ。私はアンブラ文書 (UMBRA documents) を持っていたが、それはただの機密だった。最高機密ではなかった。それは別のものだった。

情報機関が物事を行なう実態、つまり彼らがいかにして物事を分解するかについて話そう。彼らは大体どの組織も他から孤立させておく。計画の中では複数の部門にまたがる仕組みはつくらない。たとえば、私はアンブラ機密取扱許可を持っている。さて、人々はそれが最高機密よりも高い機密だという。違う、そうではない。それは一つの区画なのだ - 厳密な意味での区画だ - それ以上ではない。最高機密とは分類にすぎない。ウルトラ (ULTRA) はまた別の区画を意味する。それはまったく異なるもので、基本的に大統領に関係している。だから、それを不注意に扱うことはできない。そういうことなのだ。皆それ自体孤立している。それぞれがそれぞれ特有の形の分析を行なう。

私は DIA で要求と評価と呼ばれる仕事をしていた。我々の仕事はワロップス島かどこか別の場所から飛翔体を飛ばす決定をすること - つまり衛星を打ち上げることだった。

我々は DC3 だった。DC4, DC5 もあった。それぞれの正確な名前を言うためには、実際に私の背景報告書を丹念に調べる必要がある - これが区画化の行なわれる方法なのだ。

その中の一つは分析だけを行なった - それが彼らの行なったすべてで、彼らはそれを我々の要求部に送った。しかし、我々は実際に彼らが行なったすべてを見なかったし、彼らが作成した資料のすべてを見たわけでもなかった。彼らは我々に最終製品を渡し、我々はその最終製品を見て、そこから我々が何をするかを決定した。それが基本的な仕組みだ。オムニ計画は、これはレーダー衛星だったが - それ自体孤立していた。身に着けている立入許可証にオムニのスタンプがなければ、その事務所に入れなかった - 以上、それでおしまい。同じことはタレントキーホールなど、他の多くについても言える - アンブラ, ウルトラ - すべて同じだ。

NRO, 国家偵察局は基本的に空軍により運営されている。退役後にこれまで私が接触した人々から聞いて理解したところでは、偵察局はさらに多くの責任を引き受けるようになっている - 特に UFO と地球外知性体の活動への対処だ。

彼らはブルーブックが下車した場所から乗車したと言ってよい。ブルーブックは基本的にそれ自体空軍の計画だった。しかし、その活動は最終的に国家偵察局の管轄下に入った。

現在それは基本的に共同部局だが、空軍と統合参謀本部により運営されている。彼らはとても忌まわしい仕事を持っている。彼らが実際に何をしているかはあまり多く知られていない。しかし彼らは SR-71 の後継機を運用している。それはロサンゼルスとロンドンの間を約 18 分で飛行する能力を持つ、デルタ翼航空機だと考えられている - だからそれは宇宙空間に近い所を飛行する。非常に高速だ。衛星画像の役割はかなり補助的なものになってしまった。タレントキーホールは依然としてある。オムニもまだある。私はもはやその暗号名すら知らないが、他にも数機打ち上がっている

る。しかし、偵察のほとんどは航空機によって行なわれている。

反重力に関して言えば、彼らはそれに長い長い間取り組んでいる - 私はそれを知っている - しかし基本的に私が見てきたのは磁気パルスエンジンだ。それは飛ぶときにとても変わった痕跡を残す。それは通常の燃料を使うが、それに磁気パルスエンジンが付いている。その痕跡は、背後にできる、紐状につながった石鹼のような飛行機雲だ。

誰でも知っているように、政府というものの影響は広範囲だ。それは皆のポケットに入っているし、あらゆる場所のあらゆる人々の生活にも入り込んでいる。同じことが UFO/ET の問題についても当てはまる。しかし、きわめて少数の人間だけが、何が起きているかについて完全に知っている。それは闇の秘密活動の中に堅固に保持されている。その背景に近づいてよく見ようと思うなら、NSA (国家安全保障局)の外側にある民間組織に行けばよい。彼らは NSA の直接の契約業者たちだ - ドライドン・インダストリーズはその一つだ。彼らはなぜ海軍のパイロットたちを使い、偵察に SR-71 を飛ばしているのか？ 彼らは何を見ているのか？ そのことを考えるなら、NSA は何を見ているのか？ なぜ彼らはこんなことをしているのか？ 彼らは訓練のためにそれを使っているのではない。それはある一つのことのためだ。

組織内の幹部レベルでは、国家安全保障顧問が取締役となる場合、内情に通じた NSA トップの出身者として厚遇されると言ってもよい。

彼が知っている範囲は限られている。というのは、彼はただ指名された者にすぎないからだ。その点に関して言えば、CIA で新しく指名された者も同様だ。彼らには知らされるだろうが、それはごく限られた知識だ。闇の秘密領域にいる一部の人間だけが、何が行なわれているかについて本当の情報を知ることになる。

しかし、NRO (国家偵察局)についてはあまり多くのことが知られていない - それは実に目立たない組織の一つだ... この質問が上がるたびに、それは厳密な意味で偵察を行なう空軍の一組織だ、それでおしまい、となる。これでは多くの疑問が残されたままだ。しかし、UFO、機密情報、地球外知性体問題に関する限り、この組織はまさしく頂点にある - 私は敢えて言うが、大統領はそれについて限られたことしか知らない。

私はカーターが何の知識も持っていなかったことを知っている。私はまさにその政権、カーター大統領の政権組織で働いていた。彼らはそれを堅い秘密にしていた。

**SG:** それがそれほど秘密にされていたのはなぜだと思いますか？

**JM:** 彼らがロズウェルで失敗したからだと私は考えている。彼らはそれを認めるよりも隠蔽した。彼らがそれを隠蔽した理由は、UFO と地球外知性体の活動が、この政府が認めることになるよりも遙かに長期間続いているからだった。ブッシュ (大統領) - ジョージ・W - がこう言いながらチェイニー (副大統領) のコートにボールを放り込んだのは滑稽だった。誰よりもこれについてよく知っている者がいるとすれば、それはチェイニーだろう。彼は何かとても興味深いことを知っている...

この問題に関与している企業の中で、アトランティック・リサーチ社は主要なものの一つだ。だから、これについてはあまり頻繁には聞かれない。その目立たない存在をそう呼びたければ、これは内部にいる環状道路沿いの悪党 (beltway bandit) だ。その仕事の大部分を情報機関の内部で行なう。TRW, ジョンソン・コントロール, ハネウェル。これらのすべてがどこかの時点で情報分野に関わるようになった。ある種の仕事, 活動は彼らに請け負わされた。アトランティック・リサーチはずっと以前からその一つだった。これらは‘環状道路沿いの悪党’になるためにペンタゴン (国防総省) の人々によってつくられた組織で, ある極秘の区画化されたプロジェクトを実行するために, プロジェクト, 助成金, 資金を受け取っていた。あまりにも秘密で区画化されていたために, 何が行なわれているかを知る人間は四人ほどにすぎなかっただろう。それほど, それは厳重に統制されていた。

軍を退役した人々により始められた企業に目を向けるべきだろう。カリフォルニア州にいるボビー・インマンと彼が監督する小グループ [SAIC] (サイク社) がその一例だ。似たような企業が他にも幾つかある。そこで我々はこう質問する。誰が実際に JPL (ジェット推進研究所) を支配しているのか? なぜ JPL が組織されたのか? 他にもある: エイムズ研究所, フォートデトリック研究所だ。フォートデトリック研究所からは非常に興味を引く研究成果が発表される。そしてハリーダイヤモンド研究所... これはとても長い間活動している。彼らのことはあまり耳にしない。なぜなら, 彼らは基本的にすべて軍と契約しており, ある特定の専門性を持っているからだ。

あなたが逆行分析 (back engineering) 記録を見たことがあるかどうかは知らない - その仕組みなどの記録だ。とても変わっている。仕組みを教えてくれる技術者を一人と目的の仕様を準備する。そうすると, その誰かが残した記録から望みの装置を組み立てることができる - 逆行分析記録があればそれが可能になる。それがどのように機能するかを知るためには, それを分解する必要があるのだ。

私はロズウェルから得たものを幾つか思い出すことができる。1950年代中頃にカナダでも墜落事件が一つあったが, それは厳重な極秘になった。それらの物体を使った幾つかの技術計画が間違いなく存在した。

兵器と宇宙について: 我々は, 月面に降り立った宇宙飛行士が発したある言葉に遡ることができると思う。それは最初の飛行で, 彼らがそこに到着した翌日のことだった。彼はこう言う。‘君の言うとおりで, 彼らはすでにここにいる’ それは無線から聞こえてきた。私の知る限り, それを記録した人々も何人かいた。しかし, その発言はとても尋常ではなかった。なぜなら, それは公共放送された他のすべてのテープから素早く削除されたからだ。宇宙における兵器は今なお大きな謎だ。基本的に闇の秘密計画は, 常にそのようなことをやろうとしてきた。スターウォーズ計画は無用の長物だ。その大部分は存在しなかった。それはすべて紙に書かれただけのものだった。レーザー兵器... これはまったく別の話だ。レーザー分野ではまったく新しい技術の急速な進歩がある。切断に使われるだけではない。パルスレーザーはそれを照射することで基本的に何でも破壊する。

**SG:** あなたは我々が宇宙に兵器を置いていると思いますか?

**JM:** 我々が宇宙に兵器を置いていることを私は確信している。おそらく私の気持ちの中には何の疑いもない。彼らはスターウォーズ計画が始まるずっと前から, それらを開発しようとしていた。そ

それは 1960 年代終わりから 1970 年代初めの頃だ。

ニクソンは宇宙兵器を建造するために、その方針に沿って何かをしたかった。そしてその計画が始まった。(ニクソン個人ではなく、その政権だ)人々はそれを望んだ。そのときから、そこには何かしらの恐怖が存在することになった。最初に地球に衝突する小惑星の話が出てきたのはそのときだ。実際、それはごく最近になるまで大きな計画になることはなかった。しかし、そのとき我々はかなり危機的な状況に直面していたらしい - 今日彼らが騒ぎ立てるよりもさらに差し迫っていた。こうして、それは大きな関心事となった - 小惑星, UFO, 他の場所からやってくる人々。

[キャロル・ロジン博士の証言を見よ]

基本方針があった。構想があった。妄想もまた政府部内にはあった。ある段階で人々はそれを感じ取ることができた。それが起きていたことを人々は知った。彼らはその真実を語るだろうか？ 私には疑問だ。多分いつかはそうなるだろう。多分あなたのプロジェクト(\*ディスクロージャー・プロジェクト)が彼らに告げることになるだろう。英国と合衆国とカナダが、これらの秘密の最大の加担者だ。後になって彼らはオーストラリアをも巻き込んだ。

報道ということになると、メディアはとても片寄っている。論議を呼ぶ事柄になると、彼らは相手の感情を損ねることはしない - UFO や地球外知性体のような事柄だ。主要メディアに衝撃を与える目撃がこれまであまりにも多く発生している。だが彼らは素早く死んだふりをする。なぜ彼らは死んだふりをするのか？ メディアが追求すべきより大きな関心事が進行していた。しかし彼らはそれをするをすげなく拒絶した。なぜ彼らはそうしたのか？ 彼らは背後から糸で操られていたのか？ それは分からない。私はそれについて言えない。彼らもまた言わない...

これらの環状道路沿いの悪党たちにも、まさに同じことが言える。彼らに何か話をさせることができるか？ ノーだ。それこそ彼らの生きる道だからだ。彼らは自分自身の足を踏むことはしないし、自分に一発食らわすこともしない。

彼らは長年にわたり、我々から UFO や地球外知性体のような事柄を隠蔽してきている。それが真実だ。現在だけではなく 1900 年代より以前からだ。だから、それはそこにあるのだ。彼らが人前に出てきて、おいみんな、これが真実だと言う。もうそうしてもよい頃だ。

ハーランド・ベントレー氏の証言  
**Testimony of Mr. Harland Bentley**  
2000 年 8 月

ベントレー氏は NASA(航空宇宙局)や DOE(エネルギー省)を含む幾つかの政府機関において機密プロジェクトに関わってきた。彼は電気工学の理学士号を持ち、原子核工学の分野で広範な訓練を受けている。ベントレー氏は、メリーランド州のあるナイキ・エイジャックス・ミサイル施設で 1 機の UFO が墜落したのを直に目撃した。また、レーダーに映った一群の UFO が空中静止した後、時速 1 万 7,000 マイルと算出された速度で飛び去ったとき、当事者として現場にいた。彼はこれらの経験を詳細に語る。彼はまた、1967 年か 1968 年に起きた事件についても語る。そのとき彼は、ヒューストン管制センターと飛行中の宇宙飛行士たちとの間で交わされた会話を耳にした。その内容は、彼らが UFO との衝突を回避し、我々の宇宙飛行士たちが UFO の入り口を通して、何体かの生命体が動き回るのを実際に見たというものだった。

私は 1957 年から 1959 年までワシントン D.C.の北方、メリーランド州オルニー近くにあるナイキ・エイジャックス・ミサイル施設にいた。私はレーダー操作員だった。1958 年 5 月、午前 6 時頃に私は最初の音を聞いた。それは振動する変圧器のような音だった。私は窓の外を見、野原を見渡した。そのとき、この[円盤型]物体が地面に向かって突進し、墜落するのが見えた。それは破片を飛び散らしたが、その後再び離陸して飛び去った。私はすぐに上着を着てレーダーのある丘に登り、レーダーアンテナの方角を合わせるときに使う北極星観測用の望遠鏡を手にとった。それから座ってそれをレーダーに据え付け、野原に散らばっている破片を見た。私が見た最も大きな破片は白熱しており、おそらく洗濯機くらいの大きさがあった...

その宇宙機が墜落後に再び離陸したとき、それは木立の中を通ったが、太さ 3 インチ、4 インチ、5 インチの大枝を、ナイフかマシエティ(\*さとうきび伐採用なた)のようにただの一撃で刈り払った。

*[1997 年にペルーでこれに類似した地球外宇宙機の墜落が起きた。海兵隊上等兵ジョン・ウェイガントの証言を見よ。SG]*

さて、本当に驚くべき部分はそのところではない。本当に驚くべき部分は、私が任務に就いていた翌日の晩に起きた。時刻は夜中の 10 時か 11 時頃だった。私はゲイサーズバーク施設から連絡を受けた。その内容は、12 機ないし 15 機の UFO が 50 フィートから 100 フィートの高さに見えているというものだった。私は無線交信の相手に“UFO はどんな音を出しているのか?”と訊いた。彼はヘッドマイクを外し、それをトラックの窓から外に突きだした。そうしたら、あの振動音が再び聞こえた。しかし今度はさらに大きかった。彼は UFO が様々な形をしていると説明していた。

私はレーダー、M-33 走査レーダーのスイッチを入れた。そして、ゲイサーズバーク施設がある場所の地面反射の隣にブリップ(\*レーダー画面上の輝点)を見つけた。そこはこれらの宇宙機がいた場所だった。そのときまったく突然に、それらは同時に飛び去った。私のレーダースコープでは、1 回走査する間にそれが起きた。走査速度は毎分 33 と 1/3 回転だ。だから、その中心から最初の走査で次に輝点を見た位置までの距離を移動するためには、一定速度だとすると時速 1 万 7,000



マイルでなければならなかった。我々のアナログ計算機による数値だ...

私には、あまり多くは述べられないが、別の経験がある。その場所がどこかは言えない。私はカリフォルニア州のある施設にいた。私が言えるのはそれだけだ。そこで特殊な機密任務に就いていた。その出来事は、我々の宇宙飛行士たちが月を周回して再び帰還する飛行任務中に起きた。彼らが月に向かう途中、11時の方角に1個のボギー(未知の目標を表す言葉で、しばしばUFOを言い表すのに用いられる)が現れるのを見た、と彼らが話すのを私は聞いた。

その特別な言葉をよく知っていた私は、耳をそばだてて聞き始めた。そしてヒューストンと宇宙飛行士たちが、衝突について会話をやりとりしていることを知った。宇宙飛行士たちは衝突回避の許可を求めており、ヒューストンは最終的にその行動を許可した。後で宇宙飛行士たちは“それは必要ない。彼らは我々の航路と平行に飛んでいる”と言い、その航路と平行に飛んでいるものが何かについての議論があった。

それは別の種類の宇宙船だった。そこには入り口があり、その内部を見ることができた。そこにはある種の生命体があった。彼らはこれらの生命体について説明せず、ただ写真を撮った。しばらくして、つまり数千マイル飛行した後で、彼ら[ボギー]は接近した宇宙船から離れ、飛び去った。宇宙飛行士たちは、それを円盤型の宇宙機だと言った。それは彼らの宇宙船と平行に飛んでいた。彼らはそれが動くのを見た。彼らはその内部で何物か、または誰かが動いているのを見た。これが起きたのは月面着陸の前だ。おそらく1968年か1967年か、その頃のことだったと思う。そして彼らはこう言った。“彼らは立ち去る” 彼らの会話から私が聞き取ったところでは、彼ら[ボギー]はほとんど瞬時に視界から消えた。この出来事は、私がいた場所[交信を聞く秘密の部署]のゆえに、編集されることはなかった。

それは厳重な機密通信チャンネルだった。実を言うと、私はNASAで仕事をしているときにNASA図書館に行き、そのテープを探したことがあった。しかし見つけ出すことはできなかった。これが起きたとき、私と一緒にいた人間は一人だけだった。彼はこんなことを言った。“君は何も聞かなかった” それで私はこう言った。“何を聞いたというんですか?” 事件についてはそれっきりだった。実際、彼は私がそこにいてこれを聞いたことにとっても動揺していた。この出来事が起きたとき、宇宙飛行士たちは月までの距離の約半分の所にいた...

マクドネル・ダグラス・エアロスペース技術者 ロバート・ウッド博士の証言  
**Testimony of Dr. Robert Wood, McDonnell Douglas Aerospace Engineer**

2000年9月

ロバート・ウッド博士は 43 年間にわたる経歴の全期間を、マクドネル・ダグラス社の上級航空宇宙技術者として働いた。彼は証言の中で、マクドネル・ダグラス社のある特別計画に関わり、UFO の推進システムを研究したと述べる。さらに彼は、航空宇宙業界には他にも幾つかの計画があると確証する。彼の評価によれば、この問題(\*航空宇宙業界にある諸計画)は現実であるのみならず、地球外技術に関係している。ウッド博士はまた、この問題を取り巻く極度の秘密についても確証する。

[3.3 節 “なぜ UFO は秘密にされるのか” を見よ]

スタンフォード研究所上級政策分析官  
アルフレッド・ウェーバー博士の証言  
**Testimony of Dr. Alfred Webre, Senior Policy Analyst**  
2000年8月

アルフレッド・ウェーバー博士はエール大学から理学士号と法律の学位を、またテキサス大学からカウセリング修士号を取得している。彼はスタンフォード研究所社会政策研究センターの上級政策分析官だった。彼は1977年にSRI(スタンフォード研究所)を通じてカーター政権の地球外通信計画に取り組んだ。その目的は、この問題についての知識を集め、政策提言をまとめることだった。この計画にはNASA長官のジェームズ・フレッチャーと国立科学財団が関係していた。計画はすでにホワイトハウスの国内政策部により承認されていたにもかかわらず、それに違反する形で開始早々に打ち切られた。

... 私は1977年にカーター政権の地球外通信計画に取り組んだ...

彼[カーター]が1977年1月にホワイトハウス入りしたとき、私もまたSRI(スタンフォード研究所)社会政策研究センターに入った。私は面接において、このセンターで地球外通信計画をやりたいとはっきり宣言した。その計画に明確な同意が得られたため、私はホワイトハウスで誰がこの問題に関心を持っているかを訊いて回った。私はその人物に接触し、地球外計画の基本的な概要を打ち合わせるために面会の約束を取り付けた。

だから、これは公然と始められた計画であり、透明性のある文民的性格を持つものだった - 秘めいた側面はどこにもなかった。それはスタンフォード研究所の私の研究室で始まった...

その提案のもとで最終報告書が発表されていれば、それはホワイトハウス文書となり、ホワイトハウスの政策提言となっていたはずだ。

NASAは我々が契約により連携しようとした機関の一つだった。当時のNASA職員から直接聞いた話だが、その提案書はジェームズ・フレッチャー長官の執務室にあった。つまり、そのとき彼は我々の提案書を握っていた。また、その研究を科学審議会と顧問会議が厳しく吟味するという形で、国立科学財団もその提案に加わるようになっていた。

管理者側全員と研究所側は、その提案についてSRI社会政策研究センターで心得顔に署名し、契約を締結した。センターの統括者だったトム・トーマスがそれに署名した。ピーター・シュワルツは私と共に上級政策分析官であり、その提案の助言者でもあったが、彼はこのことを完全に承知していた。彼は現在グローバル・ビジネス・ネットワークの会長だ...

この計画は、ホワイトハウスとの最初の接触が行なわれた1977年5月から、同年9月にペンタゴン(国防総省)の介入により打ち切られるまで続いた。

研究の目的は、この問題についての知識の空白を埋め、将来のための政策提言をまとめることだった...

その提案はホワイトハウスの国内政策部内で知られており、承認もされていた。また、ホワイトハウ

ス科学諮問局にも回報されていた。それらは提案書に名前が載っていた機関だ。我々が最初の接触を持ったのは、スチュワート・アイゼンシュタットが率いるホワイトハウス国内政策部を通してだった。

私は 1977 年 5 月から 9 月まで、その提案を単独供給契約の段階まで発展させるために、カーターのホワイトハウスを 20 日ごとに訪れ、ホワイトハウスの担当者と 2 週間か 3 週間ごとに会った。私の会合は、ホワイトハウスの行政府ビルでホワイトハウスの国内政策部担当者で行なわれた...

私はこの最終承認が与えられたホワイトハウスでの会合から飛行機で戻った。私が SRI の研究室に着くと、SRI の上級役員が私を執務室に呼んだ。彼はアフリカ系アメリカ人だった。私は宣誓陳述書の中で彼をジョン・ドゥーという名前で言及した。この準備会合に加わったもう一人はピーター・シュワルツだ。彼は私と同じ研究室を本拠地にしており、計画の助言者だった。その SRI の上級役員は私にこう言った。数分したらもう一人、SRI のペンタゴン(国防総省)担当役員が来る。

その計画は打ち切られることになった。彼らはペンタゴンから直接に、もし計画を先に進めるならペンタゴンと結んでいる SRI の契約はすべて破棄されると連絡を受けていた。これらの契約は、研究、資金、ミサイル研究契約、その他の契約を含むという意味で、当時の SRI 事業の実質的な部分を占めていた。その上級役員は私に、彼の言葉を引用するなら“偽装しろ”と忠告した。私がそれに従うふりをすると - そうしたら私は仕事を続けられる。彼はそうほめかしていた。

その SRI のペンタゴン担当役員が入ってきた。私は宣誓陳述書の中で、彼のことをジョン・ドゥー 2 という名前で言及している。彼は、この計画を止めなければペンタゴンと SRI の契約研究は破棄されることになる」と明言した。次に彼は、我々の計画が打ち切られたとはっきり言った。ホワイトハウスにより承認されたばかりの計画が打ち切られたのだ。彼の言葉を引用するなら、“UFO などどこにもいない”からだった。事ここに至って、私は声を大にして異議を唱えた。私は UFO が実在することを示す基本データを列挙した。しかしそれは無駄だった。その上級役員はペンタゴン担当役員の側に付いた。そして計画は打ち切られた。

私が知る限り、SRI はホワイトハウスにより承認された計画を取り消す習慣を - したがってその実例を - 持たない。それどころか、彼らは研究資金に極端に飢えている。ホワイトハウスがある計画を承認すると、それは系列機関からの資金確保がほぼ確実であることを意味する。彼らはそれを追いかけて突進する...

その計画の完全な取り消しは、それ自体が一つの秘密工作だったように私には思われた...

ここに UFO 問題を公開すると約束して政権についていた米国大統領がいる；そのホワイトハウスで公然と始められた研究、それが潰されたのだ...

我々がこれをしている数日間に、NASA で大変重要な地位にある同僚が名乗り出、進んで情報を寄せてくれた。彼は NASA 長官がこの提案を再検討していたと確証した。これは裏付けとなるものだ...

元 SAIC 従業員 デニス・マッケンジーの証言  
Testimony of Denise McKenzie, former SAIC employee  
2001 年 3 月

デニス・マッケンジーは大手の国防関連契約業者であるサンディエゴの SAIC 社 (Science Applications International Corporation) に雇われた。この会社に勤務しているとき、彼女は次のことに気付いた。SAIC には数百万ドルもの発注があったが、ほとんどの場合、これらの契約のどれに関しても同社が活動したようには思えなかった。一見合法的に見える計画の中にどのようにして、闇の予算が隠されるのか、それを彼女は明らかにする。ある上司の前にこの問題を持ち出してから、性的嫌がらせのあるパターンが始まった。

... 私がそのファイルを開いたところ、そこには定型書簡のみがおそらく 2 種類か 3 種類あった。しかもこれらの契約は数年前の古いものだった。その中にあった幾つかの手紙は数年前に日付が遡っていたが、まったく同じ文面だった：“これは継続中、かくかくしかじか” それには、ときに数百万ドルの契約であることが書かれていた...

そこにあったこれらの契約はすべて更新されるべきものに思えたが、それを裏付けるものは何もなかった。それに関しては何の活動も行なわれていなかったし、何の活動も行なわれてこなかったように思えた。そのことに私はとても奇妙な印象を持った...

私はこう思った。“こんなおかしい会社、今まで見たこともないわ。どうやって商売しているのかしら？ こんなでたらめなやり方で、誰も何もしないで、どうしてこんな何百万ドルもの契約を受注できるのかしら” - そして“ここに実体のあるものは何もないんじゃないかしら”と思った。

そこは、まるで四方を壁に囲まれたような不可解な場所だった。私たちはこうして大変豪華で経費のかかる建物にいる。私には何もすることがない。私は鉛筆を削ることさえしない。これは正気じゃない。私が何かを始めようとすると、これらのファイルには何もない。彼らは何もしないで多額のお金を手にしている。そのお金はどこに流れているのか。それは隠れみの、何かの隠れみののようだった。つまり、ここは資金を隠したり、通過させたりする場所で...

SAIC はあらゆることに名を借りて、自分たちがやりたい研究を何でも行なう完全な体制を持っている - 彼らはそれを何かそれらしい名前と呼ぶ。彼らは決して単独では物事を行なわない。彼らは、言うところの複合企業体だ。SAIC という組織がある。でもそれは多数からなる個別の企業集団だ...

それは個人所有の企業であるため、彼らが報告すべき相手は彼らと一緒に事業を行ない、契約している人たちだけだ。だから、契約している人たちが誰にとっても利益になりそうにない何かをやるうとしても、誰もそれについて知ることはない。何もかもが組織の中で進行する：資金調達、資金供給、契約。ファイルがあるはずだ。どの計画にも、文書とまともなスケジュールがあるはずだ。しかし、そんなものはどこにもなかった。もし私が軍担当部で働き、ファイルのすべてを扱えるなら、この書類はどこにあったのかしら？ だから私は、これらのお金のすべてがどこに流れるのか、不審

に思った...

[この憂慮すべき軍と産業の契約の世界を垣間見た経験は私にもある。これは USAPS (認められざる特殊接近プロジェクト) がいかにして偽装した計画の中に資金を隠すかを明らかにする。実際の資金は議会にも、大統領にも、米国民にも知られないままに、極秘プロジェクトへと流用される。彼女は私が話をした、このような仕組みを知る唯一の証人ではない。1994 年に、当時バード上院議員が委員長をしていた上院歳出委員会の主席弁護士ディック・ダマトが直接私に語ったところでは、400 億ドルから 800 億ドルの資金が、彼らが分け入ることのできないプロジェクトに流れていた - 最高機密取扱許可と上院召喚権限をもってしても分け入ることができないプロジェクト。資金は間違いなく UFO に関係したプロジェクトに流れているが、誰もそれに入り込めない、そう彼は言った。私は彼がこう言ったのを覚えている。“スティーブン・グリア、あなたは闇のプロジェクトすべての代表チームを相手にしている—幸運を祈る”

デニス・マッケンジーが述べている奇妙な雰囲気と性的虐待についても言及しておこう: これはこのような活動に共通しており、稀なことではない。彼女が言っているように、それはある非現実的な感じを伴っている。彼女の採用係/上司が別の名(ファーストネーム)で数年前に死んだことになっているといった話さえも共通のパターンだ。人々は死んだとされて一つのプロジェクトから姿を消す。そして B 博士が彼の証言の中で指摘しているように、別の超機密活動に別の姓名、または少なくとも別の名(ファーストネーム)を持って再び現れる。本質的に SAIC は超機密プロジェクトの世界における優良企業の一つなのだ。そして UFO 技術と隠れた資金調達に結びついている。前 NSA (国家安全保障局) 長官のボビー・インマン提督は深く SAIC に関わっている。これは留意すべきことだ。ここでもまた我々は、ロジン博士が述べた軍と企業プロジェクトの間に存在する転身の実例を見る。私は 1994 年にバリー・ゴールドウォーター上院議員と会ったが、その後で上院議員に、インマン提督を公開に協力させるようお願いした。あのとき彼(インマン)はゴールドウォーター上院議員の要請を断固として拒絶した。彼や他の人々が真実を携えて早く名乗り出ることを願う。SG]

米国陸軍大佐 フィリップ・J・コース・シニアの証言  
Testimony of Colonel Philip J. Corso, Sr., US Army

[このインタビューを我々に提供してくれたジェームズ・フォックスに深甚なる謝意を表す。SG]

フィリップ・コース・シニア大佐は、アイゼンハワー政権で国家安全保障会議のスタッフを務めた陸軍情報将校だ。彼は 21 年間の軍勤務の後、軍事分析官になった。コース大佐は、1947 年のロズウェル墜落による地球外生命体の遺体と 1 機の UFO をある空軍基地で直に見た。彼はまた、UFO がレーダー上を時速 4,000 マイルで飛行するのを見たことがある。彼が研究開発プロジェクトにいたとき、方々で起きた墜落から回収された地球外技術の破片を受け取った。彼の仕事は、これらの技術がどこか地球上のものだと言って、それを産業界に植え付けることだった。

これらの ET は別の知性体だ。彼らは我々よりも進歩していることを証明している - 一つのことを見ただけで分かる - 彼らは宇宙空間を飛び回ることができ、我々にはそれができない。簡単に言えばそういうことだ。我々はいかにしてそれを克服するか？ 我々はそれについて何も知らない。だから知っていることから始める必要がある。そのわずかに知っていることとは、彼らが我々に与えてくれた偉大な贈り物だ - 単なる機械装置ではない地球外物体。

その宇宙機は、ある空軍基地にあった。それがどこなのか、言うつもりはない。だがそれはそこにあり、それは本物だった。私はその内部に入らなかった。内部に何があるのか、私は多くを知っていた。内部に入ってそれを見ても、私が得るものは何もなかった。私は内部の様子を描いた絵を持っていたので、そこに何があるのかは知っていた。実際に内部に入ったとすれば、それは好奇心だっただろうが、当時の私には好奇心を満たす時間などなかった。

その地球外生命体だが、少し変わっていた。それはある意味では、人間もそうであるように、細胞でできていた。またその宇宙機は、実際のところほとんど生物的な構造を持っていた。というのは、その地球外生命体はそれにはめ込まれていたからだ。これらの生命体をつくった者たちは、それらを何のどこにはめ込むかを考えてつくった。その宇宙船それ自体が生物的な構造を持っていた...

さて、この生命体が地球に来るときには衣服を着る - 皮膚に密着する衣服だ。我々はそれを発見した。その皮膚は原子レベルで調節されており、衣服もまた原子レベルで調節されている。これは放射線や有害な作用を防ぐためだ - 宇宙線をさえも防ぐ。その生命体は空気を呼吸しないので、生きてこの地球に来るものはある種のヘルメットを着けることになる。それは言葉を発しないので声帯を持たず、交信ができるように意志の伝達を増幅する何かを持つことになる。

...

私はこれからその話をしよう。私は 1947 年にはロズウェルにいなかった。私はこの年、情報保安責任者をしていたイタリアのローマから戻ったばかりだった。情報分野の仕事では英国人から訓練を受けていたため、MI19(英国軍情報部第 19 課)に所属していた。私は帰国するとすぐにカンザ

ス州フォートライリーに行き、そこで勤務した。私は情報学校の教官で、そこには攻撃部隊があった。ある夜、私は第 1 当直士官に就いた。第 1 当直士官とは、その夜の管理責任者は私だったということだ。それで私はすべての警護地点と保安区域を見回った - 私はすべての持ち場を見回った。

こうして私は獣医区域(\*フォートライリーには 1947 年 3 月まで戦術騎兵隊があった)に行ったが、私がとてもよく知っている軍曹がその夜の警護軍曹だった。私は彼に声をかけた。“やあ軍曹、この辺りは何もなかったかい？”彼 - “はい、異常ありません”私 - “この区域を見回るときは注意しろと皆が言っている。君が何か機密物を警護しているからだと言うんだ”彼 - “少佐はそれを見たいですか？”私 - “ああ”彼 - “見に行きましょう”私はその軍曹(曹長)を知っていた。

私が来た道に戻ると、そこには 5 個の木箱があった。5 個か 6 個、私は 5 個だったと思う。私はその一つの蓋の端を持ち上げた。そこには液体に浮かんでこの遺体があったのだ。私はそれを 10 秒から 15 秒間見た。それ以上は見なかった。私は蓋を元に戻してこう言った。“軍曹、今すぐにここを出るんだ、君をトラブルに巻き込みたくない。私は当直士官だからここを歩き回れる。しかし君はここから戻ったら困ったことになる。私と一緒に来るんだ”我々はそこを飛び出した。私 - “あの箱はどこから来たんだ、軍曹？”彼 - “はい、5 台のトラックがニューメキシコからここまで走り通して来ています。彼らはライト-パターソン空軍基地に向かっています”

さて、当時高速 40 号線はほぼ唯一の大陸横断道路だった。彼らがとった経路は、カンザス州フォートライリーを通り、次にライト-パターソン空軍基地に向かう、高速 40 号線だった。私は彼に言った。“それに近づくなよ、軍曹。君にはどんなトラブルにも巻き込まれてほしくない。私なら歩き回れる”それから私は考え始めた。あれは何だったのか？ 最初、私はそれを子供だと思った。なぜなら、それは小さかったからだ。次にはその頭部を見、さらに全身を見た。これはほんの数秒のうちに起きたことだ。それから蓋を元に戻した。その頭部は変わっていたし、腕は細く、身体は灰色だった。その瞬間に、私はこう判断した - これは私の知らないものだ。こうして私は、情報分野の仕事の中でそのことを心の奥にしまい込み、将来それが何であるかを判断できる裏付けが現れるかどうかを待つことにした。それについて私はすぐに忘れてしまった。

その 10 年後、私はニューメキシコ州ホワイトサンズ陸軍ミサイル実験場の中の指揮所にいた(\*ミサイル大隊長としてレッドキャニオン・レンジ・キャンプで最新型レーダー装置の訓練をしていた)。そこはトリニティサイト(\*最初の核実験が行なわれた場所)の近くだ。私は自らのレーダーにより、この地区を時速 3,000 マイルから 4,000 マイルで動く物体を捉え始めた。私の部隊のレーダーは目標を自動追跡するペンシルビーム型で、隊員たちによれば、これらの物体は時速 3,000 マイルから 4,000 マイルで動いていた。

私は一度だけ司令部に通報したが、彼らはこう言った。“忘れろ - 我々はそんなものに興味はない”だから私は、今後彼らには何も言わないのがよいのだと思った。この現象が起きるたびに、私は隊員たちに言った。“そのテープを私に持ってきてくれ”部隊のすべてのコンピューターにはテープがあった。それには射撃の全経過が記録されたので、我々は何か不具合がなかったかを調べることができた。私は皆に言った。“そのテープを私に直接渡してくれ”

それから私はそこを去り、ドイツに行った。そしてドイツでも我々は同じ現象を捉え始めた - ドイ



ツ上空を時速 3,000 マイルから 4,000 マイルで飛ぶ物体。ここでもまた、ペンシルベニア型レーダーが自動追跡すると、自動追跡されたすべての UFO がそれを逃れようとした。

その後私は 4 年間ホワイトハウスに勤務した。私は報告書を受け取り続けたが、それらはただの報告書だった。私はあらゆる機密取扱許可を持っていたので、暗号報告書をさえも受け取った。あるとき私が受け取った報告書には、NSA(国家安全保障局)が宇宙からの信号を受信していると書かれていた。その信号は宇宙雑音でも、解読された信号でも、判読できない何かでもなかった - 実に完璧な信号で、何者かが本当のメッセージを伝えようとしているように見えた。しかし我々はそれを解読することができなかった。これは大変組織化されたメッセージだった。それは宇宙雑音でもなく、わけの分からない言葉の類でもなく、ただの雑音が入ってきたのでもなかった。

[ジョン・メイナードとA・Hの証言を見よ。SG]

それはあるパターンだった。下された評価は、それが大気圏外の存在者から来ているに違いないというものだった。私はその報告書をホワイトハウスで受け取った。なぜなら、私は NSA を含めてあらゆる機密取扱許可を持っていたからだ。私が(\*1960年にアメリカ欧州陸軍の監察官の任務から)戻ると、トルドー将軍が私を部屋に入れた。彼はある研究開発プロジェクトを組織していた... 私は特別助手として初出勤した。それから約 1 週間後、彼は外来技術部を設け、私をその責任者に据えた。そこで私は ET の検視解剖報告書、さらに他で起きた墜落報告書とその墜落から回収された人工物を受け取り始めた。私はこの場所[ニューメキシコ州ロズウェルの近く]を 2, 3 回訪れた。

...

研究開発プロジェクトに入ったとき、私はこれらの人工物のすべてと、ウォルターリード病院からの検視解剖報告書を引き継いだ。現在ウォルターリード病院には研究室があるが、そこは我々が資金提供をした我々の研究室だった。つまり、彼らは我々のために検視解剖を行なった。しかし我々はそこにコピーを何も残さなかった。そこは我々の研究室だったので、すべてのコピーは我々の手元に戻る必要があったからだ - その資金はすべて我々が出した。こうして、我々は墜落が実際にここで起きた証拠を入手し始めた。

言うまでもなく、私はそれについて 35 年間沈黙していた。私は将軍に誓約しており、人々の名前は明かさなかった。私の息子はこう言った。“お父さんは 35 年間秘密を守り、家族にさえも話さなかった” 私は考えたものだ。“私が他人に話すことなどあるか？” さて将軍は私にこう言った。“これは秘密にしておこう。だが、私が死んだら私との誓約からは解放してやろう”

3 年前に将軍が亡くなったので、私はこのすべてを紙に書き始めた。私の孫が言った。“おじい様は戦争の間何をしていたの？” 私は彼らに遺産を残すのがよいと考えた。軍にいるとき、私は本を書くつもりがなかった。しかし結局、その気持ちが変化して私は徐々に書き始め、こういうことになった。これが私の背景だ。またすでに述べたように、私はここで墜落が確かに起きた証拠を手に入れた。

ウィルバート・スミスは天才だったが、彼に対する政府の態度は実によくなかった。私は彼と一緒に彼の研究室に行くことになっていた。というのは、将軍が彼にこう言ったからだ。“スミス君、君と中佐には話し合うことがたくさんある。私はオンタリオ湖に面した君の研究室まで中佐を行かせるつもりだ”しかし私はその訪問を遅らせ、1962年になって行く決心をした。私は電話をした。すると彼らは、スミス氏が癌で死亡したと告げたのだ。だから私は彼の研究室に行ったことはなかった。彼は我々に、ある空飛ぶ円盤から取った金属片を提供した。

[スミスのメモ、および B 博士を含む他の証言を見よ。SG]

我々は[墜落した UFO からの]金属サンプルを交換した。彼は我々のものを後で返却した。

議会に対して私はこう言う。“それは実際に起きた”そしてこう付け加える。“この情報を世界中の若者たちに与えよ - 彼らはそれを聞きたがっている。彼らは望んでいる。それを彼らに与えよ。隠さず、嘘をつかず、つくり話をするな。彼らは愚かではない。彼らはパニックを起こす若者たちではない” 実は私の甥はデコ(DECO)社[綴り不明]の研究部長をしている。彼が私に電話をしてきて、こう言う。“フィルおじさん、どうして彼らは我々に真実を語らないのだろうか？ 我々はパニックにならないし、髪の毛を掻きむしることもしない”

私がいつも言うことだが、若者たちがそれを望んでおり、パニックにならないことを証明するよい例がある：私はいつもこんなふうにしてそれを証明する - 私は 1,500 人の大隊を指揮した。ある戦闘大隊で、兵士の平均年齢は 19 歳だった。ある日私は幹部クラスに言った。“大変だ、我々は赤ん坊を戦闘に送ろうとしている” これらの青二才たちは世界で最も手強い敵と戦った。彼らは逃げなかった。彼らはパニックにならなかった。彼らはそこに立ちはだかって闘った。彼らがパニックになるとなぜ考えるのか？ 彼らはこの情報を望んでおり、その資格がある。それは彼らの情報だ。それは陸軍や国防総省のものではない - それは彼らのものだ。もしそれが機密なら、その機密を外し、彼らに与えよ。

私はいつもこう言う - 政府は巨大かつ広大だ。だから、放っておくとそれ自身を覆い隠してしまうだろう。私が戦争捕虜・行方不明者特別委員会、議会、上院、また比較的最近では下院で証言したとき、人々は私にこれと同じような質問をした。私は人々に言った。“もしスコウクロフト将軍とキッシンジャーがここに来て皆さんの前に姿を現し、何の情報も持っていないなどと言ったら、とんでもない話だ。私自身が 2 年間にわたり東京から電話会議でそれを送ったのだ(\*コーソ氏は朝鮮戦争当時、北朝鮮の収容所にいる戦争捕虜・行方不明者の情報を収集する責任者だった)。彼らはそれに何と答えるだろうか？” すべての家族がそこに座ってこれを聞きたがっていた。後で我々は調査してそれを知ったのだ。それは無視されてしまった。政治家たちは気にかけなかった。彼らにはそれぞれの小さな自尊心があり、新聞に載るための小さな仕事を持っている。一人の戦争捕虜が家族の元からいなくなっても彼らは気にかけない。こうして、時々誰も何もしないことによるもみ消しが起きる - 私が述べたように、それは自らをもみ消し、姿を隠す。

我々は CIA を信用したことはなかった。その理由だが、私が若い頃、スターリンが彼の一流科学者と工作員の何人かに、ロズウェルから出てきた情報を入手するように命じた。その命令は実行に移された。特殊情報部(私はペンタゴンにいた)の中で KGB(ソビエト連邦国家保安委員会)が

その情報に侵入を試みたが、できなかった。スターリンがこの辺りの隅々にまで工作員を送り、ロズウェルの情報を得ようとしていたとき、我々は間抜けのように尻込みし、それは存在しないと書いていた - 我々はそれを気象観測気球だと言った。しかし彼らはそれを気象観測気球だとは考えなかった。なぜなら、彼らはこの事件が起きていたことを示す何かを持っていたからだ。

[ゴードン・クレイトンの証言を見よ。SG]

ヨーロッパの国々は、これをとても真剣に受け取っている。彼らは我々のようではない。彼らは空から何か模型が降りてきたとか、これらの人々は酔っぱらっていたとか、そうは考えない。彼らはこのことについては我々よりも真剣だ。しかしここ(\*米国)では、人々がどんな反応を示しても私は驚かない。私のような者もいるが、彼らは決してこのようには名乗り出ない。彼らは軍を退役した後、人々の前に出てインタビューを受けたり、本を書いたりはない。

我々は ET の技術について情報を与え、彼ら[企業]が是非特許を取るようになってきた。しかし同時に我々は少し注文もつけた：陸軍が持つその優位な技術を我々に還元してほしい - 特許を取れ、利益を上げろ。だがそれを米国民に還元せよ、それを世界に還元せよ。

日本人が私にインタビューをした。私は彼らにこう言った。“我々が集積回路を製造したときには、皆さんにもそれを提供しよう” 私はこれまで六つの議会委員会で証言してきた。もし私に証言させようと思うなら、彼らが真剣で、それを資料保管庫にしまったり片づけたりしないことが条件だ... 私は上院議員や下院議員の当選を手助けするためにそこに行くつもりはない。

よく聞いてほしい。多くの愚かしさが付いて回っている - それに立ち向かおうではないか。私の些細な愚かしさは、長い間沈黙していたことだ。しかし私は将軍が 3 年前に亡くなるまで語ることはしないと誓約していた。他にも関わった人々はいたが、前にも言ったように、私は彼らが進んで名乗り出るまではそれを明かさない。しかし、我々はもっと多くのことをすべきだった。

[ET の]頭部は実際にはそんなに大きくなかった。しかしその小さな身体に比べたら大きく見えた。その後、私はその検視解剖報告書を 1961 年にウォルターリード病院から入手した。外来技術部の責任者をしていたときだ。私はそこからすべてをつなぎ合わせる作業を開始した。身体内部の性質は、その検視解剖報告書に書かれていた。彼らは検視解剖を行ない、脳とすべての部分を切開した。脳は変わっていた。身体の大部分も変わっていた - 鼻はなし、口もなし、耳もなし。声帯も消化器官も、生殖器官もなかった。だから我々が到達した結論は、それは人間の形をしたクローン(複製生物)だというものだった。すでに述べたように、私とその遺体を見たとき、考えを先に進めることができなかった。時が経ち、私は専門家たちが行なったその検視解剖報告書を入手した。我々が用意した専門家たちだ。

しかし、我々はそれを我々のうちに留めた - 限られた人々だけがそれを知った。頭から頭へ、頭脳から頭脳へ、文書に残さずに。我々は何かを成し遂げることができた。そして[第二次大戦後にペーパークリップ作戦で連れてこられた]ドイツ人科学者たちと議論した。

トルドー将軍がある日私に言った。“誰かが始めたトランジスターを完璧に発展させ、集積回路を

完成させるのに 5 年かかった。もし我々がヘルマン・オーベルトやウィルバート・スミスや進化した人々の援助がなければ、それには 250 年かかっていたらう” 私の本の中にある私の好きなメッセージは、若い世代がこれを見て我々がやったことを理解し、我々が大気圏外からの援助を受けたこと、これらの生命体が実在することを理解することだ。それが君たちがこれから見てその中で暮らすことになる未来だ、そう若い人々に知らせようではないか。

それが本に込められたメッセージであり、私が望んでいることだ：若い人々にそれを与えよ... 我々は老いている、我々は間もなくこの世を去る、これらの若者たちに知らせよ... 彼らにはこの援助が必要だ。彼らこそがこれを引き継いでいく者たちだ。

## ニューメキシコ UFO 墜落日撃者 グレン・デニス氏の証言

### Testimony of Mr. Glen Dennis

2000 年 9 月

デニス氏はニューメキシコ州ロズウェルの葬儀社に勤めていた。あの有名なロズウェル墜落があった 1947 年 7 月、ロズウェル陸軍飛行場の遺体処置係から電話があった。密閉型の幼児用棺はないかということだったが、その理由は説明しなかった。その日、彼が救急搬送の仕事でその飛行場に着くと、そこには正体不明の残骸があった。知り合いの看護婦が、今基地で異星人の遺体を扱ってきたと彼に語った。

GD: グレン・デニス氏

RS: ラルフ・シュタイナー

**GD:** 我々の葬儀社は、ロズウェル陸軍飛行場にあるすべての部署と契約していた。この人物が電話をしてきて、自分は基地の遺体処置係だが、少し情報が欲しいと言った。私は、どういことでしょうか？ と訊いた。彼は、密閉型の幼児用棺が私の所に幾つあるか、3フィート半か 4フィートの棺の在庫はあるか？ と言った。私は、在庫はないと言った。それを準備するのにどれくらいの時間がかかるか？ 私は、午後の 3 時半までに電話をすれば、朝には用意できますと言った。私は、何があったのですか？ と訊いたが、それは重要なことじゃないと彼は言った。

彼は後でまた電話をよこし、もっと情報が欲しいと言った。彼は、組織や胃の内容物を変えてしまう死体防腐用薬剤は何か、数日間風雨に曝されていた遺体を保存するために、我々ならどうするかを知りたがっていた。それで私はこう言った。あなたは遺体処置係でしょう、それを私に訊くんですか？ 私はこの電話の相手が誰かを知ろうとしていた。

その日、私には救急搬送の仕事が生じた(\*オートバイで怪我をしたパイロットを基地の病院まで運ぶ仕事が生じた。霊柩車は赤いライトを付けて救急車も兼ねる)。私が基地に着くと、そこには 3 台の陸軍航空隊救急車が、後部を上にして傾斜路に停まっていた。我々はその傾斜路を歩いて登ったが、そこで私は(\*後部ドアが開いていた救急車の中に)大量の残骸を見た。私は手続きをしながら入り、墜落があったようですね、こちらで準備する必要がありますか？ と訊いた。すると彼は、一体お前は誰だ、ここで何をしている？ と言ったのだ。私は、ええ、救急搬送で来ました、こちらのすべての部署と契約しています、墜落があったようですねと言った。彼はただこう言った。ここにいろ、動くな。それで私はそこから動かなかった。間もなく彼は二人の軍警察を連れて戻ってきて、こう言った。この男を基地から出せ、ここにははならないヤツだ。

何が起きたのかは知らなかったが、ここに勤務するすべての医者と看護婦に、出勤しないように命令が出されていた。ライト・パターソンから専門家たちがここに入り込んでいる、それが理由なのだと私は理解した。

こうして、明らかに私は関わるはずのない物事に巻き込まれた。

私はこの看護婦を知っていた。彼女は出勤するなという命令を受けていなかった。彼女はライト・パターソンから来ていた二人の病理学者に会った。彼らはそのロズウェル墜落と呼ばれる UFO 墜

落から回収されたものを調べていた。彼らは彼女に、少尉、もう少し手伝ってほしい、これを君にやってもらつつもりだと言った。彼らには彼女が必要だった。こうして彼らは[その ET から切り離れた]1 本の手を裏返し、彼女はそれを 4 本の細い指、長さはこれこれなどと言った。彼女はその中に長く 20 分か 30 分以上はいなかったが、彼らの全員が目には焼けるような痛みを覚え、皮膚も熱くなった。彼らには、自分たちが何に曝されたのか思い当たることがなかった。その二人の病理学者は、解剖学書にこれと似た物は見当たらないと言った。どこの医学部にもそれと似た物はなかった。彼らはこのような物を見たことがなかった。そのすぐ後で、ET の遺体は袋に入れられた。

**RS:** その看護婦はそれらがどんな様子だったか、あなたに説明しましたか？

**GD:** 軍警察が私を廊下の先まで連れてきたとき、彼女がタオルを顔に巻きながら物品室から出てきて、こう叫んだ。グレン、ここからすぐに出て。翌朝私は、会議室の中の将校クラブで彼女に会った。彼女が私に 1 枚の小さな絵図をくれたのはそのときだ。それには、そこで何が行なわれていたのか、それらがどんな様子だったのかが描かれていた。それは、現在我々が目にする小さな絵図の大部分に似ていた。つまり、4 本の細い指と長い腕、大きな目だ。頭部はほぼ完全に損壊していたが、そこに二つの穴だけがあるのを彼らは見る事ができた。それには耳たぶがなかった；二つの外耳道があった。口は約 1 インチしかなかった。それが、彼女が私に説明した内容だった。

私はその日の 11 時半まで彼女と一緒にいた。同じ日の午後 3 時半に、彼女の上司が私に電話をしてきて、君の友人は転属になったと言った。私は彼女の隊員番号など何もかも知っていたが、現在に至るまで彼女を見つけられないでいる。彼女と連絡をとったこともない。彼女は修道院に入る考えを持っていた。だから私は、彼らが彼女を除隊させ、自由にさせたのではないかと考えている。そこは誰かを黙らせるにはよい場所だ。

*[地球外事象を目撃した証人が突然別の部署に移され、他の証人たちから隔離されるという、繰り返しのパターンがここにある。SG]*

軍警察の一人が私を脇に連れていき、はっきりとこう言った。いいかお前さん、ここを出ていって噂を広めるんじゃないぞ。ここでは何も起きなかった。もし何かしたら、分かっているだろうが、深刻なことになるぞ。そのとき私はやや憤慨していたので、こう言った。私は民間人だ(\*手出しはできないはずだ)、地獄に落ちろ。すると彼はこう言い放ったのだ。地獄に落ちるのはお前だ。もし話したら、誰かが砂の中からお前さんの骨を拾うことになるぞ。

私が見たその回収物は、アルミニウムにもステンレスにも似ていなかった。それに似ている物は、もちろん当時の我々にはなかった。それは実に明るい灰色で、ほとんど白色だった。その中の幾つかは実に黒かった。それはむしろ現在の繊維ガラスに似ており、へこんだりはしなかった。また、それは振られたり切り刻まれたり、その種のあらゆる外力を受けたように見えたが、本当に鋭角的なへこみというものがなかった。私は実際に見て知っているが、それはきわめて薄かった。

そこにいた軍曹の一人がこう言った。さあ、ヤツを片づけよう。誰もヤツのことなんか信じない。誰もここで起きたことなんか信じない。

[実にこの問題に関する真実は、ほとんどの人々の現実の遙か外にあり、そのこと自体が最良の覆いになっている。真実は白日のもとに曝されても、それ自身を覆い隠す...SG]

米国陸軍中尉 ウォルター・ハウトの証言  
Testimony of Lieutenant Walter Haut, US Army

2000 年 9 月

ハウト中尉がニューメキシコ州ロズウェルにあるロズウェル陸軍航空基地の広報担当官だったとき、近くのコロナで 1 機の地球外輸送機が墜落した。彼は、そこで 1 機の空飛ぶ円盤が墜落したという最初の発表をした当人だった。その発表は翌日に撤回された。

... 我々は 1 機の空飛ぶ円盤を手に入れた。それはロズウェルの北にある農場で発見され、レイミー将軍の事務所に空輸された - そこは第 2 位の司令部、第 8 航空軍だ。以上。私が得た情報は、ブランチャード大佐からほとんど一語一語そのままの言葉で与えられたものだ。彼は目の前に置いたメモ帳をすらすらと読み上げ、私はそれを書き取った。それを終えたとき、私はいわば畏怖の念に打たれていた...

彼らが[墜落した地球外輸送機(ETV)から]大小あらゆる残骸を 1 機の航空機に積み込み、持ち去ったことを私は知った。しかし、[報道発表が行なわれた後]私にはひっきりなしに電話がかかってきた...

[隠蔽は]とてもよく組織化されていた。事件に対するその対処の仕方は、いろいろな経路を通過してワシントンから降りてきたのだと思う。我々は、発表はすべて間違いであり、それは気象観測気球だったと告げられた...

そこには実に多くの隠蔽があったと思う。物体は大気圏外から来た何かだというのが、私の偽らざる気持ちだ。軍は次のように決めつけた。何かが大気圏外からやってきて、我らの地球に衝突したことを、国民は快く受け入れないだろう。人々にそれを受け入れさせるのは少々難しい...



米国空軍軍曹 レオナード・プレツコの証言  
Testimony of Buck Sergeant Leonard Pretko, US Air Force  
2000年11月

プレツコ軍曹は通信の訓練を受け、ハワイのヒッカムフィールドに勤務した。1950年代初め、250人以上がいた野外映画館で9個の銀色円盤が皆に目撃された。それらは真珠湾入り口の上空を不規則に動き回っていた。その現象は約10分間続いた。別のときに、彼はこんな話をした。彼はダグラス・マッカーサー將軍の警護隊員と親しくなったが、その警護隊員は、マッカーサーがロズウェル墜落から回収された宇宙機と地球外生命体の遺体を見たことがあったと語った。

... 皆が右方を向き、真珠湾入り口の上空に目を向けた。そこには9個の銀色円盤があった。我々が最初に見たとき、それは文字‘L’のように見えた。しかし瞬間に、それらはあちらこちらと動き回り、あらゆる種類のマニューバを見せた。それは約10分間続いた。誰もがただ眺めていた。そこにいたある中佐が立ち上がり、“皆さん、心配しないでいい。あれは全部ただのスポットライトだ”と言った。

私は席から飛び上がり、間抜けのように“中佐、スポットライトだなんてどういうつもりですか？ どこにも雲なんかありません。光線などどこからも来ていません”と言った。彼は私に口をつぐめと言った。そのときその大佐が立ち上がった。名前はミラーだった。彼はこう言った。“中佐、君こそ口をつぐめ。ここにいる人々を馬鹿にするのは止めたまえ。ここにいるのはすべて軍人だ” それらの物体はそこで約10分間動き回り、飛び去った。

これらの物体だが、実に速かった。こうした物体を追跡した記事をホノルル新聞で読む機会がたびたびあったが、一度などはハワイから日本まで8分で移動した...

彼はこう言った。“私がダグラス・マッカーサー將軍の警護隊員だということは知っているだろう。私はこれから米国に戻る。ダグラス・マッカーサー將軍は、ロズウェル事件のことをとても詳しく知っていた。墜落した残骸物とその遺体についてもだ。なぜなら、彼自身がそれらを見ていたからだ。彼が私にそう語ったのだ。その日から5年間、私は一言も話さないできた”

軍隊では人を馬鹿にすることがよくあり、私はこれらのUFO事件で何度か馬鹿にされた。私が言われたのは、もしこのくだらないことをまた言いだすなら、決して曹長にはなれないということだった。私の上司はこう言った。“もし君がこの馬鹿げたことにいつまでも拘るなら、君は曹長に昇進できない。君は技能軍曹にはなるだろうが、曹長にはなれない。君は軍隊から追い出されるだろう”

米国海軍 ダン・ウィリス氏の証言  
Testimony of Mr. Dan Willis, US Navy

2001 年 3 月

ダン・ウィリス氏は最高機密取扱許可クリプトのレベル 14 を持ち、1968 年から 1971 年まで海軍に勤務した。その後はサンディエゴの海軍電子通信工学センターで 13 年間働いた。彼はアラスカ近海の商船から送信された、実に異常な信号を受信したときのことを語る。その内容は、赤味がかったオレンジ色に輝く、直径約 70 フィートの楕円型物体が海から現れ、急上昇で上空に飛び去ったというものだった。それが時速 7,000 マイルで移動する様子をレーダーが捉えていた。何年も経ってから、ウィリス氏はこの話を NORAD (北米防空軍) で働いたことのある知人に語った。するとその知人はこんな話をした。NORAD のレーダーが、測定範囲を超えるほどの速さで移動する物体を追跡したことがたびたびあった。そんなあるとき、年配の上司がいつものことのようにこう言った。“我々の小さな友人の一人が来ていたのさ”

... そのメッセージの内容は、次のようなものだった。私はその船の名前、緯度経度などは何も覚えていないが、メッセージの内容だけはとても鮮明に覚えている。それは海から現れた。船のすぐ近く、左舷船首、赤味がかったオレンジ色に輝く 1 個の楕円型物体、直径約 70 フィート、水面から飛び出し、急上昇で上空に飛び去った。船のレーダーがそれを追跡した。その速度は時速 7,000 マイルを超えていた。この内容のすべてが、今日まで私の心から離れなかった...

そこでは、NORAD で働いたことのある何人かの職員と一緒にいた。我々はそのとき、UFO を話題にしていた。彼はこんなことを言った。“私が NORAD で働き始めの頃、全土のレーダー監視スクリーンがあった。突然何かはそのスクリーンを横切った。そして測定範囲 - この物体の速度表示値が指示範囲を超えた” そのとき年配の上司が、いつものことのようにこう言ったという。“なーに、我々の小さな友人の一人が来ていたのさ”

**ロベルト・ピノッティ博士の証言**  
**Testimony of Dr. Roberto Pinotti**  
2000年9月

ピノッティ氏は証言の中で、イタリア空軍のファイルにある 215 例の不可解な UFO 事件について語る。彼は 1930 年代に遡るイタリアの公式文書、具体的には当時のファシスト政府が UFO 目撃に対処し、記録に残した 1936 年の文書を入手した。ムッソリーニは、これらの説明できない航空機に深い懸念を抱いていた。なぜなら、それらはイタリア空軍に影響を与える可能性があったからだ。その文書には、空飛ぶ円盤型の小さな UFO を吐き出す長い航空機のことを述べられている。目撃の一つはベニス上空で起きた。空軍はこれらの航空機を迎撃しようとしたが、それらがあまりにも速過ぎたために成功しなかった。最近、イタリア空軍情報局長のオリベロ将軍が、この問題についてこう言及した。UFO 問題は現実のことで、空軍は 1978 年以來これに対処している。ナポリの近くのカンパーニャには、二つの着陸痕さえあった。その地面は、周波数の高い強力なマイクロ波で照射されていた。空軍のサルバトーレ・マルチェレッティ将軍により記録された、別の重要な事件が 1976 年にあった。彼はリエーティで飛行中、緑色をした 1 個の巨大物体と遭遇した。それは彼の飛行機の上方に現れた。程なく、その UFO は途方もない速度で飛び去った。

... 目撃の性質という観点から、我々が紛れもない現実の物体に直面していること、これらの物体がレーダーで探知されることを示している。イタリア軍のパイロットは、米国などとまったく同様に、イタリアの空で遭遇していた。イタリア空軍が 215 例の不可解な事例ファイルを持っていると言うとき、これは未知の性質を持つ UFO の目撃を意味している。たとえば、イタリア上空で軍用機がこれらの物体を迎撃しようとした事例が幾つかある。しかし、これらの物体は迎撃の可能性すら与えずに飛び去る...

最近、あるイタリア空軍将校が、制服を着て公式に UFO 問題に言及した。その話し手はオリベロ将軍だった。彼はイタリア空軍の情報局長で、UFO 事例を追跡する責任者だ。彼は、UFO 問題は現実のことで、空軍は 1978 年以來この困難な問題に対処していると語った。また、軍のファイルには少なくとも 215 の UFO 事例があり、不可解な事例が現実にあるとも語った。将軍は報道機関から公式に個人見解を求められ、こう答えた。自分はパイロットであり、UFO と遭遇したと語る真面目な同僚、真面目なパイロットを知っている。彼らは信頼できる人々だ。

1990 年代にイタリアで二つの着陸事例があった。いずれもカンパーニャで起きた - カンパーニャはナポリの近くだ。これらの別々の物体が残した着陸痕は、我々の専門家により研究室で分析された。我々は特異な結果を得た。その物体は、着陸後に周波数の高い強力なマイクロ波で地面を照射していた。我々はその効果を検証し、明確にすることができた。次に我々は、これらの結果を世界的に有名なフランスのトランザンプロバンス事例と比較した。トランザンプロバンス事例は 1981 年に起きた、この観点からの典型的な事例だ。この比較はとても重要だった。なぜなら、我々がツールーズに行ったときに見た事例データが、その効果という点で我々の場合にとってもよく似ていたからだ。

これはとてもとても重要だった。我々は、フランスで UFO 問題を調査しているフランス政府機関と

よい関係を持っている。ベラスコ氏がフランスで UFO 問題を研究する政府組織の責任者だ。

フランス人は、この問題が現実であり、我々は現実の現象、未知の技術的現象に直面していると考えている。フランス人の態度はきわめて開放的で、現実的だ. . .

もう一つの重要な事例は、1976 年に起きたサルバトーレ・マルチェレッティ将軍 - 彼は退役している - の事件だ。彼はリエーティにあるイタリア空軍飛行学校の主任だったときに、飛行中偶然に 1 個の巨大物体と遭遇した。彼が飛行していたとき、突然上方にこの緑色の物体が見えた - 操縦席の上だった。何かものすごい、巨大なものが飛行機に覆い被さっていた。

彼には為す術がなかった。数秒が経過し、数分が経過した - この状況がいつまで続くのか、彼には分からなかった - すると突然、この塊は途方もない速度で飛び去った。彼はイタリア空軍を去ってから初めてこの事件を語った. . .

論理的な観点から、我々に何か恐れるものがあるとは私には思えない。なぜなら、もし我々が敵対的な相手に直面しているとすれば、とうの昔に間違いなく彼らは我々を征服しているか、信じがたい事態を引き起こしていたはずだからだ - 彼らには実際にそれが可能だった。もしそれが起きていないなら、間違いなくそれは我々に恐れることは何もないということだ。

おそらく世界中の至る所に、この秘密を隠している見えざる組織と繋がる、見えざる鎖の輪がある。彼らはこの問題に研究の観点から取り組んでいる。その目的は、利益を上げ、様々な分野に応用する技術を獲得することだ。UFO 問題は科学の問題であるだけではない、諜報の問題でもあるのだ。

これは UFO を取り巻く現実の重要なもう一つの側面だ。これを理解し始めると、多くのことが理解できるようになるだろう。なぜなら、このすべては権力に関係しているからだ。あらゆる権力、あらゆる国の、あらゆる政府の、あらゆる状況の権力だ。

### 3.8.5 技術／科学

#### 米国空軍 マーク・マキャンドリッシュ氏の証言 Testimony of Mr. Mark McCandlish, US Air Force

2000 年 12 月

マーク・マキャンドリッシュは熟達した航空宇宙イラストレーターで、米国の多くの一流航空宇宙企業のために働いてきた。一緒に学んだ彼の同僚ブラッド・ソレンソンは、ノートン空軍基地の施設内部にいたことがあり、そこで複製された異星人の輸送機 (Alien Reproduction Vehicle) すなわち ARV を目撃した。それは完全に作動し、空中に静止していた。我々は彼の証言から、米国が作動する反重力装置を持っているのみならず、それを何年も何年も前から持っていること、またそれらは一つには地球外輸送機の研究を通して、過去 50 年間にわたり進歩を遂げてきたことを知るだろう。我々は、航空宇宙発明家ブラッド・ソレンソンが見た装置の絵と、これらの複製された異星人の輸送機の一つを描いた図を持っている - 素晴らしく詳細な絵だ。

私は基本的にコンセプチュアル・アーティストとして働いている。私の顧客の大部分は国防関連企業にいる。私は直接軍のために仕事をすることもあるが、ほとんどの場合は民間企業が相手だ。彼らは国防関連契約業者であり、兵器システムや軍用品を製造する。これまで私は主要なあらゆる国防関連契約業者のために働いてきた：ゼネラル・ダイナミクス社、ロッキード社、ノースロップ社、マクドネル・ダグラス社、ボーイング社、ロックウェル・インターナショナル社、ハネウェル社、そしてアライドシグナル社だ。

私がウェストバー空軍基地 (\*マサチューセッツ州) にいた 1967 年のことだ。ある夜床に就く前に、私はこの光体が空を横切って移動するのを見た；次にそれは前触れもなく停止した。物音は何もしなかった。私は犬を家の中に入れ、望遠鏡を持ち出した。そして望遠鏡でこの物体を約 10 分間じっと観察した。実を言うと、それは核兵器が貯蔵されている施設の真上に空中静止していた - ウェストバー空軍基地の緊急格納庫近くの貯蔵施設だ。それはそこを離れ始め、ゆっくりと離れて空中をどこともなく動き回った。そして突然飛び去った。まるで銃から発射されたようだった。それはものの 1, 2 秒で視界から消えた。

さて、私がイントロビジョン社で働いていたときに、すべてが一緒に現れ始めた。ジョン・エッポルトが、ある人物と行なった対談について語った。この人物は、何かの理由で、ある空軍基地の、ある地区の、ある格納庫まで歩いていく羽目になった。彼はその格納庫で 1 機の空飛ぶ円盤を見た。そして拘束され、この種の仕打ちを受けた - しょつ引かれ、目隠しされ、訊問された。それから私はこの人物、マーク・スタンボーが、一種の空中浮揚を可能にしたある実験を行っていたことを知った。それは一部の関係者の間で電気重力浮揚または反重力と呼ばれている。

彼が行っていたのは、どうやら高電圧電源を得ることだったらしい - つまり DC (直流) 電源だ - 彼は直径約 1 フィート、厚さ 4 分の 1 インチの銅板を使った。それぞれの上部と底部の中央部からはリード線が出ていた。次に彼は、基本的にそれらをポリカーボネイトまたはプレキシガラスのような一種のプラスチック樹脂に埋め込んだ。または他の種類の透明な樹脂に埋め、その銅板や

物質が見えるようにした。彼はそこから気泡などをすべて追い出すために、あらゆることをしたようだ。そうすれば、電気がその物質を突き破って通過する経路をなくすことができる。実験は、このような仕組みを施されたキャパシター - サブプレート・キャパシター - にどれだけ電圧をかけられるかを見ることだった； その絶縁物質が突き破られるまでに、どれだけの電圧をかけられるか？

さて、彼は約 100 万ボルトまでの電圧を実現した。そしてその物体が浮揚し始めた。それは今を遡る 1950 年代終わりか 1960 年代初めに、トーマス・タウンゼント・ブラウンという人物により出願された、ある特許に述べられていた原理に従って浮揚した。その原理はブラウンともう一人の人物、ビーフェルド博士により発見された。それでこの効果はビーフェルド-ブラウン効果として知られるようになった。つまり、スタンボーはビーフェルドとブラウンにより行なわれた実験を再現したものらしい。この仕組みについて彼らが発見した現象は、浮揚または移動が正に帯電した板に向かって発生することだった。だから、もしここに 2 枚の板があると、直流電流システムにより一方は負に帯電し、もう一方は正に帯電する。もし正に帯電した板を上に乗けると、それはその向きに動く。もしそれを振り子に付けると、正に帯電した板が向く方向に沿って、常に振れ続ける。

後日、学校で一緒に学んだ友人から私に電話がかかってきた。ブラッド・ソレンソンという名前だった。彼は[私がある雑誌のためにした仕事から]私の名前を見つけ、そのアート・ディレクターに連絡して私の電話番号を聞き出し、電話をしてきたようだった。分かったのは、彼はカリフォルニア州グレンデール/パサデナ地区にあるデザイン会社に入り、結局この会社の顧客の大部分を獲得するようになったということだった。

いつの間にか、彼は様々な顧客のためにコンセプチュアル・デザインと製品開発をするという仕事のやり方を軌道に乗せた。彼の仕事の進め方はこうだった。もし彼が何か今までにない新しいデザインや、特許が取れる何かを考え出したとすると、顧客がその独占権を買うように手配する。その特許が彼の名前で付与されたなら、その顧客にだけ使用を許可することにし、顧客はその特許権使用料を彼に払う。こうして彼はこれらのすべての特許を顧客たちを買わせ、特許権使用料を払わせた。そのため、彼は 30 歳を前にして大富豪だった。

というわけで、学校を出て 8 年後にブラッド・ソレンソンは再び私の所に戻ってきたのだった。我々は話し込み、彼はこうしたすべての興味深い物語を私に語ったのだ。ノートン空軍基地で近く行なわれる航空ショーがあった。そこはカリフォルニア州南部サンバーナーディーノの東端に位置する、当時はまだ運用中の空軍基地だった(\*1995 年に閉鎖)。

私は彼に、一緒にこの航空ショーに行こうと持ちかけた。そこでは SR-71 ブラックバードによる接近通過(実演飛行の一つ)があると聞いていたからだ。彼もそのことはよく知っていたようだった。それで私は、よし、見に行こうじゃないかと言ったのだ。ところが、そうしているうちにポピュラーサイエンス誌がまたやってきて、本当に差し迫った別のイラストの仕事があると言った。そして、私がそれを週末にかけて仕上げられるかどうかを知りたがった。私は言い訳してこの航空ショーを断るしかなかった。

ブラッドはすでに行く準備をしており、彼の顧客の一人を連れていくことにしていた。その顧客は背が高く痩せ型の、眼鏡をかけた白髪の人物で、姓にイタリア語の響きがあることを私は知った。

彼は自分自身の才覚によりすでに大富豪であり、国防長官か国防次官を務めた後、再び民間人として暮らしていた。ブラッドは私をこの紳士に会わせてがっていた。だから、そのとき私がこのことを知っていたなら、おそらく私は雑誌社に待ってくれと言ったはずだ。しかし、そのときの私には、自分が何を見逃すことになるのかということなど、知る由もなかったのだった。

正直なところ、私はその後ずっと後悔した。なぜなら、翌週ブラッドは帰宅してから私に電話をよこし、航空ショーについて話したからだ。彼はそこで何を見たかを話した：空軍の実演飛行チーム、サンダーバードが実演を始めようとしていたとき、ブラッドと一緒にこの紳士がこう言っただけだ。“私についてきなさい” 彼らは群衆がいる場所から離れて飛行場の反対側に行き、ノートン空軍基地にあるこの巨大格納庫まで行った。その建物番号を私は覚えていないが、とにかくその空軍基地にあるとても大きな格納庫だった。

実際、基地ではその格納庫は大格納庫と呼ばれていた。それは四つの巨大なクォンセット(\*かまぼこ型プレハブ)型格納庫がすべて中央で連結されたような外観だった。それぞれの端の周囲には店や仕事場があり、中央部には一種の隔壁があった。

[ジョン・ウィリアムズ中佐の証言を見よ。SG]

この紳士はブラッドをここまで連れてきて、こう言った。“この展示責任者に会いたい” 警備員は中に入り、三つ揃いを着た一人の人物を連れて出てきた。彼はブラッドと一緒にこの紳士にすぐ気が付いた：この紳士とはたぶんフランク・カールツチではなかったかと私は推測する。彼らは中に入った。ドアの内側に入ると、すぐにこの紳士は、この格納庫で行なわれている展示を管理しているこの人物に、ブラッドが自分の側近であると思わせたようだった。この展示は高い機密取扱許可を持つ一部の地元政治家と一部の地元将校のためのものだった。

さて、彼らが奥に向かって歩き始めると、すぐにブラッドは連れ立っている紳士からこう言われた。“この中には、彼らが展示するだろうとは私が予期しなかった多くの物がある - たぶん君が見るべきでない物だ。だから、誰にも話すな、何も質問するな、口を開いてはいけない、ただ笑って頷け、だが何も言うな - ただ展示を楽しむんだ。我々はできるだけ早くここを出るつもりだ”

その案内者、すなわちこの展示責任者は、ブラッドと一緒にこの紳士にとっても熱心に対応した。そして彼らの中へ案内し、すべてを見せた。そこには B-2 ステルス爆撃機の開発競争に負けた試作機があったし、オーロラの愛称で知られるロッキード・パルサーと呼ばれる航空機もあった。

これらの航空機は 121 発の核弾頭 - おそらく 10 メガトンから 15 メガトン - を積み、発進後 30 分で世界中どこにでも到達する性能を持っていた - 戦術核の再突入体だ。

ノートン空軍基地でのブラッドの話に戻ろう：彼らはこれらのすべての航空機を見せられた後で、その格納庫を二つの区域に分割している大きな黒いカーテンの前に来た。これらのカーテンの裏側には別の広大な区域があり、その内部の明かりはすべて消されていた；彼らは中に足を踏み入れ、明かりをつけた。ここには床から浮揚した 3 機の空飛ぶ円盤があった - それらを吊り下げている天井からのケーブルはなく、下に着陸ギヤもない - まさしく床の上に浮揚し、空中静止していた。

そこにはビデオテープを回している小さな展示があった。映っていたのは 3 機のうちの最小機が砂漠、おそらくは乾燥湖の上に置かれている光景だった - エリア 51 に似たどこかだった。映像ではこの円盤が小さな素早い跳躍を 3 回行なった; それから真っ直ぐ上方に加速し、視界から消えた。ほんの 2, 3 秒で完全に見えなくなった - 音を出さず、衝撃音もなく - 無音だった。

彼らは 1 枚の切断図を持っていた。私がこれからあなたにお見せするものとほとんど同じだが、それはこの円盤内部にどんな構成部分があるかを示していた。その図では幾つかのパネルを取り外しているの、中を覗くことができる。そこには酸素タンク、円盤の側面から外に突き出してサンプルや物体を集めることができる 1 本の小さなロボットアームが見える。つまり、明らかにこれは大気中を飛び回るだけでなく、宇宙に飛び出してサンプルを収集する能力を持つ円盤だ。これは音を発しない性質の推進システムを用いている。彼が見た限り、それは可動部分を持たず、排気ガスを出さず、消費する燃料も持っていなかった - ただそこに空中静止していた。

こうして彼は一心に耳を傾け、できる限り多くの情報を集めた。そして帰ってきてから、そのときの様子を私に語ったのだ。彼は 1988 年 11 月 12 日に - その日は土曜日だった - ノートン空軍基地のこの格納庫で、これら 3 機の空飛ぶ円盤を見た。その最小のものは幾分鐘の形に似ていた。それらは形と寸法の比率がすべて同じだった。ただ違うのはその大きさだった。最小機の最も幅のある部分は、鐘の形に広がった平たい底だった。また最上部には 1 個のドームすなわち半球があった。側面は垂直から約 35 度傾斜していた。

彼の説明はとても具体的だった。裾まわりのパネルは取り外されていて、その内部にこれらの大きな酸素タンクの一つが見えた。その酸素タンクは直径が約 16 インチから 18 インチ、長さ約 6 フィートで、車輪のスポークのようにすべて放射状に置かれていた。最上部に見えたこのドームは、実際には円盤の中央にある 1 個の大きな球状の乗組員区画の上半分だった。この円盤の中央を取り巻いて、1 個の大きなプラスチックの一体成型物があり、その中にこの大きな銅コイルが埋まっていた。それは上面の幅が約 18 インチ、厚さは約 8 インチから 9 インチあった。その内部には、おそらく 15 層から 20 層に積み重なった銅コイルがあった。

その円盤の底部はおよそ 11 インチか 12 インチの厚さがあった。中央を取り巻くコイルも底部にあるこの大きな円板も、プラスチックの大きな一体成型物のようだった - 緑がかかった青の透明なプラスチック、あるいはガラスだったかもしれない。コンセプチュアル・アーティストとしての経験から、私はそこに細切りにしたピザパイのような区画が正確に 48 あると断定した。この一体成型物の内部のそれぞれの区画は、おそらく 4 トンから 5 トンの重さがあっただろう。その厚さと直径から割り出した値だ。それは重さにおいては怪物に違いなかった。それには半インチの厚さの銅板が詰まっており、48 区画のどれにも 8 枚の銅板があった。

ここで再び我々は、プレート・キャパシターとビーフェルド-ブラウン効果を利用する場合の方法に戻ってきた - キャパシターに充電すると正側の板に向かって持ち上がるという、この浮揚効果だ。さて、8 枚の積み重なった銅板をその中に入れると、それは交互になる。こうだ: 上昇するときには負の次に正、負、正、負、正 - 4 回繰り返す、結局正の板が常に負の板より上にくる。

乗組員区画の内側には、中央部を貫いて下に向かう 1 本の大きな円柱があった。この円柱の上



半分には背中合わせに四つの射出座席があった。次に、この円柱の中央部には、ある種の大きな回転円板が 1 個あった。

この機体は複製された異星人の輸送機 (ARV) と呼ばれていた；それはフラックス・ライナーという愛称でも呼ばれていた。この反重力推進システム - 空飛ぶ円盤 - は、ノートン空軍基地の格納庫にあった 3 機のうちの 1 機だった。その合成視覚システムには、アパッチ・ヘリコプターの砲撃制御システムと同種の技術が使われていた：もしパイロットが背後を見たいと思ったら、その方角の画面を選べばよい。そうするとカメラが対になって回転する。パイロットはヘルメットの正面に小さなスクリーンを持っており、それがパイロットに交互に切り替わる映像を見せる。パイロットは小さな眼鏡をかけており - 実際に、我々はこれと同じことをするビデオカメラ用完全立体映像システムを今買うことができる - 周りを見たときに外部の完全な立体映像が見える。だが窓はない。では、なぜ窓がないのか？ 我々が話しているこのシステムの電圧が 50 万ボルトから 100 万ボルトになるというのが、おそらくその理由だ。

さて、彼は 3 機の円盤があったと言った。最初のもの - 最小で、部分的に分解され、1988 年 11 月 12 日にこの格納庫で展示されたビデオに映っていた円盤 - これは最も幅の広い底部で直径が約 24 フィートあった。次に大きいのは底部の直径が約 60 フィートあった。

この物体の構造を眺め始めた私は、見ているものが巨大なテスラコイルだと思い当たった。それは一種の屋外変圧器のようなものだ。もしこの大きな直径を持つコイルに電気を通すと、それは場を発生する。

このシステムが行なっていることはそれだ：2 個の大きな 24 ボルト船舶用バッテリーを用いて電気を得る。基本的にはこれを利用して、これらの巻き線の中に何らかの方法で交流電流を流す。その次には 2 次コイルによりその電圧を上げる。2 次コイルは中央部の円柱に取り付けられており、そこでこの超高電圧を得る。これらのキャパシター 48 区画のどれにその電圧をかけるかは自由だ。

では、そんなことをするのは何のためか？ もし通常のテスラコイルを使っているなら、システム全体で 1 個か 2 個のキャパシターしか使わないだろう。だがここで取り上げているのは別の種類のキャパシターだ - ここでは板でできているキャパシターを取り上げている - その板は細くて長い三角形だ。そして車輪のスポークのように、ちょうど酸素タンクがそうであるように、またその大きな直径のコイルから出ている場の力線のように、すべて放射状に配置されている。このシステムを眺めたとき、もしあなたが電気技術者であるか、テスラコイルとその組み立て方について少しでも知っているなら、実に構成部分の向きこそがシステムを機能させるための鍵だと気付くだろう。

異なるキャパシター区画がなぜこんなにも多く必要か？ マーク・スタンボーがアリゾナ大学で実験を行なったように、1 個の大きな円板を用いたらどうなのか - ついでだが、その装置は政府から来た名乗る男たちにより、国家安全保障条例による権利の行使を名目に押収された。彼らはこれらの物をすべて持ち去った。その実験を見た者は全員訊問され、そのことについては口を閉ざし、何も語るなど告げられた。しかし私は、何が起きたかを知っている彼の同室者からそのことを聞いた。[いずれにせよ] その事例では、浮揚は実現したが制御はできない。この物体をあちこち浮遊させる

ことはできるが、物体はそれ自体の場の上に浮かんでいるだけだ。制御は何もできない。

では、どうするか？ 我々はこの円板を異なる 48 区画に分割する。そうすると、こちら側とかあちら側とか、どれだけの電気を与えるかを思いのままに決めることができる。電気量を制御することで、推力とその方向を制御することができる。それを真っ直ぐに上昇させたり、傾けたり、方向転換をさせたり、上下動をさせたり - 思いのままだ。それらの 48 区画に与える電気量を制御することにより、それが可能になる。もし仮に円を持ってきてそれを 48 の等しい部分に分けたとすると、それらは実に小さく細い区画になることが分かるだろう。こうして、我々はここに 48 個の独立したキャパシターと 1 個の大きなテスラコイルを持つことになる。また、車の分配器(ディストリビュータ)のような、ある種の回転スパークギャップが必要になる。それは区画のそれぞれに電気を送り出す。次に、これらのそれぞれにどれだけ電気を与えるかを制御する、何らかの方法がなければならない。

*[このような円盤型の機体は全方向性を持った運動をする - それは機首と尾部を持つジェット機のように一方向への運動だけに限定されない。LW(リンダ・ウィリッツ), マキャンドリッシュとの対話の後で]*

さて、ブラッドはその制御システムを説明したとき、一方の側に 1 個の大きな高電圧分圧器があったと言った - それは加減抵抗器に似た大きな制御装置だった。そのレバーを押すことにより、システムに注入する電気量を次第に増加させることができる。制御システムのもう一方の側には、コウノトリの首に似た一種の金属棒が出ていた。その先端には、金属製に見える一種の球体が付いていた。その球体に付着して一種のボール(鉢)があったが、それはあたかも球体の底に磁石でぶら下がっているように見えた。彼によれば、すべてがその場所を動かさず、まるで大きな船が海に面した港で錨を降ろし、水面に浮かんでいるように、前後左右に傾きながらゆっくりと揺れていた。それは文字どおり、エネルギーの海に浮かんでいた。

ヘンリー・モレー博士は別の種類のエネルギーで実験した - それは何らかのスカラー・エネルギーだったかもしれない - 1920 年代の初期か 1930 年代だったと思う。彼はザ・シー・オブ・エナジー(The Sea of Energy; エネルギーの海)と題する本を書いた。彼はその中でこの種のエネルギーについて述べている。ブラッドは、この物体が動き回っていたとき、そのシステムは完全にはエネルギーで満たされておらず、船体内部の構成部分はまだ幾らか重力の影響下にあったと言った。それが傾き始めたとき、そのボール(鉢)が重力の影響で同じ方向に振れた。つまり、それが傾き始めると、ボールは滑りながら動いてシステムの同じ側のパワーを上げる。そうすると、物体はそれ自体でまた元の正しい姿勢に戻る。完全に無人でありながら、物体はその場所を動くことなく、それ自体で姿勢を修正する。

それはすべてファイバー光学的に連結されていた。さて、なぜそれが意味を持つのか？ なぜシステムをすべてファイバー光学的に連結しようとするのか？ 理由はこうだ。もし重力を制御する方法が見つかれば、その質量を減少させることができる。それができた場合の別の利点は何か？ もしどうにかしてこのスカラー場、このゼロポイント・エネルギーを利用する方法を見つけたとしたらどうだろうか？ 科学者が考えていることが本当なら、ゼロポイント・エネルギーこそが、万物の原子構造において電子をその周囲に保持している実際の力だ。それは電子にエネルギーを与えている - それはこの世界のあらゆる原子核の周りがある様々な電子雲の中で、この小さな電子に回転を

与えている。それは電子を回転させ続け、地球を回る衛星が引力に引っ張られるようにその原子核に向かって潰れていくことから防いでいる。もしその相互作用、電子によるゼロポイント・エネルギーの吸収に干渉する方法があれば、電子は減速する。

宇宙のすべての原子は、まさに小さなジャイロスコープのようなものだ： それ(\*ゼロポイント・エネルギー)はこれらの電子を原子核の周りに回転させる。するとそれはジャイロスコープと同じ効果を現す。我々が慣性および質量と呼ぶ効果だ。陽子、中性子、そのように回転している電子をそれぞれ 1 個ずつ持つ原子核がある - 水素だ： それほど大きな質量も慣性も持たない。別々の電子雲の中で回転する 235 個の電子を持つウラニウム 235 の場合は、大きな質量と慣性を持つ。ある意味で、それはより大きなジャイロスコープのようなものだからだ。いずれにせよ、私は類推としてこの話をしている。だが、もしゼロポイント・エネルギーの吸収に干渉する方法があれば、それらの電子はエネルギーを失い、減速する。その慣性の効果、ジャイロスコープとしての効果が弱まり始め、その結果、質量も減少する。その一方で原子構造には何の変化もない； それは依然としてそこにある - それはウラニウムのままだが、それほど重くはない。

アインシュタインが言ったことの一つは、どんな物体でも光速以上には加速できないということだ。もし光速まで加速するなら、それは宇宙の全エネルギーを使う必要があるだろう。なぜなら、宇宙空間を加速して進行するのに伴い、質量が増加するからだ。この概念を示す古い映画がある。列車が光速に向かってどんどん速度を上げるが、車体もどんどん大きくなり、ついにエンジンがそれを牽引できなくなる。だから、それは決して光速を超えることはできない。

しかし、ゼロポイント・エネルギーを吸収し、それが機体の原子構造と相互作用することを妨害するシステム、装置があったらどうなるだろうか？ そのような装置があれば、それは同時にキャパシターに新たなパワーを供給する - この電気システム現象のすべてがああの中盤の中で進行しており、稼働している。実際には、速ければ速いほど速度を上げることが容易になり、光速に達し、それを超える。

ブラッドによれば、ノートン空軍基地のこの展示会で、ある三つ星将軍がこう言ったという。これらの円盤は光速かそれ以上の速度を出すことができる。言い忘れたが、最大の円盤は直径が約 120 フィートから 130 フィートあった。つまりそれは重いということだ - まさに巨大物体だ。

ユタ州にモレー・B・キングという名前の科学者がいる - 彼はタッピング・ザ・ゼロポイント・エナジー (Tapping the Zero Point Energy; ゼロポイント・エネルギーの取り出し) という本を書いた。彼の主張はこうだ。このエネルギーは我々を取り巻く時空間に埋め込まれている； それは我々が見るあらゆるものの中にある。さて、何も無い空間自体の中に、このフラックス、この電荷が満ち満ちていると推測したのは、ジェームズ・クラーク・マクスウェルだったと思う。彼はこう考えた。もしほんの 1 立方ヤードの中に埋め込まれているエネルギーを全部捕捉できるなら、全世界の海を沸騰させるのに十分なエネルギーを手に入れるだろう。開発されるのを待ってそこに存在しているエネルギーの量が、いかに巨大かということだ。さて、モレー・B・キングが述べたことの一つは、そのエネルギーを捕捉する最良の方法は、その平衡状態に歪みを起こすことだった。それは箱の中に詰められたタバコの煙のようなものだ。もし何らかの方法でそれに衝撃波を送り込むと、力が得られる - その中に波紋が生じる。その反対側でそのエネルギーを収集する方法を持っていれば、それを捕捉して

利用することができる。

この複製された異星人の輸送機 (Alien Reproduction Vehicle), フラックス・ライナー (Flux Liner) は、それを何か電子的な方法で行なう仕組みを持っている。さて、ブラッドはこの中央の円柱が一種の真空室を持っていると述べた。この真空室は、こうしたすべての科学者たちが自ら製作したオーバーユニティ (over-unity) やフリーエネルギー装置の中で述べているものの一つだ。これらの装置のすべてに、ある種の真空管、真空技術が使われている。

中央の円柱にあるこの大きな真空室、これはすべての部分の内側にある - 回転円板の内側、テスラコイルの 2 次コイル内側、乗組員区画の内側 - その真空室の中には水銀蒸気があるとブラッドは主張した。水銀蒸気は電気を通すが、あらゆる種類のイオン化現象をも発生させる。これらの小さな水銀分子は異常な電荷の帯び方をする。だから、不完全真空の中にある水銀蒸気に途方もない量の電流を流すと、何か特別な、異常な現象が発生する。

モレー [キング] が、真空中のエネルギーに対して何らかの衝撃波を与え、その平衡状態に歪みを起こすと述べたが、それがこの現象だと思う。

さて、ここでもう一つ起きていると私が思うことは、このシステムがゼロポイント・エネルギーに分け入り、それを局所空間から抽出し始めると、機体全体の重量が軽くなるということだ - 言うなれば、それは部分的な質量消滅だ。キャパシターのわずかなエネルギーが、機体をどこにでも弾き飛ばしてしまう理由の一つがこれだ。

起きていると思われる現象の一つだが、このようなシステムを手に入れ、それを始動させると、そのシステム内のあらゆるものが質量を失い始める。システムを流れている電子もまた質量を消滅させる。このことは何を意味するか？ そのシステムとその大きなテスラコイルを流れているすべての電子が質量を失うと、それはまた完全な超伝導体になる。これにより、このシステムの効率は際限なく向上し、ここに飛躍的な効率が得られることになる。あたかもこのシステム全体が液体窒素に浸かるか、ある温度では完全な伝導体となる純粋の銀あるいは純粋の金でつくられたようなものだ - それは軽くなり、信じられないほどの速度に加速される。

*[その速度が大きければ大きいほどそれは軽くなり、さらに速度を増す。LW (リンダ・ウィリッツ), マキャンドリッシュとの対話の後で]*

私は、1992 年にエドワーズで行なわれた航空ショーで、ケント・セレンという名前の人物に会った。そして分かったのは、ケント・セレンと私は共通の友人を持っていたということだ：ビル・スコットまたはウィリアム・スコットという男だ。彼はアビエーション・ウィーク・アンド・スペース・テクノロジー (Aviation Week and Space Technology) という、ある業界誌の地元編集者をしていた。

ビル・スコットは、かつて 1970 年代初めにエドワーズ空軍基地でテストパイロットをしており、ケント・セレンはビル・スコットが操縦する飛行機の機付長をしていた。それで私はケント・セレンにこの話をした。そうしたら彼は首を振って頷き、満面の笑みを浮かべた。そして目配せしてこんなことを言ったのだ。“うん、君の言っていることは知っている” 君はどうして私が言っていることを知ってい

るんだい？ と私は訊いた。すると彼はこう言った。“私は 1 機見たのだ” その瞬間に私の記憶は、イントロビジョンのジョン・エッポリトが、ある格納庫にあった何かについて語った話に焦点を結んだ - 誰かが格納庫で何かを見た話だ。

それで私は彼、ケントに、こう訊ねた。それは底が平らだったか、側壁は傾斜していたか、頂部にドームがあったか、小さなカメラらしきものがあったか？ すると彼はこう言った。“そのとおりだ。君はそれを見たのかい？” 私は、ペンを貸してくれと言った。私は小さな紙切れを取り出し、略図を描いた。そして、それはこんな様子だったかい？ と訊いた。彼は“そうだ、これだ - その形はこのようだった”と言った。私はさらに、いつこれを見たのか？ と訊いた。彼は“1973 年だ”と言った。私は、どこでどういうときにそれを見たのか？ と訊いた。それに対して彼はこう答えた。“私は機付長だった。ビル・スコットがテストパイロットだったとき、私は彼の飛行機を担当していた”

彼の話は以下のようなものだった。ある夜、当直長が彼にこう言った。“北基地まで行ってくれ - 航空機用の地上電源車に、漏電か故障か分からないが何かトラブルが起きた。君にそこまで牽引車を持って行ってもらう必要がある。行ってそれを受け取り、持ち帰って修理倉庫に入れてくれ；それで君は帰宅してよろしい。他の仕事は全部片づけた” さて、ケント・セレンは北基地正門まで続く大きな周辺道路を回っていく代わりに、エドワーズの乾燥湖を横切り、その北基地の施設まで真っ直ぐに車を走らせた。彼は乾燥湖を走り抜けて舗装道路に乗り入れ、これらの格納庫が建ち並ぶ区域まで行った - 当時格納庫はすべてクオンセット型だった。彼は扉に隙間が開いていた最初の格納庫の前に車を止めた。問題の故障した地上電源車がそこにあるのではないかと思ったのだ。彼は何を見たか？ 彼は格納庫の中にこの空飛ぶ円盤を見た。それは地面の上に空中静止していた。

彼に会ったときのこの話は、ジョン・エッポリトが語った内容を私に思い出させた。それは 1982 年より前に、ある格納庫で 1 機の UFO を見た人物の話だった。私は、それでどうした？ と訊いた。彼はこう言った。“この物体は底が平らだった。側壁は傾斜しており、小さなプラスチックドームに入った小型カメラがあちこちに付いていた。ドアが一つ側面にあった。私はそこに 15 秒はいなかった。私に向かって走ってくる足音が聞こえたと思ったら、振り向く間もなく、私の喉には自動小銃の銃身が押しつけられていた” しゃがれ声がこう言った。“目を閉じて地面に這いつくばれ。でないとお前の頭を吹き飛ばすぞ”

彼は頭に覆いをかぶせられ、目隠しをされ、しよつ引かれた。彼らは 18 時間をかけて彼を訊問し、その間にこの輸送機について、私の友人ブラッドも知らないいろいろなことを語った。

ブラッドは、そのシステムの構成部分はすべて既製品ばかりだったと語っていた - つまり、誰でも在庫品リストの中から見つけられるものだ。彼らは自前の酸素供給を行っていた。ブラッドによれば、彼らは一度 1 万 5,000 フィートより低い高度で機外に脱出した。個々の座席は、ちょうど軌道車のように一組のレール上を降下し、この中央円柱から離れた。それは一つまた一つと脱出し、パラシュートが開き、機体から離れた。

私はブラッドから得たこのすべての情報を眺めた。そして、機体の側壁に開いた小さな跳ね上げドアから突き出すことのできる 1 本のアームがあることに気付いた。これらの物体で宇宙旅行がで

きることは明らかだった。10年か15年前になるが、私はスカラー効果についてトム・ビールデンと話していた。その中で、彼はふと思いついたかのように、こう言った。“NASAの予算がこれほど大幅に削減されたのはなぜか、君はそのことを疑問に思わなかったかい？ 彼らは遙かに優れ、遙かに高速な、こうしたすべての異種技術を手に入れたのだ。それらは太陽系の外縁部まで何箇月も、ときには何年もかかるロケット推進宇宙船よりも遙かに優れている。結局は科学者のための公共事業にしかならない計画に、何百万ドルもの金を注ぎ込もうと思うかい？ 国家安全保障局、CIA、空軍情報局などが独占的に利用している、この秘密にされた技術があるときに、なぜこの膨大な資金を注ぎ込む必要があるのだ？ それは太陽系のどこへでも数時間で到達する。数箇月や数年ではない。今すぐにでもそこに行けるものを持っているときに、どうしてNASAに金をかけるか？”

人々が月の裏側に有人基地があるのではないかと推測するならば、それは十分にあり得ることだと私は言える。実を言えば、私はそれを確信している。

これらの事柄を知っているもう一人の人物に私は会った。彼はこう言った。“私はパームデール／ランカスター地区(\*カリフォルニア州)のプラント42にあるB-2爆撃機施設で働いている。B-2爆撃機の大きな建造施設からその南西端まで横切る対角線地帯は、ロッキード・スカンクワークスだ - それは巨大な複合施設だ” 私は、そのとおりだ、そこにあるのはよく知っていると言った。彼は続けた。“1992年の夏、私は夜の10時半頃外にいた。というのは、私は深夜勤務で、そのときタバコを吸っていたからだ。そのとき私は、副保安官たちがプラント42を取り巻くすべての通りを封鎖しているのに気付いた。プラント42に秘密の航空機がやってきて着陸するとき、またはそこから発進するとき、彼らはいつでもそうする”

彼はさらに続けた。“私は封鎖されているすべての通りに注意を向けた。この格納庫の前には輪になった車両の編隊があった - しかしそれらは実に奇妙な車両だった。それらは塔を付けた小さなトラクターのようだった。その塔からは大きな1本のアームが伸びており、アームの先端には1個の籠があった。それは架線作業員が高圧電線を張るときに使う車両に似ていた。しかしその籠はすべて高々と上げられていた。この大きな輪のそれぞれの籠からは、大きな黒幕が吊り下がっていた。そしてそれらを全部結びつけている1本のロープがあった”

“私はその車両編隊の上を見上げた。すると約500フィート上空に、この大きくて黒い、レンズ型の空飛ぶ円盤があったのだ。車両編隊のちょうど上だった。この車両編隊の中央に、大きな青緑色の携帯フラッシュライトを持った男が現れた。彼は円盤に向かってそれを掲げ、3回点滅させた。その円盤の下には青緑色の照明が3個あり、彼らも彼に3回点滅を返した”

“それからこの物体は車両編隊の中へ降りた。すべてのアームが輪の中心まで伸び、その幕でこの機体をすっぽりと覆った - そうして、それらのすべてが車輪を転がしながら格納庫に入っていった。扉が閉まり、明かりがついた。そして副保安官たちはいなくなった” それがあった翌週、彼はやたらとタバコを吸いながら、何かを待った。1週間後に彼の我慢が報われた。あの夜に見た光景が、すべて逆向きに進行したのだ。明かりが消え、扉が開き、この車両編隊が出てきた。そのアームはすべて高く立てられていた。しばらくすると、この物体が車両編隊の上空約500フィートに音もなく上昇した。その男がフラッシュライトを持って現れ、3回点滅させた。その物体もまた彼に向けて照明を3回点滅させた。

続けて彼はこう言った。この物体は滑走路の端から端までを使って離陸した。そこは B-2 建造施設に隣接している。それは彼の目の前を通り過ぎ、2 秒もしないうちに闇に消え去った - この輸送機は音も、超音速衝撃波も、衝撃音波も、何も出さずにそれを行なった - まるで大砲から打ち出されたかのようにだった。これは自分の人生を変えたと彼は言った。それは彼の物の見方をすべて変えた。なぜなら、そのとき彼は、彼らが反重力 - 無質量推進技術を持っていることを知ったからだ。彼らの技術は、未知の場所 - どこか他の太陽系 - からやってきた、ある種の宇宙機から回収されたものかもしれない - しかし、彼らがそれを持っていたのは事実だと彼は言った。

我々はジェームズ・キング・ジュニアにより出願された特許を発見した。この特許はこのシステムに実によく似ている。違う点は、乗組員区画用ドームの代わりに、中央に 1 個の円柱を持つことだ。それは同じ形をしている。平たい底、傾斜した側壁。外周にコイルがあり、放射状に配列されたキャパシター・プレートがある。この特許は 1960 年に初めて出願され、1967 年に付与された - ユタ州プロボの近くでこの機体にそっくりな写真が撮られた年だった。

決め手はタウンゼント・ブラウンと共にその特許を出願した人物だ。タウンゼント・ブラウンはニュージャージー州プリンストンの近くのある研究所で働いていた。バーンソン研究所のアグニュー・バーンソンという科学者と一緒だった。彼らは、電気重力推進と彼らが呼ぶすべての実験を行なった。ここに 1 本のビデオがある。アグニュー・バーンソンの娘が撮影した 16 ミリフィルムから変換されたものだ。もともとそれは‘お父さんの実験室’と呼ばれていた。そのビデオには、バーンソンとトーマス・タウンゼント・ブラウンが、彼らの助手ジェームズ・キング[J・フランク・キング]と共に行なったすべての実験が映っている。ジェームズ・キングこそがその特許を出願した人物だ。そのフィルムには、浮揚して火花を放っている幾つかの小さな円板が映っている。こうして、いわば輪が完全につながった。

今や、彼らはその技術を持っているだけでなく、その技術を実際に展開していることが理解されると思う。それは飛行するだけではない。それは今から遡って 1960 年代に出願された特許に酷似している - エリア 51 の近くで一連の写真が撮られた年だ - エリア 51 とユタ州プロボの間で軍のパイロットにより撮影された。それはまったく同じ特徴を示し、まったく同じ形をしている。だから、私の結論はこうだ。人々がこの技術のすべてを細部まで理解するかどうかにかかわらず、この技術は現実に存在し、それを見た人々がいる。私自身がこれらの物体を見ているのだ。だから、彼らがこの技術を闇の中から取り出し、汚染を伴わないエネルギー生産などのためにそれを開放するのは、まったく時間の問題のように思われる。おそらく人々は、その空飛ぶ円盤に似たものを幾つか持ってきてクランク軸の周辺に取り付け、それを使ってエンジンを駆動させる。汚染は発生せず - 燃料も不要だ。

さて、もう一つだけ私に言えることがある。私はファイバー光学制御システムについて述べていたが、それはやはり最初のロズウェル報告書にまで遡る物事の一つだった。そこには光を通す細かなファイバーが巡らされていた。彼らはそれが何なのかを説明することができなかった。では、なぜ宇宙船にはファイバー光学システムが必要なのか？ もし突然に機体の中のあらゆるものが質量を消滅させ、電子さえも質量を消滅させたなら、システムを貫いているすべての制御系はおかしくなるだろう。システムは突然に相変化を通過し、あらゆるものが超伝導になる。だから、スパークギャップの

制御を同一レベルに維持するための何らかの方法が必要になる - キャパシターから供給する電気量の制御 - 制御棒を動かしたときに、たとえ質量消滅または部分質量消滅の状態に移行したとしても、システムの中に依然として同じ量の動きと偏位を起こすことができるようにするためだ。なぜなら、電子もまた質量を消滅させるため、電子回路は超伝導回路になるからだ。

なぜファイバー光学を用いるのか？ 光子は質量を持たないため、影響を受けないからだ。つまり、コンピューターに出入りさせるどのような情報、どのような制御信号もそこに届く。超伝導状態でコンピューターが機能するかという心配は不要だ。なぜなら、それはただ速くなり、効率が向上し、高性能になるだけだからだ。航空機が墜落しないような制御を望むなら、最良の方法は何か？ それはファイバー光学システムだ。



ポール・シス教授の証言  
**Testimony of Professor Paul Czysz**  
2000年11月

ポール・シス博士はセントルイスにあるパークス大学の航空工学教授だ。彼はライト-パターソン空軍基地の空軍で 8 年間、その後マクドネル・ダグラス社の外来技術部門で 30 年間を過ごした。ライト-パターソン空軍基地にいたときには、ミズーリ州、オハイオ州、ミシガン州の上空にかけて起きた UFO 追跡事件に関わった。これらの UFO は多くの人々に目撃された：軍、地元警察、一般市民。それらが並外れた無音のマニューバを見せたとき、その速度は時速約 2 万マイルと計測された。シス博士はその経歴の半分以上を、マクドネル・ダグラス社の機密区画化プロジェクトで過ごした。彼はこれらのプロジェクトの秘密性が保たれる方法について証言する。彼はまた、我々が行なっている宇宙の軍事化が地球のテロリストの脅威に向けられたものではないことを指摘し、どんな新しい技術をも兵器化する人間の性癖に対して警告を発する。そして、これらの兵器を地球外の標的に使用する考えは自殺行為だと警告する。

PC: ポール・シス教授

I: 取材記者

**PC:** 私はパークス大学の卒業生だ。私の経歴はライト-パターソン空軍基地の空軍で始まった。私は空軍に 2 年間、その後さらに研究部門に 6 年間勤務した。それからマクドネル・ダグラス社に入り、そこに 30 年間勤務した。最後は寄付講座教授として再びパークス大学に戻った。

私はマクドネル・ダグラス社にいたとき、高速に関して多くの仕事をした - つまり極超音速だ。我々はマッハ 4 からマッハ 12 で飛ぶ物体に取り組み、マッハ 12 で世界中を飛び回る幾つかの飛行機を持っていた。我々はほとんどそれを建造しかけていた。

私がライト-パターソンで経験したとても興味深い夜の一つは、パターソン・フィールドで主任当直士官の補佐をしたときだった。我々は未確認飛行物体に関する 151 回の電話を受けた。それは高速 40 号線をコロンバスまで移動し、そこで向きを変え、デトロイトへと北上した。電話は州警察と何人かの深夜勤務医を含む、あらゆる種類の人々からだった。彼らはこれを見たと言っていた。我々はそれをレーダーで追跡し、定期航空便からもそれを見たという電話が入った。それはとても興味深いものだった。これらの人々は自分が見たものについて大変明確な説明をした。

さて、私の経歴のおそらく半分以上は機密化または区画化されたプロジェクトの中でのものだ。

**I:** それらがどのようにして進められるのか、説明していただけますか？

**PC:** 一般論だが、その区画化のレベルと秘密性のレベルに応じて、我々の身元調査が行なわれる。これはかなり重要だ。身元調査には 6 箇月から 1 年を要する。それにパスして一員になるとき、もしそれがきわめて機密性の高いものなら、誓約書に署名し、プロジェクトの存在を漏らさないように、また訊かれてもプロジェクトの存在を認めるような発言をしないように求められる。それは知る必要性 (need-to-know) の制約などではない；自分たちが取り組んでいるものが何か、誰がそのプロジェクトに直接関わっているか、これだけを知らされる人々により進められる。だから、それはき

わめて念入りに封じ込められた事柄なのだ。

ある秘密プロジェクトがあると、その資金は様々な政府筋から流れ込んでくる。プロジェクトに従事する者には資金源など分らない。どれほどの高官がそれに関与していたとしても - 彼らでさえその資金の出所を知らないだろう。米国政府と契約を結びさえすれば、資金は必要な場所に必要となときに現れる。

もし情報が地球外からもたらされたものだとすると、設計や分析を行なっている人々がその起源を知ることは決してないだろう。彼らにできることはロシアに出かけていき、彼らがどのようにしてそれを行なったかを調べるくらいだ。彼らはどのプロジェクトも、私がサイロと呼んでいた区画に分割する。彼らは大佐または将軍をプロジェクトの責任者にする。彼らは文字どおりそのサイロの外の誰とも話をする事ができない。もし助けが必要になった場合、然るべき人物がそこに派遣される。彼は机に座り、一片の紙切れを眺め、こう言う。“なるほど、問題が何かは分かった。それに対する答えはこうだ”そして立ち去る。彼は自分が対処した事柄が何だったのかを知ることはない。

パームデール上空に現れるその巨大な三角形は、とてもゆっくり移動する - とても大きく、とても緩慢な動きをする。私が思うに、それはベルギー全土の上空に現れる動きの速いものとは別のものだ。

人々はそれを既成物理学では説明することができない。既成物理学というとき、私は今日我々が知るエンジン、ジェットエンジン、ロケットモーター、推進システムなどを指している。燃料を入れ何かを燃焼させる。するとそれは推力を発生し、物体を加速する。既成物理学では人間が生きている間に我々の小さな太陽系の縁を越え、遙か遠くまで航行する方法を説明することができない。

つまり、既成概念ではとてもそれを説明することができない。それは量子物理学に関連付けられなければならない。そこでは物体がほぼ同時に 2 箇所に現れることが可能であり、一部の高エネルギー粒子衝突器の中で陽子や電子が振る舞うように、現れては消え、また現れる。それは空間に充満しているエネルギーがその装置とある種の相互作用 (coupling) を起こした結果だ。テスラが次のように言ったとき、おそらく彼はそのことに近づいていた。もし適切なエネルギーシステムと適切な電磁波スペクトルがあれば、地球から火星上の有人基地に何の損失も伴わずにエネルギーを供給することができる。量子物理学とゼロポイント・エネルギーの中ではそれが可能になる。

サハロフたちはこれに取り組み、とても説得力のある議論をしていた。それは空間組織は海、エネルギーの海のようなもので、その中に固体エネルギーが漂っている、そして固体エネルギーは質量だというものだった。もしそれが本当なら重力波は存在し、実にすべてがヘビサイド方程式に立ち戻る。そこでは量子は今や質量ではなく時間だ。もしそれが本当なら全宇宙は違った様相を見せ、多くの物事が可能になる。それらは時間、空間、推力、力について我々が現在持っている理解の中では不可能と考えられている事柄だ。

もしこれらの UFO が宇宙の他の場所から来るのだとしたら、それはこのような何かに関係しているに違いない。我々の銀河系でさえ横切るのに約 10 万光年かかる。我々が想像するどんな既成の推力と力の仕組みも、人間の時間枠を考えたら役に立たない。もし他文明からの人々がここに来

ているとしたら、彼らは量子物理学の細部まで理解している。

私がライト・パターソンにいたとき、時速約 2 万マイルに相当する速度でコロバスからデトロイトまで移動する空飛ぶ円盤に遭遇した。当時通常の航空宇宙業界に身を置く誰かが、今でこそ我々が知っている量子物理学やワームホールなどについて少しでも知っていたとは私には思われたい。しかし今 CERN(セルン; ヨーロッパ合同原子核共同機関)に行き、その粒子物理学者たちに話をしたら、彼らは確実にこの幾つかは可能だと言うだろう。なぜなら、彼らは年中それを見ているからだ。彼らが質量を見ていると考える場所で、彼らは実際には時間量子の中で凍結されたエネルギーを見ている。彼らが見ているのは実に凍結されたエネルギー束なのだ。それはほとんど何の制限も受けずにあちらこちらと移動する。

UFO は人々の想像にすぎない現象ではなかった。彼らが見たものは現実だった; それがどうして現実になったのか、何がそれを現実にしたのか、私には説明できない。だが、人々は見えたものを見たのだ。

セントルイスの近くでかなり大きな三角形物体が目撃された。それはサウスセントルイスまで移動した。何人かの目撃者によれば、それは比較的穏やかに移動していたが、次の瞬間、文字どおり 2, 3 秒の間に約 20 マイルを跳躍した。私は地元の新聞社やテレビ局から多くの電話を受けた。どうしてあんなことができるのかという問い合わせだった。私はこう答えた。どうしてそれが可能なのか、私にも分からない。時空旅行を可能にする空間、時間、その関係についての量子物理学を使った説明でもしない限り無理だと。それ以外では説明する方法がない。この物体はまったくの無音だった。それは空中静止の状態から発進し、文字どおりほとんど姿を消し、ここにひょいと現れる - それはマンガのようにヒューと飛ぶのではない。これは何人かの警察官による描写だが、それはほとんど消えたようになり、次にこちらに姿を現す。

難しいのは物理的にそれを行なう方法を見つけることだ。何年もの間、ゼロポイント・エネルギーの実験を行ったり、それを開発しようと試みたりしている人々がいる。時折誰かが偶然それに成功する。彼らはそれを常温核融合と呼ぼうとする。しかし私はそれが常温核融合だとは思わない; 私はそれこそがゼロポイント・エネルギーの取り出し口だと思う。私が知っている三人以外にそれを制御できた者はいない。それが起きるのは短時間であり、しかもほとんどの場合は破壊的だ。それはまるでグランドクーリーダム(\*米国ワシントン州コロンビア川中流域にある重力式の多目的ダム)の底にドリルで穴を開けるようなものだ。そんなことをしたら突然に水が噴出し、その力はあなたを真っ二つに切断するだろう。それに弁を付けられない限り止めることはできない。

私の友人がある人物に会うためにミシガン州アナーバーを訪れた。彼は数学の天才と言ってよい男で、実際にそのエネルギーを制御する方法を見つけた。彼はこのエネルギーに関する知識と、それを思いのままに取り出し制御する能力を持つ自分を誰かが殺しにくると恐れていた。我々は彼を 5 年間見ていないし、彼がどこにいるのかも知らない。

今日我々は石油価格というエネルギー問題を抱えている。もし今このゼロポイント・エネルギーを取り出す方法を発表したなら、何が起きるだろうか? ゼロポイント・エネルギーは 1 立方インチあたり 40 メガワットから 50 メガワットの電力に相当する。これは莫大な電力だ。もしそれを思いどおり

に取り出すことができれば、もはや誰もガソリンや石油を売る必要がなくなる。人々はただそれを利用すればよい。それはあたかも五大湖まで行って水を一滴すくい、利用するようなものだ - 無くなることなど考えられない。それは全宇宙に満ちており、物質-反物質の相互作用として絶えず変動しているため、静かな湖のようではない。それは宇宙の大きさを持つ貯水池だ。だから、我々がそれをどんな目的に使おうともそれは決して無くならない。

この研究者はこう主張したものだ。もしこのエネルギーを汲み上げ、他の場所に持って行ってそれを放出したなら、局所空間の時間領域に裂け目をつくることになる。それは問題を引き起こす。彼はそれをしたと主張し、再びそれをしようとはしない。

また、それは従来のジェットエンジンでは利用することができない。利用するためには実際にゼロポイント・エンジンを新しく開発する必要がある。ミシガン州アナーバーのこの研究者はそれを 1 台所有し、地下室で動かしていた。それは何のエネルギー源にも接続されず、テーブルの真ん中に置かれたまま 1 年間動いていた。

しかし、これらの研究者の誰もが、フットボール競技場大の船をつくり、それをセントルイスの近くに現れた物体が見せたような速度で動かす方法には言及していないようだ。速度とは間違った言葉だ。なぜなら、従来の考えではこれは空間を疾走することを意味するからだ。しかし、それが現実的に CERN の高エネルギー粒子のように振る舞うとしたらどうか？ 粒子はエネルギーに姿を変え、再びここに現れる。どこかに移動した質量はない - なぜなら、すべての質量は固体エネルギーだからだ。従来の知識では、人間のような複雑な有機体はエネルギーと固体の間を行ったり来たりすることはできない。しかし、それは我々が今までそれを見たことがないというにすぎない。

人間は固体エネルギーだ。我々は自分を固体だと考えている。本当にそうか？ 実のところ、身体の中の原子間距離は太陽の周りを回る惑星のそれとほとんど同じ比率を持っている。だから、もし自分自身の個々の原子を眺めることができるなら、我々は 98 パーセント空間だと言える。もし我々が固められた原子核と電子だけからなる中性子星と同じだとすると、それは針の先に乗るだろう。実際に身体を構成する材料だけを考えたら、我々の全存在は針の先に乗る。

ジェームズ・S・マクドネルはマクドネル・ダグラス航空会社を創設した人物だが、彼は超心理学の研究所を持っていた。彼の飛行機がバンシー (\*Banshee アイルランド、スコットランド民話の妖精) やファントムと名付けられた理由がそれだ。彼は精神世界と超常現象に大変興味を持っていたアイルランド人で、研究部の一部に資金を与え、超常現象を研究させた。

[このことを確認するロバート・ウッド博士の証言を見よ。SG]

奇術師の‘偉大なランディ’が彼の組織に入り込み、彼を惑わすために約 6 箇月間にわたり奇術の実験を行なった。そこには本物も実際にあったと思われるが、その後ランディはその信憑性を失わせた - 結局、その研究部長はこれに関係することについては何も語ろうとしなかった。

ゼロポイント・エネルギー装置を持っていたアナーバーのその人物が、実際にマクドネル・ダグラスにやってきた。彼は何人かの同伴者と一緒に入ってきて、持参したこの水素モーターについて話

すつもりだった。私はその会合に呼ばれた。会合もほぼ半ばにきたとき、私ははっきりとこう言った。あなたたち、それはゼロポイント・エネルギー装置だ - あなたたちはどうしてそれを認めないのか？ ランディによって信用を落とされた研究部長は、その発明家たちが議論している間に嫌悪感を募らせた。彼は警備員を呼び、彼らを工場の外に送り出した。なぜなら、彼はまた同じことが起きるのではないかと恐れていたからだ - 彼はそれを疑似科学だと考えた。私は彼にこう言った。それは疑似科学ではない；我々が今知っている事柄の向こうにあるものだ。

*[ある研究分野に侵入し、その信用を失墜させたり、話を拵えたりする人々について、多くの報告がある。こうしてその研究分野は主流から外され、発展して人々に受け入れられる機会を失っている。SG]*

超心理学 - それをどのようにして評価したらよいだろうか？ 私の理解では、それに近づいたのはロシアの超心理学研究所の人々だけだ。その大部分は今存在しない。彼らには一緒に実験を行なう大変興味深い数組の双子がいた：彼らは双子の間、彼らの頭脳の間で起きる何かを測定していた。こうして彼らは、双子のもう一方が考えていることを知ることができた。それはまったく驚くべきものだった - 頭脳の中で電磁波スペクトルが発生していた。

ロシア人たちはスカラー波と呼ばれるもの、また頭脳の中の様々な電磁波スペクトルについて、多くを成し遂げた。起きていることを証明するために必要な測定とは何か、それを発見すれば超心理学は説明できる、彼らはそう確信していた。しかし、彼らはおそらく何かを測定する最先端に到達していたのだ。

それはすべて物理学に基づいている。もしそれがスカラー波なら、我々はまったく別の、大いに物議を醸す物理学の大通りにいる。テスラはその中に深く深く足を踏み入れていた。テスラの問題とは、彼が他界したとき J・エドガー・フーバーがやってきて、ほとんどあらゆるものを持ち去ったことだ。メイドが死んだ彼を発見したとき、そこにいたのは彼一人ではなかった - 彼の部屋には五人の FBI 作員がいて、あらゆるものを盗み取っていた。テスラは死んでベッドに横たわっていた。彼の甥が米国政府を相手取って訴訟を起し、名目上彼の全装置、実験結果、記録を勝ち取った。

*[このインタビューの最後にある政府文書を見よ！ SG]*

名目では記録などを収めた 50 箱があったが、彼らはそのうちの 45 箱だけをベオグラードで手に入れた。他の 5 箱は行方不明だ。非常に多くの物が失われたままだ。

我々は 1917 年か 1918 年に地中海にあった 1 隻の潜水艦についての記録も発見した。テスラはニュージャージー州にいて、これらのアンテナの一つを沖合に、もう一つを海岸に置いた。彼はその潜水艦の艦長と対話をしていて - ある人物が海軍の記録からその潜水艦の航海日誌を掘り起こした。それには基本的にこう書いてある：自分はニュージャージーにいてと言っている大馬鹿者が私に話しかけている；この男は頭がおかしいに違いない。なぜなら、私は 100 フィートの深さにいることを知っており、誰もニュージャージーから私に話しかけることなどできないからだ - 彼はこれに符合する言葉をテスラの日誌にも見つけた。では、それは何だったのか？ 人々はそれはあり得ないと言う - それは一つの偶然だった、それは偶然の一致だった、等々。しかし、人々が実際

に成し遂げたことで我々が説明できない物事は多い。

私がマクドネル社の若い技術者だった 1960 年代に戻ろう。我々の日常業務は、空軍と海軍のためにマッハ 4 とマッハ 6 で飛ぶ飛行機を設計することだった。ベトナム戦争がその大きな妨げになったが、我々は容易にマッハ 6 を出すことのできるエンジンを作動させていた。我々はマッハ 12 の飛行機を飛ばすエンジンを試験した。事実、1966 年にビル・エシオルという名前の同僚が - 彼はまだ存命で、ハンツビルの SAIC (サイク) で働いている - 彼はあるエンジンを試験台上に載せ、約 20 分間作動させた。それは約 12 万フィートの高度でマッハ 8 という予測性能の 5 パーセント以内だったが、そのとき我々は、これは建造可能だと確信した。私は 2, 3 週間前に X-33 (\*宇宙往還実験機) を見る機会があった。これほど私の関心を引くものはなかった。彼らはこの飛躍的進歩を成し遂げた - 熱を反射し、飛行機の内部を室温に保つことを可能にした新しい遮熱技術。我々は 1965 年にほとんど同じ構造を組み立て、マッハ 12 の条件で試験した。その実験機は我々のものより少し洗練されているが、今日ではより洗練された材料があるのだから当然だ。しかし我々は当時それが可能だと確信していた。人々は笑い、いや、君たちにそれはできないと言った。そうでなければ、いや、それは不可能だ、危険だから我々はやるつもりはないと言った。しかし、そうではない。それは危険ではなかった。それは可能だった。夢を追いかける者が物事を実現する。

もしライト兄弟の一人が弁護士で、一人が会計士だったなら、どういうことになっただろうか？ 彼らはこう言ったかもしれない。“どうしてこんな馬鹿げた飛行機をつくる必要があるんだい？ 一人しか運べないじゃないか。誰がそれを買うんだい；どれほどの利益が出るんだい？ 自転車は 40 パーセントの利益を上げている；何のためにこんなことをするんだ？ 借金のことを考えてみろ - みんなから訴えられるぞ。よくない考えだ；やめにしよう” 我々がそういう発想をする限り、何もできない。言うべきことはこうだ：“おお、これはまだ誰もやったことがないようだ；やってみよう”

私が若い中尉として初めて UFO に出会って以来、今日までの期間を振り返るなら、米国ではこれまで誰も気付いていない多くの秘密プロジェクトが進行していると思う。もし人々がこれらの物体の幾つかを見たなら、それはおそらく彼らの目を釘付けにするだろう。それらの物体は人々が持つ飛行機という概念には適合しない - だから、人々にとりそれは UFO に見える。つまり、UFO と思われる物体の多くは我々か他の誰かが行なっている秘密プロジェクトの産物なのだ。それは地球の技術だ。もし人々がそれらの背後にあるものを本当に知ったなら、こう言うだろう。なるほど、それがどのように作動しているのか理解できる。

*[人間がつくった反重力輸送機と、それが地球外輸送機と容易に見間違われることについて述べているマーク・マキャンドリッシュの証言を見よ。私が話した多くの部内者が明らかにしたように、我々は地球外輸送機と共に、地球製の異種輸送機を持っている - それらはすべて UFO と呼ばれている。SG]*

それはブルーブック計画に似た状況だと思う：どうしても説明できないこの 10 パーセントから 15 パーセント、もしくは 20 パーセント。我々のよく知らない方法で UFO に乗った生命体が地球を訪れている。この事実以外にはどのような説明も当てはまらない - しかもそれは時空旅行だ。UFO の一部はそのようなものだと私は確信している。

我々が考えるほとんどあらゆるものは転用され、武器として使われる可能性がある。もし我々がこの種のエネルギー、そしてエネルギー-時間移行に足を踏み入れると、それらは地球上の全人口を消滅させるのに使われる可能性がある - また、それを使って我々を化石燃料への全面依存から解放することもできる。

*[長期的持続可能性に必要な適切な技術を用い、人類が存続し続けるためには、平和こそが最も優先される条件であることに疑問の余地はない。明らかに我々は、これらの技術を戦争に用いる選択肢が我々の文明の終焉を意味する進化の段階にある。SG]*

何よりも弾道ミサイル防衛システムは、その脅威がどこから来るのか知っていることを前提にしているという点で、おそらく非現実的だ。ロシアが敵だったとき、それがどこから来るのかは五分五分の確率で予想することができた。今日我々が無法国家を相手にしているとき、それはまったく馬鹿げている。脅威はブリーフケースを持って歩いて来る人間だ - 1950年代に直径 8 インチの核弾頭がつくられたことを思い出してほしい。それは 4 分の 1 キロトンの兵器だった。それは考えられるどんなブリーフケースにも収納可能だろう。それを運んでいる人間は死ぬ。だが、どうせ彼は死ぬつもりだ。だからどこに違いがあるか？ 私はその方を遙かに恐れる。もし地球外知性体が時空を旅することができるなら、我々が軌道に兵器として何かを置く行為はジンギスカーンに爆竹で刃向かうのと変わりがない。それは無意味だ。

*[ここで彼は宇宙の軍事化についてとても重要な点を明らかにしている：地球のテロリストによる本当の脅威に対しては、このような兵器システムは対処できない。それを地球外の標的に対して用いる発想は、気でも狂っていない限り自殺と隣り合わせだ。ここで述べていることは次の考えをも支持する。つまり、もし地球外知性体が敵意を持っているなら(したがって宇宙兵器が必要になる)、我々が最初の核兵器を爆発させた頃に地球の文明はわけもなく終焉させられていたかもしれない。我々が今もこうして生きていることは、ET の存在が脅威ではないという考えを強く支持しており、宇宙の軍事化を正当化する口実にはなり得ないものだ。SG]*

我々がゼロポイント・エネルギーについて語る時、それが意味するものは、すべてが静止しても依然としてエネルギーはそこにあるということだ。それは大海の水位に似ている。物質と反物質の間にはそれ自体の消滅と再創造に伴う一定のエネルギー流がある。それは恒星の中で起きる - それは絶え間のないエネルギー交換だ。平均はゼロだが、そのゼロは無に比べたらとても高いレベルにあるだろう。サハロフと一部の物理学者が言ったのは、宇宙が存在するための背景エネルギーを生み出すのはこのレベルだということだ。

私がサンディ・マクドナルドと共に再び宇宙に関係し、最終的には米国宇宙航空機計画(NASP)になった仕事を始めたとき、私は英国での会議でロシア人グループに出会った。そのうちの一人は地上のアンテナから軌道上の衛星へ、次に衛星からまた地上のモスクワへエネルギーを伝送することに関わっていた。それは約 10 パーセントから 15 パーセントの損失しか生じていなかった。彼はこう言った。我々にそれが可能なのは、それがスカラー波投射装置だからだ。ここにその装置がある - 彼はルーズリーフ・バインダーを開き、“これを写真に撮ったり書き写したりしてはいけない；見るだけにしてくれ”と言った。そうしたら、何とそこには私がユーゴスラビアで見たそのチューブがあったのではないか。それはテスラがつくったものだ！ これはキャスパー・ワインバーガー(\*レーガ

ン政権の国防長官)がロシアの対弾道ミサイル兵器だと言っていたものだ。そのロシア人は、もしこのスカラー波装置が置かれている建物に入っても、見えるのは何本かのケーブルを引き込んだコンクリートの建物だけだろうと言った - なぜなら、それは対弾道ミサイルレーダーではなく、スカラー波電送装置だからだ。ようやく国防総省が現地入りしたとき、彼らは数本の金属線があるだけの空っぽのコンクリート構造物を見つけた。そしてこう言った。“なんてことだ、彼らはみんな持ってってしまった”しかし彼が言うには、そこにはもともと何もなかったのだ。彼はこの基地から衛星へ、さらにモスクワへと最大 10 メガワットまでの電力を伝送し、モスクワでは 8.5 メガワットから 9 メガワットを受信したと主張した。

*[キャロル・ロジン博士もまた、米国がソ連の対弾道システムの脅威を誇張したと証言していることに留意されたい - 米国は、ロシアが何も持っていないとき、彼らは‘キラー衛星’を持っていると主張していた。SG]*

彼らはこうした既成概念を外れた物事がどうして可能なのか、それを今にも理解しようとしていた。しかし、そのすべてが今はない。彼はどこにいるのか。彼は仕事を失い、その研究所はなくなった。こうして、ソ連ではその仕事の多くが破綻した。

*[ビールデン中佐とデービッド・ハミルトンの証言を見よ。SG]*

それはテスラが火星 - 火星の表面 - にエネルギーを伝送するために使えと言ったものと同じチューブだ - こうして有人基地にエネルギーを供給する。月の表面でも同じことができる。それが実際に可能になると、軌道上での燃料の問題は解消する：これらのチューブの一つを利用して適切なアンテナに直接エネルギーを発生させるのだ。そうすれば月まで飛んでいけるし、軌道まで飛んでいくこともできる。何でも思いのままだ。

これらの進歩したエネルギー技術を持つ人々はそれを公開する術を知らない。なぜなら、彼らは誰がそれを入手するのかと恐れているからだ。人類にとつてもない恩恵を与えるとはいえ、誰かがその同じエネルギー源を手に入れ、米国駆逐艦コールにしたのと同じことをする心配がある - 舷側に穴を開ける代わりに艦船を丸ごと破壊する。

闇の予算の世界はあの親しげな幽霊キャスパーを描写するのに似ている。彼の漫画を見ることはできるが、それがどれくらい大きいのか、その資金がどこから来るのか、どれくらいの数があるのか、その区画化と守られる誓約のために知ることはできない。私がいた場所で働いていた人々の今を知っているが、もしあなたがそれについて彼らに訊いても - たとえインターネット上で論じられていたとしても - 彼らは“知らない、あなたは何を言っているのか”と言うだろう。彼らは今 70 歳台だが、依然としてあなたが言っていることを知っているときえ決して認めないだろう。あなたには見当もつかないことだが、たぶんそれはあなたが考えるよりも巨大だ。繰り返すが - それには理由がある：もし彼らが実際に大惨事を引き起こしているとしたなら、我々はその敵対する相手である彼らに我々ができることを知られたくない。もし彼らがそれを知ったなら、彼らがそれをするのを我々は止められない - 彼らはそれを別のやり方でやるだけだ。



ハル・パソフ博士の証言  
Testimony of Dr. Hal Puthoff

2000年11月

理論物理学者であり実験物理学者でもあるハル・パソフ博士は、スタンフォード大学の卒業生だ。彼は電子ビーム装置、レーザー、量子ゼロポイント・エネルギー効果の分野で 40 編以上の技術論文を発表し、レーザー、通信、エネルギー分野の特許を持っている。パソフ博士の経歴は多彩だ。ゼネラルエレクトリック社、スペリー社、国家安全保障局、スタンフォード大学、SRI インターナショナルでの 30 年以上にわたる研究に加え、1985 年からはテキサス州オースチンの高等研究所長、アーステック・インターナショナル社の最高経営責任者を務めている。パソフ博士は証言の中で次のように指摘する。我々は宇宙旅行を可能にする技術を発見するにつれて、この行路の先に行く他文明の存在を考えなければならない。これは ET 地球訪問の可能性を開くものだ。我々の電磁技術の歴史が 1 世紀であることを思えば、次に我々が認識すべきことは、我々よりも数千年先に行く進んだ文明があるかもしれないということだ。彼らの技術は我々の想像を遙かに超えているだろう；だから、現代の科学者たちは ET/UFO 問題を真剣にとらえるべきなのだ。

... [UFO に関して:] もちろん我々は、異常な振る舞いをしながら飛び回る、飛行機のようなものがあるようだという主張があることを知っている。それは一般の人々だけではなく、軍パイロットや信頼できる観測者 - 大体は軍人だが - そうした人々の間にある主張だ。

それらが持つと思われる幾つの特徴やある種の物理学、さらにその物理学が向かっている先を考えたとき、我々はそれらの一部がどこか遠くの文明から来た、ある種の輸送機または探査機である可能性を排除することができない - おそらく輸送機よりは探査機である可能性が高い。

我々の電磁技術の歴史が 1 世紀にすぎないことを思えば、次に我々が認識すべきことは、我々よりも数千年先に行く進んだ文明があるかもしれないということだ。彼らはコンタクトを行なうための何か別の方法を持っているのか、それともワームホールのような方法を発見しているのか。我々にはそれを語る術がない。それは我々の想像を遙かに超えたものではないだろうか。

NORAD (北米航空宇宙防衛司令部) は彼らが説明できない‘無相関目標’ (\*追跡するための飛行データが予め登録されていない航空機) に遭遇している。衛星は時々早足 (fast walkers) と呼ばれる物体を捉える。既存の飛行機などでは説明できない速さで移動するその様子は、エネルギー粒子の飛跡のようだ...

## 米国エネルギー省 デービッド・ハミルトンの証言

### Testimony of David Hamilton

2000年10月

デービッド・ハミルトンはエネルギー省の新世代電力システム分野で働いている。彼は次のように説明する。我々は世界の化石燃料供給量をほぼ使い尽くしたが、今まさにアジアと中国が‘産業革命’の最中にあり、すでにそれを終えた‘第一世界’を凌ぐ化石燃料消費者になろうとしている。現在の地球環境汚染、地球温暖化、等々を軽減し、持続可能な技術社会として前進するためには、我々は古いパラダイム(物の考え方)に属しない技術を開発する必要がある。

...我々は石油に依存する世界の仕組みをつくり上げたが、その石油供給は益々制限されるようになっていく。さて、その石油供給の実情を見てみると、我々は供給と需要が交差しかねない歴史上初めての状況に置かれている。あと10年もすれば、我々は供給と需要が交差する事態に直面し、供給は深刻な制限を受けることになるだろう...

彼らはロシアの大学と共同で、これまでで最良の部類に入ると考えられる重力実験を行なった。それを行なったのはロシアの高温物質研究所だ。彼らはこの実験を所外施設で行ない、この装置が重力場を35パーセント減少させることを実証した。

我々はそれを見て強い感銘を受けた。私はエネルギー省で重力研究をしている上級研究員にそれを見せた。我々は皆それに関心を持ち、それを徹底追究するために別の種類の実験を行ないたいと考えた - 十分に科学的であるためには複製可能で再現性がなければならない。しかし、これは大変な抵抗を受ける。ロシアではなおさらだ。彼らがこの所外実験室を去ったとき - 私の理解ではそれは大学と通りを挟んだ向かい側にあった - そこは完全に荒らされていた。

すべての設備が無くなっていた。幸いなことに、彼らは記録、ビデオテープ、発表資料を残して、その全部が無傷のままだった。しかし、装置はその実験を再現するために必要な多くの設備と共に行方不明だ。

これには何らかの利益が絡んでいたことを考えると、そこにはマフィアのような輩が関わっていた可能性がある。ロシア人の友人はこう言う。それと同じようなことをする政府の一部はマフィアと何ら変わらない。こうして問題が複雑になる...

私の懸念は、もし我々が今すぐ何かをしなければ、資源に不自由し始めたいずれかの社会が、資源の不自由を引き起こしている原因を除去しにかかることだ。他の人々が我々を除去したいと考えるのか、それとも我々が自分たちの生き方を続けるために彼らを除去しなければならないのか。我々がそのような状況に陥るのを見たくはない。それこそ、我々が今始めなければならない理由だ。

米国陸軍中佐 トーマス・E・ビールデンの証言  
Testimony of Lieutenant Colonel Thomas E. Bearden

2000年10月

ビールデン中佐は代替エネルギー技術、電磁気の生物学的作用、統一場理論構想、その他の関連分野における主導的な概念論者だ。彼は米国陸軍の退役中佐であり、博士号を持ち、ジョージア工科大学から原子核工学の修士号を取得している。彼は現在 CTEC 社の最高経営責任者、米国著名科学者協会会長、アルファ財団高等研究所名誉研究員の肩書きを持つ。ビールデン中佐は証言の中で、現在知られているどの物理法則にも違反せず、真空から利用可能なエネルギーを取り出す方法について詳しく語る。ビールデン中佐のグループはそれを実証する電気機械的装置を製作した。彼はまた、ある勢力がこの技術の存在を少数の闇の勢力以外の人々から隠すために何をしているかについても説明する。しかし残された時間は少ない。なぜなら、地球の石油と石炭の埋蔵量は今の世代が使うにも十分ではないからだ。彼はこう説明する。我々の最高の頭脳を持つ人々と科学者がまずこのことを認識し、このエネルギー問題を解決する取り組みに結集しなければならない。それも 2004 年になる前に。

... エネルギー分野には産業と経済の巨大な企業連合が存在する。それは単一の企業連合ではない。エネルギー分野には実に多くのグループがあり、それぞれがそれ自身の分野でとても強力になっている。彼らは簡単で小さな電気蛇口が真空から莫大なエネルギーを取り出すのを見たくはない。それよりも彼らは、人々がもっと多くの石油を燃やすのを見たい...

致命的な手段が使われている。たとえば、私は大変有名な発明家、スパーキー・スウィートと一緒に働いた。彼は約 300 ヤードの距離から狙撃ライフルで銃撃された。彼の命が救われたただ一つの理由は、彼が高齢でとても弱っていたということだった。彼は階段を昇っているときによろめき、倒れた。彼の頭が前のめりになったとき、銃弾がまさに彼の頭があった場所を通過した。もちろん、その暗殺者は見つからなかった...

もし我々が真空からエネルギーを取り出すこのシステムを使うなら、この生物圏を浄化することができる。我々が直面しているきわめて重大かつ危機的な状況は、安価な石油の供給は今が絶頂期にあるということだ。それは紛れもない現実だ。このことは何を意味するか。我々が今後もある程度の石油を手に入れることは確かだろう。しかし、その価格は年々際限なく上昇する。一方、電力の需要は世界中の至る所で高まり、それがまた石油価格を押し上げる。こうして我々は、典型的な価格急騰の事態を迎える...

さて、何が起きるか？ 私が状況を見て予想するところでは、2008 年前後のどこかで、我々は世界経済の崩壊を経験する。経済は予想されるこの需要の増加に対処することができない。もし中東で戦争でも起きたらどうなるか。しかし、2008 年までには世界経済が崩壊すると私は見ている。そのほぼ 1 年前になると経済が破綻し、あらゆる民族、あらゆる指導者、あらゆる国民の上のしかかる圧迫が強まる状況下で、死に物狂いの人々はどんなことでもするだろう。追い詰められた指導者、特に狂信的な指導者は手段を選ばないだろう...

私の見るところ、今進行しているエネルギー危機は、おそらく大規模なアルマゲドンを引き起こす

だろう。もし我々がエネルギー危機を解決できない場合、それは2007年頃に起きると誰もが長い間恐れてきた。それから逆算すると、時期は2004年の第1四半期だ。これらの新しいエネルギー装置は、ソーセージのように組み立てラインから次々と出てくるのがよい。そうでないと、人々はそれを忘れて家に帰ってしまうだろう。それでは状況を変えるには手遅れだ。つまり、我々に残された時間がいかに少ないかということだ。

私はこれを米国に対する、また実に文明の存続に対する、私の生涯における最大の戦略的脅威だと見ている...

私にはとても親しく一緒に働いた友人がいた。彼は実用的なエネルギー発生装置を製作した人物だ。彼はある会議で8キロワットシステムを実演した。その後、不思議なことに彼とその家族全員が姿を消した。しかし、我々は彼がそのとき以来今なお健在で、裕福に暮らしていることを知った。彼はとても高価な衣服を身にまとい、素敵な車に乗っていた。彼とその家族は、そのとき姿を消したにもかかわらず、元気に暮らしている。

しかし、彼は完成されたユニットを持っていた。それが地球上から見事に消えてしまった。それを消失させたのは強大な金融帝国か、何らかの闇のプロジェクトだ。彼らはそれを機密にした...

私は心からこう思う。我々は自分自身と地球を救うために、米国政府の主導のもとに[これらの技術を]公開しなければならない。もし我々がそれを秘密にしておくか、制御グループの手に握らせたままにしておくなら、我々は2007年頃にすべて忘却の淵に沈む...

一つ予想をしよう。もし政府が動かなければ、75パーセントから80パーセントの確率で我々は失敗する。我々は[化石燃料を実用的なエネルギー装置で置き換える事業が]2004年の第1四半期には必ず始まるようにしたい。もしこの2004年の第1四半期を逃したら、我々は皆家に帰り、吹き飛ばうとしている束の間の残された時間を家族と共に楽しむのがよさそうだ...

誰でも現代的な生活を望む。人々はぬかるみや汚れた場所から抜け出て、照明や電力で動くものを持ちたい。そして産業を興し、仕事を持ち、家や学校を建てる。それは人間の本性から来る当たり前の行為だ。それを今のやり方で続けようとするれば、我々はこの地球を破壊し、否応なく互いを滅ぼす。我々はもう少し賢くなるべきだ。

ユージン・マローブ博士の証言  
Testimony of Dr. Eugene Mallove

2000年10月

ユージン・マローブ博士は現在インフィニット・エナジー (InfiniteEnergy) 誌の編集長であり、またニューハンプシャー州の新エネルギー研究所長だ。彼は MIT (マサチューセッツ工科大学) から航空工学-宇宙航行学の学位を、またハーバード大学から環境衛生科学 (環境汚染制御工学) の博士号を取得した。彼はヒューズ研究所, TASC (The Analytic Science Corporation) といった企業や MIT リンカーン研究所で先端技術工学に関わった豊富な経験を持っている。マローブ博士は、1989年3月に起きた常温核融合論争のとき、MIT の科学記事執筆主幹だった。彼は MIT で改ざんされた常温核融合データ (これは問題全体の信憑性を失わせることに役立った) について調査を要求したが、適切に行なわれることはなかった。その後、1991年に彼は辞職した。科学界の常温核融合問題に対する故意の過小評価と、ET/UFO 問題に対する過小評価の間には、強い類似性がある：両方とも冷笑され、誹謗されている。なぜなら、それらは既成のパラダイム (物の考え方) を壊すからだ。マローブ博士はインタビューの中ではっきりとこう述べる。“特に学界の物理学者、また学界一般に対して、次のように示唆することほど忌み嫌われることはない。あなたたちはただ間違っているだけではない； どうしようもないほど間違っている、破滅的なまでに間違っている” マローブ博士は自身の雑誌の中で、我々にマイケル・ファラデーのこの言葉を思い出すように忠告している：“真実であることよりも素晴らしいものはない”

... 今日我々は、あの常温核融合という低エネルギー核反応が本物だったことを事実として知っている。それは熱を生成する安全な核反応の一種だが、また核変換をも伴う - 大変有益で強力な反応だ。それは多くの企業の手中で商業化されつつある技術だ...

これについては何の疑念もない。それが意味するのはこういうことだ。1 立方キロメートルの海水を汲み、その中の重水素 - これは 1 立方キロメートルの海水の約 0.015 パーセントだ - をすべて融合させると、地球上にあるすべての石油資源を燃やしたときに匹敵するエネルギーが得られる...

常温核融合の問題に関しては、特許局とエネルギー省による異常なまでの基本的法的責任の放棄が行なわれてきた。常温核融合の特許は今も認可されていない。常温核融合に類似する特許の認可を受ける唯一の方法は、常温核融合またはそれに類する言葉を削除することだ。そのようにして成功した人々もいる。パターンソン・パワーセルはその一例だ。それは年齢による審査迅速化条項 (パターンソン博士の年齢のため) が適用されたもので、それが彼に有利に働いた。彼は特許局の別の技術グループの審査を通過した。

しかしほとんどの場合、もしその特許が特許局のハーベイという名前の人物を通るとすれば、彼はそのような特許はすべて却下するだろう。そこを通過することはできない。米国民はこの特定事例 (\*常温核融合) に関して憲法上の権利を否定されている。そのことに疑問の余地はない。我々はそれについての審査追跡記録を持っている。間違いなく、そこでは深刻な犯罪行為が進行している。常温核融合や新エネルギー革命が前進するためには、それらは最終的に根絶されなければならない。それが根絶されなければ、我々は商業化基盤を持ってないだろう...

私が気付いたことだが、特に学界の物理学者、また学界一般に対して、次のように示唆することほど忌み嫌われることはない。あなたたちはただ間違っているだけではない；どうしようもないほど間違っている、破滅的なまでに間違っている...

ポール・ラビオレット博士の証言  
Testimony of Dr. Paul LaViolette

2000年10月

ポール・ラビオレット博士は4冊の本を書き、物理学、天文学、気候学、システム理論、心理学に関する多数の独創的論文を発表している。彼はジョンスホプキンス大学から物理学士号を、シカゴ大学から経営学修士号を、またポートランド州立大学から博士号を取得し、現在は学際的な科学研究所であるスターバースト財団理事長をしている。彼は超量子力学(subquantum kinetics)を開発した。これは電気力、磁気力、重力、核力を統一的に説明し、年来の物理学上の諸問題を解決する微視的物理学への新しい取り組みだ。彼はこの理論の予想に基づき、ビッグバン(宇宙大爆発)理論に事実上取って代わる別の宇宙論を展開した。ラビオレット博士はまた、深刻な欠陥を抱えている一般相対性理論に代わる重力の新理論を開発した。超量子力学の予想によれば、タウンゼント・ブラウンが発見した電気重力結合現象は説明が付き、またB-2爆撃機に応用されている進歩した航空宇宙推進技術も説明されるかもしれない。彼はUFO、闇の予算による推進システム、物質化と非物質化についての理解に加え、米国特許局の内部事情についても深い知識を持っている。インタビューの中で彼はこう述べる。現在、もしある発明が既成物理学の理論に合わない場合には、特許審査官はそれが理論に違反するので間違っているに違いないと考え、それを直ちに却下する。実際に新エネルギー技術は犠牲になっている：それらは現在のパラダイム(現代において支配的な物の考え方)に属しないので、必要な財政的支援の対象外であり、特許も拒絶される - 特許局は法律に違反してまでそうする。現在の地球の環境汚染、地球温暖化、等々を軽減し、持続可能な技術社会として前進するためには、我々は古いパラダイムに属しない技術を開発する必要がある。

... 例を挙げればロズウェル墜落があり、これをすべて秘密にしておくために国家安全保障局(NSA)がつくられた。さて、そのような出来事は我々の政府当局者の一部にとり、大変な動揺を引き起こす経験だ。地球外知性体が存在し、彼らはこの進歩した技術を持っている。何かにとっても動揺したとき、起きる反応の一つはそれを隠すことだ。そして、それを我々自身のためにどのように利用することができるかを考える - 我々は他国より一歩先んじなければならない。当時我々はソ連との冷戦の最中であつた。だから、その理由付けは軍事目的への応用だつた。

自動車が開発された100年前に同じことが起きたとしたらどうだろうか？間違いなく、我々は今でも馬車に乗っていたらろう。なぜなら、自動車は戦争というものを変える恐れがあつたからだ。それは移動を遙かに高速にする。だから、これを秘密にしなければならないのは当然だ。その当時は使える手段がなかつた；我々にはNSA(国家安全保障局)がなかつたし、この進歩した技術を閉じ込める主要な計画もなかつた。

我々は、科学は観測に基づいており、変化に対しては寛容だと思っている。だが、科学と科学者自身についてもっとよく知れば、それがどれほど宗教に近いものかがよく分かる。それはとても閉鎖的で、その基本原理を変えることに強く抵抗する...

あるカナダ人の事例だが、彼は靴箱とほぼ同じ大きさの物体から、一軒の家を十分に賄う量の電力を発生させる技術を開発した。それは何かを新しい配線方法で繋ぐもの - ある種の非線形装

置だった。彼は何の隠し立てもせず、その装置を公表した。ある日、彼の家が特別機動隊に包囲され、すべての装置類が押収された。彼は、テロリストの技術か武器を秘匿していたという理由で逮捕された。そして、今後この分野での研究をしないことを誓約した書類に署名し、やっと釈放された。現在、彼は生活のために芝刈りをしている...

特許局の今の姿勢は実際には法律に違反している。それは米国物理学会 (APS) に所属する物理学者を安泰にしようとするものだ - 彼らの考え方にいわば権力を与え、エネルギー危機のような、我々が直面する諸問題の解決に役立つ優れた発明を国民が利用することを妨げている。特許局全体を貫いているのはこの姿勢だ。私は体験からそのことを知っている。なぜなら、私は約 1 年間特許局にいたことがあり、その職員も何人か知っているし、行なわれていることの一部も知っているからだ。たとえば、私が知っている審査官は、光よりも速く信号を送るある方法について特許を認可した。すると、ロバート・パーク (\*物理学者) は彼のウェブサイト上でこれを物笑いの種にした。彼らの世界では、これがその年の最も馬鹿げた特許賞であると紹介された - こんなことが行なわれているのだ...

人は言いたいことは何でも言える; それは言論の自由だ。しかし、特許局では法律を守る代わりに彼らの命令に従う - それは違法行為だ...



## カナダ空軍 フレッド・スレルフォール氏の証言

### Testimony of Mr. Fred Threlfall

2000年9月

スレルフォール氏は 1953 年にカナダ空軍トロント駐屯地の通信教官だった。彼はそのとき、物体の非物質化と再物質化を成功させたある実験を目撃した。彼は最高機密取扱許可を持っていたため、基地の資料庫から第二次大戦中に飛行機のガンカメラで撮影されたフィルム原版を借り出すことができた。彼はこれらのフィルムを見ながら、その中に写っている UFO に何度も気付いた - 様々な姿勢、様々な形だったが、間違いなく UFO だった。スレルフォール氏は、空中で UFO が飛行するのを自分自身でも目撃した。

... 私が 1953 年に教官としてトロントに駐在していたとき、ある異常な実験を目撃した。私は実験を終えたばかりで、自分の教室に戻る途中だった。そこでこの実験が行なわれていたのだ。この部屋には約 4 × 4 (\*単位不明)の密閉されたガラス囲いがあった。その中に置かれた飾り棚の上に大きなガラスの灰皿があった。私は、何をしているんだい？ と訊いた。[彼らはこう答えた]“今、ある実験の最中だ。別の部屋に灰皿のない同様の装置がある”我々はそんな話をしていた。そのとき、科学者の一人が“さあ、やってくれ”と言った。次に起きたことは何か。その灰皿はそこになかった。皆は次の部屋に入っていく、この上なく興奮していた。なぜなら、その灰皿はそこにあったからだ - だから、それは非物質化し、再物質化したのだ...

## テッド・ローダー博士の証言

### **Testimony of Dr. Ted Loder**

2000年10月

テッド・ローダー博士は尊敬すべき科学者で、ニューハンプシャー大学の海洋学教授だ。彼はいとこのスティーブン・ラブキン弁護士から、ET/UFOの問題は現実であるのみならず、地球環境を保護し、持続可能な地球社会へと発展することを可能にする技術への鍵だと教えられた。それ以後、彼はこの問題を取り巻く秘密を終わらせる必要性を説く積極的な唱道者となった。この4年間、テッド・ローダー博士は学生、他の科学者、国会議員たちに、人類は宇宙で孤独ではないこと、地球と人類の生存のためにはETとの平和的交流が必要であることを紹介する活動をしている。

## 4.0 国民、民間および政府の利害関係者に対する行動提言の要約

### 4.1 報道機関に対する行動提言

この公開への取り組みが成功し、米国民と学術機関が脅迫されながらではなく、知的な関心を持って事実を受け入れるために、報道機関が果たす役割は決定的に重要である。この分野を研究している誰にとってもまず明らかになることは、偽情報を流布し、UFO/ET問題についての国民の考えを形成するために、米国の報道機関が過去半世紀にわたり重要な役割を果たしているということである。<sup>30)</sup> しばしば報道機関は、無意識のうちに誤情報／偽情報を広げることに、また故意に事実の報道を拒否することに荷担してきた。重要な目撃事件が全国規模で報道されることはきわめて稀である。報道がなされる時、それらはしばしば見下すような、事実をゆがめるような、“ふざけ半分”のような、視聴者が混乱し興味を失うやり方で行なわれてきた。最近の二つの例外は、USA トゥデー紙<sup>31)</sup>にあったリチャード・プライスによるフェニックス・ライツ事件の報道、およびレスリー・キーンによるフランス COMETA 報告<sup>32)</sup> についてのボストン・グローブ紙の報道である。いずれの記事もよく調査されており、バランスがとれ、一方的判断を避けた書きぶりで紹介された。

**我々は報道機関が以下の行動をとることを提言する：**

1. 我々はこの話題について書いている記者に対し、その証拠とこの話題が何を意味するのかを自分自身でよく理解することを提言する。UFO/ET 問題を研究した人の多くは、これが今日の世界が直面している最重要問題だと感じている。この重要性は、責任ある真摯な方法で読者に伝えられるべきである；
2. 我々は報道機関に対し、これらの諸問題を経験を積んだ、尊敬される、全国的に認められた報道記者に担当させることを提言する。これらの諸問題は、もはや埋め草記事として若手記者に担当させたり、娯楽番組に落としたりすべきではない；
3. 真面目さを欠いた程度の低い論調を報道に持ち込むことによって、この話題を“易しくする”ことを意図したのかもしれないが、我々は報道機関に対し、これらの問題を報道する際に現在の陳腐な表現を排除することを提言する。それらの中には“緑色の小人”のような冒頭説明、インタビューを受けている人を奇妙なカメラアングルで映した映像、着色光、霧発生器などが含まれる。これらの仕掛けのすべてが数十年にわたりこの話題を情報操作するために有効に使われてきたが、国民に報道の真剣さを信じさせたいなら、排除されなければならない。

---

30) See Hanson, T., *The Missing Times: News Media Complicity in the UFO Cover-up*. 2001

31) See copy in Appendix I (Document AI.18).

32) See copy in Appendix I (Document AI.19).

---

### 4.2 国民に対する行動提言

**我々は国民が以下の行動をとることを提言する：**

1. 我々は国民に対し、自ら思慮深くこの問題を研究することを通じて UFO/ET 問題に心を開くことを提言する;
2. 我々は国民に対し、一度公開の意味を認識したなら報道機関や行政当局に働きかけ、彼らが責任を持ってこれらの問題の調査と報告を行なうように、また彼らがこの惑星の人間観の劇的転換と、ある大きな知性体グループの一員としての人間の将来の位置を取り上げる対話に参加するように促すことを提言する;
3. 我々は国民に対し、証人たちが安全に名乗り出てこられるように(大統領の行動提言の節を見よ)、大統領令の公布を請願する手紙を大統領に書くことを提言する。また、これらの証人たちが証言できる公聴会を後援するように要請する手紙を、上院議員と下院議員に書くことを提言する;
4. 我々はこの主題について知識を持ち、証人として名乗り出る意志を持つ元政府職員、元軍関係者、または企業にいた人々に対し、彼らの知識を名誉と愛国心を持って公開することを促進するために、公開プロジェクトに連絡することを提言する;
5. つまるところ、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造するために、勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならない。公開への取り組みを促進することになるのは最終的には国民だからだ。

### 4.3 議会に対する行動提言

この主題の途方もない重要さとその意味を考えると、議会は過去 40 年から 50 年の間、ほとんど何の役割も果たしてこなかった。実際に、その期間中には 2 回しか公式の公聴会が開かれなかった。最初は 1966 年 4 月 5 日に国家軍事委員会が開いたものだが、これは空軍のブルーブック計画に対する新聞と国民からの強い批判があったからである。当時ミシガン州下院議員だったジェラルド・フォードが公聴会の熱心な推進者だった。その理由の一部には、彼の州でその年の 3 月に起きた重要な目撃事件があった。それは数百人の人々により目撃され、報道機関も大々的に報道した。その公聴会の結果、独立した組織による UFO の科学的調査が提言された。これはエドワード・コンドン博士に率いられるコロラド大学の“UFO の科学的研究”計画になった。

次は 1968 年で、国家科学航空委員会が UFO の科学的根拠を再考するために、“未確認飛行物体に関するシンポジウム”を開いた。証言した 6 人の科学者のうち 5 人が、さらに研究を要する明らかな科学的異常性があるとの見解を表明した。実際に、その一人<sup>33)</sup>であるアリゾナ大学の上級物理学者にして教授だったジェームズ・マクドナルド博士は、次のように結論した。“我々はこの並外れて興味をそそる謎に対して、速やかに真面目な科学的関心を拡大すべきだ。私自身の UFO 問題研究から私はそう確信している” 1 年後にそのコンドン委員会は、UFO について説得力のある科学的証拠は何もなかったという結論を出し、ブルーブック計画を終わらせることを提言した。そしてその年の 12 月 17 日に、事実そうになった。この驚くべき結論は、委員会によって調査された事例

の約 30 パーセントが正体不明であるという事実を無視したものだ。1990 年代、ニューメキシコ州ロズウェルの近くで起きた墜落に関して次々と明らかになる証拠について空軍が一切言及しなかったために、当時のニューメキシコ州下院議員スティーブン・シッフ（ニューメキシコ州・共和党）は、会計検査院に対して関連資料の調査を行なうことを要求した。1995 年に GAO (General Accounting Office; 会計検査院) は一つの報告書を発表した。それには、ロズウェル陸軍飛行場の当時の資料は不適切に廃棄処分されており、その墜落に関する資料を見つけることはできなかったと述べられていた。

その後 1997 年 4 月初めに、CSETI (Center for the Study of Extraterrestrial Intelligence; 地球外知性体研究センター) は議員と民間の証人たちのための非公開説明会を開いた。議会の誰かが勇気を持ってこの話題についての公聴会を開いてくれることを期待してのことだった。そのときも、それから今日に至るも、誰もこの話題について公聴会の開催を敢えて要求した人はいない。1966 年にジェラルド・フォード下院議員が出した声明、“我々は国民に対して UFO についての真実性を確立する義務がある”は、そのときも今日も真実であるにもかかわらずである。興味深いことに、上院議員たちはこの主題について公聴会を開くことはなかったが、立場を離れた個人としてこの主題に重大な関心を示す人々はいた。

**我々は議会がこの問題を追求するために以下の行動をとることを提言する：**

1. 下院および上院情報委員会の連絡窓口と議長に対し、指定審問を行なう；
2. 一覧に掲げた様々な施設、政府機関、および団体に対し、直接に審問を行なう；
3. これらの作戦行動を制御している組織を特定するために役に立つ、議会に知られている他の連絡窓口を追求する；
4. これらのプロジェクトに対する直接証人が証言できるように議会公聴会を開き、この問題をさらに追及する。このような要求を共同提案するために、二人以上の国会議員が必要だと我々は考えている；
5. 宇宙兵器を禁止する議会法案を成立させ、我々の同盟軍と国連に対して同じ行動をとるよう働きかける。

議会または大統領令により国家機密保全誓約 (4.7.2 節) と恩赦 (4.7 節) の合法性の問題が一旦解決されれば、UFO/ET 問題の現実性とそれが我々の国の将来に対して持つ意味について進んで証言しようとする潜在的証人は、数百人に上る。

隠し立てのない公開された議会公聴会という手段によってのみ、これらの問題の複雑性が理解され、我が国は前進することができる。

UFO 問題、世界のエネルギー事情、および技術の間にある相互関係のゆえに、これらのエネルギー諸問題についての議会公聴会もまた、それに続いて、またはほぼ並行して開催される必要が

あるだろう。

UFO 問題の現実性について一旦議会がそれを受け入れたなら、次に我々は議会に対し、以下のことを提言する：

1. これらの新しい技術を、一般の民間人が現在持っている情報源と、軍、情報機関、および企業の請負分野にある区画化プロジェクトの両面から、徹底的に調査する；
2. この主題に関わる区画化プロジェクトが保持する情報の機密解除と解放を承認する；
3. このような技術の押収または抑圧を明確に禁止する；
4. 民間の科学者と技術者たちによる基礎研究と開発のための十分な資金を承認し、この研究を国民と主流派科学者たちが利用できるようにする；
5. このような技術の公開と、脱化石燃料経済への転換に対処する諸計画を策定する。これらの計画には、とりわけ以下のことが含まれるべきである： 軍事と国家安全保障計画； 戦略的な経済計画と準備； 民間部門への支援と連携； 地政学的計画、特にその経済を石油の輸出と価格に大きく依存している OPEC (石油輸出国機構) 諸国と地域に配慮した計画； 国際的な連携と安全保障。

公開プロジェクトは、これらの新しいエネルギー源の利用を促進するために役立つなら、議会に対してどんな協力でもする用意ができています。我々は、議会に召喚されてこのような技術について証言することができる多数の人々、またこれらの問題をすでに扱っている秘密の政府活動の内部にある、認められざる特殊接近プロジェクトについて情報を持つ人々を推薦することができます。

-----  
33) See sections 32.1 and 6.3 (under Dr. Robert Wood for other comments by and about Dr. McDonald.  
-----

#### 4.4 軍に対する行動提言

1990 年代初めから、公開プロジェクトの代表とそのメンバーたちは、統合参謀本部情報局長 (J-2)、国防情報局 (DIA) 長官、中央情報局長官、国家空軍情報センター・ライト・パターソン本部長、その他を含む軍の高官たちに対して背景説明を行なってきた。これらの背景説明を行なう中で我々が知ったのは、高官たちはこの主題について知らされてこなかったということである。これは国家安全保障と軍の即応性への重大な脅威である。

ロスコー・ヒレンケッター提督の言葉を引用しよう。“未確認飛行物体を‘秘密にすることから生じる危険’を減じるために、議会が早急に行動を起こすことを強く求める” 彼が UFO によって生じる危険ではなく、秘密によって生じる危険を強調していることに留意されたい。<sup>34)</sup>

我々は軍と国家安全保障分野の高官たちが以下の行動をとることを提言する：

1. 公開プロジェクトの主導のもとで軍／民間の証人たちにより、この主題についての徹底的な背景説明を受ける；
2. 司令長官たち (CINCS； Commander in Chiefs) に十分な背景説明を行ない、ETI/UFO (地球外知性体／未確認飛行物体) との遭遇に対処する特別な行動規則 (ROEs； Rules of Engagement) を開発する；
3. この主題について独自の調査を行ない、この主題に関する USAP (Unacknowledged Special Access Projects； 認められざる特殊接近プロジェクト、3.4 節を見よ) 活動に侵入する；
4. この主題に関する秘密計画に全面的に関与し、このようなプロジェクトが適切に監督され、直接的かつ継続的に憲法に基づく指揮系統下にあることを確実にする；
5. UFO に関する進歩した技術または兵器システムの USAP による秘密裏の悪用については、いかなる場合もこれを制止する；
6. これらの生命体に対しては平和的で協力的な対処行動をとり、武力を用いた暴力的な行動を回避することに細心の注意を払う；
7. 上記の情報に照らし、宇宙空間に兵器設備を展開することを注意深く再考する。また地球外知性体にとって好戦的または敵対的と見なされかねない行動を避ける。

これらの提言のより詳細な説明は 5.1 節，“作戦即応性と未確認飛行物体／地球外知性体 (UFO/ETI) 問題”で述べられる。

-----  
34) Hillenkoeter, Roscoe: Aliens from Space, Major Donald E. Keyhoe, 1975.  
-----

#### 4.5 科学界に対する行動提言

世界中の何千人もの目撃者により観測された UFO 現象の真実性が立証されるにつれ、観測されたものが何であるかを説明する、科学の新しいパラダイムが必要になる。20 世紀の科学理論は、科学分野、軍事、民間の数多くの証人が観測し報告した現象を、ほとんど何も説明し得ない。しかし幾つかの事例では、(3.8 節の証人の証言に基づき) 観測された現象と技術を理解するのに、我々の科学界の著名な科学者たちよりも秘密の軍事研究計画の方がはるかに進歩しているように思える場合がある。超光速を可能にする現象<sup>35)</sup>の実演はその一例であるが、最近の諸発見はまったく新しい分類の科学的現象が実際にあることを示唆する。21 世紀の科学者たちは、前世紀の科学者たちにより“不可能”と断言されてきたことを説明するために、これらの現象を研究することになる。

UFO/ET 問題では、大部分の科学者たちの間で今なお容認という大きな問題がある。ピーター・スターロック博士は大変尊敬される太陽物理学者で、現在はスタンフォード大学名誉教授だが、この問題を以下のように要約している：

“UFO の謎の最終的な解決は、確立した科学の正規の手法に基づき、公然かつ詳細な科学的研究の対象になるまでは実現しないであろう。そのためには、まず科学者と大学の管理者の側が姿勢を変える必要がある”<sup>36)</sup>

さらに科学者と科学雑誌の役割についてのスターロック博士の見解が 3.2.1 節に引用されている。一般の人々は驚くだろうが、科学者というものは、彼らの理論が正しくないかもしれない証拠に直面したとき、作用と自然現象の理解を変更するに際してしばしば問題を抱える。科学の歴史においては、これはできない、あれは不可能だと断言する科学者たちの例に事欠かない。後になって彼らの仮説は間違っていたことが示される。この通常の人間の傾向は、確かに科学者に限ったものではない。(例を挙げると、ライト兄弟の飛行機が飛ぶのを何千人もの人々が見た後でも、数年間は飛ぶことは不可能だと公言する人気記事がなおも見られた) さらに米国内の科学研究のほとんど、特に大学におけるそれは、補助金や雑誌への論文掲載はもちろんのこと、昇進や身分保障も仲間同士の承認という過程を通して決定される。仲間同士で容認された研究の外に踏み出すことは、既成分野で地位を確立した科学者にとっても、しばしば災いの元になる。その結果、科学界の圧倒的多数派はそのような危険を冒そうとはしない。なぜなら、現在容認されている学説に留まる方が安全だからだ。

前世紀を通じて科学者たちは、誤情報や偽情報を流すことにより、“信じやすい”国民の UFO 問題に対する態度を形成するという行為の中で、しばしば知らず知らずのうちに能動的役割と受動的役割の両方を演じてきた。1950 年代以来、UFO 現象の“科学的証拠はない”ことを国民に説得するために科学者たちが利用されてきた。知名度の高い科学者たちは、今日でもまだその役割を演じている。SETI(Search for Extraterrestrial Intelligence; 地球外知性体探査)計画の指導者の一人が、ハーバード大学での最近の公開招待講演で、“UFO 実在の科学的証拠はない”と明言したが、そのようなことだ。この声明については幾つかの説明が可能である。彼女はこの主題についての証拠の奥深さに気付いていなかった。その場合、彼女の権威ある表明は修正されたも同然である。あるいは、彼女はその主題が現実であることを知っていたが、SETI 研究を拡大するより多くの支援を得るために、気付かずに国民を欺く動機を持ってしまったのかもしれない。いずれにせよ、科学者は国民に対してもっと正直でなければならない。国民の大部分は今なお彼らと彼らが表明することを信頼する。

要約すれば、調査と研究なしには、現象についての理に適った真実に基づく声明はあり得ない。この必要性についてはスターロック/ロックフェラー報告中の科学者委員会、および 8.0 節で要約されるフランス COMETA 報告中の科学者と軍関係者によっても提言されている。

**我々は科学者が以下の行動をとることを提言する：**

1. 科学者たちは UFO/ET 現象の可能性について心を開かなければならず、この分野を研究している人々に先入観を持つことを止めるべきである。そのためには各人がこの問題について



自分自身の“調査”を行なう必要がある；

2. UFO/ET 問題が現実であることを知る科学者たち(たとえば秘密プロジェクトに参加している科学者たち)は、その現実性と自らの知識を同僚科学者たちと共有し、彼らに必要な情報を与えることを始めるべきである。そのためにやるべき事は多く、世評と資金問題に起因する困難が予想される；
3. 大学の科学者たちは、この知識を彼らの学生と国民に分かち与えるべきである。なぜなら、数世代にわたり観測されている現象を説明する研究に飛躍をもたらすのは、次世代を担う学生と大学院生たちだからだ；
4. 科学者たちが UFO/ET 問題の研究を、これら将来の大学院生と若い専門家たちのために支持され奨励される科学研究分野にするように助力することは、きわめて重要である；
5. 我々の連邦政府の財政援助による研究計画を運営している科学者／管理者たちは、彼らの予算のうちのわずかな部分を UFO/ET 分野の‘独創的’研究のために取っておき、それを正規の研究分野にすることに助力すべきである；
6. 最後に、科学者たちは UFO/ET 現象の理解から生じる科学と技術上の進歩が、人々と地球環境の未来に広範囲に及ぶ効果をもたらすことを認識すべきである。新しい‘飛躍的’研究が生まれるために、これ以上の機会はない(多くの教科書を書き改める機会でもある)

-----  
35) Wang, L.J., A. Kuzmich, and A. Dogariu. 2000. Gain-assisted superluminal light propagation. Nature. 406:277-279.

36) Sturrock, P. A., Report on a Survey of the American Astronomical Society concerning the UFO Phenomenon, Stanford University Report SUIPR 68IR, 1977.  
-----

#### 4.6 米国大統領に対する行動提言

第二次大戦以来の歴代大統領たちは、UFO/ET 問題が現実であることを知っていたが、この数十年間は彼らの知識とこの問題に対する影響力は制限されてきた。今こそ大統領が公開のための行動を率先して起こすときである。なぜなら、もし大統領が何の役割も果たさずに重要な公開が行なわれるなら、米国民と世界は大統領に対して次の二つのうちの一つの見方をするだろう。おそらくいずれにしても不利であることに変わりはない。

1. もし米国大統領と行政府がこれほど重要な主題について何も知らなかったと主張するなら、大統領の威信は著しく損なわれるだろう。
2. “裁可されていない”公開が起きた後で、もし米国大統領と行政府がその主題とその途方ない国家的重要性を知っていたが公開には関わっていないと主張するなら、大統領はその隠蔽に荷担したとして非難されるだろう。この主題がきわめて秘密裏に扱われてきたという事実

に照らせば理不尽かもしれないが、非難は免れない。

いずれにせよ、大統領は以下の手順を踏んで公開の行動を起こす必要がある。そうしなければ、上記の不利な選択のいずれかが一般的な見方になるだろう。

1. 我々は大統領に対し、この主題に関する国家機密保全誓約から証人を解放する大統領令を公表することを提言する。なぜなら、証言しようとしている証人の重要問題は、それが不法に行なわれたにせよ、彼らの機密保全誓約だからである(機密保全誓約についての 4.7 節を見よ)；
2. 我々は大統領に対し、独立した公平で開かれた委員会を開催し、この主題、この主題に結びついた USAPs(認められざる特殊接近プロジェクト)、および現在は秘密にされているが公開された暁には人類の利益となる技術について調査することを提言する；
3. 我々は大統領に対し、上記と並行して大統領令により UFO/ET 問題に関係する政府文書の機密解除を後押しすることを提言する。この行動は情報公開法 (Freedom of Information Act; FOIA)を通じてすでに始まっている；
4. 我々はまた大統領に対し、公開のプロセスが進行するのに伴い、UFO/ET 問題を制御していると疑われるグループの構成員と職員に対して恩赦を与える大統領令を出すことを提言する。ただし、そのグループからの協力と不干渉が条件である；
5. 我々は大統領に対し、この問題について国民に向けたテレビ演説を行ない、政府と民主主義原理への国民の忠誠を回復するための行動について語りかけることを提言する；
6. 最後に、我々は大統領に対し、大統領令により我々のエネルギー問題を解決できる秘密の技術を発展させる新しい科学研究組織を創立し、これらの技術を我々の主流学術究機関に統合することに着手するよう提言する。

これらの大統領令は、憲法に基づく指揮系統を外れて行動しているように思われるある種の“秘密プロジェクト”活動を終わらせるために、大統領権限を最大限に行使するものになるだろう。地球外技術(および他の諸問題)のある側面に対してはこの大統領令による完全な接近ができないかもしれないが、決定的な証人による証言の公開が可能になるだろう。これにより、大統領とその行政府、議会、報道機関、納税者たちを蚊帳の外に置こうとする闇のグループによる活動を無力化するプロセスが始まるだろう。

## 4.7 恩赦の保証と安全の確保

### 4.7.1 なぜ恩赦か

公開への主要な障害の一つは、過去半世紀の間に行なわれてきた欺瞞の深さと範囲を政府と国民が知ったときに、その懲罰を隠蔽に関わっている人々が恐れているということである。我々国

民は彼らが行なったことを見逃すべきではないが、彼らを罰すべきでもない。我々国民は許す覚悟を持たなければならない。現在または過去のいずれであれ、秘密に関与した人々を厳しく処罰する要求から得られるものは何もない。たとえば3.6節と3.8節で証言を提供した証人たちのように、この秘密を終わらせるための行動を起こした人々も一部にはいる。しかし他の多くはその当時、正しいことをしていると感じていたかもしれない。それはしばしば今日に至るまで続く。我々の世界に宇宙ウォーターゲートは不要だ。我々は全員でそれを放棄しなければならない。我々は喜んで今と未来に目を向け、過去を許さなければならない。我々の文化が誰かを非難したり責任をとらせたりすることを欲しても、我々は真実を隠している人々に完全な恩赦を与える必要がある。この取り組みには、最近南アフリカの人々によって示されたように、国際的な先例がある。米国にも同じ先例がある。例を挙げると、クリントン政権の初期に、エネルギー省と前の原子力エネルギー委員会内で行なわれた過去の行き過ぎた行為と狂気の実験について、全面的な公開があった。我々は、孤児院の子供たちのオートミールにプルトニウムが混入されたこと、‘何が起きるか’を見るために人口集中地域に故意に放射能がまき散らされたこと、等々を知った。この真実は明らかになったが、世界は終わりにならなかった。誰も投獄される必要はなかった。政府は崩壊しなかったし、天は落ちてこなかった。前進しようではないか、幾らかの本当の同情と寛容とを持って。そして、この世紀を新しく始めようではないか。

大統領に対する行動提言の節で言及されているように、我々の大統領はこの恩赦の問題に率先して取り組まなければならない。我々の理解では、米国民は前進する準備ができています。そして格言に曰く、人々が先導すれば指導者たちはついてくる。我々の未来が奪われているときに、それを無視することはあまりにも危険な賭けである。この事態を変革し、開放と信頼の時代を創造し、全世界と惑星間の平和の基礎を打ち立てるために、勇気、展望、そして忍耐が必要である。もし我々の指導者たちが今この勇気と展望を欠いているなら、我々がそれを彼らに示さなければならない。

#### 4.7.2 UFO／地球外知性体の主題に関係した国家機密保全誓約の合法性の評価(1996)

著作権 スティーブン・M・グリア, 医師 - 1996年10月21日

UFOと地球外知性体(ETI)を扱う秘密プロジェクトに対する軍、情報機関、および政府関連の直接証人たちが、公開プロジェクトの努力により多数確認されてきた。我々は過去3年間にそのような数十人の潜在的証人の居場所を探し出したが、それはこの主題について世界的規模の決定的な公開を実現するための適切な証拠を集めるという、包括的戦略の一部だった。これらの重要な政府の証人たちが語る証言内容は、UFOの現実性と地球のすぐ近くに存在する地球外知性体についての信頼に足る、否定できない証拠になるだろう。

この証言が公の場に現れるときに常に立ちはだかる障害の一つは、これらの証人たちに課されている国家機密保全誓約と呼ばれる問題である。一部の人々はこれらの国家機密保全誓約と制限事項から‘解放’されない限り、自由に話すことはできないと感じている。それゆえに、我々はこれまで議会とホワイトハウスに対してこれらの制限事項を解除する行動を起こさせるための働きかけをしてきた。

1995年の夏に、こうした多数の証人たちが証人会議に集まり、クリントン大統領に対してこれらの

制限事項を解除するための行動を起こすよう請願する手紙に署名した。この手紙は大統領特別補佐官の一人により受理承認されたが、我々はこれに応える米国行政府の行動を今なお待っている（我々は 2001 年時点でなお待っていることに留意されたい）。

以上の状況を踏まえ、このような国家機密保全誓約と制限事項が、それ自体法的に有効か否かを考察することは重要である。

我々は、通常の政府プロジェクトを外れてこの主題を扱う活動が今存在し、またこれまで数十年間存在し続けてきたとする、説得力のある証言を持っている。公開プロジェクトのチームのメンバーたちは政権、議会、統合参謀本部、中央情報局の高官たち、関連する政府諸機関の工作人员たちと会合を持ってきた。これらの議論の中から浮かび上がったのは、一般に考えられる政府の通常経路を外れて機能している、UFO を扱うある活動の実態だった。驚くべきことに、行政府、議会、軍の高官たちの大部分は、この途方もない問題について完全に蚊帳の外に置かれていることを我々は知ったのである。

この事実から、では誰が蚊帳の内にいるのか？いかなる承認のもとでこのような活動が行なわれているのか？という肅然たる疑問が次に持ち上がる。我々の評価によれば、これらの活動の大部分は、立憲的に裁可されたいかなる承認事項にも該当しない。だから必然的にこれは違法である。

行政府と議会による監督と承認の欠如ということから離れても、これらの活動は折に触れ欺瞞行為に関与し、関係諸機関による憲法上合法的な審問と民主的プロセスを妨害してきた。このように振る舞ういかなる活動も、憲法と調和するプロジェクトに本来備わっているべき合法性および保護からそれ自身で一方向的に離脱する。

状況がそうであれば（我々はそうでないことを証明する人には是非 - いや、心底から - 会いたいと思う）軍、情報機関、政府の請負業者の職員たちに課されているいわゆる“国家機密保全誓約”と他の“制限事項”は、無効であり空虚だ。つまり、それらの制限が課された活動そのものが違法なのであるから、それらの制限はいかなる合法性も持たないと思われる。立憲民主主義においては、このような活動が憲法上合法であることが法的な基本条件である。そしてもしそれらが合法でないなら、それらに由来するすべてのことは - このような“誓約”を含めて - 違法であり、ゆえにまた拘束力を持たない。もしこれらの活動が合法的だとすると、我々が会って話をした議会、行政府、軍の高官の誰もがそれについて知らないというのはどういうことなのか。これらのプロジェクトを承認する現在も有効な大統領令または議会の指示が一つでもあれば、そしてそれは単独で検証可能であるが、我々の見方は違うものになるだろう。

秘密の接触者たちが我々に語ったのは、実に次のことだった。このような証人たちは誰でも適切な時と場所で話すことができるし、話すべきである。なぜなら、どんな合法的組織も - またはどんな組織も合法的には - それについて何をすることもできない。我々はそれに同意する。

何よりも、そのような証人たちが一致協力し、考え得る最高、最良、かつ最も信頼できる場所で、この問題の真実に関して声を揃えて発言するのは合法的で、高潔で、愛国的な義務である。もしこのような証人が一人か二人しか名乗り出なかった場合、真実は弱く、その危険性は受け入れ難い

だろう。そのとおりだ。しかし、もし 10 人、20 人、そしてさらに多くのこのような証人たちが一致協力し、団結し、この主題についての自らの情報と経験を共有するなら、そのとき決定的な真実が生まれ、世界と彼らの国家に対する偉大な奉仕が達成されるだろう。

この問題を合法的な政府の経路と人々による討議の場に戻すことは、冷戦後の時代にあって実現されていない重要課題の一つである。冷戦の終結から 5 年以上が経過した。もはやこの種の途方もない秘密と隠された行動計画は(かつては正当化されたかもしれないが)正当化され得ない。国家と世界の安全保障は、この問題ができるだけ早く国際社会に戻っていくことを求めている。

我々は、展望と勇気と熱意を持った人々が、この課題を実現するために我々と合流することを提言する。いわゆる‘機密保全誓約’に対する法律違反どころか、このような証人たちによる公の場での証言は、きわめて高潔で合法的な行為である。さらに言えば、このような計画に元々ある違憲性を考えるとき、この秘密性の継続そのものが違法で背徳行為だと言うのは正しくないのか？ 信頼できる証人たちが団結し、統一された戦略により彼らの証言を提供するなら、この主題は合法的な監督と統制のもとに戻っていく。またそれにより、米国と世界の人々が公然とこの問題について討議することが可能になる。それは 50 年前に起きていたはずだ。

## 5.0 論点 - 論説

### 序文

以下の“論説”は、UFO/ETI(未確認飛行物体／地球外知性体)問題についての我々の理解の現状を要約し、政府や統合参謀本部に向けた説明資料を準備するために、グリア博士により過去8年間に書かれた。それらは話題ごとに三つの部分に大別される:

1. 背景と歴史;
2. 公開の必要性;
3. 公開の意味。

それらはどういう順番で読んでも構わないが、UFO/ET 問題全体の深遠さと複雑さを把握するためには、上に挙げた順番で読むことを勧める。賢明な読者なら、幾つかの論説において一部重複した部分があることに気付くだろう。これは数年間にわたり様々な読者に向けて、それぞれが独立した資料として書かれたことからきている。

多くの論説の中に我々の公開への取り組みが述べられている。これは公開プロジェクトがUFO/ET 問題の全体像に世界の指導者たちの注意を向けさせるために行なった、1990年代中頃の取り組みを指している。我々のプロジェクトは、1997年4月に議会に対する大がかりな非公開説明会を持った。これは議会に対して、この主題の現実性に報道機関、政府、学界、および国民の注意を向けさせるために目撃証人を入れた議会公聴会を開くことを促すものだった。公聴会の開催を呼び掛ける勇敢な議員はそのとき一人もいなかった。

頁数の制約のためにこの公開プロジェクト資料には含まれていないが、この主題についてグリア博士により書かれた論説は他にもある。その幾つかは公開プロジェクトのウェブサイト [www.DisclosureProject.org](http://www.DisclosureProject.org) またはグリア博士の著書<sup>37)</sup>の中に見出される。

-----  
37) Greer, Steven M. Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications, Crossing Point, Inc. Publications, Afton, VA.1999. Available at: [www.DrGreer.com](http://www.DrGreer.com).  
-----

## 5.1 公開の必要性和秘密主義の危険性

### 5.1.1 作戦即応性と未確認飛行物体／地球外知性体(UFO/ETI)問題: なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか

スティーブン・M・グリア, 医師, 1998年8月22日

#### 要旨:

軍と国家安全保障の主要な指導者たちは、UFO/ET の主題についてこれまで適切に知らされてこなかった。その理由は、この主題が USAPS (Unacknowledged Special Access Projects; 認められざる特殊接近プロジェクト)の管理下に置かれているということである。この情報の欠如が国家安全

保障上の重大な危機をもたらしている。この主題についての綿密な説明と議論が欠如しているゆえに、情報を持たない、あるいは誤情報を与えられた指導者たちによる不適切で危険な行動が著しく増加している。こうして作戦即応性の重要な分野は、次に掲げるような事柄について危険なまでに情報を持たない、あるいは誤情報を与えられた指導者たちにより、“危険な状態”に置かれている。

- ◆ 偽の I&W (兆候察知と警報発出) 事態の中での ARV (複製された異星人の輸送機) の使用;
- ◆ 超光速性能を持つ地球外輸送機の不意の出現と消失;
- ◆ 宇宙に配備された軍事施設等に対する地球外知性体の予期せぬ関心。

とりわけ統合参謀本部, 国家安全保障会議, 国家軍事指揮センターの幹部当直士官たち, 議会の重要な指導者たち, 大統領, 国防長官, 中央情報局長官を含む軍と国家安全保障の高官たちは, 明らかに上記の諸問題について知る必要性を持つ人々である。

#### 背景と導入:

1990 年以来, 米国に拠点を持つ非営利団体である公開プロジェクト(ディスクロージャー・プロジェクト)は, UFO と地球外知性体(ETI)の主題について独自の調査を行なってきた。1991 年に最初の包括的評価が完了した。そのときから公開プロジェクトは, 世界中での現地調査を通じ, また科学的証拠とこの主題について直接の知識を持つ情報源の確認を通じて, この主題を研究してきた。我々の情報源とそれに続く評価には, 以下のものが含まれる:

- ◆ 世界中に展開する現地調査チームによる UFO/地球外物体の直接の現地観測;
- ◆ 数千の事例報告を含む, 過去に遡った証拠の収集。その中には軍と民間のパイロットによる遭遇, 軍と民間によるこれらの物体のレーダー捕捉, 着陸痕の事例, 写真やビデオテープの証拠, および数千頁に達する政府機密文書が含まれる;
- ◆ 情報機関や他の諸計画にいる数十人の科学者, 軍と民間の証人, および秘密計画に関わっている民間研究者の証人に対する詳細な面接取材。これらの証人たちは UFO/ETI 事件について直接的な知識を持っている。その中には地球外宇宙機の回収と逆行分析, およびこれらの宇宙機を入手したことで大飛躍を遂げた技術の秘密裏の応用が含まれる。

上記の情報源と調査により, 一般的にはこの主題についての, 具体的には国家安全保障上の意味に関しての多くの評価が可能になった。これらはこの文書の添付物として別に提供される。

#### UFO に関係した USAPS の概要:

機密活動の安全を確保するためには, 情報と計画の堅固な区画化がしばしば必要になる。しかし, 行き過ぎた機密化と区画化は国家安全保障と軍事的即応性に脅威を与え, 大統領の指令に

反する。UFO/ETI の主題の場合、極端な秘密性と重層的な特殊区画化が 1940 年代から存在してきた。関連する技術の特殊性と共にこの極端な秘密性がもたらしたものは、国益を損ねる行動が監督されないという潜在的危機、ETI/UFO に関係した出来事に対処する軍事的即応性の深刻な低下、および議会による監督の全面的な欠如である。

現在 UFO 問題を管理する秘密の組織／USAP の性質は、3.4 節の論説、“認められざるもの”に述べられている。手短かに言えば、この異常な USAP は以下の特質を持っている：

- ◆ 活動範囲が全世界的である；
- ◆ 区画化が重層的である；
- ◆ 主として民間の私営化された請負／“他から頼まれた仕事”部門に拠点を持つ；
- ◆ 機密性の高い他の USAPS／秘密プロジェクトを含む、従来の政府、軍、情報関連計画と並行して、しかし一般的にはそれとは別に運営される；
- ◆ 高度先端技術企業、および区画化された政府、情報機関、軍の計画を基盤とする複合組織である。しかし実質的には独立した別組織として機能する；
- ◆ 従来の意味での政府、軍組織、諸機関のどの単独部門にも統制されているようには見えない；
- ◆ 一般的に、このプロジェクトへの接近はプロジェクトが決める資格により行なわれる。その資格は政府内における個人的地位、軍組織内での階級、あるいは従来の意味での（憲法に基づく）指揮系統上の地位にはほとんど関係しない；
- ◆ 回収された地球外装置の進歩した技術を 60 年近く研究した結果、この USAP を制御するグループは、従来の軍事施設と世界の安全保障一般に脅威を与え得る実質的な技術を持つ；
- ◆ これらの活動の資金は、いわゆる“闇の予算”と非政府資金の“粉飾”から引き出される；
- ◆ このプロジェクトの秘密／制御はいかなる犠牲を払おうとも維持されてきた。またそれは常に法律と憲法による監督、抑制と均衡、および米国民の権利を侵害してきた。

現職の中央情報局長官、ホワイトハウス高官、重要な関連委員会の委員を務める議会の主要議員、米国と英国の軍高官、とりわけこれらの人々との議論により明らかになったことは、UFO/ETI に関係するプロジェクトへの接近は、地位や憲法に無関係だということである。五つ星提督にして元英国国防参謀長のヒル-ノートン卿は、同様の仕組みが英国にもあることを確証している。このような高官たちによる指定審問は、たとえそれが米国大統領府から出た場合でも、公開を実現させてこなかった。



## なぜ軍と国家安全保障の指導者たちは知る必要があるのか:

UFO/ETI 問題には幾つかの相互に関連する側面がある。そのことが軍、情報機関、および国家安全保障の重要な指導者たちがこの問題について知っていなければならない、まさにその理由なのである。このような指導者たちが適切な情報を持っていなかったために、彼らの決定と行動がきわめて望ましくない結果をもたらしかねない状況を生じさせてきた。UFO/ETI の USAP の能力は、指揮系統の指導者たちを広範囲に欺き、驚きの事態を招くことを可能にする。それは破滅的な誤解を生むだろう。

さらに、地球外知性体が本当に関与した出来事の背後で、彼らがこの地球や人類全般に対して敵意を示した客観的証拠は何もないが、これらの出来事が悪く誤解される可能性があり - さらに重要なことだが、これまでそうであったと我々は理解している - この誤解はこのような地球外物体に対する是認されない軍事行動を引き起こす。これらの行動は世界の安全保障に対する真の脅威となるが、軍と民間の指導者たちはそれに気付かない。危険な事態へと発展する恐れがある、人類による将来の軍事行動の可能性を排除するために、軍と国家安全保障の指導者たちには、この主題について適切な情報を与えることが不可欠である。

以下に述べることは、想定される事態と行動であり、なぜこのような指導者たちがこの問題について緊急に知る必要があるのかを説明している:

- ◆ UFO/地球外物体の誤認。本物の地球外物体とそれに外見が似た地球製の ARV (Alien Reproduction Vehicle; 複製された異星人の輸送機) の両方が存在するために、混同と誤認は現実的である。このような混同により引き起こされる行動は、予期せぬ結果をもたらす(以下に述べる‘偽の兆候察知と警報発出’も見よ)。
- ◆ 地球外物体による驚き。過去において、軍の司令官たちが地球外物体の突然の出現に驚き、彼らに敵対的な行動をとったことがあった。例を挙げると、1981 年 10 月、そのような物体が東海岸沖に出現し、米国大西洋艦隊総司令部(CINCLANTFLT)に大混乱を起こした。直径 300 フィートと推定される円盤型のこの物体は、レーダーが 1 回走査する間にニューファンドランド州沖からバージニア州ノーフォーク沖まで高速で移動することができた。この白昼の出来事の間、米国大西洋艦隊総司令部はゼブラ警戒態勢(“ストライプス”)に入り、NORAD(北米航空宇宙防衛司令部)から司令長官ハリー・トレイン提督に、この物体の正体を確認し、必要なら強制着陸させよとの命令が与えられた。戦闘機が陸と海から緊急発進し、そのうちの 1 機がこの物体をはっきりと写真に撮れるまで接近したとき、この物体はレーダーが 1 回走査する時間にバージニア州ノーフォーク沖を離れてカナリア諸島近くの大西洋まで移動し、仰角 60 度に向きを変え、地球の大気圏を去った(\*3.8.4 節 メルル・シェーン・マクダウの証言では、事件は 1981 年 5 月に起き、UFO は円筒に近かったと表現されている)。この事態は司令長官を驚かし、総司令部の司令室を混沌に陥れ、その物体を強制着陸させる命令が出された(これは破滅的な結末をもたらしただろう)。しかし、これは軍の最高指導者たちに対する基本的な考え方と想定事態の説明、またこれらの特異な事態のための明確な“行動規則”(ROEs)の開発が行なわれていれば回避できたはずだった。

- ◆ 地球外知性体の行動の誤った解釈。我々の評価によれば、二つ以上の地球外文明が地球の偵察と世界の軍事情勢の監視に関わっている。過去において、大量破壊兵器に関心を持つ地球外知性体は、ある種の戦略拠点で技術的な示威行動をとった。たとえば 1975 年 11 月にノースダコタ州マイノットにある戦略空軍大陸間弾道ミサイルサイトで起きた事件がそれだが、ここで彼らはその戦略ミサイル発射機能を無能力化した。我々が知るところでは、同様の無能力化がソ連でも起きた。このような出来事は当然ながら我々人類に軍事上の懸念を生じさせる。しかし重要なことは、このような出来事を地球人中心の考えではない、より高い観点から解釈することである。この行動を地球外知性体の敵意の現れとする見方もあり得るが、出来事の非暴力的な性質を考えると、これは地球全体を滅ぼすこのような兵器システムに対する、彼らの大きな懸念を伝えるメッセージだった可能性がむしろ高い。この主題について指導者たちが適切に知らされない限り、地球外知性体の行動と意図について、破滅につながる誤った解釈がなされる危険が存在する。
- ◆ 宇宙配備の軍事施設に対する地球外知性体の懸念。我々の理解によれば、宇宙に配備されている人類の軍事施設に対する地球外知性体の見方はきわめて好ましくないものであり、これをはっきりと示す幾つかの出来事が最近起きている。米国宇宙軍、および宇宙に関係するか宇宙配備の施設と連動しそれに依存する他の軍組織は、この懸念に気付く必要がある。地球外知性体の懸念は、進歩した兵器を使った人類の絶えざる戦争と暴力、量破壊兵器の蔓延などと相まった、急速な宇宙の軍事化に基づくものと思われる。また、秘密の USAP 計画が益々頻繁かつ効果的に地球外物体を標的にしていると信ずべき根拠もある(以下を見よ)。
- ◆ 軍と情報機関の計画について証言する複数の信頼できる目撃証人は、地球外宇宙機を追跡し、標的にし、破壊する進歩した兵器システムを用いる秘密の USAP について述べている。このような出来事は 1980 年代以来、頻度と正確さにおいて増強されているように思われる。もしそうであるなら、このことは国家と世界に対する深刻な安全保障上の危機であり、重要な立場にある指導者たちは緊急にこのことを知る必要がある。我々が聞いた証言に照らして、このようなことは起きていない、あるいは正当化できる部分もある、などという簡単な否定は、これらの報告を却下したり傍観したりする十分な根拠にならない。軍と国家安全保障の重要な指導者たちは、この問題を十分に研究し、国家指揮最高部(NCA)、統合参謀本部議長(CJCS)、および重要な議会の指導者たちのために、状況についての完全な評価を発表する必要がある。
- ◆ この主題を扱う秘密計画に関与し、直接の経験から得た知識を持つ軍と民間の複数の目撃証人は、UFO/ETI に関係した USAPS の意図についての報告を確認している。それは逆行分析により獲得した地球外技術を使って、暴力的な性質を持つ ET 事件を捏造するということだ。物質化／非物質化、超光速移動、反重力推進とそれに関連するシステムを可能にする進歩した技術を持つ強力な秘密の USAP は、その存在自体が従来の憲法に沿った軍および国家安全保障の指導と制御に対する直接の脅威である。このような組織は、全面的に法律と憲法による指揮系統の直接的な監視と制御のもとにない限り、従来の政府の指導体制を悪用し、欺き、操作する大きな危険を秘めている。例を挙げれば、情報機関の重要な一人の目撃証人は次のように述べている。我々が敵意を持った地球外知性体に攻撃されているように見せかけるために、ARV(複製された異星人の乗り物)を意図的に用いて偽の兆候察知と警報発出の事態を生じさせ、その中で ARV を従来の軍事施設の攻撃に用いる。もし軍と国家安全保障の指導者たちが

このような人類の隠された行動能力を知らなければ、彼らはそのような事態に欺かれ、本当の地球外物体に対して不当で破滅的な結果をもたらしかねない対抗措置をとる命令を下すだろう。

- ◆ 意識と思考に直接的に干渉する地球外起源の超電磁氣的、非線形通信システムが、秘密の USAPS により逆行分析され、偽の兆候察知と警報発出の事態の中で民間と軍の指導者たちに対して用いられる可能性がある。ある国の最高指導者から直接もたらされた情報では、これがすでに行なわれているという。線形時空間を迂回し、精神と思考に直接干渉するこのような非線形の遠隔計測システムは、被標的者に捏造ではあるがきわめて現実的な体験を誘発する。軍と民間の国家安全保障の指導者たちは、これらのシステムの潜在的危険性について知る必要がある。そうすれば、このようなシステムが彼らに向けられたとしても、その人を惑わす効力は最小限に抑えられるだろう。(言われるところの“異星人による誘拐”経験は、概して秘密の USAPS によるこれらのシステムの悪用の結果である)
- ◆ NASA、民間の天文学者、および他の科学者たちは、地球の軌道を横切る小惑星あるいは彗星が地球に衝突する可能性への懸念を益々強めている。JPL (ジェット推進研究所) とどこかのチームが、このような地球の軌道を横切る物体を我々の太陽系内で数千個も見つけている。過去にあった大衝突は、地球の表面に現在のメキシコ湾、ハドソン湾、その他の地形を造った。大部分の科学者たちは、このような衝突が起きるのが‘もし’ではなく‘いつ’の問題であることに同意する。従来の科学者たちは、核兵器やその他の従来の手段を用いて、このような衝突を回避することを議論してきた。しかし、UFO に関係する USAPS は明らかにそれよりもはるかに進歩した、この問題を解決できる技術を持っている。特にそれが真実であるのは重力改変技術である。それはこのような物体の質量効果を変化させ、それが地球軌道と交差する針路から外れることを可能にするだろう。我々が知るように、このような衝突は人類文明を終わらせる潜在力を持っているがゆえに、軍と国家安全保障の指導者たちはこのような UFO USAP に関係した技術を知り、それに接近する手段を持つべきである。さらに、今述べたような重大で有益な目的のために宇宙空間でこのような技術を利用することは、それが平和目的のためであることを ET たちが認知して初めて可能になる。現在の状況がそうでないことを我々は理解している。

#### 結論:

- ◆ UFO/ETI の主題の現実性とそれに関連する技術の公開は、地球上での生活の多くの局面を確実に変えるだろう。その中には地政学的関係、技術、経済、全体的な社会秩序などが含まれる。この主題について知らない軍と国家安全保障の指導者たちは、このような公開の遠大な意味を適切に予想できず、またそれゆえに準備ができない。公開プロジェクトは他の人々と共に、比較的近い将来にこのような公開を実現させることを積極的に追求しているので、指導者たちはこれらの意味を完全に理解し、このような公開に異議を唱える勢力に整然と対処できなければならない。地球外知性体に関係する出来事が突然、しかも否定のしようがない形で起きたとき、軍と国家安全保障の指導者たちがこれを知っており、事態に適切に対処する準備ができていないことは、さらに重要である。
- ◆ 地球外宇宙機のエネルギーと推進技術は、エネルギーのゼロポイント場を利用しており、核や

内燃機関に依存しないために汚染を発生しない。軍、および国と世界の安全保障の指導者たちが直面する大きな‘予測不能要因’の一つは、来るべき化石燃料の枯渇とそれに伴う地球生態系の崩壊である。中国、インド、および多くの第三世界の急速な工業化により、石油資源の減少はさらに加速し、地球生態系に与える損傷は指数関数的に増加するばかりだ。現在、我々は末期的な技術文明の中にいる - 実に深刻な長期的安全保障問題である。しかし、UFO/ETI 問題に責任を負うべき秘密の USAP は、すでに内燃機関を時代遅れのものとするエネルギーと推進システムを逆行分析 (reverse-engineered) している。我々の推測によれば、この大飛躍は1954年から1957年の間に起きた。ロッキード・スカンクワークスのベン・リッチは、死の間際に公開プロジェクト顧問に対して次のように確証した。“我々はすでに星々の間を旅行する手段を持っている。だがこれらの技術は闇のプロジェクトの中に閉じ込められており、それらを取り出し人々の役に立てるためには、神の業を必要とするだろう...” 長期的国家安全保障計画では、人類の利益と地球保護のために、結局は(望ましくはきわめて近い将来に)これらの技術を公開することが必然的に求められる。国家安全保障と軍の指導者たちが、地球のエネルギーと内燃機関への依存をすべて置き換えてしまうことになる、これらの技術を理解すべきであることは間違いない。さらに指導者たちは、持続可能なエネルギーシステムへの転換が円滑で平和的に行なわれるように、このような技術の公開がもたらす物事を予想すべきである。

これらは UFO/ETI の主題が国家安全保障と軍に関わりを持つ事柄のごく一部である - そのどれもが、指導者たちにこの主題について十分な背景説明を行なうべき正当な理由である。

#### 提言:

我々は、軍と国家安全保障の指導者たちが以下の行動をとることを提言する:

- ◆ 公開プロジェクトの主導のもとに、軍／民間の目撃証人たちからこの主題についての徹底的な背景説明を受ける。
- ◆ 司令長官たち (CINCS) に十分な背景説明を行ない、ETI/UFO との遭遇に対処する特別な行動規則 (ROEs) を開発する。
- ◆ この主題について独自に調査し、この主題に関係する USAP (認められざる特殊接近プロジェクト) 活動に侵入する。
- ◆ この主題に関係する秘密計画に全面的に関与し、このようなプロジェクトが適切に監督され、直接的かつ継続的に憲法に基づく指揮系統下にあることを確実にする。
- ◆ UFO に関係する進歩した技術あるいは兵器システムの USAP による秘密裏の悪用については、いかなる場合もこれを制止する。
- ◆ これらの生命体に対しては平和的で協力的な対処行動をとり、武力を用いた暴力的な行動を回避することに細心の注意を払う。公開プロジェクトは7年間にわたり ETI と平和的な関係を続けている一つの原型プロジェクトを持っている。国と世界の指導者たちが同様の方法を導入す

ることを勧める。

- ◆ 上記の情報に照らし、宇宙空間に兵器設備を展開することを注意深く再考する。また地球外知性体にとって好戦的あるいは敵対的と見なされかねない行動を避ける。

## 5.2 UFO/ETI 問題の国家安全保障に対する意味： 要約

著作権 スティーブン・M・グリア， 医師， 1995 年 8 月 30 日

UFO/ETI の主題の国家安全保障に対する意味という問題は、現在ほとんど認識されていないが、深遠であり広範囲に及ぶ。

これらの意味は、別々にではあるが互いに関連する問題として考察される： つまり ET の活動に内在する問題、およびこの問題が秘密に管理されている現在の状況から生じる問題である。

### 歴史的背景：

初期に国家安全保障上の観点から検討されたのは、地球の近傍にいる、あるいは地球に着陸した地球外宇宙機(ETS)の発覚が国民の間にパニックを引き起こす懸念、および進歩した地球外物質が軍拡競争と冷戦に影響を与えるという技術上の懸念だった。さらには、宗教的信念体系、政治的秩序、および経済体制への影響も懸念された。

重要なことだが、一旦実際の ETS(地球外宇宙機)が 1947 年に回収され、地球外の機械装置が研究され、我々の軍事応用のための逆行分析(back-engineer)が可能になると、当時の当局者たちはこの問題の完全な秘密性を最優先事項と考えた。核の時代の始まりであり、ソ連との冷戦が激化していた状況下では、地球外技術の導入がすでに危険になっていた事態をさらに不安定にすると考えられたのは理解できる。さらに、原子爆弾および水素爆弾に関係した技術の秘密がソ連のスパイにより盗まれた歴史を考えると、地球外技術に関係するいかなる技術上の大飛躍も、ソ連の手に渡るかもしれないと懸念されたことも理解できる。もしこのような出来事により、米国よりも先にソ連が実際の軍事応用を可能にしていたなら、明らかにそれは米国の軍事能力を破滅的に不利にする可能性があった。

1970 年代以来、この問題についてある程度の協力がソ連、米国、その他の国々の間で展開されていると信ずべき根拠がある。また確かに冷戦の終結は、技術の大飛躍とソ連による攻撃の恐怖に対する初期の懸念をほぼ取り除いた。

さらにまた、国民のパニックを懸念するという秘密の心理学的根拠は、今日では通用しない。少なくとも人々の 57 パーセントが UFO が現実であり、地球外に起源を持つことを受け入れている。人類による 30 年から 40 年に及ぶ宇宙開発は、宇宙旅行を実現した他の地球外文明が存在するかもしれないという考えを、人々の間に浸透させた。要するに、秘密の理由とされた以前の懸念は、今日では的外れである。

本質的に、地球外知性体の存在が国家と世界の安全保障に脅威を与えると信ずべき根拠はない。もし敵意や侵略が彼らがこの地球に来ている目的に関係しているとすれば、その敵意を示す出来事が遙か以前に起きていただろう。我々の評価によれば、地球外知性体に敵意はない。しかし戦争行為と宇宙の軍事化に関係する人類の能力をととも懸念している。ICBM(大陸間弾道ミサイル)施設とそれを含む軍事的宇宙開発の無能力化に関係する地球外宇宙機の活動は、大量破壊兵器の出現および宇宙開発と相まった、人類が持つ攻撃性の知られた歴史に対する彼らの懸念に照らせば、理解されるはずである。実に、人類の兵器が地球外宇宙機を標的にし、追跡してきた過去の歴史を考えれば、地球外知性体が驚くべき自制によって対応してきたと我々は信じている。

皮肉なことに、国家安全保障への脅威は、地球外知性体の存在によってではなく、この主題に対する現在の秘密管理から生じている。50年以上も地球外知性体による脅威がない中で、現在の秘密性を地球外知性体による侵略の恐怖に基づいて正当化することはできない。地球外知性体の存在に関係する公開は、もし穏やかに理性的に提示されれば、米国でも他の場所でも、人々のパニックを引き起こすことはないだろう。1995年は1945年ではない。そして世界中の社会はこの情報を肯定的に受け入れる段階にまで成長した。

その一方で、おそらく憲法を外れたこの問題の秘密管理は、国家と世界の安全保障に対する真の脅威であり、憲法で保障された自由と民主主義を蝕んでいる。これを終わらせない限り、この秘密管理は米国の国家安全保障と持続的世界平和への機会を著しく阻害することになる。

我々の評価によれば、この問題に対する現在の秘密管理は、以下の要素を含む。これらは国家安全保障に対する直接的で差し迫った進行中の脅威である：

1. 地球外知性体の存在を否定し続けることは、地球外知性体に関係する出来事が突然に、否定しようもなく、公然と起きたときに、パニックを引き起こす状況を生み出す。なぜなら、国民の恐怖を和らげることができる、先を見越した公開の取り組みが存在しないからである。地球外知性体に関係するこのような出来事は、ここ2年から10年以内、あるいはもっと早く起きる可能性がある。それゆえに、秘密性と否定は国家と世界の安全保障にとり真の脅威である。
2. この問題に対する現在の秘密管理は、独立して活動し、憲法による指揮系統の外にあるように思われる。これらの活動を制御しているグループは偵察、地球外技術の逆行分析、および宇宙で(とりわけ)ETS(extraterrestrial spacecraft; 地球外宇宙機)を標的にする行為を行っており、憲法にも行政府の監督と制御にも応答しない。これは国家安全保障と立憲民主主義および自由に対する真の脅威である。
3. 我々の信頼すべき直接目撃証人によれば、地球外宇宙機が人類の秘密宇宙兵器により標的にされ、これまで少なくとも2度破壊されている。もしそれが本当なら、世界の平和と安全保障に対する危険は現実であり、切迫している。また、これらの秘密活動の継続は、国家と世界の安全保障に実に深刻な危険をもたらす。人類の秘密兵器による地球外宇宙機に対する敵対行為は、国家安全保障への由々しき差し迫った脅威なのである。国連とも、議会とも、米国大統領あるいは国民とも相談せずに活動している比較的小さな秘密組織が、人類の代表とし

て地球と世界平和を危険にする行為に関与している。それを統制しない限り、これらの行為はやがて惑星間紛争を引き起こし、世界一般、とりわけ米国に災厄をもたらすだろう。この秘密管理を終わらせ、この問題の制御を憲法が定める権限および社会共有の領域に返さなければならない。

4. 地球外技術の逆行分析に関係する技術の進歩が、ある小さな秘密活動の手に集中している状況は、国家安全保障、世界の安全保障、および地球の未来にとり脅威である。45 年以上も秘密の研究開発の対象だった地球外技術は、もし平和的な目的に賢明に利用されるなら、人類に多大な利益をもたらす潜在力を秘めている。しかし、それが国民にも法律と憲法に基づいた指揮系統にも応答しない小さな秘密活動に集中したときには、とてつもなく危険である。このことが米国と世界の安全保障にもたらす脅威は重大であり、この状態が長く続くほど、進歩した技術の支配権が相対的少数者の手に集中する。このような強力な技術の秘密裏の支配は、本質的に自由と民主主義、そして我が国民と世界に対する脅威である。憲法を外れた秘密行動計画のためにこれを使うことは、我々の国家に対する深刻な脅威であり、抑制され転換されなければならない。
5. 重要なことだが、秘密と秘密工作員そのものが国家安全保障に対する真の脅威となる。立憲民主主義のもとでの国家安全保障は、自由と民主政治に合法的に結びついているのみ可能だからである。自由と民主主義、抑制のない秘密と秘密権力、生来これらは共存できないがゆえに、きわめて稀な正当化できる状況でしか極端な秘密と秘密活動は存在し得ない。地球外文明の発見が持つ深遠な意味が、国民への公開と協議に無関係な秘密活動だけの領域にあることは許されない。そのような行為は米国憲法、民主主義、および自由を蝕むものであり、国家安全保障に対する深刻な脅威となる。
6. 最後に、この問題の排他的な秘密管理は、世界が平和的かつ互恵的に地球外知性体を受け入れる機会を失うという結果をもたらし、それが今も続いている。つまり、世界の人々、国連、他の多くの国際的な機関や国内機関が、この問題に理性的に対処する機会を奪われているということである。その結果、国家と世界の安全保障は、以下の分野でその機会を失うという負の影響を受けている：
  - ◆ 地球環境は、次の 100 年間に大規模崩壊が起きる深刻な危険に曝されているが、もし地球外技術が平和的に展開されたなら、大きく改善されるだろう。汚染を発生しない、いわゆるゼロポイント・エネルギーまたはフリーエネルギーのシステムが、地球上に持続可能な技術文明が存続することを可能にし、地球を環境的にも経済的にも転換させるだろう。地球外文明との平和的かつ互恵的な関係の確立により、やがて我々はこのような技術を理解し利用することが可能になるだろう。
  - ◆ 我々は宇宙で孤独ではないと全世界が認識することにより、世界の一体化と平和が増進されるだろう。この事実を認めることにより、我々は地球という共通の故郷の上で生きる、本当に一つの惑星民族であるという意識が高まるだろう。その結果、現在地球を苦しめている紛争の多くが新しい視点から考察されることになるだろう。これは地球外知性体の存在を神聖化することも悪魔化することもなく、それを公平で、科学的で、中立的な視野に置くことにより達成される。結局、

世界平和と地政学的現状の著しい改善が、我々は孤独ではないという事実の公開により実現されるだろう。一つの国際的な構造基盤、および地球外文明との関係に平和的に対処できる諸機関が必然的に発生し、その結果として、世界の一体化と協調が強化されるだろう。

- ◆ 世界の文化、思想、科学、および他の多様な分野が別の世界との平和的な関係の発展により恩恵を受けるだろう。このプロセスは、数世紀ではないにせよ、数十年を要するだろう。しかし時間はかかるだろうとも、結局それは地球の人々が地球全体のみならず、他惑星の文明とも一体化することになる道である。

要約すると、国家安全保障にとって急を要することは、大統領と議会が UFO/ETI の主題の秘密と秘密管理を終わらせるための措置を講じることである。この問題を明るみに出し、国民への公開と制御に失敗すれば、世界の歴史における民主主義と政府の最も憂慮すべき失敗ということになる。これを行なうことは、民主主義に対する我々の忠誠、人々に対する我々の忠誠が試されることに他ならない。21 世紀が近づいている。我々は冷戦の遺物である癌のような行き過ぎた秘密を終わりにし、民主主義が再確認され永続する世界平和への機会が与えられる、新しい時代を展開しなければならない。

### 5.3 新エネルギー革命の国家安全保障と環境に対する意味： 米国上院環境・公共事業委員会に向けた概要説明

スティーブン・M・グリア、医師、 2000 年 10 月

国家安全保障の根本は、今日の世界が直面する切迫した環境危機と密接に結びついている：人類が進歩した技術文明の中で存続できるかどうかという問題である。

化石燃料と内燃機関は、環境と経済の両面で持続可能ではない - そして、この両面に対処する代替物はすでに存在している。問題は、我々が新しい脱化石燃料経済に移行するかどうかではなく、いつ、どのようにして、ということである。この問題に関連する環境、経済、地政学、国家安全保障、および軍事の問題は深遠であり、相互に密接不可分である。

このような新しいエネルギー技術の公開は、人間社会のあらゆる局面に広範囲の影響を及ぼすだろう。このような事態に備えるときがすでに来ている。なぜなら、たとえそのような技術が今日発表されたとしても、それらの広範囲に及ぶ応用が効果を上げるためには、少なくとも 10 年から 20 年かかると思われるからである。つまり、石油の需要が供給を遙かに超え、環境破壊が急激かつ破滅的に進み、世界経済の混沌が始まるまでにどれくらいの時間が我々にあるかということなのである。

我々は化石燃料の使用に代わる技術が存在すること、それほど遠くない将来に起きる深刻な世界経済、地政学、および環境の危機を回避するために、直ちにそれを開発し応用する必要があることを知っている。

要約すると、これらの技術は以下の分類に大別される：



- ◆ 量子真空／ゼロポイント・エネルギー利用システムとそれに関連する電磁気理論および応用；
- ◆ 電気重力および磁気重力のエネルギーと推進；
- ◆ 常温核反応効果；
- ◆ 電気化学とその内燃システムへの応用。これは汚染排出量をほぼゼロにし、きわめて高い効率を実現する。

このような技術を使った幾つかの実用的応用技術が、過去数十年間に開発されてきた。しかしこれらの大飛躍は、その斬新さゆえに無視されてきた - または国家安全保障、軍事の利害関係者、および特別利益団体のために秘密にされ、抑圧されてきた。

明確にしておこう：問題は、このようなシステムが存在し、化石燃料の実現可能な代替物になり得るかではない。問題は、世界中にこのようなエネルギーシステムの転換が起きるのを許容する勇気が我々にあるかということである。

このような技術 - 特に石油や石炭などの外部燃料源を必要としない技術 - は、人類に疑う余地のない有益な効果をもたらすだろう。これらの技術は、高価な燃料の代わりに遍在する量子空間エネルギーを利用するため、世界経済と社会秩序に革命をもたらされるだろう。その影響は以下のとおりである：

- ◆ エネルギー発生に関係するすべての空気汚染源が除去されるだろう。その中には発電所、自動車、トラック、航空機、および製造業が含まれる；
- ◆ すべての製造過程を排出量ゼロに近づけることが可能になるだろう。なぜなら、それに必要なエネルギーを得るための燃料代が不要になるからである。これらの技術の応用により、大煙突からの排出の除去、排水路からの固形廃棄物の除去が可能になるだろう。現在その実行を妨げている要因は、それに莫大なエネルギー費用がかかること、またそのエネルギー消費量 - 化石燃料が基本である - が環境への逆効果となるときがすぐにやってくることである；
- ◆ 環境への影響をほぼゼロにし、なおかつ地球上に高度な技術文明を維持することが現実に達成されるだろう。これは人類文明の長期的持続可能性を保証する；
- ◆ 発電、ガス、石油、石炭、原子力エネルギーのために現在使われている数兆ドルは不要になり、それは社会全体および個人により、さらに創造的で環境に無害な活動に使われるだろう；
- ◆ 地球上の未開発地域は貧困を脱出し、1世代のうちに先進的技術世界に参入するだろう - それでも関連する構造基盤経費、および従来のようなエネルギー発生と推進による環境への影響は生じない。これらの新システムは空間の量子エネルギー状態からエネルギーを発生するため、集中化した発電と送電に要する数兆ドルの構造基盤投資は不要になるだろう。遠隔地の村や町は、製造、電化、浄水などのために燃料を買ったり、大規模な送電線と電力網を建設し

たりすることなしに、エネルギーを発生させる能力を持つようになるだろう；

- ◆ 資源と物質のほぼ完全な再利用が可能になるだろう。なぜなら、そのためのエネルギー費用 - 現在の主な阻害要因である - は取るに足りない程度にまで減少することになるからである；
- ◆ 富める国と貧しい国の間の大きな格差は急速に消失するだろう - それにより、多くの社会的、政治的、国際的な不安定要因の根元にあるゼロサムゲームの考え方も、その多くが同じく消失するだろう。有り余る低価格エネルギーを持つ世界にあっては、貧困、搾取、憤慨、暴力の循環を生じさせる苦悩が、社会の動力学から除去されるだろう。思想、文化、宗教の違いは存続するだろうが、不当な経済格差と闘争はかなり急速に方程式から除去されるだろう；
- ◆ 電気重力／反重力のエネルギーと推進システムが現在の地上輸送システムに取って代わるのに伴い、地上の道路 - したがってまた大部分の道路建造物 - は不要になるだろう；
- ◆ 地球規模の貿易、発展、および進歩した技術を使ったエネルギーと推進の装置が世界中で必要とされるのに伴い、世界経済は劇的に拡大し、米国やヨーロッパのような進んだ経済が計り知れない利益をもたらすだろう。このような世界エネルギー革命は、世界経済の拡大を引き起こし、現在のようなコンピューターとインターネットによる経済を些末なものにしてしまうだろう。これはまさしくすべての船を持ち上げるうねりになるだろう；
- ◆ 長い間に社会は無尽蔵の豊かさを実感する段階(psychology of abundance)へと発展し、それは人類全体に及ぶ利益、平和的な文明、破壊と暴力の活動ではない創造性の追求に益々重点を置く社会となって現れるだろう。

これらのすべてが幻想だと思われたいために、このような技術の進歩は可能であるばかりか、それらは‘すでに存在している’ということを目に銘じてほしい。足りないのはそれを賢明に応用しようとする全体の意志、創造力、勇気である。そして問題はそこにある。

私は救急外傷医として、何事も善悪両方に使えることを知っている。ナイフはパンにバターを塗ることに使える - また喉を切り裂くことにも使える。どんな技術であれ、利益を生むことにも害を及ぼすことにも応用することができる。

その後者の応用が、このような技術に対する国家安全保障と軍事の深刻な懸念の一部を説明する。何十年もの間、経済と軍事の観点からそれを我々の安全保障に対する脅威と見なすある種の勢力により、これらの進歩したエネルギーと推進の技術が獲得され、抑圧され、‘機密’にされてきた。短期的には、こうした懸念には十分な根拠があった：数兆ドルの経済である石油、ガス、石炭、内燃機関、および関連する輸送部門に事実上終止符を打つ技術を流出させることにより、なぜ世界経済という船を暗礁に乗り上げさせるのか？ また、これほどの技術の飛躍が確実に兵器へと応用される不安定で危険な世界へ、なぜそれを解き放つのか？ これを考えると、現状維持が適切のようだ。

しかし、それは短期的にということにすぎない。実際に、このような国家安全保障と軍事の政策 -

産業界と国家の中にいる巨大な特別利益団体により牛耳られている - は、世界の大部分を貧困化し、富める国と貧しい国の間のゼロサムゲームという考え方をさらに強めることで、全世界の地政学的緊張を激化させ、我々に世界のエネルギー危機と差し迫った環境危機をもたらした。そして今、我々にはその状況を解消するためのわずかな時間しか残されていない。このような思考法は過去に追いやらなければならない。

それというのも、あらゆる国が限られた資源を求めて闘争し、エネルギー不足と地球規模の混沌から我々の文明全体が崩壊するという、この不安以上に大きな国家安全保障上の脅威があるだろうか？ 現在の産業構造基盤を化石燃料依存から転換するのに要する長い先行期間を考えると、今我々は国家安全保障上の緊急事態に直面している。しかし、そのことを語る者はほとんどいない。これは危険なことだ。

また、米国などの国々では深刻な憲法上の危機が生じている。そこでは国民を代表しない組織、区画化された軍と企業の極秘プロジェクトが、この問題とそれに関連する諸問題について、国家および世界の政策を決定し始めた - すべてが国民による議論の外側にあり、大部分は議会の同意も大統領の同意も得ていない。

実にこの危機は、米国などの国々で民主主義を蝕んでいる。私はこの問題とそれに関連する諸問題について、米国およびヨーロッパの政治、軍、情報機関の高官たちに直接背景説明を行なうという、気の進まない仕事をしてきた。これらの高官たちは、ある種のプロジェクト内部で区画化された情報に接近することを拒絶されてきた。はっきり言えば、それは認められざる領域（いわゆる‘闇の’プロジェクト）である。これらの高官たちには、下院議員および上院議員、クリントン政権の最初の中央情報局長官、国防情報局長官、統合参謀幹部、その他が含まれる。通常、このようなプロジェクトと技術について高官たちが持っている情報は、皆無かそれに近い - 彼らがそのことについて質問すると、何も説明されないか、‘知る必要性 (need-to-know)’を持っていないからと拒絶される。

これはさらに別の問題を提起する：これらの技術は永久に抑圧されてはいないだろう。たとえば、我々のグループは、きわめて近い将来にこれらの技術を公開することを計画しているが、その口を封じることはできないだろう。このような公開が行なわれるとき、米国政府は準備ができていだろうか？ 公開により米国政府と諸国の政府は、真実を知らされると共に、我々の社会を化石燃料から新しいエネルギーと推進システムへと転換するための計画を持つことを余儀なくされる。

実に大きな危険は、我々の指導者たちがこうした科学的な大躍進に無知なこと - またそのような公開に対処する術を知らないことだ。世界の先進諸国は、このようなエネルギーと推進技術の進歩が平和的にのみ利用されることを確実にするため、システムの適切な管理に備える必要がある。経済と産業の利害関係者たちは、負の影響を受けることになる経済の諸局面（商品、石油、ガス、石炭、公共施設、エンジン製造、その他）が、急激な逆転の衝撃から保護されるように、また新しいエネルギー構造基盤への投資と支援により経済的に‘防御’されるように、備えなければならない。

将来に向けた創造的な物の見方 - このような技術に対する恐れや抑圧ではなく - が求められている。それも今すぐに必要である。もし我々がさらに 10 年から 20 年待つとすれば、必要な変革

が間に合わず、世界的な石油不足、法外な価格、資源を求める地政学的争いにより、世界経済と政治機構は崩壊するだろう。

あらゆる体制は恒常性に向かう傾向がある。現状維持は心地よく安心だ。変化は恐ろしい。しかしこの場合、国家安全保障にとり最も危険な針路は無為である。我々はエネルギー不足、急騰する価格、そして経済の崩壊に関係する来るべき動乱に備えなければならない。最良の備えは石油と化石燃料への依存を転換することであろう。我々にはその代替物がある。しかし、これらの新しいエネルギーシステムの公開には、それ自体が内包する利益、危険、および困難が同時に伴う。米政府と議会は、この大きな難問に賢明に対処する準備をしておかなければならない。

議会に対する提言：

◆ これらの新しい技術を、一般の民間人が現在持っている情報源と、軍、情報機関、企業の契約分野にある区画化プロジェクトとの両面から、徹底的に調査する；

現在持っている情報源と、軍、情報機関、企業の契約分野にある区画化プロジェクトとの両面から

◆ この問題に関わる区画化プロジェクトが保持する情報の秘密解除と公開を承認する；

◆ このような技術の押収もしくは抑圧を明確に禁止する；

◆ 民間の科学者と技術者による基礎研究と開発のために十分な予算を承認し、この研究を国民と主流派科学者が利用できるようにする；

◆ このような技術の公開に対処し、脱化石燃料経済への転換を促す諸計画を策定する。これらの計画には、とりわけ以下のことが含まれるべきである：軍事と国家安全保障の計画；戦略的な経済計画と準備；民間部門への支援と連携；地政学的計画、特にその経済を石油の輸出と価格に大きく依存している OPEC (石油輸出国機構) 諸国と地域に配慮した計画；国際的な連携と安全保障。

私個人としては、これらの新しいエネルギー源の利用促進に役立つなら、議会に対してどんな協力でもする用意ができています。私はこの問題とそれに関連する機密事項に 10 年以上関わってきた立場から、議会に召喚されてこのような技術について証言することのできる多数の人々と共に、政府の秘密作戦内部にあってこれらの問題にすでに取り組んでいる‘認められざる特殊接近プロジェクト (USAPS)’ について情報を持つ人々を推薦することができます。

もし我々がこれらの難問に勇気と英知を持って立ち向かうなら、我々は子供たちのために、貧困にも環境破壊にも無縁な、新しい持続可能な世界を確実に手にすることができる。我々はこの難課題に必ずや立ち向かえるだろう。なぜなら、そうする以外にないからだ。

## 6.0 背景情報資料

### 6.1 入手できる最高の証拠への手引き

以下の節では、よく知られた一連の目撃と事件を述べる。

UFO 問題に関する最近のある本の中で、報告者であり著者であるジム・マース<sup>38)</sup>は、その序文 (p. x) のはじめにこう述べている:

“UFO が実在するかどうかの論争は過去のものになった。UFO は実在する。過去 50 年間にわたり収集されてきた膨大な記録文書と報告に誠実に対処できない視野を持つ人々だけが、今なお、地球の空に急増しているのは人間の想像力の所産以外に何もない、という考えを固守している”

では、どこにその“膨大な記録文書”があり、なぜそれがもっと広く知られていないのか？ それはすべて我々の周りにあり、人々はそれを見さえすればよい。現在は一般の人々が入手できる UFO 情報の一つの最盛期にある。たとえば、2001 年 2 月の時点で、アマゾン書籍販売のウェブサイト上では UFO という検索条件のもとに 581 冊が列挙された。さらに研究向きの資料として、幾つかの大きな編集物が利用可能である。

一般の人々が自由に利用できる、UFO 目撃に関する最大のコンピューター・データベースの一つが UFOCAT2000 (\*2001 年時点) である。そこには 109,000 例を超える報告および関連情報が収録されている。UFOCAT は、そのウェブサイト(<http://www.cufos.org/UFOCAT.html>) で述べられているように、30 年以上に及ぶ努力の結果であり、それは“コンドン委員会”の名前でも知られる空軍が発起したコロラド UFO プロジェクトの期間中に始まった。UFOCAT はデービット・S・サンダース博士により創始された。当時彼はコロラド UFO 研究の共同研究責任者であり、コロラド大学の心理学教授だった。

目撃情報のもう一つの主要なコンピューター情報源は、“\*U\*データベース”という名前の編集物である。それには 2001 年 2 月の時点で、17,750 例の慎重に選ばれた UFO 事件が含まれている。それらは 365 以上の本、新聞、定期刊行物、および個人の情報源から編集されたものである。このデータベースに関する情報は、ラリー・ハッチのウェブサイト(<http://www.jps.net/larryhat>)にある。

ここ数年間に、退役空軍大尉ジョージ・ファイラー<sup>39)</sup>は、米国および世界中から入手した UFO 目撃報告の多くに解説を付けて編集し、(電子メールにより)公表した。これらはほぼ毎週送信されている。彼が 1997 年から 2000 年までの 4 年間に公表した報告は [Majorstar@aol.com](mailto:Majorstar@aol.com) から CD で入手することができる。

発生とほぼ同時の最新目撃情報に関しては、ピーター・ダベンポートにより運営される全米 UFO 報告センター (National UFO Reporting Center; NUFORC) (<http://www.msatech.com/nuforc>) が、人々から寄せられる報告に関する価値ある情報、および過去数年間に及ぶ報告の検索可能なデータベースを提供している。人々が実際に見ているものを考えたときに、これらの報告は何を

意味しているか？ ピーター・ダベンポートが最近の電子メールで我々に知らせたところでは、NUFORC が受ける報告は毎日 5, 6 例から数十例に及び、一日平均では 10 ないし 20 例である。彼は言う：“おそらく 100 例のうちのほんの 1 例がどこかで記録されていると仮定すれば、この統計は毎日どれくらいの UFO 目撃が起きているかについて一つの洞察を与える。私が見るところ、報告される目撃例の割合は 1,000 例のうちの 1 例程度にまで下がるのではないか” このことは、一日当たりたぶん 15x100 すなわち 1,500 例の UFO 目撃が起きており、1 年では数十万例になることを示唆している。では、なぜこれがもっと広く知られていないかということだが、それは複雑な質問であり、この総合的な資料が明らかにしたいことの一部である。

数十人を超える目撃証人によりここに提示された証拠は、その多くの証人が専門的な訓練を受けた人々（たとえば民間パイロット、軍関係者、警察官）であるというだけでなく、その多くの事例において複数の目撃証人がいたという点で、特別な説得力を持つ。さらに、出来事の多くが最近公表された同じ出来事を述べている政府文書によって裏付けられていることを考えると、このような専門家による報告を退けることはきわめて困難である。これらの事件のほとんどについて政府文書がある。それらの文書は参照され、この資料の巻末に付録 I として含まれている。

-----  
38) Marrs, Jim. 1997. *Alien Agenda*, HarperCollins Publishers, NY, 434pp.

39) See George Filer witness testimony in section 3.8.4.  
-----

## 6.2 1940 年代より前の UFO 目撃

UFO 目撃の現代史は、ワシントン州で 1947 年 6 月 25 日に起きたパイロットのケネス・アーノルドによる 9 個の皿型物体の目撃を巡る報道に始まったと多くの人々により考えられているが、今日なら UFO と我々が呼ぶであろう物体は、歴史の全期間を通じて記述されている。聖書と古代バラモン教の聖典に述べられている幾つかの出来事は、研究者たちにより UFO を描写したものと考えられている。リーダーズダイジェスト社の本 *Mystery of the Unexplained* には、古代エジプトとローマの文書、そして中世のヨーロッパと日本の文書に見られる目撃の記述が紹介されている。ジム・マースもまた彼の本<sup>40)</sup>の中で、これらの古い目撃の幾つかを述べている。これらの報告の多くは、UFO 作家たちにより繰り返し論評されてきたので、ここでは取り上げない。第二次大戦から 1980 年代中頃までの UFO 問題についてのすぐれた歴史的評論については、ティモシー・グッドの *Above Top Secret* を読みたい。我々の政府の UFO に対する関心と秘密保持は 1940 年代に本格化したことから、最も説得力のある証拠となった事例はこのときに始まったのである。

-----  
40) Marrs, Jim. 1997. *Alien Agenda*, HarperCollins Publishers, NY, 434pp.  
-----

## 6.3 1942 - 1945 年：現代の UFO 目撃はこうして始まった

最も早い事例史の幾つかは、1940 年代初期に軍将校たちによってもたらされている。1942 年に一人の写真家が中国の繁華街で開業した。大型カメラを持っていた彼は、観光客の写真を撮り、それを彼らに土産として売ろうと考えた。突然、彼の注意は路上の多くの人々と共に空に向けら

れた。そこには、無音で空中静止している1個の大きくて暗色の円盤型物体があった。機転を利かせたその写真家はカメラの焦点をその円盤に合わせ、その物体の素晴らしく鮮明な写真を一枚撮った。第二次大戦前の中国戦役で任務に就いていた一人の軍将校も、そのとき路上にいた。彼はその写真を買ひ、中国駐留中に収集していた写真スクラップブックにしまい込んだに違いなかった。この写真は一人の日本人が1942年のその写真を収めた古いアルバムを発見するまで、何年もの間注目されなかった。<sup>41)</sup>

1942年の8月、米国海兵隊軍曹スティーブン・ブリックナーはソロモン諸島に駐留していた。彼は大きな音を出す、これまで見たこともない複数の飛行物体が現れたのを目撃した。ブリックナー軍曹は、報告の中で150個以上の“フラフラ揺れる”物体が10から12個ずつ直線編隊を組んで飛ぶ様子を記述した。<sup>42)</sup>

**フー・ファイターズ：**第二次大戦中のヨーロッパと太平洋戦域、そしてインドで、パイロットと乗組員たちは彼らの軍用機と並んで飛行する正体不明の輝く球体を報告し始めた。<sup>43)</sup>それは1943年に始まり、インド洋、ドイツ、その他の空域を飛行するパイロットたちは、“火の玉”が信じられない速度で大空を横切ったと述べ、似たような現象を報告した。それはナチスが何らかのミサイル、ロケット、もしくは電気重力装置を飛ばしているのだという見方もあったが、情報機関による調査が行き着いた推測は、ナチスもまたこれらの奇妙な光球に付きまとわれているらしいということだった。伝えられるところでは、ある米国人パイロットが当時の漫画の題名をもじって、“フーがあるところにファイヤーがある”<sup>44)</sup>と言った。“フー・ファイターズ”という言葉がこのときつくれ、定着した。

ドイツ上空を飛行していた米国空軍のパイロットと情報将校たちは、特にライン低地の上空で、数十個の赤やオレンジ色の光体や閃光、ナチスの夜間戦闘機と考えられる“クラウド・ファイターズ”または“クラウド・ボールズ”の目撃事例を、米国軍レーダーセンターに無線通報した。しかしレーダーセンターの応答は、その空域でレーダー画面に映っているのはその軍用機だけだということだった。それは単独の現象ではなかった。それらの光体は1943年から1944年にかけて、出現頻度を高めながら繰り返し現れたのである。<sup>45)</sup>実際に、1944年には2人のP-47パイロットが、それぞれ白昼に1個の“フー・ファイター”を目撃した。ドイツのノイシュタット近くを飛行中のパイロットは、“金属的な外観をした金色の球体”を見たと報告した。2番目のパイロットは、やはりノイシュタット近くを飛行していたが、それを直径が約3ないし5フィートの“燐光を発する金色の球体”と述べた。

1945年5月、米国軍兵士リン・R・モモは、ドイツのオードルフ上空で“かなり驚くべき性質の1個の火の玉”を見たと言った：

それはどんな星よりも輝いていた。金星よりも明るかった。それは約2秒のうちに完全に地平線から地平線へと移動した。その経路は天頂を通過しており、高度は分からなかったが、速度は途方もないものだったに違いない。

モモは続けて、その物体は無音で、地平線から地平線へと横切るときに“浮いたり沈んだり”の不規則な揺動をしたとはっきり述べた。モモによれば、それは鏡を持ったときそこからの反射光が手元のわずかな動きで不規則に動く現象を連想させたという。“似た装置が第二次大戦中に用いられ、迷信を信じる敵兵を恐れさせる目的で雲に宗教的な映像を映すために使われた。それは正体

を見抜かれるまで非常に効果があった” モモはそう報告した。<sup>46)</sup>

今は亡き米国人ジャーナリストのフランク・エドワーズは、英国の E・R・T・ホームズ少佐の報告に言及した。それは 1943 年 10 月 14 日にドイツのシュワインフルト・コンビナートへの爆撃航程中に、第 384 航空群の B-17 爆撃機パイロットたちが目撃したことを要約したものである。ホームズ少佐はその報告書の中で、それらの円盤は爆撃機に何の損害も与えなかったと述べた。その軍公式報告書には、以下の記名があった：

E・R・T・ホームズ少佐, 連絡将校, 第 1 爆撃飛行隊, ロンドン英国政府陸軍省 15 情報大臣宛, 1943 年 10 月 24 日付。(英国記録文書, 任務第 115)<sup>47)</sup>

フランク・エドワーズたちは、この現象の調査が英国で始まったと信じていたが、英国の軍部ははっきりとそれを否定した。さらに、今述べたホームズ報告のようなわずかな記録文書以外には、その存在を裏付ける証拠は何も明らかにされていない。マッシー中将の名前に由来するらしいマッシー報告なるものが知られていた。しかし、英国航空省(\*1964 年に防衛省に昇格)航空情報局第一副局長だった空軍中将ビクトル・ゴダードは、英国軍の記録にマッシー中将はいないと述べた。ところが、ヒュー・マッシーなる人物は 1954 年の名士録に載っているのである。ヒュー・R・S・マッシー中将は最後に帝国副参謀長に任ぜられた。1942 年に退役したこのマッシーが、フー・ファイターズを調査した將軍だったのだろうか？ これらの不可解な飛行物体の性質と起源のように、その報告書とその名前の由来となった人物については、今日に至るまで謎のままである。<sup>48)</sup>

- 
- 41) "UFO Sightings: Photographic Evidence, Vol. #1", video, 8 1996 AFS/Dialogue Productions, producer, Thomas Tulien. Photograph owned by Wendelle Stevens, obtained from Paul Dong.
  - 42) Good, Timothy, Above Top Secret, William Morrow and Company, 1988, p.18
  - 43) For example: See pilot Leet's letter to Major Keyhoe describing a "Foo Fighter" and the statement that it was thought to be a new German fighter. Appendix I. (Document AI.3)
  - 44) Lore and Deneault, Mysteries of the Skies: UFOs in Perspective, Prentice-Hall, Inc. 1968, p. 116.
  - 45) UFO Encounters, Golden Press, 1978.
  - 46) Mysteries of the Skies, pp. 119-120.
  - 47) Edwards, Frank, Flying Saucers--Here and Now!, Lyle Stuart, New York, 1967, p.77.
  - 48) Above Top Secret, p.28
- 

#### 6.4 ニューメキシコでの墜落回収と着陸事例

1966 年 4 月 1 日発行のライフ誌記事によれば、1947 年 6 月から 1966 年初めまでに 10,147 件の UFO 目撃が報告された。<sup>49)</sup> “空飛ぶ円盤”という言葉そのものは、民間パイロットのケネス・アーノルドが 1947 年 6 月 24 日にワシントン州レニエ山で経験したことが発端になっている。彼は小型飛行機を操縦していたときに、9 個の急速に移動する円盤型物体の編隊を見た。熱狂的な報道と 1947 年夏の間中起きた目撃多発現象の中で、大衆紙により“空飛ぶ円盤”という言葉がつくられた。



**ロズウェル事件：**1947年7月2日、農場主ウィリアム・“マック”・ブレイゼルの牧場の遠く離れた場所に1個の物体が墜落した。ブレイゼル氏は、激しい嵐の最中に大きな爆発音を聞いたと報告した。その翌日、彼は50エーカーはあろうかと思われる範囲に散乱している破片を発見した。ブレイゼル氏は地元の保安官事務所に通報し、保安官はそれを陸軍に回した。この事件は、ニューメキシコ州ロズウェル地域にあった陸軍航空基地第509爆撃航空群が、報道機関に対して、1機の空飛ぶ円盤がロズウェル近くに墜落したという驚くべき話を公式に発表したことにより、大騒動を引き起こした。この話を報道機関に発表した基地の広報将校は、空軍中尉ウォルター・ハウトだった。彼は今でもロズウェルに住んでいる。ロズウェル・デイリー・レコード(\*新聞名)は、第1面に次のような大見出しを付けてこの話を掲載した：“ロズウェル地区の農場で RAAF (Roswell Army Air Force; ロズウェル陸軍航空隊) 空飛ぶ円盤を捕獲” その2日後、陸軍は2回目の報道発表を行ない、それはただの気象観測気球が落下したものだとして主張して、前言を撤回した。

ロズウェル地区の参謀情報将校だったジェシー・マーセル少佐が、その回収作戦を担当した。2回目の報道発表をさらに“真実”らしく見せるために、破片が最初に回収されたテキサス州フォートワースで記者会見が行なわれた。そしてマーセル少佐がしゃがんで破れた銀色の気象観測気球の断片を調べている1枚の写真が発表された。この気球は、航空隊により最終的に“ムガール気球” - ソ連の核爆弾実験の証拠である音波を検出する最高機密プロジェクトに使用された音響装置搭載気球 - だと断定された。ムガール気球は、実際に非常に大きな一連の気球を大気中に滞留させるように設計されていた。それは単独の気象観測気球にいくらかは似ていた。しかし、大々的な軍の回収作戦が、この気球の“落下”だと主張されていることのために行なわれた。陸軍の一隊がその現場を数日間にわたりくまなく搜索し、残骸だけでなく(伝えられるところでは、地球外知性体の複数の遺体も)、断片やかかけらもきれいに持ち去った。回収された残骸は厳重に秘匿され、まずテキサス州フォートワースのカーズウェル航空隊基地に空輸され、最終的にはオハイオ州ライト地区(現在のライト・パターンソン空軍基地)に移送された。どんな気球配置が50エーカーの範囲にわたって残骸を散乱させるのか、またその破片を回収するのに最高機密作戦を必要とするのか、想像することは難しい。

回収作戦の初期に、マーセル少佐は彼の家族に、決して話題にするなど注意してその残骸の破片を幾つか見せた。今は亡きマーセル少佐の息子である医師ジェシー・マーセル・ジュニア大佐は一人の目撃証人であり、公開プロジェクトに加わっている。マーセル博士は、父がその夜に台所のテーブルに家族を呼び集めたことをはっきりと覚えている。マーセル博士はそのとき12歳だったが、墜落現場から持ち帰った物体、特に軽い物質からできているラベンダーか紫色をした、側面に沿って象形文字のような記号がある幾つかの梁(はり)を見せられた。マーセル博士は、その物体を手にとって調べた12歳の少年の鮮明な記憶に基づく一つの模型を持っていた。

アイゼンハワー大統領のスタッフだったもう一人の目撃証人は、1960年から1961にかけてペンタゴン(国防総省)の地下で暗号法の訓練をしていたとき、小さなI形梁(\*Iの形の断面を持つ梁)の2個の断片と金属箔に似た1片の物体を見せられたと語った。彼はその物体が“1機の墜落UFOのものだ”と聞かされた；それがどこかは聞かされなかったし、その物体を手にも取れなかった。彼は、その金属箔が突き刺して穴を開けることも、裁断することも、燃やすこともできないと聞かされたことを思い起こす。これらの目撃証人たちはまた、小さな梁の一つの側面に沿って

刻まれていた象形文字に似た記号をはっきりと思い出すことができる。<sup>50)</sup>

ロズウェル事件は、1978 年まで噂の領域にあった。この年に今は亡きジェシー・マーセル少佐が NBC ラジオ番組に出演し、ロズウェル近くの墜落現場で行なわれた当局による残骸回収について語った。マーセル少佐は、核物理学者にして UFO 研究者であるスタントン・フリードマンのインタビューに答えて、以下のように語った：

... その日の午後、ブランチャード大佐の命令に従ってあらゆるものを B-29 に積み、フォートワースに空輸した。私はそれをオハイオ州ライト地区まで空輸する予定だったが、我々がフォートワースのカーズウェル基地に着くと、その将軍がそれを禁じた。この時点では彼が事態を掌握しており、私は報道機関に対していかなる状況でも何も話すなと命令された。私は飛行機から降ろされ、他の誰かがそのすべてをライト地区まで空輸する任務を引き継いだ...<sup>51)</sup>

なぜロズウェルなのか？ とても簡単だ。なぜなら、第 509 爆撃航空群は核弾頭を所有する国内、そしておそらくは世界で唯一の 軍事施設だったからだ。

**その他の墜落場所：**ロズウェル墜落事件が本当にロズウェルの近くで起きたのか、それともニューメキシコ州の他の場所、特にマグダレナ、ソコロ(サンアグスティン平原)、コロナ、あるいはアズテックだったのかは未解決である。また、ニューメキシコ州で起きた地球外宇宙機と思われる物体の墜落がただの 1 回だったのか、それより多かったのかも、いまだに判明していない。1997 年に、ロズウェル墜落事件の最もよく知られた研究者の何人かが彼らの主張を翻し、地球外宇宙機がロズウェルで墜落したことはもう信じない、それは気球に吊り下げられた装置か高い機密性を持った軍の原子力実験機だったと言明した。しかし、上にその概要を述べた目撃証人の証言、およびかつて軍籍にあった他の目撃証人たちから公開プロジェクトに寄せられた声明は、1940 年代終わりから 1950 年代に米国南西部で数回の墜落があったことを確認する。これまで何人かの UFO 研究者たちにより見出されてきたこれらの目撃証人たちと証拠は、ロズウェルを含むこれらの場所で地球外宇宙機の墜落があったことを示している：ニューメキシコ州アズテックあるいはその近く；アリゾナ州キングマン；コロラド州グレートサンドデューンズ；テキサス州ラレード近くのメキシコ国境内部；アリゾナ州パラダイスバレー(現在のケアフリーの近く)。また研究者のトミー・ブランとレオナード・ストリングフィールドによる、1962 年に起きたニューメキシコ北部での墜落の報告書もある。この二人の研究者はさらに、同じ年の 1962 年にライト・パターソン空軍基地で嚴重な警備のもとで格納庫に置かれていた 1 機の UFO についても報告した。<sup>52)</sup>

墜落があったかもしれない場所の正確な位置はともかく、重要な一連の証拠があり、その中には情報公開法(“FOIA”)により米国政府から入手した、秘密の回収作戦が行なわれたことを明確に示す文書も含まれる。もし我々が 1947 年 7 月のロズウェル事件に関する 2 回目の報道発表を信じるといふなら、嚴重に保護されたこのような作戦が、1 個の気象観測気球のために必要だったとはとても信じ難い。

しかし、スティーブン・シッフ下院議員(R-NM；ニューメキシコ州共和党)を先鋒にした、それらの文書を手に入れるための活動は、あつけない手詰まり状態に行き着いた。シッフ下院議員は、1947 年にニューメキシコで起きたある空中物体の墜落に関するありとあらゆる資料を、GAO (General

Accounting Office; 会計検査院)を通じて要求した。GAO 代理人たちは調査を行なったが、シッ  
プ下院議員に何の資料も提供することができなかった。

しかし、CIA(中央情報局)と FOIA(情報公開法)を通じた別の要求により、FBI(連邦捜査局)長  
官の 1950 年 3 月 22 日付の覚え書きを入手することができた。それには、ニューメキシコ州で 3 機  
の空飛ぶ円盤が回収された(書簡への言及)、と述べられている。また 1947 年 10 月と 11 月の 2 通  
の覚え書きには、米国で最近目撃された空飛ぶ円盤について、ライト地区で研究が行なわれてい  
ること、また風洞実験のための模型が建造中 であることが述べられている。

ニューメキシコ州における墜落事件の調査により、地球外知性体(“EBEs”)に関する情報は絶え  
ることがなくなった。それらは墜落の最中かその直後に絶命し、その遺体は 1940 年代終わり以来、  
ある秘密軍事基地から別の基地へと移送され続けているというものである。この話の筋に、生存中  
の目撃証人たちの証言や、死の床にあった近い家族の告白を聞いた人々の証言 - 墜落現場  
で小さな人間ではない生命体が発見された、そのうちの一体以上は発見されたときにまだ生きてい  
た - を合わせると、我々には少なくとも、再調査のために公開されたすべての資料を用いて綿密  
な科学的調査を行なうべき事件が残されている。

**ソコロ着陸事件 - 1964 年:** ニューメキシコ州ソコロの巡査部長ロニー・ザモラは、地上にあった  
1 機の UFO を目撃したと報告した - この目撃には着陸痕と小さな人間の姿をした生命体が付随し  
ていた。事件は 1964 年 4 月 24 日に起き、空軍と FBI による公式調査に加え、他の研究者たち  
による民間調査の対象にもなった。その中に J・アレン・ハイネック博士がいた。この事件は着陸痕と  
人間の姿をした生命体の目撃を含め、公式の空軍 UFO 記録に載った最初の報告である。<sup>53)</sup>

勤務があったその日の日中、ザモラ巡査部長は黒いシボレー(\*GM 社製自動車)を緊急追跡中  
だった。それがソコロ郡庁舎の前を高速で通過したのを彼が最初に見つけたのである。彼は町の  
外を走る高速 85 号線を北上しながらその車を追跡した。突然彼は爆発音と思われる音響に気をそ  
らされた。青-オレンジ色の炎を見た彼は、より緊急性の高い事態が出来たために車の追跡を諦  
め、その地区にあるはずのダイナマイト小屋に向かった。道路が急な未舗装の砂利道だったので  
運転は困難だった。彼は炎が見えた地区に近づき、尾根に到達してゆっくりと西に向かった。1 個  
の輝く物体が目飛び込んできた。そこは道路から約 150 ないし 200 ヤードの場所で、最初ザモラ  
は車が小峡谷に突っ込んで転覆しているのを見ているのだと思った。彼は 2 体の小さな人間に似  
た搭乗者を見た。伝えられるところでは、それらは白いつなぎ服(オーバーオール)を身に付けてい  
たという。

午後 4 時 45 分頃、ザモラ巡査部長は本部に無線で自動車事故と思われるこの状況を報告し、  
調査のためにパトロールカーを離れると伝えた。ザモラによると、彼はその小峡谷を見下ろす見晴  
らしのきく場所まで車を走らせた。ザモラの報告である:

現場に近づいたとき、私はそれを転覆した車だと思った--直立したような感じだった。何  
度か眺めるうちに、結局それは光沢のある物体であることが分かった。その物体はアルミ  
のように見えた--それは苔を背景にして白っぽく、クロムメッキはされていなかった。ちよ  
うどこのようなフットボールの形だ。二つのつなぎ服姿が見えた。<sup>54)</sup>

ザモラの話は続く。そのうちの一人が振り返って彼の車に気付いた。驚いたようだった。ザモラが手助けしようと思い近づいていくと、直ちに大きな音が始めた。それは低い周波数の音で始まり、非常に大きな高い周波数の音へと変化し、それに炎が伴った。ザモラ巡査部長はフェンダーに足をぶつけ、眼鏡をはたき落としながら、急いで彼のパトロールカーに引き返した。音を発しているその物体は空中へと上昇し、彼から遠ざかっていった。ザモラの驚愕は大変なものだった。彼は腕で顔を覆いながらもその物体を見ようと顔を向けた。“かん高い金属的な音が聞こえ、次に完全な無音になった”とザモラは報告した。彼は直ちに警察本部に無線通報したが、ほとんど狂乱状態だった。同僚警察官のチャベス巡査部長が間もなく現場に到着した。彼はこう述べた：

私が到着したとき、ザモラは汗をかき、顔面は白...蒼白だった。私は物体があった場所に降りていった。茂みが数カ所焼け焦げているのに私は気付いた。地面に跡が認められた。その物体は四つの垂直な圧痕を地面に残していた。茂みがくすぶっていたが、それは触れても冷たく感じた。ロニーは何かを見たのだ - 証拠はまさにここにある。私が到着する前に、彼はその物体の側面に描かれていた記章を書き写していた。私はその場所を確保し、地元の軍当局に電話した。<sup>55)</sup>

間もなくその場所は見物人、報道関係者、一人の FBI 捜査官、その他の人々によりいっぱいになった。天文学者の J・アレン・ハイネックは調査のために空路直ちに飛んできた。彼は実際にその後さらに 2 回この場所を訪れ、地元住民やザモラに聞き取り調査を行ない、彼らは信用できると表明した。この事件の FBI 主任調査官ヘクター・クインタニラ警部は次のように述べた。土壌と植物のサンプルが持ち帰られた。ライト・パターソン基地で分析と計測が行なわれ、徹底的な調査が実施された。それでもこの事件は官僚主義の中に埋没し、公式の結論は出されなかった。報道機関により軍の秘密実験機の可能性が取り沙汰されたが、そのすべてについても結論が出されなかった。ザモラ巡査部長は嘲笑と非難に曝されたために警察という職業を辞め、事件については口を閉ざさざるを得なかった。

ニューメキシコ州の非常に多くの信頼できる民間、警察、および軍の目撃証人たちは、まじめな科学的調査とそこで収集された証拠と資料の公開を強く求めている。

-----  
49) "The Week of the Flying Saucers," Bill Wise, Life magazine, April 1, 1966, 8 1966 Time Inc.

50) Disclosure Project transcripts of closed witness meetings; June 1995 and April 1997.

51) Berlitz and Moore, The Roswell Incident, Granada, London 1980.

52) Stringfield, Leonard H., UFO Status Reports II and III, 1982.

53) Emenegger, Robert, UFO's Past, Present & Future, Ballentine, New York, 1974.

54) *Ibid*, p. 64

55) *Ibid*, p. 65  
-----

## 6.5 軍用機による遭遇 - 1951 年

1951 年 2 月 9 日、米国海軍 125 便は、アイスランドのケブラビークを出発してニューファンドラン

ドのアルゼンチアにある海軍飛行場に向かった。そのパイロットは米国海軍予備軍大尉グラハム・E・ベシューンだった。彼は 26 年間現役として勤務した公開プロジェクトの目撃証人である。ベシューン大尉は当時メリーランド州に配属されていたが、ロッキードとアイスランド政府の秘密の会合に出席するために、ケブラビークに飛べと言われた 3 人の将校の一人だった。アイスランド人たちはアイスランド沖で正体不明の航空機が出没するので、米国部隊に保護を要請していた。彼らは秘密の実験機を見ているのだらうとベシューン大尉は推測した。だが彼の見解は海軍 125 便に搭乗中に変わった。

1951 年 2 月 10 日の 0055 (00:55), 午前零時を回って間もなくだった。ベシューン大尉とその乗組員は未知の物体と遭遇したのだった。以下の報告はベシューン大尉自ら語ったものである:

私はアイスランドからニューファンドランドまでの飛行パイロットだった。沖に出て 240 マイル飛行したとき、私は 40 マイル彼方の水面に何かを見た。月の入りは 1 時間前だった。その海域には何も無いはずだった。私は航法士と副パイロットに、あれを見ろと言った。それは遠くにある都市のように見えた。水面上に光の模様があった - 奇妙な模様だった。これは秘密の回収任務ではないかと私は考えた。20 マイルまで近づいたとき、光は消えた。黄色の光輪が一つ水面に現れた。それは我々に向かって約 20 マイルを飛んできた。時速は約 1,000 マイルだった。それは我々の 200 フィート下方で停止した。私はそれにぼやけた形のドームがついているのを見た。私はそれが知性的に制御されていることを知った - それは我々を見るためにやってきた。その物体は約 45N の方角に約 5 マイル離れて留まった。それは我々を見ながら我々と一緒に飛行した。私の推定では、その大きさは直径 300 フィートだった。私の飛行機は機銃を装備していなかった。機内の磁気コンパスは回転した。この飛行機には 31 人の乗客が乗っており、その中には一人の海軍中佐と一人の精神科医がいた。私は後方に行き、その精神科医に、何か異常なものを目撃したかと訊いた。その中佐は我々が見たものを見たと言った。だが精神科医はこう言った。“ええ、あれは 1 機の空飛ぶ円盤でした。でもそんなものは存在しませんから私はそれを見ませんでした”

私は乗組員にそれを報告しないように言った。しかしそれはガンダーのレーダーにより捕捉されていた。我々はアイスランドで訊問された。我々の報告を受けたその米国海軍の面々の質問内容と態度から、彼らが以前にそこで物体を見ていたことは明らかだった。この出来事に関する報告書はライト-パターソン空軍基地で保管された。私は記録保管所でそれを 1991 年に見つけた。私はその報告書を全米大気現象調査委員会 (National Investigations Committee on Aerial Phenomena; NICAP) からの手紙、議会へのキーホール報告 (\*Donald Edward Keyhoe; 1950 年代の UFO 研究家)、私が乗っていた飛行機の写真と共に持っている。5 人のパイロットすべてがその UFO を同じように描写している - その大きさ; それを包む光。我々が訊問された夜に任務に当たった一人の大尉は、彼らがそれをレーダーで追跡し、時速 1,800 マイルを超えていたと告げられていた。その 17 頁の報告書にレーダー報告は含まれていなかった - 私がついにその報告書を見つけたときそれは報告書から消えていた。レーダー報告はあるとき確認されていたのだ。その物体の速度は推定で時速 1,000 マイルだった。他のパイロットたちは時速 1,000 から 1,500 マイルと推定していた。当時我々が持っていた最速戦闘機は時速 500 マイルを出

すことができた。その当時ジェット機はなかった - 1951 年 2 月のことだ。

この物体は流星ではなかった。それは常に飛行機と水面との間にあった。当時我々は広範な認識訓練を受けていた。我々には今日のような計器による支援がなかった。我々は星々を使って航行した。我々は飛行機で飛びながら、約 54 分の 1 秒で何かを識別した。我々は上空を飛行したので宇宙物理学者たちに情報を提供したのだ。我々は多くの目撃をしたが、これが文書化した唯一のものだ。<sup>56)</sup>

ニューファンドランドのアルゼンチアに着くとすぐに、ベッシュ大尉と彼の乗組員たちは海軍将校からその事件について訊問された。メリーランド州パタクセントリバー海軍飛行場艦隊後方支援航空団に保管されている 1951 年 2 月 10 日付けベッシュ大尉の公式機密報告書の中で、彼はさらに詳しい経緯を述べている。その物体は、飛行機がアイスランド沖少なくとも 250 マイルにきたときに最初に見えた。ベッシュと副パイロットは、他の乗組員の注意をそれに向ける前に 4 から 5 分間それを観察していた。その物体が上昇し、推定時速 1,000 マイルで彼らに向かってきたとき、ベッシュ大尉が最初に感じたのは、その空軍機が UFO と空中衝突するだろうということだった。UFO が飛行機に接近したとき、その形は少なくとも直径 300 フィートの円盤型だとはっきり認識することができた。その色は黄色から赤味がかったオレンジ色に変化した。UFO が進路を反転させて航空機から飛び去り、水平線の向こうに消えたときには、3 倍の速度だった。<sup>57)</sup>

125 便の他の乗組員たちも報告書を提出した。フレッド・W・キングドンは第二輸送指揮官を務めていたが、こう述べている。“私は肉眼で未確認物体の異常な目撃をした” キングドン大尉は右側の席(副パイロット)におり、ベッシュ大尉は左側の席にいた。UFO が水面から上昇して飛行機に急接近したとき、キングドン大尉はそれを“とても大きく丸い形をし、黄色ないしオレンジ色に輝く輪がその外縁にあった”と述べている。その物体はきわめて近くにあったが、その正確な速度と形状を決定するのは難しかった。というのは、それは夜間に水面で観察されたからである。“しかしその速度は途方もなく、大きさは直径が少なくとも 200 から 300 フィートあった。その物体は私にとり十分に近く、それをはっきりと認識することができた” キングドンはこのように報告している。<sup>58)</sup>

輸送指揮官の海軍中尉 A・L・ジョウンズは、一人の航法士が後方に来てその物体を指さしたとき、飛行機の客室にいた。彼はこう述べている：

私はそれを 1 分間見て、もっとよく見るために前方の操縦室に行った。操縦室に着くとすぐに私は飛行機の自動操縦を解除し、その物体を追跡するために機首を真方位 290N にとった。その物体は真方位 290N に向けてきわめて短時間に水平線の向こうに去った。その速度は時速約 1,500 マイル以上あったと思う。物体の直径は少なくとも 300 フィートだった。それを見た私の最初の印象は、縁を立てた巨大な燃えるようなオレンジ色の円盤... それが水平線の向こうに去ったとき、垂直の姿勢から水平の姿勢に移ったように思われた。後縁部のみが半月状に見えていた。<sup>59)</sup>

航法士のノエル・J・P・コジャー大尉は、彼の報告書の中でこう記している。

キングドン大尉が、小さな村か船のようだと言いながら、相対方位約 60N または真方位 290N に

あるオレンジ色の物体を指さした。我々がいる位置を考えたらそれは村ではなかった。私は約 30 秒間その物体を見ていたが、それは私にとり“北極光”の現象の一つに見えた. . . そのとき物体は突然輝きを増し、形を現しながらものすごい速度で我々の方角にやってきた. . . その物体が最もよく見えたとき、それは1個の丸い形をした明るいオレンジ色か赤色の円盤だった。その物体はとても速い、決定することもできない速度で接近してきた。<sup>60)</sup>

この遭遇事件をまとめた空軍情報資料報告<sup>61)</sup>は乗組員たちの目撃を要約しているが、その中でその物体を最初に見たのはベッシューン大尉だと述べている。また5人の乗組員全員が北大西洋の空を飛んだことがあった。そして5人の目撃者全員が、述べられた事実を認めた。詳細はこの事件に関する公式政府文書を読みたい。それを公開プロジェクトは FOIA (情報公開法) 要求により入手した。これらは付録 I (文書 AI.4) にある。

-----  
56) Taped transcript from closed Disclosure Project witnesses' meeting, April 9, 1997, Washington, D.C.

57) Commander Bethune's original Memorandum Report U.S. Navy, 10 February 1951, Appendix I. (Documents AI.4)

58) Memorandum Report of F.W. Kingdon, Jr., LT, U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4)

59) Memorandum Report of A. L. Jones, LTJG, U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4)

60) Memorandum Report of Noel J. P. Koger, Lt. U.S. Navy, 10 February 1951 in Appendix I. (Documents AI.4).

61) See Air Intelligence Information Report in Appendix I. (Documents AI.4)  
-----

## 6.6 1952 年夏： 首都ワシントンを含む多くの場所上空の UFO

UFO について最も頻繁に聞かれる修辭的疑問の一つがこれである： もし彼らが実在するなら、どうしてホワイトハウスの庭に降りてこないのか？ 実際に彼らは 1952 年 7 月の週末に、2 回続けてほとんどそれに近いことをしたのである。

1952 年の夏は UFO 目撃報告が最も多いときの一つだった。東海岸と中西部の州から、数週間にわたり、特筆すべき数の報告があった。情報機関員たちは、目撃の急増に対して大きな不安を募らせるようになった。特に関心を持たれたのは、これらの報告の多くが民間からのものだったことである。この運命の夏が始まる前は、目撃のほとんどが軍関係者からのもので、それは国民の目から隠されてきた。しかし今や、民間パイロットを含む一般の市民自身が情報源となったのだ。

1952 年 7 月 10 日： バージニア州クワンチコ上空を飛行していた 1 機のナショナル・エアラインは、高度 2,000 フィートで 1 個の光体を観測した。乗務員によればその光体は大流星にしては動きが遅く、灯気球にしては速過ぎた。

1952 年 7 月 12 日： インディアナ州デルファイの元空軍ジェットパイロットだったジャック・グリー

ンは、大勢の人々と共に高空に1個の青白い円盤型物体を目撃した。

1952年7月13日：インディアナポリスの市民数千人が、5,000フィートの高度で市の上空を急速に通過した、巨大な卵形物体を目撃した。多くの人々がそれを見て怖がった。イースタン・エアライン、空軍パイロット、そして自家用飛行機パイロットの3人全員が、操縦されていたその物体を見た。最初その高度はかなり高かったが、約5,000フィートまで降下し、インディアナポリスの上空を飛んだ。これは、少なくとも1940年代に始まったUFO目撃の時代において、数千人により目撃された最初の低高度目撃だった。それがインディアナ上空に出現する直前に、おそらく同じ物体 - 確かに同じ特徴を持っていた - がミズーリ州カークスビルにある空軍レーダーに捕捉されていた。推定によると、それは時速1,700マイルの速度で、B-36爆撃機ほどの大きさがあった。

1952年7月13日：ワシントンの南西60マイルを高度11,000フィートで飛行していた民間航空のパイロットと乗務員が、彼らの下方にある1個の光体に気付いた。その光体は彼らと同じ高度まで上昇し、飛行機の左舷側に数分間相対停止した。そしてパイロットが飛行機の着陸灯を点灯するや、急速に上昇していった。

1952年7月14日：ニューヨークからマイアミに向かって南下していたパンナム機は、バージニア州ニューポートニューズ近くで、輝くオレンジ色のUFOを見たと言った。(注：6機の円盤からなる最初の編隊がまず目撃された；最初の編隊が飛び去った後でさらに2編隊が目撃された) その編隊が飛行機に接近したとき、先頭にいた円盤がその縁を軸にしてぐるりと向きを変えた。他のUFOも瞬時に同じ振る舞いをした。すべての円盤がひっくり返ったり向きを変えたりしながら、加速して飛び去った。

1952年7月17日：デンバー近くを飛行していたアメリカン・エアライン機が、前方に1機いるという警告の無線通報を受けた。ポール・カーペンター機長と乗務員は、推定時速3,000マイルで編隊飛行している4機の円盤を見た。

地上からの目撃：

1952年7月16日：ラングレー空軍基地では琥珀色の大きな光体が2個目撃されていた。二人の観測者のうちの一人は、大変尊敬されているラングレーの民間人科学者だった。それらの光体は真南に向きを変え、最初に目撃された位置に戻った。そして互いに場所を争うように動き回り、それに第3の光体が合流した。そして上昇し始めたが、さらに数個の光体がそれに合流した - すべてが編隊を組んで飛行した。推定ではこのすべての現象は3分間続いた。

**ホワイトハウスをかすめて飛ぶUFO群：**1952年7月19日午後11時40分、ワシントンナショナル空港の複数のレーダー基地がアンドリュー空軍基地の東と南に7個の物体を捕捉した。アンドリュー空軍基地でもまた、彼らのレーダーでその目標を捉えていた。それが通常の飛行機でないことはすぐに判明した；これらの目標は時速100ないし130マイルで飛行し、突然ものすごい速度まで加速してその場を去った。一つの物体は時速7,200マイルと計測された。伝えられるところでは、その物体群はレーダースコープのあらゆる区画に現れた。その中にはホワイトハウスと国会議事堂上空の禁止空域を通過したものもあった。その物体群はその夜の間中、何度も戻ってきて、定期航



空便のパイロットたち(午前零時と 2 時に)、航空管制塔操作員たち、そしてアンドリュー空軍基地から派遣されたジェット戦闘機パイロットたちにより目撃された。

エドワード・ルッペルトはこう書いている：

だが、決定的な出来事はその日の未明に起きた。ARTC(航空交通管制)の交通管制官がアンドリュー空軍基地の管制塔を呼び出し、ARTC で目標を 1 個捕捉したと告げた。それは彼らの管制塔の南、アンドリュー空軍基地航行無線局の真上にあるという通報だった。管制塔操作員たちは外に目を向けた。そこには 1 個の‘巨大な、燃えるようなオレンジ色の球体’が彼らの航行無線局の真上に滞空していた。<sup>62)</sup>

どうやら空軍情報部は、その地区の他の人々と同様に、翌朝の新聞見出しを見るまではこの出来事について知らされなかったようだ： **首都ワシントン上空で迎撃機が空飛ぶ円盤を追跡**。ペンタゴンのある少佐でさえ、その出来事について知っていることはすべて新聞で読んだことだと、ブルック計画調査員エドワード・ルッペルトに語った。徹底的な調査が、今述べた少佐 - デューイ・フルネ - の指揮のもとに直ちに開始された。ワシントンナショナル空港の交通管制官たちは情報機関員たちに、彼らが観測した目標はレーダー波が何か堅い固体物体で跳ね返ったものだと語った。アンドリュー空軍基地の空軍レーダー操作員と 2 人の熟練パイロットもそれに同意した。

**ワシントン上空の 2 回目の乱舞：** 思いがけなくも、ワシントン上空での 2 回目の目撃多発現象は、7 日後のほぼ同じ時刻に起きた。その間の 7 日間は平穏とはほど遠いものだった： UFO 報告がオハイオ州デイトンのライト地区に毎日 30 から 40 件の割合で押し寄せた - 以前の 3 倍の数だった。エドワード・ルッペルトは“多くはワシントン事件に勝るとも劣らない目撃事件だった”と断言した。それらの報告の中で最も際だった正体不明の事例には、以下のものが含まれる： フロリダ州パトリック空軍基地の誘導ミサイル長距離性能試験場上空で目撃された琥珀色を帯びた赤い光体、テキサス州ユバルディの急速に移動する巨大で丸い銀色の回転物体； ニューメキシコ州ロスアラモス上空での軍用ジェット機による不成功に終わった UFO 追跡； マサチューセッツ州 (2 例)、そしてニュージャージー州。

ある目撃事件がワシントン上空における 2 回目の目撃多発現象への先駆けとなった。7 月 26 日夕方、赤い光を点滅させた円盤型物体が、フロリダ州キーウェスト海軍飛行場の上空に出現した。それは数百人の人々により目撃されたという。事件はそれから急速に東海岸を移動し、またもや国家の首都に集中していった。そこでは、午後 9 時頃からワシントン地区のレーダー操作員たちが、再びその前週の騒乱に似た‘国籍不明機’を捕捉していた。1 時間もしないうちに常に 4 ないし 5 個の UFO がレーダー画面に現れるようになった。軍のジェット機が発進し、民間航空機は航路を変更した。ルッペルトによると、ワシントンナショナル空港の管制塔に集まった報道機関は退去を求められた。彼はこう書いている：

迎撃行動の手順は公開されないという理由で報道機関が退去させられたことを、後で私は知ったのだが、これは馬鹿げていた。というのは、有能なアマチュア無線家なら誰でも彼らの装置で迎撃の様子を聞き取れたからだ。私が知った報道機関が退去させられた本当の理由は、次のとおりだ。レーダー室にいた少なからぬ人々が、この夜が UFO の歴

史上重要な夜になることを確信していた -- 今夜パイロットが UFO に肉薄してそれを十分に観察する -- そして彼らは報道機関がそれに参加することを望まなかった。<sup>63)</sup>

一方、UFO の地球外知性体のパイロットたちは別の考えを持っていた。F-94 ジェット機が発進したのは午前零時頃だったが、間もなく UFO はすべてレーダー画面から姿を消した。視程と天候がよかったにもかかわらず、パイロットたちは何も肉眼で確認することができなかった。ところが、後で分かったことだが、ラングレー空軍基地とその地区の市民たちは、空中に色彩を帯びた回転する光体を見ていた。そして - 驚いたことに！ - 軍のジェット機がその場を去るや否や、UFO はワシントンのレーダー画面に再び忽然と姿を現したのである。1 個の光体を肉眼で捉え、航空交通管制によりそれに誘導されたあるパイロットは、彼が接近するや否や、それは“まるで誰かが電球のスイッチを切ったように”消えたと報告した。そのパイロットにより短時間のレーダー自動追跡が行なわれた。<sup>64)</sup>

彼らが接近している間はじっと静止し、次に急に飛び去るか姿を消す。こうして、UFO は F-94 とゲームを続けた。UFO は日の出の時刻が近づき、ジェット機がほとんど燃料を使い果たすまで“できるもんなら捕まえてみる”を演じた。夜が明けると間もなく UFO は飛び去り、再び戻ってくることはなかった。今度もまたレーダー操作員たちは、目標の原因が固体で金属製の動く物体であり、気象の異常によるものではないことを確認した。再度、新聞の見出しは UFO を大きく取り上げた。ペンタゴンは大混乱に陥っていた。レーダー目標があった同じ地区で肉眼による目撃があったことを実証する新しい UFO 報告が押し寄せ、混乱に拍車をかけた。これは、気まぐれな気象条件が偽のレーダー目標を生じさせたとする、ペンタゴンの作業仮説を裏付けるためには、ほとんど役立たなかった。そして、ワシントンにおけるこの乱舞が始まる前には、レーダーと肉眼の両方による追跡を示唆する報告はほとんどなかったのである。

今やどうしても国民に何かを語らなければならなかった。軍による下手な言い訳は、ペンタゴンに押し寄せる激しい抗議のうねりを止めることができなかった。抗議のうねりは、米国全土から寄せられるさらに重大な目撃報告、またおそらくロシアが関与しているのではないかという忍び寄る疑惑のために、一層激しくなった。研究家のドナルド・キーホーによると、空軍情報部長ジョン・A・サムフォード少将は、一般大衆の高まる動揺を鎮めるために、ペンタゴンが画策した幾つかの嘘の説明に取り組んだ。少将は落ち着き払い口舌滑らかに、事例の“20 パーセント”は未解決であると認める一方で、円盤は奇妙な性質を持つ様々な自然現象であると片づけた。少将はさらに続けて、それが米国にとり何らかの脅威あるいは危険なものであることを示す傾向は少しも見られないと述べた。地球外宇宙機と訪問者たちが実在するという考えの誤りを暴き立てる情報操作が、新聞により米国全土に広められた。ドナルド・キーホーによると、報道機関がこのほら話を展開しているまさにそのときに、空軍は中西部の諸州で円盤を追跡するためにジェット機を発進させていたのである。キーホーはこう述べた。“もしある事件があつた夜に公表されていれば、事実と正反対の発表を台無しにし、捏造に基づく暴露計画を頓挫させていただろう。だが数週間が過ぎるまで私はこれを知らなかった”<sup>65)</sup> それにもかかわらず、あらゆる UFO 事件に対する否定 - そして嘲笑 - は今日まで続いている。

公開プロジェクトには、あの米国の首都で起きた上空通過事件を目撃した一人の生き証人がいる。そして、公開プロジェクトの非営利的な教育用資料である“入手できる最高の証拠”背景説明ビ

デオ(1997年)には、ホワイトハウスの真上をかすめて飛ぶ UFO 編隊のカラー写真が1枚含まれている。

-----  
62) The Report on Unidentified Flying Saucers, Ruppelt, Edward J., Doubleday & Company, New York, 1956.

63) Ibid, p. 164.

64) Flying Saucers from Outer Space, Keyhoe, Major Donald E., Henry Holt and Company, New York, 1953.

65) Ibid, p.88  
-----

## 6.7 戦略空軍基地上空を通過

1975 年は戦略空軍基地上空に未確認飛行物体が多く出現した“当たり年”だと考えられているが、重要な事件はもっと早くから起きていた。

公開プロジェクトの一人の目撃証人が、以下の報告を提供した：

私は 49 歳で、大学を卒業した傷病退役軍人だ。米国空軍に 1964 年から 1974 年まで勤務した。1967 年に私は異質な技術 (foreign technology) の直接目撃を 2 回経験し、また関連する少なくとも 2 回の事件を耳にした。

最初の ETV(地球外輸送機)の直接目撃は、1967 年 11 月に起きた。ノースダコタ州(マインツ空軍基地)で、夜中の 22 時にミニットマン I サイト(\*ミサイル発射サイト)に修理に向かう途中だった。我々の車両には二人の弾道ミサイル分析官、つまり私とその助手、それに一人の武装した保安兵の 3 人が乗っていた。その護衛官は“この辺りは恐ろしいほど静かだ”という意味のことを言った。“自分は今それを銃撃します、それはサイトの上空約 300 フィートにいる！”これを我々が聞いたとき、私は無線の四つのチャンネルを確認することを躊躇しなかった。

我々は直ちに脅迫状態 (duress condition)、つまり脅迫を受けている隊員を援助するために全員に応答を求める態勢に移行した。この出来事のすべては、おそらく 2、3 分の間に起きた。発射管制戦闘班指揮官が近くのサイトにいた二人の保安兵に、その ETV を“撃つな”と命令しているのが聞こえた。我々はそのサイトの方角に向かった。そしてそこに 1 個の大きな輝く物体を見た。それは約 10 ないし 12 マイルの距離で赤／緑／青の光を点滅させていた。無線交信が飛び交っている中で、その物体は上昇を始めた。それは上昇し、真っすぐ上方に加速し、とてつもない速度に達した。そして迎撃機の F-102 か F-106 が頭上を通過したとき、その物体は見えなくなった。

その二人の保安兵は、保安システムに障害が発生したのでそのサイト(サイトは無人だった)を警護し、保守要員が修理に来るのを待っていたのだ。もし週末ならそれには 3、4 日はかかったはずだ。事件が起きていたその時刻に、そのサイトかその近くには、他に脅迫

状態信号に応答した3台の車両に乗った6人の保安兵(攻撃班)がいた。

保安兵の一人(そのETVを銃撃しようとした当人)が、私の班と一緒にその週の後日に保守巡回に出た。彼は30ないし40分かかって私に説得され、彼らの恐ろしい体験と事情聴取の詳細を私に語った。その二人の保安兵は、J・アレン・ハイネック博士とマイノット空軍基地に所属しない別の職員から事情聴取された。ハイネック博士は“この宇宙機は以前にも目撃された”と述べた。その保安兵によれば、彼と彼の班員はある空軍大佐から、起きたことを話題にしないように、またそれに従わなければ直ちにベトナムに送られると命令された。彼ら二人は恐ろしさで縮み上がった。

第二の事件は数週間後に起きた。夕暮れの少し前で、私は雪がちらつく中で低く垂れ込めた雲を見ていた。そのとき、一人の保安兵が空に見える“奇妙な月”のことを言った。

我々がミニットマンサイトを修理していた場所の真上に、月の大きさの物体が、月と同じ色で“雲の下”にあった。私は“月”を報告するために、直ちに8ないし10マイル離れた発射管制施設(LCF)を呼んだ。その保安要員たちもその物体を観察中であり、マイノット空軍基地の飛行隊保安管理部(WSC)にそれを報告したということだった。

私とその物体を観察し LCF(発射管制施設)と話している間に、その物体はゆっくりと雲の中に退却し、姿を消した。私は他にもノースダコタ州マイノット空軍基地で起きた幾つかの事件 - 信頼できる二つの事例 - そしてミネソタ州ダールズ空軍基地で起きた事例について情報を持っている。<sup>66)</sup>

## 1970年代

### モンタナ州マルムストローム空軍基地

NORAD(北米防空軍)第24地区上級部長テレンス・C・ジェームズ大佐は、1975年11月の複数日にわたり発生した複数回のマルムストローム空軍基地上空通過事件について、報告書<sup>67)</sup>を提出した。ここにそれを引用する:

1975年11月7日(1035Z)<sup>68)</sup>(\*グリニッジ平均時10:35, 現地時刻03:35)

第341戦略空軍指揮所(SAC CP)から以下の電話連絡があった。次のミサイルサイトから1個の大きな赤、またはオレンジ、または黄色の物体が見えるとの報告があった: M-1, L-3, LIMA, および L-6。物体のおよその位置はモンタナ州ムーアの南10マイル、同バッファローの東20マイル。指揮官と作戦副官(DO)に通報。

1975年11月7日(1203Z)(\*現地時刻05:03)

SAC(戦略空軍)から以下の通報があった。モンタナ州ハーロートンのLFC(発射管制施設)で1個の物体を目撃した。物体は光線を発射し、サイトの道路を照射した。

1975年11月7日(1319Z)(\*現地時刻06:19)

SAC(戦略空軍)から以下の通報があった。K-1 で東側のとても輝く物体が今南東側にあり、隊員たちが 10×50 の双眼鏡で観察している。物体に(幾つかの)照明があるように見える。配列ははっきりしない。頭上にあるオレンジ/金色の物体にも小さな照明がある。また SAC の通報によると、女性の市民がルイスタウンの西 6 マイルにある彼女の場所から南に 1 個の物体を見た。

1975 年 11 月 7 日 (1327Z) (\*現地時刻 06:27)

L-1 から以下の報告があった。北東にある物体が筒型の黒い物体を 1 個放出しているように見える。この間中レーダー監視官は確認された航空機以外の物体を検出していない。(強調は編者による)

1975 年 11 月 7 日 (1355Z) (\*現地時刻 06:55, 日の出は 07:17 頃)

L-1 と K-1 から、夜明けが近づくと共に視認中の物体が上昇を始めたと言報告が入る。

1975 年 11 月 7 日 (1429Z) (\*現地時刻 07:29)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報：太陽が昇ったらそれらの UFO は消えた。指揮官と作戦副官(DO)に通報。

1975 年 11 月 8 日 (0635Z) (\*現地時刻 11 月 7 日 23:35)

K-4 の野営保安隊から、白色照明とその後方 50 ヤードに 1 個の赤色照明を持つ UFO の報告があった。K-1 でも同じ物体を見ている。

1975 年 11 月 8 日 (0753Z) (\*現地時刻 00:53)

航跡 J330 不明 07:53。静止/7 ノットで移動/高度 12,000 フィート。1 個(7 個まで変化)。他現象の可能性なし, EKL3746, 2 機の F-106, グレートフォールズより緊急発進 07:45。NCOC(\*NORAD Combat Operation Center; NORAD 戦闘作戦センター)に通報。

[戦闘機が迎撃のために緊急発進したことに留意せよ - 編者]

1975 年 11 月 8 日 (0820Z) (\*現地時刻 01:20)

レーダーより消失, 08:25 に戦闘機が作戦を打ち切る, 航跡 J331(別の高度監視レーダーによる捕捉)領域を探索。

[戦闘機は確かに UFO をレーダーで捕捉していたことに留意せよ]

1975 年 11 月 8 日 (0905Z) (\*現地時刻 02:05)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報：L サイトでは戦闘機と物体を確認；戦闘機は物体の撃墜に成功しなかった。

[注：L サイトはミニットマン大陸間弾道ミサイル発射サイトを意味する]

1975 年 11 月 8 日 (0915Z) (\*現地時刻 02:15)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報：4 カ所の地点：物体と戦闘機を確認；戦闘機がそこに到達すると照明が消えた；戦闘機がそこを去ると照明がついた；NCOC(NORAD 戦闘作戦センター)へ。

1975年11月8日(0953Z)(\*現地時刻02:53)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報: L-5 から以下の報告があった。物体が速度を上げ - 高速, 高度を上げ, 今や背景の星々と区別がつかない。NCOC(NORAD 戦闘作戦センター)へ。

1975年11月9日(0305Z)(\*現地時刻11月8日20:05)

SAC CP(戦略空軍指揮所)がUFOを観測中のサイトL-1, L-6, およびM-1のSAC隊員に電話通報した。物体は黄色がかった輝く丸い光体で, ハーロートンの北20マイル, 高度2,000ないし4,000フィート。

1975年11月9日(0320Z)(\*現地時刻11月8日20:20)

SAC CP(戦略空軍指揮所)からの報告。UFOがルイスタウンの南東20マイルにある。オレンジ色がかった白い円盤型物体。NORAD第24地区レーダー監視区域。レーダー監視官は高度を確認できない。

1975年11月9日(0320Z)(\*現地時刻11月8日20:20)

FAA(連邦航空局)監視管理官から以下の報告があった。UFOの近くに5機の輸送機を確認, ユナイテッド157便から“アーク溶接の青”色をした流星を見ているとの報告があった。SAC CP(戦略空軍指揮所)からの通報, サイトでは静止物体をなお観察中。

1975年11月9日(0348Z)(\*現地時刻11月8日20:48)

SAC CP(戦略空軍指揮所)が確認, L-1で物体を目撃, 移動保安隊がそれに近づき報告するように指示されている。

1975年11月9日(0629Z)(\*現地時刻11月8日23:29)

SAC CP(戦略空軍指揮所)から03:05頃のUFO目撃について通報があった。サイトL-1からの小隊保安隊中止, 区域を点検, すべて正常, その後目撃はない。

1975年11月10日(0125Z)(\*現地時刻11月9日18:25)

SAC CP(戦略空軍指揮所)から以下の電話があった。サイトK-1からハーロートン地区周辺で目撃されたUFOの報告があった。レーダー監視官が高度監視レーダーで地区を探索中。

1975年11月10日(0153Z)(\*現地時刻11月9日18:53)

レーダー監視官から, K-1から目撃されたUFOに該当する航跡を検出できないとの報告があった。

1975年11月10日(1125Z)(\*現地時刻11月10日04:25)

マイノット空軍基地から以下のUFO目撃報告があった。明るい星に似た1個の物体が西にある。東に向かって移動しており, 車ほどの大きさがある。最初の目撃は1015Z(\*現地時刻03:15)頃。1120Z(\*現地時刻03:20)頃, その物体はレーダー基地上空を通過した。

高度 1,000 から 2,000 フィート、音は聞こえなかった。サイトまたは地元民の 3 人がその物体を目撃した。NCOC (NORAD 戦闘作戦センター) に通報。[強調は追加]

1975 年 11 月 12 日 (0230Z) (\*現地時刻 11 月 11 日 19:30)

K-1 から以下の UFO 報告があった。1 個の赤色照明を持つ物体がビッグ・スノーウィー山地 (Big Snowy Mountains) 上空の高い高度にある。オヘイム (Opheim) からレーダー捕捉を試みている。オヘイムでは 120N から 140N を探査している。

1975 年 11 月 12 日 (0248Z) (\*現地時刻 11 月 11 日 19:48)

同じ地区に 2 個目の UFO が出現したとの報告があった。それは断続的に光線を地面に照射しているように見えた。0250Z (\*現地時刻 11 月 11 日 19:50) に物体は消えた。[強調は追加]

1975 年 11 月 12 日 (0251Z) (\*現地時刻 11 月 11 日 19:51)

両方の物体が消えたとの報告があった。これらはレーダーで捕捉されなかった。

注: 1 週間後にもう一つ別の事件が報告された。

1975 年 11 月 19 日 (1327Z) (\*現地時刻 11 月 19 日 06:27)

SAC (戦略空軍) 指揮所から以下の報告があった。UFO が FSC (Flight Security Controller; 小隊保安管理官) と厨房員により目撃された。物体は M-8 と M-1 の間を高速で北東に向かっていた。明るい白色光の物体は地面から 200 フィートの高度で地形に沿って移動し、45 ないし 50 秒間目撃された。物体はジェット機の着陸灯の 2 ないし 3 倍の明るさがあった。

NORAD 司令官の 1975 年秋の日誌<sup>69)</sup> (付録を見よ) からの抜粋は、他の多くの SAC (戦略空軍) および空軍基地における数々の目撃報告を日付順に記録している:

1975 年 10 月 29 日

1 機の“正体不明ヘリコプター”がメイン州ローリング空軍基地の軍需品倉庫地区に 2 夜続けて着陸した。カナダの空軍基地上空を通過した 1 機の“ヘリコプター”についての未確認情報がある。ローリング空軍基地も 11 月 1 日の“ヘリコプターと推定される物体の上空通過”について、別の報告書を提出した。

1975 年 10 月 31 日

ワートスミス空軍基地 (ミシガン州) は、SAC (戦略空軍) 武器庫地区上空に空中静止していた 1 機の“ヘリコプター”について報告した。1 機の空中給油機が肉眼で追跡し、レーダーの“機体反射信号”も受信した。同機はこの物体をヒューロン湖 (\*五大湖の一つ) 上空まで追跡した。

1975 年 11 月 8 日

この記入事項には、モンタナ州マルムストローム空軍基地上空およびその近傍を飛行し

た最初の“正体不明機”の詳細な記述があり、パイロットたちが肉眼とレーダーで追跡したと述べられている。UFO はジェット戦闘機がそれらに向かっているときには照明を消し、F-106 がその場を去ると再び照明をつけ、戦闘機をかわした。

1975 年 11 月 10 日

1 個の輝く、車ほどの大きさの無音物体がノースダコタ州マイノット空軍基地上空をかすめて飛んだ。

1975 年 11 月 12 - 25 日

ミネソタ州、バージニア州、オンタリオ州、およびカリフォルニア州メンドシノ郡の一般市民から、様々な種類の UFO 目撃が報告された。その中には葉巻型、ダイヤモンド型、ボールの中のカップ (cup-in-a-bowl) 型、回転光体、光球、点滅する照明を持つ卵形、および火球が含まれる。

1980 年代中頃(推定)には、データベース要覧 (*Directory of Databases*) に機密分類の NORAD 正体不明機追跡システム<sup>70)</sup> が記載された。その中に 1971 年にデータベースが始まって以来の北米およびその近傍における 7,000 の正体不明機事件が登録されている。

#### ニューメキシコ州

ワシントン D.C. の国家軍事指揮センター (National Military Command Center; NMCC) は、1976 年 1 月 21 日付の一つの報告書<sup>71)</sup> を発表した。それにはニューメキシコ州キャノン空軍基地上空で起きたある事件に関する空軍戦闘作戦センターからの情報が述べられている:

ニューメキシコ州キャノン空軍基地の駐機場近くで 2 個の UFO が報告されている。それらを目撃した保安警察官によると、UFO は直径 25 ヤード、色は金または銀、頂部に青色照明、中央部に穴があり、底部には赤色照明があった。空軍がレーダー探査と同時に気象逆転データも調べている。

#### メリーランド州

国家軍事指揮センター (NMCC) は、1976 年 7 月 30 日付でもう一つの報告書<sup>72)</sup> を発表した。これはメリーランド州フォートリッチー周辺で 7 月 30 日未明に起きた幾つかの UFO 報告を詳細に述べたものである。一般市民が目撃報告を電話通報した後で、別々の二つの軍警察パトロール隊が、ある軍需品倉庫上空のとてつ低い高度 (100 から 200 フィート) に空中静止していた 3 個の赤い、楕円形円筒を目撃したと述べた。それとは別に、この二つのパトロール隊による報告の約 50 分後、一人の陸軍警察巡查部長が車で仕事に向かう途中、その同じ場所の上空に 1 個の UFO を見たと報告した。興味深いことに、この報告書の最後の段落は、これらの目撃を飽和湿度下での気温逆転で説明しようと試みている。

全体として見ると、ここで詳しく述べた一連の報告は、米軍が UFO 情報の収集に関与していたことを反駁できないまでに示している。これらの報告は確かにすべてを包括するものではない。し



かし、1969年にブルーブック計画が、地球外知性体とその宇宙機の主題に対する軍の関心に終止符を打ったとされる結論を出した後も、米軍が実際に UFO に関心を持ち、確実に目撃を調査していたことは明らかである。

-----  
66) Private correspondence to Steven M. Greer, M.D. and author, February 1997.

67) See original report in Appendix I. (Document AI.5)

68) Refers to time of sighting in Zulu (military) time.

69) See original report in Appendix I. (Document AI.6)

70) See page describing the database in Appendix I. (Document AI.7)

71) See original report in Appendix I. (Document AI.8)

72) See original report in Appendix I. (Document AI.9)  
-----

## 6.8 イラン上空の軍用機による追跡 - 1976年

UFO 事件を記録した最高の政府文書の一つに挙げられるのが、1976年9月にイランのテヘランとその上空で起きた驚くべき事件である。この話を追跡調査した米国政府の公式文書<sup>73)</sup>が、在テヘラン米国大使館の国防担当大使館員により執筆されていた時点で、国防情報局(DIA)、ホワイトハウス、中央情報局(CIA)、国家安全保障局(NSA)、統合参謀本部、空軍長官、国防長官、および国務長官に配布された。<sup>74)</sup>

1976年9月19日午前零時半、イラン帝国空軍はテヘランのシェミラン地区住民たちから電話を受けた。住民たちは“空中の奇妙な物体”について報告した。何人かはそれを鳥のようだと言い、また点灯したヘリコプターだと言う者もいた。指揮所はその時刻にヘリコプターは飛んでいないことを知っていたので、住民たちに空の星を見ているのだと伝えた。指揮所はメフラバード空港管制塔に問い合わせた。そして間もなく、彼は自分の目で1個の大きな、明るい星のような物体を目撃することになったのである。午前1:30に1機のF-4ジェット機がシャフロキ空軍基地から緊急発進し、調査に向かった。

**F-4が緊急発進:** パイロットは、物体はとても明るく、70マイル離れても容易に視認できると報告してきた。それはテヘランの北およそ40マイルにあった。イラン帝国空軍(IIAF)パイロットはその異常な航空機を追跡した。その正体不明物体から25海里の地点で、パイロットは突然 UHF(極超短波)、内部通話装置、および計器類が使えなくなった。パイロットが UFO を離れてシャフロキ空軍基地に機首を向けたとき、突然にまた通信機能が回復した。次々と明らかになる奇妙な出来事のために、2機目のF-4が派遣された。後部席のパイロットは27海里の距離で UFO をレーダー捕捉した。そのF-4が物体から25マイル以内に入ったとき、UFO はジェット機との距離を25マイルに保ち、速度を上げて飛び去った。

**UFO 表面の色光:** 政府の公式報告書には、この話の追跡調査結果がまとめられている。米空軍フランク・B・マッケンジー大佐が書いた報告書によると、F-4パイロットたちはレーダー画面上で、その物体の大きさを707空中給油機と同程度と見たが、UFOの強烈な輝きのために肉眼での推定は難しかったと述べた。それでもパイロットたちは青、緑、赤、オレンジ色の矩形ストロボライト

が閃光を発する様子を述べる事ができた。閃光の反復は大変速く、4色すべてが同時に見られたと報告書は述べている。

**物体の中に物体が：** 事件は進むにつれてさらに奇妙さを増していった。F-4 がテヘランの南で UFO を追跡していたとき、最初の目標から 2 番目の物体が飛び出した。それは明るく輝き、大きさは月の 2 分の 1 から 3 分の 1 と推定された。2 番目の物体は F-4 に向かって急接近してきた。この時点でこの F-4 パイロットは、UFO に向けて AIM-9 ミサイル(\*サイドワインダー短距離空対空ミサイル)を発射しようとした。その瞬間、彼の攻撃制御盤はすべて電源が切れ、またもや通信機能が失われた。パイロットはその UFO を回避するために、極度の急降下を行なった。彼がその行動をとったとき、その UFO は推定 3 ないし 4 海里の距離で F-4 を追って降下した。パイロットが機体を旋回させると、その 2 番目の物体はその旋回半径の内側に現れた。次にそれは最初の UFO へと引き返し、再び完全に合体した。そしてほとんど時を移さず、別の物体が最初の UFO の反対側から飛び出した。それは途方もない速度で地表に向かった。F-4 の通信と攻撃システムの機能はこのときになって再び正常に戻った。

**UFO は着陸した：** F-4 パイロットたちは急降下していった UFO を見ながら、それが地表に激突し大爆発を起こすだろうと考えた。驚いたことに、その UFO は何の衝突も起こさずに地表にふわりと着陸したように見えた。さらにその物体は、2 ないし 3 キロメートル(優に 1 マイルを超える)先まで延びる強烈に明るい光を放った。

**続く通信障害：** そのイラン空軍機 F-4 は降下を始めた。その一方でパイロットたちは着陸した UFO から目を離さず、その場所に注目し続けた。彼らはジェット機を着陸させるまで何度か試みる必要があった。彼らがある磁針方位を通過するたびに通信不能になり、機内の計器盤が激しく振れた。さらに、その近くにいた 1 機の民間航空機もまた通信障害を報告してきた。しかし UFO を目撃したとの報告はなかった。F-4 がシャフロキ空軍基地への最後の着陸進入を行なっている間に、そのイラン帝国空軍(IIAF)パイロットたちは、もう一つの物体を目撃した - 今度のは円筒型で、両端に点滅しない明るい照明があり、中央部には 1 個の点滅する照明があった。管制塔は、その空域に確認されている他の航空機はいないと報告してきた。その円筒型 UFO が F-4 の上を通過したとき、パイロットたちは管制塔にその物体がいる空域を伝えた。そして管制塔は肉眼でそれを捉える事ができた。

**追跡調査：** 翌日、その F-4 パイロットたちは、彼らが見た UFO の着陸地点にヘリコプターで連れていかれた。そこは干上がった湖底であることが分かった。ヘリコプターに搭載された機器類は、その湖底の真上と周辺で強烈な警告信号を記録した。最も強い信号は 1 軒の小さな家屋付近から来ていた。ヘリコプターは着陸し、その住人たちは軍の職員から前夜に起きたことを訊かれた。その家族によると、彼らは大きな音を聞き、稲妻に似たとても輝く光を見た。さらに残留放射能の有無の調査も行なわれたようだ。放射能検査とその他の事後調査結果の記録を我々は入手していないが、この事件が衛星により確認されていたことは注目すべきである。衛星追跡番号が公開プロジェクトのトニー・クラドック氏から入手可能である。

-----  
73) Note two versions of the report showing different degrees of censorship when the documents were released. Appendix I. (Documents AI.10)

74) This event was later summarized in a confidential document by Captain H. Shields. Appendix I. (Document AI.11)

-----

## 6.9 英国空軍／米国空軍ベントウォーターズ・ウッドブリッジ - 1980年12月

これまで軍により報告され、情報公開法に基づいて入手した文書がある最も重要な接近遭遇の一つは、英国にある米英合同 NATO 空軍基地で起きた、複数の目撃証人がいる事件である。基地の副司令官だったチャールズ・I・ハルト中佐(後に大佐に昇進)は、現場で目撃したことを詳細なメモに残した。それが米国の研究者たちに公開されたことで、事件当時に作成された調査報告書の信頼性が著しく高められることになった。このハルト・メモには、最初の事件が“1980年12月27日未明(0300L頃)”<sup>75)</sup>に起きたと書かれている。ここは重要な点である。1994年9月、遭遇事件に居合わせた保安兵の一人ジェームズ・ペニントン軍曹が、その事件について自ら進んで逆行催眠を受けた。彼によれば、政府職員によって事件の数日後に行なわれた逆行催眠においてさえ、目撃証人たちの話は、内容は同じだが日付が異なったという。<sup>76)</sup> 報告書により日付が異なるのはこれで説明がつくかもしれない。一般には、1980年12月26日早朝に最初の事件が起きたとされている。

RAF(英国空軍)／USAF(米国空軍)ウッドブリッジ基地は、英国サフォーク州イプスウィッチの東8マイルにあり、もう一つのRAFベントウォーターズ NATO 空軍基地と共に双子基地を形成している。ウッドブリッジ基地に滑走路はあったが、主要な建物と部署はすべてベントウォーターズにあった。第二次大戦中、この双子基地はドイツ戦線のための整備基地として機能した。ハーキュリーズ輸送機と大型ヘリコプターがここを本拠地にしていて、そこは完全な米国基地で、隊員のほとんどが米国人であり、英国人はわずかな人数の飛行隊指揮官だけだった。<sup>77)</sup> 基地の周りを広大で密生したレンドルシャムの森が取り囲んでいた。

### 接近遭遇

1980年のクリスマス休暇の週末、2夜続けてベントウォーターズとウッドブリッジ双子基地で驚くべき接近遭遇が起きた。まず森の外にある近くの居住地で目撃された1機のUFOは、1980年12月26日午前2:30にベントウォーターズ空軍基地に面した森の中に着陸した。最初にそれはパトロール中の二人の兵士により目撃された。彼らは最初灯台からの光を見ているのだと考え、次に“ライトオールズ(投光機)” - 夜間の作戦行動に用いる事実上夜を昼に変える大きな可搬型の明るい照明 - かもしれないと推測した。彼らが注視している間に、その空中に浮かぶ光体は木の梢より低い高さまで降下した。兵士たちは、おそらく飛行機がベントウォーターズ基地の滑走路に墜落したのだと考えた。二人は本部に無線通報した。3人の救助保安兵が派遣され、その結果、この最初の二人組はこの後に起きた遭遇に居合わせる機会を失った。救助保安兵のうち二人はジープで、次には徒歩でUFOを追って森の中を進んだ。この二人の兵士によれば、それは形がやや三角形で、明るい白の機体の周囲に青、白、赤の照明があった。兵士たちがUFOが見える所まで来たとき、それは地面のすぐ上に浮かんでいたか、あるいは着陸ギアで地面に着地していた。兵士の一人が間近に迫ったとき、それは上昇し、ゆっくりと漂った。次にそれは森に明るい光を照射しながら、目も眩むような速度で真上に急上昇し、家畜の牛にパニックを引き起こした。この出来事に二人の

兵士は呆然となった。調査隊がまだ放心状態の二人を発見したのは、ほぼ 1 時間後だった。警察が呼ばれた； 空港のレーダー管制官に連絡がとられた。ヒースロー空港は、ベントウォーターズ基地近くで消えたレーダー目標を報告し、英国南部の全域から空中の輝く光体についての報告が続々と寄せられた。事件が起きた時刻にレンドルシャムの上空には、1 機の航空機もいなかったことが確認された。

遭遇はさらに翌日の夜も続いた。何人かの軍関係者が、人間が建造したいかなる装置もなし得ない振る舞いをする UFO を見た。それは形や大きさをも変化させた。

26 日の真夜中近くに、4 人のチームが前夜 UFO がやってきて着陸したレンドルシャムの森の区域を調査するために向かった。間もなく、彼らはとても異様な光のカーテンを目撃した。その下には靄(もや)か霧がかかっていた。兵士たちが近づくと、そこには 1 個の構造を持った物体があった。その形は明瞭でなかったが、黄色、赤色、青色の照明がその表面にあった。その多色模様の物体は後退したが、強い静電気が空気中に満ちており、髪の毛が逆立った。兵士たちはベントウォーターズ基地の副司令官ハルト中佐に無線連絡をした。彼は、動かずにそこで待て、増援隊を送ると告げた。

ハルト中佐と約 30 名の兵士が到着し、ライトオールズ(投光機)を設置し始めた。それは最初うまく機能しなかった。ハルト中佐は携帯用テープレコーダーに逐一状況を吹き込み、前夜 UFO が着陸した区域の上昇した放射能レベルを記録した。その地面には三つの圧痕が三角形に残されており、周囲の木々に熱を浴びた形跡があるのを暗視望遠鏡で見ることができた。

午前 2:00 少し前、ハルト中佐と兵士たちは、地上に 1 個の黄色-赤色の光体を見た。それは隣接する農場の家畜を怖がらせていた。突然、その光体は上昇し、それ自身複数の色光を放ちながら、彼らに向かって滑空してきた。他の隊員たちは、その光体が地面の上にある霧状の広がりへと合体し、その中で爆縮(implode)したのを見た。とてつもない閃光が起こり、その霧は 1 個の固体の物体に姿を変えた。それはドームを持った蛍光を発する円盤で、青い光で縁取られていた。その機体の青く光る部分は、眩いばかりの色光の粒子を地面に降らせていた。伝えられるところでは、二人の別の軍人がこの物体の写真を撮ったという。その機体は上昇し、その縁の周囲にさらに鮮烈な光の現象を見せた。それは兵士たちの目の前で空中静止し、小刻みに揺れた。UFO が飛び去ったとき、最大で 5 個の光り輝く物体が別々に目撃された。

皆はウッドブリッジ上空を飛び越えて海に向かう物体群を注視した。海でそれらの物体は長い時間ショーを演じた。色光を放ちながら、半月形になったり完全な円形になったりした。しかし、遭遇は再び迫っていた。UFO の 1 機が光線を下に照射しながら、森を越えて彼らに急接近してきた。二人の兵士がそれぞれに詳しく報告したところでは、一つの無定型光体が、樹幹を透かして光線を放ちながら木々の間を縫って飛来し、彼らの頭上で超新星のように爆発したかに見えた。その夜の信じ難い出来事は、さらにこの後 4 時間以上も続いた。<sup>78)</sup>

#### 一般市民の目撃者たち

最初の目撃者は、レンドルシャムの森の向こう側にあるサドボーン村に住むゴードン・レベットだ

った。レベットは、夜になったので犬を家に入れようと外に出ていた。1個の巨大なキノコ型をした輝く物体が海の方から漂ってきて、レベットと彼の大型番犬の頭上に無音で静止した。彼の犬は身震いし始め、翌日になってもこの出来事を終日怖がっていた。英国の UFO 研究者ジェニー・ランドルズとの面談において、レベットは次のように回想した：

何かの力で私の注意は空に向けられた。私にそうさせたものが何なのかは分からない。だが私は海岸の上空に一つの形を見た。それは私に向かってきた。私の犬もそれを見たが、犬の目はそれに釘付けになった。... その物体がとても低い高度まで降下し空中静止したとき、それは奇妙な燐光を発して輝いた。... その物体は森を横切って RAF ウッドブリッジ基地に向かって飛び去った。... 翌日私の犬はまだ動転していた。犬は小屋から出てこようとせず、体を震わせずくんでいた。犬のこの振る舞いはまったく普通ではなかった。<sup>79)</sup>

第2夜目の出来事は、軍ではない市民たちにより、基地の外でそれぞれ別々に目撃された。アーサー・スメークルは午後 11:00 頃、レンドルシャムの森を通って車で帰宅する途中、上空に多数の光体を見た。彼は帰宅してからそれを話したが、空軍基地に近かったので、それはおそらく航空機だろうと言われた。ウェブ家の人々は、マートルシャムの自宅に車で向かう途中の午前 2:30(このときは 12 月 27 日になっている)、空中に光体群の巨大な白い塊があるのを全員が見た。彼らは道路の脇に車を止め、それを注視した。それは無音で空中静止し、やがて途方もない速度で砲弾のように大空を飛び去った。その地区の何人かの農場主もまた、英国捜査当局の面談を受けたり報告書を提出したりした。一人の農場主は基地に呼ばれ、UFO がベントウォーターズ基地内に飛来する直前、空中に輝く光体を見たと言った。

森林警備隊員ジェームズ・ブラウンリーは、翌月に森の中で着陸の物理的痕跡を見つけた。ハルト中佐による公式の政府メモは作成後 2 年半公開されなかったが、ブラウンリーの 1981 年 1 月の報告には、樹冠に開いた 1 カ所の穴、焼け焦げた木々、地面上の異様な跡を見つけたことが述べられている。これらはハルト中佐が英国国防省と米空軍に公式に報告した内容と符合する。<sup>80)</sup>

ハルト中佐による報告書は、第2夜目の遭遇を以下のように詳しく述べている：

夜遅く、赤い太陽のような 1 個の光体が、木々の間を通して見えた。それは動き回り、脈動した。ある時点でそれは輝く粒子を放出しているように見えた。それから 5 個の別々の白い物体に分離し、消えた。その直後、空に 3 個の星に似た物体があるのに気付いた。2 個は北側、1 個は南側にあった。それらの全部が地平線の上約 10 度(\*仰角)にあった。それらの物体は急角度で素早い動きをし、赤色、緑色、青色の光を放した。北側の物体は 8-12 拡大鏡で見ると楕円形に見えた。それらは次に完全な円形になった。北側の物体は 1 時間かそれ以上そこにあった。南側の物体は 2 ないし 3 時間見えており、時折下に向けて一筋の光線を放射した。署名者も含め多数の人々が、段落 2 と 3 にある活動を目撃した。<sup>81)</sup>

これを書いている 1997 年時点でハルト大佐は、軍事史において最も顕著で記録に残された UFO 遭遇の一つを目撃した、存命中の軍司令官である。この事件は今なお調査の対象であり続け

ている。たとえば、ジョージナ・ブルーニ<sup>82)</sup>が書いた最近の本は、全編をベントウォーターズ事件に充てており、これまで多くの著者が述べてきたよりもはるかに広範囲の目撃者一覧を掲載している。

- 
- 75) Official Department of the Air Force memorandum by Lt. Col. Charles I. Halt, 13 January 1981. Appendix I (Document AI.12)
  - 76) Howe, Linda Moulton, Glimpses of Other Realities, Volume II: High Strangeness. Paper Chase Press, New Orleans, 1998. 478 pp.
  - 77) Randles, Jenny, Out of the Blue, Global, 1991, Berkley Books, New York, 1993.
  - 78) Details in this narrative taken from Out of the Blue by Jenny Randles, and NBC-TV television program Unsolved Mysteries, first air date, September 18, 1991.
  - 79) Ibid, p. 73.
  - 80) Ibid, p. 75.
  - 81) Official Department of the Air Force memorandum by Lt. Col. Charles I. Halt, 13 January 1981.
  - 82) Bruni, Georgina. You can't tell the people ? The definitive account of the Randelsham Forest UFO mystery, Sidgwick and Jackson, 2000, 449 pp.
- 

## 6.10 日本航空機による遭遇(1986年)

1986年11月17日、寺内謙寿機長はB-747貨物機の操縦桿を握っていた。二人体制の乗務員は副パイロットと航空機関士だった。寺内機長は1986年には29年間の経験を持つ熟練パイロットだった。1628便はアイランドのレイキャビク、アラスカのアンカレッジを経由して東京に向かう途上にあつた。その日の夕方6:00頃、同機はカナダ／アラスカ国境を越えつつあり、乗務員たちはアンカレッジへの着陸準備をしていた。アラスカ標準時午後6:19に、寺内機長はアンカレッジ航空路交通管制センターに交通情報の提供を要求した。航空交通管制官のカール・ヘンリーは自分のレーダーを確認し、近くに他の航空機はいないと機長に告げた。寺内機長の応答は、1628便と同一高度12時の方角に、接近して1個の照明をつけた飛行物体があり、同機を追跡あるいは尾行しているというものだった。寺内機長は、上下の高度にもいないか確認してくれと言うヘンリー管制官の要求に対して、必要ないと答えた。物体の高度は同機と同じだったと機長は後に語った。ヘンリー管制官はエルメンドルフ空軍基地レーダーに問い合わせた。そして彼らが寺内機長の報告と同じ位置に、機体反射像(primary target)を捕捉していることを知った。ヘンリー管制官と1628便の間で交信が頻繁に交わされている間に、ヘンリー管制官自身がJL1628便が報告した同じ空域に機体反射像を捕捉した。寺内機長は旋回と航路変更を要求して許可された。機長はヘンリー管制官に、その物体が747機の右側に付けて飛行していると報告した。

ある時点で、寺内機長は同機をその物体と平行にするために、右360度の旋回を要求して許可された。そのとき物体は視界に入っていなかった。寺内機長が元の航路に戻ったとき、その物体はまるで彼らを待っていたかのように、そこにいた。これは同機長が後にFAA(米連邦航空局)に対して述べたことである。ヘンリー管制官は、探知範囲内にあつたユナイテッド航空機と軍用機C-130に対しても誘導を行なっていた。どのパイロットも何も捕捉していなかった。ただし、このときは寺内機長もそのUFOを肉眼では見失っていた。

この出来事が続いている間にヘンリー管制官は、3種類の暫定レーダー像 (tentative radar target) を観測した。ヘンリー管制官が寺内機長にその物体の様子を訊いたとき、同機長は、その物体には何の模様も認められず、どんな種類の航空機かも分からないと述べた。快晴で一片の雲もない条件下で、寺内機長はこの未確認機の表面に白色と黄色の閃光が見えると述べた。目撃が起きている間中、747 機搭載のカラーレーダーにより、同機と物体との間の距離が測定された。それは 5 から 7 海里あった。

寺内機長と乗務員たちは、アンカレッジに着陸すると直ちに FAA のジャック・ライト<sup>83)</sup> により面談と事情聴取を受けた。事情聴取の中で寺内機長は、自分自身に今回のようなことが起きたのは初めてだと述べた。寺内機長による事件の説明は、次のようだった。高度 35,000 フィートでカナダ／アラスカ国境を越えると、すぐに 1 個の物体が同機の 5 から 7 海里前方に現れた。それは時には B-747 よりも大きく、4 個か 5 個の照明が並んでいた。時折複数の UFO が見られた。目撃は 1 時間近く続いた--FAA 報告書によれば 55 分間だった。

機長と乗務員たちは少し動揺していたが、FAA (米連邦航空局) は彼らが専門家であり理性を持っていたと断定した。

ティモシー・グッドが彼の書 *Above Top Secret* の中で説明しているところでは、寺内機長はその出来事を通常の言葉では説明できないとし、それらの物体が素早く移動したり停止したりする様子から、それは地球外起源であるかもしれないと語った。機長は、彼らがフランスワインを日本に運ぶ途中であったとしたうえで、“たぶん彼らはそれを飲みたかったのだろう”と感想を述べた。<sup>84)</sup>

この事例については、航空交通管制官カール・E・ヘンリー<sup>85)</sup> による身上書と AAL-1 所長のフランクリン・L・カニンガムによる警戒報告書 (Alert Report)<sup>86)</sup> も読まれたい。

83) Incident and interview report by Jack Wright (FAA) in Appendix I. (Documents AI.13).

84) Good, Timothy, *Above Top Secret*, William Morrow, New York, 1988, p. 432.

85) Personnel Statements - Federal Aviation Administration by C. Henley in Appendix I. (Documents AI.14).

86) Alert Report by Franklin L. Cunningham, Director, AAL-1 in Appendix I. (Documents AI.15).

## 6.11 英国における 1990 年代の目撃多発現象 - 三角形飛行物体その他

空飛ぶ三角形物体 - 巨大で、無音で、低高度 - 飛行速度は遅いが、とてつもない速度にまで加速できる。我々がこれらの物体について知り始めたのは、1990 年に始まったベルギー上空における目撃多発現象のときだった。公開プロジェクトは現場での直接調査 (real-time research) を行なうために、最初の調査チームの活動を 1992 年 3 月に開始した。<sup>87)</sup> 2,000 を超える目撃事例がベルギーで収集された。それらの多くは警察と軍の関係者によるものだった。<sup>88)</sup> 実に、この三角形物体は民間と軍の双方のレーダーにより追跡され、従来のいかなる航空機、あるいは実験機をもはるかに凌ぐ振る舞いと速度を示した。<sup>89)</sup>

1992年、UFOの活動がスコットランドで急増した。エジンバラとグラスゴーに挟まれた町々や谷間に腰を据えたかのように、目撃報告が定期的に寄せられるようになった。ボニーブリッジという特定の町が、この目撃多発の中心地と思われた。人口約5,500人の結び付きの強いこの共同体で、若者も老人も同じように、三角形物体を含む様々な飛行物体について数多くの目撃情報を寄せた。ボニーブリッジの議員ビル・ブキャナンは、1996年8月にこう述べた。“私の知る限り、過去数年間に3,000人の人々がこの空で何か異常なものを見ている...名乗り出ることを恐れている人々はさらに多いかもしれない”<sup>90)</sup>

この多発現象が始まって数年間、目撃のほとんどは、しばしば回転したり操縦されているように振る舞ったりする光球、あるいは黒い円盤だった。1990年代中頃になると、三角形物体の目撃がしばしば報告されるようになった。フォールカーク町のマルコム家が率いるスカイサーチ・スコットランド(Skysearch Scotland)という調査グループは、報告のみならず、三角形に配列された光体群、光球、および黒い三角形の空中静止物体と思われるビデオ映像を収集し始めた。目撃者たちは、これらの物体が海に飛び込んだり、海から出現したりする現象を報告した。ボニーブリッジ地区住民の何人かは、第5種接近遭遇すなわち人々と物体が相互作用(交信)をした体験について詳しく語った。アーマデル町の一人の青年は、雷雨の間に空から急に降りてきた、35ないし40フィートの棒状物体について語った。それは生け垣の木の上を低空で飛び、青年の車の真上を通過して原野で停止した。その目撃者の報告によると、“それは無音で空中静止し、地面から約15フィート離れて、ただそこにあった。私は車から出て、もっとよく見るためにハロゲン灯をそれに向けた。すぐにその球が切れた。それから車のヘッドライトが消えた。私は車のエンジンをかけようとしたが、かからなかった。突然、その物体は跳び上がり、車の頭上を越えて信じ難い速度で、もと来た方角へ飛び去った”<sup>91)</sup> この目撃者は携帯無線電話で警察を呼んだ。しかし、それは目撃が起きてから1時間後のことだった。この青年は失われた1時間について説明することができない。彼の車が牽引されて町に戻ったとき、その電気系統は完全に機能を回復した。

1994年になって、巨大な三角形飛行物体の目撃事例が、英国から相次いで寄せられるようになった。報告の大部分は、ミッドランド地方と北部からのものだった。しかし、その幾つかはイングランド南西部から寄せられた。どの事件も著しい類似点を持っていた。肉眼で目撃した人々は、夜空に溶け込んだ暗色あるいは黒い三角形飛行物体を報告した。しばしばその物体の三つの頂点にはそれぞれ1個の照明があり、中心部には別の種類の照明があった。この巨大物体は、低空を低速度で飛んだ。それらはまったくの無音か、微かにブーンという音を発した。

1996年の夏、ある家族が日曜日の夕暮れ時、帰宅するためにイングランド南西部のグラストンベリーに向かっていた。突然、運転手 - 父親 - は車に速度を合わせている暗い、無音の物体に気付いた。家族全員が、彼らの頭上を低空で飛んでいる1機の巨大な三角形飛行物体を目撃した。短時間の目撃の後、その物体はそのまま消えた。<sup>92)</sup> 1996年10月と11月、黒い三角形飛行物体の特筆すべき目撃多発現象が英国で発生した。その中には西ウェールズ・カーディガン湾地区の目撃多発地点も含まれていた。そこではこの2ヶ月間に数え切れないほどの目撃が起きていた。

1996年8月のサンデータイムズ誌(ロンドン)に掲載された2本の記事は、三角形飛行物体は米国空軍とNASA(航空宇宙局)により1996年8月に公表された実験機であることが確認されたと



報じた。それらの記事では、1995年に747型民間機との異常接近が起き、政府が秘密を明かしたのだと推測している。カリフォルニア州とネバダ州で目撃された“空飛ぶドリトス”(\*三角形コーンチップのスナック菓子)と呼ばれる三角翼実験機の噂は1995年から広まっていた。もちろん、これは正式名称ではないだろう。サンデータイムズ誌によれば、“波乗り(wave-rider)”航空機が1950年代に英国の科学者テレンス・ノンワイラーにより提唱された。記事はその航空機の仕様を述べる--時速3,000マイルを超える速度が可能; 空気の‘波に乗る’; 低速飛行と地面に近い低高度で浮遊あるいは空中静止することが可能(“LoFlyte”実験機と呼ばれる)。記事はさらに航空電子工学専門家の次の言葉を引用している。三角翼はレーダーで追跡されない。またその複雑な操縦のすべてを人間のパイロットが行なうことは不可能なので、コンピューターがこの航空機を‘飛ばす’。<sup>93)</sup>

巨大な三角形飛行物体の謎はほとんど解明されていない。目撃報告は今日に至るも世界中から寄せられている。これらの三角形飛行物体の数百に上る最近の目撃事例を、全米UFO報告センター(NUFORC; [www.msatech.com/nuforc/index.html](http://www.msatech.com/nuforc/index.html))で見ることができる。

87) Greer, Steven M. UFOs over Belgium, Chapter 30 in: Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications, Crossing Point, Inc. Publications, Afton, VA 1999.

88) US Department of Defense report of Belgium sightings in Appendix I. (Document AI.16).

89) Paris Match article includes photos of radar screen sighting of UFO in Appendix I. (Document AI.17).

90) Daily Mail, (London) Weekend section, August 3, 1996.

91) Ibid

92) Personal correspondence, The Disclosure Project.

93) The Sunday Times, London, August 11, 1996, as reported by Greg Little, Alternate Perceptions magazine, Issue #36, Fall 1996.

## 6.12 メキシコでの目撃多発現象 - 1991年以後

1991年の日食は、メキシコシティーでは皆既日食だった。多くの人々が屋外で観測し、ビデオに撮った。彼らが大変驚いたことに、日食と共に映像に捉えられていたものが、前例のないUFO目撃多発現象の先駆けとなった。それは1991年以来、これを書いている1997年まで、少しも衰えないで続いている。

日食の当日、四つの都市の17人の人々が、同一物体と思われる何かをビデオに撮った: 1個の銀色円盤で、その厚ぼったい形から“ホッケーパック(hockey puck)”のあだ名を付けられた。あるテープはテレビ局の重役によって撮られ、また別のテープは牧師によって撮られた; 実に、この広大なメキシコの大地に広がる多くの都市の様々な職業の人々により撮影されたのである。テープはジェーム・マウサン宛ての郵便物に入れられて届き始めた。彼はメキシコ版“60 Minutes(シックスティーマニッツ)”(\*1968年からCBSで放映されている報道特集)の司会を務めている。マウサン氏は、この現象の綿密で徹底的な調査を開始した。彼は番組のゲストとしてビデオを撮った多くの人々を出演させた。彼の調査には広範囲に及ぶコンピューター分析も含まれた。その結果明らかになったことは、同じ型のUFO、あるいは“ovni”とメキシコで呼ばれている物体が、すべてのテープに捉

えられており、そのどれもが、その背後の大気を歪ませているように見えるということだった。これらの特徴は、その7月の日に撮られたそれぞれのテープに認められた。調査が進められ、恒星、惑星、および気球は、それを説明し得る原因から除外された。時は流れたが、物体はテープに撮られてマウサン氏を含む研究者たちに送られ続けた。多くの ovni (UFO) が、メキシコシティ空港で発着するジェット機の近くで撮影された。パイロットや航空管制官たちによる肉眼での目撃もしばしばあった；しかし、物体はレーダーには映らなかった。ovni が近くにいたとき、計器類が突然一時的に機能しなくなったというパイロットからの報告が幾つかあった。航空機の安全に対する懸念があった。しかし幸いにも、危険な目にあった経験は誰にもなかった。

1991年のメキシコ目撃多発現象と関連する興味深い事例は、同日に4,000マイル離れた場所からやってきた。同一物体と思われるものが日本の雲仙岳でビデオに撮られた。実際に、メキシコの四つの都市で撮られたビデオを、日本で撮られた物体映像と共に分割画面表示すると、その違いを見つけるのは不可能である。日食時に起きたメキシコ目撃多発現象のすべてを、手の込んだほら話だと主張する人々は、地球の反対側で同一の物体が同時に目撃された事実の説明に窮するだろう。さらにマウサン氏には、1991年以來3,000を超える‘ホッケーパック’UFOのビデオが、巨大な三角形飛行物体のそれと共に送られてきている。

### 6.13 バルジニャでの出来事 - ブラジルで地球外生物を捕獲？

ブラジル・ベロオリゾンテ市のビットリオ・パカッチーニ氏から提供された情報

1996年1月20日、ブラジルで軍が地球外生物と思われる生物 - まだ生存していた - を捕獲した。事件は、ブラジル中心部ミナス・ゲライス州のバルジニャ市に隣接する地区で起きた。この出来事はブラジル、そしておそらく全世界でこれまで記録された最も重要なものの一つと考えられる。軍当局は、その作戦の詳細について口を閉ざしたままである。しかし、ビットリオ・パカッチーニ教授とウビラハラ・ロドリゲスの調査により、その情報は UFO 研究界の間に漏れた。二人は近くに住んでおり、真面目で熱心な研究者だと考えられている。彼らがこの事例の調査に費やした時間は、3,000時間を超えた。

1月20日の午後、現地時刻の午後3:30頃だったが、リアン、バルキリア、カティアという名前の3人の女性が町の外側を歩いていた。彼女たちは、家から数ブロックしか離れていない野原の端の小さな茂みで、1体の奇妙で小さな生物に遭遇した。その日は土曜日で、彼女たちは仕事から帰宅する途中だった。ある空き地を横切っているとき、彼女たちの注意は、ほんの数メートル離れた所にいるとても奇妙な生物に引きつけられた。その ET は膝を曲げており、怪我をして痛みを苦しんでいるように見えた。そのとき、UFO は目撃されていなかった。彼女たちは数分間その生物を観察し、それから逃げた。今偶然に出会ったのは悪魔かもしれないと思い、怖かったのである。

この3人の女性は、上記の研究者たちにより広範囲に及ぶ質問を受け、起きたことについては少しの疑念も残さなかった。とても素朴な彼女たちは、その生物が暗い色をし、身長4から5フィートの小さな身体を持っていたと説明した。それにはまったく髪の毛が無く、茶色の大きな頭部と小さな首があった。顔には二つの目 - 大きくて赤い - があり、瞳は見えなかった。口の位置には細長い切れ目があり、鼻はとても小さかった。そして、興味深いことには、ちょうど額の頂部に三つの隆起

があった。彼女たちはその隆起を角(つの)と表現した。これこそ悪魔に出会ったと彼女たちを怖がらせた原因だった。

これらの情報をもとに、パカッチーニとロドリゲスの二人の研究者は、バルジニアの町周辺のあらゆる場所で、誰か他に同じ生物を見た人はいないか、調査を始めた。彼らは、同じ場所で生物と軍の作戦を見た人、また別の場所でおそらく別の生物を見た人など、数人の目撃者を見つけ出した。調査を進めるうちにこの二人の研究者が知ったのは、まさにその日の朝に、彼女たちが遭遇した場所から数ブロック離れた所で、陸軍のトラックと他の軍用車両を見た別の目撃者がいたことだった。

軍が何をしていたのかを突き止めようとしていたパカッチーニとロドリゲスは、数人の兵士と軍曹に会うことになった。兵士の一人が、軍の任務について匿名で話すことを決心し、内密の録音された面談に応じた。その軍人は次のことを確認した。1月20日午前9:00頃、軍からバルジニア消防署に、ハルディム・アンデレ地区で珍しい動物を1匹捕まえてほしいという電話があった。これに対処したのは、マシエル少佐の指揮下にあったファルアレス軍曹、兵士のニバルド、ルーベンス伍長、および兵士のサントスだった。伝えられるところによると、マシエル少佐もそこにいたという。現場に着くと、その消防署員たちは、これが珍しい動物などではないことを知り、バルジニアから約10マイル離れて隣接するトレス・コラソニス市にある陸軍軍曹学校(ESA)に知らせるべきだと悟った。軍曹学校から来るのに要すると思われた時間よりも早く、陸軍のトラックが現場に現れた。消防署員たちは、ESAの上層部もまた事件については知らされていたのだと理解した。

その生物は、野生動物を捕獲するときに普段用いる網や他の道具を使って捕獲された。まだ生きていたその生物は、1メートル四方の木箱に入れられた。それは耐久性のある布で覆われ、この事件のすべてがトラックに積み込まれた。その生物は箱の中に体を丸めて入れられ、網でくまられていた。目撃者によれば、それは蜂に似たブンブンという音を発していた。トラックはESA(軍曹学校)に向かった。ワンダレイ中佐からこれに関わった全員に対して、これは秘密作戦であり、事件のことは誰にも話さないようにとの命令が出された。興味深いことに、ワンダレイ中佐の専門分野は原子-生物-化学戦争だった。その当時ESAには将軍が一人いたにもかかわらず、彼がその作戦を指揮した理由は、たぶんそれだったのだろう。

警察官のマルコ・チェレセはその生物1体の捕獲に関わった。彼は無防備にその生命体に触った。彼は2週間後に全身感染で死亡した。彼の家族はパカッチーニ氏に、彼の最後の血液検査結果を見せた。そこには、彼の血液中に未知の毒性物質が8パーセント含まれていると記されていた。パカッチーニ氏によると、バルジニア警察署はずっと長い間、チェレセ氏が1996年1月20日には出勤さえしていなかったことを証明しようとしてきた。しかしチェレセの家族は、当日の夜に彼は確かに勤務に出ていたこと、また彼が着るものを取り替えるために一時帰宅し、任務で遅くまで仕事があるから夕食には戻れないと言ったことを確認した。

最初の兵士がパカッチーニとロドリゲスによる録音された面談に応じた後、他の何人かの軍関係者が、身元を公表しないという条件で、事件について話すために名乗り出た。名乗り出た全員が内密の録音された面談に応じた。その全員が確認したことは、おそらくその日の午後3人の女性によって目撃された2体目の生物が、陸軍、消防署、および警察の秘密調査部から来た職員らによって、同じ日の夜に捕獲されたということだった。パカッチーニとロドリゲスによる調査活動にもかかわらず

らず、回収作戦の詳細について多くは知られていない。

最初の生物と同種の 2 体目の生物は、生きたままバルジニャの地域病院に運ばれた。その地域病院で数時間を過ごした後、その生物はもっと設備の整ったウマニタス病院に移送された。二日後の 1 月 22 日午後、その生物 - もう死んでいたが - を ESA に運び去るために、大規模でうまく偽装された作戦が展開された。

その地域病院の看護婦と関係者数人が、事件後暫くは口を閉ざされていたが、幾つかの事実を確認した。その生物を見たウマニタス病院の職員全員が、家族を含め誰ともそれについて話さないように、また特に報道機関と UFO 研究者を避けるように警告された。

その移送作戦に関わった軍関係者で、内密の面談に応じた何人かが語ったところでは、3 台の陸軍トラックが使われ、それぞれに 2 人一組のチームが乗った。彼らの推測では、おそらく地球外生物と思われる 1 体の遺骸を運び去るために 3 台のトラックが使われた。そして、実際にその生物の遺骸を運んでいるのが誰なのか、トラックの運転チーム自身が知らないようにした。ブラジルの研究者たちは、この事件の後でこれらの事実を突き止めている。運転チームは病院そのものからは外に出されていたが、作戦の詳細を目撃した。ブラジルの S-2 - 陸軍内部の情報部 - から来た部員たちが、その遺骸を病院内部から運び出し、それを木箱の中に横たえてトラックの 1 台に乗せる任務を担当した。

3 台のトラックのすべてが ESA (陸軍軍曹学校) に戻った。翌朝 4:00 に、それらのトラックはサンパウロ州カンピナスにある別の軍施設に向かった。200 マイルの行程だった。そこで、その遺骸はブラジルでも最高の機関の一つであるカンピナス大学に移送された。その遺骸はフォルトナート・バダン・パルアレス博士により検死解剖に付された。彼はブラジルで発見された有名なドイツ・ナチスのメンゲレの遺体を検死解剖したとき、当代最高の法医学者の一人として世界的な名声を得た人である。しかし、パルアレス博士は、1996 年 1 月に発見された生物の検視解剖に参加したことを、公然と否定したままである。

バルジニャ事件から 1 年経って、もう一人の目撃証人が名乗り出た - ジョーオ・バスコ・マノエルである。彼はパカッチーニ氏に電話をしてきた。彼 (パカッチーニ) とロドリゲス氏は彼 (バスコ) に会い、話を聞いた。彼は最初の捕獲を単独で目撃していた。1 月 20 日の 10:45 頃、バスコ氏は家々を回って魚を売り歩いて、その場所にいた。そのとき彼の注意を引いたのは、1 台の消防車と消防隊員たちだった。しかし火事の様子はなかった。彼は身を隠してその出来事を注視した。彼は 6 人の消防隊員が茂みから慌ただしく出てくるのを見た。その後から 4 人の隊員が大きな手袋をはめて出てきたが、彼らは網でくるまれた生物を囲むようにして運んでいた。その生物はトラックに乗せられ、彼らは走り去った。バスコ氏は、周囲に鼻をつくアンモニアに似た臭いが充満しているのに気付いた。バスコ氏は記者会見で自分が見たことを公表し、少なくとも消防隊員のうちの二人は確認できたと述べた。当局がこの話を否定したために、これは混乱を引き起こすことになった。バスコ氏は記者会見の後、威嚇され脅迫を受けた。脅迫事件の後で、パカッチーニ氏は彼に会うために多大な時間を費やした。バスコ氏は結局ミナス・ゲライス州から引っ越していった。

ブラジルのメディアは、事件について大々的に報道した。国民の大多数は、事件が現実に関

たと考えているが、軍と行政当局は事実について堅く沈黙を守っている。研究者のパカッチーニとロドリゲスは、この捕獲に関わった警察官たちがその後異動し、昇進した事実を突き止めている。事件後暫くの間、バルジニャがあるミナス・グライス州南部の地域では、これまで記録された最大の UFO 目撃多発現象の一つに見舞われた。その中には、近距離からの巨大 UFO 目撃報告、および報道された住民たちとの接触が含まれる。この事件はウォールストリートジャーナル・ヨーロッパ<sup>94)</sup>の第1面で報道された。ただし、記事の扱いはきわめて皮肉を込めたもので、4.1 節で論じた主要メディアの報道姿勢を示すよい例となっている。

-----  
94) Moffett, Matt, The Wall Street Journal Europe, July 1, 1996  
-----

#### 6.14 アリゾナでの目撃 - 1997 年 3 月

1997 年 3 月 13 日、複数の飛行物体が、アリゾナ州南部の広い範囲を横切って移動した。数千人が目撃し、多くの人々によりビデオに撮られ、軍と政府が声明を出したこの 10 年間で最大の UFO 事件は、報道で大きく取り上げられ、世界中の注目を集めた。

ワシントン州シアトルにある全米 UFO 報告センター (NUFORC)<sup>95)</sup> に第 1 報が入ったのは、3 月 13 日の午後 8:16 だった。アリゾナ州フェニックスの北 60 マイルにあるポールデンの退役警察官が、5 個の赤い光体が一団となって南に向かったと電話をしてきた。2 分もしないうちに、ポールデンの南 15 マイルにあるプレスコットから別の報告が舞い込んだ。この後、ウィッケンバーグからテンピにかけた地域から、多くの報告が堰を切ったように流れ込んだ。センターが受ける報告についてはまず疑う、と自ら認めているセンター所長のピーター・ダベンポートは、こう述べた：“アリゾナ上空の出来事は、私がこれまで見た最も劇的なものだ。... 我々がここで経験していることは現実である。彼らはここにきているのだ”<sup>96)</sup>

空中の物体群が、フェニックス・スカイハーバー空港に至る航空路を越えてやってくると、複数の民間パイロットから管制塔に、光体の確認を求める無線が入った。航空管制官はその答を持っていなかった。彼らはそれらの物体を肉眼で見ることができたが、説明のつかない何物もレーダー画面に現れていなかった。

3 月 13 日が過ぎて行なわれた調査により、電話での報告者たちが、テレビ局やラジオ局ばかりでなく、警察署の電話回線にも殺到したことが分かった。フェニックスに近いルーク空軍基地にも、州都大フェニックスの上空を南へ移動する物体群を見たという報告する電話が押し寄せた。大フェニックス上空の物体群の速度は、多くの目撃者の推定によると、時速 30 マイルというゆっくりしたものだった。このことは、物体群は目撃され、ビデオに撮られることを確かに意図していたことを示唆する。

様々な種類の UFO が報告された： 三角形、直線状に並んだ光体、V 字型あるいはデルタ型編隊の球体、実際に三角形の機体を持った 1 個の物体。多くの目撃者によれば、光体群は内部から発光していたようだったという - それらはとても明るかったが、輝いたり光を放ったりはしなかった。近距離でそれらを見たほとんどの人々は、光体群はオレンジ色ないし赤色の縁と中心を持つ白色だったと述べた。目撃者の何人かは、光体の編隊の背後にぼんやりとした暗い影を認めることがで

きた。それはゆっくりと通過するとき、星々を歪ませたり覆い隠したりした。公開プロジェクトの代表と調査部長は、自宅からその光体群をはっきり見たという退役空軍パイロットと3月14日の晩に話をした。彼はケアフリーに住んでいる。そこはフェニックスの北にあり、市内よりもはるかに光の汚染が少ない。彼の説明では、その光体群は無音かつ動きがゆっくりで、編隊を崩さなかった。彼によれば、これは空軍パイロットだったときに彼が空中で目撃したどんなものとも似ていなかった。

すべての目撃者の一致した意見では、目撃された編隊の形はともかく、光体あるいは物体はとも動きがゆっくりで、きわめて巨大で、無音だった。物体の大きさは900フィートから1マイルを超えるかと推定された。目撃者たちが撮ったビデオをテンピ市のブレッジ研究所がコンピューター分析した結果は、全長が6,000フィートだったことを示した - 優に1マイルを超える。

USAトゥデー紙のリチャード・プライスは、1997年6月18日の紙面に、目撃してから自分はすっかり変わったと述べたビル・グレイナーとの面談記事を掲載した。グレイナー氏は懐疑論者から、彼が言うところの“驚いたが、あまり怖くなかった”(\*USAトゥデー紙の記事ではTim Leyの発言)ものを目撃した人になった。セメント車の運転手であるグレイナー氏は、フェニックスの北の山からセメント荷を運んで降りてきたとき、白色、オレンジ色、赤色をした2個のUFOを見た。それらの頂部は回転していたと彼は語った。グレイナーは、その球体の一つがそこから移動してルーク空軍基地上空を飛んだのを目撃した。彼は、3機のF-16戦闘機がUFOに向かって発進したと述べた。それらのジェット機が近づくと、そのUFOは真上に砲弾のように急上昇し、見えなくなった。グレイナー氏の言葉である：“それは常軌を逸していた。パイロットたちも確かにそれを見た。あの基地の連中と同じ真似はできない。何なら全国テレビに出て嘘発見器のテストを受けてもよい... 政府はありのままを認めればよい。それは50,000人の人間にスタジアムでフットボールの試合を見せながら、我々はそこにいなかったと誰かに言わせるようなものだ”

ブレッジ研究所のジム・ディレットソと共同運営者のマイケル・タナーが、一般市民からのビデオテープを解析して分かったことは、別々の4編隊または物体群が、1997年3月13日の晩に、北から南へ移動したということだった。この地域を横断した物体群の通過は106分間続いた。その光体群は一様で、その広がりから端まで光の明るさも強度も同じだった。そして輝かなかった。それらは航空機の照明でも、ホログラムでも、レーザーあるいは軍の照明弾でもないかと断定された。ビデオに映っているフェニックス市の夜景と比較すると、UFOの特異性がよく分かる。

アリゾナ州南部の住民たちは興味をそそられ、正体を知りたいが、行政と軍当局からの説明を期待した。様々な軍関係者からの報告では、その光体群は国家警備隊の対抗機動演習で使用した照明弾だとされた。しかし、国家警備隊は1997年3月13日に数千人のアリゾナ住民により目撃された光体群を発生させることはできず、その意図もなく、そうしなかったことが、調査により明らかになったとディレットソ氏は述べた。ルーク空軍基地から飛び立ったジェット機は、あの夜にフェニックスの上空にいたが、基地の広報担当官は報道機関に対し、ジェット機の照明ではあの目撃を説明できないかと断言した。

地元住民の世論の高まりを受け、フェニックス市の女性市議員フランセス・バーウッドが、誰か公式の調査を行なっているかと市議会でも質問を提起した。住民たちはすぐさま彼女の意見に飛びつき、彼女を政府に対する彼らの“公式の”窓口とした。女性市議員バーウッドは、自分自身でそ

の物体群を見てはいないと言ったが、彼女の選挙区民の多くが見ていた。彼女が調査についての質問を提起したことを住民とメディアが知ると、今や中心となる一人の公的な代理人を持った説明を求める住民たちから、何百という電話を受けることになった。

しかし、市議会、市長事務所、知事事務所、および上院議員ジョン・マケインは、何らの公的行動をも起こさせることができなかった。上院議員マケインは、それを空軍に委ねた。空軍は 1997 年 6 月に、事件について調査するつもりはないと声明を出し、地元の管轄に戻した。そして、もちろんこれは、空軍が 1969 年にブルーブック計画を終了させ、公式に UFO の調査から手を引いて以来、空軍がとり続けている立場だっただろう。

2 年後に、上記の全米 UFO 報告センター (NUFORC) は、目撃が発生して以来収集してきた相当量の証拠に基づき、そのウェブサイト<sup>95)</sup> で特別最新報告書を公表した。その最新報告書は、物体の大きさ、外見、および動きのすべてについて、それ以前の報告書の内容を立証した。フェニックス・スカイハーバー空港で地上にいた航空管制官とある民間航空機乗務員による目撃および報告とは対照的に、“ルーク空軍基地の高官たちは、彼らは事件のことは何も知らず、事件について一般市民から基地に寄せられた報告は何もなかったと述べた”(目撃事件が起きた翌日の声明)。基地への電話であることが明らかな長距離電話の料金請求書は、これらの高官たちの声明と矛盾する。ついに、ルーク空軍基地に駐在する隊員だと身分を明かした一人の目撃者が、次のように報告した。空軍は基地から 2 機の戦闘機を発進させた。そして、“そのうちの 1 機がインディアン・スクール道と 7 番大通りの交差点上空で、1 個の巨大物体を‘迎撃’した”

この大変よく記録に残された出来事を分析し、互いに矛盾する諸報告から真実を選び分けることが 2 年経った今でも困難であるのは、驚くにあたらない。1997 年 3 月のこの重要な日の謎を解く新たな手掛かりの探究は、研究者、分析専門家、メディア、そしてアリゾナとそれを越えた地域に住む何千人もの人々の興味の対象であり続けている。

-----  
95) Website at: [www.msatech.com/nuforc/index.html](http://www.msatech.com/nuforc/index.html)

96) Richard Price, Arizonans say the truth about UFO is out there. USA Today newspaper article, June 18, 1997, p. 4A. See reprint of the whole article in Appendix (Document AI.18).

97) Report at: [www.msatech.com/nuforc/phoenix.html](http://www.msatech.com/nuforc/phoenix.html)  
-----

## 6.15 イリノイ州セントクレアでの 2000 年 1 月の目撃

さらに最近の目撃で、よく記録に残され、複数の目撃者がいる事件の一つは、ミズーリ州セントルイスのすぐ東にあるイリノイ州セントクレアで 2000 年 1 月 5 日未明に起きた。この目撃事件は、NUFORC (National UFO Reporting Center; 全米 UFO 報告センター)<sup>98)</sup>、MUFON (Mutual UFO Network; 相互 UFO ネットワーク)<sup>99)</sup>、および NIDS (The National Institute for Discovery Science; 全米発見科学研究所)<sup>100)</sup> を含む幾つかの機関により研究され、後に記録映画<sup>101)</sup> が放送された。その映画には、様々な目撃者全員の報告に基づく素晴らしいコンピューターシミュレーション映像が含まれている。以下の要約は、この出来事に関する NUFORC 報告<sup>102)</sup> から引用である。

“2000年1月5日水曜日、全米 UFO 報告センターに2本の電話連絡が入った(太平洋標準時 03:16, 03:51)。発信人はイリノイ州セントクレア郡レバノン警察署に勤める警察官トーマス・‘エド’・バートンだった。その電話が当センターに知らせていたのは、この日の未明 04:10(中部標準時)頃、イリノイ州セントクレア郡とその周辺で UFO 目撃が発生したというものだった。

“その後で同じ日の午前、我々はバートン警察官と話すことができた。彼が我々に語った内容は、次のとおりだった： 当日の未明 04:10(中部標準時)頃、彼はセントクレア(イリノイ州)緊急派遣係官からの発表を耳にした。一人の住民がイリノイ州ハイランド警察署に駆け込んできて、近くのとて妙な物体が1個見えるので、外に出て見てくれと警察官に頼んだというものだった。その住民は、その奇妙な外見の物体を仕事場に向かう途中で目撃した。彼は一人の警察官がその物体を彼と一緒に目撃するまで、警察署を立ち去ろうとしなかったらしい。

“無線でその事件のことを聞いたバートン警察官は、レバノンの彼がいた場所から南東の方角を見た。そして、地平線に近い空中に浮かんでいる、2個のきわめて明るい白色光体に気付いた。それらの光体が発する光が大変強烈だったので、その光景はバートン警察官に、日本の軍旗に描かれる‘旭日’模様を思い起こさせた。間もなく、その2個の大きな光体は一体化したように見え、物体が放っている光は急激に増したようだった。

“バートン警察官はその物体に近づこうとして、南へ東へと車を走らせた。彼は頭上警告灯を点灯し、ときどき時速 75 ないし 80 マイルの速度を出しながら、その物体に向かった。物体は依然として彼の位置からおおよそ南東の方角にあった。間もなくバートン警察官は、その物体が彼に向かって移動しているらしいことに気付いた。

“彼は車を止め、頭上警告灯を消し、助手席側の窓を引き下げた。その物体は彼の場所に近づいてきて、推定高度 1,000 ないし 1,500 フィートで頭上を通過した。物体は地上の彼の場所から推定水平距離 100 フィート以内にあったが、この時点ではほぼ西あるいは北西に向かっていた。その物体ははっきりとした三角形で、三角形の各先端には3個の白色照明があった。また、後部には奇妙な照明の‘銀河(集合)’があり、その中には白色、赤色またはピンク色の色調、そしておそらく他の色もあった。

“バートン警察官の頭上を過ぎてから、その物体は、見たところ傾きも揺れもせず、ふいに左方を向いた。次に突然ものすごい加速をし、猛スピードで西に約 8 マイル移動した。彼の推定ではその間約 3 秒だった。(注記： バートン警察官は、我々のセンターとの間で交わされた数回に及ぶ電話会話と少なくとも 1 回のラジオ放送で、その物体がほとんど信じ難い素早さで加速し、ほんの数秒間で相当の距離を南西に移動した様子を強調した。彼によれば、その速度はほとんど想像を絶するものだったという。これは本事例の特徴の一つであり、物体がほぼ確実に人間が造ったものではないことを強く示唆している)

“彼はセントクレア緊急派遣部に、自分がその物体を目撃したことを無線通報した。そしてそれが向かった方角がおおよそ南西だったと教えた。彼は緊急派遣部が、彼がいる場所の南と西にある部署、たとえばシャイロー、ミルシュタット、デュポなどに連絡し、そこの警察官たちに最もよく見える場所からその物体を探させるように勧めた。



“少なくともシャイロー(イリノイ州)の一人の警察官が、次にその物体を目撃したようだ。また、名乗り出たり身分を明かしたりしたくないらしい別の二人の警察官も、彼らの町の共同墓地に立ってその物体を目撃した。

“ミルシュタット警察署の警察官クレイグ・スティーブンスがその交信を聞いていた。NUFORC は彼とも話をした。彼はそれを聞き、夜空にその物体を発見できるかもしれないと考え、巡回パトカーを町の暗い場所に向けて走らせた。すぐに彼は自分の場所から西の方角、地平線から約 45 度の高さにその物体を見つけた。そして、それが‘巨大’な物体であると判断した。彼の推定では、物体は‘1 階か 2 階の高さがあり、おそらく 3 階分の全長があった’。その表面には幾つかのとても明るい照明があった。

“セントクレア緊急派遣部は、誰かできればその物体を写真に撮るように指示した。それに応えて、スティーブンス警察官はパトカーのトランクからポラロイド型カメラを取り出し、素早くその物体を写真に撮った。外気温がおおよそ華氏 18 ないし 20 度(\*摂氏マイナス 8 ないし 7 度)と低かったので、カメラもフィルムもうまく機能しなかった。そのために、撮られた写真の解像度はよくない。

“スティーブンス警察官がその写真を撮った後で、その物体はさらに西に移動し、イリノイ州デュポ、同カホキア、ミズーリ州セントルイスに向かっていているように見えた。このとき、デュポの警察官が一人この物体を目撃したかもしれない。

“最終調査によれば、この事件に巻き込まれた警察署と地域は、以下のとおりである： イリノイ州のハイランド、サマーフィールド、レバノン、シャイロー、マスキーター、ミルシュタット、デュポ、カホキア。物体は少なくとも以下の地域の警察官により目撃された(時刻順に)： レバノン、シャイロー、(ここにもう一つ?)、ミルシュタット、デュポ、およびカホキア(?)。

“注記と補遺:

“1)スコット空軍基地： 目撃のある時点で、我々はその物体がスコット空軍基地から 2 ないし 3 法定マイル以内にあったと推定した。しかし基地の公式報道官は、以下の趣旨の公式表明を行なったと伝えられる。A) 目撃が起きている間、管制塔は約 1 時間閉鎖されていた； B) 同時間帯に基地のレーダーは詳細不明の原因で電源が切れていた；そして C) その目撃に気付いた隊員は誰もおらず、誰もその物体を目撃していない。

さらに 5 項目の注記と補遺がこの後に続いており、この原報告書でそれらを見ることができる。

-----  
98) National UFO Reporting Center

99) Mutual UFO Network

100) The National Institute for Discovery Science

101) “UFO Over Illinois: Anatomy of a Sighting”, Discovery Channel, 2000

102) Report prepared by: Peter B. Davenport, Director, on Monday, January 10, 2000, at 2300 hrs. (Pacific). (Revised on January 22, 2000.). Web site at:

<http://www.msatech.com/nuforc/CB000105.html>

---

## 7.0 エネルギーと反重力研究の概要

ポール・ラビオレット博士と他の研究者たちからの援助を受け  
アンソニー・J・クラドックにより編集された。

偉大なニコラ・テスラの時代以来(それ以前からも), 科学界のごく一部の人々は, 我々の周囲からいわゆる“フリーエネルギー”を取り出せること, そしてたとえば“反重力”のような, 既成概念の向こう側にある力や作用もまた, 我々の指図さえあれば現れ出ようとしていることを知っていた。

1899年のコロラドスプリングスにおける実験で, テスラは電気重力(またはスカラー)波を発見した。それは, 真空のエネルギー密度を揺らがせ, それにより時空の湾曲を振動させる。つまり, 1世紀以上も前に, テスラはすでに重力と電磁気の統一場理論を生み出していたと思われる。彼の諸発見はとても基本的で, 全人類にフリーエネルギーを提供するという彼の意図はあまりにも明確だった。おそらくそれゆえに, 彼に対する財政的支援が中止され, 意図的に孤立させられ, 歴史書から彼の名前が次第に消されていった。

真空中のゼロポイント・エネルギーは, 揺らぎを考慮した最もエネルギーの低い真空状態である。低いエネルギー状態においても量子の揺らぎは絶えず発生し, その瞬間に存在するエネルギーの, 絶え間のない, きわめて急速で激しい“不規則振動”が引き起こされる。これらの量子の揺らぎによる最小エネルギーがゼロポイント・エネルギー(*zero-point energy*)と呼ばれる。このエネルギーは“巨大”である。科学者の中には, 1立方センチメートルの純真空には10の80乗から120乗グラムの物質に凝縮できるほど十分なエネルギーが含まれる, との仮説を唱える人もいる! 量子力学的には, 考え得るどんな系(時空そのものも含めて)もゼロ・エネルギーを持つことはできない。いわゆる“フリーエネルギー”は, このゼロポイント・エネルギーをうまく引き出すことにより実際に得られる。

多くの現代科学の基盤は, 古典的電磁気理論(Classical Electromagnetic Theory; CEM)である。ジェームズ・クラーク・マクスウェルは, 4元数(quaternions; クォータニオン)として知られる風変わりな代数学を用いて, 136年前にこの理論を構築した。実際の電気力学者が利用するときにもっとよく理解できるようにするために, それは1903年にオリバー・ヘビサイド(およびギブス)の手で慎重に, より簡素な言葉で書き直された。この簡素化(そして切り捨て)により, 元々の理論に含まれていたスカラー電磁気学と重力に関する方程式の部分がすべて除去されてしまった。クラーク・マクスウェルの使い古された理論には, 合計すると少なくとも34の欠陥があることが知られている。これが依然として今日の教室で教えられている。ウィーラー, ファインマン, ブンゲ, マルゲナウ, バレット, コルニル, エバンス, ビジエ, レーナートといった, 世界の一流科学者の何人かは, 皆 CEM(古典的電磁気理論)の欠陥について書いている。

古典的電磁気理論(CEM)のこの失われた“ヘビサイドの切り捨て部分”が復活し, ケンブリッジ大学の数学者 E・T・ホイットカーの1903年と1904年の輝かしい業績が考慮されるとき, 我々はまったく突然に, 見つけるのが困難であると思われる科学の聖杯 - 一般相対性理論, 量子力学, 精神と神秘エネルギー現象, および古典的電磁気理論を一体化させる, 真の統一場理論を持つことになる。

しかし実際のところ、人類の進歩のための本当の聖杯は、仰々しく聞こえる統一場理論ではなく、本当はこの失われた切り捨て部分にあるということができるだろう。

なぜなら、局所時空間、つまり三つの空間次元および時間に圧力を及ぼすのは、この“スカラー・ポテンシャル”だからである。これは付加的電磁気エネルギーの“滲み出し(bleed-through)”を可能にし、オーバーユニティ(overunity)の電磁気システムを実現する。実に、この失われた切り捨て部分の復活により、アインシュタインの一般相対性理論は、彼が書こうとしていた本当の理論のごく一部にすぎないことも示される。アインシュタインは一般相対性理論により名声を得た(タイムマガジン誌“*Man of the Century*”)が、彼自身は次の言葉を残している。いわゆる物理学の基礎は、絶えず見直しが必要である。相対性理論は、必ずしも型にはまった不変のものではない。

“フリー”エネルギー抽出の理論に立ちはだかるもう一つの障害が、すでに色褪せた残りのマクスウェル電磁気理論に対して、1902年にH・A・ローレンツにより負わされた。彼は単なる独断により、回路の外にあって回路に捕捉されない、莫大な量の電流を投げ捨ててしまった。それは彼が理論的に説明できないものだった。彼はそれを“物理的に無意味!”と表現した - それは我々の通常の電気回路においては、捕捉される電流の約10の13乗倍も大きいのにである! こうして彼は、電磁気システムを理論的、および比喩的意味での鉄の箱に永久に閉じ込めてしまった。その箱は、電磁気システムをオーバーユニティにし、付加的エネルギーを滲み出させ、捕捉することを決して許容しようとしなかった。

エネルギーは創出も破壊もできない。そして、取り込むよりも多くのエネルギーを出力するシステムの例(熱ポンプや風車など)は、どこにでもある。これは単に他のエネルギー源を変換しているのである。もし、他のエネルギー源から変換された追加エネルギーを受け、出力エネルギーが最初に供給されたエネルギーよりも大きくなる場合、これはオーバーユニティ(\*overunity; 入力に対する出力の比、つまり性能係数COPが1を超える状態)と呼ばれる。既成科学では、“既成科学”のあらゆる側面で、これを“許容”している。“ただし、唯一の(独断的)例外が電磁気理論である”

しかし、“許容”されない局所的時空間の湾曲が“フリー”真空エネルギーへの扉を開く手段であることを考えると、塹壕で防備されたある種の経済的利益集団が、この素晴らしいエネルギー源を開発する物理学者の研究を阻止し続けている理由が、我々にはよく分かる。実際に、米国特許局には厳格な指示があり、意味のあるオーバーユニティ電磁気システムあるいは今のエネルギー供給体制の現状維持を脅かすと思われるものは、その特許を認可しないことになっていると聞かされている。

それでも時折、一部の抑圧されている驚くべきオーバーユニティ・システムの前で、それを覆うベールが不用意にも持ち上げられることがあるが、それは結局また素早く降ろされてしまう。

ここに、その幾つかを紹介する:

### テスラの自己出力自動車

#### Tesla's Self-Powered Automobile

1931年に、テスラはある極秘計画の中で一つのオーバーユニティ、自己出力電力システムをつくり、それをピースアロー車(\*20世紀初期の車)に組み込んだ。そしてその車の走行に成功した。彼と一緒にその車に乗った一人の親類が、何年も後になってそれを裏付けた。詳細の一部が、マーク・サイファーによるテスラ伝記の中で次のように述べられている：

“その車は標準規格のピースアロー車で、エンジンが取り外され、別の部品が代わりに搭載された。標準規格のクラッチ、変速装置、駆動系はそのままだった。…ボンネットの下には1個のブラシレス電動モーターがあり、エンジンと接続されていた[あるいはエンジンの代わりにしていた]。…テスラは誰がそのモーターを作ったのか、打ち明けなかった”

“計器盤には1個の‘エネルギー受信機’が組み込まれたが、それは1個の箱で。…12本のラジオ真空管が入っていた。…6フィートの棒でできた1本の垂直アンテナがあり、そのエネルギー受信機に接続されていた。エネルギー受信機とはいえば、2本の太い、人目を引くケーブルでモーターに接続されていた。…テスラは始動する前にこれらを押し込み、こう言った：‘さあ、エネルギーを捕まえたぞ’”

このテスラの装置は、以下に述べるT・ヘンリー・モレーの放射エネルギー増幅器にとってもよく似ているように思われる。また、テスラは彼の二つの特許の中で、自然の媒質に関して“放射エネルギー (radiant energy)”という言葉は初めて使った。

さらには、テスラが実際に特許を取った回路に関して、確かにその中をエネルギーが意図されたように自由に行き交ったという、バレットによる高次元位相幾何学的見地からの数学的証明がある。

要するにテスラは、ポテンシャルの非対称的变化を自ら引き起こしてオーバーユニティ・システムを生成し、それにより自己出力する回路のつくり方を知っていたらしい。

これは、今日の電気技術者たちが用いる電圧のエントロピー的伝達とはまったく異なる動作である。それは、ある外部のエネルギー源から余剰エネルギーが引き出されるように、回路の特定部分のポテンシャルを意図的に変化させる仕組みと言ってもよい。つまり、それはポテンシャルの非対称的变化であり、クロン(この後に論じられる)が苦心の末に発見し、その全貌が明らかにされることがなかった回路とも同類である。

テスラの自己出力自動車システムがどのように機能するかについて、その技術的詳細はまったく公表されなかった。最終的に彼の祖国に引き渡されたテスラの論文には、彼の死亡時に部屋にあった本当の“決定的な”論文は含まれていなかった。それらの“決定的な”論文は、まるでテスラが不法滞在外国人であったかのように、彼の部屋から違法に持ち去られた(彼は市民権を得た米国民だったので、その行為のすべては明らかに違法だった)。もしそれらの“決定的な”論文がまだ存在するならば、それらは今なお高い機密扱いであり、既成科学者たちの目から隠されている。チェニーは彼女のテスラ伝記の中で、それらの論文のありかを発見したと述べている。

テスラの業績中、フリーエネルギーの電氣的な自動車用出力システムは、初期の共産主義者に

ロシアの支配権を奪取させ、アドルフ・ヒットラーを権力の座に昇らせるために資金援助した同じ人物により、資金援助された。この資金の支配下にあったために、テスラはその車を米国のどこかの自動車会社に生産させるのを許されなかったのだと推測される。

最近の関連文献、およびテスラの業績に部分的に基づく特許の幾つかは、以下のとおりである：

Barrett, T.W., "Tesla's Nonlinear Oscillator-Shuttle-Circuit (OSC) Theory," *Annales de la Fondation Louis de Broglie*, 16(1), 1991, p. 23-41.

Barrett, T.W. and D. M. Grimes. [Eds.] *Advanced Electromagnetism: Foundations, Theory, & Applications*, World Scientific, (Singapore, New Jersey, London, and Hong Kong), Suite 1B, 1060 Main Street, River Edge, New Jersey, 07661, 1995.

\_\_\_\_ "Active Signalling Systems," U.S. Patent No. 5,486,833, Jan. 23, 1996.

\_\_\_\_ "Oscillator-Shuttle-Circuit (OSC) Networks for Conditioning Energy in Higher-Order Symmetry Algebraic Topological Forms and RF Phase Conjugation," U.S. Patent No. 5,493,691. Feb. 20, 1996.

### モレーの放射エネルギー装置

#### The Moray Radiant Energy Device

1900年代初期に、ソルトレーク市の T・ヘンリー・モレー博士は、空間自体のメタ周波数振動 (metafrequency oscillations) からエネルギーを取り出す最初の装置を作った。最終的に、彼は重さ 60 ポンドで 50,000 ワットの電力を数時間発生し続ける、一つのフリーエネルギー装置を作った。皮肉なことに、彼は科学者や技術者たちに何度もこの装置を実演して見せたが、これを大規模に電力を供給できる、実用的な動力装置へと発展させる資金を得ることができなかった。

1920年代から1930年代にかけて、モレーは着実にこの装置、特にその検知管を改良した。モレー自身によれば、これがただ一つの本当の秘密部分だった。彼の著書<sup>103)</sup>、*The Sea of Energy in Which the Earth Floats (地球が浮かぶエネルギーの海)* の中で、モレーは1925年にトランジスター型の真空管を発明したことを示す証拠文書を公開した。公式に認められているトランジスターの発見時よりも遙か以前である。彼のフリーエネルギー検知管において、モレーは検知管そのものの内部にこのトランジスターの発想に基づくある部品を使っただけ - 半導体物質である摩擦発光を示す亜鉛と放射性あるいは核分裂性物質の混合物でできた小球。彼の特許申請(特許が認可されたことはない)は、ベル研究所のトランジスター(\*1948年6月30日)が出現するよりずっと以前の、1931年7月13日に出願された。

繰り返し繰り返し、モレーは電気工学教授、国会議員、政府要人、そして彼の研究室を訪れる多くの人々に、彼の放射エネルギー装置を実演して見せた。一度などは、その装置をすべての送電線から離れて数マイル田舎に移動させ、彼の研究室の他の場所から密かに放射されているエネルギーを受信しているのではないことを証明した。彼は何度か、別々の調査員たちにその装置を完全に分解させ、再度組み立てさせた。それでも、装置は再び自ら作動した。彼は、あらゆる試験の中で、感知できるいかなるエネルギー入力もなしに、その装置がエネルギー出力を発生させることを成功裏に実証した。完全な証拠書類に照らして、その装置がイカサマであることも、またそれが

モレーが主張するとおりの装置でないことも、証明できる人はいなかった。

記録文書は、懐疑的な物理学者、電気技術者、および科学者たちの署名入り声明で満ちている。彼らはモレーの研究室を訪れ、モレーが本当に無料電力を生産する、ある普遍的エネルギー源の開発に成功したことを完全に確信して帰った。

しかし、このすべてを目の前に置き、米国特許局はモレーに特許を認可することを拒んだ。理由の第一は、彼の装置が真空管に冷たい陰極を使っていた(その特許審査官は、電子を得るために加熱した陰極が必要なのは常識だと主張した)ことだった。第二は、そのエネルギー源が彼には特定できないことだった。あらゆる種類の無関係な特許と装置が持ち出され、モレーの成果はこれらの権利を侵害している、あるいはそれらを真似したものだと言われた。これらの拒否理由の一つひとつにモレーは忍耐強く反論し、無効にした；それでもなお、その特許は今日に至るも認可されずにいる。モレー家は、今でもこの特許申請を取り下げしていない。

ソルトレーク市でその研究所を運営しているジョン・モレー(\*ヘンリー・モレーの息子)は、あるロシア人二重スパイによりその基本装置が破壊されて以来、父の仕事を引き継ごうとしている。モレー博士自身は、1974年5月に亡くなった。

### ガブリエル・クロンと負抵抗体

#### Gabriel Kron and the Negative Resistor

ガブリエル・クロンが亡くなったとき、彼をこれまで米国が生んだ最も偉大な“非線形”科学者だと考える人々がいた。

負抵抗体(negative resistor)とは、利用不可能な、あるいは無秩序な形態のエネルギーを受け取り、利用可能な、秩序ある形態のエネルギーを出力する、何らかの構成要素、機能、または過程と定義される。ここでは**収支**としてその機能を果たす場合を指す。明確に述べると、我々は“負抵抗体”の種類に、トンネルダイオード、サイリスタ、マグネトロンといった、全体として秩序立てるエネルギーよりも多くのエネルギーを消費し無秩序にする、“差分”負抵抗体は含めない。

回路の任意部分を取り巻くヘビサイドのエネルギー成分の利用可能性は、1930年代にガブリエル・クロンが真の負抵抗体を実現することを可能にした“開路(open path)”の、長い間探し求められてきた秘密であろうと思われる。そのときクロンは、スタンフォード大学にいて、ネットワーク・アナライザのために米国海軍と契約していたゼネラルエレクトリック社の筆頭科学者だった。クロンは負抵抗体を作った方法を公開することを許されなかったが、それがネットワーク・アナライザの中に組み込まれたとき、彼は負抵抗体が回路に電力を供給するので電源は不要だと明言した。この負抵抗体は、米国の納税者が支払った税金で開発されたものだと言ってもよいだろう。

負抵抗体は、周囲のエネルギーを集中させて回路に発散するものであるために、クロンの負抵抗体は、エネルギー流のヘビサイド成分を“開路”のエネルギー流として - 任意の独立した二つの回路要素の局所空間を接続することにより - 集めたのではないかとと思われる。それはローレンツに続く、以前の電気力学者たちにより捨てられていたものだった。それゆえに、クロンはこれを“開

路”と呼んだ。クロンはこれを以下のように述べている<sup>104)</sup>：“... ‘開路’（‘閉路’と対をなす）という失われていた概念が発見された。そこでは、任意の二つの節(nodes)の間にある枝(branches)を通過して電流を流すことができた。(以前 - マクスウェルの後の - 技術者たちは、開路のすべてをただ一つの基準点、つまり‘接地端子’に接続した) 開路の発見は、第二の矩形変換行列を成立させ... それは‘層状’電流を生み出した...” “閉路と開路の両方を同時に含む回路は、著者が長年追究してきたことへの解答だった”

真の負抵抗体がクロンにより開発されていたのだと思われる。彼は 1945 年の声明で、その疑い得ない成功を述べている<sup>105)</sup>：“正負の実数のみが存在する場合、正抵抗(positive resistance)をインダクタンスで、負抵抗(negative resistance)をキャパシタで置き換えるのが慣例である(実際のネットワーク・アナライザ上には負抵抗は一つも、あるいはほんのわずかしかなかったから)” クロンはその声明の中に“一つも、あるいは”という言葉の挿入するように要求されたようだ。彼はまた、次のようにも書いている<sup>106)</sup>：“負抵抗がネットワーク・アナライザ用に利用可能であるが...” これはかなり確かな言葉で、負抵抗体がネットワーク・アナライザ用に利用可能だったことを示唆している。

#### モスクワ大学の科学者たちがオーバーユニティ装置を 1930 年代に試験 University of Moscow Scientists tested Overunity devices in 1930s

1930 年代に、モスクワ大学のロシア人科学者たち(Mandelstam 他)と支援諸機関が、COP(性能係数)が 1.0 を超えるパラメトリック発信装置<sup>108)</sup>を開発し、試験した。その理論、結果、図面などがロシアとフランスのいずれの文献にもあり、その翻訳の中で多くの参考文献が引用されている。この研究が第二次大戦後に再び取り上げられた様子はない。

関連する他のロシア語文献には、以下のものがある：

Mandelstam, L.I.; and N.D. Papaleksi, "On the parametric excitation of electric oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934, p. 5-29

Mandelstam, L. and N. Papalexi, "On resonance phenomena with frequency distribution," Z.f. Phys., No. 72, 1931, p. 223

\_\_\_\_\_"Concerning asynchronous excitation of oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934, p. TBD

\_\_\_\_\_"Concerning asynchronous excitation of oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934

\_\_\_\_\_"Concerning nonstationary processes occurring in the case of resonance phenomena of the second class," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934

Andronov, A. "The limiting cycles of Poincare and the theory of self-maintained oscillations," Comptes-Rendus, Vol. 189, 1929, p. 559.

\_\_\_\_and A. Witt, "On the mathematical theory of self-excitations," Comptes-Rendus, Vol. 190, 1930, p. 256

\_\_\_\_\_"On the mathematical theory of self-excitation systems with two degrees of freedom," Zhurnal Tekhnicheskoy Fiziki, 4(1), 1934



\_\_\_\_ "Discontinuous periodic movements and theory of multivibrators of Abraham and Bloch,"  
Bull. De l'Acad. Ed Sc. De l'URSS, vol. 189, 1930.  
Chaikin, S., "Continuous and 'discontinuous' oscillations," Zhurnal Prikladnoi Fiziki, Vol. 7, 1930, p.  
6.  
\_\_\_\_ and A. Witt, "Drift in a case of small amplitudes," Zhurnal Tekhnicheskoi Fiziki, 1(5), 1931, p.  
428.  
\_\_\_\_ and N. Kaidanowski, "Mechanical relaxation oscillations," Zhurnal Tekhnicheskoi Fiziki, Vol. 3,  
1933, p. 1.

### 最初の点接触トランジスター

#### The Original Point-Contact Transistor

最初の点接触トランジスターは、しばしば真の負抵抗体のような振る舞いをした。しかし、その仕組みが理解されたことはなかった。点接触トランジスターは、間もなく容易に製造でき製造ムラも少ない他の型のトランジスターへと移行したために、置き去りにされた。点接触トランジスターから、COP(性能係数)が1を超える回路を可能にする、真の負抵抗体をつくり上げることは容易である。

バーフォードとバーナー<sup>109)</sup> (281 頁)はこう述べている: "... それらの作用の基礎となる理論は、ほぼ1世紀になろうというのにまだ完全には理解されていない... これらの装置の問題の性質は、小出力の範囲に限定されているとはいえ、接合素子に応用されたときの小信号動作という見方は無意味である。なぜなら、平衡あるいは理論的な性能が観測される動作範囲というものがないからである。点接触装置は、それゆえにあらゆる動作条件下で際立った非線形性を持つと言えるだろう"

#### ミニットマンミサイルに搭載されたオーバーユニティ装置 - ウェスチングハウス社の特許

##### Overunity device installed in Minuteman Missile - patented by Westinghouse

トランジスターを64段使った周波数変換器、およびそれに似た巧妙なフィードフォワードおよびフィードバック機構(feedforward and feedback mechanism)が、最初のミニットマンミサイルに搭載された。そして、実証されたCOP(性能係数)が1を超えるその性能を落とすために、意図的な改造が行なわれた。詳しい調査により、その装置は受ける取るエネルギーの約105パーセントを出力していることが判明した。COPが1.15を示したものも幾つかあった。その後、まったく何事もなかったかのように、ウェスチングハウス社の技術者たちは、その技術に関連する幾つかなの特許を取った。しかし、それについての言及は、デサンチスらがマルチパワー開ループ連鎖(multipower open loop chain)を持ったフィードバックシステムはCOPが1を超える性能を実現できることを示しても、その後どの文献にも発表されていない。これらの特許の幾つかが、以下の文献に出ている:

Andreatta, J.H. "High Power Switching Amplifier Wherein Energy is Transferred to a Tuned Circuit During Both Half Cycles," U.S. Patent No. 3,239,771, Mar. 8, 1966

Dennis Jr., T.L. "Highly Efficient Semiconductor Switching Amplifier," U.S. Patent No. 3,239,772, Mar. 8, 1966

DeSantis R.M. et al., "On the Analysis of Feedback Systems With a Multipower Open Loop Chain,"

Oct. 1973, AD 773188, available through the U.S. National Technical Information System.  
Morrison, H.J. "Square Wave Driven Power Amplifier," U.S. Patent No. 3,815,030, June 4, 1974.

### 宇宙飛行士の磁気ブーツ

#### The Astronaut's Magnetic Boots

ウェスチングハウス社のラドウスらが開発した、最初の宇宙飛行士用磁気ブーツは、その磁場 - 永久磁石による磁場 - そのものが簡単に切り替わった！宇宙飛行士たちは、その永久磁場のスイッチを切るだけで、容易に足を持ち上げることができた。彼らは足を降ろしたときに再びスイッチを入れた。それを行なうために必要な、莫大な電流を供給する巨大バッテリーを身に着けて運ぶ必要はなかった。そして、磁石はある記憶を持っていた。(工場から出てきたばかりの未使用磁石の多くが、その最初の使用状態を記憶し、自らを条件付けする！知られている限り、今日においてさえこんなことを語る人はいない) この事実を利用して、たとえば、一見通常に見える磁場を生じながら、磁場の中に変則性(anomalies)を生じるなど、通常の磁石とは異なる振る舞いをする磁石をつくり出すことができる。

次のことを容易に理解することができる。つまり、永久磁石の磁場を簡単に切り替えられるなら、またラドウス磁石がそうであったようにその磁石が内蔵の記憶を持つなら、切り替えを少し工夫するだけで、そのような磁石を使って自動切り替え、自己出力する永久磁石モーターをつくることができる。一つの永久双極子である磁石は、それだけですでに特殊な“フリーエネルギー発生器”である。なぜなら、それは、エネルギーに満ちた真空の流れを非対称にすることにより、絶え間なく真空から直接に磁気エネルギーを湧出させているからである。

記憶を持った永久磁石の製造、またそれを稼働システムの中でどう利用するかという主題全体が、今なおほとんど探究されていない遙か辺境の領域である。実際に、大部分の研究者はその現象の存在すら知らない。この話題についての文献の幾つかを、以下に掲げる：

Astleford, Jr., J. and R. J. Radus, "Distribution Transformer with Zero-Percent Impedance,"  
Westinghouse Engineering, 23(5), Sept. 1963, p. 148-151

\_\_\_\_\_"Zero Impedance Distribution Transformer," IEEE Transactions on Power Apparatus &  
Systems, 83(9), Sept. 1964, p. 918-926

Hangar, A.W. and A. A. Rosener, "The use of permanent magnets in zero-gravity mobility and  
restraint "footwear" concept," IEEE Transactions on Magnetics, Vol. MAG-6, No. 3, Sept. 1970, p.  
464-467.

これらの未熟な“ひきずり”ブーツは、それより先に開発され NASA で使用されたウェスチングハウス/ラドウスの優雅な“足踏み”ブーツと好対照である。

\_\_\_\_\_"Human fly has magnetic sole," Electrical Engineering, Apr. 1963, p. 294.

Radus, R.J and W.G. Evans, "Apparatus Responsive to Direct Quantities," U.S. Patent No. 2,892,155,  
June 23, 1959.

Radus, R.J., "Permanent Magnet Flux Transfer Principle," Internal Westinghouse paper, date  
unknown

Radus, R.J., "Permanent-Magnet Circuit using a 'Flux-Transfer' principle," Engineers' Digest, date

unknown (July 1963?), p. 86.

### 日立の技術者たちがオーバーユニティ・プロセスを確認

#### Hitachi Engineers confirm Overunity Process

日本人の発明家、河合輝男による磁気モーター中の磁路 (magnetic path) の巧妙な自己切り替え技術により、ほぼ 2 倍の COP (性能係数) が得られる。COP が 0.5 未満の通常の磁気エンジンを改造しても、COP が 1 を超えることはない。しかし、市販品の中で高い性能 (COP が 0.6 から 0.8) を持つエンジンを改造して河合プロセスを適用すると、そのエンジンは COP が 1.2 から 1.6 の性能を示す。河合の仕様に改造された二つの日立エンジンが、日立の技術者たちによる厳格な試験を受けた。その結果、それぞれの COP は 1.4 と 1.6 を示した。河合プロセスは、適切な切り替え制御 (たとえば光子) により、特許から直接製作することができる。河合プロセスと日本における他の幾つかのオーバーユニティ・システムが、より一層の進歩と市場への投入を妨害されてきたように思われる。

Bearden, T.E., "Energetics Update and Summary," Part I, Explore, 7(6), 1997, p. 60-67; Part II, Explore, 7(7), 1997, p. 53-56; Part III, Explore, 8(1), 1997, p. 53-56; Part IV, Explore, 8(3), 1997, p. 56-63

\_\_\_\_ "The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," Infinite Energy, 1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55.

\_\_\_\_ "Energy Flow, Collection, and Dissipation in Overunity EM Devices," Proceedings of the 4th International Energy Conference, Denver, Colorado, May 23-27, 1997, p. 5-51

Kawai, Teruo, "Motive Power Generating Device," U.S. Patent No. 5,436,518. Jul. 25, 1995.

### 磁気ワンケルエンジン

#### The Magnetic Wankel Engine

磁気ワンケルエンジンもまた、COP が 1 を超え、閉回路自己出力 (closed-loop self-powering) が可能な性能を持てるはずである。しかし、日本のオーバーユニティ電磁気システムのすべてがそうであるように、これもまた抑圧されている。

Bearden, T.E., "The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," Infinite Energy, 1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55

\_\_\_\_ "The Master Principle of Overunity and the Japanese Overunity Engines: A New Pearl Harbor?"

The Virtual Times, website <http://www.hsv.com>, January 1996.

### ジョンソン・モーター

#### Johnson's Motors

ハワード・ジョンソン<sup>110)</sup> は、多くの斬新なりニアモーターと回転モーターをつくり上げた。また、少なくとも一つの自己出力回転磁気装置 (self-powering magnetic rotary device) をつくり上げたが、

後にそれは彼の研究室に不可解な不法侵入があったときに盗まれた。ジョンソンは、磁束線の双方向“2粒子”理論(bidirectional two particle theory)を使っている。その理論は、すべてのポテンシャルと場における内部双方向エネルギー流を示した、ホイッタカーの初期の研究により説明することができる。彼はまた、制御されたスピン波と自己発生した正確な交換相互作用力を利用している。それらは一瞬の間、非常に強力な力場の爆発を生み出すことが知られている。彼の方法は強い非線形性を示す磁石部品を使うことであり、それが回転周期のきわめて正確な点において前述の現象を発生させる。要するに、彼は自己発生的な非線形磁気作用を利用して、正確な位置と方向を持った、突発的な磁力を発生させることを追求する。これは、外部コイルに流れる微弱電流の急激な遮断によるレンツの法則の効果を利用してワンケルエンジンが行なったことと類似している。レンツの法則の効果と他のきわめて急激な場の変化は、一瞬の間増幅されたポインティング・エネルギー流成分のみならず、増幅されたヘビサイド・エネルギー流成分をも発生させる。関連する幾つかの文献には、以下のものがある:

Cullity, B.D, Introduction to Magnetic Materials, Addison-Wesley, Reading, MA, 1972

Gurevich, A.G. and G.A. Melkov, Magnetization Oscillations and Waves, CRC Press, 1996

L'vov, V.S., Wave Turbulence Under Parametric Excitation: Applications to Magnets, Springer-Verlag, Berlin, 1994

L'vov, V.S. and L.A. Prozorova, "Spin Waves Above the Threshold of Parametric Excitation," in A.S. Borovik-Romanov and S.K. Sinha, (Eds.), Spin Waves and Magnetic Excitations, North-Holland, Amsterdam, 1988.

#### フロイド・スウィートの真空三極管増幅器

#### Floyd Sweet's Vacuum Triode Amplifier

スウィートの半導体真空三極管には、自励発振する磁界を持つ、特別に調整されたバリウム・フェライト磁石が使用されていた。この装置は 33 ミリワットの入力に対して約 500 ワットを出力し、その COP(性能係数)は  $1.2 \times 10^6$  (つまり 120 万!) (\*下記の Sweet 論文を参照)だった。スウィートは、彼の ELF(極低周波) 自励発振を生じる磁石の調整方法を、完全には決して公開しなかった。しかし、強磁性体では (1) 磁化, (2) 不安定化閾値より上のスピン波, および (3) マグノン(magnons) の、周波数 1 キロヘルツから 1 メガヘルツの自励発振が起きることが知られている。制御された条件下で、その装置は反重力の特性をも示した。ある実験では、90 パーセントの重量減少を生じた。

クロンがスウィートの指導者、つまりスウィートは彼の弟子であったことは、興味を引くかもしれない。今は亡きスウィートは、同じ会社で働いていたが、ネットワーク・アナライザ計画には関わっていなかった。しかし、彼はほぼ確実にクロンの“開路(open path)”発見と、その負抵抗体の秘密を知っていた。この技術分野へ参入するための資料として、詳細な文献引用がある下記を読みたい:

Gurevich, A.G. and G.A. Melkov, Magnetization Oscillations and Waves, CRC Press, 1996, p. 279.

L'vov, V.S., "Wave Turbulence Under Parametric Excitation: Applications to Magnets," Springer-Verlag, Berlin, 1994, p. 214-218, 226-234, 281-289.

Sweet, F. and T. E. Bearden, "Utilizing Scalar Electromagnetics to Tap Vacuum Energy," Proceedings of the 26th Intersociety Energy Conversion Engineering Conference (IECEC '91),

Boston, Massachusetts, 1991, p. 370-375.

### デボラ・チャン博士の負抵抗体

#### Dr. Deborah Chung's Negative Resistor

バッファロー大学(UB)の機械工学と宇宙工学の教授デボラ・D・L・チャン博士は、“スマート材料(\*外部からの刺激に対して反応する材料)”分野におけるこの国の一流科学者であり、また国際的な評価も高い。彼女は、バッファロー大学の材料研究ナイアガラ・モホーク講座を持ち、スマート材料と炭素複合材についての研究により、世界的に認められている。1998年7月9日、ラスベガスで開催された第5回複合材料工学国際会議での基調講演で、彼女はある複合材料の層接合面で明白な負抵抗を観測したことを報告した。負抵抗は、繊維層と直交する方向に観測された。

彼女のチームは、その負抵抗効果を実験室の中で1年間徹底的に試験した。それが真の負抵抗体であることにはまったく疑問の余地がなかった。チャン博士は、その研究を述べた論文を論文審査のある雑誌に投稿し、大学は特許を出願した。間を置かずに、幾つかの反論記事が通俗科学雑誌に現れた。負抵抗は物理学と熱力学の法則に反する、と公言する既成科学者たちが、素早く引き合いに出された。おそらくバッファロー大学の研究者たちは小さな電池をつくり上げてしまい、それに気付かなかつたのだ、と考える人々もいた。

バッファロー大学のウェブサイト上では、その発明が商業使用権のために提供されると公示された。その使用権と適切な守秘義務契約に関心を持つ大手企業には、一括技術資料が与えられることになった。その直後に公示は撤回され、技術資料は入手できなくなった。そして、商業使用権の付与と商業化は無期限の保留となった。それは、これを書いている時点でもまだ保留である。

### ランデル・ミルズ博士とブラックライト・パワー

#### Dr. Randell Mills and Blacklight Power

1989年の初め、ランデル・ミルズ博士は、水素原子がその基底状態より低いエネルギーレベルに落ち込み、かなりの量のエネルギーを発生する現象が起こり得ることを発見した。最初は、新しい種類の常温核融合が見つかったのだと考えられた。しかし、彼はこの発見が、実際には水素原子の落ち込み(彼はこれをハイドリノス(hydrinos)と呼んだ)による新しい形態のエネルギーであることを示した。初期の報告によれば、入力エネルギーの1,000倍ものエネルギーが出力されていた。この卓越した量の熱エネルギーは、水素の落ち込みによって放出されるエネルギーが受容体に供給される触媒反応の結果だった。広報フュージョン・ファクツ(Fusion Facts)は、この業績によりミルズ博士を年間最優秀科学者に指名した。

2000年に、米国特許6,024,935がランデル・ミルズ博士と彼の会社、ブラックライト・パワー社に対して付与された。その特許は60頁で請求項目が499という、異常に分厚いものだった。特許は「低エネルギー水素の方法と構造(Lower-Energy Hydrogen Methods and Structure)」である。この新分野についての情報がウェブサイト <http://www.blacklightpower.com/index.html> にある。

## 常温核融合 Cold Fusion

常温核融合の現象は、ユタ州の研究者スタンリー・ポンスとマーチン・フライシュマン<sup>11)</sup>によって最初に報告され、大々的な偽情報工作にもかかわらず、これまで世界中の研究室の数百の実験で確実に再現されてきた。常温核融合を巡る事情は、アスピリンの初期のそれに類似している。それには効果がある、しかし“既成科学”はそれがいかんにして、あるいはなぜそうなのか、知らない - それゆえに、それは集権的な電力産業など、塹壕で防備された経済的利益集団のみならず、正統派科学界にとっても脅威である。

原子力技術者のトーマス・ビールデン博士は、幾つかの新しい種類の反応を提起している。その中には、常温核融合の機構を確かに説明する時間反転帯 (time-reversal zones) の形成が含まれる。これらの新しい種類の実験の変則性は、実際には時間を一つのエネルギー源としていることが原因である。そこでは、時間エネルギーが空間エネルギーに変換されている。毎秒 1 マイクロ秒の時間を空間電磁気エネルギーに変換すると、およそ 10 の 11 乗ワットの出力を生じる。このことから、時間そのものが潜在的な巨大出力源であること、そしてたぶん今世紀後半の最適なエネルギー源となることが理解される。

明らかに常温核融合の一種であるパターソン・パワーセル (Patterson Power Cell) は、同じ効果を得るために一枚の薄膜を使っている。この成果は、イリノイ大学のジョージ・マイリー教授が確認したようだ。著名な科学者であり常温核融合の分析家でもあるユージン・マローブ博士が、米国の巨大電子企業であるモトローラ社がパターソン・パワーセルに対して行なった実験に言及している。“一つのセルは、入力なしで 20 ワットの出力を発生し続けた。非公開になっているが、私はその生データを持っており、数多くの同様の試験でこれらの効果が得られている。そこでは、私の親指ほどもないセルの中で、たとえば 15°C の温度差が 11 時間も持続した。それは水を加熱している 20 ワット電球と同等の能力だった”

パターソン・パワーセルによる 1,200 を超える COP (性能係数) が報告されている。ジェームズ・A・パターソンに付与された特許と論文を以下に掲げる:

Patterson, J.A "System for Electrolysis of Liquid Electrolyte," U.S. Patent No. 5,372,688, Dec. 13, 1994;

"Method for Electrolysis of Water to Form Metal Hydride," U.S. Patent No. 5,318,675, June 7, 1994;

"Metal Plated Microsphere Catalyst," U.S. Patent No. 5,036,031, July 30, 1991;

"Improved Process for Producing Uniformly Plated Microspheres," U.S. Patent No. 4,943,355, July 24, 1990

Cravens, D. "System for Electrolysis," U.S. Patent No. 5,607,563, March 4, 1997.

以上の例は、知られている正真正銘のオーバーユニティ・システムのごく一部である。紙数の制限により、先駆者たちの他の証明済みシステムについては割愛する。その中にはベディニ、ワトソン、フォーガル、ネルソン、ウェイガンド、ロワンディ、マッカイなどが含まれる。

以下は、この主題に関する一般的な参考文献一覧である:

Heaviside, O., "On the Forces, Stresses, and Fluxes of Energy in the Electromagnetic Field," *Phil. Trans. Roy. Soc. Lond.*, 183A, 1893, p. 423-480

Heaviside, O., a series of papers in *The Electrical Experimenter*.

Whittaker, E.T., "On the Partial Differential Equations of Mathematical Physics," *Mathematische Annalen*, Vol. 57, 1903, p. 333-355

\_\_\_\_\_ "On an Expression of the Electromagnetic Field Due to Electrons by Means of Two Scalar Potential Functions," *Proc. Lond. Math. Soc.*, Series 2, Vol. 1, 1904, p. 367-372. The latter paper was published in 1904 and orally delivered in 1903.

特に、ホイットカーの前述の二つの論文を初めて深く論じた、エバンスらによる論文を読みたい。

M. W. Evans, L. B. Crowell et al., "On the Representation of the Electromagnetic Field in Terms of Two Whittaker Scalar Potentials," 1999 (in preparation).

これは AIAS (アルファ財団高等研究所; Alpha Foundation Institute for Advanced Study) 所属の研究者と特別研究員 19 名による共同執筆論文である。

Alger, P.L., (Ed.), *The Life and Times of Gabriel Kron, or Walking Around the World, and Tensors*, Mohawk Development Services, Inc., Schenectady, NY, 1969.

Hoffman, B., "Kron's Non-Riemannian Electrodynamics," *Reviews of Modern Physics*, 21(3), 1949, p. 535-540.

Stigant, S.A. "Gabriel Kron on Tensor Analysis, A bibliographical record," *BEAMA Journal*, Aug. 1948, (この中にクロンによる文献一覧がある)

さらに最近の論文には、以下のものがある:

Bearden, T.E., "Use of Regauging and Multivalued Potentials to Achieve Overunity EM Engines: Concepts and Specific Engine Examples," *Proceedings of the International Scientific Conference "New Ideas in Natural Sciences," St. Petersburg, Russia, June 17-22, 1996; Part I: Problems of Modern Physics, 1996, p. 277-297*

\_\_\_\_\_ "Use of Asymmetrical Regauging and Multivalued Potentials to Achieve Overunity Electromagnetic Engines," *Journal of New Energy*, 1(2), Summer 1996, p. 60-78

\_\_\_\_\_ "The Master Principle of EM Overunity and the Japanese Overunity Engines," *Infinite Energy*, 1(5&6), Nov. 1995-Feb. 1996, p. 38-55.

\_\_\_\_\_ "On Extracting Electromagnetic Energy from the Vacuum", July 2000

\_\_\_\_\_ "Bedini's Method for Forming Negative Resistors in Batteries", 2000

Burke, H.E. ,*Handbook of Magnetic Phenomena*, Van Nostrand, New York, 1985.

Cole, D.C. and H.E. Puthoff, "Extracting Energy and Heat from the Vacuum," *Physical Review E*, 48(2), Aug. 1993, p. 1562-1565.

Kaganov, M.I. and V.M. Tsukernik, *The Nature of Magnetism*, 1985, Mir Publishers, 1985.

Plotkin, H., "The War Against Cold Fusion: What's Really Behind It?" *San Francisco Gate*, May 17, 1999. Webster at: [www.sfgate.com](http://www.sfgate.com)

Puthoff, H.E. "Source of Vacuum Electromagnetic Zero-Point Energy," *Physical Review A*, 40(9), Nov. 1, 1989, p. 4857-4862.

他に多くの関連論文がエネルギー省の一般向けウェブサイト:

<http://www.ott.doe.gov/electromagnetic/papersbooks.html>

そして、トム・ビーラデンのウェブサイト:

<http://www.cheniere.org/>

に見出される。

どんな物質にも何の動力も与えないが、電磁放射エネルギーを電気エネルギーに変換するシステムに対して、1996年12月31日に米国特許認可番号 5,590,031 がフランクリン・B・ミード・ジュニアとジャック・ナチャムキンに付与された。これは実際には(カシミール効果を使った)一つの原理の証明であり、その中で真空から利用可能な電磁気エネルギーを取り出す方法があることを明確に立証している。すべてのカラスが黒いわけではないことを証明するには、1羽の白いカラスを見せればよい！そしてこれは間違いなく、1羽の素晴らしい小さな白いカラスである。

しかし、“フリーエネルギー”に至る最も普遍的な入り口は、単純で小さな源泉双極子 (source dipole) である。この双極子は、真空から電磁気エネルギーを取り出す普遍的な負抵抗体となる。具体的に言えば、それは時間領域(複素平面)からエネルギーを吸収し、実三次元空間にそのエネルギーを放つ。残念ながら、紙数の制限により、これについての議論はここまでとする。

## 反重力と電気重力

### Anti-Gravity and Electrogravitics

スカラー電気重力の領域では、二つの魔法の法則がある:

(1) 通常の電磁場が干渉を受けたり合成されたりしてそのベクトルがゼロになると、それらは真空に応力を生じる(5次元ポテンシャル)。この5次元ポテンシャルの一成分が、4次元空間(\*通常の空間)の重力ポテンシャルである。この4次元空間の重力ポテンシャルは、その勾配(gradient)として流出するので、電磁場を破壊する干渉あるいはゼロ・ベクトルにする合成は、重力場を生じる。

要するに、破壊的な干渉を行なう電磁波あるいは力場は、それを検出する、あるいはそれと結合する粒子に対して重力場を生じる。

(2) 電気重力場が干渉を受けたり合成されたりしてそのベクトルがゼロになると、この破壊的な干渉あるいはゼロ・ベクトルにする合成は、通常の電磁場を生じる。

要するに、スカラー電磁波あるいは場(電気重力波あるいは場)の破壊的な干渉は、それを検出する、あるいはそれと結合する粒子に対して、電磁場を生じる。

こうして、長年の科学の夢だった重力場の - そして時空間そのものの - 直接制御が、今や現実のものとなった。まず、電磁場をゼロ・ベクトルにし、応力の強さと合成成分の内部パターンを変える。また、電磁気応力のゼロ・レベルとなる基準ポテンシャルを変え、内部成分の変化の周波数を変える。



ここに反重力の秘密を述べる。

荷電粒子の“電荷” - たとえば原子の軌道電子の一つ、あるいはその原子核の陽子の一つ - は、局所的な粒子とその周囲の真空との間の流束強度の差(ポテンシャル)を表す。

それは重力荷 (gravitational charge) が絶え間なく電荷として流出しているのである。

もしその流出を逆転あるいは停止させると、重力ポテンシャルと重力荷に対する劇的な効果が続いて起きる。5次元ポテンシャルと5次元重力荷は、それぞれ4次元ポテンシャルと4次元重力荷になっている。(トーマス・E・ビールデンの *FER DE LANCE (1986)* に詳しい解説がある)

こうして、そのスカラー・パターンによる物体の“充電”は、それを重力的に充電する。

今や、唯一の“流出経路”は、4次元重力場である。

さらに、原子核の中では、核子が絶えず陽子と中性子の間を行きつ戻りつ姿を変えているので、その電荷は核子全体に“行きわたり”，すべての核子により共有されている。

さらにまた、各元素(実際には各同位体)はそれぞれ固有のフーリエ展開スカラー周波数、振幅などの“集合パターン”を持っている。このパターンは、もちろん、改良された電磁波送信機(つまり、スカラー電磁波送信機)により、人工的に再現し送信することができる。しかし、核子(仮想的な電荷の流れの交換により相互に行きつ戻りつ姿を変えている陽子と中性子)には、一種の“親鍵”となるスカラー電磁波(電気重力)パターンがある。

もし、このパターンを反対にして“充電を逆転”させると、“反対の重力荷で質量を充電する”ことになり、外部の観測者にとってその充電している質量は、どんどん軽くなり、その慣性もどんどん小さくなる。最終的にそれは(観測者にとり)負の質量と負の慣性を持つに至り、加速して地球から彼方へと飛び去る。物体は“下に落下”する代わりに“上に落下”するのである。

また、ある奇妙な時間効果も起きる；物体は時間の中を実験室の観測者よりもゆっくと移動することができるし、時間の中を逆行することさえできる。(相対性理論について人々が教えることを何でも信じてはいけな；彼らの中で一般相対性理論の状況の一つでも実現した人はほとんどいない。一般相対性理論について彼らが教えることの中に、直接の実験に基づいたものは何もない。彼らが教える大部分は、すでに実験で誤りであることが証明されている)

パターン自身の中では、それはきわめて正常なパターンである。もし物体が均一に充電されていれば、物体にとってその内部あるいは表面に変化が起きているようには見えない。実際に、内部の観測者にとって突然奇妙に見え始めるのは、外部の環境である！

たとえば、それは悪名高いバミューダ三角海域のような、時にスカラー波が活動的になる地帯で、異常な時空の狂いを経験する不運な航空機や艦船に時々起きていることのように思われる。条件さえ揃えば、船体の重力荷はその地帯で地球から放射されるスカラー波の異常な変化の影響を受

ける。乗客や乗員にとって、突然奇妙になるのは外部の環境の方である。それに加え、船内の電磁機器や慣性装置も影響を受けるだろう。また、船体各部の充電速度の違いにより、他の電気重力的効果も起きるかもしれない。

“電気重力充電の逆転あるいは減少”は、集合パターン送信機上の基底ポテンシャルにバイアスをかけることにより制御される。これらの送信機は船内に持ち込むこともできる。というのは、スカラー電磁気理論では、送信と受信は同時だからである。船体は適切な送信により、(局所真空重力ポテンシャルに対して)それ自身のバイアス・ポテンシャルを変えることができる。それは“受信されるポテンシャル充電”に転換される。その荷流は負にも正にもなり得る(そのポテンシャルは、真空のそれに対して減少させることも増加させることもできる)。

これをうまく利用すれば、金属を空中に浮かすことができる。人体、戦艦、あるいは乗員を乗せた高速の船体も同様である。

さらに、それを“非物質化(dematerialize)”することも“瞬間移動(teleport)”させることもできる。

1940年代の“フィラデルフィア実験”では、実験船となった掃海艇 IX97(本当は“マーサズ・ビンヤード”という名前のヨット)とその乗組員が、緩やかな制御されたやり方ではなく、“吹き飛ばされて”この奇妙な世界に移行した。事実上死の床にあったニコラ・テスラが、これに関わった科学チームに実験の指導をしていた。(ボブ・ベックウイズの著書 *Hypotheses* を読みたい - ベックウイズは、そのチームにゼネラルエレクトリック社から参加した科学者だった) この実験結果は、個人的な情報源によると、2002年に機密解除されることになっている。実験では、偶発的な時間旅行により、実験船は別の場所に移動し、また元の場所に戻った。そして、身の毛もよだつ恐ろしい結果をもたらした(乗組員は甲板などを貫き、それと融合していた)。

今、実質的に重力荷を減少あるいは逆転させる(調節する)ものとする(5次元重力ポテンシャルと電磁気へ流出する経路を締めるゼロ合成された電磁場)。重力荷がゼロになると、外部の観測者には船体が無質量、無慣性になったように見える。そうなると、極端な加速、全速力での直角方向転換などが可能になる。それはまた、まさに非物質化しかけている状態でもあり、光の船体のように見える。

もしパイロットが“着陸”したいと思ったら、当然彼は船体の重力荷を調節しなければならない。

もしパイロットが“非物質化”あるいは“瞬間移動”したいと思ったら、再び彼は船体の重力荷を調節しなければならない。

もし彼が“超空間(hyperspatial)”に移行したいと思ったら、再び彼は船体の重力荷を調節し、超空間力を生むための適切な流出を得なければならない。これは、多段階的(nested)なゼロ合成と多段階的なスカラー電磁波送信により行なわれる。

つまり、彼は複数の多段階的なゼロ合成を同時に行なうことにより、船体を充電しバイアスをかけることができる。

超空間制御と旅行のために、それが必要である。

低次の超空間では、船体はとても不思議な現象を起こし得ることに留意されたい。たとえば、固体物質の“貫通”などである(実際には、第4 カラーザ-クライン空間でその3次元物体を“迂回”しているのである)。

このような船体は輝いて見えることになるだろう。それらの表面の外観や機構もまた、輝いたり回転したりする光といったものに見えるだろう。

それらは、大気中でなら一見信じ難い“空力性能”を見せるかもしれない。

実際に、それらは大気の“中を”移動するのではまったくくない。それらは大気分子の外側にある高次空間を通過しているのである。

それらは非物質化し、物質化するように見えるかもしれない。

それらは海に飛び込み、また海から飛び出すように見えるかもしれない。

それらは海の中や、地球そのものの内部においてさえ活動するように見えるかもしれない。

このような特異な船体性能は、これまで世界中で目撃されてきた。特に、第二次大戦の数年後からはそうである。

米国政府、ソ連(そしておそらく地球上の他の国々)は、(我々の地球外訪問者たちに対する秘密と同じ)堅い秘密の中で、今現在このような輸送機を活動させている。

これはしかし、我々の本当の“政府の政府”ではない。そうではなく、それは“統制グループの政府”である。それは運営レベルの政府であるが、高いレベルにおいてある統制グループに属している。この統制グループは、我々の政府の枢要部に浸透し、このようなすべてのプロジェクトを掌握している。

電気重力は、米国政府において幾度となく繰り返し取り組まれてきた。そのたびに、それは暴力的に潰されるか、本当の政府ではない政府の内部筋による、不可解な統制のもとに引きずり込まれてきたように思われる。

このような“引きずり込まれた”プロジェクトのいずれにおいても、その運営に関わる個々人は、本当の政府職員である。彼らはその高い機密性を持ったプロジェクトが、米国政府により統制されていると信じて疑わない。彼らは、知る必要性を持った上層の政府高官たちが、そのプロジェクトについて完全に知っていると考えている。

実のところ、その思い込みは間違っている。プロジェクトの最上層部においては、そのプロジェクト

トは米国政府に報告されない。それは統制グループの代表者たちに報告される。プロジェクトを、米国政府において直接の指揮系統上にあり、機密取扱許可と知る必要性の応分の資格を持つ高官たちからさえも隠蔽する覆いとして、最高度の機密分類が使われている。

今述べたように、もし誰かが次のように訊いたら、用心しなければならない。“我々の政府は、こんな事はしていないんじゃないか？” 答は、イエスでもあり、ノーでもある。

我々の合法的な政府の政府は、このような輸送機を持つことも知ることも許されていない。

我々の違法な統制グループの政府が、それらを数十年間掌握している。

### タウンゼント・ブラウンの電気重力技術

#### Townsend Brown's Technology of Electrogravitics

1920年代の中頃、タウンゼント・ブラウンは電荷と重力質量が結合していることを発見した。彼が知ったのは、キャパシタを高圧で充電すると、正に帯電した側に向かって力が働くということだった。これはビーフェルド-ブラウン効果として知られるようになった。彼の重要な発見は、当時の既成的思考の科学者たちから反対された。

真珠湾での実演。1953年頃、ブラウンは軍の最高幹部たちのために、ある実演を行なった。彼は直径3フィートの1対の円盤を中心の柱に係留し、直径50フィートのコースに沿って飛ばした。150,000ボルトに充電され、前縁部からイオンを放射しながら、円盤は時速数百マイルの速度に達した。この主題は、その後で機密扱いになった。

ウィンター・ヘイブン計画。ブラウンは国防総省に対し、マッハ3の円盤型電気重力戦闘機を開発する提案を行なった。その基本設計が彼の特許の一つに示されている。それらは、本質的に彼の係留試験円盤の大型版である。

アビエーション・スタディーズ・インターナショナル(Aviation Studies International)。彼らは、軍のために情報研究を行なうシンクタンクである。1956年に、彼らは“電気重力システムズ”という題名の報告書を発表した。その中で、彼らは政府に対し、タウンゼント・ブラウンの電気重力技術を発展させるために十分な政府予算を組むこと、およびウィンター・ヘイブン計画を実施することを提唱した。報告書は、航空宇宙産業の大部分が、この反重力技術の研究に積極的に取り組んでいると明言した。そこには、次の企業名が挙げられていた： グレン-マーチン社、コンベア社、スペリー-ランド社、ベル社、シコルスキー社、ダグラス社、そしてヒラー社。この分野に参入した別の企業にはロッキード社とヒューズ航空機社が含まれており、後者は一部の人々により、この分野において世界のリーダーだと見られていた。この報告書は最初機密扱いだった。ポール・ラビオレット博士が1985年にそれを国会図書館のカード目録の中に見つけ、偶然に発見された。しかし、文書はそこから紛失していた。彼らの職員がコンピューター検索し、その他に知られているただ一つの複製がライト-パターソン空軍基地にあることを突き止めた。ラビオレットは後に、図書館相互貸借によりそれをライト-パターソン基地から入手した。現在それは、T・バロン(編集者)の著書 *Electrogravitics Systems (電気重力システムズ)* の中で公表されている。

ノースロップ社の風洞実験。1968年に、ノースロップ社の技術者たちは風洞実験を行ない、その中で翼の前縁部を高電圧に帯電させた。彼らは、航空機の衝撃音波を緩和するためにこの技術がどのように有益に使えるかを調査していた。こうして、彼らはブラウンの電気重力概念について大規模な試験を行っていた。ブラウンの研究開発会社は、以前に、衝撃音波の緩和はこの電気重力推進技術の有用な副次効果であることを公表していた。興味深いことに、ノースロップ社は後にB-2爆撃機の第一の請負業者になった。

B-2爆撃機。1992年に、極秘プロジェクトの科学者たちは、アビエーション・ウィーク・アンド・スペース・テクノロジー(Aviation Week and Space Technology)誌に次のことを公開した：B-2は、その排気を静電的に高圧に帯電させ、それと同時にその翼形機体の前縁部を逆極性に帯電させる。この情報に接して、ラビオレット博士は1993年にB-2推進システムを逆行分析した。彼の提案は、B-2は本質的にタウンゼント・ブラウンの特許である電気重力航空機の実現だということだった。B-2は通常のジェット推進で離陸することができる。しかし空中に舞い上がったなら、その電気重力駆動が稼働し、推力を増強する。このシステムは、乾燥した条件下でのみ稼働可能である。もし、B-2の誘電体翼が濡れたら、印加高電圧はショートする。これが、B-2が雨の中を飛行できない理由である。ブラウンの電気重力実験、そしてラビオレットが開発(1985, 1994a)した場の理論のいずれも、B-2の高電圧空間電荷差は、前部から後部への重力勾配を生み出し、それが機体の前方への運動を強める役に立つことを示唆している。ラビオレットの理論では、B-2の周囲電荷の前方への運動はさらに大きな重力推進効果を生じる。その効果はブラウンの電気力学実験の中でも見られる。

電気重力駆動により、B-2はその燃料消費量を劇的に削減することができる。高速飛行の条件下では、それをゼロにすることさえ可能である。民間航空会社は、この技術により劇的な便益を受けることができるだろう。それはジェット旅客機の燃料消費効率を大幅に向上させるのみならず、飛行時間を大幅に短縮する高速飛行をも可能にする。

電荷の移動は、さらに大きな推進効果をもたらすだろう。同じ効果が、B-2爆撃機に利用されていると思われる。

シド・ハーウィッチ

**Sid Hurwich**

1969年に、トロントの発明家シド・ハーウィッチが、彼の重力場制御装置をトロント警視庁に実演して見せた。強盗特捜班の警部ビル・ドルトンが、彼の勤務用リボルバー(拳銃)をその実演に提供した。そのリボルバーはテーブルの上に張り付いて動かなくなり、彼はそれを持ち上げることも引き金を引くこともできなかった。その部屋で実験が始まって約30分後、掛け時計や腕時計の時刻は、持ち込まれたときのままだった。これは時空間の強い湾曲を示していた。

その後、この装置は1976年7月3日に、イスラエルによるウガンダ・エンテベ空港での奇襲作戦で使用された。後にバンクーバー・サン紙の週末版1977年12月17日号は、その17頁に“イスラエルの秘密兵器”の見出しで記事を載せた。

ブラジルの物理学者フラン・デ・アキノ(Fran De Aquino)教授は、2000年に発表された幾つかの興味深い論文<sup>112)</sup>の中で、重力場の制御により、次のことを可能にしたと述べている：重力場から直接エネルギーを取り出すことができた；極低周波放射を使って重さ77ポンド、直径2フィートのドーナツ形物体を浮揚させた。デ・アキノ教授は、ブラジル・マラニャン州の州都サン・ルイス市にあるマラニャン州立大学物理学部教授である。デ・アキノ教授は、論文がノーベル賞受賞者を含む36人の科学者により査読されたことを報告している。

**サール(Searl)**電気重力円盤とロシア人の実験。英国の技術者ジョン・サールにより40年以上も前に開発されたこの装置は、分割された一つの回転円盤で構成されており、その分割部分は円周軌道の内側を転がる一連の円筒永久磁石で支持されている。これは完全な離昇(lift off)を達成したと言われている。この数年間に、ロシア国立科学アカデミー所属の二人のロシア人科学者、**ロスチン(Roschin)**と**ゴディン(Godin)**は、単純化されたサール円盤を建造し、その特異な重量減少効果を裏付けた。彼らは、直径1メートルの円盤を毎分600回転させ、35パーセントの重量減少を実現すると同時に、7キロワットの余剰電力を発生させた。

**ポドクレトノフ(Podkletnov)**の重力遮蔽体とグリーングロー計画。ポドクレトノフ博士に率いられたフィンランドの研究チームが、回転超伝導円盤で実験を行っていた。それは、一連の電磁石が発生した反発磁場により、空中に浮揚させられていた。彼らは1996年に、円盤は部分的に地球の重力場を遮蔽し、円盤の上方にある物体の重量を2パーセント減少させることができたと言った。推進の他に、重力差生成による機械的電力発生という応用があるのは明らかである。ここ数年間に、ブリティッシュ・エアロスペース社とマルコーニ・エレクトロニック・システムズの合併で誕生したBAEシステムズ社が、ポドクレトノフの重力遮蔽体を研究している。彼らはこの研究を、非既成技術の実現可能性を調査するために彼らが立ち上げた、グリーングロー計画のもとで進めている。

重力慣性揚力システム(Gravito Inertial Lift System)。航空宇宙技術者の**ジム・コックス(Jim Cox)**は、最近ディーン駆動(Dean Drive)を改良した。ディーン駆動は1959年5月に特許が付与された、一つの慣性推進エンジンである。彼は、エンジン重量の90パーセントに相当する上昇推力を実証した試験について報告している。それは1/4馬力モーターを1個使い、互いに逆転する2個の回転子を回転させる。回転子は直径が約1センチで、約200ワットの電力を消費しながら、毎分約600回転する。揚力は、回転子を正弦波状に上下振動させ、上昇行程で揚力を取り出す構造体と連動させることにより得られる。1馬力当たり約45ポンドの揚力が得られる(～55ポンド/kW)。彼の計画は、400ワットの消費電力で毎分1,200回転する1/2馬力モーターを使い、支障なく上昇する装置を年内につくることである。彼の計算では、この技術を使えば、200馬力の自動車エンジン1台で約9,000ポンド(\*約4トン)の揚力を発生させることができる。

偏向力場推進(Kineto-baric Field Propulsion.)。ドイツの物理学者**ルドルフ・ジンサー(Rudolph Zinsser)**は、鋸歯状電磁波が遠く離れた物体に圧力を及ぼし得ることを発見した。彼は、急上昇緩降下の45メガヘルツ電磁波を送信するラジオ真空管回路を作った。彼の実験では、これらの電磁波が最大 $10^4$ から $10^5$ ダイン秒の衝撃を及ぼし得ることが実証された。これは、毎秒約1ないし3オンスの力を与えることに相当する。彼は、この力が驚くほど低い入力で発生することを知った。出力対入力比は、従来の推進方法の10の数乗倍に達する。彼の予測では、キロワット当たりの推力は1,350ポンドである。

圧電物質に対する場の推力実験(Field Thrust Experiments on Piezoelectrics)。カリフォルニア州立大学フラートン校の物理学教授ジェームズ・ウッドワード(**James Woodward**)は、電磁波が圧電セラミック媒質に揚力を誘発し得ることを示す実験を行なっている。彼の考えは、1994年の米国特許と1990年の物理学誌の中で述べられている。ウッドワードは実験により、この推進効果を可聴周波数(~10,000ヘルツ)で確認した。彼の計算によれば、この効果は周波数が高くなると共に大幅に増大し、マイクロ波周波数帯(0.1から10ギガヘルツ)で最大になる。彼の研究は、部分的にエネルギー省から支援を受けている。

米国上院(2000年10月)に提示した反重力研究の要約を引用することを承諾してくれたポール・ラビオレット博士に感謝する。また、他の多くの匿名の情報提供者たちにも感謝する。

#### 一般的な参考文献:

LaViolette, P.A., "An Introduction to Subquantum Kinetics," Parts I, II, and III Intl. J. General Systems, vol. 11 (4), 1985, pp. 281-345.

\_\_\_\_ "Subquantum Kinetics", Starlane Publications, Alexandria, VA, 1994a.

\_\_\_\_ "The U.S. Antigravity Squadron," in Electrogravitics Systems, edited by T. Valone, Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1994b.

Roshchin, V.V. and S. M. Godin, "An Experimental Investigation of the Physical Effects in a Dynamic Magnetic System in a Dynamic Magnetic System," Technical Physics Letters vol. 26 (12), 2000, pp. 1105-1107.

Valone, T. (ed.), Electrogravitics Systems, Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1994.

Woodward, J., "A New Experimental Approach to Mach's Principle and Relativistic Gravitation," Foundations of Physics Letters, vol. 3(5), 1990.

Zinsser, R., "Mechanical Energy from Gravitational Anisotropy," edited by T. Valone. Integrity Research Institute, Washington, D.C., 1989.

Brown, T.T. (<http://www.soteria.com/brown/>)

-----  
103) Moray, T. Henry, The Sea of Energy in Which the Earth Floats, 4th Edition. See also Moray, T. Henry, The Sea of Energy, 5th ed., Salt Lake City, 1978. Foreword by T.E. Bearden.

104) Kron, Gabriel, "The frustrating search for a geometrical model of electrodynamic networks," circa 1962.

105) Kron, Gabriel, "Numerical solution of ordinary and partial differential equations by means of equivalent circuits," Journal of Applied Physics, Vol. 16, Mar. 1945, p. 173.

106) Kron, Gabriel, "Electric circuit models of the Schrodinger equation," Phys. Rev. 67(1-2), Jan. 1 and 15, 1945, p. 39

107) L Mandelstam. [L.I. Mendel'shtam], N. Papalexi, A. Andronov, S. Chaikin and A. Witt, "Report on Recent Research on Nonlinear Oscillations," Translation of "Expose Des Recherches Recentes Sur Les Oscillations Non Lineaires," Technical Physics of the USSR, Leningrad, Vol. 2, 1935, p. 81-134. NASA Translation Doc. TTF-12,678, Nov. 1969.

108) Note: COP stands for Coefficient of Performance

109) William B. Burford III and H. Grey Verner, Semiconductor Junctions and Devices,

McGraw-Hill, New York, 1965, p. 281-291.

110) Johnson, H.R., "Permanent Magnet Motor." U.S. Patent No. 4,151,431, Apr. 24, 1979. See also Johnson's U.S. Patents 4,877,983, Oct. 31, 1989 and 5,402,021, Mar. 28, 1995

111) Fleischmann, Martin, Stanley Pons, and M. Hawkins, "Electrochemically induced nuclear fusion of deuterium," J. Electroanal. Chem., Vol. 261, 1989, p. 301-308 and erratum, Vol. 263, p. 187

112) "How to Extract Energy Directly from a Gravitational Field", "Possibility of Control of the Gravitational Mass by Means of Extra-Low Frequencies Radiation", and "Gravitation and Electromagnetism: Correlation and Grand Unification"

-----



## 8.0 最近の民間による研究の概要

ここには、UFO現象の本格的で深い思慮に基づく研究の例として、最近の2報告の要約が収録されている。最初は、米国で作成され1998年に公表された、スターロック/ロックフェラー報告である。もう一つは、フランスで作成され1999年に公表された、COMETA報告である。

### 8.1 UFO報告に関係した物理的証拠のスターロック/ロックフェラー報告

UFO現象によるものとされる物理的証拠を再考するために、1997年にピーター・スターロック博士と科学探究協会(Society of Scientific Exploration; SSE)が主催し、ローランス・S・ロックフェラー氏が資金提供をしたワークショップが開催された。これはほぼ30年間で初めて行なわれた、これらの諸問題についての科学界による重要な再検討であり、その結果は全国メディアで報道された。ワークショップ議事録の要旨(科学探究誌; Journal of Scientific Exploration)<sup>113)</sup>を以下に転載する。それに続き、このワークショップ議事録についてのスタンフォード大学通信報道部による論説を掲載する。議事録の全文は科学探究誌より入手することができる。これは後に1999年に出版されたピーター・スターロック博士の著書<sup>114)</sup>に掲載された。

要旨

#### UFO報告に関係した物理的証拠: ニューヨーク州タリタウン、ポカンチコ会議センターで 1997年9月29日から10月4日まで開催されたワークショップの議事録

P・A・スターロック他, スタンフォード大学

(P. A. Sturrock, et al., Varian 302G, Stanford University, Stanford, CA 94305-4060)

この4日間のワークショップの目的は、UFO報告に付随する物理的証拠といわれるものについて、このような証拠の収集と調査を続けることがUFO問題の解決、つまりこれらの報告の原因あるいは諸原因を断定する役に立つかどうか、ということ視野に入れながら、再検討することだった。7人のUFO研究者が、UFO報告に付随していたと彼らが主張する様々な物理的証拠について発表した: 写真類; 光度の推定値; レーダー観測データ; 自動車の機能障害; 航空機の計器異常; 明らかな重力あるいは慣性への影響; 地上の痕跡; 植生の損傷; 目撃者への心理的影響; 遺留破片の分析。これに加えて、ノルウェーのヘスダレン谷で繰り返し発生している現象の調査についての発表が1件あった。様々な専門分野と関心を持つ9人の科学者により、調査委員会が組織された。委員会は、発表された調査に関して意見と批評を述べた。そして、以下の主要事項について全体的な意見の要約を作成した:

- ◆ 研究者たちにより提示された事例資料について、委員会が出した結論は以下のとおりである。報告された少数の事件には、たとえば電氣的活動のような、稀ではあるが重要な現象が含まれている。しかし、未知の物理過程あるいは地球外知性体の関与を示す説得力のある証拠はなかった。
- ◆ それでもなお、委員会は次のように結論した。UFO報告を注意深く評価することは、有益である

うと思われる。なぜなら、説明されない観測結果には常に、科学者がそれらを研究することにより新しい発見をする可能性があるからである。しかし、信頼性を確保するためには、そのような評価が客観的で、かつ対立仮説をも積極的に評価する態度でなされなければならない。

- ◆ 最も期待されることは、関連する仮説の意味のある評価が、物理的証拠の吟味により達成されることである。
- ◆ 重要な進歩がもたらされる可能性は、30年前にコンドン報告をまとめたコロラド計画の時代よりも今の方が高いと考えられる。なぜなら、科学的知識と技術的能力は進歩しており、また CNES (Centre National d'Etudes Spatiales; フランス国立宇宙研究センター) による、地味ではあるが実効のある UFO 研究計画の例もあるからである。

スタンフォード大学通信報道部ニュース発表, 1998年6月22日

### UFO の証拠は研究に値すると科学委員会が結論

1970 年以来初めてとなる、UFO 現象に関する独自の再検討の中で、科学者たちの委員会は、一部の目撃に科学的研究に値する物理的証拠が付随していると結論した。しかし委員会は、この証拠のどれかが、知られている自然法則に違反し、あるいは地球外知性体の関与を示しているとは確信しなかった。

この再検討は、スタンフォード大学の応用物理学教授ピーター・スターロックにより準備され、方向付けされた。そして、その運営は未解明現象の研究のために公開討論の場を提供する、科学探究協会が担った。9人の科学者による国際調査委員会が、最も説得力のあるデータを提示するように要請された8人の研究者による UFO 報告の発表を検討した。スタンフォード大学の電気工学名誉教授フォン・R・エシユルマンが共同議長を務めた。

UFO 報告は 50 年前から存在しているが、集められた情報は、未知の物理過程あるいは異星人の技術が関与していることを立証していない。しかし、そこには十分な数の興味をそそる不可解な観測が含まれている、委員会はそう結論した。“UFO 報告を注意深く評価し、現在の科学が知らない異常現象についての情報を取り出すことは、価値のあることかもしれない” 科学界がそれを信頼するためには、“そのような評価が客観的で、かつ対立仮説をも積極的に評価する態度でなされなければならない” これが今まで欠けていたことだ、委員会はそう付け加えた。

この結論は、コロラド計画の責任者エドワード・U・コンドン博士が 1968 年の UFO 報告の中で出したそれと異なっている。彼の結論は、次のようなものだった。“科学の進歩を促すという期待を持ちながら、UFO に関するこれ以上の規模の研究を進めることは、おそらく妥当ではない” しかし、委員会の結論は、2年後(\*1970年)に公表された米国航空宇宙協会のキュットナー報告が到達した結論、すなわち“客観的手段による改良されたデータ収集と、高品質の科学的分析に重点を置いた、継続的で適度な[研究]努力”を主張したそれと、大変よく似ている。

この検討の中で、科学委員会は何らかの物理的証拠を伴う事件に焦点を当てた。それらの中に

は写真類、レーダー観測データ、自動車への干渉、航空機の計器に対する干渉、明らかな重力あるいは慣性への影響、地上の痕跡、植生の損傷、目撃者への心理的影響、および遺留破片が含まれる。特に関心を持たれたのが、UFO との遭遇が人々の健康を害する可能性がある報告である。伝えられるところでは、一部の目撃者は、放射線被爆型の損傷を受けた。これらの報告に基づき、委員会は起こり得る健康上の危険について、医学界に注意を促した。

科学者たちは報告された幾つかの事件が、たとえば雷よりも激しい電氣的活動あるいはレーダー波のダクト伝播(大気中の導波経路によるレーダー波の捕捉と伝播)といった、稀な自然現象により引き起こされていた可能性に気付いた。しかし、委員会は UFO に関連した諸現象の一部がそうした方法では説明が困難であることを知った。

委員会に提示された証拠をこれ以上分析しても、報告の裏に潜む原因について新たな知見は得られそうもない、これが委員会の意見だった。

科学者たちは、さらに次の所見を述べた：

- ◆ UFO 問題は単純ではない。また、ただ一つの一般的な答などない。
- ◆ 説明されない観測結果には、常に科学者がそれらを研究することにより新しい発見をする可能性がある。
- ◆ 研究は、可能な限り多くの独立した物理的証拠を伴う事例に集中すべきである。
- ◆ UFO 研究界と物理学者たちとの継続的な連絡が、成果を生み出すと考えられる。
- ◆ この分野の研究に対する制度的支援が望まれる。

委員会の構成員は、以下のとおりである： フォン・エシュルマン； トーマス・ホルツァー(コロラド州ボールダーの高所天文台)； ランディ・ヨキッピ(ツーソンのアリゾナ大学惑星科学教授)； フランソワ・ルワンジ(フランス・パリのフレクシメージ社代表取締役)； H・J・メロシュ(ツーソンのアリゾナ大学惑星科学教授)； ジェームズ・J・ペーパーイク(アルバカーキのニューメキシコ大学地球・惑星科学教授)； グンサー・ライツ(ドイツ・ケルンのドイツ航空宇宙センター航空宇宙医学研究所)； チャールズ・トルバート(シャーロットツビルのバージニア大学天文学教授)； バーナード・ベイレ(フランスのボルドー大学生体電磁気学研究所)。エシュルマンとホルツァーが委員会の共同議長を務めた。

証拠を提示した UFO 研究者は、以下のとおりである： リチャード・ヘインズ(カリフォルニア州ロスアルトス)； イロブラント・フォン・ルトビガー(ドイツ)； マーク・ロドガー(シカゴ UFO 研究センター)； ジョン・シュスラー(ヒューストン)； アーリング・ストランド(ノルウェー・シェーベルグのオストフォル大学)； マイケル・ソード(カラマズーのウェスタンミシガン大学自然科学教授)； ジャック・バレー(サンフランシスコ)； ジャン-ジャック・ベラスコ(フランス・ツールーズの国立宇宙研究センター)。

この研究はローランス・S・ロックフェラーにより創始され、LSR(ローランス・S・ロックフェラー)基金により財政支援された。

デービット・F・ソールズベリー, e-mail: [david.salisbury@stanford.edu](mailto:david.salisbury@stanford.edu)

スタンフォード大学通信報道部(650)725-1944

関連資料と報告の全文が科学探究誌ウェブサイト: <http://www.jse.com> にある。

## 8.2 COMETA 報告: UFO と国防に関するフランスの報告

以下は、フランスの UFO 作家ジルダ・ボーデにより書かれた英文要約である。報告書の全文英訳が第 II 巻の付録に収められている。UFO 問題に関するこの重要な研究は、米国の報道界ではほんの少ししか取り上げられなかったが、注目すべき例外はボストン・グローブ紙<sup>115)</sup>に掲載されたレスリー・キーンの記事だった。そのコピーが付録 I にある。

### ジルダ・ボーデによる要約

はじめに、これが COMETA と呼ばれる民間団体による独自の報告書だということを強調しなければならぬ。この要約は執筆者たちの同意を得て書かれている。この報告書を直接に翻訳して公表するためには、部分であれ全文であれ、COMETA 広報担当者のミシェル・アルグリニ氏(フランス、パリ 75005, サン・ジェルマン大通り 25)に手紙を書き、承諾を得るべきである。

1999 年 7 月 16 日金曜日、フランスで一つの傑出した文書が公表された。“UFO と防衛。我々は何に対して備えるべきか?” (“Les OVNI et la Defense. A quoi doit-on se preparer ?”)である。

この 90 頁の報告書は綿密な UFO 研究の成果であり、この主題の多くの側面、とりわけ防衛問題を取り上げている。研究は、きわめて厳粛な国防高等研究所 (IHEDN; Institut des hautes Etudes de defense nationale) の前“監査官たち”の独立グループ、および様々な分野の有資格専門家たちにより、数年間にわたり行なわれた。公表に先立ち、報告書はフランス共和国大統領ジャック・シラクと首相ライオネル・ジョスパンに送付された。

この報告書の序文は、IHEDN 前所長ベルナール・ノーラン空軍将軍によって書かれ、フランスの NASA とも言うべき国立宇宙研究センター (Centre National d'Etudes Spatiales; CNES) の前所長アンドレ・ルボーの前置きで始まっている。報告書の共同執筆グループそれ自体は、専門家たちの団体であり、その多くが現在の、あるいはかつての IHEDN 監査官で、前監査官デニス・レティー空軍将軍により統轄されている。名称の“COMETA”は“Committee for in depth studies; 綿密研究委員会”を意味する。

全員を網羅していない構成員一覧が冒頭に掲げられているが、見事な顔ぶれである。以下の名前がある: ブルーノ・ルモワヌ空軍将軍 (IHEDN 前監査官); マーク・メルロ提督 (IHEDN 前監査官); ミシェル・アルグリニ (政治学博士, 弁護士, IHEDN 前監査官); ピエール・バスコン将軍 (軍備技師, IHEDN 前監査官); デニス・ブランシェ (内務省国家警察警視長); クリスティアン・

マルシャル(国家“鉱山局”技師長, “国家航空宇宙技術研究所(ONERA)”研究長); アラン・オルサーグ将軍(物理学博士, 軍備技師)。

委員会は、以下の外部寄稿者にも謝意を表している: ジャン-ジャック・ベラスコ(CNES 空中異常現象専門部(SEPRA; Service d'Expertise des Phenomenes Rares Aérospatiaux)); フランソワ・ルワンジ(フレクシメージ社長, 写真分析専門家); ジョセフ・ドモンジョ空軍将軍(IHEDN 監査官協会総代表)。

ノーラン将軍は短い序文の中で、この委員会がどのようにして生まれたかを記している。1995年3月に、レティー将軍が UFO に関する委員会の計画を議論するために、当時 IHEDN 所長だった彼に会いにきた。ノーランは関心があることを彼に明言し、彼を IHEDN 監査官協会に紹介した。それに応じて同協会は彼を支援した。20年前にこの同じ協会が出した報告書により、最初の UFO 研究部署である GEPAN (Groupe d'Etudes des Phenomenes Aérospatiaux Non-identifiés) が CNES に誕生したことをここで想起するのは、興味深いことである。

その結果、数人の IHEDN (国防高等研究所) 監査官協会員がこの委員会の構成員となり、これに他の専門家たちが合流する。彼らのほとんどが、防衛、産業、教育、研究、あるいは様々な中枢管理部門で重要な職務を現在持っているか、かつて持っていた。ノーラン将軍は、この報告書が国家規模の新しい取り組みを発展させ、不可欠な国際連携に役立つことを期待すると述べる。

COMETA 代表として、レティー将軍は報告書の中心テーマを指摘する。つまり、よく記録された観測の蓄積は、今や我々に対して UFO の起源に関するあらゆる仮説、とりわけ地球外起源説を考慮することを迫っている。

続いて委員会は、研究の内容を提示する:

第 I 部では、フランスと国外における幾つかの顕著な事例を取り上げる。第 II 部では、フランスと国外における研究組織の現状、さらに既知の物理法則に矛盾せず現象を部分的に説明する世界中の科学者の研究成果を述べる。次に、秘密の航空機から地球外起源の兆候まで、主要な全体的説明が検討される。第 III 部では、地球外起源仮説が確認された場合に、民間と軍の双方のパイロットに対する情報提供から、戦略的、政治的、宗教的影響までを含む、防衛に関してとられるべき対策が検討される。

## 第 I 部: “事実と証言”

選ばれた事例の多くは、大部分の研究者たちによく知られており、ここでは言及するだけで十分である。以下にそれらを列挙する:

- ◆ フランス人パイロットたちの証言。ジロー少佐, ミラージュ IV パイロット(1977); ボスク大佐, 戦闘機パイロット(1976); エールフランス AF3532 便(1994年1月)。
- ◆ 世界の航空機事例。レイクンヒース(\*英国空軍基地)(1956); RB-47(\*ジェット偵察機)(1957); テヘラン(1976); ロシア(1990); サンカルロスデバリロチェ市(アルゼンチン,

1995)。

- ◆ 地上からの目撃。タナナリブ市(\*マダガスカル) (1954)；フランス人パイロットによる地上付近での円盤目撃, ジャン-ピエール・ファルテ(1979)；ロシアのミサイル基地上空での近接目撃, 複数の目撃者(1989)。
- ◆ フランスにおける接近遭遇。バレンソール村(モーリス・マッセ氏, 1965)；キュサク村, カンタール県(1967)；トランザンプロバンス(1981)；ナンシー市(いわゆる“アマランス”事件, 1982)。
- ◆ 解明された現象による反例(2事例)。

抽出は限定的であるが, 知識は持たずとも偏見のない読者に UFO の実在性を確信させるためには十分であろうと思われる。

## 第 II 部：“知識の現状”

“知識の現状(Le point des connaissances)”と題された第 II 部は, フランスにおける公式 UFO 研究機関を外観することから始まる。ここでは, 1974 年に“憲兵隊”に最初に下された報告編集の指示書に始まり, 1977 年の GEPAN 誕生まで, その組織, および憲兵隊による 3,000 例を超す報告, 事例研究, 統計的分析などの成果が取り上げられる。続いて, GEPAN およびその発展組織である SEPRa から空軍, 陸軍, 民間航空会社, および試料や写真を分析する民間と軍の研究所へ送られた協約を外観する。

方法と成果に関して, 幾つかの有名な事例(トランザンプロバンス, アマランス)に我々の注意が向けられる。そして, 世界中の事例目録, とりわけパイロット(ワインスタイン目録)および“レーダー／目視”による事例目録に重点が置かれる。ここで, 歴史的な記録が登場し, すでに UFO の実在性を断言した 1947 年 9 月のトワイニング将軍の有名な手紙が引用される。

続く章は“仮説とモデル化の試み”(“OVNI : hypotheses, essais de modelisation”)と題され, 幾つかの国々で研究が行なわれているモデルと仮説が議論される。UFO の推進方法に関して, 速度, 動きと加速, 近くの自動車のエンジン故障, 目撃者たちの身体麻痺といった特徴の観測に基づいた, 部分的なシミュレーションがすでに行なわれている。一つのモデルが, すでに水中で実験に成功している MHD(magnetohydrodynamics; 磁気流体力学)推進であり, 数十年以内には超伝導回路を使って大気中で達成される可能性がある。また, 粒子線, 反重力, 惑星および恒星の引力利用といった, 大気中と宇宙空間で推進する他の研究についても, 簡潔に述べられる。地上の自動車のエンジン故障は, マイクロ波放射により説明されるかもしれない。実際に, 高出力超高周波発電機がフランスと他の国々で研究されている。一つの応用がマイクロ波兵器である。粒子線の場合, たとえば空気を電離して目に見える陽子線を使えば, 先端が途切れた光線の目撃例を説明することが可能である。マイクロ波は, 身体麻痺の説明になるかもしれない。

同章では, “全体的な仮説”が次に検討される。悪ふざけは稀であり, また容易に見破られる。非常に強力な勢力による謀略や巧みな操作, 超心理学的現象, 集団幻覚などの非科学的な事柄は取り上げられない。秘密兵器仮説もまた, 冷戦時代のいわゆる“洗脳工作”, あるいは自然現象と同様に, とてもありそうにないと見なされる。その結果, 我々に残されるのは, 様々な地球外起源仮説である。その一つが, 米国の物理学者オニールの“宇宙植民島”の概念に基づき, 天文学者の

ジャン・クラウデ・リーブとギ・モネによりフランスで展開されている。そして、それは今日の物理学と矛盾しない。

米国、英国、およびロシアにおける UFO 研究機関が素早く概観される。米国ではメディアと世論調査が、国民の興味と関心が著しいことを示している。しかし、当局、とりわけ空軍の立場は、今でも一種の否定である。より正確に言えば、国家安全保障にとり何の脅威もないということである。実際には、FOIA (情報公開法) により機密解除された文書は、別のことを示している。つまり、UFO による核施設の監視、および軍と情報機関による継続した UFO 研究である。

報告書は、米国における独立した民間団体の重要性を強調する。ここでは、1995 年に世界中の数千人の著名人に送られた“摘要書。入手し得る最高の証拠 (Briefing Document. Best available evidence)”，そして 1997 年のスターロック・ワークショップが言及される。これらはいずれも、ローランス・ロックフェラーにより支援された。“摘要書”が COMETA 報告の執筆者たちから歓迎されたのは明らかだった。委員会はまた、フィリップ・コース大佐のような、言うところの部内者たちが公に名乗り出たことにも留意し、彼の証言が、多くの批判があるにもかかわらず、米国の現状に関して一定の重要性を持つと考える。

報告は、特にニック・ポープに言及し、英国の事情を簡潔に述べる。そして、米国と合同で行なわれている秘密研究があるかもしれないと、問題を提起する。また、ロシアにおける研究、および公開された情報、とりわけ 1991 年の KGB による機密解除に言及する。

### 第 III 部： UFO と防衛

第 III 部の“UFO と防衛 (Les OVNI et la defense)”では、もしこれまで敵意を示す行動が示されてこなかったことが事実だとしても、フランスでは少なくとも幾つかの“威嚇”行動が記録されていると述べる(たとえばミラージュ IV の事例)。UFO の地球外起源仮説が除外できない以上、その仮説がもたらす影響について、戦略的レベルで、しかしまた政治的、宗教的、およびメディア/国民に対する情報の面からも研究する必要がある。

第 III 部の第 1 章は、予想される戦略 (“Prospectives strategiques”) を扱っている。そして、基本的な疑問から始まる：“もし地球外起源だとしたらどうなるか？ 彼らの意図は何で、彼らの行動から我々はいかなる戦略を導けばよいか？”

このような疑問から、報告のより一層論議を呼ぶ部分が始まる。たとえば、核ミサイル基地上空への度重なる飛来が示唆する、核戦争からの惑星地球の防御といった、地球外訪問者たちのあり得る動機がここで探究される。

続いて委員会は、公式であれ非公式であれ、国家によりその反応行動が異なり得ることを考察する。また、秘密の特権的な接触が“米国に起因する”可能性に焦点が当てられる。米国の姿勢は、1947 年の目撃多発とロズウェル事件以来、“最も奇妙”だと見なされる。そのとき以来、秘密を益々強固にする方策がとられてきたように思われる。それは、UFO 研究から獲得される軍事技術の優位性をどんな犠牲を払ってでも防御する、ということの説明されるかもしれない。

次に、報告書はこの疑問に取り組む：“いかなる方策を今我々はとらなければならないか？” UFO の性質がどのようなものであれ、とりわけ“不安定化をもたらす計略”の危険性に関して、少なくとも彼らは我々に“最大限の警戒”を強いる。何らかの衝撃的驚き、間違った解釈、および計略的な敵対行動を防止するために、指導者たちによる一種の“宇宙的警戒”が国家的、および国際的に必要となる。

COMETA は、国家単位では SEPPA(空中異常現象専門部)の強化を強く促している。そして、仮説の発展、戦略の計画、ヨーロッパおよび他の諸国との協力合意の準備を使命とする、政府最高レベルの組織を創設することを提言する。次の段階は、ヨーロッパ諸国とヨーロッパ連合が、政治的戦略的同盟関係の枠組みの中で、米国に向けた外交活動を開始することであろう。

報告書が提起する一つの重要な疑問が、“我々はいかなる事態に備えなければならないか？”である。報告書では、その事態を次のように述べる：地球外知性体による公式接触に向けた動き；ヨーロッパあるいはフランスでの UFO/異星人基地の発見；侵略(起こりそうにないと考えられる)と局所的あるいは大規模攻撃；他国の不安定化を企てる計略あるいは意図的な偽情報工作。

COMETA は、航空機搭乗員、管制官、気象予報官、技術者といった様々な人々に対する詳細な提言と共に、特別の注意を“航空に関わる意味”に向ける。また、防衛と産業の潜在的利益に関わる、開発研究者に向けた科学と技術レベルでの提言も述べられる。

報告書はさらに、UFO の政治と宗教に関わる意味を考察する。ここでは、モデルとして我々自身の宇宙開発の視野が使われる：我々はどのような行動をとるか、進化の遅れている文明との接触到、我々はどう対処するか？

このような研究姿勢は、豊富な UFO 関係書を読み十分な知識を持つ読者にとっては新しいものではない。しかし、この報告書のレベルで真剣に検討される場合、それは特別な価値を持つ。偽情報工作、嘲笑への恐れ、およびある種の集団による計略が取り上げられ、メディア/国民に関わる意味も見落とさなく述べられる。

結論の中で COMETA は、知的存在が制御する UFO の物理的実在性を、“ほぼ確実(quasi certain)”と主張する。ただ一つの仮説が、得られているデータを説明する：地球外訪問者仮説。この仮説はもちろん証明されていないが、遠大な影響力を持っている。これらの訪問者とされる存在の最終目的が何なのかは依然として不明であるが、推測と予想されるシナリオの主題であることは間違いない。

最後の提言の中で、以下の必要性が再度強調される：

1. すべての政策決定者と責任ある地位の人々に知らせる；
2. SEPPA における調査研究資源を強化する；
3. 宇宙探査に関わる諸機関に UFO 検出を行なわせることを検討する；
4. 国家最高レベルで戦略的組織を創設する；



5. この“重要問題”について協力するために、米国に向けた外交活動を開始する;
6. 非常事態に対処する方策を研究する;

最後に、この文書には7項目の興味深い付録が付いている。それらは精通したUFO研究者にとっても一読の価値がある。

1. フランスにおけるレーダー検出
2. 天文学者による目撃
3. 宇宙の生命
4. 宇宙の植民地
5. ロズウェル事件 - 偽情報工作(興味深い文章で、これを批判する者も、また私を含めて喜んで受け入れる者もいるだろう)
6. UFO現象の長い歴史。UFO年表の初歩
7. UFO現象の心理学的、社会学的、および政治的な諸側面

この報告書の重要性を、情報に通じた世界中のUFO研究者たちは見逃すべきではない。内容のみならず、その執筆陣の顔ぶれを見てほしい。一方、報告書に対する批判もある。事実、幾つかの痛烈な批判が、報告書の公表直後からインターネット上で行なわれた。そして、フランスの新聞には社会学者のピエール・ラグランジュによる批判記事が掲載された。不思議なことにその中では、この主題を嘲笑する手段としての偽情報工作を非難している(“Liberation of July 21, 1999”)。この要約が議論を明確にする役に立つことを願おうではないか。

ジルダ・ボーデ

- 
- 113) Sturrock, P. A. et al. (25 authors). 1998. Physical Evidence Related to UFO Reports: The Proceedings of a Workshop Held at the Pocantico Conference center, Tarrytown, New York, September 29 ? October 4, 1997. Journal of Scientific Exploration 12 (2): 179-229. Web site at: [http://www.scientificexploration.org/jse/articles/ufo\\_reports/sturrock/toc.html](http://www.scientificexploration.org/jse/articles/ufo_reports/sturrock/toc.html)
  - 114) Sturrock, Peter. A. The UFO Enigma: A New Review of the Physical Evidence. Warner Books, 1999. 416 pp.
  - 115) Kean, Leslie, UFO theorists gain support abroad, but repression at home. The Sunday Boston Globe, May 21, 2000, p. E3. (See Appendix I, AI.19)
-

## 9.0 付録 AI. UFO に関係した米国政府の文書

### 9.1 政府文書についての概要

この付録 I に含まれる文献は、この文書の本文中で参照されたもののみで、以下の基準で選択されている： 1) 目撃報告を明確に立証する、あるいは 2) 議論の中の特定部分を立証する。我々が収集した多くの重要な米国政府の UFO 文書(優に 1,000 頁を超える)は、それらのすべてを掲載するのは非現実的だという理由で、この摘要書には含まれていない。たとえばブラック・ボルト<sup>116)</sup>により運営されているウェブサイトには、UFO 問題に関連する入手可能な数千頁の政府文書がある(ほとんどが FOIA、つまり情報公開法<sup>117)</sup>により政府から入手したもの)。多くの文書は読むのが難しいかもしれないが、洞察力の鋭い読者なら直ちに、政府と軍の UFO 問題に対する深い関心と関わりを程度を理解するだろう。明白なのは、彼らの関心が続いていることだけではない。秘密と意図的な虚報および偽情報工作を組み合わせることにより、情報を国民から隠蔽し続けようとする願望の持続である(この過程は次の題名の論説で議論された：“認められざるもの”)。

報告された目撃のほとんどすべてに対して、“専門家”と当局によるおびただしい数の声明があることに留意すべきだ。しかし、これらすべての声明は、基本的にただ一つの現象により、説得力を失う：付録にあるような文書を機密扱いとし、情報公開法のかつてない強力な権限に耐えられるまで、ある場合にはそれに逆らってまで、その秘密を維持しようとする、我々の政府の継続的な行為。もしこれらの目撃に何の価値もないならば、秘密にする理由などあるはずがない！

UFO への関心に対する政府機関の二枚舌ぶりの好例が、ブラック・ボルトのウェブサイト<sup>118)</sup>上でジョン・グリーンワールドにより述べられている。その中で彼は、空軍から受け取った書簡から引用された、次の空軍の見解声明を挙げている：

UFO/UAO(Unidentified Aerial Object; 未確認空中物体)現象に関して、我々には、記録保存されているか否かにかかわらず、この種の現象に関する資料は何もない。また、1969 年の“ブルーブック計画”<sup>119)</sup>が公式に終了して以来、この種の情報が記録されたこともなければ、データベースが維持されたこともない。

ここに集められた証拠から、我々は空軍が“ブルーブック計画”の終了より前に、確かに UFO に関心を持っていたことを知る。なぜなら、空軍規則 AFR 200-2<sup>120)</sup>(1954)には、未確認飛行物体の報告方法が、その描写方法をも含めて述べられているからだ。上記の見解声明は、UFO に対して当面の関心がないことを暗に意味している。しかし、2000 年 3 月 7 日付けの現在の作戦報告に関する空軍マニュアル(AFMAN 10-206)は、CIRVIS(Communications Instructions for Reporting Vital Intelligence Sightings; 重大情報目撃の通信指示書)報告手順を述べており、その 5.7.3.3 節には“未確認飛行物体”が明記されている。それは、未確認航空機(5.7.3.1 節)とは別に記載されている。これらの報告は、NORAD(北米航空宇宙防衛司令部)司令官に提出される。

戦略空軍基地上空の通過に関する(6.7)節で論じた、1970 年代中頃の文書は、当時 NORAD が UFO に対して強い関心を持っていたことを示す。それは今日まで続いていると思われる。

116) Web site at: <http://www.blackvault.com>

117) FOIA-Freedom of Information Act. Set up by Congress in XXXX to allow citizens to obtain  
xxxxxxx

118) Web site at: <http://www.blackvault.com>

119) Project Blue Book was an Air Force sponsored research project to collect and investigate UFO sightings from March, 1952 to December, 1969 and followed its predecessors, Projects Sign and Grudge which had similar tasks.

120) See Appendix AI (Document AI.20). Full copy in PDF format is available on the AFDPO web site at: <http://afpubs.hq.af.mil>

---

## 9.2 付録 I.1: UFO に関係した政府文書の説明一覧

### AI.1. To: The Controller of Telecommunications

From: Wilber B. Smith, Senior Radio Engineer - Department of Transportation

Date: November 21, 1950

Re: Top Secret Memorandum on geomagnetic research project, including the information obtained through the Canadian Embassy that UFO subject is classified in US higher than the H bomb and the US assessment that "flying saucers exist".

### AI.2. To: Mr. Shlomo Amon

From: Senator Barry Goldwater

Date: March 28, 1975

Re: UFOS. Goldwater unable to find out what was stored in specific building at Wright Patterson AFB as it was classified above Top Secret.

### AI.3. To: Major Donald E. Keyhoe, Director National Investigation Committee on Aerial Phenomena

From: William Leet, USAF

Date: 11 March 1958

Re: Reports of several personal UFO sightings and offer to help Keyhoe and NICAP.

### AI.4. To: Commanding Officer, Air Transport Squadron

From: Graham E. Bethune and others - Multiple reports of same event

Date: 10 February 1951

Re: Sighting of UFO by aircraft crew. Object appeared to be circular, bright orange-red disc, approaching at "very great, undeterminable speed."

### AI.5. NORAD Log

Date: November 7, 8, 9, 1975

Re: Log entries by senior director of 24th NORAD Region describing UFO sightings at Malmstrom Air Force Base, MT.

AI.6. Extracts NORAD Command Director's Log

Date: 29 October 1975 - 23 November 1975

Re: Multiple reports of sightings

AI.7. Directory of Databases

From: Air Force

Date: beginning 1971

Re: NORAD Unknown Track Reporting System (NUTR)

AI.8. Report. of Sighting

From: National Military Command Center, J.B. Morin, Rear Admiral, USN

Date: 21 January 1976

Re: UFOs near flight line at Cannon AFB, NM; 25 yards in diameter; gold or silver in color with blue light on top, etc.

AI.9. To: Memorandum for Record

From: National Military Command Center, L.J. LeBlanc, Jr - Deputy Director for Operations

Date: 30 July 1976

Re: Sightings at Fort Ritchie, MD - July 30, 1976

AI.10. To: Multiple Distribution

From: Joint Chiefs of Staff

Date: September 1976

Re: Detailed report of sightings of UFOs in Tehran, Iran - 19 September 1976

AI.11. Article: "Now You See It, Now You Don't"

From: Captain Henry S. Shields, HQ USAF Date: Declassified 4 December 1981

Re: Episode reported by two F-4 Phantom crews of Imperial Iranian Air Force in late 1976.

AI.12. Sighting Report

From: Charles I. Halt, Lt. Col, USAF - Deputy Base Commander

Date: 13 January 1981

Re: Unexplained lights in woods outside RAF Woodbridge, trace landing marks found on ground the next day, numerous witnesses

AI.13. Inspection and Surveillance Record - Incident Report

From: Jack Wright, FAA

Date: November 17, 1986

Re: Report and interview of Captain Terauchi and crew of JAL #1628 on being followed by a UFO during flight approaching Anchorage, AK

AI.14. Personnel Statement - Federal Aviation Administration

From: Carl E. Henley, Air Traffic Control Specialist

Date: January 6, 1987

Re: UFO radar and visual sighting report - Anchorage - JAL #1628

AI.15. Information Alert Report

From: Franklin L. Cunningham

Date: December 31, 1986

Re: Sighting by crew of JAL #1628 for over 350 miles, recorded on onboard color radar USAF Elmendorf AFB showed on ATC radar.

AI.16. To: Multiple distribution

From: Joint Staff, Washington, DC

Date: March 1990

Re: Reports of UFO Sightings in Belgium including summary by Col. DeBrouwer. Phenomenon cannot be explained by Belgian Air Force.

AI.17. Paris Match article - authorized publication of documents from the Belgian Ministry of Defense

Date: March 30 and 31, 1990

Re: Details regarding encounters between UFOs and Belgian Air Force including photos of radar screen sighting of UFO.

AI.18. USA Today newspaper article "Arizonans say the truth about UFO is out there"

Written by: Richard Price

Date: June 18, 1997

AI.19. Boston Globe article on the French COMETA Report entitled: "UFO theorists gain support broad, but repression at home"

Written by: Leslie Kean

Date: May 21, 2000

AI.20. Department of Air Force Document (1954)

From: USAF Chief of Staff, General Nathan F. Twining

Date: 12 August 1954

Re: Full details regarding reporting procedures of UFOs for the Air Force.

AI.21. Department of Air Force Manual 10-206 (Operational Reporting)

From: Secretary of the Air Force

Date: March 7, 2000

Re: Complete details on procedures for CIVUS reporting (Communications Instructions for Reporting Vital Intelligence Sightings). Full copy in PDF format is available on the

AFDPO

web site at: <http://afpubs.hq.af.mil>.

## 10.0 推奨される文献一覧

- Good, Timothy. *Above Top Secret: The Worldwide UFO Cover-Up*. Acacia Press, Inc., 1989.
- Greer, Steven. *Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications*. Crossing Point, Inc. Publications, 1999.
- Haines, Richard, et al. *Close Encounters of the Fifth Kind*. Sourcebooks Trade, 1999.
- Haines, Richard. *Project Delta: A Study of Multiple UFO*. LDA Press, 1990.
- LaViolette, Paul. *Beyond the Big Bang: Ancient Myth and the Science of Continuous Creation*. Inner Traditions International, 1994.
- LaViolette, Paul. *Subquantum Kinetics: The Alchemy of Creation*. Starline Publications, 1994.
- Mallove, Eugene J. *Fire from Ice: Searching for the Truth Behind Cold Fusion Furor*. Infinite Energy Press, 1991.
- Pope, Nick, et al. *Open Skies, Closed Minds: For the First Time, a Government UFO Expert Speaks Out*. Dell Pub. Co., 2000.
- Redfern, Nicolas. *The Incredible Story of the UFOs that fell to Earth*. Simon & Schuster Intl, 2000.
- Sturrock, Peter A., et al. *The UFO Enigma: A New Review of the Physical Evidence*. Aspect, 2000.
- Tutt, Keith. *The Search for Free energy: A Scientific Tale of Jealousy Genius, and Electricity*. Simon and Schuster, 2001.
- Warren, Larry, et al. *Left at East Gate: A First-Hand Account of Bentwaters-Woodbridge UFO Incident, Its Cover-Up and Investigation*. Marlow & Co., 1998.

## 11.0 謝辞

過去 10 年間に、非常に多くの人々がこの仕事に寄与した。その名前の一部を挙げるだけで一冊の本ができるほどである。この仕事を支援し、連絡網を形成し、献身を示してくれた世界中の何千人もの CSETI(地球外知性体研究センター)支持者たちに対して、感謝の意を表したい。彼らの助けがなければ、このプロジェクトは決して生まれることも、その使命を果たすこともなかった。

特に妻のエミリーと私たちの四人の娘には、これまで長年にわたって彼女たちから受けた愛情、献身、および支援に対して感謝を捧げる。エミリーは何年もの間、疲れも忘れて裏方として働いてくれた。それは常に控えめで真心のこもったものだった。この惑星に彼女のような人は二人といない。ありがとう、ありがとう。

私の家族は他の多くの面で犠牲にもなった - 私がこの仕事を続けている間、彼女たちは数百万ドルの収入を失い、多くの面で最も犠牲になった。私がこのプロジェクトを始めたのであって、彼女たちではない。このような活動を忍耐強く支えてくれる医師の妻がどれだけいるだろうか？ しかし、賭けるものが人類だと知ったとき、我々は他のどのような行動をとれたというのか？ 私の家族の無条件の愛情と支援がなければ、この事業は企画されることすらなかっただろう。

以下の一覧表はほんの一部にすぎない。ここには非常に多くの人々の困難な仕事と献身が反映されており、恩義は彼らのすべてにある。すべての軍と政府関係の証人たち、そして私の有能な助手である西海岸のリンダ・ウィリッツと D.C.地区のデビー・フォックに特別の謝意を表す。

ARS NOVA

Shari Adamiak

Major-General Vasily Alexeyev

Eric Anderson

Colin Andrews

Lt. Col. Dwynne Arneson

Maurizio Baiata

Msgr. Corrado Balducci

Stephen Bassett

Dr. Tom Bearden, Lt. Col..

Dr. Fred Bell

Harland Bentley

Cmd. Graham Bethune

Sgt. Robert Blazina

Don Bockelman

Gildas Bourdais

Shell Boyd

Dr. Jan Bravo

Bob and Teri Brown

Lt. Col. Charles Brown



David Browning  
John Callahan  
Sgt. Stoney Campbell  
Franklin Carter  
Astronaut Gordon Cooper  
Col. Philip Corso, Sr.  
Philip Corso, Jr.  
Anthony and Patricia Craddock  
Gordon Creighton  
Prof. Paul Czysz  
Neil Daniels  
Col. Ross Dedrickson  
Glen Dennis  
Janet Donovan  
Gerry Eitner  
Maj. George Filer, III  
Deborah Foch  
Lt. Frederick Marshall Fox  
James Fox  
Stanton Friedman  
Alan Godfry  
Emily Greer  
A.H.  
Dr. Richard Haines  
David Hamilton  
Donna Hare  
Paola Harris  
Lt. Walter Haut  
Michael Hesemann  
Joe Heilig  
Lord Hill-Norton  
Jean Houston  
Joel Howard  
Dorothy and Burl Ives  
Prof. Robert Jacobs  
Don Johnson  
Miles Johnston  
Harry A. Jordan  
Kevin Kachikian  
Miki Kaipaka  
Enrique Kolbeck  
James Kopf

Marian Kramer  
Alice Ladas  
Kelly and Peter Lakin  
Dr. Paul LaViolette  
Prof. Ted Loder  
Attorney Stephen Lovekin  
Ted Mallon  
Dr. Eugene Mallove  
Jaime Maussion  
Rosemary May  
John Maynard  
Mark McCandlish  
Merle Shane McDow  
Denise McKenzie  
Cmd. Will Miller  
Astronaut Edgar Mitchell  
Robert Mitchell  
Sgt. Dan Morris  
Jordan Pease  
Donald Phillips  
Dr. Roberto Pinotti  
Antonio Pinto  
Capt. Massimo Poggi  
Nick Pope  
Sgt. Leonard Pretko  
Rhiannon Pruett  
Dr. H. E. Puthoff  
Nick Redfern  
Capt. Lori Rehfeldt  
Lawrence Rockefeller  
Dr. Carol Rosin  
Ron Russell  
Capt. Robert Salas  
Daniel Sheehan, Esq.  
Gary Shrieves  
Fred Smith  
Michael Smith  
Peter Sorenson  
Sgt. Chuck Sorrells  
Ralph Steiner  
Sgt. Clifford Stone  
Jeff Thill

Fred Threlfall  
Daniel Munoz Tovar  
Capt. Bill Uhouse  
Paul Utz  
Lt. Robert Walker  
Larry Warren  
Dr. Alfred Webre  
Dotha Welbourne  
LC Jonathan Weygandt  
Lt. Col. John Williams  
Dan Willis  
Linda Willitts  
Karl Wolfe  
Lt. Col. Joe Wojtecki  
Dr. Robert Wood  
Sandra Wright

\*\*\*\*\*

# DISCLOSURE PROJECT BRIEFING DOCUMENT

tentative Japanese version

by

Y. Hirose

日本語仮訳： 廣瀬 保雄

この資料は、ディスクロージャー・プロジェクトが頒布する“The Disclosure Project” DVD に収録されている“disclosure2.doc”本文の全訳である。同文書に含まれている政府文書や図、新聞のコピー等は含まれない。なお、文中の注記(\*)は訳者による。

-----  
BriefingDoc\_JPNhiro\_ver.2025.01

2025 年 1 月